

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第220集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第45集

矢田遺跡 VII

古墳時代住居跡編 (4)
奈良時代住居跡編
平安時代住居跡編 (4)

1 9 9 7

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第220集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第45集

矢田遺跡 VII

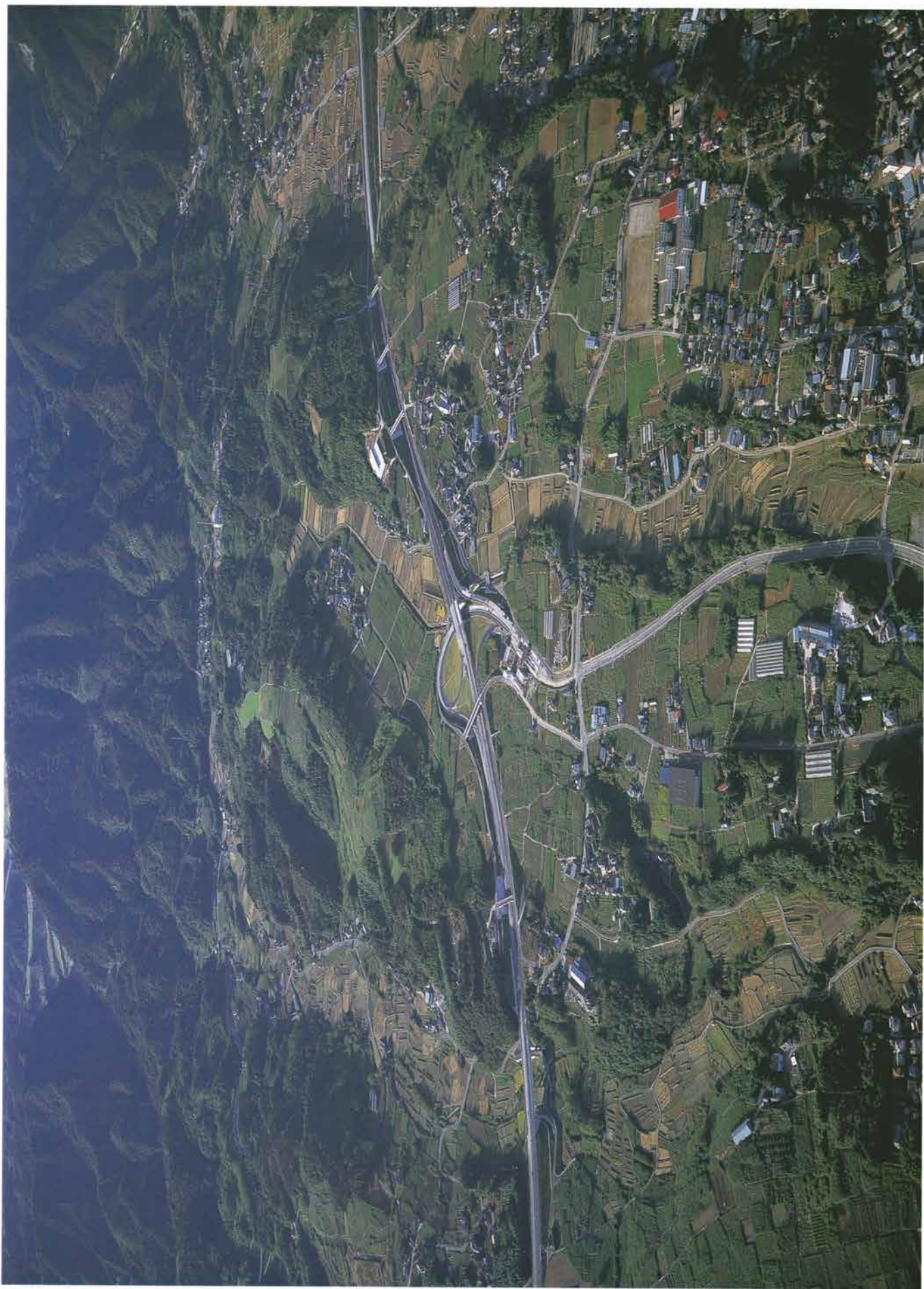
古墳時代住居跡編 (4)

奈良時代住居跡編

平安時代住居跡編 (4)

1 9 9 7

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日 本 道 路 公 団



矢田遺跡（現・吉井インターチェンジ）と周辺の地形（北から）



179号住居跡全景



179号住居跡カマド



本年度報告の紡錘車



矢田遺跡 古代村野外展示（事業団創立10周年記念）

序

鐺川下流域の多野郡吉井町に所在する国指定史跡「多胡碑」の碑文に記された多胡郡は六郷で成り立っていました。その一郷である「八田郷」は、矢田遺跡を中心とする地域に推定されています。本遺跡の発掘調査は、遺跡地に上信越自動車道の吉井インターチェンジが建設されることとなったため、昭和61年から平成3年の6年間にわたって行われました。約9万㎡の広域に及ぶ調査区域から、古墳から奈良・平安時代にわたる750軒余の竪穴住居跡を始めとして、多数の遺構・遺物が発見されました。これらの成果は、平成2年度から進めた整理事業によって発掘調査報告書『矢田遺跡Ⅰ～Ⅵ』として逐次刊行し、古代「多胡郡」の歴史を解明する上で貴重な資料となっています。

本書の『矢田遺跡Ⅶ』は、竪穴住居跡群をまとめた最終の報告書として刊行します。密集する住居跡を始めとする多くの遺構・遺物から古代「八田郷」の繁栄の様子をうかがうことができます。

ここに『矢田遺跡Ⅶ』の発掘調査報告書として刊行するところとなりましたが、発掘調査の開始から刊行に至るまで、日本道路公団東京第二建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、吉井町教育委員会をはじめとする関係諸機関、並びに発掘調査・整理事業にかかわった多くの皆様のご協力とご支援に厚くお礼を申し上げます。そして、本書が古代・多胡郡八田郷を中心とする地域の歴史を解明する上で、多くの方に広く活用されますことを願い序といたします。

平成9年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 **小寺弘之**

例 言

- 1 本書は関越自動車道（上越線）建設工事に伴い事前調査された「矢田遺跡」の発掘調査報告書であり、第7冊目にあたる。本書は住居を対象とした報告書の最終刊行となるもので、奈良時代の住居を主とし、古墳時代、平安時代、時期不明、及び住居状遺構と呼称している遺構を含めて報告している。
- 2 矢田遺跡は群馬県多野郡吉井町大字矢田字天王原606・607番地ほかの周辺に所在し、大字名を遺跡名に採用している。他の大字小字と代表的な番地は以下の通りである。大字矢田字田代293・字稻荷久保1070・字谷頭1089・字杉ノ久保1024・字車地蔵1102・字天久保1120番地及び大字田胡字小蓋林344番地である。
- 3 本発掘調査は日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。
- 4 実際の発掘調査は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団内に上越線地域埋蔵文化財調査を目的に設置された関越道上越線調査事務所（多野郡吉井町南陽台に所在）が担当した。
整理事業は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（勢多郡北橘村大字下箱田に所在）が担当した。
- 5 調査期間及び担当者
 - (1) 発掘調査 調査期間 昭和61年4月1日～平成2年8月27日、平成3年11月5日～11月26日
調査担当者 鬼形芳夫（昭和61年度専門員、現高崎市立高南中学校教頭）
依田治雄（平成3年度専門員、現鬼石町立美原小学校教頭）
中沢 悟（昭和61～平成3年度専門員）
春山秀幸（昭和62・63年度調査研究員、現藤岡市立東中学校教諭）
関口功一（昭和63・平成元年度調査研究員、現群馬県立前橋南高等学校教諭）
内木真琴（昭和61・62年度調査研究員、現群馬県立前橋工業高等学校教諭）
富田一仁（平成元・2年度調査研究員、現群馬県立境高等学校教諭）
関口博幸（平成2年度調査研究員、現安中市立第二中学校教諭）
 - (2) 整理 整理期間 平成7年9月1日～平成9年3月31日
整理担当者 中沢 悟
 - (3) 事務 常務理事 白石保三郎（昭和61～63年度）、邊見長雄（平成元～4年度）、
中村英一（平成5～7年度）、菅野 清
事務局長 井上唯雄（昭和61・62年度）、松本浩一（昭和63～平成3年度）、
近藤 功（平成4～6年度）、原田恒弘
管理部長 大沢秋良（昭和61年度）、田口紀雄（昭和62～平成2年度）、
佐藤 勉（平成3～5年度）、蜂巢 実
調査研究部長 上原啓巳（昭和61～63年度）、神保侑史（平成元～7年度）、赤山容造
総務課長 齋藤俊一（平成4～6年度）、小淵 淳
調査研究第1課長 平野 進
調査研究第2課長 岸田治男（平成6・7年度）
総務課 国定 均、笠原英樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、
高橋定義（平成4～7年度）、宮崎忠司、大澤友治

関越道上越線調査事務所

所長 井上 信 (昭和61～63年度)、高橋一夫 (平成元・2年度)、阿部千明 (平成3
年4月～11月)、松本浩一 (平成3年12月～4年3月)、吉田 肇 (平成4・5年度)
総括次長 片桐光一 (昭和61～平成元年度)、大澤友治 (平成2・3年度)
次長 原田恒弘 (昭和62年度)、徳江 紀 (昭和63～平成2年度)
課長 長谷部達雄 (昭和61年度)、鬼形芳夫 (昭和62年度～平成2年度)、
依田治雄 (平成3～5年度)
庶務課 係長代理 黒澤重樹 (昭和61～63年度)、宮川初太郎 (平成元～2年度)
主任 国定 均 (昭和63～平成元年度)、笠原秀樹 (平成2・3年度)、
吉田有光 (平成4・5年度)

6 報告書作成関係者

編 集 中沢 悟
本文執筆 中沢 悟、小林昌二 (第7章第2部)
遺構写真 鬼形芳夫、依田治雄、中沢 悟、内木真琴、春山秀幸、関口功一、富田一仁、関口博幸
遺物保存処理 関 邦一 (財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団技師)
小材浩一、小沼恵子、萩原妙子 (財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団補助員)
土橋まり子 (財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団非常勤嘱託員)
遺物写真 佐藤元彦 (財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団技師)
機械実測 長沼久美子、伊藤淳子、岩淵節子、光安文子、千代谷和子、萩原光枝、立川千栄子、
南雲富子
遺物観察 中沢 悟
整理補助 皆川正枝、島崎敏子、富沢スミ江、木暮紀子、堀米弘美、伊東博子、木暮美津江、
飯塚京子、岸 弘子、中野和子
委託関係 【航空写真】 (株)青高館 たつみ写真スタジオ
【遺構測量、遺構・遺物トレース】 (株)測設 (株)測研
【石材鑑定】 陣内主一 (前群馬県立自然科学資料館解説員)
飯島静男 (群馬地質研究会)

7 出土遺物・図面は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターの収蔵庫に保管してある。

8 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸機関・諸氏にご教示・ご指導をいただいた。記して謝意を表する次第である。(敬称略、50音順)

吉井町教育委員会、井上 太、小林昌二、小安和順、陣内主一、関 和彦、堤 隆、津野 仁、
永嶋正春、仲山英樹、平川 南、茂木由行、矢野健一、矢島 浩、渡辺 一

9 発掘調査従事者

青木いせ、天田文子、(故)新井克巳、新井幸子、新井すみ子、新井高子、新井まつ子、新井 緑、
新井富貴子、新井真弓、飯塚和良、飯塚初代、飯塚 房、伊倉茂登子、井田松寿、今井 好、
浦野千代子、江原まさ子、遠藤秀子、大木みさ子、大木みつ、落合君子、鬼形田鶴子、加藤節子、
金井すみ江、金井はる、金沢友次、神戸ハツエ、神戸 啓、喜多川源造、木村ハナ子、工藤きみよ、
栗原 清、黒沢敦子、黒沢京子、黒沢 治、小嶋八重子、小林愛子、小林きよ子、小林善三、小林初美、
佐藤八千代、斎藤友枝、斎藤初子、斎藤英子、斎藤政宏、斎藤美知子、志賀シゲ子、志賀 大、
紫藤カヲル、紫藤 孝、篠崎とよ、柴崎太郎、島田八千代、清水桂子、清水千代、白井精一、神保恵子、
神保すみ江、神保 進、杉田きくの、鈴木ふさ子、鈴木幸男、高田 嵩、高田三枝子、高橋千恵子、
高橋ちよ子、高橋春代、滝沢利子、竹内栄子、建部すみ子、田中みき江、田端春治、佃 満、寺尾克代、
中村いち、櫛島静子、(故)櫛島豊統、野口節郎、野口照子、野中正江、長谷川良一、長谷川高子、
林 敏子、原口葉子、平田 昇、藤本ひろ子、本間敏子、松本タツノ、松本良子、三ヶ島富二郎、
三木時一、宮下憲子、村上繁代、望月登代子、百瀬美子、森 利子、森 基司、矢田部喜代美、
山崎孝子、湯浅安代、吉田良子、吉田たづ子、(故)吉田一子、若林さく子、若林てい子、若林トヨ子
上記以外にも、周辺地域の多くの方々のご協力を受けた。(敬称略、50音順)

凡 例

- 1 各遺構実測図の縮尺は次の通りである。



住居跡 1/60、 竈 1/30を原則に、基準としてスケールを配している。

- 2 遺構実測図に記した断面基準線等は、いずれも海拔標高を表す。
- 3 遺構実測図の方位記号は、座標北を示す。(国土座標第IX系)
- 4 遺物実測図の縮尺は、次の通りである。

甕・甔・壺・鉢・砥石 1/4、 高坏・坏・盤・蓋・甕 1/3、 紡錘車・鉄製品 1/2
を基本としており、それ以外はその都度縮尺を示した。

- 5 遺構実測図中のスクリーントーンは下記のことを示す。

(遺構)  焼土  粘土  炭

(遺物)  吸炭による黒色処理  内面漆又は吸炭、外面吸炭

その他の場合はその都度示す。

- 6 出土遺物については、遺物観察表を用いて記した。なお遺物番号は、遺物実測図・遺構実測図内遺物番号・遺物観察表遺物番号・写真図版遺物番号に一致する。
- 7 時期不明や遺物の少ない重複住居は他の時代と同時掲載とする場合もある。
- 8 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修(財)日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」1988年度版を使用している。

目 次

序
例 言
凡 例
目 次
挿図目次
図版目次
抄 録

第1章 発掘調査に至る経緯及び経過	3
第1節 発掘調査に至る経緯	3
第2節 調査の方法と経過	4
1 調査の方法	4
2 調査の経過	5
第2章 地理的環境及び歴史的環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	7
第3節 基本層序	12
第3章 古墳時代の遺構と遺物	15
第4章 奈良時代の遺構と遺物	111
第5章 平安時代の遺構と遺物	370
第6章 その他の遺構と遺物	383
第1節 時期不明の遺構と遺物	383
第2節 住居状遺構と遺物	395
第3節 報告済住居の記載漏れ遺物	405

第7章 調査成果の整理とまとめ	409
第1節 古墳～平安時代の住居について	409
第2節 矢田遺跡における6世紀後半集落の成立	451
第3節 矢田遺跡周辺における古墳時代後期から平安時代後期の土器について	460
第4節 矢田遺跡における紡錘車の所有形態について	487
第5節 群馬県内出土紡錘車の編年	495
第6節 科学分析	499
付表 群馬県内出土の紡錘車一覧表	505
第7節 ま と め	543

発掘報告書抄録

写真図版

付図 矢田遺跡全体図

紡錘車編年図(1)

紡錘車編年図(2)

挿 図 目 次

第 1 図	矢田遺跡調査区及びグリッド配置図	4
第 2 図	矢田遺跡と周辺の遺跡分布図	8
第 3 図	矢田遺跡周辺図	9
第 4 図	基本層序概念図	12
第 5 図	本報告住居及び周辺遺構分布図	13
第 6 図	2号住居跡実測図(1)	15
第 7 図	2号住居跡実測図(2)	16
第 8 図	2号住居跡新東竈実測図	16
第 9 図	2号住居跡旧北竈実測図	17
第 10 図	2号住居跡出土遺物実測図	17
第 11 図	9号住居跡実測図	18
第 12 図	9号住居跡竈実測図	19
第 13 図	9号住居跡出土遺物実測図	19
第 14 図	10号住居跡実測図	20
第 15 図	10号住居跡出土遺物実測図	21
第 16 図	26号住居跡実測図	21
第 17 図	26号住居跡出土遺物実測図	22
第 18 図	28号住居跡実測図(1)	22
第 19 図	28号住居跡実測図(2)	23
第 20 図	28号住居跡出土遺物実測図	23
第 21 図	35号住居跡実測図	24
第 22 図	35号住居跡竈実測図	25
第 23 図	35号住居跡出土遺物実測図(1)	25
第 24 図	35号住居跡出土遺物実測図(2)	26
第 25 図	93号住居跡実測図	28
第 26 図	93号住居跡竈実測図	28
第 27 図	93号住居跡出土遺物実測図(1)	28
第 28 図	93号住居跡出土遺物実測図(2)	29
第 29 図	128号住居跡実測図	30
第 30 図	128号住居跡竈実測図	31
第 31 図	128号住居跡出土遺物実測図	31
第 32 図	161号住居跡実測図	32
第 33 図	161号住居跡床下実測図	33
第 34 図	161号住居跡竈実測図	33
第 35 図	161号住居跡出土遺物実測図	34
第 36 図	166号住居跡実測図(1)	35
第 37 図	166号住居跡実測図(2)	36
第 38 図	166号住居跡床下実測図	36
第 39 図	166号住居跡新東竈・旧北竈実測図	37
第 40 図	166号住居跡出土遺物実測図(1)	37
第 41 図	166号住居跡出土遺物実測図(2)	38
第 42 図	166号住居跡出土遺物実測図(3)	39
第 43 図	178号住居跡実測図	41
第 44 図	178号住居跡出土遺物実測図	42
第 45 図	193号住居跡実測図	43
第 46 図	193号住居跡竈実測図	43
第 47 図	193号住居跡出土遺物実測図	44
第 48 図	286号住居跡実測図	44
第 49 図	286号住居跡出土遺物実測図(1)	45
第 50 図	286号住居跡出土遺物実測図(2)	46
第 51 図	291号住居跡実測図	49
第 52 図	291号住居跡竈実測図	49
第 53 図	291号住居跡出土遺物実測図	49
第 54 図	345号住居跡実測図	50
第 55 図	345号住居跡竈実測図	51
第 56 図	345号住居跡出土遺物実測図	51
第 57 図	360号住居跡実測図	52
第 58 図	360号住居跡竈実測図	52
第 59 図	360号住居跡出土遺物実測図	52
第 60 図	365号住居跡実測図	53
第 61 図	365号住居跡竈実測図	54
第 62 図	365号住居跡出土遺物実測図(1)	54
第 63 図	365号住居跡出土遺物実測図(2)	55
第 64 図	369号住居跡実測図	56
第 65 図	369号住居跡新北竈実測図	57
第 66 図	369号住居跡旧東竈実測図	57
第 67 図	369号住居跡出土遺物実測図	58
第 68 図	375号住居跡実測図	60
第 69 図	375号住居跡出土遺物実測図	61
第 70 図	411号住居跡実測図	62
第 71 図	411号住居跡床下・427号住居跡実測図	62
第 72 図	411号住居跡竈実測図	63
第 73 図	411号住居跡出土遺物実測図	63
第 74 図	412号住居跡実測図	64
第 75 図	412号住居跡竈実測図	65
第 76 図	412号住居跡出土遺物実測図	65
第 77 図	414号住居跡実測図	66
第 78 図	414号住居跡竈実測図	67
第 79 図	414号住居跡出土遺物実測図	67
第 80 図	440号住居跡実測図	69
第 81 図	440号住居跡床下実測図	70
第 82 図	440号住居跡新北竈実測図	70
第 83 図	440号住居跡旧東竈実測図	71
第 84 図	440号住居跡出土遺物実測図	71
第 85 図	452号住居跡実測図	73
第 86 図	452号住居跡竈実測図	74
第 87 図	452号住居跡出土遺物実測図(1)	74
第 88 図	452号住居跡出土遺物実測図(2)	75
第 89 図	463号住居跡実測図	76
第 90 図	463号住居跡竈実測図	76
第 91 図	463号住居跡出土遺物実測図	77
第 92 図	468号住居跡実測図	78
第 93 図	468号住居跡竈実測図	78
第 94 図	468号住居跡周辺遺構重複関係図	79
第 95 図	468号住居跡出土遺物実測図	80
第 96 図	470号住居跡実測図	82
第 97 図	470号住居跡竈・出土遺物実測図	82
第 98 図	472号住居跡実測図	83
第 99 図	472号住居跡実測図	83
第100 図	472号住居跡出土遺物実測図	84
第101 図	474号住居跡・出土遺物実測図	84
第102 図	484号住居跡実測図	85
第103 図	484号住居跡竈実測図	86
第104 図	484号住居跡出土遺物実測図(1)	86
第105 図	484号住居跡出土遺物実測図(2)	87
第106 図	503号住居跡実測図	88
第107 図	503号住居跡床下実測図	89
第108 図	503号住居跡竈実測図	89
第109 図	503号住居跡出土遺物実測図	90
第110 図	537号住居跡・床下実測図	91
第111 図	537号住居跡竈実測図	91
第112 図	537号住居跡出土遺物実測図	92
第113 図	542号住居跡実測図	92
第114 図	542号住居跡竈・出土遺物実測図	93
第115 図	573号住居跡実測図	94
第116 図	573号住居跡床下実測図	95

第117图	573号住居跡寢実測図	95	第179图	110号住居跡実測図	140
第118图	573号住居跡出土遺物実測図	96	第180图	110号住居跡出土遺物実測図	141
第119图	636号住居跡実測図	97	第181图	112号住居跡実測図	142
第120图	636号住居跡床下実測図	98	第182图	112号住居跡床下・寢実測図	142
第121图	636号住居跡寢実測図	98	第183图	112号住居跡出土遺物実測図	143
第122图	636号住居跡出土遺物実測図	99	第184图	116号住居跡実測図	145
第123图	714・715号住居跡実測図	101	第185图	116号住居跡寢実測図	145
第124图	714号住居跡寢実測図	102	第186图	116号住居跡出土遺物実測図	146
第125图	714号住居跡出土遺物実測図	102	第187图	120号住居跡実測図	147
第126图	715号住居跡出土遺物実測図	102	第188图	120号住居跡出土遺物実測図	147
第127图	721・722号住居跡実測図	104	第189图	131号住居跡実測図	149
第128图	721・722号住居跡寢実測図	104	第190图	131号住居跡寢・出土遺物実測図	149
第129图	722号住居跡出土遺物実測図	105	第191图	136号住居跡実測図	150
第130图	724号住居跡実測図	105	第192图	136号住居跡寢実測図	150
第131图	724号住居跡寢実測図	106	第193图	136号住居跡出土遺物実測図	151
第132图	724号住居跡出土遺物実測図	106	第194图	159号住居跡実測図	152
第133图	729号住居跡実測図	106	第195图	159号住居跡寢実測図	152
第134图	729号住居跡寢・出土遺物実測図	107	第196图	159号住居跡出土遺物実測図	152
第135图	734号住居跡・床下実測図	108	第197图	169号住居跡実測図	153
第136图	734号住居跡寢実測図	108	第198图	169号住居跡寢実測図	154
第137图	734号住居跡出土遺物実測図	109	第199图	169号住居跡出土遺物実測図	154
第138图	751号住居跡実測図	110	第200图	170号住居跡実測図	155
第139图	751号住居跡出土遺物実測図	110	第201图	172号住居跡実測図	155
第140图	11号住居跡実測図	111	第202图	172号住居跡寢実測図	156
第141图	11号住居跡寢実測図	112	第203图	172号住居跡寢掘り方実測図	156
第142图	11号住居跡出土遺物実測図(1)	112	第204图	172号住居跡出土遺物実測図	156
第143图	11号住居跡出土遺物実測図(2)	113	第205图	174号住居跡・貯蔵穴実測図	157
第144图	19号住居跡実測図	114	第206图	174号住居跡寢実測図	158
第145图	19号住居跡出土遺物実測図	114	第207图	174号住居跡出土遺物実測図(1)	158
第146图	24・25号住居跡出土遺物実測図	115	第208图	174号住居跡出土遺物実測図(2)	159
第147图	24・25号住居跡実測図(1)	116	第209图	176号住居跡実測図	160
第148图	24・25号住居跡実測図(2)	117	第210图	176号住居跡出土遺物実測図	160
第149图	29号住居跡実測図	117	第211图	179号住居跡実測図	162
第150图	29号住居跡寢実測図	118	第212图	179号住居跡床下・寢実測図	163
第151图	29号住居跡出土遺物実測図	118	第213图	179号住居跡出土遺物実測図(1)	164
第152图	61号住居跡実測図	119	第214图	179号住居跡出土遺物実測図(2)	165
第153图	61号住居跡新東寢実測図	119	第215图	179号住居跡出土遺物実測図(3)	166
第154图	61号住居跡旧北寢実測図	120	第216图	180号住居跡実測図	169
第155图	61号住居跡出土遺物実測図(1)	120	第217图	180号住居跡床下実測図	170
第156图	61号住居跡出土遺物実測図(2)	121	第218图	180号住居跡寢実測図	171
第157图	80号住居跡・寢実測図	124	第219图	180号住居跡出土遺物実測図(1)	171
第158图	80号住居跡出土遺物実測図	125	第220图	180号住居跡出土遺物実測図(2)	172
第159图	81号住居跡実測図	126	第221图	185号住居跡・出土遺物実測図	173
第160图	81号住居跡床下実測図	126	第222图	187号住居跡・床下実測図	174
第161图	81号住居跡新東寢実測図	127	第223图	187号住居跡寢実測図	175
第162图	81号住居跡旧北寢実測図	127	第224图	187号住居跡出土遺物実測図(1)	175
第163图	81号住居跡出土遺物実測図	128	第225图	187号住居跡出土遺物実測図(2)	176
第164图	82号住居跡実測図	129	第226图	222号住居跡実測図	178
第165图	82号住居跡寢実測図	129	第227图	222号住居跡寢実測図	178
第166图	82号住居跡出土遺物実測図	130	第228图	222号住居跡出土遺物実測図	179
第167图	84号住居跡実測図	131	第229图	224号住居跡実測図	179
第168图	84号住居跡寢実測図	131	第230图	224号住居跡寢・出土遺物実測図	180
第169图	84号住居跡出土遺物実測図	132	第231图	241号住居跡実測図	180
第170图	88号住居跡実測図	133	第232图	241号住居跡寢実測図	181
第171图	88号住居跡寢実測図	134	第233图	241号住居跡出土遺物実測図	181
第172图	88号住居跡出土遺物実測図(1)	134	第234图	246号住居跡実測図	182
第173图	88号住居跡出土遺物実測図(2)	135	第235图	246号住居跡貯蔵穴実測図	183
第174图	95号住居跡実測図	136	第236图	246号住居跡寢実測図	183
第175图	95号住居跡寢実測図	137	第237图	246号住居跡出土遺物実測図(1)	184
第176图	95号住居跡出土遺物実測図	137	第238图	246号住居跡出土遺物実測図(2)	185
第177图	96号住居跡・床下実測図	138	第239图	246号住居跡出土遺物実測図(3)	186
第178图	96号住居跡出土遺物実測図	139	第240图	247号住居跡実測図	189

第241图	247号住居跡竈実測図	189	第303图	399号住居跡竈実測図	238
第242图	247号住居跡出土遺物実測図	190	第304图	399号住居跡出土遺物実測図	238
第243图	248号住居跡実測図	192	第305图	409号住居跡実測図	239
第244图	248号住居跡竈実測図	192	第306图	409号住居跡出土遺物実測図	240
第245图	248号住居跡出土遺物実測図(1)	193	第307图	413号住居跡実測図	241
第246图	248号住居跡出土遺物実測図(2)	194	第308图	413号住居跡竈実測図	241
第247图	252号住居跡実測図	195	第309图	413号住居跡出土遺物実測図	242
第248图	252号住居跡竈実測図	196	第310图	429号住居跡・出土遺物実測図	242
第249图	252号住居跡出土遺物実測図	196	第311图	431号住居跡実測図	243
第250图	253号住居跡実測図	197	第312图	431号住居跡竈実測図	244
第251图	253号住居跡竈実測図	197	第313图	431号住居跡出土遺物実測図	244
第252图	253号住居跡出土遺物実測図	198	第314图	436号住居跡実測図	245
第253图	254号住居跡実測図	200	第315图	438号住居跡実測図	246
第254图	254号住居跡竈実測図	200	第316图	438号住居跡竈実測図	246
第255图	254号住居跡出土遺物実測図	201	第317图	438号住居跡出土遺物実測図	247
第256图	273号住居跡・床下実測図	203	第318图	439号住居跡実測図	248
第257图	273号住居跡竈実測図	204	第319图	439号住居跡竈実測図	248
第258图	273号住居跡出土遺物実測図(1)	204	第320图	439号住居跡出土遺物実測図	249
第259图	273号住居跡出土遺物実測図(2)	205	第321图	447号住居跡実測図	250
第260图	299号住居跡実測図	206	第322图	447号住居跡竈実測図	250
第261图	299号住居跡周辺遺構重複関係図	207	第323图	447号住居跡出土遺物実測図	251
第262图	299号住居跡出土遺物実測図	208	第324图	455号住居跡実測図	252
第263图	315号住居跡実測図	209	第325图	455号住居跡竈実測図	252
第264图	315号住居跡床下実測図	210	第326图	455号住居跡出土遺物実測図	252
第265图	315号住居跡竈実測図	210	第327图	458号住居跡実測図	253
第266图	315号住居跡出土遺物実測図(1)	210	第328图	458号住居跡竈実測図	254
第267图	315号住居跡出土遺物実測図(2)	211	第329图	458号住居跡出土遺物実測図(1)	254
第268图	322号住居跡実測図	212	第330图	458号住居跡出土遺物実測図(2)	255
第269图	322号住居跡竈実測図	213	第331图	473号住居跡実測図	257
第270图	322号住居跡出土遺物実測図	213	第332图	473号住居跡床下実測図	257
第271图	323号住居跡実測図	215	第333图	473号住居跡竈実測図	258
第272图	323号住居跡竈実測図	215	第334图	473号住居跡出土遺物実測図	258
第273图	323号住居跡出土遺物実測図	215	第335图	487号住居跡実測図	259
第274图	336号住居跡実測図	216	第336图	487号住居跡竈実測図	260
第275图	336号住居跡土壇・竈実測図	216	第337图	487号住居跡出土遺物実測図	260
第276图	336号住居跡出土遺物実測図	217	第338图	488号住居跡実測図	261
第277图	341号住居跡実測図	218	第339图	488号住居跡竈実測図	261
第278图	341号住居跡出土遺物実測図	219	第340图	488号住居跡出土遺物実測図	262
第279图	349号住居跡実測図	220	第341图	490号住居跡実測図	263
第280图	349号住居跡竈実測図	220	第342图	490号住居跡竈実測図	263
第281图	349号住居跡出土遺物実測図(1)	221	第343图	490号住居跡出土遺物実測図	264
第282图	349号住居跡出土遺物実測図(2)	222	第344图	493・494号住居跡実測図	267
第283图	373号住居跡・出土遺物実測図	223	第345图	493・494号住居跡床下実測図	267
第284图	378号住居跡実測図	224	第346图	493号住居跡竈実測図	268
第285图	378号住居跡竈実測図	225	第347图	494号住居跡竈実測図	268
第286图	378号住居跡出土遺物実測図	225	第348图	493号住居跡出土遺物実測図	268
第287图	380号住居跡実測図	226	第349图	494号住居跡出土遺物実測図	269
第288图	380号住居跡出土遺物実測図	226	第350图	496号住居跡実測図	270
第289图	381号住居跡実測図	227	第351图	496号住居跡竈実測図	270
第290图	381号住居跡竈実測図(1)	228	第352图	496号住居跡出土遺物実測図	271
第291图	381号住居跡竈実測図(2)	229	第353图	507号住居跡実測図	272
第292图	381号住居跡竈想定復元図・出土遺物実測図	230	第354图	507号住居跡竈実測図	272
第293图	390号住居跡実測図	232	第355图	507号住居跡出土遺物実測図	273
第294图	390号住居跡竈実測図	232	第356图	516号住居跡実測図	274
第295图	390号住居跡出土遺物実測図(1)	232	第357图	516号住居跡竈実測図	274
第296图	390号住居跡出土遺物実測図(2)	233	第358图	516号住居跡出土遺物実測図	275
第297图	392号住居跡実測図	234	第359图	522号住居跡実測図	276
第298图	392号住居跡床下実測図	235	第360图	522号住居跡竈実測図	276
第299图	392号住居跡竈実測図	235	第361图	522号住居跡出土遺物実測図	276
第300图	392号住居跡出土遺物実測図	236	第362图	527号住居跡実測図	277
第301图	399号住居跡実測図	237	第363图	527号住居跡竈実測図	278
第302图	399号住居跡床下実測図	238	第364图	527号住居跡出土遺物実測図	278

第365图	543号住居跡実測図	280	第427图	617号住居跡実測図	318
第366图	543号住居跡新東竈・旧東竈実測図	280	第428图	617号住居跡竈実測図	318
第367图	543号住居跡出土遺物実測図	281	第429图	617号住居跡出土遺物実測図	319
第368图	546号住居跡実測図	282	第430图	618号住居跡実測図	320
第369图	546号住居跡竈実測図	283	第431图	618号住居跡出土遺物実測図	321
第370图	546号住居跡出土遺物実測図	283	第432图	627号住居跡実測図	322
第371图	550号住居跡実測図	284	第433图	627号住居跡竈実測図	322
第372图	550号住居跡竈実測図	284	第434图	627号住居跡出土遺物実測図	323
第373图	551号住居跡実測図	285	第435图	628号住居跡実測図	324
第374图	551号住居跡竈実測図	286	第436图	628号住居跡新東竈実測図	325
第375图	551号住居跡出土遺物実測図	286	第437图	628号住居跡旧北竈実測図	325
第376图	552号住居跡実測図	287	第438图	628号住居跡出土遺物実測図(1)	325
第377图	552号住居跡竈実測図	288	第439图	628号住居跡出土遺物実測図(2)	326
第378图	552号住居跡出土遺物実測図	288	第440图	634号住居跡・床下実測図	328
第379图	555・557号住居跡実測図	290	第441图	634号住居跡竈実測図	329
第380图	557号住居跡竈実測図	290	第442图	634号住居跡出土遺物実測図	329
第381图	555号住居跡出土遺物実測図	291	第443图	639号住居跡実測図	330
第382图	557号住居跡出土遺物実測図	291	第444图	639号住居跡竈実測図	330
第383图	559号住居跡実測図	292	第445图	639号住居跡出土遺物実測図	330
第384图	559号住居跡竈実測図	292	第446图	641号住居跡実測図	331
第385图	559号住居跡出土遺物実測図	293	第447图	641号住居跡竈実測図	332
第386图	560号住居跡実測図	294	第448图	641号住居跡出土遺物実測図	332
第387图	560号住居跡床下実測図	295	第449图	645号住居跡実測図	332
第388图	560号住居跡竈実測図	295	第450图	645号住居跡竈実測図	333
第389图	560号住居跡出土遺物実測図	296	第451图	645号住居跡出土遺物実測図	333
第390图	565号住居跡実測図	297	第452图	648号住居跡・出土遺物実測図	334
第391图	565号住居跡竈実測図	297	第453图	649号住居跡実測図	335
第392图	565号住居跡出土遺物実測図	298	第454图	649号住居跡出土遺物実測図	336
第393图	571号住居跡実測図	299	第455图	655号住居跡実測図	337
第394图	571号住居跡竈・出土遺物実測図	299	第456图	655号住居跡床下実測図	338
第395图	572号住居跡実測図	300	第457图	655号住居跡竈実測図	338
第396图	572号住居跡竈実測図	300	第458图	655号住居跡出土遺物実測図	339
第397图	572号住居跡出土遺物実測図	301	第459图	665号住居跡実測図	341
第398图	577号住居跡実測図	301	第460图	665号住居跡出土遺物実測図	341
第399图	577号住居跡竈実測図	302	第461图	671号住居跡実測図	342
第400图	577号住居跡出土遺物実測図	302	第462图	671号住居跡竈実測図	343
第401图	583号住居跡実測図	303	第463图	671号住居跡出土遺物実測図	343
第402图	583号住居跡床下実測図	304	第464图	701号住居跡実測図	344
第403图	583号住居跡竈実測図	304	第465图	701号住居跡竈・出土遺物実測図	344
第404图	583号住居跡出土遺物実測図	304	第466图	710号住居跡実測図	345
第405图	593号住居跡実測図	305	第467图	710号住居跡出土遺物実測図	345
第406图	593号住居跡竈実測図	305	第468图	713号住居跡実測図	346
第407图	593号住居跡出土遺物実測図(1)	306	第469图	713号住居跡床下実測図	347
第408图	593号住居跡出土遺物実測図(2)	307	第470图	713号住居跡竈実測図	347
第409图	594号住居跡実測図	308	第471图	713号住居跡出土遺物実測図	347
第410图	594号住居跡竈実測図	308	第472图	717号住居跡実測図	348
第411图	594号住居跡出土遺物実測図	308	第473图	717号住居跡床下実測図	349
第412图	598号住居跡実測図	309	第474图	717号住居跡新北竈実測図	349
第413图	598号住居跡竈実測図	309	第475图	717号住居跡旧東竈実測図	349
第414图	599号住居跡実測図	310	第476图	717号住居跡出土遺物実測図	350
第415图	599号住居跡竈実測図	310	第477图	727号住居跡実測図	351
第416图	599号住居跡出土遺物実測図	311	第478图	727号住居跡竈実測図	352
第417图	605号住居跡実測図	312	第479图	727号住居跡出土遺物実測図	352
第418图	605号住居跡出土遺物実測図	312	第480图	728号住居跡実測図	353
第419图	611号住居跡実測図	313	第481图	728号住居跡竈実測図	354
第420图	611号住居跡竈実測図	314	第482图	728号住居跡出土遺物実測図(1)	354
第421图	611号住居跡出土遺物実測図	314	第483图	728号住居跡出土遺物実測図(2)	355
第422图	614号住居跡実測図	315	第484图	730号住居跡実測図	356
第423图	614号住居跡出土遺物実測図	315	第485图	730号住居跡床下実測図	357
第424图	616号住居跡実測図	316	第486图	730号住居跡竈実測図	357
第425图	616号住居跡竈実測図	317	第487图	730号住居跡出土遺物実測図(1)	357
第426图	616号住居跡出土遺物実測図	317	第488图	730号住居跡出土遺物実測図(2)	358

第489図	731・736号住居跡実測図	359
第490図	731号住居跡竈実測図	359
第491図	731号住居跡出土遺物実測図	359
第492図	732号住居跡・竈実測図	360
第493図	732号住居跡出土遺物実測図	361
第494図	733号住居跡実測図	361
第495図	733号住居跡竈・出土遺物実測図	362
第496図	737号住居跡・床下実測図	363
第497図	737号住居跡竈実測図	363
第498図	737号住居跡出土遺物実測図	363
第499図	742号住居跡・出土遺物実測図	364
第500図	744号住居跡実測図	364
第501図	744号住居跡竈実測図	365
第502図	744号住居跡出土遺物実測図	365
第503図	745号住居跡実測図	366
第504図	745号住居跡竈実測図	366
第505図	745号住居跡出土遺物実測図	367
第506図	746号住居跡実測図	367
第507図	746号住居跡床下実測図	368
第508図	746号住居跡出土遺物実測図	368
第509図	749号住居跡実測図	369
第510図	20号住居跡実測図	370
第511図	20号住居跡出土遺物実測図	370
第512図	213号住居跡実測図	371
第513図	213号住居跡竈実測図(1)	371
第514図	213号住居跡竈実測図(2)	372
第515図	213号住居跡出土遺物実測図	372
第516図	366号住居跡実測図	373
第517図	366号住居跡床下実測図	374
第518図	366号住居跡竈実測図	374
第519図	366号住居跡出土遺物実測図(1)	374
第520図	366号住居跡出土遺物実測図(2)	375
第521図	405号住居跡実測図	376
第522図	405号住居跡竈実測図	377
第523図	405号住居跡出土遺物実測図	377
第524図	480号住居跡実測図	378
第525図	480号住居跡竈実測図	379
第526図	480号住居跡出土遺物実測図	379
第527図	630号住居跡実測図	380
第528図	630号住居跡竈実測図	380
第529図	630号住居跡出土遺物実測図(1)	380
第530図	630号住居跡出土遺物実測図(2)	381
第531図	688号住居跡実測図	381
第532図	688号住居跡竈実測図	382
第533図	688号住居跡出土遺物実測図	382
第534図	27号住居跡・出土遺物実測図	383
第535図	32号住居跡実測図	384
第536図	103号住居跡実測図	385
第537図	192号住居跡実測図	385
第538図	195号住居跡実測図	386
第539図	204号住居跡実測図	387
第540図	215号住居跡実測図	387
第541図	242号住居跡実測図	388
第542図	243号住居跡実測図	389
第543図	279号住居跡実測図	389
第544図	301号住居跡実測図	390
第545図	422号住居跡実測図	390
第546図	497号住居跡実測図	391
第547図	569号住居跡実測図	391
第548図	597号住居跡実測図	392
第549図	712号住居跡・竈実測図	392
第550図	735号住居跡・竈実測図	393

第551図	740号住居跡・竈実測図	394
第552図	740号住居跡出土遺物実測図	394
第553図	743号住居跡実測図	395
第554図	1・2号住居状遺構実測図	396
第555図	1号住居状遺構出土遺物実測図	396
第556図	4号住居状遺構実測図	397
第557図	6号住居状遺構実測図	397
第558図	6号住居状遺構出土遺物実測図	397
第559図	7号住居状遺構実測図	398
第560図	10号住居状遺構実測図	398
第561図	11号住居状遺構実測図	399
第562図	13号住居状遺構実測図	399
第563図	14号住居状遺構実測図	400
第564図	15号住居状遺構・出土遺物実測図	401
第565図	17号住居状遺構実測図	401
第566図	17号住居状遺構出土遺物実測図	402
第567図	23号住居状遺構実測図	402
第568図	23号住居状遺構出土遺物実測図	402
第569図	24号住居状遺構位置図・遺物出土状況図	403
第570図	24号住居状遺構出土遺物実測図(1)	403
第571図	24号住居状遺構出土遺物実測図(2)	404
第572図	報告済住居の記載漏れ遺物実測図(1)	405
第573図	報告済住居の記載漏れ遺物実測図(2)	406
第574図	報告済住居の記載漏れ遺物実測図(3)	407
第575図	時期別住居軒数	411
第576図	吉井町+高崎市山名(推定古代多胡郡内)時期別・遺跡別住居数	413
第577図	古墳時代住居分布図	415
第578図	奈良時代住居分布図	417
第579図	平安時代住居分布図(1)	419
第580図	平安時代住居分布図(2)	421
第581図	時期別住居規模	424
第582図	時期別住居規模の比率	424
第583図	柱穴を持つ住居	425
第584図	貯蔵穴を持つ住居	427
第585図	時期別にみた竈の作られている壁面	427
第586図	時期別にみた竈の作られている壁面の比率	428
第587図	複数の竈を持つ住居	429
第588図	6世紀代の竪穴住居分布図	455
第589図	竪穴住居の集団関係図	457
第590図	矢田遺跡を中心とした古墳時代土器編年図(1)	462
第591図	矢田遺跡を中心とした古墳時代土器編年図(2)	463
第592図	矢田遺跡を中心とした奈良時代土器編年図(1)	466
第593図	矢田遺跡を中心とした奈良時代土器編年図(2)	467
第594図	矢田遺跡を中心とした平安時代土器編年図(1)	470
第595図	矢田遺跡を中心とした平安時代土器編年図(2)	471
第596図	矢田遺跡を中心とした平安時代土器編年図(3)	474
第597図	矢田遺跡を中心とした平安時代土器編年図(4)	475
第598図	矢田遺跡を中心とした平安時代土器編年図(5)	476
第599図	矢田遺跡を中心とした平安時代土器編年図(6)	477
第600図	土師質土器皿を出土する土坑実測図	478
第601図	時期別に見た紡錘車出土率	489
第602図	矢田遺跡の紡錘車出土分布図(古墳時代)	491
第603図	矢田遺跡の紡錘車出土分布図(奈良時代)	492
第604図	矢田遺跡の紡錘車出土分布図(平安時代・1)	493
第605図	矢田遺跡の紡錘車出土分布図(平安時代・2)	494

図版目次

巻頭図版	矢田遺跡（現 吉井インターチェンジ）と周辺の地形 179号住居跡全景・179号住居跡電 本年度報告の紡錘車 矢田遺跡古代村野外展示（事業団創立10周年記念）	図版 55	507・516・522号住居跡
図版 1	矢田遺跡全景航空写真	図版 56	527・543・546号住居跡
図版 2	矢田遺跡遠景、調査終了段階に近い矢田遺跡	図版 57	546・550・551・552号住居跡
図版 3	第1・3～5次調査区	図版 58	552・555・557号住居跡
図版 4	第1～4次調査区住居群	図版 59	559・560・565号住居跡
図版 5	第1・2次調査区航空写真	図版 60	565・571・572号住居跡
図版 6	第3次調査区航空写真	図版 61	577・583・593・594号住居跡
図版 7	第4・5次調査区航空写真	図版 62	598・599・605・611号住居跡
図版 8	第5～7次調査区航空写真	図版 63	614・616・617号住居跡
図版 9	第7・8次調査区航空写真	図版 64	618・627・628号住居跡
図版 10	第7・8次調査区航空写真	図版 65	628・634号住居跡
図版 11	第8・9次調査区航空写真	図版 66	639・641・645・648・649号住居跡
図版 12	第10・11次調査区航空写真	図版 67	655・665・671・701・710・713号住居跡
図版 13	第12次調査区航空写真	図版 68	713・717・727・728号住居跡
図版 14	2・9・10号住居跡	図版 69	728・730・731・736号住居跡
図版 15	26・28・35・93号住居跡	図版 70	732・733・737・742・744号住居跡
図版 16	93・128・161号住居跡	図版 71	744・745・746・749号居跡
図版 17	161・166・178号住居跡	図版 72	20・213・366号住居跡
図版 18	178・193・286号住居跡	図版 73	405・480・630号住居跡
図版 19	286・291・345・360号住居跡	図版 74	688・27・103・192・195・204・215号住居跡
図版 20	365・369号住居跡	図版 75	242・243・279・301・497・569・597号住居跡
図版 21	369・375・411号住居跡	図版 76	712・735・740・743号住居跡、1・2・4号住居状遺構
図版 22	412・414・440号住居跡	図版 77	6・10・11・13・17・23・24号住居状遺構
図版 23	440・452号住居跡	図版 78	9・35・93・128号住居跡出土土器
図版 24	463・468・470号住居跡	図版 79	128・161・166・178号住居跡出土土器
図版 25	470・472・474・484号住居跡	図版 80	193・286号住居跡出土土器
図版 26	484・494・503・537・542号住居跡	図版 81	286・291・345・365・369・375・411・440号住居跡出土土器
図版 27	542・573・636号住居跡	図版 82	440・452・468・470・472・474・484号住居跡出土土器
図版 28	636・714・715・721・722・724号住居跡	図版 83	484・503・542・573・636号住居跡出土土器
図版 29	724・729・734・751号住居跡	図版 84	636・714・722・724・729・734号住居跡出土土器
図版 30	11・19・24・25号住居跡	図版 85	734・751・11・19・24・29・61号住居跡出土土器
図版 31	29・61・80号住居跡	図版 86	61・80号住居跡出土土器
図版 32	80・81・82号住居跡	図版 87	81・82・84・88号住居跡出土土器
図版 33	82・84・88・95号住居跡	図版 88	88・95・96・110・112号住居跡出土土器
図版 34	95・96・110・112号住居跡	図版 89	112・116・120・136・159・169・172号住居跡出土土器
図版 35	112・116・120・131号住居跡	図版 90	172・174・176・179号住居跡出土土器
図版 36	131・136・159・169号住居跡	図版 91	179号住居跡出土土器
図版 37	169・170・172・174号住居跡	図版 92	179・180号住居跡出土土器
図版 38	174・176・179号住居跡	図版 93	187・222・241号住居跡出土土器
図版 39	179号住居跡	図版 94	241・246号住居跡出土土器
図版 40	180・185・187号住居跡	図版 95	246・247・248・252・253号住居跡出土土器
図版 41	187・222・224・241号住居跡	図版 96	253・254・273号住居跡出土土器
図版 42	246・247号住居跡	図版 97	273・299・315・322・336・341号住居跡出土土器
図版 43	248・252・253号住居跡	図版 98	349・381・390号住居跡出土土器
図版 44	254・273・299号住居跡	図版 99	390・392・399・409・413・429号住居跡出土土器
図版 45	299・315・322号住居跡	図版100	431・438・439・447・455・458・473・488・490号住居跡 出土土器
図版 46	323・336・341・349号住居跡	図版101	490・493・496・507号住居跡出土土器
図版 47	349・373・378・381号住居跡	図版102	507・516・522・527・543号住居跡出土土器
図版 48	381・390・392号住居跡	図版103	546・551・552・557・559・560・565号住居跡出土土器
図版 49	392・399・409・413・429号住居跡	図版104	565・571・572・577・583号住居跡出土土器
図版 50	431・436・438・439号住居跡	図版105	593・599号住居跡出土土器
図版 51	439・447・455・458号住居跡	図版106	599・605・611・616・617・618号住居跡出土土器
図版 52	458・473・487・488号住居跡	図版107	627・628・639・641・645・648・649号住居跡出土土器
図版 53	488・490・493号住居跡	図版108	649・655・665・671・701・710・713・717号住居跡出土土器
図版 54	493・496・507号住居跡	図版109	717・727・728号住居跡出土土器
		図版110	730・731・732・737・744・746号住居跡出土土器
		図版111	213・366・405・688号住居跡出土土器

- 図版112 1・6・24号住居状遺構出土土器
報告済み住居跡記載漏れ出土土器
- 図版113 鉄製品
- 図版114 鉄製品
- 図版115 土玉、白玉、勾玉、紡錘車
- 図版116 紡錘車
- 図版117 紡錘車
- 図版118 紡錘車
- 図版119 紡錘車
- 図版120 紡錘車、飾り石、巡方、分銅、砥石
- 図版121 砥石
- 図版122 炭火米、原石、2・35号住居跡出土こも編み石
- 図版123 35・166・178・286・369号住居跡出土こも編み石
- 図版124 440・452・468・636号住居跡出土こも編み石
- 図版125 29・61・88・95・179号住居跡出土こも編み石
- 図版126 179・180・187・247・248・273・315号住居跡出土
こも編み石
- 図版127 315・322・373・381・409・458号住居跡出土こも編み石
- 図版128 490・493・522・546・559号住居跡出土こも編み石
- 図版129 605・366号住居跡出土こも編み石

抄 録

1 遺跡の概略

本遺跡は群馬県多野郡吉井町大字矢田に位置する。本遺跡の発掘調査は、昭和61年4月1日から開始され、平成3年11月26日を以て終了した。調査報告書の作成は調査と平行しながら平成元年から開始され、これまでに『矢田遺跡』（平安時代住居跡編(1)1990）、『矢田遺跡II』（平安時代住居跡編(2)1991）、『矢田遺跡III』（平安時代住居跡編(3)1992）、『矢田遺跡IV』（旧石器・縄文時代と古墳時代住居跡編(1)1993）、『矢田遺跡V』（古墳時代住居跡編(2)1994）、『矢田遺跡VI』（古墳時代住居跡編(3)1996）が刊行された。本年度で矢田遺跡の整理事業は終了し、本年度刊行される本書『矢田遺跡VII』（古墳時代住居跡編(4)奈良時代住居跡編 平安時代住居跡編(4)1997）と『矢田遺跡VIII』（中近世編・併古代以前非堅穴遺構編1997）をもって報告書は終結する。

本遺跡は旧石器、縄文、古墳、奈良、平安、中世の遺構が検出された複合遺跡である。これまで本遺跡付近は、北方1.5kmにある「多胡碑」や『続日本紀』との関連から、『和名類聚抄』郷名の「上野国多胡郡八（矢）田郷」に比定されてきた。今回の調査は、史料上の問題としての「八（矢）田郷」について、より具体的に考古学的アプローチが行われたという意義がある。調査の成果には、これに対応する集落の存在、「八田郷」「物部郷長」の線刻のある紡錘車をはじめとする各種の文字資料出土などがあり、調査規模の大きさと相俟って、今後分析が進展すれば、当地の古代史研究の発展に寄与するところ大となるであろう。

2 遺構数量

種 別	時 代	数 量	備 考
石器ブロック	旧 石 器	1	黒曜石製・台形様石器他総数12点
礫 群	旧 石 器	1	5点の礫により構成される
	縄 文 中 期	3	加曾利E3、埋甕（屋外）7、土壌が検出されている
	古 墳 前 期	5	遺物は少量である
	古 墳 中 期	9	
	古 墳 後 期	297	
	奈 良	135	
	平 安	267	
	時 期 不 明	21	
住居状遺構		13	
以上の住居の他に古代～中近世・近代に属する多くの遺構が発掘されている それらの遺構は溝、井戸、掘立、小鍛冶、道路、土器集積、館跡、土坑等である			

◎本報告は古墳時代の堅穴住居跡43軒、奈良時代の堅穴住居跡125軒、平安時代の堅穴住居跡7軒、時期不明の堅穴住居跡21軒、住居状遺構13軒を対象としている。

3 ま と め

調査範囲からは、旧石器時代の遺構・遺物を始め、縄文時代中期の集落の存在が判明した。弥生時代の遺構は知られていないが、古墳時代前期には再び集落が形成される。同後期から安定的に集落が営まれ、奈良・平安時代、中近世・近代まで生活や生産活動の場として使用され続け現代に至っている。現在は関越道上信越吉井インターチェンジ及びその周辺の本線部分となっている。

や た い せき
矢 田 遺 跡 VII

第1章 発掘調査に至る経緯及び経過

第1節 発掘調査に至る経緯

上信越自動車道(関越自動車道上越線)は首都圏と上信越地方を結ぶ高速自動車国道で、東京練馬～群馬県藤岡市までは関越自動車道新潟線との併用、藤岡J Cから藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・妙義町・松井田町・下仁田町を経て長野県佐久市に至り、長野県内を通過して新潟県上越市までの約280kmの自動車道である。

藤岡市～長野市間の基本計画が昭和47年に決定してから、整備計画策定のための関連公共事業調査(昭和49年)をはじめとし、文化財に関する調査は昭和55～56年に行われている。昭和49年には基本計画ルートに対する文化財の基本的な考え方、即ち文化財保護法の遵守・指定文化財の扱い・文化財に対しては県教委と協議すること等を示し、昭和55～56年にかけての調査は想定されるルートを中心に埋蔵文化財包蔵地の面積を約100万㎡とした。以後、日本道路公団による計画は進捗し、昭和56～57年にかけて路線の発表があった。昭和59年11月、道路公団より県教委に対し分布調査の依頼があり、それをうけ文化財保護課は調査を実施、同60年3月、発掘想定面積を約100万㎡とする回答を行っている。その後、上越線地域埋蔵文化財調査計画の策定が行われ、調査実施年度は昭和61～66年の6年間(後、修正があり昭和65年度＝平成2年度までの5年間に変更)、藤岡市～富岡市の約76万㎡を群馬県埋蔵文化財調査事業団が担当し、他は市町村で調査会を組織し実施することになった。

昭和61年4月、県埋蔵文化財調査事業団は多野郡吉井町南陽台に、上越線の埋蔵文化財発掘調査を担当する「関越道上越線調査事務所」を開所し調査に入った。

矢田遺跡は、羽田倉遺跡・田篠遺跡・内匠下高瀬遺跡と同じく昭和61年当初から調査を行っている。吉井インターチェンジにあたる当遺跡は、インター中心部・それにつながる東側本線部分と西側本線部分及び料金所方向に向かう北側部分の約90,000㎡にわたる広大な面積を占めるが、地形等からみて一つの遺跡としたものである。調査期間は約5年を見込み、インター中心部から北側方面、そしてインター東側本線部分へと進む大まかな計画を立て、建設工事の進展があればそれぞれに対応することで公団と協議を行った。

調査はS T A No.109～111にかけてのインターにつながる東側部分から開始された。進捗につれ次々と住居跡が出現し、大規模な集落跡が展開することが確実となった。最終的に古墳時代後期から平安時代に至る竪穴住居跡を中心に750軒余を調査した。

矢田遺跡の整理は遺物・遺構ともに膨大な量であることから、のべ9年の期間が必要であるとし、平成元年度より毎年継続して行うこととした。整理の基本方針として、地域を区切ることが困難なため、時代別(地域を加味する)に実施してきた。

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

本調査区は、吉井インターチェンジ予定地域及び、その前後の本線部分よりなる。建設工事に用いた測量杭のS T A No.106～113がほぼ矢田遺跡の調査範囲に該当する。この範囲内を、調査区南西端の国家座標 $X = +26.800$, $Y = -75.400$ を原点として5m四方のグリッドを設定した。グリッドの設定水準点の移動は、(株)測設が実施した。なお発掘調査は、地形及び道路等の条件から、便宜的に第1次調査区～第12次調査区に区分し、ほぼこれに応じて進行した。

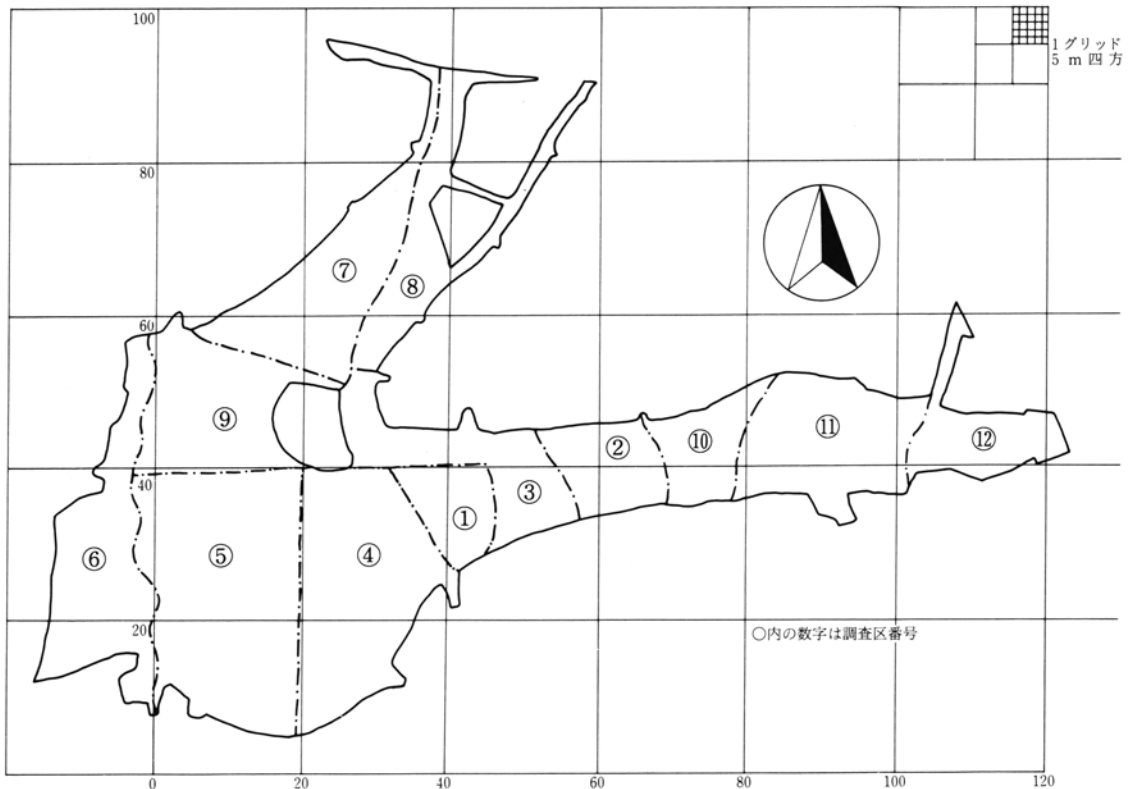
2 調査の経過

発掘調査は1986～91年度の都合六年度に亘って行われたが、未買収地の取得状況との関連や、全体の調査工程との関係で若干の前後関係があり、調査を一時中断し中山（多胡蛇黒）遺跡等の調査を行っていた時期などもある。そのため調査自体に丸六年を費やした訳ではない。調査の経過を記した「調査日誌」はB5ファイル5冊にもなり、経過報告では残念ながらかなりの部分を削除せざるを得なかった。以下、「調査日誌(抄録)」を掲出してみる。

調査日誌(抄)

◎1986年度の調査

- 5月21日 現場作業の開始、第1次調査区の表土掘削開始。
29日 発掘作業員の雇用を始める。
- 6月2日 第1次調査区の調査を開始する。
- 7月1日 第1次調査区と並行して、第2次調査区の調査を開始する。



第1図 矢田遺跡調査区及びグリッド配置図

第2節 調査の方法と経過

- 9月10日 第1・2次調査区の空撮を行う。
22日 第4次調査区の調査を開始する。
- 10月6日 第3次調査区の調査を開始する。
24日 第2次調査区の調査を終了する。
- 12月11日 第3・4次調査区の空撮を行う。
- 1月9日 第4次調査区79号住居跡から「八田郷」と線刻された石製紡錘車が出土する。
- 3月12日 第4次調査区の空撮を行う。
14日 現地見学会（～15日）、2日間で1200名程の見学者が訪れる。
25日 1986年度の調査を終了する。
- ◎1987年度の調査
- 4月15日 1987年度の調査を開始する。
5月8日 第4次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
6月11日 第4次調査区188号住居跡から「八中寸」の文字瓦が出土する。
10月2日 第4次調査区の空撮を行う。
7日 第5次調査区の調査を開始する。
- 11月6日 吉井町郷土資料館特別展開催に伴い、矢田遺跡出土の文字瓦を展示する。
- 1月21日 第4次調査区の調査を終了する。
- 3月8日 第5次調査区の空撮を行う。
12日 現地見学会（～13日）、2日間で655人程が見学を訪れる。
25日 1987年度の調査を終了する。
- ◎1988年度の調査
- 4月15日 1988年度の調査を開始する。
6月7日 第6次調査区の調査を開始する。
7月19日 第7次調査区の調査を開始する。
10月8日 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団創立10周年記念事業の一環として、本遺跡において遺跡見学会を実施する。
総数7685名にのぼる見学者が訪れる。
27日 第5次調査区の空撮を行う。
- 11月7日 第5次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
14日 第6次調査区の旧河川・石組遺構の調査を終了する。
- 12月1日 第5次調査区の調査を進める。
18日 第10次調査区の調査を開始する。
- 2月13日 第8次調査区の表土掘削を開始する。
23日 第7次調査区の空撮を行う。
28日 第9次調査区の表土掘削を開始する。
- 3月24日 1988年度の調査を終了する。
- ◎1989年度の調査
- 4月10日 1989年度の調査を開始する。
7月10日 第7次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
9月26日 第8次調査区（北側部分）の空撮を行う。
12月21日 第8次調査区の空撮を行う。
22日 第9次調査区の679号住居跡から「物ア（部）・一八」と線刻された石製紡錘車が出土する。
- 1月8日 第8次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
2月27日 第11次調査区の表土掘削を開始する。
3月9日 第9次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
23日 1989年度の調査を終了する。
- ◎1990年度の調査
- 4月9日 1990年度の調査を開始する。
5月1日 第11次調査区の728号住居跡から「八田」と線刻された石製紡錘車が検出される。
11日 第8・10次調査区の空撮を行う。
14日 矢田遺跡の調査と並行して中山遺跡の表土掘削を開始する。
16日 第8次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
21日 第10次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
- 6月18日 第11次調査区の空撮を行う。
20日 第11次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
21日 第11次調査区の50-88グリッドA T層下から、矢田遺跡で初めて黒耀石製の台形様石器が1点検出される。
- 7月2日 第11次調査区に330㎡の旧石器本調査区を設定して、本日より6日まで調査を行う。
A T層下からチャート・安山岩製の台形様石器2点を含む総数12点の石器が検出された。
- 8月27日 第12次調査区の空撮を行う。未買収地関連で調査不能の地点を残して調査を中断し、多胡蛇黒（中山）遺跡の調査に入る。
- ◎1991年度の調査
- 11月5日 未買収地関連の調査を開始する。
12日 旧石器試掘調査を開始する。
26日 空撮を行う。矢田遺跡の全調査を終了する。

第2章 地理的環境及び歴史的環境

第1節 地理的環境

群馬県は関東地方北西部の内陸に位置しており、周囲に新潟県・長野県・埼玉県・栃木県・福島県が接している。地形的には、北部及び西部が山地をなしており、中央部から東部にかけてが平野部である。

矢田遺跡は、群馬県南西部の多野郡吉井町大字矢田字天王原他に所在する。本遺跡の北方には簞(かぶら)川が東流する。この簞川は長野県境に源を発し、甘楽郡南牧村、下仁田町、富岡市、甘楽町、多野郡吉井町を経て、藤岡市上落合付近で鮎川を合わせ、高崎市倉賀野町で利根川支流の烏(からす)川に合流する。簞川右岸域においては顕著な河岸段丘が発達しており、大きく分けて上位と下位の段丘面に分けられる。河床面からの比高は、下位段丘面で10~15mを、上位段丘面で50~60mを測る。この段丘面は各時代を通じて様々な土地利用がなされてきたが、現在は下位段丘面が水田として、上位段丘面が主に桑畑として耕地利用されている。

本遺跡は上位段丘面上の多胡(たご)丘陵東部に位置し、西は西谷川、東は土合川に挟まれた南北にのびる台地上に存在し、標高は150~160m前後を測る。この台地も実際には細かい侵食をうけ、南北や東西方向の小支谷が形成され、複雑な地形を呈している。なお調査の結果、西谷川の旧河川流路が確認されている。

第2節 歴史的環境

当遺跡周辺は、上野三碑の一つである「多胡碑」の存在や多くの古墳等が知られ、古くから地域の歴史に深い関心もたれている。最近では開発に伴い多くの遺跡が発掘調査され、調査報告書も多く刊行されている。それらの研究成果から地域史における当遺跡の位置付けがなされる必要がある。ここでは、他の報告書等を参考にしつつ周辺遺跡を簡単にまとめた。

旧石器時代

吉井町周辺においての調査例は少ない。発掘調査された遺跡として当矢田遺跡をはじめ神保富士塚遺跡・多胡蛇黒遺跡・多比良追部野遺跡等がある。始良・丹沢火山灰(AT)を含む時期の粘土層中を中心として多くの石器が出土している。特に甘楽町の天引向原遺跡・白倉下原遺跡で大量の石器の出土が認められた。また、藤岡市内では北山遺跡が良好な内容を示し、緑野遺跡群でAT層に伴う剥片が確認されている。

縄文時代

当遺跡からは中期の住居跡が3軒と埋甕や土壘が検出されており、旧石器とともにすでに「矢田遺跡IV」で報告されている。他に遺構の発掘調査された遺跡として多比良追部野遺跡・入野遺跡・神保植松遺跡・神保富士塚遺跡・長根安坪遺跡等が知られる。しかし吉井町内においては大きな集落遺跡は発掘調査されていない。

弥生時代

当遺跡からこの時代の遺物はわずかに出土しているが、遺構は確認されていない。この地域で多く発掘調査されている遺跡の中で、黒熊遺跡から多くの住居と方形周溝墓が、川内遺跡からは20軒の住居と方形周溝墓、長根安坪遺跡から36軒の住居が、さらに甘楽町天引狐崎遺跡で40軒の住居と4基の方形周溝墓、また天引狐崎遺跡の西に接する白倉下原・天引向原遺跡では57軒の住居と2基の方形周溝墓が検出されている。こ

のように規模の大きな集落が点在する一方、当遺跡や長根羽田倉遺跡では大規模調査にもかかわらず遺構は全く検出されず、また他の多比良追部野遺跡や神保植松遺跡等の遺跡では検出されても極めて少ない。このように、大きな集落遺跡と小規模な遺跡が分布するといった遺跡の様子が想定される。

古墳時代

前期～中期に於ける集落遺跡の規模は甘楽町の白倉下原・天引向原遺跡から31軒の住居と1基の方形周溝墓が調査されているが、他の遺跡での検出例は少ない。近くの遺跡としては神保下條遺跡や神保富士塚遺跡、また長根羽田倉遺跡等で知られるがいずれも2～4軒と少ない。しかし後期になると集落遺跡の数と住居数は爆発的に拡大してくるようである。当遺跡ではこの時期よりおおくの住居が造られるようになり、隣の高胡蛇黒遺跡や多比良追部野遺跡等でもこの時期をもって一気に集落が大規模に形成されて行く。また入野遺跡や黒熊遺跡群においてもこの時期に多くの集落が営まれている。墳墓としての古墳も群集墳として多胡古墳群・塩Ⅰ・Ⅱ古墳群・山の神古墳群をはじめとして多く認められるようになる。なおこの地域の古墳に関しては右島和夫「遺跡の立地と環境」『神保下條遺跡』1992に詳しい。

また、当遺跡でも出土の認められる石製模造品を出土する遺跡が、この時期から多く認められるようになる。特に甘楽の谷では、原石の滑石や蛇紋岩が鍋川の上流の雄川や大沢川から採集されるため石製模造品を製作する遺跡も多く確認されている。報告書の刊行されている石製模造品を製作した主な遺跡として、甘楽町教育委員会『甘楽条里遺跡』1989、梅沢重昭「笹遺跡―鍋川流域の滑石製品出土遺跡の研究」『群馬県立博物館研究報告』第一集・第三集 1963・1966、藤岡市教育委員会『F-1竹沼遺跡』1978等があげられる。

奈良時代・平安時代

古墳時代後期の大きな集落遺跡は、多比良追部野遺跡のように奈良時代・平安時代になると住居数が減少する遺跡も認められるが、当遺跡や隣の高胡蛇黒遺跡のように多くの遺跡では住居数が大きく増減することなく、継続的につくられ続けているようである。住居以外の遺構として黒熊中西遺跡において平安時代の寺院跡が検出されている。礎石建物が6～7棟、テラス遺構9面からなり、礎石建物は寺院の主体となる堂宇、テラス遺構は付属的な施設や工房あるいは空間面等と考えられている。また黒熊八幡遺跡・多比良追部野遺跡・長根羽田倉遺跡では、天仁元年(1108)に降下した浅間噴出のB軽石下の水田遺構が調査されている。「多胡碑」は当遺跡北方約2.5kmに位置する。この碑は多胡郡設置に関する記念碑とされ多くの研究がなされている。古代律令制下における動きの一つとして上野国分寺に供給した瓦生産に見られるような古代窯業生産もこの地域で開始される。県内の須恵器生産窯はそれ以前の限定された地域での生産と異なり、8世紀前後をもって各地で窯が築かれて多くの製品が生産されるようになってゆく。この地域では吉井町多比良から藤岡市下日野・藤岡市金井の一带にかけての山林部分を中心として多くの窯が築かれるようになる。この地域では8世紀前後から10世紀にかけて11箇所27基前後の窯が確認または想定されている。その中の21基が発掘調査されており、この地区には更に多くの窯の存在が想定される。これらの窯は須恵器と瓦を生産し、金山瓦窯跡で焼成された瓦は上野国分寺創建時に築かれ、また滝の前窯跡においては国分寺補修段階において多く瓦が生産された事が指摘されている。

第2章 地理的環境及び歴史的環境



(国土地理院 1 : 25,000 「富岡」「上野吉井」「高崎」「藤岡」を縮小して使用)

- 1 川福遺跡 2 多胡碑 3 塚原古墳群 4 富岡遺跡 5 東吹上遺跡 6 本郷古墳群 7 道六神遺跡 8 片山古墳群
- 9 白石古墳群 10 竹沼遺跡 11 黒熊栗崎遺跡 12 黒熊八幡遺跡 13 黒熊中西遺跡 14 黒熊遺跡群 15 祝神古墳群
- 16 入野遺跡 17 東沢遺跡 18 中ノ原古墳群 19 多比良追部野遺跡 20 椿谷戸遺跡 21 矢田遺跡 22 柳田遺跡
- 23 山の神古墳群 24 川内遺跡 25 多胡古墳群 26 多胡蛇黒遺跡 27 神保下篠遺跡 28 塩I古墳群 29 塩II古墳群
- 30 神保古墳群 31 神保植松遺跡 32 神保富士塚遺跡 33 長根羽田倉遺跡 34 長根安坪遺跡 35 長根宿遺跡 36 西場脇遺跡
- 37 安坪古墳群 38 下五反田窯跡 39 滝の前窯跡 40 末沢I窯跡 41 末沢II窯跡 42 下日野・金井窯跡群 43 金山瓦窯跡
- 44 彦田谷窯址 45 スカリ沢A窯址

第2図 矢田遺跡と周辺の遺跡分布図



第3図 矢田遺跡周辺図

第2章 地理的環境及び歴史的環境

周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名 (所在地)	遺跡の概要	文献その他
1	川福遺跡 (吉井町馬庭)	奈良・平安時代の住居跡5軒、溝2条等、土器集中地点あり。8世紀前後の須恵器蓋を多く出土。	吉井町教育委員会1986『川福遺跡調査報告書』
2	多胡碑 (吉井町池)	吉井町大字池字御門に所在。日本三碑の一つに数えられる。和銅4年(711)多胡郡設置に関する記念碑とされる。	『吉井町誌』1974『群馬県史・資料編4』1985ほか
3	塚原古墳群 (吉井町池)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では44基をあげている。	平成元年、蛇塚を調査。
4	富岡遺跡 (吉井町岩崎)	縄文時代中期の遺物包含層。平安時代住居跡4軒、浅間B軽石の純層堆積。	吉井町教育委員会1989『富岡遺跡』
5	東吹上遺跡 (吉井町岩崎)	縄文時代前期、中期、弥生中期、後期包含層。古墳時代後期住居跡1軒、平安時代1軒。	群馬県立博物館研究報告第8集1973『東吹上遺跡』
6	本郷古墳群 (吉井町本郷)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では21基をあげている。	
7	道六神遺跡 (吉井町本郷)	平安時代住居跡1軒、溝6条等。	吉井町教育委員会1986『道六神遺跡』
8	片山古墳群 (吉井町片山)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では7基をあげている。	
9	白石古墳群 (藤岡市白石)	古墳時代中期から後期にかけての大型前方後円墳と後期の大群集墳からなり、終末古墳も含む。	
10	竹沼遺跡(藤岡市西平井・緑埜)	旧石器時代の石器、縄文時代中期住居跡3軒、弥生時代後期から古墳時代前期4軒、古墳時代後期17軒、滑石工房址9軒ほか。	藤岡市教育委員会1978『F1群馬県藤岡市竹沼遺跡』
11	黒熊栗崎遺跡 (吉井町黒熊)	古墳時代と平安時代の住居跡と小鍛冶、掘立柱建物跡、平地神社跡等。	群馬県埋蔵文化財調査事業団1995『黒熊栗崎遺跡』
12	黒熊八幡遺跡 (吉井町黒熊)	旧石器時代の石器、縄文時代埋設土器、奈良・平安時代の住居跡130軒以上、礎石建物、掘立柱建物跡等検出。	群馬県埋蔵文化財調査事業団1991『年報10』
13	黒熊中西遺跡 (吉井町黒熊)	古墳～奈良・平安時代住居跡78軒、平安時代の礎石建物跡6棟、平安時代の道路遺構7条、井戸、土坑、鬼瓦、経軸端等出土。寺院跡を特色とする遺跡。	群馬県埋蔵文化財調査事業団1992・94『黒熊中西遺跡(1)・(2)』
14	黒熊遺跡群 (吉井町黒熊)	縄文・古墳・奈良・平安時代の大集落。	吉井町教育委員会1981～85『黒熊遺跡群調査報告書』(3)(4)等
15	祝神古墳群 (吉井町多比良)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では11基をあげている。	
16	入野遺跡 (吉井町石神)	縄文時代前期、古墳時代前期・後期の住居跡、中世の墓壇。	尾崎喜佐雄1962『入野遺跡』他吉井町教育委員会1985・1986
17	東沢遺跡 (吉井町多比良)	古墳時代後期、奈良・平安時代の住居跡。	吉井町教育委員会1987『東沢遺跡・折茂東遺跡』
18	中ノ原古墳群 (吉井町多比良)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では10基をあげている。	
19	多比良追部野遺跡 (吉井町多比良)	旧石器時代の石器類430点出土。縄文・古墳・平安時代の住居跡、平安時代の水田、江戸時代の溜池等。	群馬県埋蔵文化財調査事業団1991『年報10』
20	椿谷戸遺跡 (吉井町矢田)	縄文時代中期、古墳前後期、奈良・平安時代の住居、中世土坑等。	吉井町教育委員会1989『椿谷戸遺跡発掘調査報告書』
21	矢田遺跡 (吉井町矢田)	本報告。	群馬県埋蔵文化財調査事業団1990～96『矢田遺跡I～VI』
22	柳田遺跡 (吉井町矢田)	古墳～平安時代の住居跡。	吉井町教育委員会1989『柳田遺跡』
23	山の神古墳群 (吉井町多比良)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では7基をあげている。	
24	川内遺跡 (吉井町吉井)	縄文時代中期の土壇、弥生～平安時代の住居跡、弥生時代の方形周溝墓。中世の井戸。	吉井町教育委員会1982『川内遺跡一図版編一』
25	多胡古墳群 (吉井町多胡)	古墳時代後期を中心とした群集墳。上毛古墳総覧では91基をあげている。下條1～3号墳を含む。	

第2節 歴史的環境

番号	遺跡名 (所在地)	遺跡の概要	文献その他
26	多胡蛇黒遺跡 (吉井町多胡)	旧石器時代の石器・礫、古墳時代後期～平安時代の住居跡174軒、掘立柱建物跡、溝など。	①群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993『多胡蛇黒遺跡』
27	神保下條遺跡 (吉井町神保)	5基の古墳、古墳時代前期3軒・奈良3軒の住居跡。中世の館跡・溝等。大量の埴輪・古墳時代前期の住居跡より鏡・鉄斧・鎌・管玉・ガラス玉等出土。	①群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992『神保下條遺跡』
28	塩Ⅰ古墳群 (吉井町塩)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では10基をあげている。	
29	塩Ⅱ古墳群 (吉井町塩)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では12基をあげている。	
30	神保古墳群 (吉井町神保)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では63基をあげている。	
31	神保植松遺跡 (吉井町神保)	縄文～平安時代の住居、中世を主とした掘立柱建物跡・土壇・井戸・城の堀、古墳時代の方形周溝墓等。遺物として板碑・石臼・五輪塔・陶磁器等出土。	①群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990『年報8』
32	神保富士塚遺跡 (吉井町神保)	縄文・古墳・奈良・平安時代の住居跡。掘立柱建物跡・溝・土坑・土器集積祭祀跡等。出土遺物として石器・紡錘車・勾玉等。	①群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993『神保富士塚遺跡』
33	長根羽田倉遺跡 (吉井町長根)	古墳～平安時代の住居跡133軒、掘立柱建物跡11棟、井戸11基、土坑93基、溝18条、祭祀遺構2基等。出土遺物として滑石製模造品・紡錘車等の滑石製品。	①群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990『長根羽田倉遺跡』
34	長根安坪遺跡 (吉井町長根)	縄文～平安時代の住居跡、古墳時代の方形周溝墓、古墳、土坑、配石遺構等。出土遺物として勾玉・紡錘車・鉄鎌・ガラス小玉・金環等。	①群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990『年報8』
35	長根宿遺跡 (吉井町長根)	中世の溝2条検出。	吉井町教育委員会1987『西場脇・長根宿遺跡』
36	西場脇遺跡 (吉井町長根)	古墳・平安時代の住居跡、奈良時代の遺物集中地点等。	吉井町教育委員会1987『西場脇・長根宿遺跡』
37	安坪古墳群 (吉井町長根)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では44基をあげている。古墳群南側の一部を、長根安坪遺跡で平成元年に発掘調査。	
38	下五反田窯跡 (吉井町多比良)	3基あったと思われる、2基発掘。1号窯は全長7mの地下式無段無階登窯、2号窯は、全長5.5mの地下式無段登窯。坏・甕・瓦・風字硯・羽釜等出土。9～10世紀。	国土館大学文学部考古学研究室 1984『考古学研究室発掘調査報告書』
39	滝の前窯跡 (吉井町多比良)	窯跡あるいは灰原の一部と思われる部分が露出。坏・甕・文字瓦出土。9世紀末～10世紀前半、瓦は上野国分寺に供給されており、国分寺補修期の瓦生産窯。	須田茂1989「吉井町・滝の前窯跡の採集遺物とその性格」[群馬文化]
40	末沢Ⅰ窯跡 (吉井町多比良)	2～3基あったと思われる。林道設置で一部切断されている。1基を発掘調査。窯体の北約1/2は無い。地下式無段無階登窯と思われる。蓋・坏・盤・甕・瓦・土鈴等。8世紀前半代を中心としている。	国土館大学文学部考古学研究室 1984『考古学研究室発掘調査報告書』
41	末沢Ⅱ窯跡 (吉井町多比良)	Ⅰと同様に、道路拡張により窯体の一部が2基、灰原と思われる一個所が確認されている。	
42	下日野・ 金井窯跡群 (藤岡市下日野・ 金井)	藤岡市教育委員会により、ゴルフ場建設に先だって分布調査が行われ、地点ごとにa2・a4・c・d・f・gと表記され、発掘調査が行われた。a2地点で3基、a4地点で1基、c地点で4基、他に2～3基の窯体が存在していると思われる。d地点で1基、他に製鉄遺構3基調査、g地点で5基の計16基の窯跡が調査された。8～10世紀。	近日中に報告書が刊行される予定である。発掘担当者、古郡正志氏の御指示による。
43	金山瓦窯跡 (藤岡市金井)	3基の窯体が存在し、2基が発掘調査されている。1・2号窯ともトンネル式無段登窯で、全長4.4～4.5m。鏡・宇・男・女・文字瓦のほか、須恵器甕等出土。上野国分寺の建造に伴って開窯されたものと考えられている。	坂詰秀一1966『上野・金山瓦窯跡』
44	ひこだつ 彦田谷窯址 (吉井町馬庭)	彦田谷窯址は、昭和53年南陽台住宅団地の造成工事中に見えられた。同年8月吉井町郷土資料館で発掘調査され2基の窯址が検出された。出土遺物は須恵器で瓦は出土していない。器種は坏・盤・埴・壺・蓋・鉢・甕等である。	吉井町教育委員会1995 『ヌカリ沢A窯址発掘調査報告書』
45	ヌカリ沢A窯址 (吉井町馬庭)	ヌカリ沢A窯址はゴルフ場建設に伴い平成5年12月から平成6年2月にかけて調査が行われた。調査の結果1基の窯址が発掘され須恵器の坏・埴・皿・高坏・壺・鉢・甕・瓶等が出土した。須恵器の坏の底部は回転糸切りが主流である。また高坏がこの段階まで生産されていることが特徴である。	吉井町教育委員会1995 『ヌカリ沢A窯址発掘調査報告書』

第3節 基本層序

矢田遺跡は、前章で述べたように鑄川右岸の上位段丘上に位置している。南から北へ向かって緩やかな傾斜で下る段丘面では、表土の耕作土の堆積が薄く、これを除去すると直ちにいわゆる関東ローム層が現れる。これは段丘を浸食・分断する谷部への土砂の流出に加えて、広い段丘上は通年日照度が高く、冬季は西方から甘藷の谷を吹き抜ける「浅間おろし」の影響による、風化・浸食作用が大きいことに起因している。

本遺跡の基本土層は以下に示すとおりである。

第I層 いわゆる表土。黒褐色を呈する耕作土であり、多量の浅間A軽石 (Ap-Ap) を含有する。層厚は地点により大きく異なり、尾根上では50cm以上を測るが、傾斜部では10cm以下である。

第II層～第VII層は、いわゆる関東ローム層である。

第II層 明黄褐色ローム層。層厚は平均20cmほどである。浅間板鼻黄色軽石 (As-Yp) を含み、特に下部では密度が高く一部ブロック状を成す。全体に粒子は粗く、粘性は弱い。

第III層 暗黄褐色ローム層。層厚は平均40cmである。白色細粒子(径2～3mm)を若干含む。第II層に比して粒子は細かく粘性をもつ。

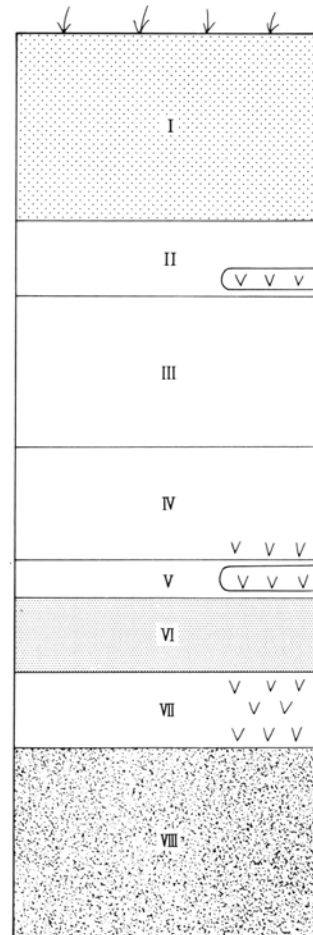
第IV層 暗黄褐色ローム層。層厚は平均30cmを測る。第III層に比較して粒子が粗く、下部には浅間板鼻褐色軽石 (As-Bp) を含む。

第V層 明黄褐色ローム層。浅間板鼻褐色軽石がブロック状に多量含まれ、非常に堅緻である。層厚は平均10cmである。

第VI層 暗褐色ローム層。層厚は平均20cmを測る。少量の浅間室田軽石 (As-Mp) を含みや粘性をもつ。いわゆる暗色帯に類する状況を示すが赤城山麓の暗色帯とは対応しない。

第VII層 浅間室田軽石を主とする層である。上半部は橙褐色、下半部は乳白色を呈する。通水層であり、非常に多量の水分を含む。層厚は30cmほどである。

第VIII層 灰白色粘土層。本層は、非常に厚く堆積しており、下部は基盤層になる。本層上部に始良丹沢パミスとみられるガラス質の火山灰が認められる。



第4図 基本層序概念図



第5図 本報告住居及び周辺遺構分布図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

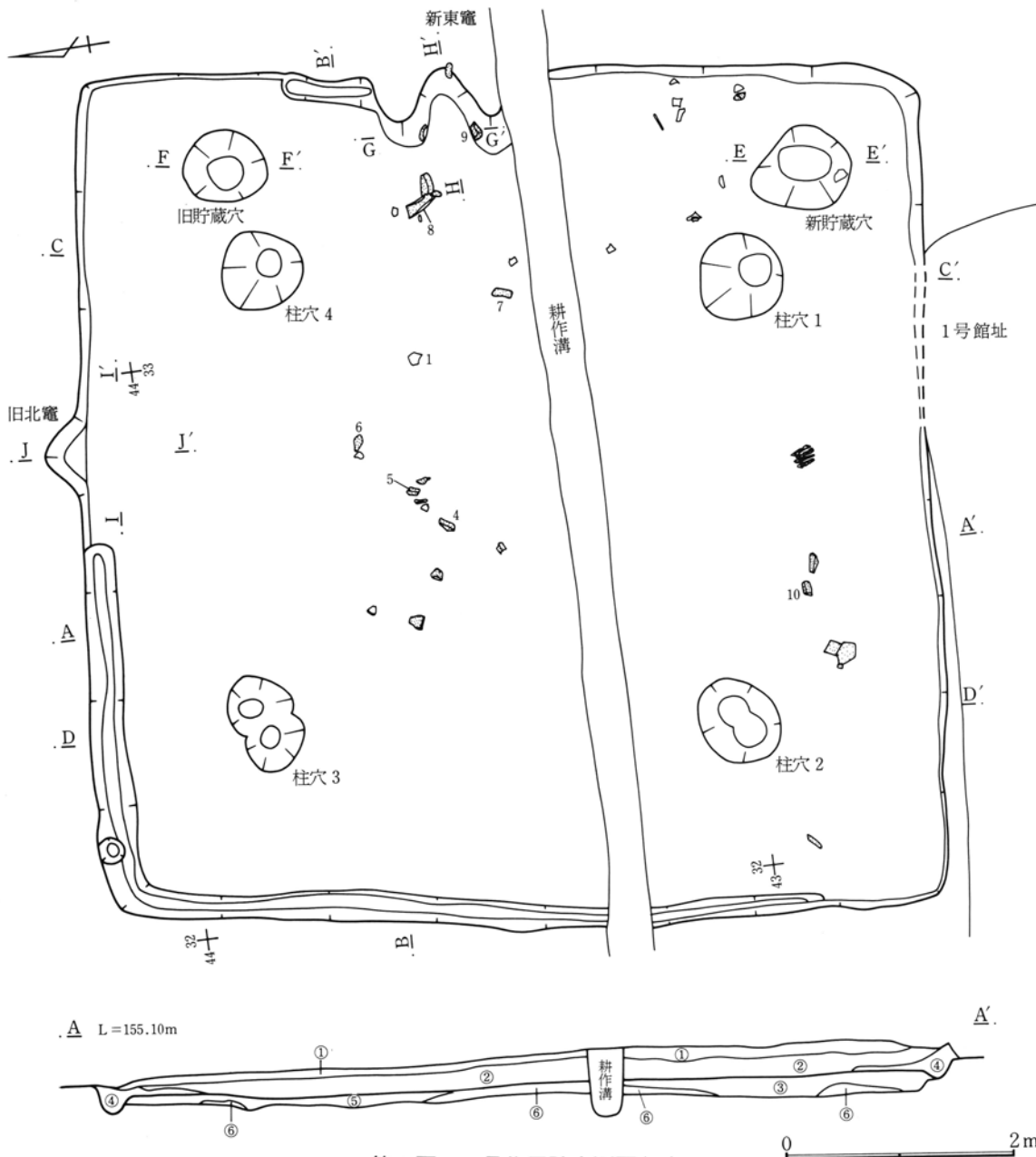
2号住居跡 (第6~10図、図版14・122)

位置 本住居跡は第3次調査区にあり、44-33・34グリッドに位置する。

概要 残りが悪く確認面から床面までが浅い。中央部分を耕作溝により床下まで深く掘り込まれている。

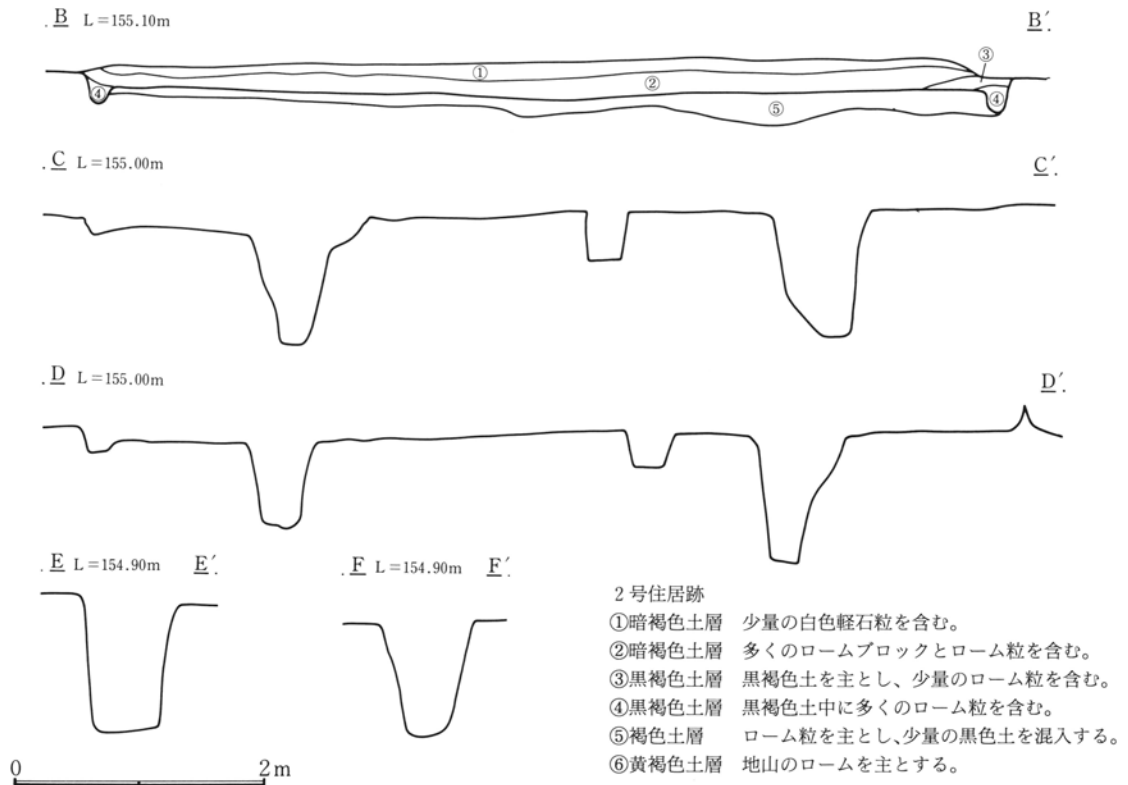
また南側の壁面の一部を1号館址の南側の堀により削られている。竈は北壁面と東壁面に造られている。東壁面に造られている竈は袖部分が残っており新東竈である。

構造 床面はローム粒を主とし、少量の黒色土が混入した土で造られている。柱穴が4本掘られており、新旧の竈に伴い2個の貯蔵穴が掘られている。



第6図 2号住居跡実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第7図 2号住居跡実測図(2)

規模 東西7.39m、南北7.49mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で42cmである。柱穴1は径71cm深さ92cm、柱穴2は径64cm深さ101cm、柱穴3は径51cm深さ74cm、柱穴4は径68cm深さ102cmである。

新貯蔵穴は径71cm深さ108cm、旧貯蔵穴は径67cm深さ102cmである。

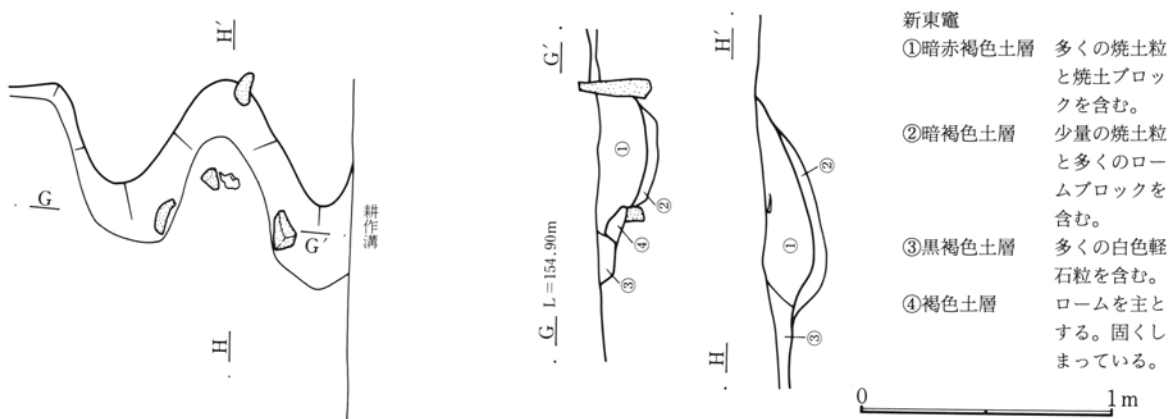
遺物 甕の胴部片が多く出土しているが、図示できたのは3点である。

(新東竈)

位置 住居東壁に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 左右の袖石がほぼ使用時の状態で埋められていたが、袖部分の残りは良好でない。煙道部に小さな石が出土し、燃焼部からは多くの焼土粒が出土している。

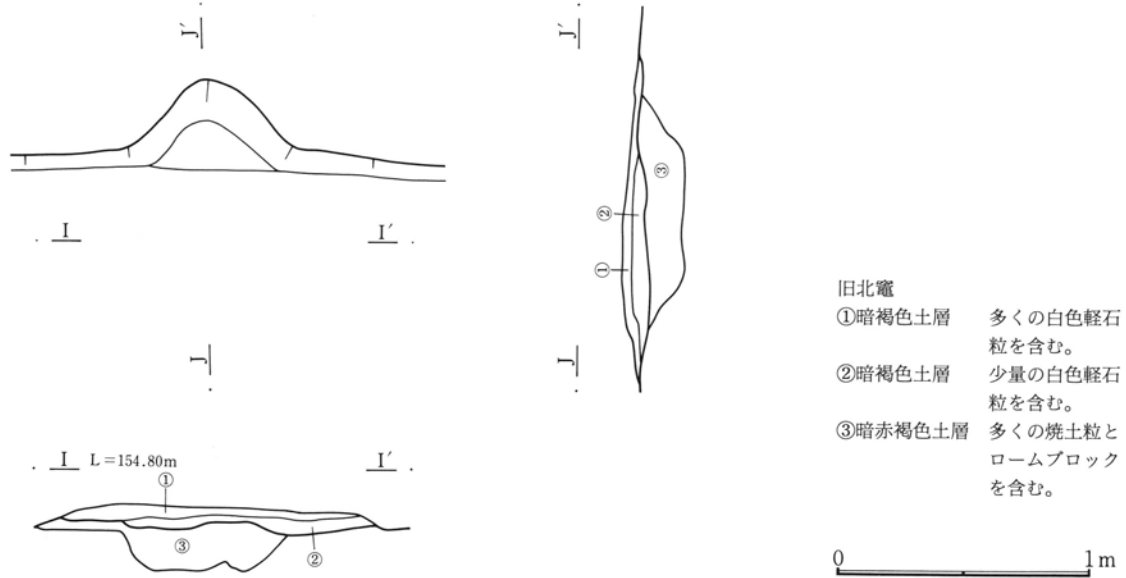
規模 煙道方向82cm、燃焼部幅43cmである。



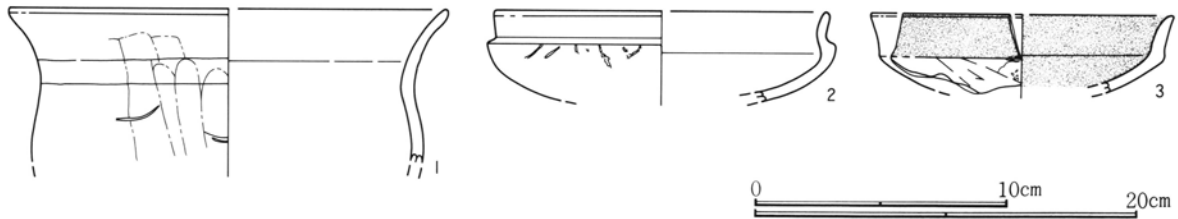
第8図 2号住居跡新東竈実測図

(旧北竈)

概要 住居北壁に造られている。壁面を掘り込んで煙道部が造られているが、床面上に位置する袖部や燃焼部は残っていない。燃焼部下部が床面下に残っており多くの焼土粒と焼土ブロックが出土している。



第9図 2号住居跡旧北竈実測図



第10図 2号住居跡出土遺物実測図

2号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考		
10-1	土師器 甕	床面直上 口縁小片	口(23.3) 高— 底—	①粗、2~4mmの片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	胴部外面縦方向ナデ。内面横方向ナデ。 全体に器表面密。		
10-2	土師器 坏	覆土 1/2残存	口(13.0) 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③断面橙色、内面黒色	口縁部外面~内側内面黒漆。 底部外面吸炭による黒褐色。		
10-3	土師器 坏	覆土 口縁小片	口(11.8) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③断面橙色、外面黒褐色	底部ヘラ削り、砂粒の移動は少ない。 口縁部外面~内面底部に黒漆。		
遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)				石材・備考
4	122	こも編み石	長 15.0	幅 5.4	厚 3.1	重 390	緑簾緑泥片岩
5	122	こも編み石	長 14.5	幅 5.2	厚 4.1	重 415	絹雲母石墨片岩
6	122	こも編み石	長 13.7	幅 7.4	厚 3.3	重 495	安山岩
7	122	こも編み石	長 15.8	幅 5.9	厚 4.4	重 505	安山岩
8	122	こも編み石	長 14.3	幅 4.9	厚 3.2	重 340	絹雲母石墨片岩
9	122	こも編み石	長 12.2	幅 6.2	厚 4.8	重 445	砂岩
10	122	こも編み石	長 13.6	幅 6.6	厚 4.3	重 540	絹雲母石墨片岩
11	122	こも編み石	長 12.6	幅 7.3	厚 3.4	重 510	絹雲母石墨片岩

9号住居跡 (第11~13図、図版14・78・120)

位置 本住居跡は第2次調査区にあり、39-59グリッドに位置する。

概要 西側の低くなる傾斜面に位置し、西側の壁面と床面は削られて残っていない。柱穴が掘られているため、住居範囲は点線で表現した。竈の造られている東壁面の残りも良好ではないが、貯蔵穴周辺には多くの土器が残されている。

構造 床面はローム粒を主とし少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴が4本掘られており、竈右側に貯蔵穴が掘られている。

規模 東西推定4.50m、南北5.32mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で22cmである。柱穴1は径42cm深さ47cm、柱穴2は径38cm深さ56cm、柱穴3は径53cm深さ58cm、柱穴4は径48cm深さ46cmである。貯蔵穴は径66cm深さ53cmである。

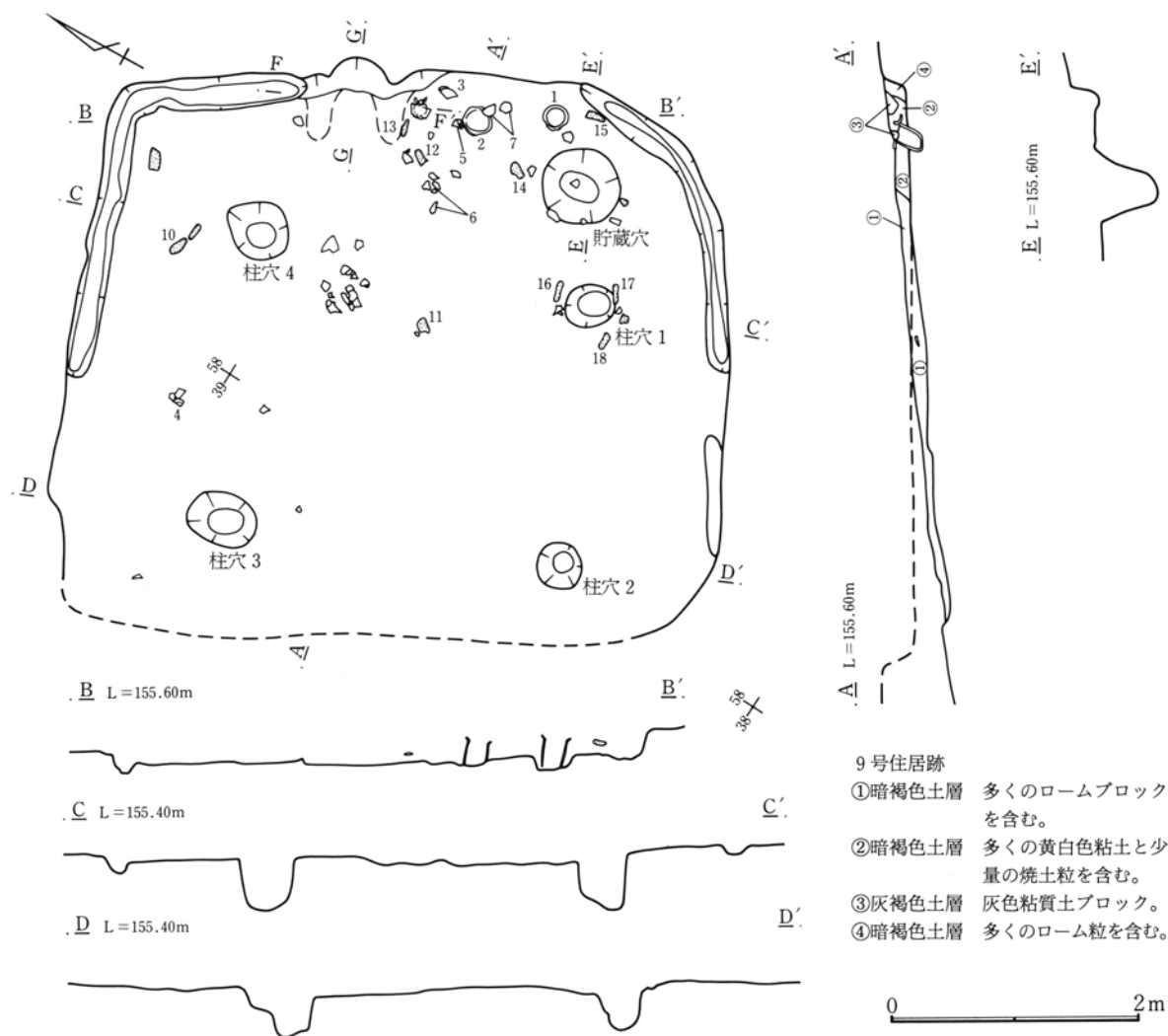
遺物 竈の右側より甕や坏が出土している。

(竈)

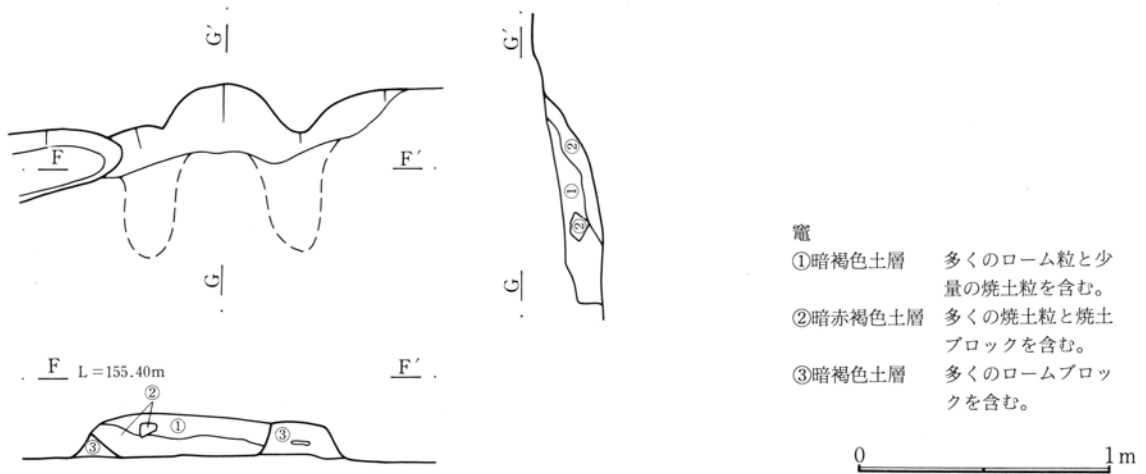
位置 住居東壁に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 残りが悪く袖の大部分は残っていない。燃烧部付近の覆土中から多くの焼土粒が出土している。

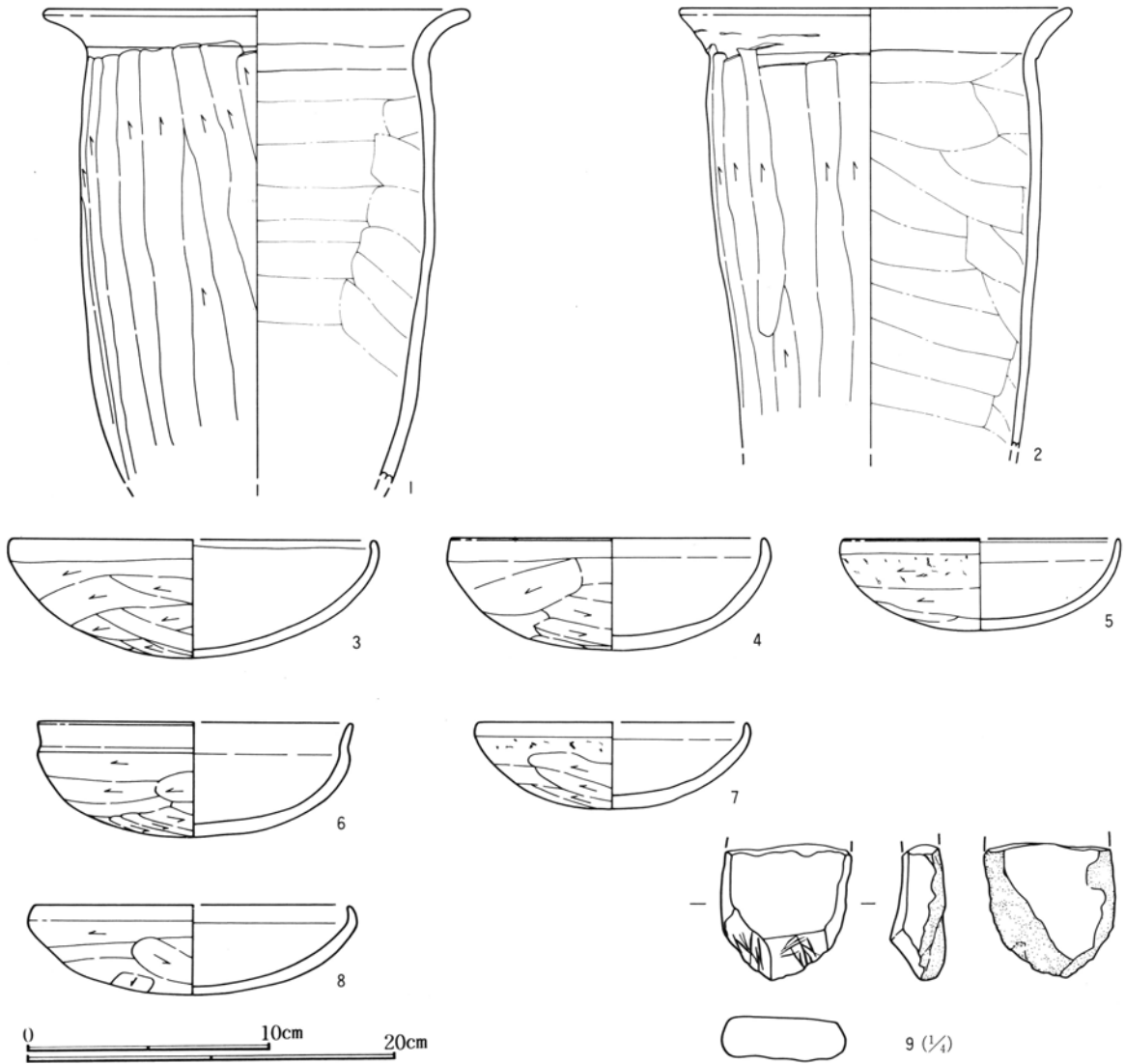
規模 残りが悪く不明である。



第11図 9号住居跡実測図



第12図 9号住居跡竈実測図



第13図 9号住居跡出土遺物実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

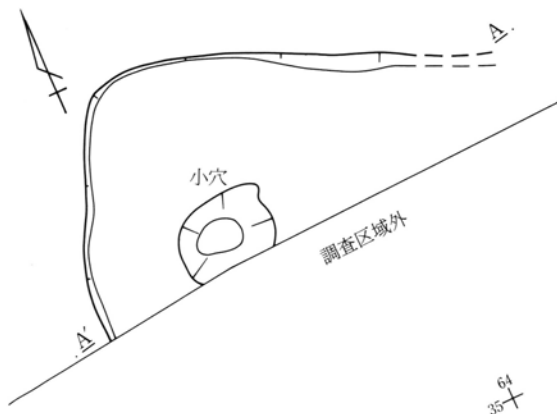
9号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考		
13-1 78	土師器 甕	床面-7 口縁部1/2 胴部ほぼ完	口 23.4 高 — 底 —	①粗、2~3mmの砂粒を大量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	胴部外面へら削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。内面ナデにて器表面密。口縁部と胴部との境に段はない。		
13-2 78	土師器 甕	床面-6 図示部分ほ ぼ完形	口 21.6 高 — 底 —	①粗、1~3mmの砂粒を大量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面強いへら削り、削りの単位は明瞭である。		
13-3 78	土師器 坏	床面+20 1/3残存	口(14.6) 高 4.8 底 —	①密、少量の角閃石を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部へら削り。胎土が密で削りの単位不明瞭。内面ナデにて器表面密。		
13-4 78	土師器 坏	床面-6 1/3残存	口 12.8 高 4.5 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。底部外面吸炭により黒色を呈する。		
13-5 78	土師器 坏	床面+8 口縁部1/2 底部1/5	口(11.0) 高 3.7 底 —	①密、角閃石粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部へら削り。内面ナデにて器表面密。		
13-6 78	土師器 坏	床面+3 1/3残存	口(12.8) 高 4.7 底 —	①密、1mm以下の小さな雲母粒と赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。砂粒の移動少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。		
13-7	土師器 坏	床面+13 1/3残存	口(10.8) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削りであるが、胎土が密で削りの単位不明瞭。		
13-8	土師器 坏	覆土 1/4残存	口(12.8) 高 3.6 底 —	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	胎土がやや粉状を呈し、粗れているためへら削りの単位不明瞭。		
13-9 120	石製品 砥石	覆土	長 (7.2) 幅 6.7 厚 3.0 重 165		凝灰岩。自然面は少なく、多くの面が磨耗している。砥石欠損後再利用の目的で再加工の未製品か。		
遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)				石材・備考
10	122	こも編み石	長 15.4	幅 7.2	厚 3.8	重 645	緑簾緑泥片岩
11	122	こも編み石	長 12.0	幅 7.5	厚 3.6	重 460	点紋緑泥片岩
12	122	こも編み石	長 12.3	幅 5.4	厚 4.0	重 380	絹雲母石墨片岩
13	122	こも編み石	長 13.1	幅 6.1	厚 1.9	重 260	点紋絹雲母石墨片岩
14	122	こも編み石	長 12.8	幅 6.0	厚 3.2	重 430	緑簾緑泥片岩
15	122	こも編み石	長 15.0	幅 6.1	厚 3.7	重 610	緑簾緑泥片岩
16	122	こも編み石	長 16.4	幅 6.2	厚 3.0	重 430	絹雲母石墨片岩
17	122	こも編み石	長 15.0	幅 5.8	厚 1.7	重 230	点紋絹雲母石墨片岩
18	122	こも編み石	長 17.5	幅 6.8	厚 4.5	重 900	緑簾緑泥片岩

10号住居跡 (第14・15図、図版140)

位置 本住居跡は第2次調査区にあり、36-64グリッドに位置する。

概要 南側の大部分は調査区域外にあり、調査できたのは北側の一部である。表土の堆積が薄く住居の残りは非常に悪い。床面もほとんど残っていない。小穴が1本確認されたが、柱穴や貯蔵穴さらに竈は確認されていない。

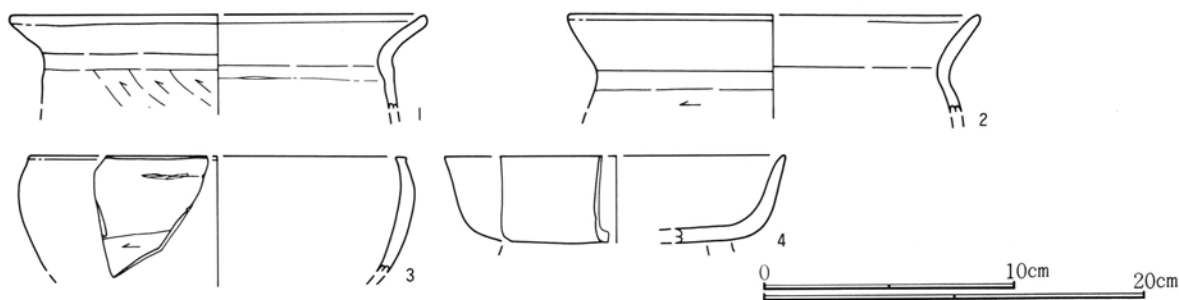


規模 東西南北とも不明である。壁高は残りの良い西壁面部分で20cmである。

遺物 出土量は少なく、図示できたのは土師器の甕2点と坏2点である。



第14図 10号住居跡実測図



第15図 10号住居跡出土遺物実測図

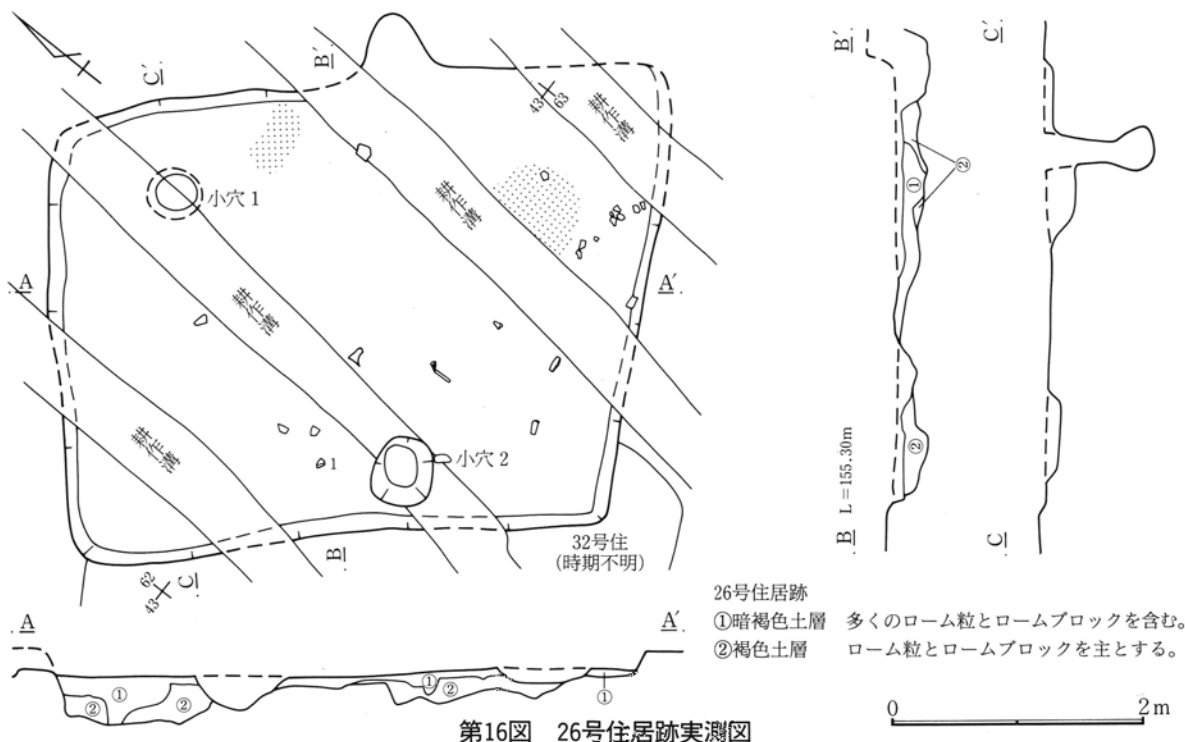
10号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
15-1	土師器 甕	覆土 口縁破片	口(22.0) 高— 底—	①やや粗、2~4mmの片岩粒をわずかに含む。②酸化焰、硬質③にぶい赤褐色	胴部ヘラ削りで器肉を薄く仕上げています。口縁部内側にわずかな凹線あり。
15-2	土師器 甕	覆土 口縁小片	口(22.0) 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず②酸化焰、硬質③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。
15-3	土師器 鉢?	覆土 小破片	口(20.0) 高— 底—	①密、多くの雲母粒を含む②酸化焰、硬質③橙色	胴部ヘラ削り。口唇部は平らに仕上げています。小さな破片であり全体像不明。
15-4	須恵器 坏	覆土 小破片	口(13.4) 高— 底—	①密、少量の白色粒を含む②還元焰、硬質③灰色	高台の付いていた痕跡が明瞭に残っている。底面ヘラ削り。

26号住居跡 (第16・17図、図版15)

位置 本住居跡は第2次調査区にあり、43・44-63グリッドに位置する。

概要 5軒の重複する住居の中の1軒である。掘り込み面が浅いうえに南北方向の多くの耕作溝により床下部分まで深く掘り込まれているため残りが悪い。本住居は住居規模や時代の不明な32号住居と西側で重複しており、重複関係は明瞭につかめなかったが、本住居が32号住居を掘り込んでいると考えられ



第16図 26号住居跡実測図

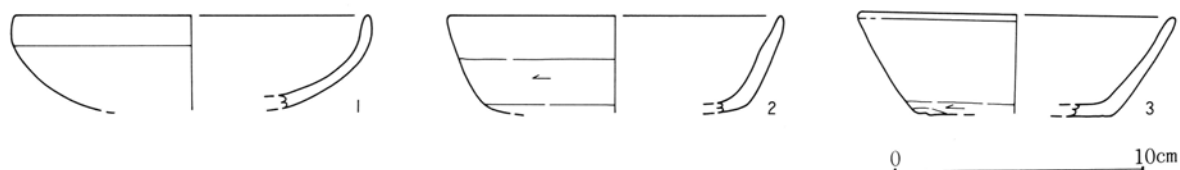
第3章 古墳時代の遺構と遺物

る。新旧関係は32→26号住居である。竈は東壁面に造られているが、残りが悪く焼土粒の出土も少ない。貯蔵穴は明らかでないが、耕作溝により削られている南東コーナーに掘られていた可能性が考えられる。南東部分の床面に焼土粒が多く出土している。

構造 床面は残りが悪く、多くのローム粒とロームブロックの混入した土で造られている。柱穴は掘られていないが、小穴が2本掘られている。貯蔵穴も掘られていない。

規模 東西3.51m、南北4.75mである。壁高は残りの良い西壁面部分で10cmである。小穴1は径34cm深さ75cm、小穴2は径54cm深さ29cmである。

遺物 図示できたのは坏の破片3点である。



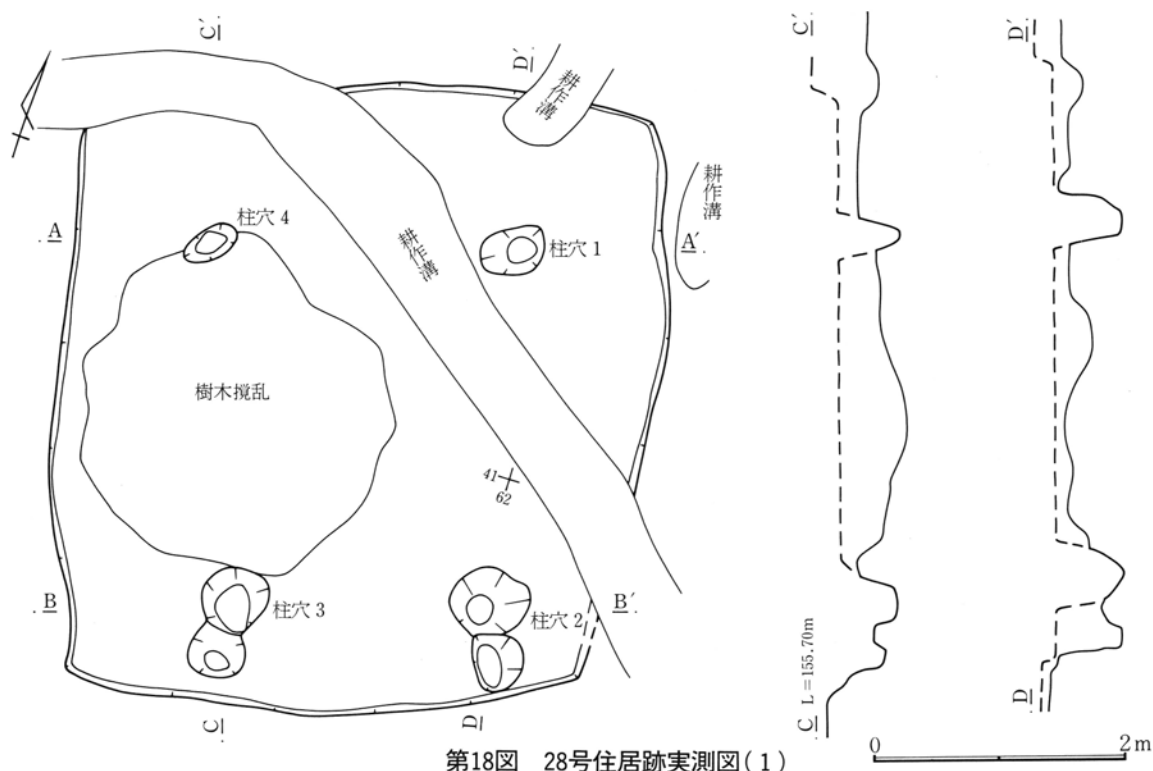
第17図 26号住居跡出土遺物実測図

26号住居跡出土遺物観察表

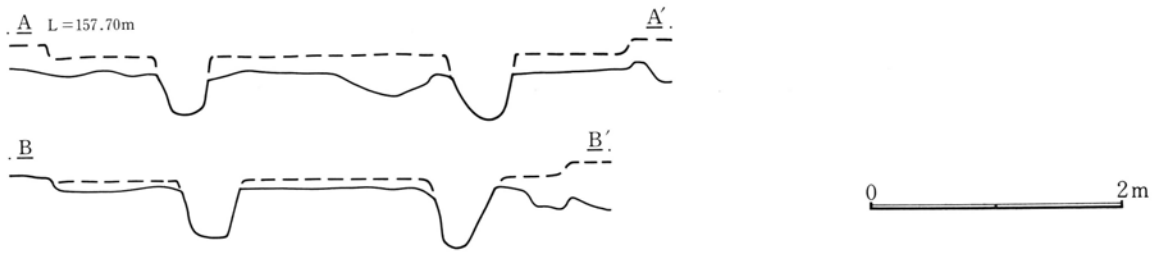
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
17-1	土 師 器 坏	床面+19 口縁部 $\frac{1}{4}$	口(14.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りと思われるが、器表面が粗れており、削りの単位不明。
17-2	土 師 器 坏	覆土 口縁部 $\frac{1}{2}$	口(13.0) 高 — 底 —	①密、粉状を呈する ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部ヘラ削り。内面に暗文は認められない。
17-3	須 恵 器 坏	覆土 口縁部 $\frac{1}{6}$	口(12.4) 高 — 底 —	①やや粗、1~2mmの片岩粒を含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面糸切痕。体部下半分ヘラ削り。多くの片岩粒が目立つ。

28号住居跡 (第18~20図、図版15)

位置 本住居跡は第2次調査区にあり、41・42-62グリッドに位置する。



第18図 28号住居跡実測図(1)



第19図 28号住居跡実測図(2)

- 概要** 全体に残りが悪く、床面はほとんど残っていないため床下部分の調査となった。住居の南東部分から北西部分にかけて、地境の溝により床下部分まで掘り込まれている。また西側の床面は大きな木の移植に伴い深く掘り込まれている。竈は全く不明である。
- 構造** 柱穴が4本掘られており、南側の2本の柱穴に接してそれぞれ小穴が掘られている。貯蔵穴も不明である。
- 規模** 東西4.80m、南北4.95mである。柱穴1は径57cm深さ53cm、柱穴2は径62cm深さ55cm、柱穴3は径52cm深さ44cm、柱穴4は径49cm深さ49cmである。小穴1は径48cm深さ56cm、小穴2は径46cm深さ36cmである。
- 遺物** 破片を含め出土量は少ない。



第20図 28号住居跡出土遺物実測図

28号住居跡出土遺物観察表

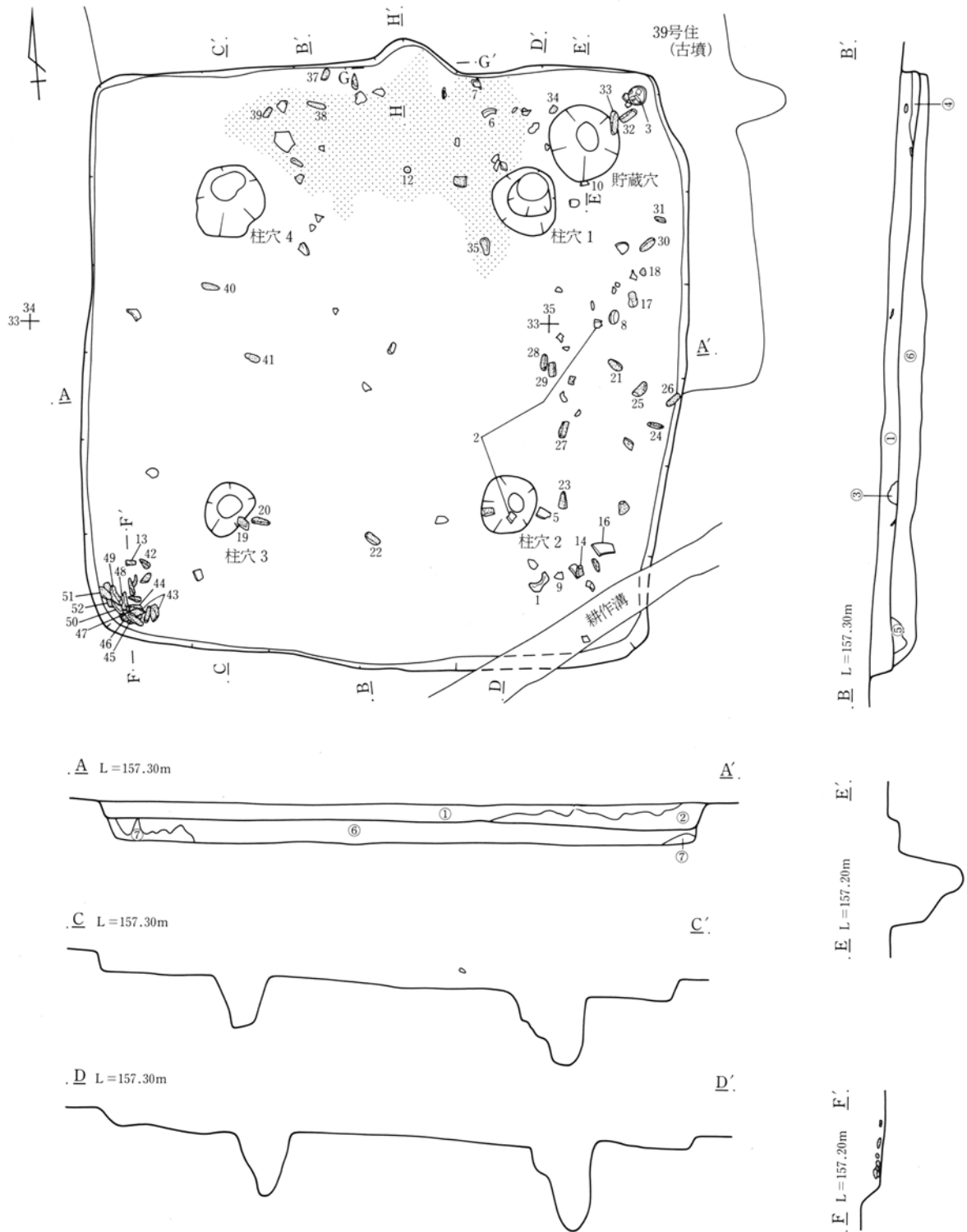
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
20-1	土師器 坏	覆土 口縁部 $\frac{1}{4}$	口(11.2) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が多く移動してやや粗い。 内側器表面密。 少しゆがんでいる。

35号住居跡 (第21~24図、図版15・78・113・120・122・123)

- 位置** 本住居跡は第4次調査区にあり、33・34—35グリッドに位置する。
- 概要** 北側で古墳時代の39号住居と重複しており、本住居が39号住居の南側を床下部分まで掘り込んでいる。
- 構造** 床面はローム粒を主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴が4本と竈の右側に貯蔵穴が掘られている。
- 規模** 東西5.76m、南北5.78mである。壁高は残りの良い東壁面部分で25cmである。貯蔵穴は径68cm深さ75cmである。柱穴1は径64cm深さ84cm、柱穴2は径56cm深さ56cm、柱穴3は径48cm深さ44cm、柱穴4は径68cm深さ75cmである。
- 遺物** 図示した他にも甕の破片が多く、また南西コーナー部分の床面上から多くのこも編み石がまとまって出土している。耳環や砥石の出土が目される。覆土中に平安時代の遺物が混入している。

(竈)

- 位置** 住居北壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。
- 構造** 39号住居の覆土を掘り込んで造られており、残りが悪く袖部分はほとんど残っていない。また意識的に壊されていたためか、竈周辺に多くの焼土粒が散乱している。燃焼部付近の竈内より多くの焼土粒が出土している。
- 規模** 燃焼部の大部分が残っていないため不明である。

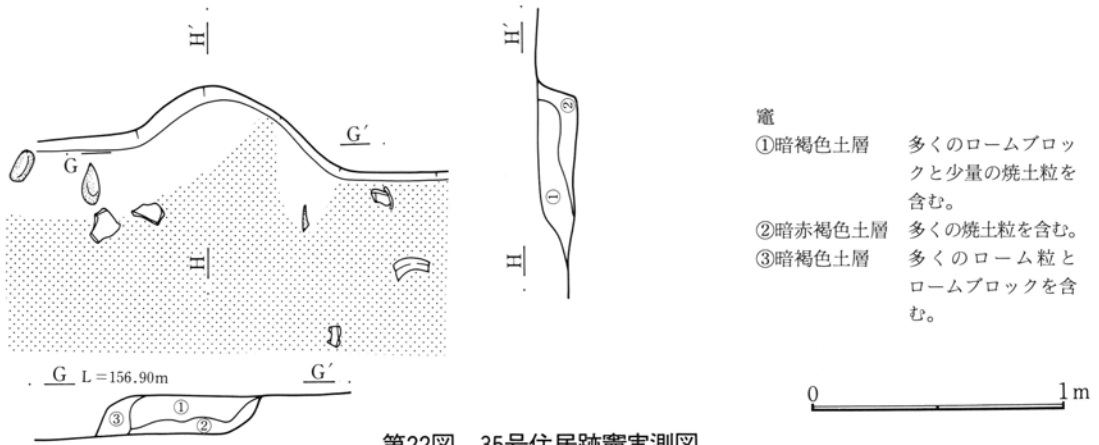


35号住居跡

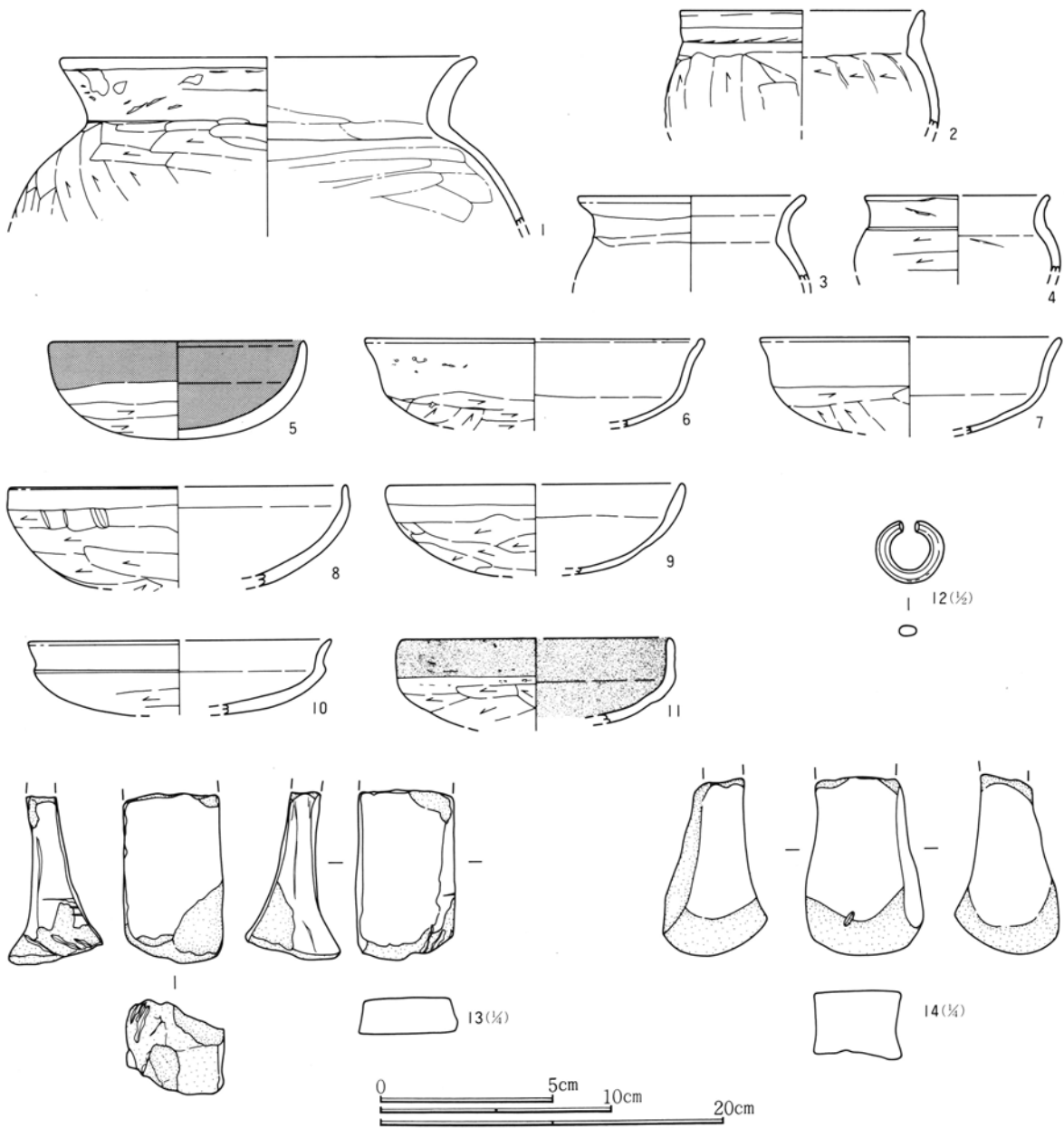
- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒と少量のローム粒と僅かな炭化物・焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量の白色軽石粒と少量の炭化物を含む。
- ③黄褐色土層 ロームブロックを主とする。
- ④暗褐色土層 多くのロームブロックを含む。
- ⑤黄褐色土層 多量のローム粒を含む。
- ⑥暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑦黄褐色土層 地山のロームを主とする。

0 2m

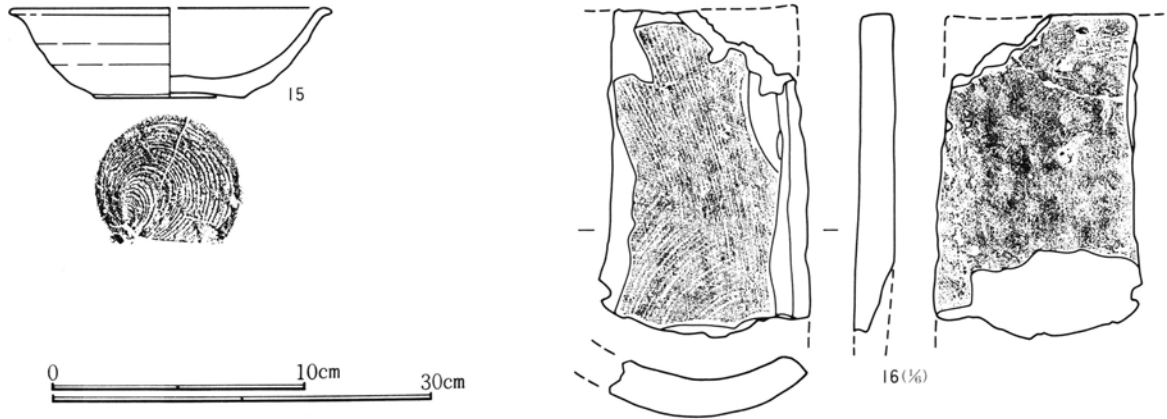
第21図 35号住居跡実測図



第22図 35号住居跡竈実測図



第23図 35号住居跡出土遺物実測図(1)



第24図 35号住居跡出土遺物実測図(2)

35号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
23-1 78	土器 壺	床面+20 口縁部 $\frac{1}{2}$ 肩部 $\frac{1}{4}$	口(24.4) 高— 底—	①密、1~2mmの砂粒を多く片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質③外面灰色、内面橙色	肩部ヘラ削り、砂粒は少し移動しているが、器表面の粗れは少ない。 口縁部の器肉が特に厚い。
23-2	土器 甕	床面+4 $\frac{1}{2}$ 残存	口(14.2) 高— 底—	①やや粗、1~2mmの砂粒と片岩粒を含む。②酸化焰、硬質③外面赤褐色、内面黒褐色	胴部外面ヘラ削り、器表面が粗い、ヘラ状工具を用いたナデにて器表面密。 外面でなく内面が吸炭により黒褐色を呈している。
23-3	土器 小型甕	床面+9 $\frac{1}{2}$ 残存	口13.4 高— 底—	①やや粗、1~3mmの砂粒と赤色粒を含む。②酸化焰、硬質③赤褐色	胴部ヘラ削りと思われるが、器表面が粗れており整形方法不明。
23-4	土器 小型甕	覆土 口縁部小片	口(10.6) 高— 底—	①密、多くの雲母粒を含む。②酸化焰、硬質③橙色	胴部ヘラ削り、小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。
23-5 78	土器 坏	床面+3 $\frac{1}{2}$ 残存	口12.0 高4.2 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む②酸化焰、硬質③外面橙色、内面黒色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭でない。 内面は吸炭により黒色で光沢を持つ、吸炭は断面に及ぶ。
23-6 78	土器 坏	床面+8 $\frac{1}{2}$ 残存	口(14.5) 高— 底—	①密、多くの雲母粒を含む②酸化焰、硬質③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭である。 内面ナデにて器表面密。 ていねいなつくりである。
23-7 78	土器 坏	床面+7 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.0) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな雲母粒を多く含む。②酸化焰、硬質③にぶい黄褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。全体に器肉が薄く、焼成温度が高い。
23-8 78	土器 坏	床面+3 $\frac{1}{2}$ 残存	口(14.6) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む②酸化焰、硬質③橙色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が多く移動している。 内面ナデにて器表面密。
23-9	土器 坏	床面-5 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.0) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む②酸化焰、硬質③表面にぶい赤褐色	底部強いヘラ削り。 内面ナデにて器表面密。
23-10	土器 坏	床面+4 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.0) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を含む②酸化焰、硬質③橙色	底面ヘラ削り。 口縁部~内側底面の器表面密。
23-11	土器 坏	覆土 小片	口(11.6) 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず②酸化焰、硬質③断面橙色、表面黒褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。 底部外面吸炭により黒褐色。 口縁部外面~内側底面に黒漆。
23-12 113	鉄製品 耳環	覆土	広径 2.0 狭径 1.8 厚 0.55 重 5.8		表面金メッキ、メッキが多くの部分に残っている。 素地は青銅である。
23-13 120	石製品 砥石	床面+3	長 9.7 幅 5.8 厚 5.5 重 260		流紋岩。4側面を砥石として使用している。 欠損後再加工の痕跡なし。
23-14 120	石製品 砥石	床面+8	長 10.3 幅 5.0 厚 4.0 重 450		流紋岩。砥石として3側面使用している。 破損後再加工の痕跡なし。
24-15	須恵器 坏	覆土 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部完形	口(12.1) 高 3.5 底 5.8	①密、少量の片岩粒を含む②還元焰、硬質③灰黄色	均整がとれており、器表面が密である。
24-16	平瓦	床面+26 破片	— —	①粗、3~6mmの長石粒を含む②還元焰、硬質③灰色	凹面に布目。 側面ナデ、凸面ナデ、ナデの方向は一定でない。

遺物番号	図版番号	器種	法				量(cm)(g)		石材・備考		
17	122	こも編み石	長	13.8	幅	6.3	厚	2.6	重	365	石墨緑泥片岩
18	122	こも編み石	長	15.6	幅	6.0	厚	4.3	重	560	絹雲母石墨片岩
19	122	こも編み石	長	13.0	幅	5.6	厚	3.9	重	400	絹雲母石墨片岩
20	122	こも編み石	長	17.7	幅	5.0	厚	3.6	重	505	緑簾緑泥片岩
21	122	こも編み石	長	16.4	幅	7.2	厚	3.4	重	420	絹雲母石墨片岩
22	122	こも編み石	長	17.1	幅	6.7	厚	2.8	重	610	緑簾緑泥片岩
23	122	こも編み石	長	15.1	幅	6.5	厚	3.2	重	485	点紋緑泥片岩 一部炎を受けている
24	122	こも編み石	長	13.3	幅	4.7	厚	3.8	重	455	緑泥片岩
25	122	こも編み石	長	16.8	幅	6.9	厚	4.1	重	765	絹雲母石墨片岩
26	122	こも編み石	長	16.7	幅	7.3	厚	4.7	重	860	絹雲母石墨緑泥片岩
27	122	こも編み石	長	16.4	幅	6.7	厚	3.2	重	530	絹雲母石墨片岩
28	122	こも編み石	長	15.6	幅	6.7	厚	3.3	重	440	点紋絹雲母石墨片岩 黒斑が一部あり
29	122	こも編み石	長	14.8	幅	8.5	厚	4.1	重	815	絹雲母石墨片岩
30	122	こも編み石	長	17.3	幅	7.8	厚	2.5	重	430	絹雲母石墨片岩
31	122	こも編み石	長	13.0	幅	7.2	厚	2.6	重	335	石墨緑泥片岩
32	122	こも編み石	長	15.9	幅	6.7	厚	4.5	重	755	緑簾緑泥片岩 片側面に打ち欠いた凹状
33	122	こも編み石	長	18.7	幅	7.5	厚	4.0	重	910	絹雲母石墨片岩
34	122	こも編み石	長	12.1	幅	5.2	厚	2.7	重	260	絹雲母石墨片岩
35	122	こも編み石	長	16.9	幅	7.5	厚	2.9	重	585	緑簾緑泥片岩 黒斑が一部認められる
36	122	こも編み石	長	18.3	幅	6.7	厚	3.4	重	570	絹雲母石墨片岩
37	122	こも編み石	長	14.5	幅	6.5	厚	2.3	重	375	絹雲母石墨片岩
38	122	こも編み石	長	18.0	幅	6.3	厚	3.4	重	545	絹雲母石墨片岩
39	122	こも編み石	長	11.6	幅	6.2	厚	4.1	重	490	絹雲母石墨片岩
40	122	こも編み石	長	17.0	幅	6.4	厚	2.1	重	360	緑簾緑泥片岩 片側面に打ち欠いた凹状
41	122	こも編み石	長	14.8	幅	7.5	厚	2.9	重	520	緑簾緑泥片岩
42	122	こも編み石	長	12.6	幅	6.0	厚	3.5	重	375	石墨緑泥片岩
43	123	こも編み石	長	17.3	幅	6.8	厚	3.7	重	625	絹雲母石墨片岩
44	123	こも編み石	長	14.4	幅	6.5	厚	3.4	重	620	緑簾緑泥片岩
45	123	こも編み石	長	15.2	幅	4.0	厚	4.2	重	320	石墨緑泥片岩
46	123	こも編み石	長	17.2	幅	4.8	厚	3.9	重	445	石墨緑泥片岩
47	123	こも編み石	長	13.9	幅	5.8	厚	2.8	重	315	絹雲母石墨片岩 一部炎を受けている
48	123	こも編み石	長	17.7	幅	6.4	厚	3.2	重	565	緑簾緑泥片岩 両側面に打ち欠いた凹状
49	123	こも編み石	長	15.0	幅	5.8	厚	2.8	重	355	石墨緑泥片岩
50	123	こも編み石	長	15.0	幅	6.1	厚	3.0	重	405	絹雲母石墨片岩 一部炎を受けている
51	123	こも編み石	長	15.2	幅	6.6	厚	3.3	重	370	絹雲母石墨片岩
52	123	こも編み石	長	15.3	幅	5.8	厚	3.3	重	390	絹雲母石墨片岩
53	123	こも編み石	長	9.1	幅	5.5	厚	2.4	重	160	絹雲母石墨片岩

93号住居跡 (第25～28図、図版15・16・78)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、21-32グリッドに位置する。

概要 東側で平安時代の94号住居と重複しており、94号住居により覆土上面が掘り込まれている。西壁面部分は3号溝により床面に近い覆土上面まで掘り込まれているが、壁面下部は残っているため住居範囲はほぼ全面にわたり確認できる。

構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。

規模 東西3.86m、南北3.34mである。壁高は残りの良い南壁面部分で43cmである。

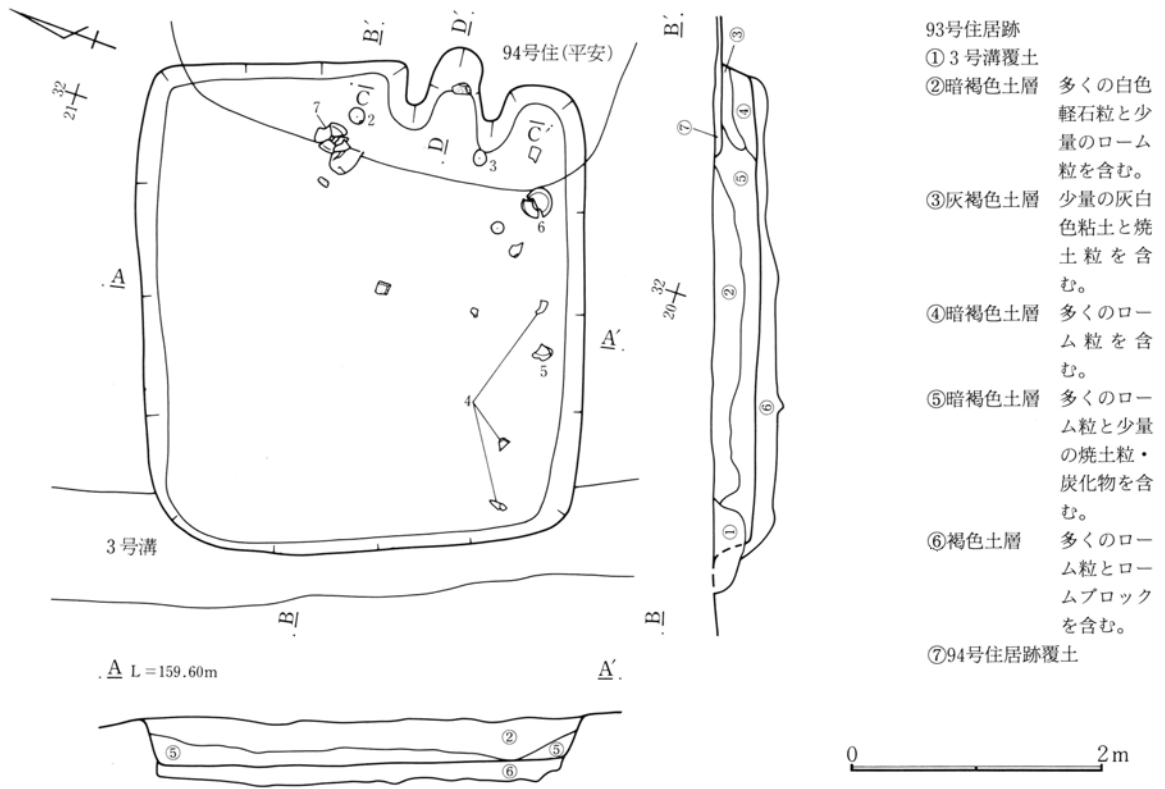
遺物 破片を含め出土量は多くないが、須恵器の高杯が出土している。

(竈)

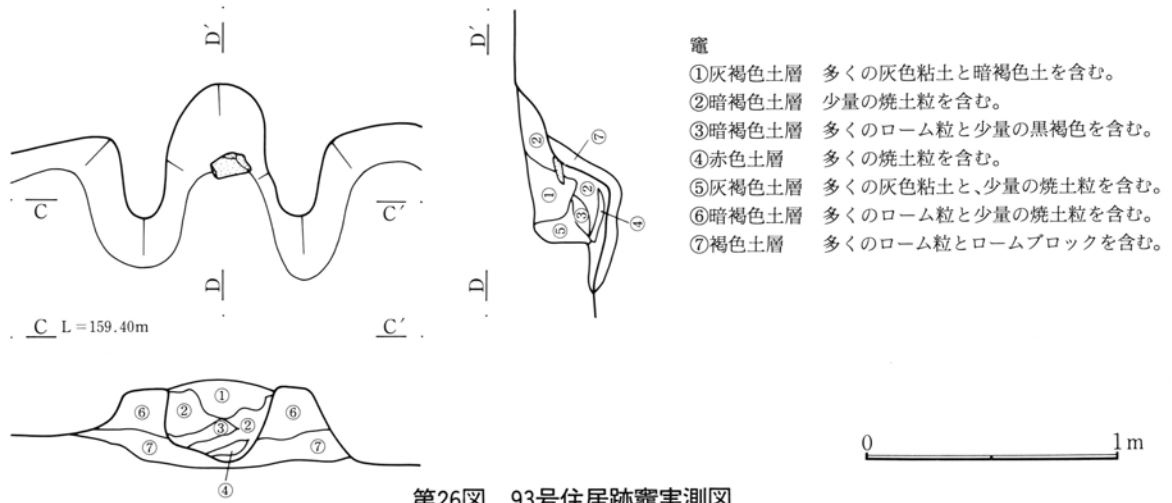
位置 住居東壁面の南寄りに造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要 両袖部分の残りは比較的良好である。煙道部付近に1個の石が出土したが、袖石は使われていないようである。燃焼部よりまとまって焼土粒が出土している。

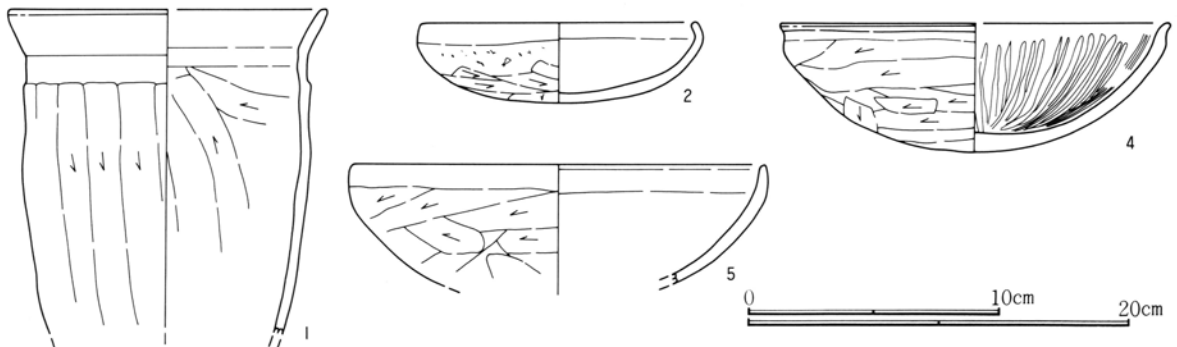
規模 煙道方向78cm、燃焼部幅42cmである。



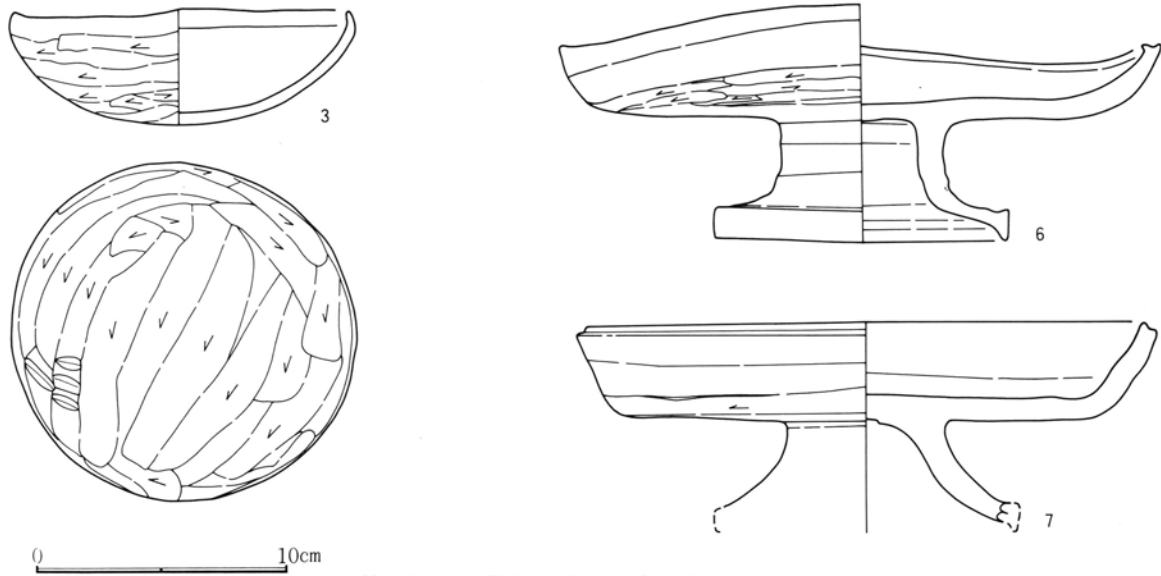
第25図 93号住居跡実測図



第26図 93号住居跡竈実測図



第27図 93号住居跡出土遺物実測図(1)



第28図 93号住居跡出土遺物実測図(2)

93号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
27-1	土師器 甕	床面直上 小破片	口 16.8 高 — 底 —	①粗、2~4mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	外面ていねいなへら削り。内面へら削り。内外面とも器表面の粗れは少ない。小さな甕と思われる。
27-2 78	土師器 坏	床面直上 口縁一部欠 他完形	口 10.9 高 3.1 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面わずかにへらナデ。周辺部ナデ。内面ナデにて器表面密。内面に黒色物付着、吸炭ではない。
28-3 78	土師器 坏	床面直上 完形	口 13.2 高 4.5 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色、一部黒褐色	底面へら削り、削りの単位は明瞭である。内面ナデにて器表面密。内面 $\frac{1}{2}$ 吸炭により黒褐色。
27-4 78	土師器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口 15.3 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。口縁部は直立後外反する。内面は全面にわたり放射状暗文。
27-5 78	土師器 坏	床面直上 口縁部 $\frac{1}{4}$ 底部 $\frac{1}{3}$	口 16.3 高 5.8 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。固く焼かれている。
28-6 78	須恵器 高坏	床面直上 坏完形 脚一部欠	口 23.8 高 9.4 底 —	①密、1~2mmの長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	盤底面回転へら削り。脚の端部は幅広く垂直に立つ。脚上半部もほぼ垂直である。口唇部中央が凹状を呈している。
28-7 78	須恵器 高坏	床面直上 坏一部欠損 脚底部欠損	口 22.0 高 8.0 底 —	①やや粗、1~3mmの長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面~体部下半右回転へら削り。内側底面多く使用のため器表面が粗れている。器形のゆがみは少ない。

128号住居跡 (第29~31図、図版16・78・79・113・120)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、24-25グリッドに位置する。

概要 住居の西壁部分は4号溝により削られて残っていない。南東コーナー部分は小さな土坑により壁面の一部が掘り込まれている。

構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴が4本と貯蔵穴が甕の右側に掘られている。

規模 東西不明、南北5.14mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で42cmである。貯蔵穴は径58cm深さ68cmである。柱穴1は径62cm深さ77cm、柱穴2は径63cm深さ78cm、柱穴3は径68cm深さ95cm、柱穴4は径64cm深さ74cmである。

遺物 甕の破片が多く出土しているが、坏は破片を含めても8点である。

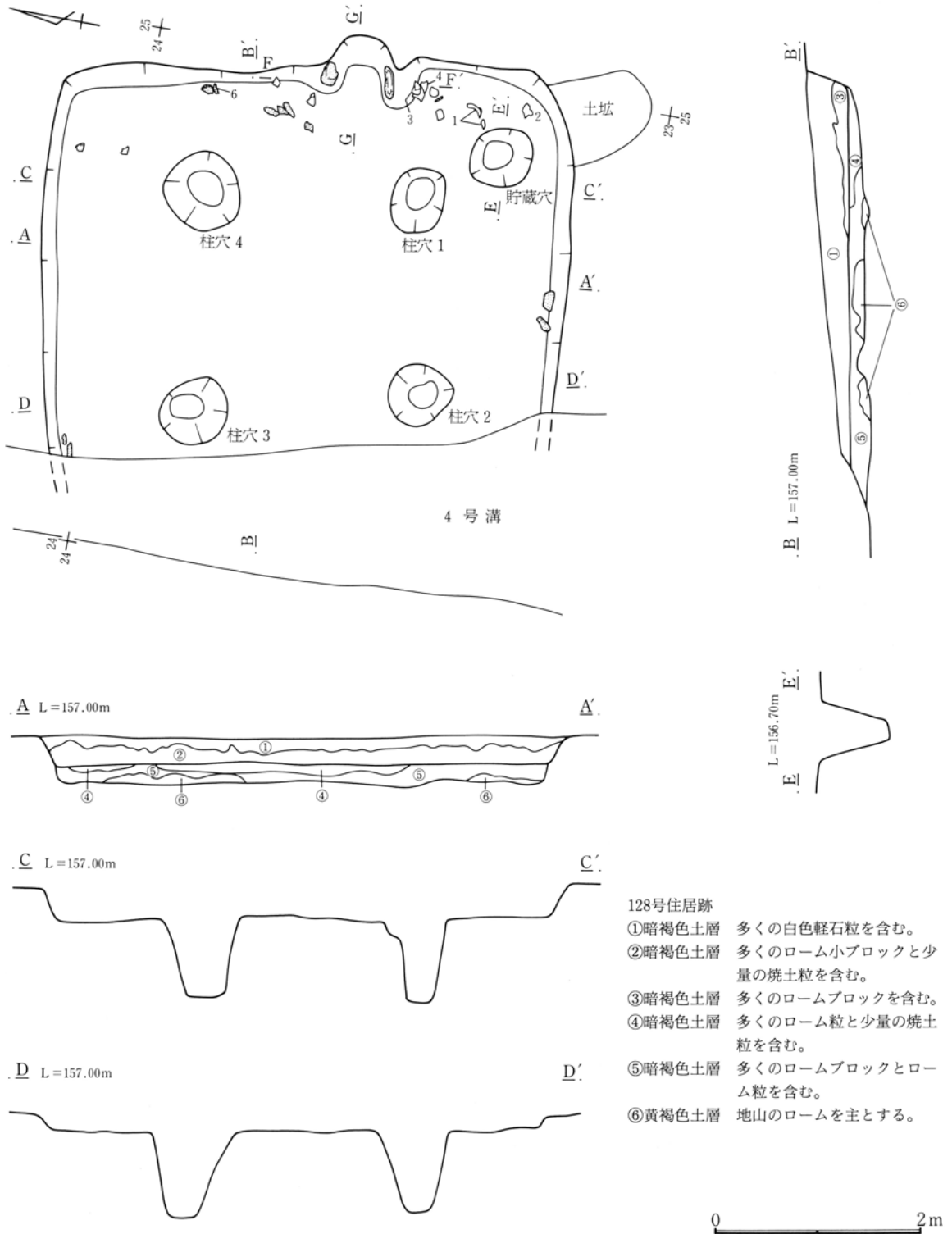
第3章 古墳時代の遺構と遺物

(竈)

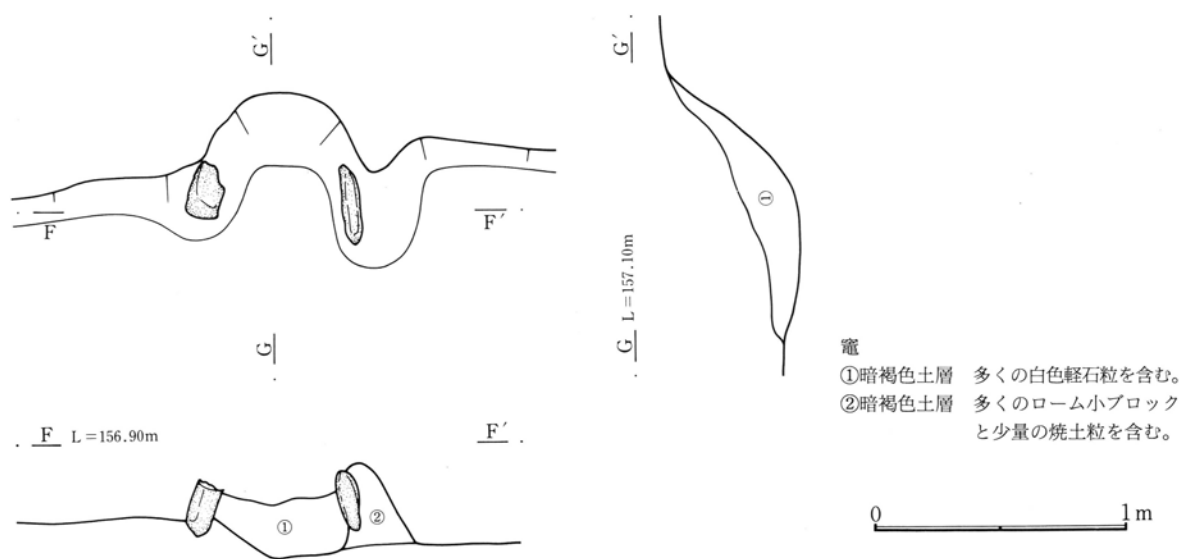
位置 住居東壁面に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

概要 両袖石は少しずれた状態で残っていたが、竈全体の残りは良好ではない。周辺から天井石は出土していない。燃烧部床面からの焼土粒の出土は少ない。

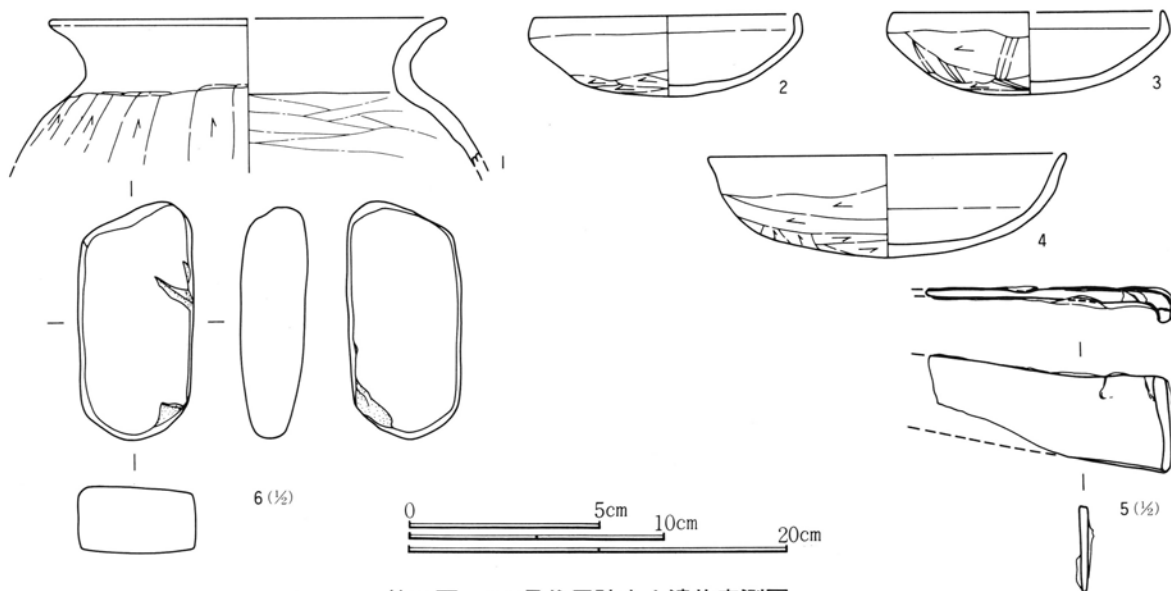
規模 煙道方向67cm、燃烧部幅47cmである。



第29図 128号住居跡実測図



第30図 128号住居跡竈実測図



第31図 128号住居跡出土遺物実測図

128号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
31-1 78	土 師 器 壺	床面+3 1/3残存	口(21.0) 高 — 底 —	①やや粗、3~4mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へら削り。砂粒の移動少なく器表面粗れていない。内面ナデにて器表面密。全体に器肉が厚い。
31-2 79	土 師 器 坏	床面+8 ほぼ完形	口 10.6 高 3.2 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部中央へら削り。周辺部ナデ。内外面とも器表面が斑点状に剥離している。黒斑全く認められず。
31-3 79	土 師 器 坏	床面+7 1/2残存	口(11.0) 高 3.2 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色、一部黒色	底面へら削り、削りの単位は明瞭である。内側器表面は密で光沢を持つ。底部外面の一部吸炭により黒色を呈している。
31-4 79	土 師 器 坏	床面+10 1/3残存	口(14.0) 高 4.0 底 —	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③褐色	底面へら削り。砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。口縁部~内側底面の器表面密。底部外面は吸炭により黒色を呈している。
31-5 113	鉄 製 品 鎌	覆土	長 (6.5) 厚 0.4	幅 2.5 重 15.5	鎌の基部の破片である。刃部中央は使用により幅が狭くなり折れたものと思われる。錆化の進化著しい。
31-6 120	石 製 品 不 明	床面+16	長 6.3 厚 1.7	幅 3.0 重 50.8	用途不明。ほぼ全面が磨かれている。中央部がわずかに凸状を呈している。砥石ではないと思われる。

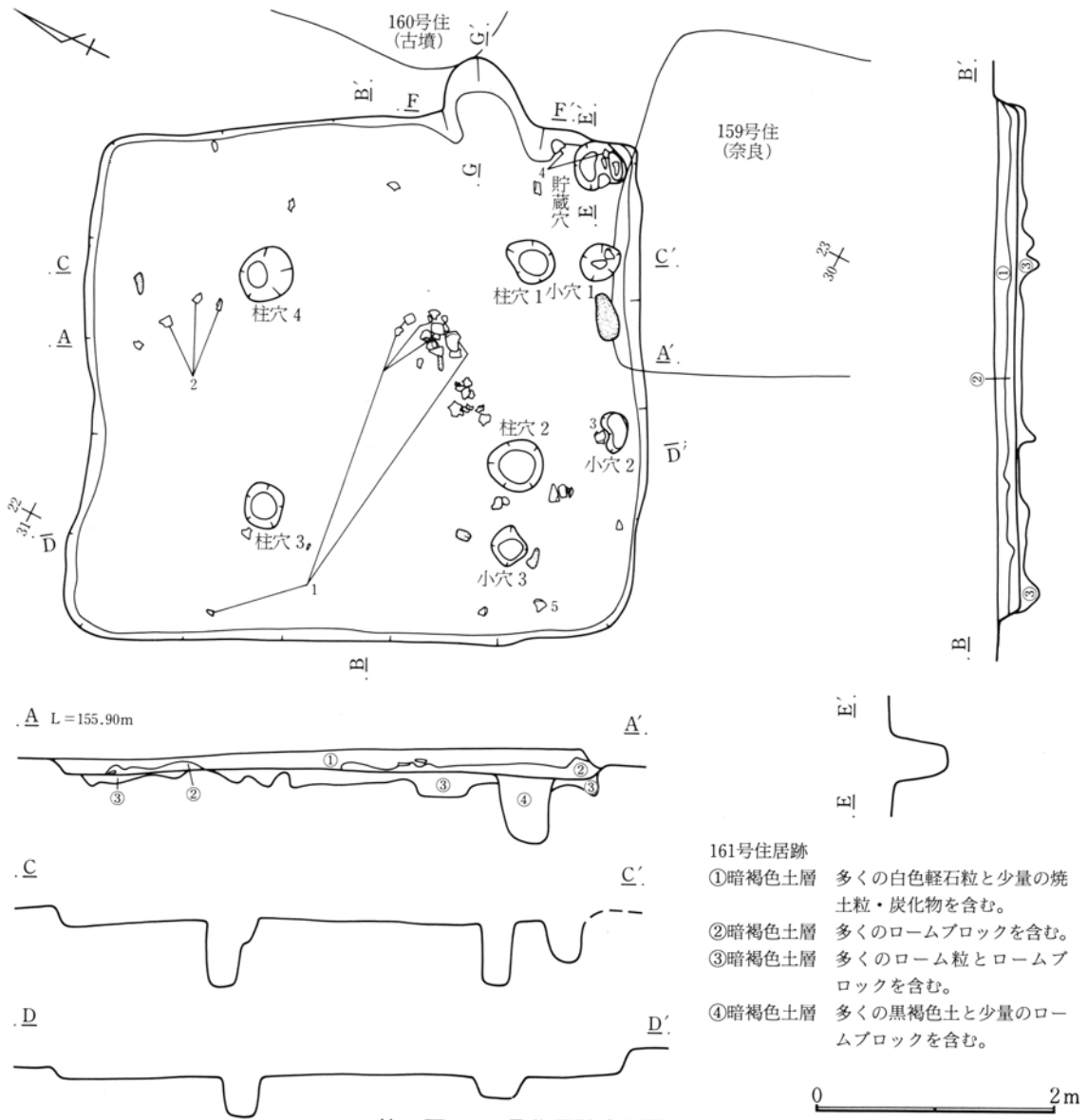
161号住居跡 (第32～35図、図版16・17・79)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、31-23グリッドに位置する。

概要 南東壁面部分で奈良時代の159号住居と重複しており、159号住居により本住居の壁面と床面を掘り込まれている。重複部分はずかである。また竈の煙道部分は古墳時代の160号住居と重複しており160号住居の覆土を掘り込んで煙道部が造られている。

構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴が4本と竈の右側に貯蔵穴が掘られている。南壁面に沿って柱穴1と柱穴2の南側に小穴1と小穴2が、柱穴2の西側に小穴3がそれぞれ確認されている。

規模 東西4.62m、南北4.38mである。壁高は残りの良い南壁面部分で26cmである。貯蔵穴は径42cm深さ38cmである。柱穴1は径40cm深さ46cm、柱穴2は径46cm深さ20cm、柱穴3は径36cm深さ36cm、柱穴4は径44cm深さ16cmである。小穴1は径34cm深さ28cm、小穴2は楕円形で径34×20cm深さ26cm、小穴3は径32cm深さ15cmである。



床下 床下に多くの小穴が掘られている。一定の方向性はなく、用途は不明である。

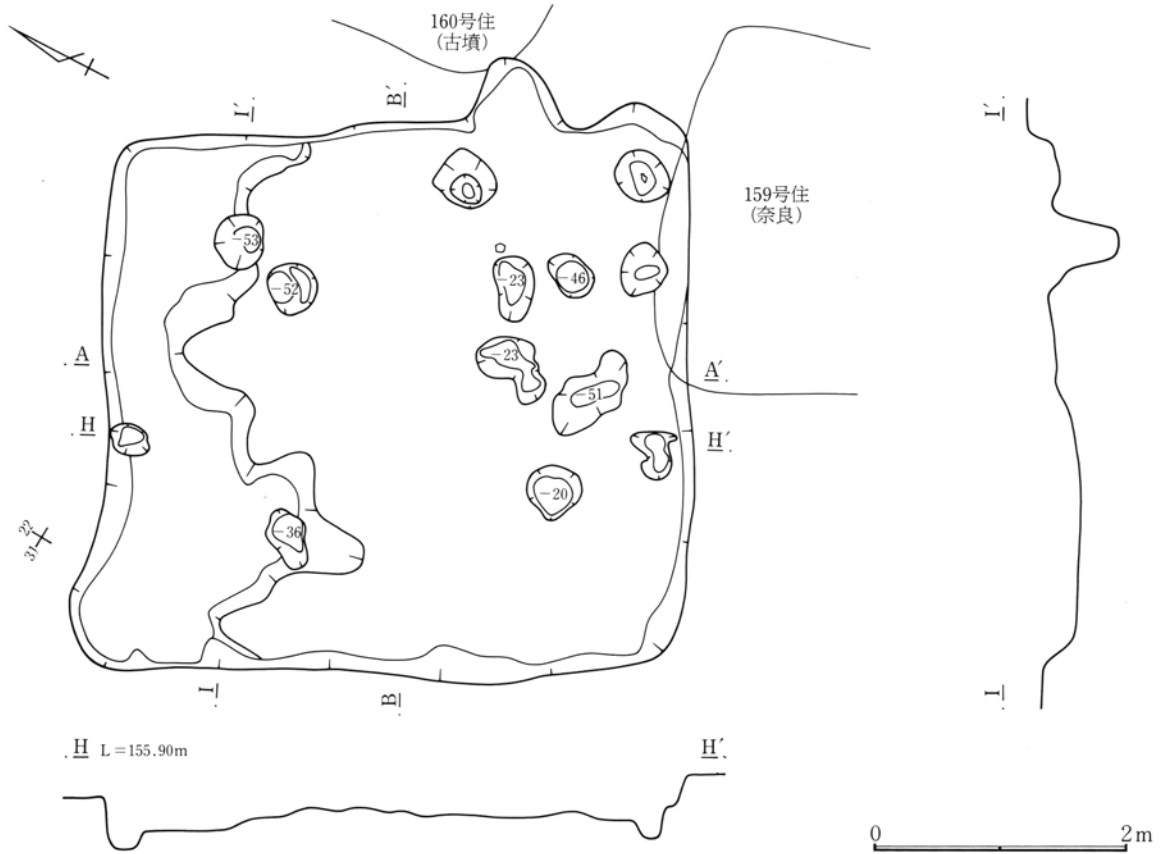
遺物 少量の土師器の甕と坏が出土している。

(竈)

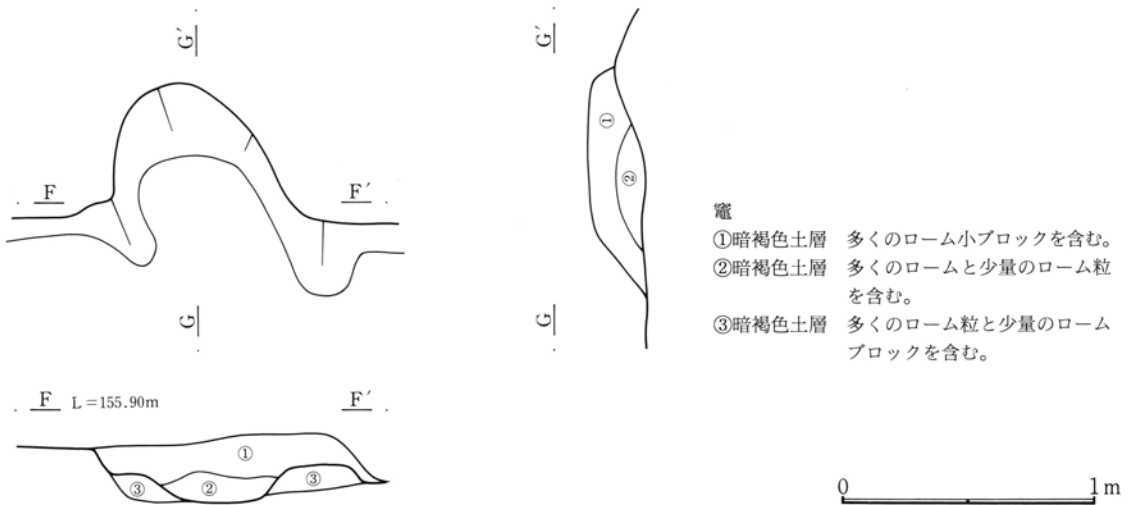
位置 住居東壁面に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

概要 両袖部はほとんど残っておらず、燃烧部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。燃烧部覆土中からの焼土粒の出土も少ない。このように残りの悪い竈である。

規模 煙道方向82cm、燃烧部幅は約48cmである。

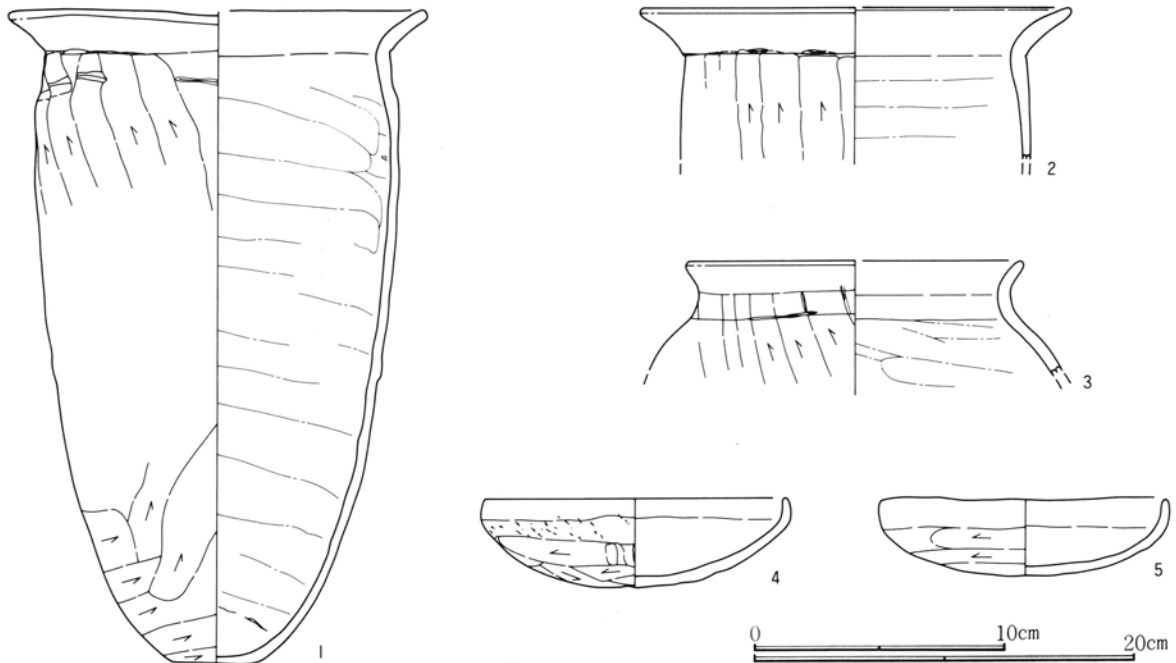


第33図 161号住居跡床下実測図



第34図 161号住居跡竈実測図

- 竈
- ①暗褐色土層 多くのローム小ブロックを含む。
 - ②暗褐色土層 多くのロームと少量のローム粒を含む。
 - ③暗褐色土層 多くのローム粒と少量のロームブロックを含む。



第35図 161号住居跡出土遺物実測図

161号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
35-1 79	土 師 器 甕	床面+4 1/2残存	口(22.0) 高 33.9 底 4.4	①粗、1~3mmの片岩粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面強いヘラ削り。中央部は表面が剝離している。 内面ナデにて器表面密。 底径は小さく器内が薄い。
35-2	土 師 器 甕	床面+6 1/2残存	口(22.0) 高 — 底 —	①粗、1~2mmの砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り。削りの行なわれない口縁部との境に段差あり。
35-3	土 師 器 甕	床面+5 口縁破片	口(17.5) 高 — 底 —	①やや粗、1mm前後の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面弱いヘラ削り。器表面は比較的密である。 内面ナデ。
35-4 79	土 師 器 坏	床面+8 完形	口 11.8 高 3.5 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。内面ナデにて器表面密。
35-5 79	土 師 器 坏	床面+11 1/2残存	口 11.4 高 3.0 底 —	①密、少量の角閃石と片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。削りの単位は明瞭でない。 内側器表面粗れている。

166号住居跡 (第36~42図、図版17・79・113・120・122・123)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、30・31-22グリッドに位置する。

概要 西側壁面部分の一部を耕作溝により掘り込まれている。残りの良い竈が東壁面に造られている。北壁面中央部の床面付近から少量の焼土粒が出土している。袖部分は全く残っておらず、煙道部として壁面の掘り込みも全く認められないが、旧北竈が存在した可能性が考えられる。

構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴が4本と新東竈の右側に貯蔵穴が掘られている。旧北竈に伴う貯蔵穴は掘られていない。

規模 東西6.15m、南北6.63mである。壁高は残りの良い東壁面部分で68cmである。貯蔵穴は径43cm深さ53cmである。柱穴1は径69cm深さ42cm、柱穴2は径51cm深さ78cm、柱穴3は径54cm深さ82cm、柱穴4は径56cm深さ66cmである。

床下 床下に多くの小穴が掘られている。また柱穴付近にも多くの小穴が掘られており、柱穴の掘り直しも

考えられるが、確認はできない。

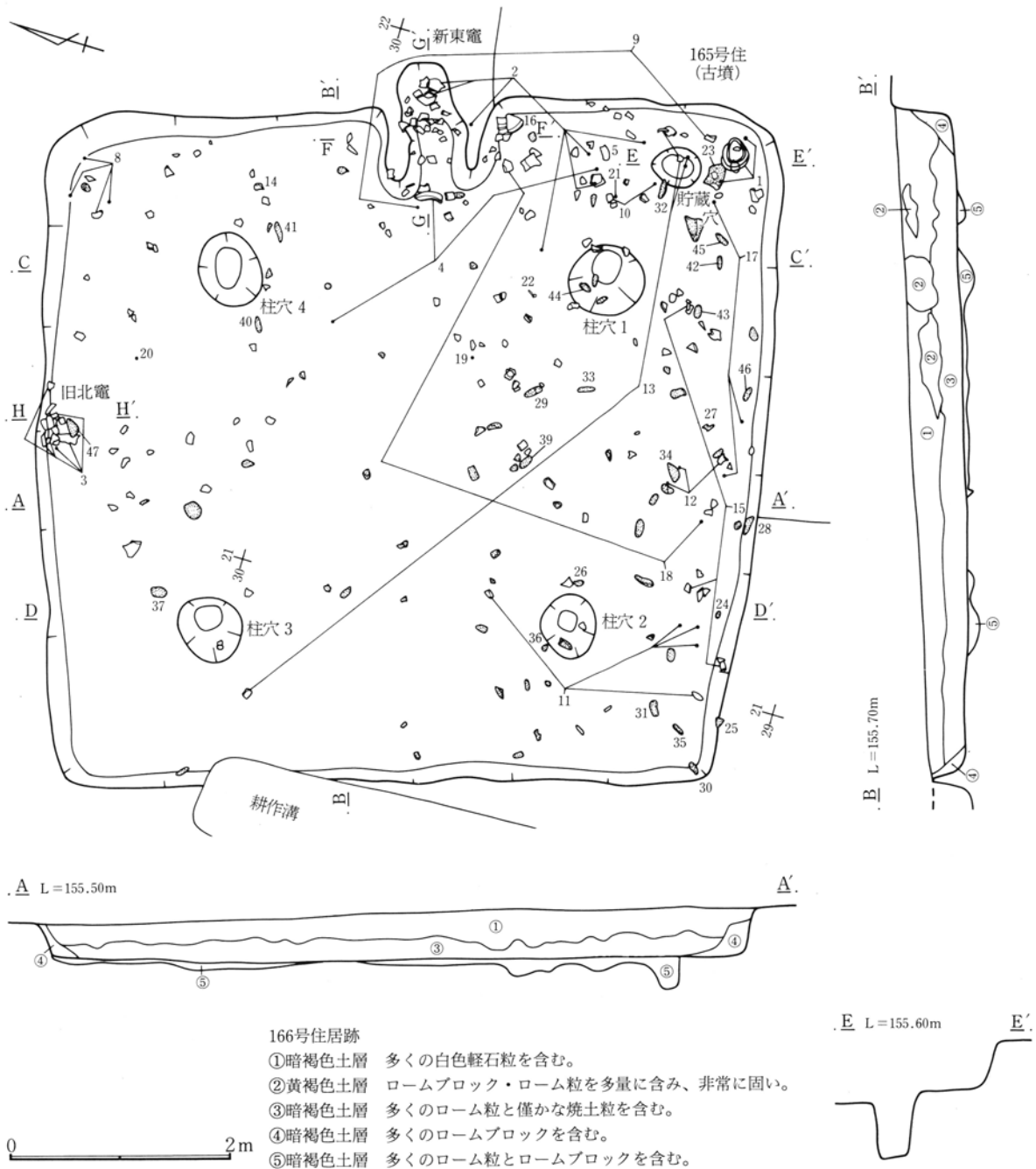
遺物 土師器の甕や坏が多く、また須恵器の高坏が出土している。

(新東竈)

位置 住居東壁面に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

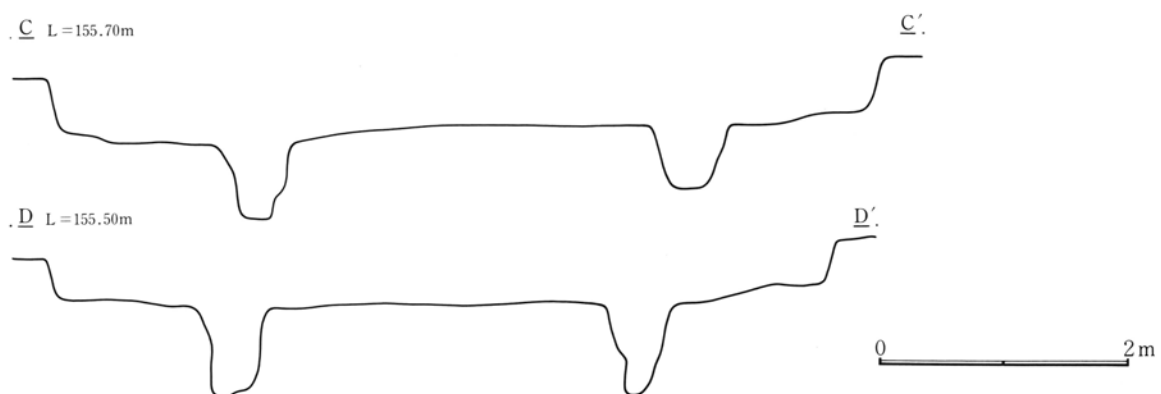
概要 両袖部分の多くは比較的良く残っている。煙道部は壁面を掘り込んで土師器甕の口縁部を下にして煙道としている。袖上部が焼けて焼土化している。また燃烧部より多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向112cm、燃烧部幅約45cmである。

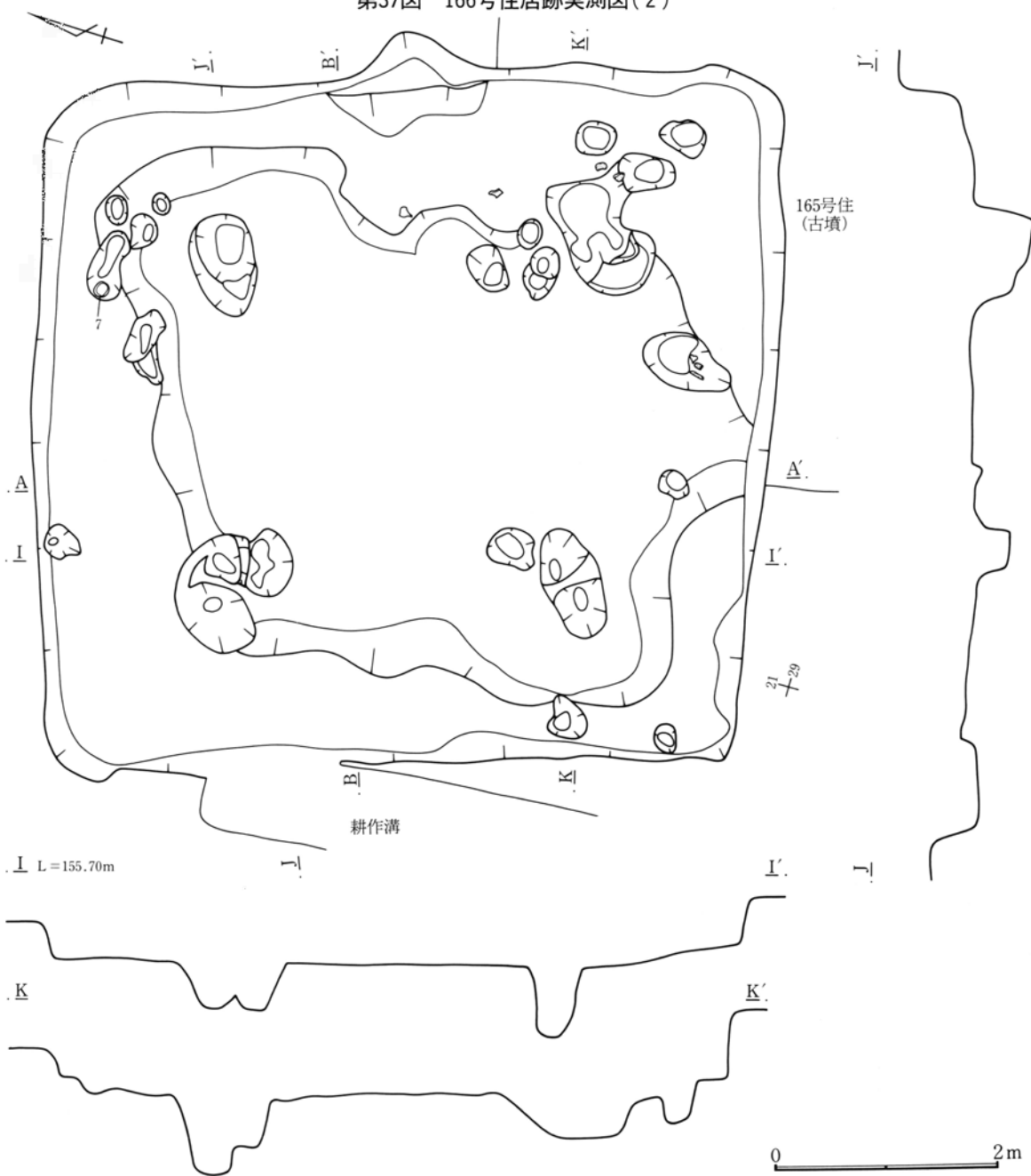


第36図 166号住居跡実測図(1)

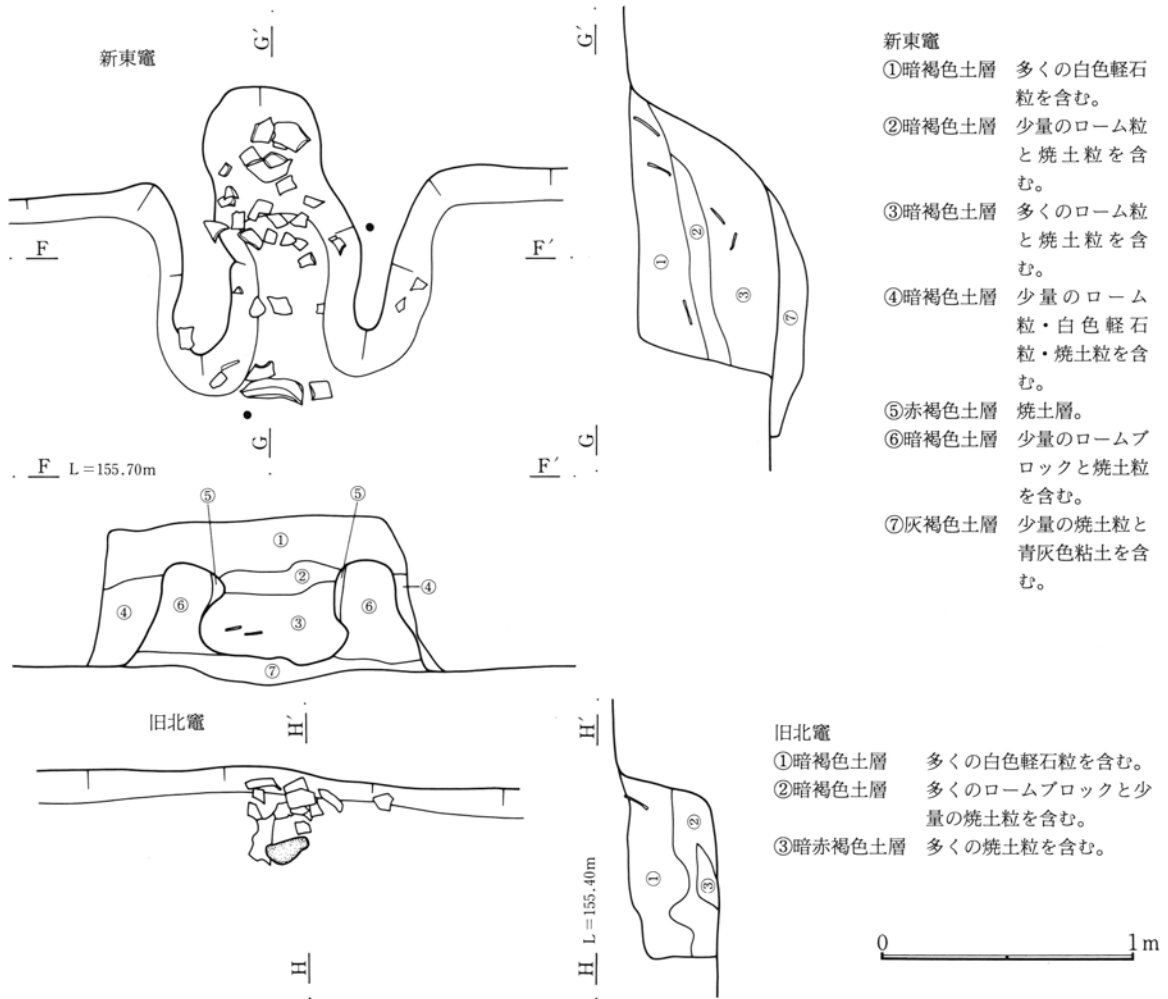
第3章 古墳時代の遺構と遺物



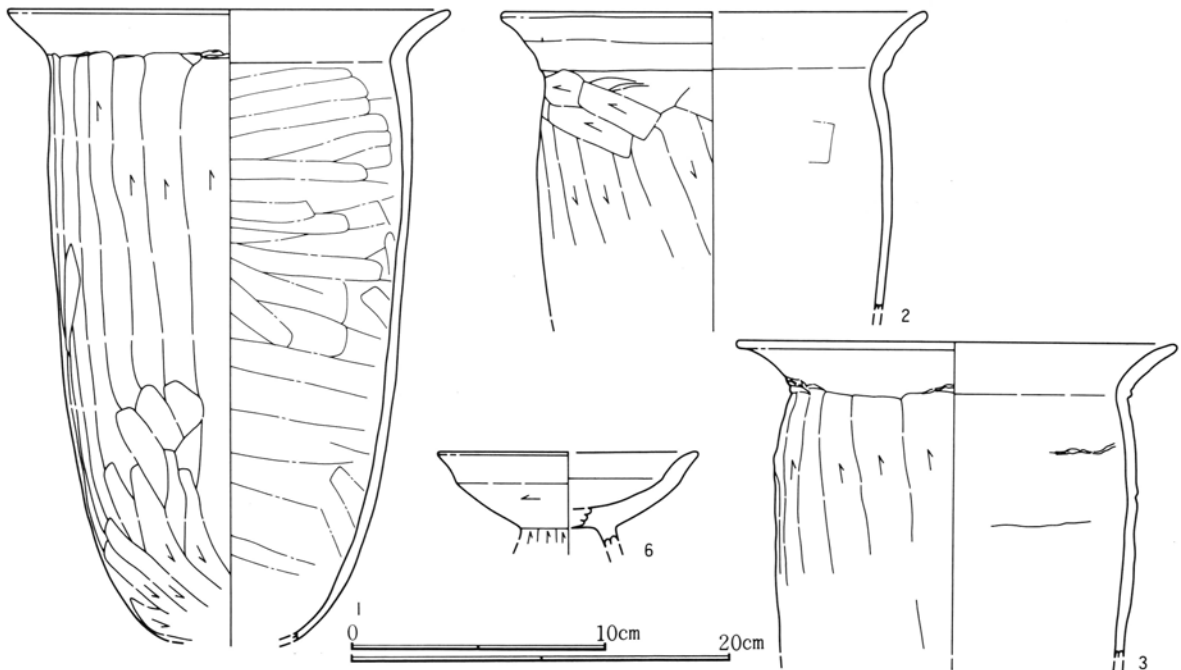
第37図 166号住居跡実測図(2)



第38図 166号住居跡床下実測図

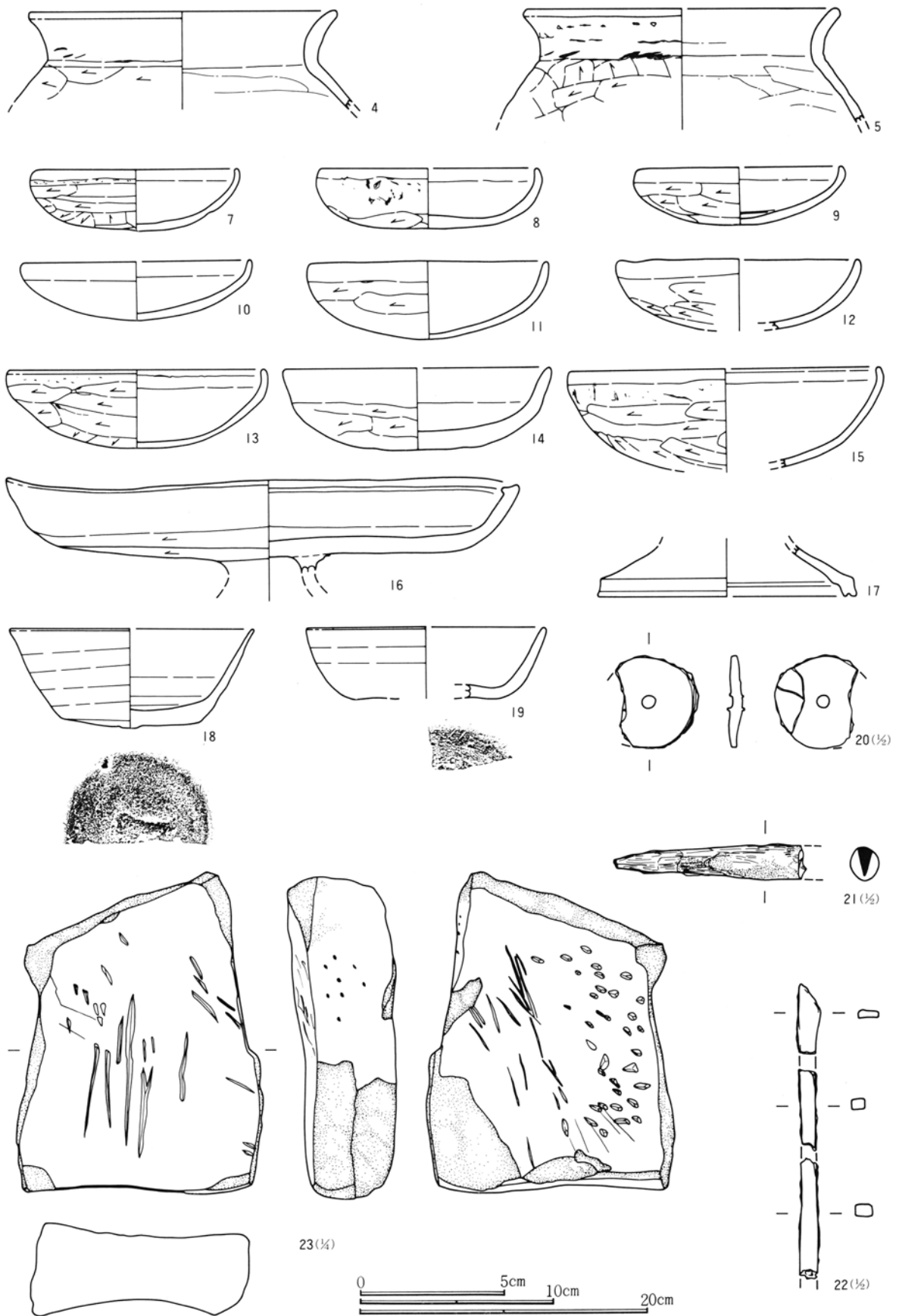


第39図 166号住居跡新東竈・旧北竈実測図

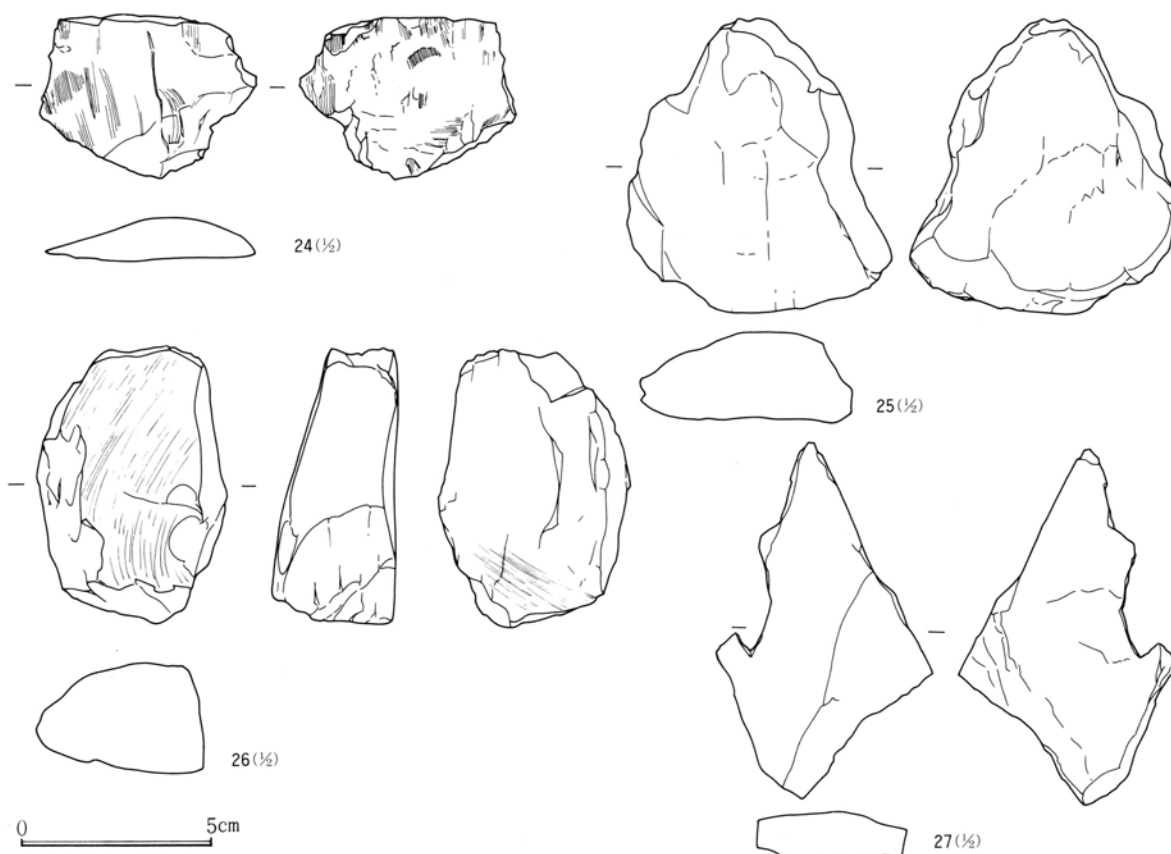


第40図 166号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第41図 166号住居跡出土遺物実測図(2)



第42図 166号住居跡出土遺物実測図(3)

166号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
40-1 79	土師器 甕	口～胴上 完・胴下半 1/2	口 23.6 高 — 底 —	①密、1mm前後の白色粒と2～3mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色、一部黒褐色	胴部外面強いヘラ削り。削りの単位が明瞭である。内面ナデにて器表面密。
40-2 79	土師器 甕	床面-6 口縁部1/3 胴部1/3残存	口(22.6) 高 — 底 —	①密、1～2mmの赤色粒を多量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。口縁部との境に段を持つ。口縁部の器肉が厚い。
40-3 79	土師器 甕	床面+8 口縁部1/3 胴部1/3残存	口 22.6 高 — 底 —	①密、1～2mmの砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。口縁部との境に段を持つ。
41-4	土師器 甕	床面+4 口縁部1/3 肩部1/3残存	口 21.3 高(6.3) 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	肩部ヘラ削り。砂粒の移動ほとんどなく器表面比較的密。内面ナデにて器表面密。
41-5	土師器 甕	床面+3 口縁部1/6 肩部1/3残存	口(21.7) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	肩部ヘラ削り。小さな砂粒が多く移動している。口縁部に輪積痕。
40-6	土師器 高 坏	床面+18 坏部1/3残存	口(10.4) 高 — 底 —	①やや粗、1～2mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	脚部外面幅の広いヘラ削り。坏底面ヘラ削り。ヘラの単位不明。内面ナデ。
41-7 79	土師器 坏	床面+84 ほぼ完形	口 10.6 高 3.2 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。ヘラの単位は明瞭である。内面ナデにて器表面密。
41-8 79	土師器 坏	床面+23 1/3残存	口(11.3) 高 3.1 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。ヘラ削りの単位は明瞭でない。体部はナデ、内面ナデにて器表面密。
41-9 79	土師器 坏	床面+3 1/3残存	口(10.6) 高 3.0 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。内面ナデにて器表面密。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

166号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考		
41-10 79	土器 器 坏	床面+32 1/2残存	口(11.9) 高 3.1 底 —	①密、1mm前後の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削りと思われるが、へらの単位不明。口縁部～内側底面ナデにて器表面密。硬質な焼成である。		
41-11 79	土器 器 坏	床面+24 ほぼ完形	口 12.5 高 4.1 底 —	①密、1mm以下の少量の砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へら削りであるが胎土がやや粉状を呈しておりへらの単位不明瞭。内面ナデにて器表面密。やや雑な感じの坏である。		
41-12	土器 器 坏	床面+17 1/2残存	口(12.5) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③内面橙色、外面にぶい赤褐色	底面へら削り。砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。内面ナデにより器表面密でやや光沢あり。		
41-13 79	土器 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 13.4 高 4.1 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。口縁下部はナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。		
41-14	土器 器 坏	床面+32 1/2残存	口(14.0) 高 — 底 —	①やや粗、1～3mmの砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へら削り。器表面やや粗い。内面ナデにて器表面密。器肉が特に厚い。		
41-15	土器 器 坏	床面+33 1/2残存	口(16.4) 高 — 底 —	①密 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。体部ナデ。内面ナデにて器表面密。		
41-16 79	須恵器 高 坏	床面+8 1/2残存、高 台欠	口 26.6 高 — 底 —	①密、1mm前後の長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	体部下半～底面へら削り。口唇部は平らで内傾し、中央部がやや凹状を呈する。		
41-17	須恵器 高 坏	床面+17 破片(脚部)	口 — 高 — 底 —	①密、1～2mmの長石粒を含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	脚下端中央部に一条の凹線あり。		
41-18 79	須恵器 坏	床面+6 1/2残存	口(12.6) 高 5.1 底 7.0	①密、1mm前後の石英と長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	底面へら削り。体部クロロ目。底部の器肉が厚くやや丸底である。		
41-19	須恵器 坏	床面+26 破片	口(12.4) 高 — 底 —	①やや粗、2～3mmの片岩粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面の残りが少なく明確でないがへら削りと思われる。		
41-20 113	鉄製品 紡錘車	床面+26 1/2残存	長 3.2 厚 0.3	幅 — 重 6.6	紡茎が欠けていてその部分に痕跡が残っている。紡輪であり鉄製紡輪としては最も小さなものである。		
41-21 113	鉄製品 刀子	床面+6	長 (6.2) 厚 1.0	幅 1.2 重 9.1	刀子の茎部分。外側は全て木質に被われている。		
41-22 113	鉄製品 鉄茎	床面+45	長 — 厚 0.5	幅 0.8 重 5.6	鉄鎌の茎部分の破片と思われる。錆化がはげしい。		
41-23 120	石製品 砥石	床面+12	長 22.3 厚 4.4	幅 16.5 重 3040	砂岩。3側面と底面を砥石として使用している。砥石面全体に刃物でつけられたような痕跡が残る。		
42-24 122	原石	床面+31	長 4.3 厚 1.1	幅 5.7 重 27.8	滑石片岩。加工を目的として集落内に持ち込まれた原石と思われる。加工痕なし。		
42-25 122	原石	床面+34	長 7.8 厚 2.3	幅 7.0 重 155	滑石片岩。加工を目的として集落内に持ち込まれた原石と思われる。加工痕なし。		
42-26 122	原石	床面+30	長 7.4 厚 2.9	幅 5.1 重 148	滑石片岩。紡錘車等を作るために集落内に持ち込まれた原石と思われる。一部に荒砥削りの加工痕あり。		
42-27 122	原石	床面直上	長 9.4 厚 1.4	幅 5.8 重 62	滑石片岩。加工を目的として集落内に持ち込まれた原石と思われる。加工痕なし。		
遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)				石 材 ・ 備 考
28	123	こも編み石	長 16.0	幅 6.1	厚 3.1	重 420	緑簾緑泥片岩
29	123	こも編み石	長 14.2	幅 5.9	厚 3.3	重 370	石墨緑泥片岩
30	123	こも編み石	長 12.4	幅 5.1	厚 3.0	重 260	緑簾緑泥片岩
31	123	こも編み石	長 16.0	幅 5.7	厚 3.7	重 430	絹雲母石墨片岩
32	123	こも編み石	長 17.4	幅 7.0	厚 5.5	重 800	石墨緑泥片岩
33	123	こも編み石	長 16.1	幅 5.5	厚 5.6	重 740	緑簾緑泥片岩
34	123	こも編み石	長 17.5	幅 6.3	厚 5.0	重 840	絹雲母石墨緑泥片岩
35	123	こも編み石	長 10.8	幅 4.0	厚 2.4	重 185	緑簾緑泥片岩
36	123	こも編み石	長 13.2	幅 5.3	厚 4.5	重 430	緑簾緑泥片岩
37	123	こも編み石	長 15.2	幅 8.1	厚 2.6	重 540	絹雲母石墨片岩
38	123	こも編み石	長 12.4	幅 4.4	厚 3.8	重 270	絹雲母石墨片岩
39	123	こも編み石	長 13.4	幅 5.8	厚 3.8	重 410	絹雲母石墨片岩
40	123	こも編み石	長 13.2	幅 5.5	厚 3.2	重 340	緑簾緑泥片岩
41	123	こも編み石	長 13.3	幅 4.2	厚 2.9	重 510	絹雲母石墨片岩

166号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	図版番号	器種	法	量(cm)(g)	石材・備考
42	123	こも編み石	長 19.1 幅 5.3 厚 4.1 重 280	緑簾緑泥片岩	
43	123	こも編み石	長 13.6 幅 7.6 厚 2.7 重 400	絹雲母石墨片岩	
44	123	こも編み石	長 12.4 幅 5.7 厚 2.9 重 350	絹雲母石墨片岩	
45	123	こも編み石	長 15.4 幅 5.6 厚 2.6 重 310	絹雲母石墨片岩	
46	123	こも編み石	長 12.3 幅 5.6 厚 2.9 重 275	絹雲母石墨片岩	
47	123	こも編み石	長 17.6 幅 7.3 厚 1.9 重 345	絹雲母石墨緑泥片岩	

178号住居跡 (第43・44図、図版17・18・79・123)

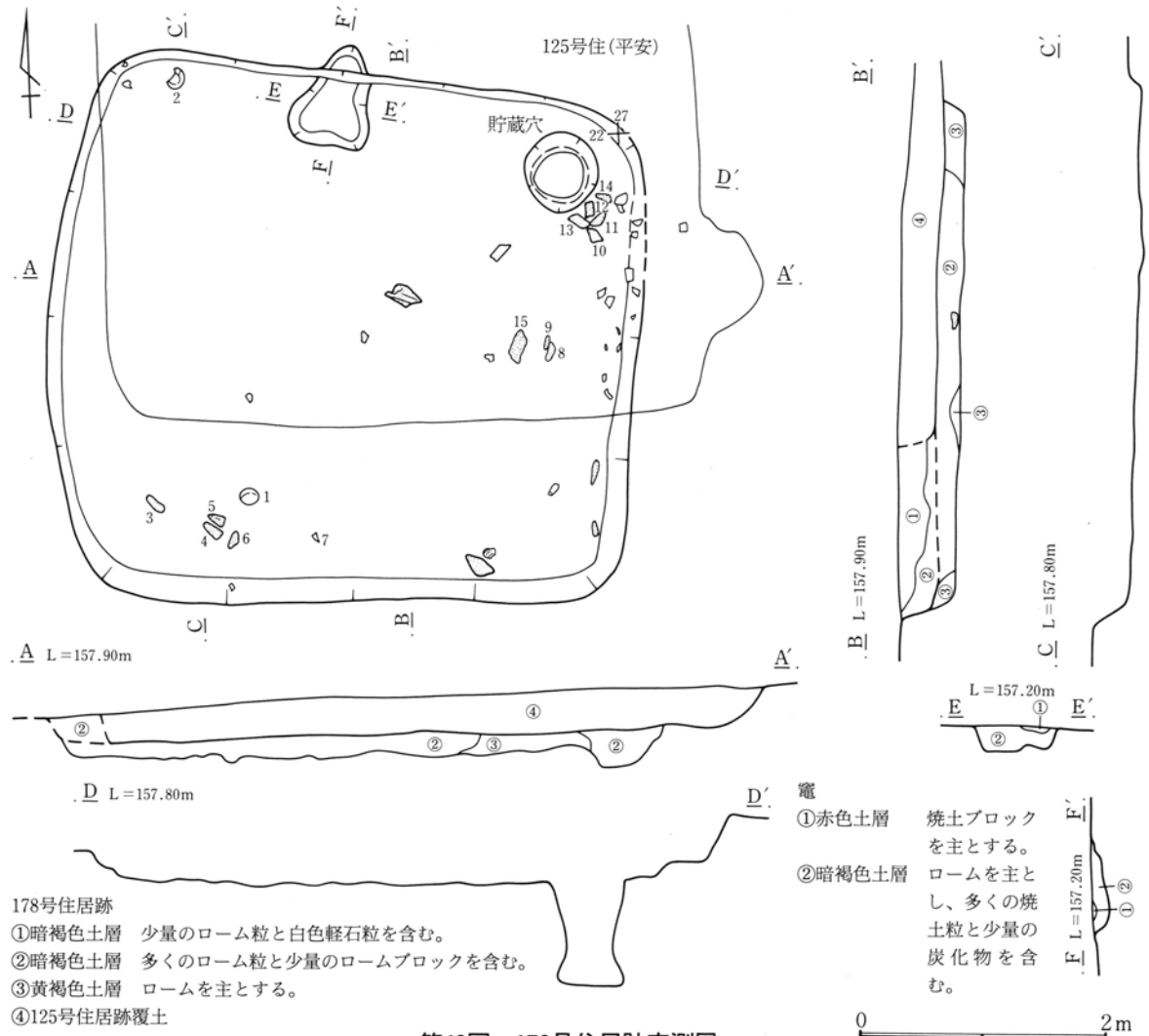
位置 本住居跡は第4次調査区にあり、22-27グリッドに位置する。

概要 北側約2/3の範囲で平安時代の125号住居と重複しており、125号住居により床面から上の部分を削り取られている。また全体に攪乱を受けているためか、明瞭な床面の検出はできない。竈は北壁面に造られていたが、大部分が削られてほとんど残っていない。

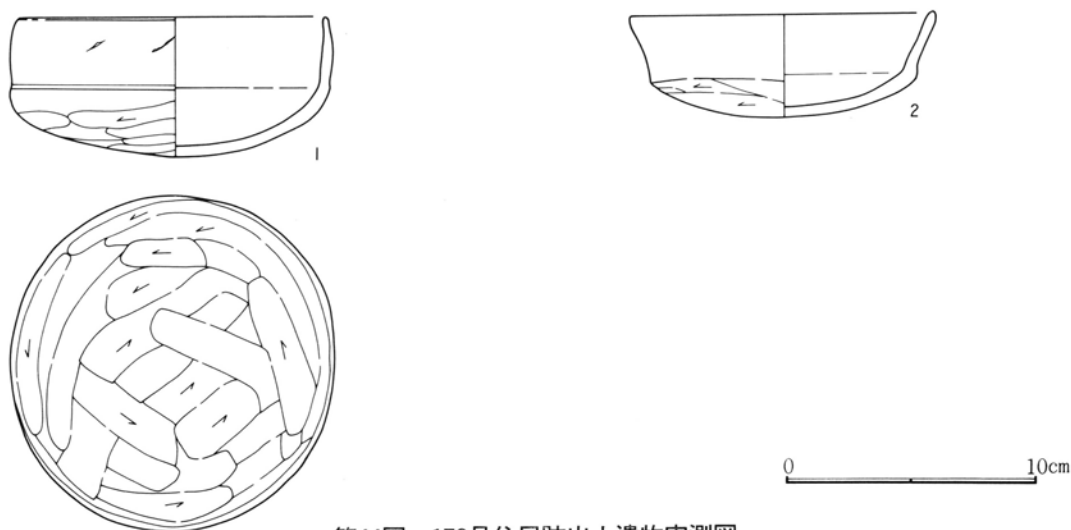
構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。貯蔵穴が竈の右側に掘られていたが、柱穴は掘られていない。

規模 東西4.58m、南北4.24mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で39cmである。貯蔵穴は径64cm 深さ83cmである。

遺物 図示できたのは土師器の坏2点である。



第3章 古墳時代の遺構と遺物



第44図 178号住居跡出土遺物実測図

178号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
44-1 79	土師器 杯	床面+5 完形	口 12.2 高 5.4 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。稜は低く口縁部が長く直立する。
44-2 79	土師器 杯	床面+4 1/2残存	口 12.0 高 4.0 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。胎土が粉状を呈しており削りの単位不明瞭。口縁部に少し黒斑あり。
遺物番号	図版番号	器種	法	量(cm)(g)	石材・備考
3	123	こも編み石	長 16.7 幅 5.8 厚 4.5 重 720	緑簾緑泥片岩	
4	123	こも編み石	長 15.2 幅 8.0 厚 3.6 重 650	点紋絹雲母石墨片岩 片側面に凹状を呈する	
5	123	こも編み石	長 13.6 幅 5.9 厚 2.9 重 360	絹雲母石墨片岩	
6	123	こも編み石	長 14.0 幅 6.8 厚 4.3 重 610	点紋絹雲母石墨片岩	
7	123	こも編み石	長 16.6 幅 7.6 厚 2.8 重 310	絹雲母石墨片岩	
8	123	こも編み石	長 15.0 幅 7.5 厚 2.4 重 445	絹雲母石墨片岩	
9	123	こも編み石	長 10.6 幅 5.0 厚 3.1 重 270	緑簾緑泥片岩	
10	123	こも編み石	長 15.6 幅 9.7 厚 4.2 重 885	絹雲母石墨片岩 片側面に凹状を呈する	
11	123	こも編み石	長 17.6 幅 8.6 厚 3.0 重 805	点紋緑泥片岩	
12	123	こも編み石	長 12.9 幅 7.1 厚 3.9 重 405	絹雲母石墨片岩	
13	123	こも編み石	長 14.3 幅 9.6 厚 3.2 重 710	絹雲母石墨片岩	
14	123	こも編み石	長 13.7 幅 6.1 厚 3.9 重 525	絹雲母石墨片岩	
15	123	こも編み石	長 14.8 幅 7.1 厚 4.1 重 700	絹雲母石墨片岩	

193号住居跡 (第45~47図、図版18・80)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、14・15—31グリッドに位置する。

概要 南西部分の低くなるなだらかな傾斜面に位置し、北東部分で床面と壁面がわずかに残っているが、南西部分の壁面と床面は残っていない。床下部分の調査から住居範囲の確認ができた。確認できた床面範囲は線で示した。このように残りの悪い住居である。

構造 わずかに残っている床面は少量のローム粒と暗褐色土の混入した土で造られている。柱穴が4本、貯蔵穴が竈の右側に掘られている。北東の柱穴4の北に小穴が掘られており、この小穴は南東コーナー部分の貯蔵穴より竈に近いので、貯蔵穴の可能性も高いがここでは小穴と呼称した。

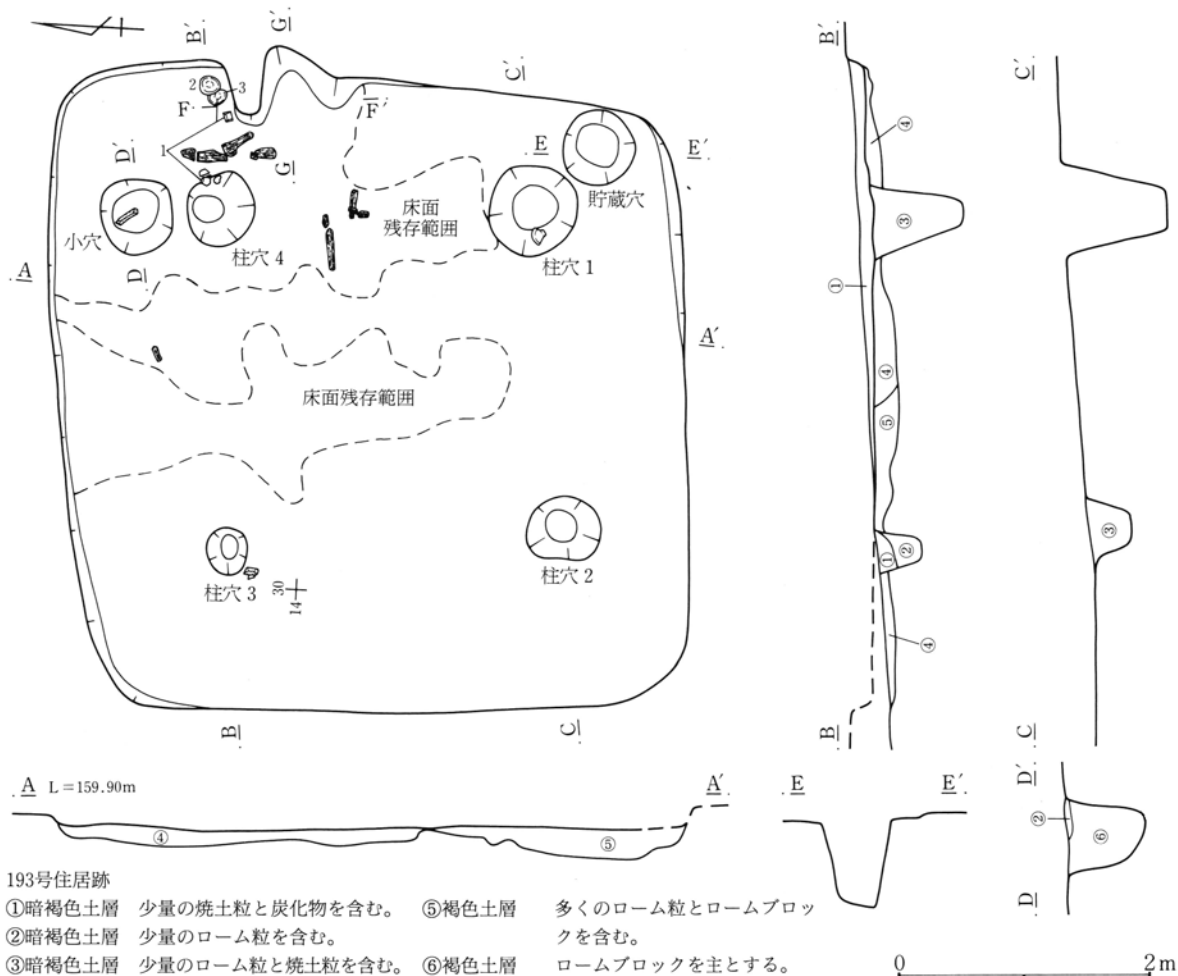
規模 東西5.13m、南北4.92mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で17cmである。柱穴1は径71cm深さ81cm、柱穴2は径59cm深さ51cm、柱穴3は径34cm深さ40cm、柱穴4は径53cm深さ74cmである。貯蔵穴は径68cm深さ64cm、小穴は径65cm深さ61cmである。

遺物 竈の左袖外側にほぼ完形の杯が2点、また左袖付近から炭が出土している。

(竈)

位置 住居東壁面北寄りに造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

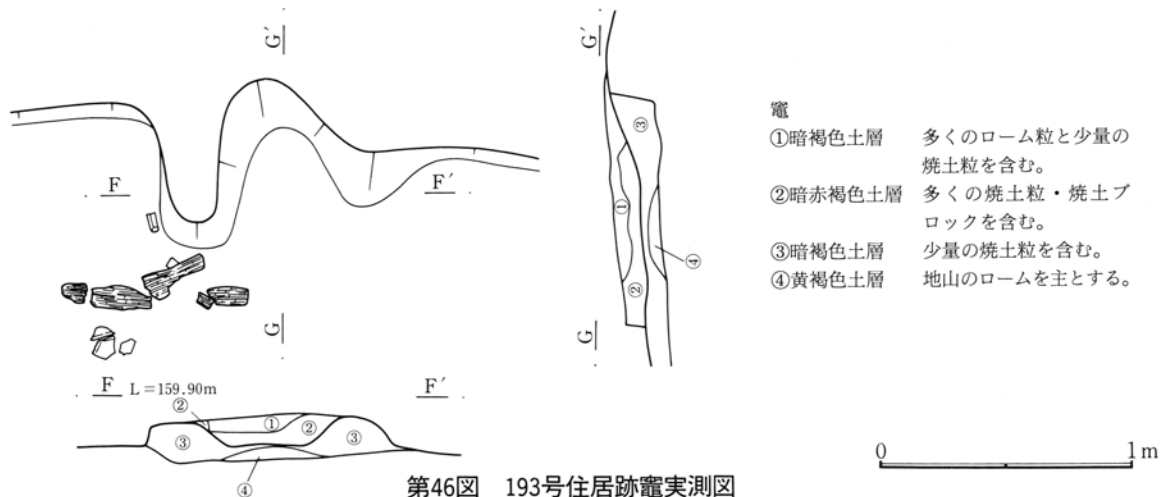
概要 住居同様に残りが悪く、竈の大部分は削り取られて残っていない。左袖部分の一部が残っているが、右袖部分はほとんど残っていない。残りの悪い竈であるが、竈内より多くの焼土粒が出土している。規模等は不明である。



193号住居跡

- | | | | |
|--------|---------------------|-------|---------------------|
| ①暗褐色土層 | 少量の焼土粒と炭化物を含む。 | ⑤褐色土層 | 多くのローム粒とロームブロックを含む。 |
| ②暗褐色土層 | 少量のローム粒を含む。 | ⑥褐色土層 | ロームブロックを主とする。 |
| ③暗褐色土層 | 少量のローム粒と焼土粒を含む。 | | |
| ④暗褐色土層 | 少量のローム粒とロームブロックを含む。 | | |

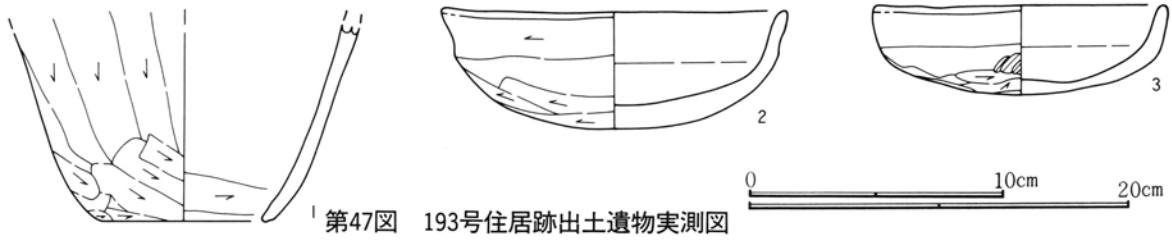
第45図 193号住居跡実測図



- 竈
- | | |
|---------|--------------------|
| ①暗褐色土層 | 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。 |
| ②暗赤褐色土層 | 多くの焼土粒・焼土ブロックを含む。 |
| ③暗褐色土層 | 少量の焼土粒を含む。 |
| ④黄褐色土層 | 地山のロームを主とする。 |

第46図 193号住居跡竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



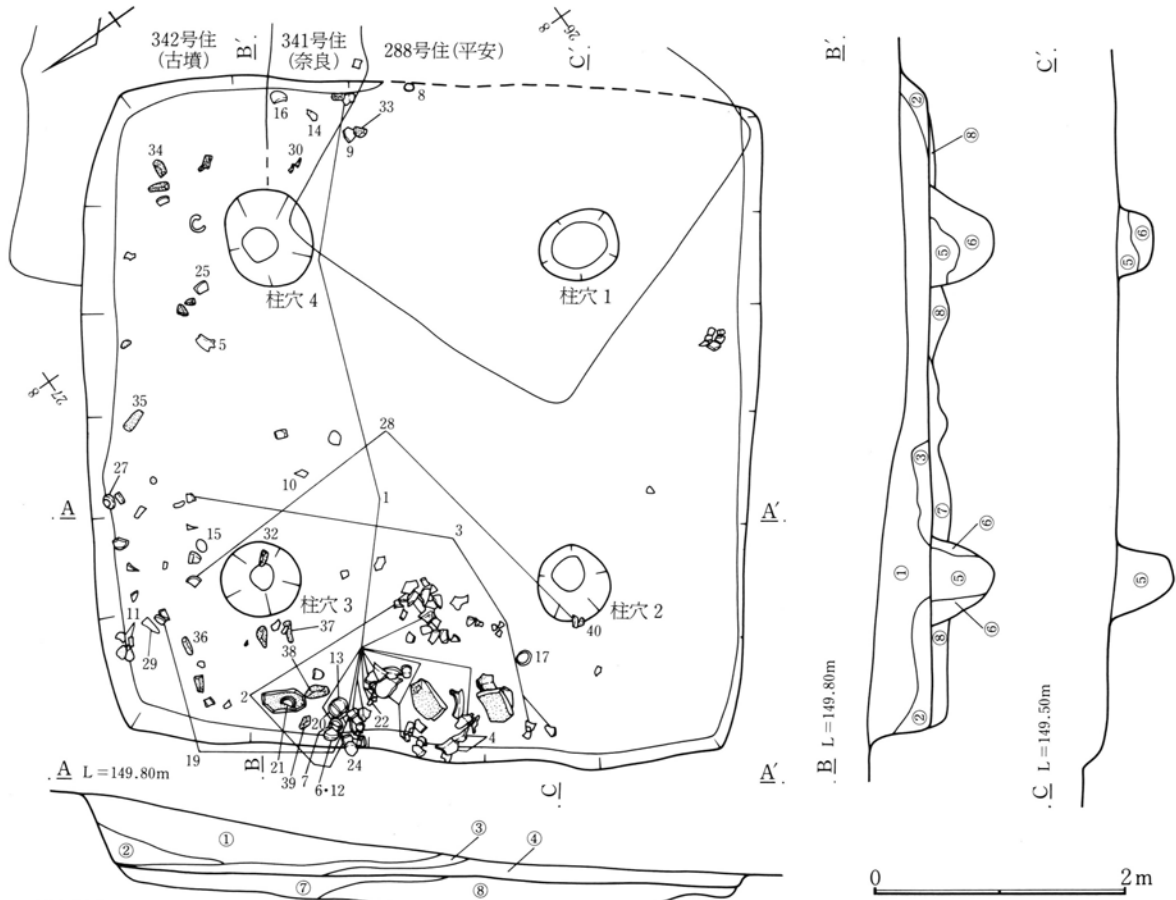
第47図 193号住居跡出土遺物実測図

193号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
47-1	土師器 甔	床面直上 底部1/2	口 — 高 — 底 —	①粗、2~3mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	胴部外面へら削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 胴部内側下端部へら削り。
47-2 80	土師器 坏	床面-3 ほぼ完形	口 13.4 高 4.6 底 —	①密、1~2mmの砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。底面の周辺部ナデ。口縁部横ナデ。全体に器肉が厚く洗練されていない。 内面の器表面が部分的に剥落している。
47-3 80	土師器 坏	床面-2 完形	口 11.3 高 3.5 底 —	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。砂粒の移動はなく粘土がサラサラ状にめくれている。口縁部~内面ナデ。 全体に器肉が厚く重量感がある。

286号住居跡 (第48~50図、図版18・19・80・81・113・115・123)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、27-8グリッドに位置する。



286号住居跡

- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量の白色軽石粒とローム粒を含む。
- ③暗褐色土層 少量の白色軽石粒と焼土粒を含む。
- ④暗褐色土層 少量のローム粒とロームブロックを含む。
- ⑤暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ⑥褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑦暗褐色土層 ローム粒・ロームブロック・焼土粒の混入層。
- ⑧黄褐色土層 ローム粒とロームブロックを主とする。

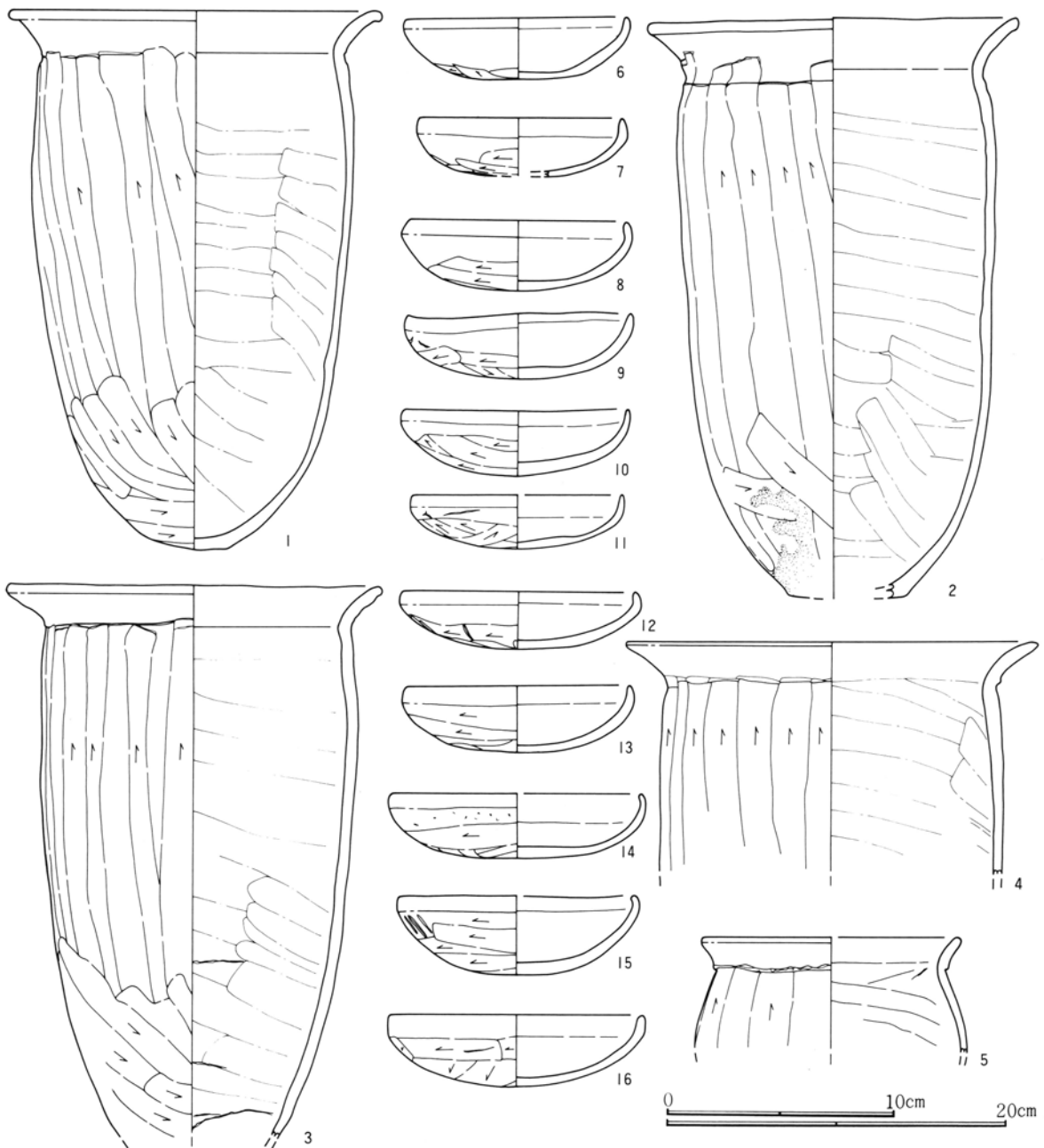
第48図 286号住居跡実測図

概要 本住居を含めて4軒が重複していた。本住居は北東部分で古墳時代の342号住居を床下部分まで掘り込み、東側部分を奈良時代の341号住居により覆土上面を、また平安時代の288号住居により床面付近まで掘り込まれていた。4軒の新旧関係は342→286→341→288号住居である。竈はどこに造られたのか確認できないが、288号住居の竈と同じ位置に造られていた可能性が考えられる。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。柱穴は4本掘られていたが、貯蔵穴は掘られていない。

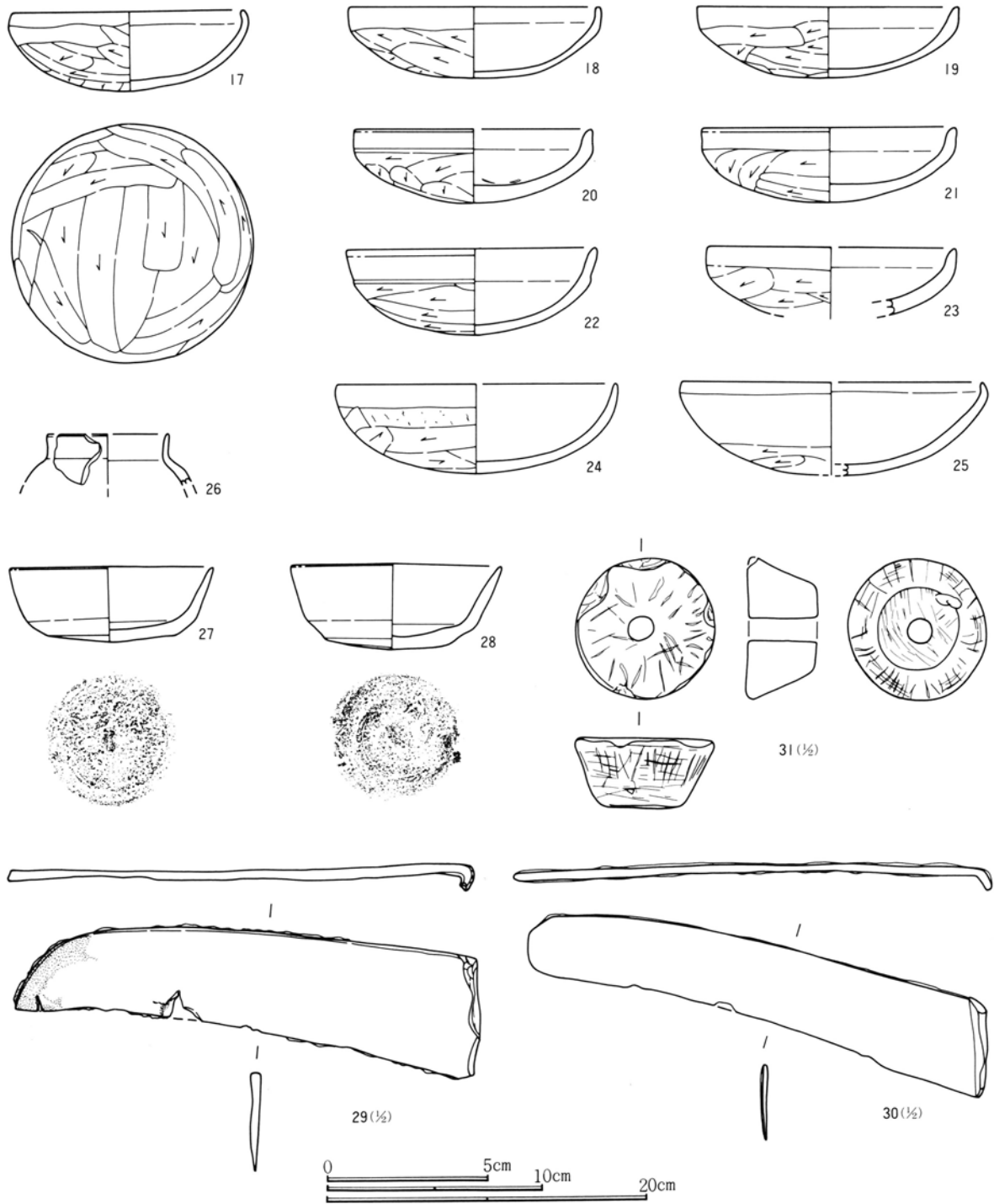
規模 東西5.26m、南北5.40mである。壁高は残りの良い北壁面部分で65cmである。柱穴1は径66cm深さ39cm、柱穴2は径60cm深さ52cm、柱穴3は径62cm深さ54cm、柱穴4は径75cm深さ53cmである。

遺物 西壁付近より土師器の甕や坏が多く出土している。



第49図 286号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第50図 286号住居跡出土遺物実測図(2)

286号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
49-1 80	土 師 器 甕	床面直上 ほぼ完形	口 21.8 高 31.6 底 4.6	①やや粗、1~3mmの砂粒と片岩粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面橙色、外面黒褐色	胴部外面ヘラナデ。多くの砂粒が目立つが移動は少ない。 内面ナデにて器表面密。
49-2 80	土 師 器 甕	床面+8 口縁部完形 胴部 $\frac{2}{3}$	口 21.8 高 34.0 底 6.9	①やや粗、1~2mmの砂粒と片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラナデ。ヘラの単位は明瞭。 砂粒の移動は少ない。 内面ナデにて器表面密。

286号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
49-3 80	土師器 甕	床面+8 口~胴上 $\frac{3}{4}$ 胴下部 $\frac{1}{4}$	口 21.8 高 — 底 —	①やや粗、1~2mmの砂粒と片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③口縁部橙色、外面黒褐色	胴部外面ヘラナデ、ヘラの単位は明瞭。砂粒の移動は少ない。内面ナデにて器表面密。
49-4 80	土師器 甕	床面+18 口縁ほぼ完 胴上部 $\frac{3}{4}$	口 24.2 高 — 底 —	①粗、1~2mmの砂粒を大量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面強いヘラ削り、砂粒が移動し器表面やや粗い。口縁部との境に段を持つ。
49-5 80	土師器 小型甕	床面+11 口縁~ 胴上部 $\frac{1}{3}$	口(14.8) 高 — 底 —	①密、1mm前後の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り。頸部に段差を持つ。内面ナデにより器表面密。
49-6 80	土師器 坏	床面+25 完形	口 9.7 高 2.7 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色、表面の多く黒色	底面ヘラ削り。底部外面も含めた器表面全体に黒漆が塗布されている。
49-7 80	土師器 坏	床面+24 底部の一部 欠、他完形	口 9.1 高 2.6 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。口縁部~内面ナデにより器表面密。口縁外面~内側底面に黒漆。
49-8 80	土師器 坏	床面+12 ほぼ完形	口 9.7 高 3.2 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。内外面に黒漆は認められない。
49-9 80	土師器 坏	床面+11 $\frac{3}{4}$ 残存	口 9.8 高 2.9 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。口縁部の内屈は少ない。全体にゆがんでいる。
49-10 80	土師器 坏	床面+7 ほぼ完形	口 9.8 高 2.9 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。底部外面に吸炭による黒斑あり。
49-11 80	土師器 坏	床面+12 $\frac{3}{4}$ 残存	口(9.1) 高 2.4 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。特に小さな坏である。
49-12 80	土師器 坏	床面+25 ほぼ完形	口 10.2 高 2.5 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。口縁部が大きく内屈している。
49-13 80	土師器 坏	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口 9.8 高 3.0 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。胎土が少し粉状を呈している。
49-14 80	土師器 坏	床面+3 $\frac{1}{2}$ 残存	口(11.0) 高 2.8 底 —	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。内面ナデにて器表面密。
49-15 80	土師器 坏	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口(10.3) 高 3.5 底 —	①密 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胎土が粉状を呈しておりヘラの単位は明瞭でない。
49-16 80	土師器 坏	床面+1 $\frac{1}{2}$ 残存	口 11.1 高 3.1 底 —	①密、多くの小さな雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。口縁部横ナデ。内面ナデ。
50-17 80	土師器 坏	床面+17 ほぼ完形	口 10.8 高 3.7 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。内側底面の器表面密でやや光沢を持つ。
50-18 80	土師器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口 11.6 高 3.3 底 —	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。口縁~内面器表面密。黒斑全く認められず。
50-19 80	土師器 坏	床面+6 $\frac{1}{2}$ 残存	口 11.9 高 3.3 底 —	①密、多くの小さな雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。内面の器表面密でやや光沢を持つ。全体に赤味の強い色調に特色がある。
50-20 80	土師器 坏	床面+8 $\frac{1}{2}$ 残存	口(10.8) 高 3.4 底 —	①密、多くの小さな雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。内側底面の器表面密でやや光沢を持つ。
50-21 80	土師器 坏	床面+28 $\frac{3}{4}$ 残存	口 11.6 高 3.4 底 —	①密、多くの小さな雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が移動し、器表面やや粗い。内側底面の器表面密でやや光沢を持つ。
50-22 80	土師器 坏	床面直上 $\frac{3}{4}$ 残存	口 11.4 高 4.0 底 —	①密、多くの小さな雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。内側底面の器表面特に密。

第3章 古墳時代の遺構と遺物
286号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考			
50-23 80	土師器 坏	覆土 口縁～体部 1/2残存	口(11.4) 高 — 底 —	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、削りが浅くヘラの単位明瞭でない。 内側底面の器表面密でやや光沢を持つ。 全体に器肉が厚い。			
50-24	土師器 坏	床面+32 1/2残存	口(13.0) 高 4.1 底 —	①密、1mm前後の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③赤褐色	底面ヘラ削り。体部ナデ。 全体に器表面は密である。 内面は赤味が強い。			
50-25	土師器 坏	床面+18 1/2残存	口(14.0) 高 — 底 —	①密、胎土が粉状を呈する ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。 内面ナデにて器表面密。 黒斑は全く認められない。			
50-26	須恵器 小型短頸 壺	カマド内 口縁部小片	口(8.0) 高 — 底 —	①密、1～2mmの砂粒を含む ②還元焰、硬質 ③灰色	内外面横ナデにより器表面密。			
50-27 81	須恵器 坏	床面+14 完形	口 9.4 高 3.6 底 6.0	①やや粗、1～3mmの長石粒を少 量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	底面ナデ、中央部にヘラ切り時にできる凸状部の痕跡 が残る。			
50-28 81	須恵器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 9.7 高 4.0 底 5.9	①やや粗、2～3mmの長石粒を多 く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	底面ナデ、ヘラ切りと思われる痕跡が多く残る。 3～6mmの大きな長石粒を少量含む。			
50-29 113	鉄製品 鎌	床面+8 ほぼ完形	長 14.5 幅 3.8 厚 0.3 重 32.9		鎌のほぼ完形品である。			
50-30 113	鉄製品 鎌	床面+4 完形	長 14.9 幅 2.9 厚 0.3 重 31.6		鎌の完形品である。 使用による刃部の目減りは少ない。			
50-31 115	石製品 紡錘車	床面+15 ほぼ完形	径 4.3/2.5 孔径 0.7 厚 2.2 重 58.9 滑石片岩		広面と側面に太いノミによる打痕。狭面は磨かれて光 沢を持つ。広面中央部がやや凹状を呈する。			
遺物番号	図版番号	器種	法量 (cm) (g)					石材・備考
32	123	こも編み石	長 13.1	幅 5.6	厚 1.8	重 240	点紋絹雲母石墨片岩	
33	123	こも編み石	長 13.7	幅 8.7	厚 3.1	重 625	絹雲母石黒片岩	
34	123	こも編み石	長 13.8	幅 6.6	厚 3.4	重 460	絹雲母石墨片岩	
35	123	こも編み石	長 17.0	幅 7.0	厚 3.2	重 700	絹雲母石墨片岩	
36	123	こも編み石	長 16.0	幅 6.3	厚 3.4	重 555	絹雲母石墨緑泥片岩	
37	123	こも編み石	長 19.5	幅 6.9	厚 2.8	重 650	絹雲母石墨片岩	
38	123	こも編み石	長 16.0	幅 8.3	厚 4.5	重 850	絹雲母石黒片岩	
39	123	こも編み石	長 14.1	幅 5.6	厚 2.4	重 270	絹雲母石墨片岩	
40	123	こも編み石	長 13.6	幅 5.5	厚 4.1	重 510	点紋緑泥片岩	

291号住居跡 (第51～53図、図版19・81)

位置 本住居跡は第6次調査区にあり、21・22-5グリッドに位置する。

概要 調査区の中で最も低地に位置し、地山のロームは流されたためかほとんど残っていない。当住居の西側は西谷川となっている。住居の残りは悪く、低い西側は残っておらず北東部分は基本杭が打たれているために調査できない。

構造 床面は粘性の強い黒褐色土を主とした土で造られている。貯蔵穴は竈の右側に掘られているが、柱穴は確認できない。

規模 東西不明、南北5.12mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で29cmである。貯蔵穴は径96cm深さ27cmである。

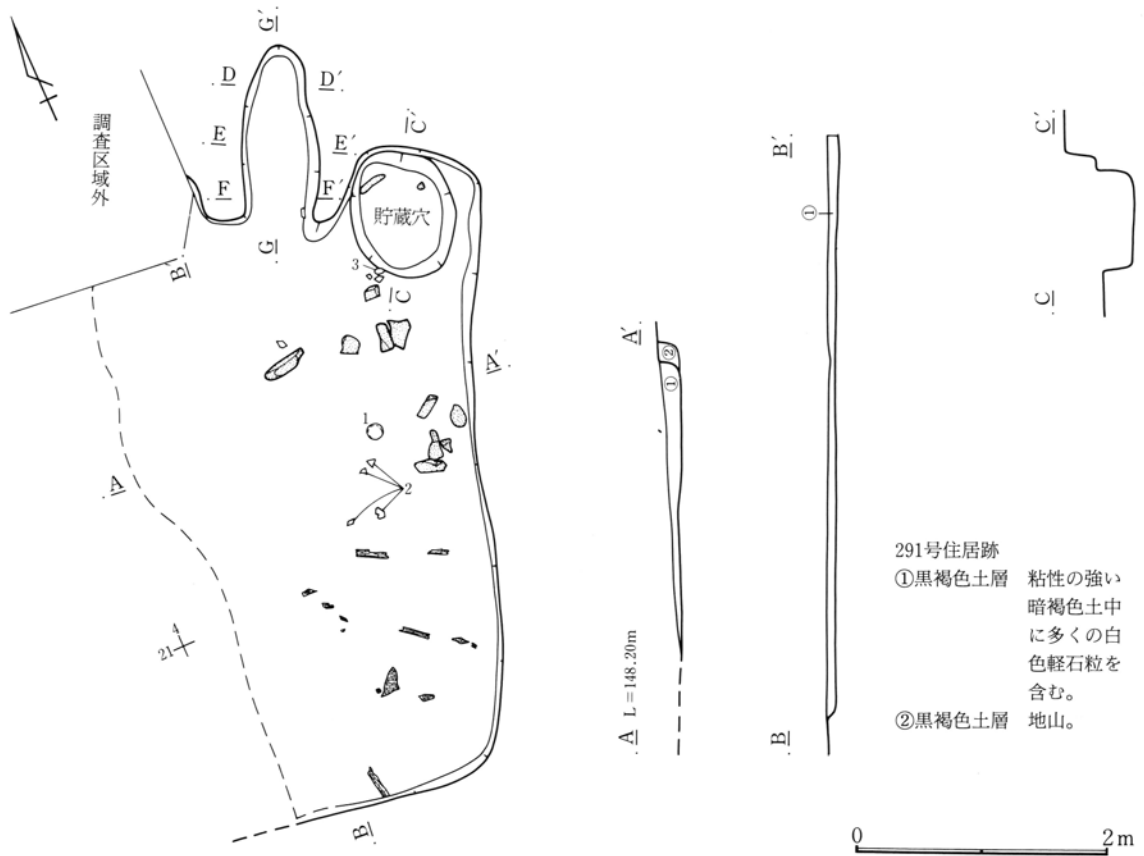
遺物 出土量は少なく、破片を含め総数で16点である。

(竈)

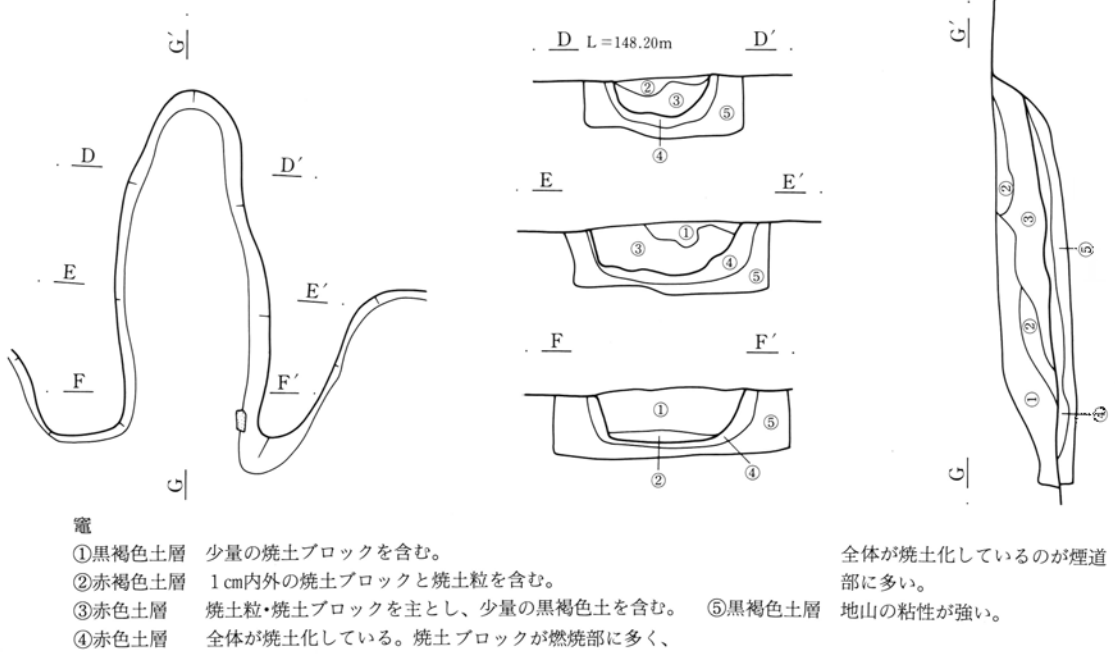
位置 住居北壁面に造られている。燃焼部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

概要 袖部分は明瞭ではないが、竈の大部分は地山の土が粘土質のためか壁面を掘り込んで造られていたものと思われる。竈内から大量の焼土粒が出土し、また竈全体が焼けて焼土化している。

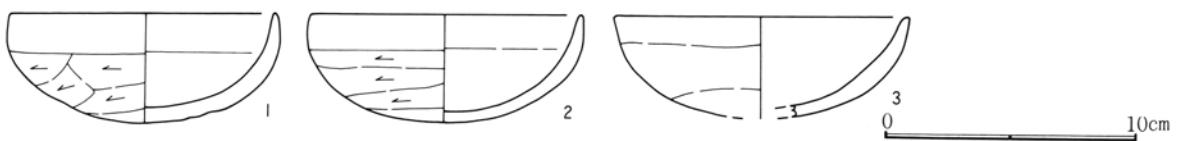
規模 煙道方向152cm、燃焼部幅56cmである。



第51図 291号住居跡実測図



第52図 291号住居跡竈実測図



第53図 291号住居跡出土遺物実測図

291号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
53-1 81	土師器 坏	床面直上 完形	口 10.4 高 4.3 底 -	①粗、3~6mmの長石粒や片岩粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面わずかにへら削り。大量の砂粒が目立つが移動は少ない。内面ナデ。内面にも多くの砂粒が目立つ。
53-2 81	土師器 坏	床面直上 1/2残存	口 10.6 高 4.2 底 -	①密、3~6mmの長石粒や片岩粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面わずかにへら削り。大量の砂粒が目立つが移動は少ない。内面ナデ。内面にも多くの砂粒が目立つ。
53-3	土師器 坏	床面直上 1/2残存	口 11.6 高 - 底 -	①粗、2~4mmの片岩粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	底面へら削り。大粒の片岩粒が目立つ。口縁部~内側底面横ナデ。

345号住居跡 (第54~56図、図版19・81)

位置 本住居跡は第6次調査区にあり、30-10グリッドに位置する。

概要 住居の大部分は古墳時代の346号住居の北側を床下部分まで掘り込んで造られている。規模の小さな住居である。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とする土で造られている。柱穴は掘られておらず、貯蔵穴が竈の右側に掘られている。

規模 東西3.63m、南北3.01mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で43cmである。貯蔵穴は径30cm 深さ46cmである。

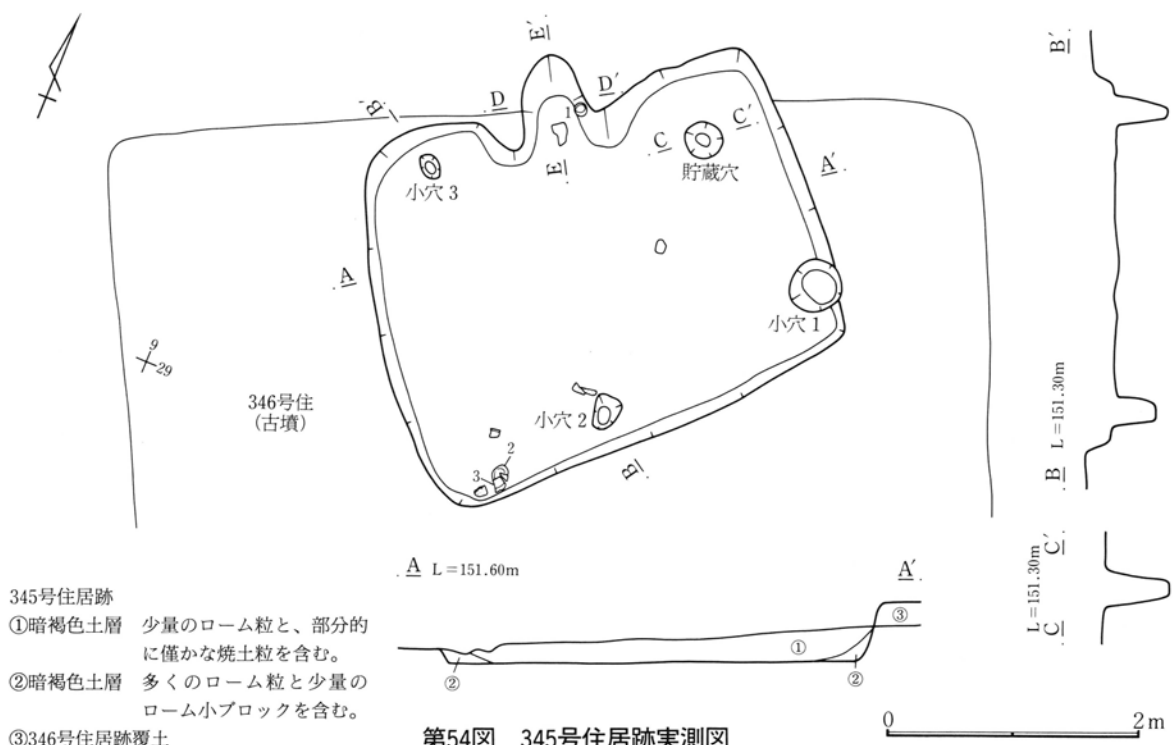
遺物 甕の破片は出土しているが、図示できたのは土師器の坏4点である。

(竈)

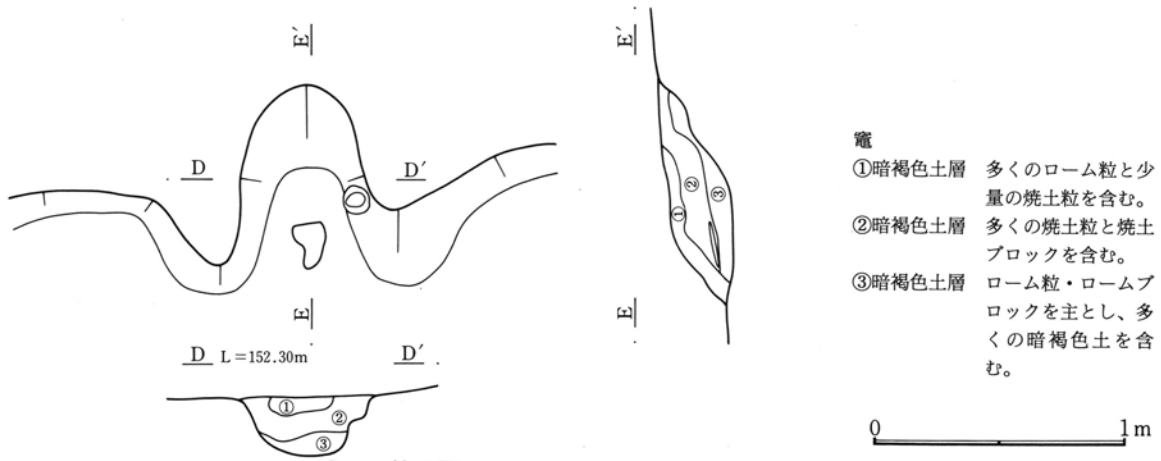
位置 住居北壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要 両袖部分は346号住居の覆土を用いており、新たに粘土を持ち込んだ様子は確認できない。そのためか残りは悪い。

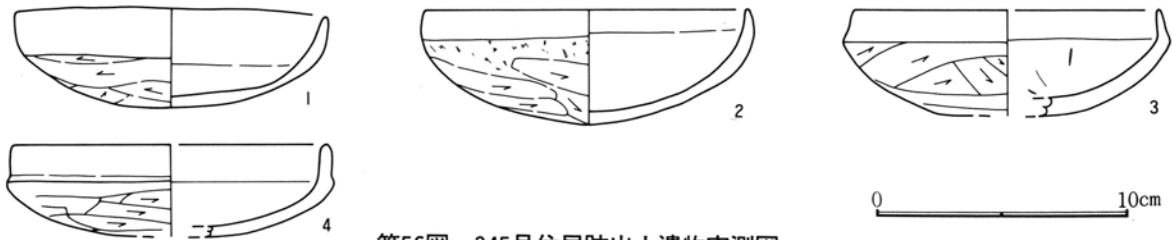
規模 煙道方向79cm、燃焼部幅46cmである。



第54図 345号住居跡実測図



第55図 345号住居跡竈実測図



第56図 345号住居跡出土遺物実測図

345号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
56-1 81	土師器 坏	竈内 完形	口 12.4 高 3.9 底 -	①密、少量の角閃石を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく底面比較的密。内面ナデにて器表面密。
56-2 81	土師器 坏	床面直上 1/2残存	口 12.8 高 4.6 底 -	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り。体部ナデ。内面ナデにて器表面密。固く焼成されている。
56-3	土師器 坏	床面+14 1/2残存	口(12.0) 高 - 底 -	①密、砂粒をほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部外面～内側底面黒漆。
56-4	土師器 坏	覆土 小破片	口(12.4) 高 - 底 -	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③浅黄橙色	底面ヘラ削り。口縁部外面～内側底面黒漆。

360号住居跡 (第57～59図、図版19)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、26-19グリッドに位置する。

概要 残りが悪く覆土の大部分が削り取られて残っていない。北側で同じ古墳時代の369号住居と重複している。重複関係は明瞭でないが、調査段階で本住居が新しいと判断された。また東側部分で3号掘立柱建物跡と重複しており、覆土を掘り込まれている。

構造 床面はほとんど残っていない。貯蔵穴や柱穴も掘られていない。

規模 東西3.08m、南北3.80mである。

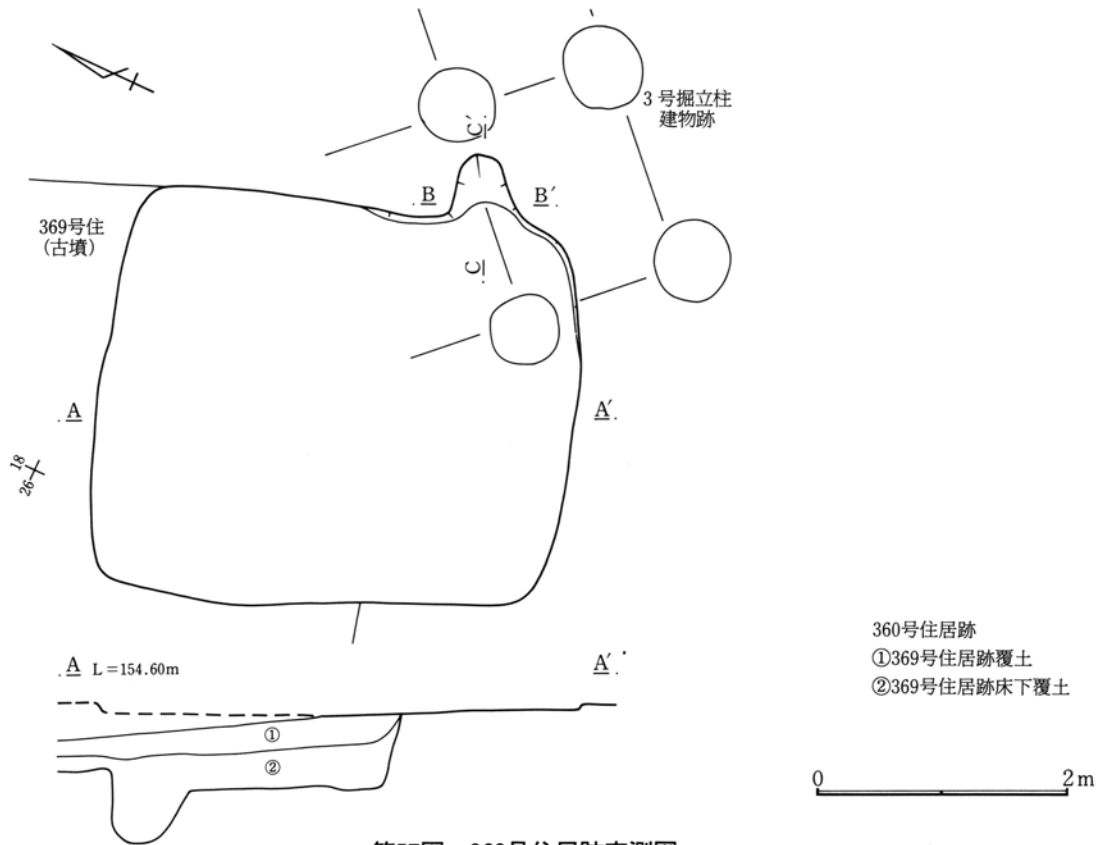
遺物 出土量は少なく、図示できたのは土師器の坏1点である。

(竈)

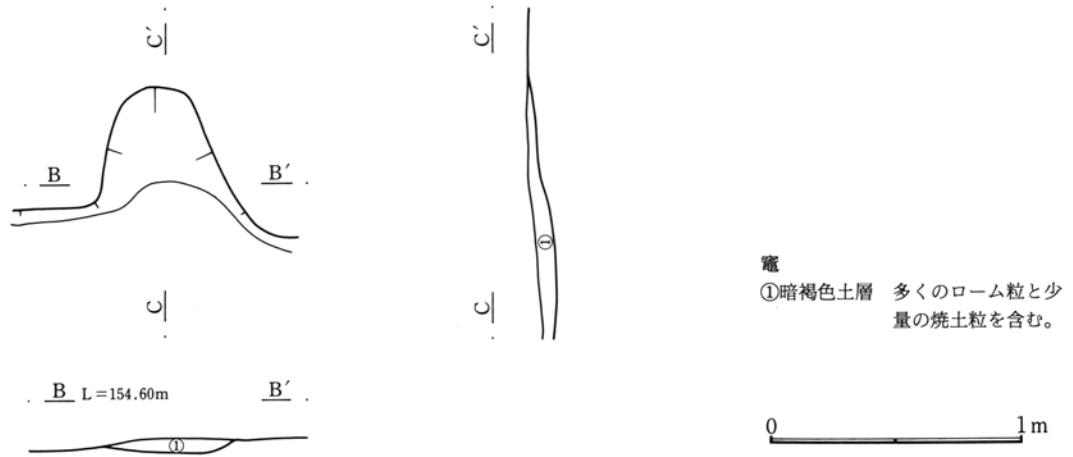
位置 住居東壁面に造られている。

概要 大部分が削り取られて残っておらず、燃焼下部が残っていた程度である。覆土中の焼土粒も僅かである。

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第57図 360号住居跡実測図



第58図 360号住居跡竈実測図



第59図 360号住居跡出土遺物実測図

360号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
59-1	土師器 坏	竈内 小破片	口(11.0) 高— 底—	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りであるが、ヘラの単位や方向不明。

365号住居跡 (第60~63図、図版20・81・120)

位置 本住居跡は第6次調査区にあり、28-12・13グリッドに位置する。

概要 残りの悪い住居であり、東側の床面や竈は残っていたが、西側の床面は残っていない。南側を流路と南北方向の23号溝により覆土上面が掘り込まれている。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。貯蔵穴が竈の右側に掘られており、貯蔵穴をL字形に囲むように帯状の僅かな高まりが造られている。柱穴は掘られていない。

規模 東西4.42m、南北4.38mである。壁高は残りの良い東壁面部分で18cmである。貯蔵穴は径62cm深さ66cmである。

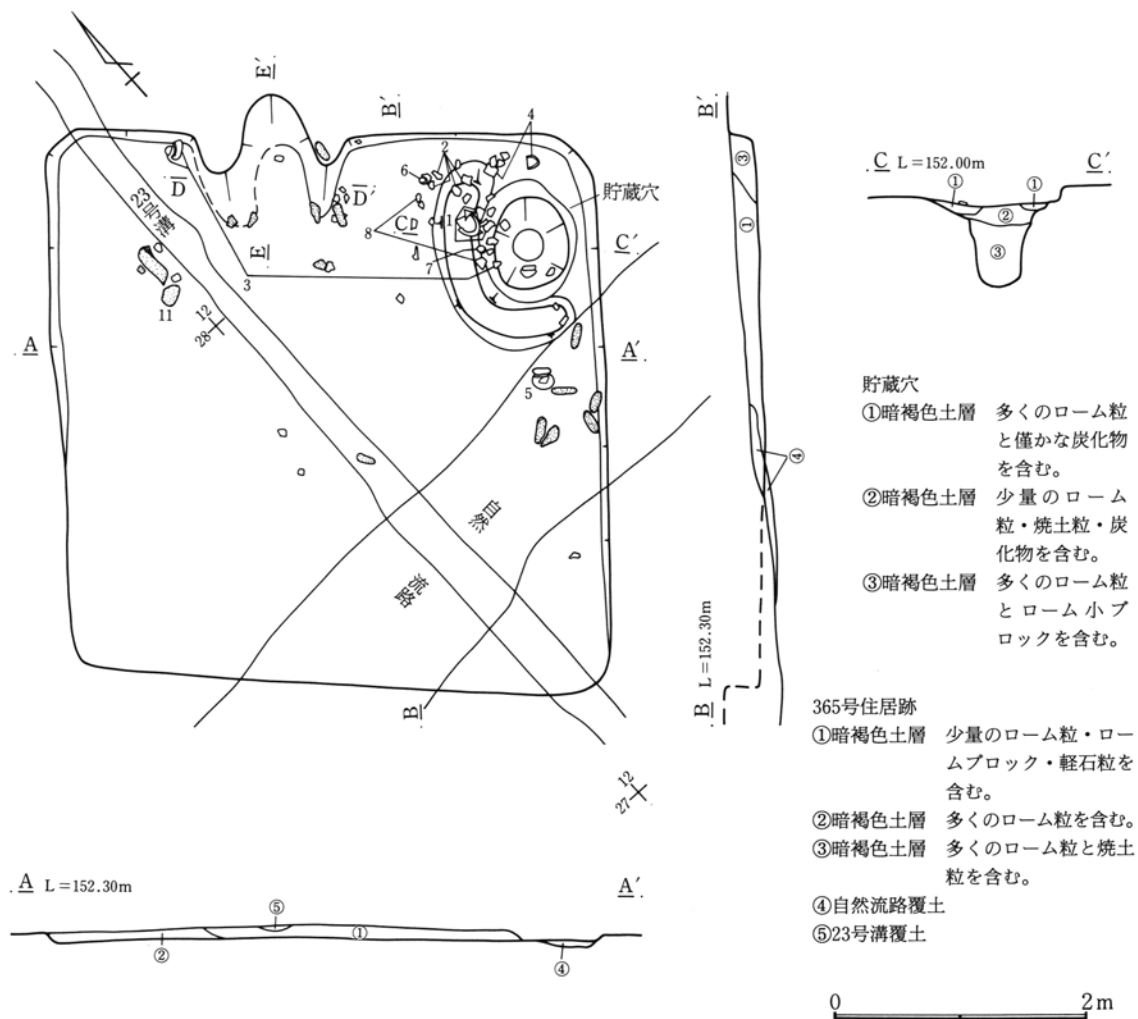
遺物 貯蔵穴周辺から土師器の甕、朱塗りの高坏や坏が出土している。

(竈)

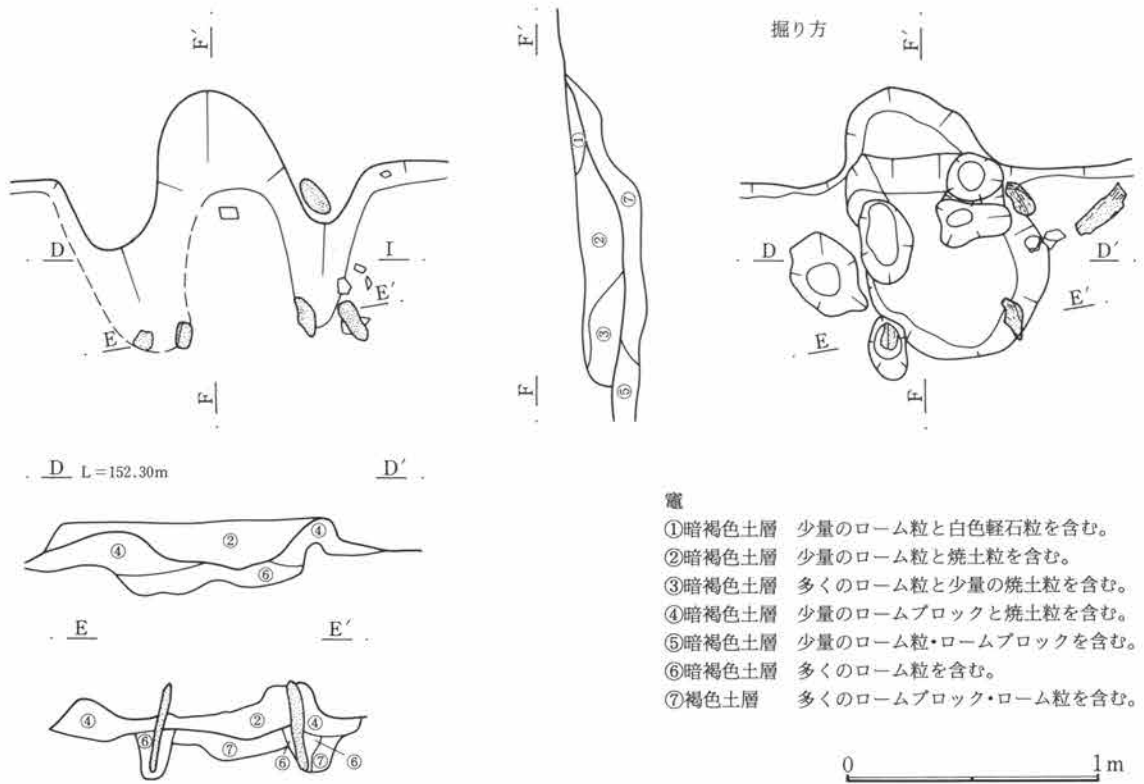
位置 住居東壁面に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

概要 残りが良好でなかったために、竈の燃烧部中心の認識を間違えて調査を進め、その後修正して調査を進めた。焚口部分に袖石がほぼ据えられた状態が残っている。また右奥壁部分にも石が据えられている。燃烧部から焼土粒の出土は少ない。

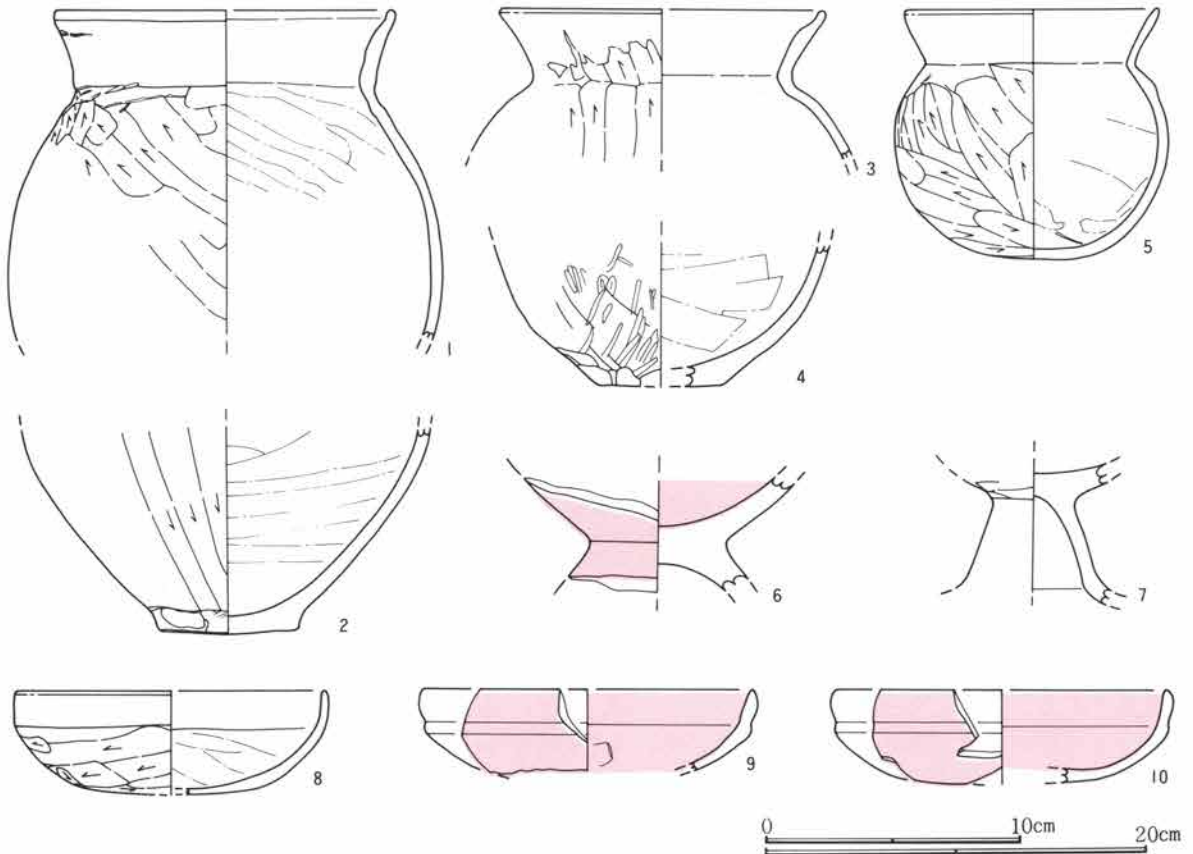
規模 煙道方向98cm、燃烧部幅46cmである。



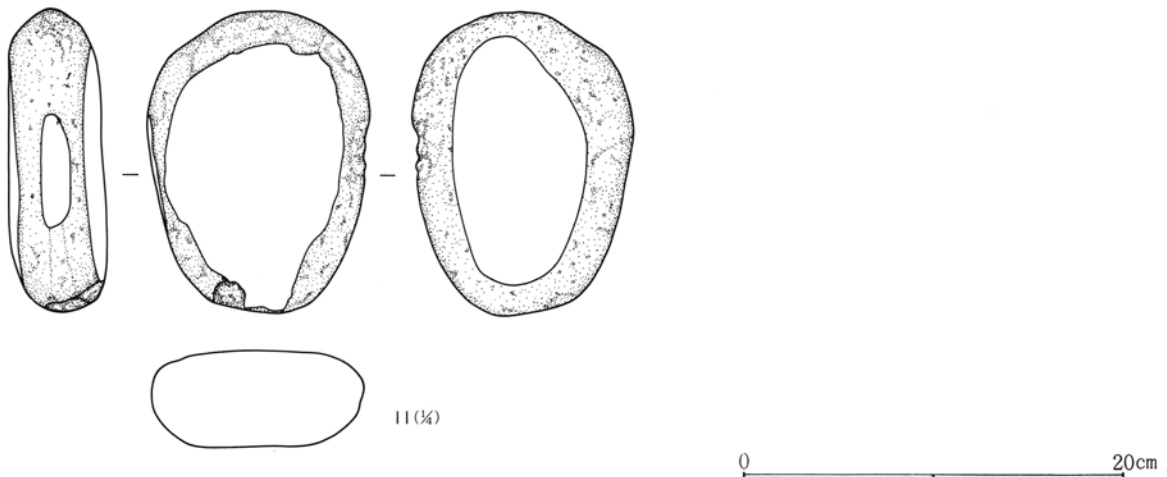
第60図 365号住居跡実測図



第61図 365号住居跡竈実測図



第62図 365号住居跡出土遺物実測図(1)



第63図 365号住居跡出土遺物実測図(2)

365号住居跡出土遺物観察表

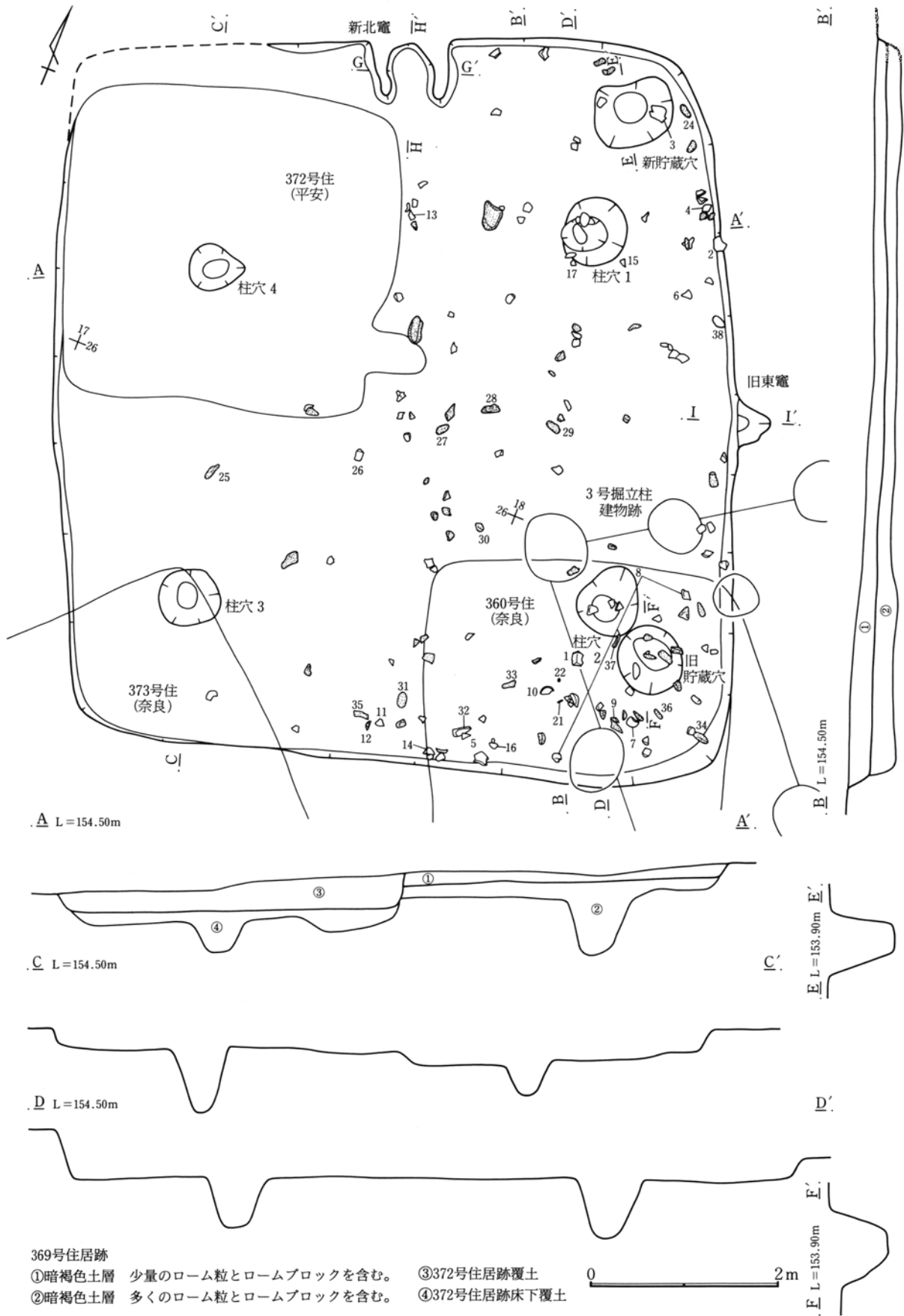
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
62-1 81	土 師 器 甕	床面+3 口~胴部 $\frac{1}{2}$	口(18.2) 高 — 底 —	①やや粗、2~3mmの砂粒と片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラナデ。砂粒の移動はほとんどなく器表面密。内面ナデにて器表面密。
62-2	土 師 器 甕	床面+6 底部 $\frac{3}{8}$ 残存	口 — 高 — 底 7.4	①粗、1~2mmの砂粒を多く、2~3mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。内面ナデにて器表面密。
62-3 81	土 師 器 甕	床面-1 口縁部 $\frac{1}{3}$ 胴部 $\frac{1}{8}$ 残存	口(17.0) 高 — 底 —	①粗、1~4mmの砂粒を大量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラナデ。ナデは口縁部まで及ぶ。内面ナデにて器表面密。
62-4	土 師 器 甕	床面+5 底部 $\frac{3}{8}$ 残存	口 — 高 — 底 (6.7)	①やや粗、1~3mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③明褐色一部黒色	底面ナデ。胴部外面ナデ後、ほぼ全面にわたりヘラ磨き。内面ナデにより器表面密。
62-5 81	土 師 器 小型甕	床面-10 ほぼ完形	口 13.5 高 13.2 底 —	①やや粗、2~3mmの砂粒と片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラナデ。砂粒の移動はほとんどなく器表面密。内面ナデにて器表面密。
62-6	土 師 器 高 杯	床面+9 脚ほぼ完形	口 — 高 — 底 —	①密、多くの赤色粒を含む ②酸化焰、硬質 ③表面赤色塗彩、断面赤褐色	内外面とも器表面密。杯の内外面と脚外面に赤色塗彩。
62-7 81	土 師 器 高 杯	床面+10 杯底部~脚筒部 $\frac{1}{2}$	口 — 高 — 底 —	①密、1~2mmの長石粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③赤褐色	脚部外面ナデにて器表面密。内面は器表面が雑。杯の内外面と脚外面に赤色塗彩。
62-8 81	土 師 器 杯	床面+4 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.4) 高 — 底 —	①密、2~3mmの長石粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③外面にぶい赤褐色、内面丹彩	底面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面粗い。内面ナデにて器表面密。口縁部外面~内側全面赤色塗彩されている。
62-9	土 師 器 杯 破片	覆土 破片	口(13.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を含む ②酸化焰、硬質 ③断面橙色、表面赤色	内外面とも、器表面密で赤色塗彩されている。
62-10	土 師 器 杯 破片	覆土 破片	口(13.0) 高 — 底 —	①密、2~3mmの片岩粒をわずかに含む。 ②酸化焰、硬質 ③赤色	内外器表面密に整形後赤色塗彩されている。
63-11 120	石 製 品 砥 石	床面-3	長 16.0 幅 11.8 厚 5.0 重 1480		安山岩。3側面を砥石として使用している。

369号住居跡 (第64~67図、図版20・21・81・113・115・123)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、26・27-18グリッドに位置する。

概要 本住居を含めて4軒が重複している。北西部分を平安時代の372号住居により床下部分まで掘り込まれ、南東コーナー部分では奈良時代の360号住居により覆土上面が、また南西コーナー部分を奈良時代の373号住居により床面付近まで掘り込まれている。新旧関係は369→360号住居、369→373号住居であ

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第64図 369号住居跡実測図

る。なお本住居と360号住居及び373号住居は重複部分の土層が浅く、本住居以外では土器の出土も少ないため、新旧関係の決定に疑問も残る。また南東部分で3号掘立柱建物跡と重複しており、覆土の一部が掘り込まれている。竈は東と北壁面に造られているが、いずれも残りが悪い。東壁面の竈は、床面上に位置する袖や燃焼部が取り除かれていたため旧竈である。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。柱穴が4本と新旧の竈の右側にそれぞれ貯蔵穴が掘られている。

規模 東西7.10m、南北7.60mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で56cmである。新貯蔵穴は径66cm深さ65cm、旧貯蔵穴は径64cm深さ71cm、柱穴1は径68cm深さ79cm、柱穴2は径72cm深さ69cm、柱穴3は径68cm深さ46cm、柱穴4は径60cm深さ79cmである。

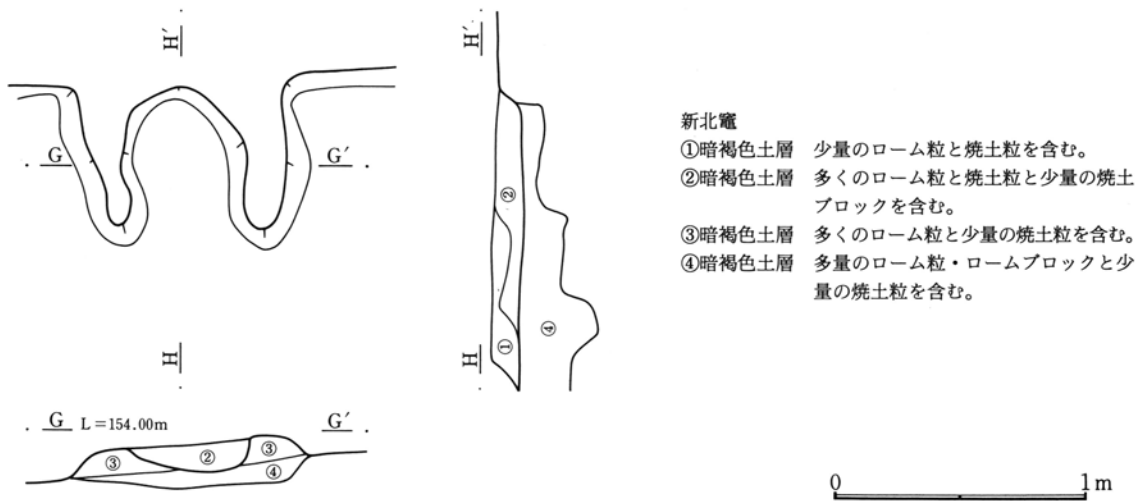
遺物 住居南東部分より甕や坏、またこも編み石が多く出土している。

(新北竈)

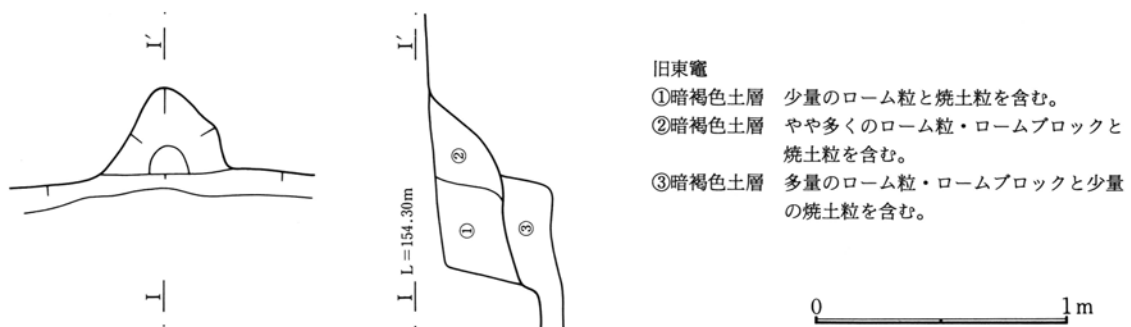
位置 住居北壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要 袖部分は残っていたが、全体に残りが悪い。燃焼部からは比較的多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向63cm、燃焼部幅48cmである。

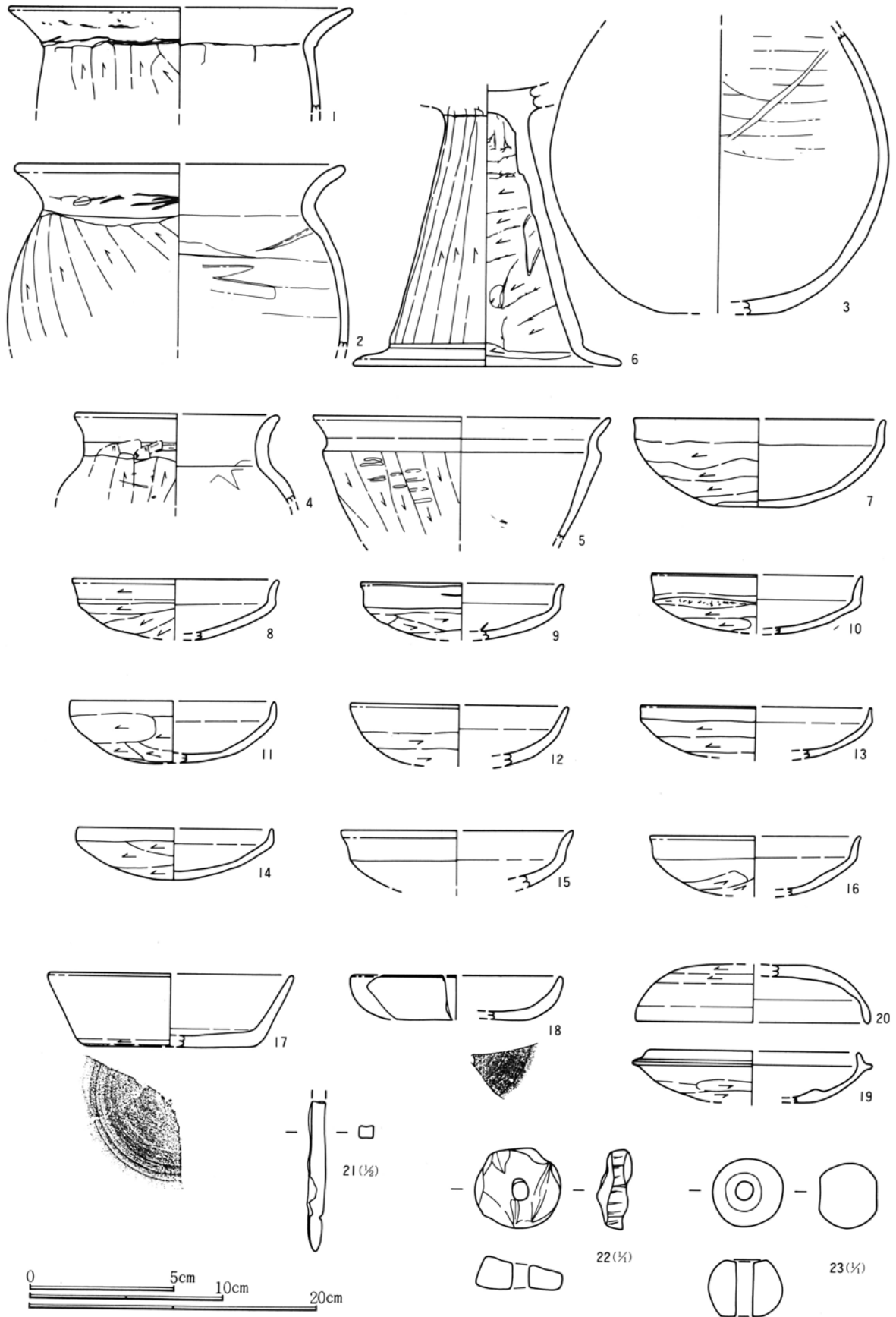


第65図 369号住居跡新北竈実測図



第66図 369号住居跡旧東竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第67図 369号住居跡出土遺物実測図

369号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
67-1	土師器 甕	床面+13 1/4残存	口(23.6) 高— 底—	①密、1mm前後の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面強いヘラ削り。口縁部との境に段を持つ。 内面ナデにて器表面密。
67-2	土師器 壺	床面+22 1/4残存	口(22.6) 高— 底—	①やや粗、1~2mmの砂粒を大量 に含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面粗い。 内面ナデにて器表面密。
67-3	土師器 壺	床面-32 胴~底1/4	口— 高— 底—	①密、2~3mmの赤色粒を少量含 む。②酸化焰、硬質 ③内面浅黄褐色、外面褐色	底面~胴部全体ヘラナデにより器表面密。内面ナデ。 残存部分が少なく器形不明。
67-4	土師器 小型甕	床面+9 口縁小片	口(14.0) 高— 底—	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り。砂粒が移動し器表面が粗い。内面 ナデにて器表面密。
67-5	土師器 鉢	床面+17 口縁1/4	口(20.3) 高— 底—	①やや粗、1~2mmの砂粒を少量 含む。②酸化焰、硬質 ③暗褐色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。
67-6 81	土師器 高坏脚	床面+14 脚の1/4	口— 脚高12.9 底(13.7)	①やや粗 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚外面ヘラナデ。多くの砂粒が目立つ。脚内面ヘラ削 り。脚下端部横ナデ。
67-7 81	土師器 坏	床面+5 1/4残存	口(12.8) 高4.6 底—	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動は少なく器表面の粗れは少 ない。器肉が薄くほぼ均一である。
67-8 81	土師器 坏	床面+23 1/4残存	口10.5 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面密。 黒斑全く認められず。
67-9	土師器 坏	床面+9 1/4残存	口(10.4) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を多 く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。 黒斑は全く認められず。
67-10 81	土師器 坏	床面+5 1/4残存	口(11.0) 高(3.0) 底—	①密、1mm前後の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。ヘラの単位は明瞭でない。内面ナデに て器表面密。黒斑全く認められず。
67-11	土師器 坏	床面-13 1/4残存	口(10.6) 高— 底—	①密、1mm前後の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なくヘラ削りの単位不明 瞭。黒斑全く認められず。
67-12	土師器 坏	床面-14 1/4残存	口(11.2) 高— 底—	①密、粉状を呈している ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削りであるが、胎土が密で砂粒の移動少なく ヘラ削りの単位不明瞭。
67-13	土師器 坏	床面+9 小片	口(11.9) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。器表面密でヘラの単位不明瞭。 黒斑全く認められず。
67-14	土師器 坏	床面+5 1/4残存	口(10.2) 高2.7 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。口縁部~内面ナ デにより器表面密。 黒斑は全く認められない。
67-15	土師器 坏	床面+8 小破片	口(11.8) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りと思われるが、器表面が粗れているため ヘラ削りの単位不明瞭。
67-16	土師器 坏	床面+19 小片	口(10.8) 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胎土が密でヘラ削りの単位不明瞭。黒 斑全く認められず。
67-17	須恵器 坏	床面+18 口縁~底1/4	口(12.6) 高— 底(8.2)	①密、極めて小さな白色粒を含む ②還元焰、硬質 ③灰色	底面ヘラ切り後右回転ヘラ削り。 器表面全体が密である。
67-18	須恵器 皿	覆土 破片	口(10.8) 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず ②還元焰、硬質 ③灰白色	底面右回転ヘラ削り。口縁部の器肉が厚い。 器表面全体が密である。
67-19	須恵器 坏	覆土 破片	口(10.9) 高— 底—	①密、1mm前後の片岩粒を含む ②酸化焰、硬質 ③褐灰色	底面手持ヘラ削り。
67-20	須恵器 蓋	覆土 破片	口(12.0) 高— 底—	①密 ②還元焰、硬質 ③灰色	天井部左回転ヘラ削り。

第3章 古墳時代の遺構と遺物
369号住居跡出土遺物観察表

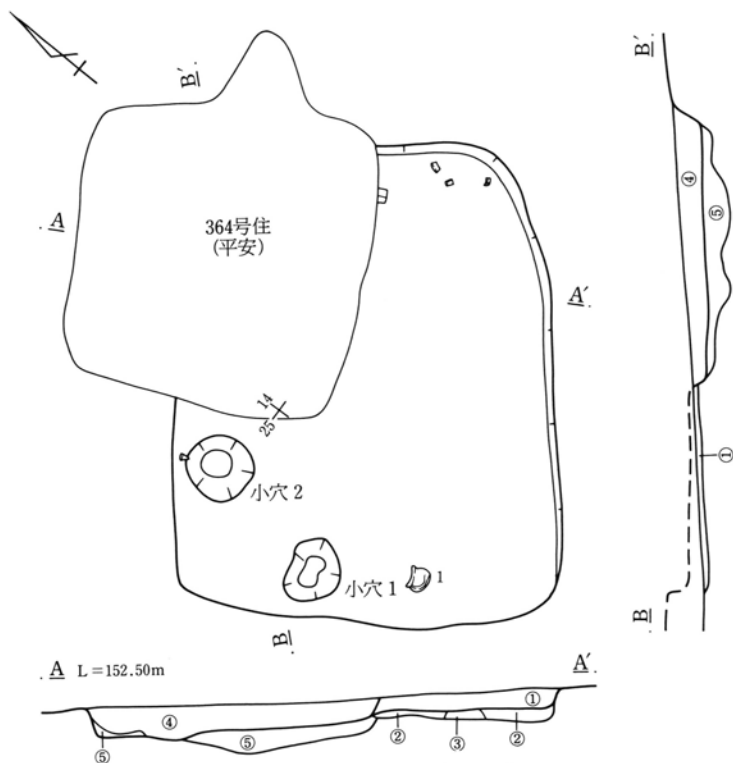
挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法 量(cm)(g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
67-21	鉄製品 鉄 鏃	床面+10	長 (5.2) 厚 0.4	幅 0.5 重 2.6	鉄鏃の茎部分と思われる。 断面形は方形で残りは比較的良好である。
67-22 115	石製品 白 玉	床面-20	径 1.4 厚 0.6	孔径 0.3 重 2.1	滑石片岩。横断面の形は少しゆがんでいるがほぼ円形。 側面は荒砥削り、上下面はわずかに再調整。
67-23 115	土製品 丸 玉	床面-10	径 1.2 厚 1.0	孔径 0.3 重 2.9	上下面を平らに削り、中央に穿孔されている。横面は 円形であり、よく磨かれて黒光りしている。

遺物番号	図版番号	器 種	法 量(cm)(g)	石 材 ・ 備 考
24	123	こも編み石	長 15.2 幅 4.6 厚 4.3 重 500	点紋緑泥片岩
25	123	こも編み石	長 17.9 幅 6.3 厚 4.0 重 790	点紋緑泥片岩
26	123	こも編み石	長 11.5 幅 6.8 厚 4.2 重 490	絹雲母石墨片岩
27	123	こも編み石	長 11.5 幅 5.8 厚 3.9 重 380	点紋絹雲母石墨片岩
28	123	こも編み石	長 14.1 幅 6.6 厚 4.9 重 555	絹雲母石墨片岩
29	123	こも編み石	長 12.8 幅 6.7 厚 2.9 重 360	緑簾緑泥片岩
30	123	こも編み石	長 14.2 幅 5.9 厚 3.0 重 355	緑簾緑泥片岩
31	123	こも編み石	長 14.2 幅 8.1 厚 3.6 重 590	点紋絹雲母石墨片岩
32	123	こも編み石	長 16.0 幅 6.4 厚 4.0 重 635	緑泥片岩
33	123	こも編み石	長 12.6 幅 4.5 厚 3.0 重 270	絹雲母石墨片岩
34	123	こも編み石	長 15.9 幅 5.3 厚 3.7 重 550	緑簾緑泥片岩
35	123	こも編み石	長 12.8 幅 5.5 厚 3.6 重 375	絹雲母石墨片岩
36	123	こも編み石	長 16.6 幅 6.6 厚 3.6 重 655	絹雲母石墨片岩
37	123	こも編み石	長 15.7 幅 6.9 厚 2.8 重 415	絹雲母石墨片岩
38	123	こも編み石	長 14.5 幅 6.8 厚 2.6 重 330	点紋絹雲母石墨片岩

375号住居跡 (第68・69図、図版21・81)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、25-14・15グリッドに位置する。

概要 北東部分で平安時代の364号住居と重複しており、その部分は床下部分まで深く掘り込まれている。また重複していない部分の残りも悪く、西側の壁面や床面は残っていない。このように残りの悪い住居である。竈もこの時期頃から使われていると思われるが不明である。小穴が2本掘られていたが、柱穴は掘られていない。



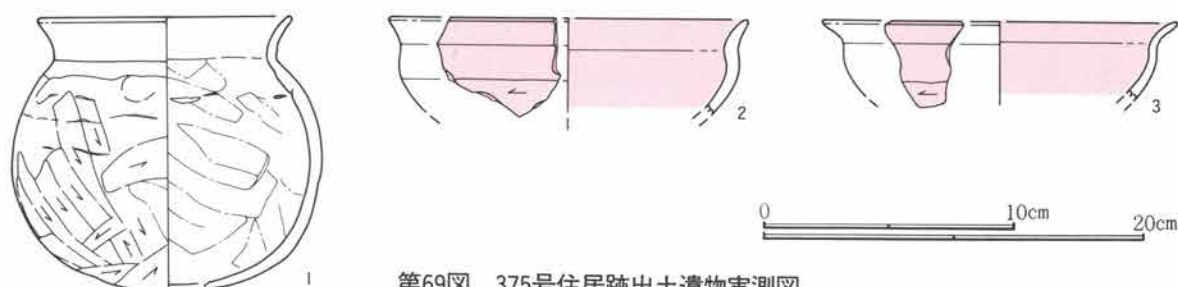
規模 東西3.82m、南北3.04mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で25cmである。小穴1は径42cm深さ23cm、小穴2は径54cm深さ69cmである。

遺物 出土量は少なく、図示できたのは完形の小型甕1点と朱塗りの坏の破片2点である。

375号住居跡

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と少量の炭化物を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ③褐色土層 ローム粒を主とする。
- ④364号住居跡覆土
- ⑤364号住居跡床下覆土

第68図 375号住居跡実測図



第69図 375号住居跡出土遺物実測図

375号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
69-1 81	土師器 甕	床面-10 口縁~底部 1/2	口 13.4 高 14.5 底 -	①やや粗、2~4mmの砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へら削り、多くの輪積痕が残る。 胴部内面ナデ、一部に輪積痕が残る。 底部中央は焼成後穿孔されている。
69-2	土師器 坏	覆土 小破片	口(14.0) 高 - 底 -	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③断面表面とも赤褐色	体部へら削り。 内外全面にわたり赤色塗彩されている。
69-3	土師器 坏	覆土 口縁片	口(14.0) 高 - 底 -	①密 ②酸化焰、硬質 ③赤色	底部へら削り。 口縁部横ナデ。 内外面に赤色塗彩されている。

411号住居跡・427号住居跡 (第70~73図、図版21・81・115)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、27-4・5グリッドに位置する。

概要 西に向かって低くなるなだらかな傾斜面で、一部黒色土を掘り込む12軒の竪穴住居が複雑に重複している住居群であり、調査は非常に困難であった。本住居はその中で最も西側で低い場所に位置する。直接には3軒の重複である。東壁面でわずかに奈良時代の409号住居と重複しており、その部分の壁面と覆土が削り取られている。また竈の北に接してもう一基の竈が確認されている。本住居の古い段階の竈の可能性も考えられるが、別の住居の竈であり、その住居を427号住居として扱った。また本住居の竈の使用面の調査終了後、竈床下部分の調査を実施したところ、小さな土坑状の掘り込みが確認され、口縁部を一部欠くがほぼ完形の甕が出土している。この土坑は本住居に伴うものとして扱った。重複住居の新旧関係は427→411→409号住居の順である。重複関係については第261図参照

構造 床面は黄褐色ロームではなく黒褐色土層中に多量の灰褐色ロームを含む土で造られている。貯蔵穴が竈の右側に掘られているが、柱穴は掘られていない。左袖付近の床面に小穴が1つ掘られている。

規模 住居規模は東西3.72m、南北4.22mである。壁高は残りの良い北壁の東部分で25cmである。貯蔵穴は径48cm深さ46cm、小穴は径27cm深さ29cmである。427号住居の竈は残りが悪いが、現状で煙道方向78cm 燃烧部幅46cmである。

遺物 甕の破片は多いが、図示できたのは竈床下部分より出土している1点である。他に土師器の坏や紡錘車出土している。427号住居の竈内から出土した長25.7cm幅8.9cm厚3.6cm重1090gの石が先端の1/3に火を受けて変色している。支脚石として使われていたものと思われる。

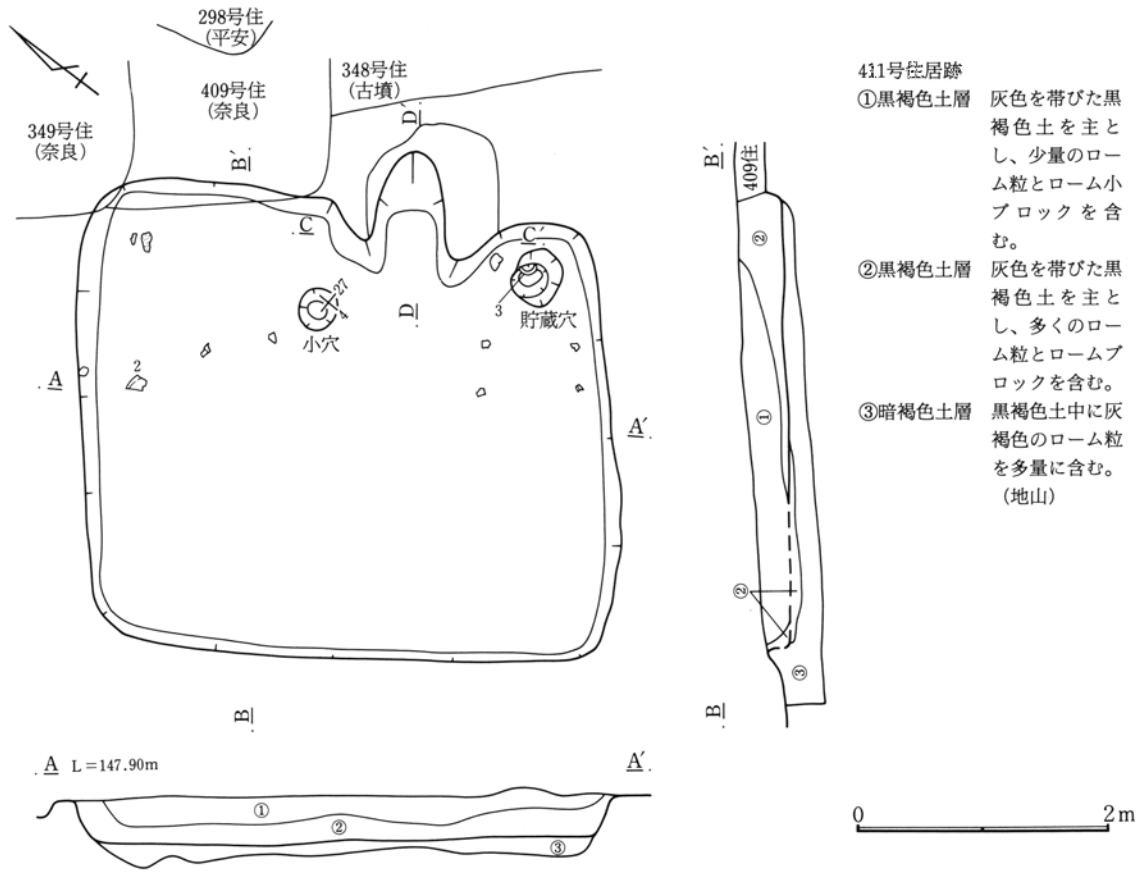
(411号住居竈)

位置 住居東壁面に造られている。住居が小さいためか燃烧部の一部は壁面を掘り込んで造られている。

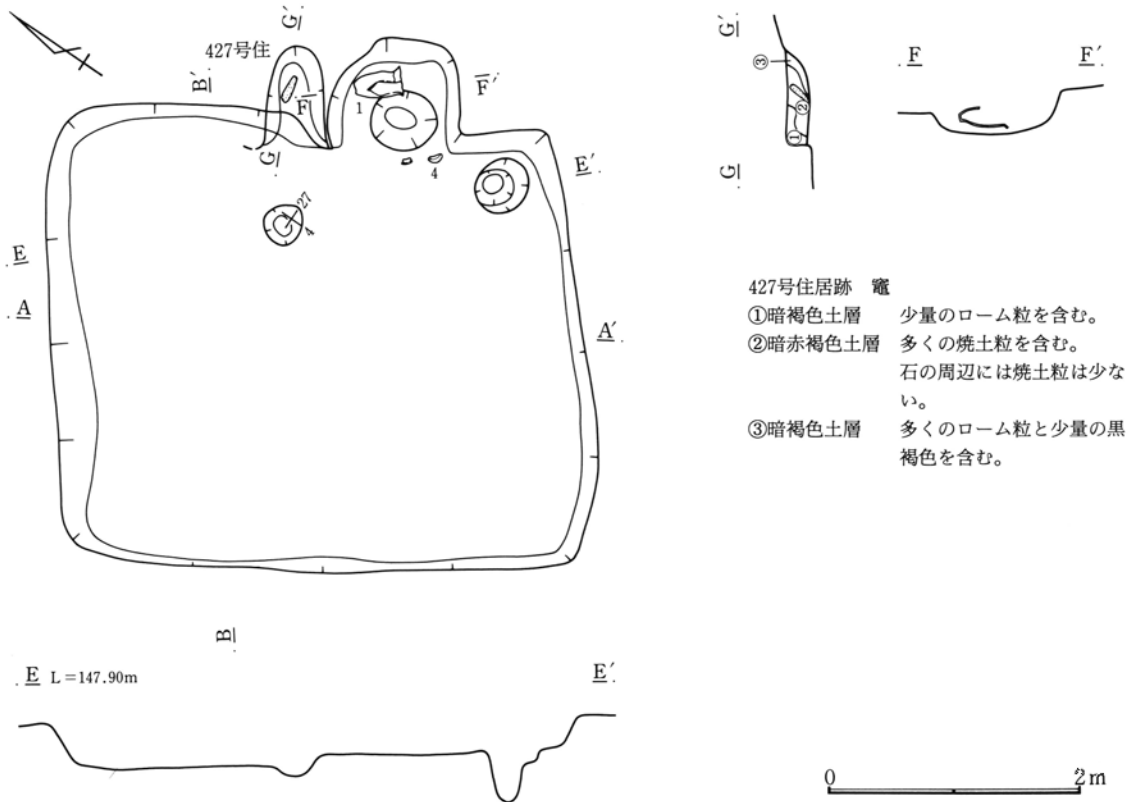
構造 径100cm前後のほぼ円形の土坑を掘り、そこに煙道とは直交する方向に甕をすえ黒褐色土で少し埋めた段階で竈が造られたものと考えられる。なぜこのようなことが行なわれたのかは不明である。燃烧部奥壁部分や側壁上部分から多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向105cm、燃烧部幅53cmである。

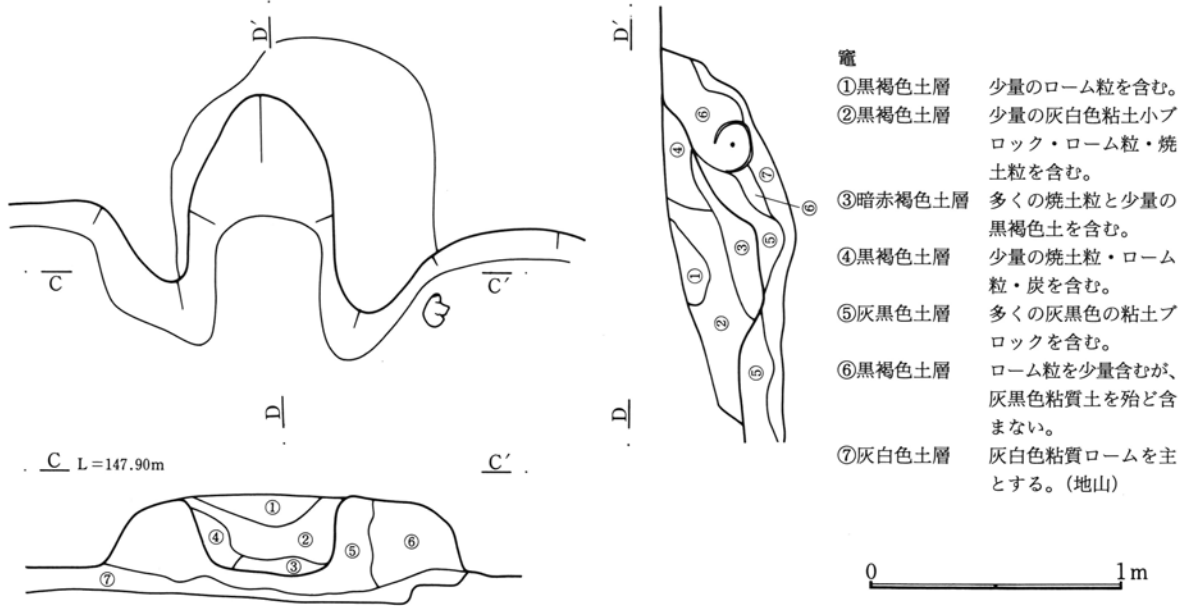
第3章 古墳時代の遺構と遺物



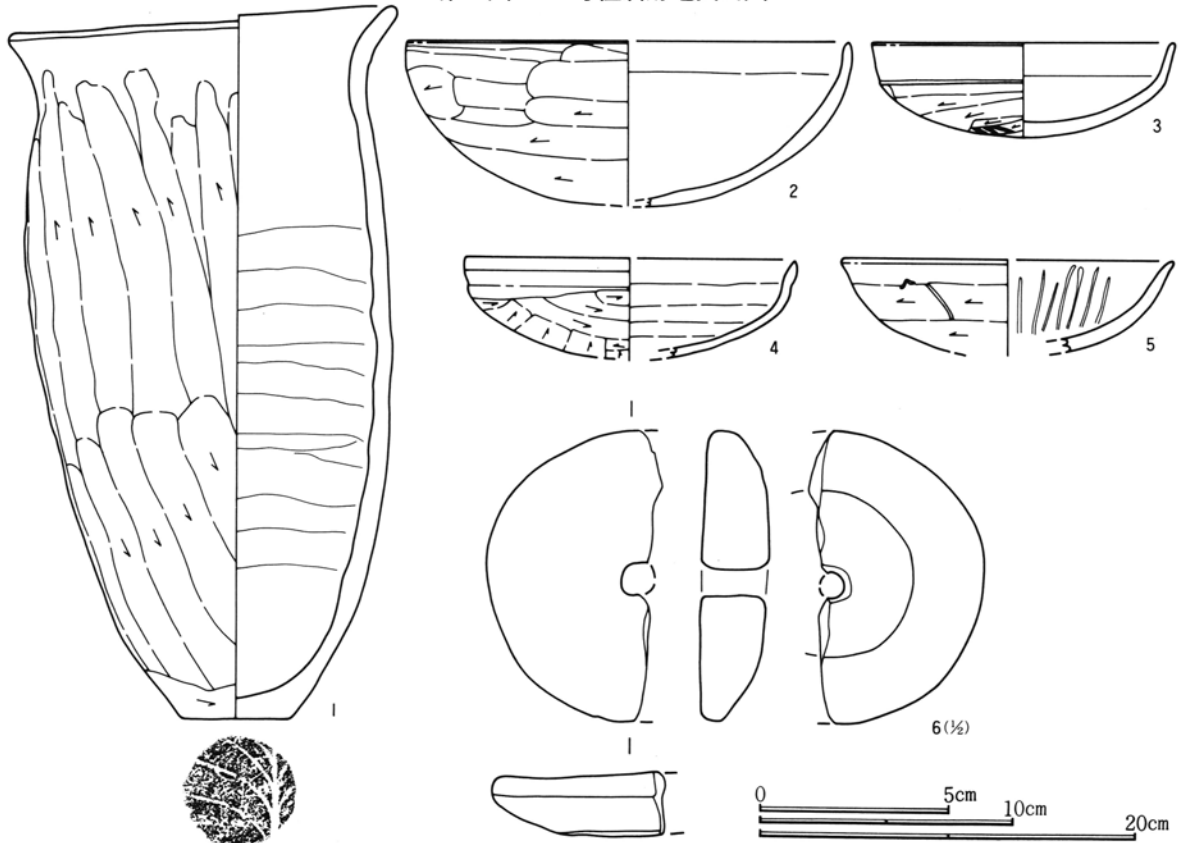
第70図 411号住居跡実測図



第71図 411号住居跡床下・427号住居跡実測図



第72図 411号住居跡竈実測図



第73図 411号住居跡出土遺物実測図

411号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
73-1 81	土師器 甕	竈内 1/3残存 胴下半完形	口 20.2 高 37.6 底 5.6	①やや粗、1~3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③黄褐色	底面木葉痕。胴部ナデ。粘土と砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデ。全体に器肉が厚い。
73-2	土師器 坏	床面+5 1/3残存	口(17.6) 高 - 底 -	①密 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胎土が粉状を呈しておりへら削りの単位不明瞭。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

411号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
73-3 81	土師器 坏	床面直上 1/2残存	口 12.0 高 3.7 底 -	①密、1mm以下の小さな雲母粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、胎土が密で削りの単位は明瞭でない。内面ナデにて器表面特に密。黒斑もなく固く焼かれた坏である。
73-4 81	土師器 坏	床面-2 2/3残存	口(13.0) 高 - 底 -	①密、1~2mmの砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。内面は幅1.2cm前後の刷毛状工具により同心円状に整形されている。かなり異質な整形の坏である。
73-5	土師器 坏	覆土 1/2残存	口(13.2) 高 - 底 -	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部下半ヘラ削り。砂粒や粘土の移動少なく器表面密。内面に多くの暗文あり。
73-6 115	石製品 紡錘車	覆土 1/2残存	径 (7.7/4.4) 孔径 0.7 厚 1.8 重 67.1		砂岩。大きな紡錘車と思われる。表面全面を加工している。

412号住居跡 (第74~76図、図版22・115)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、35-6・7グリッドに位置する。

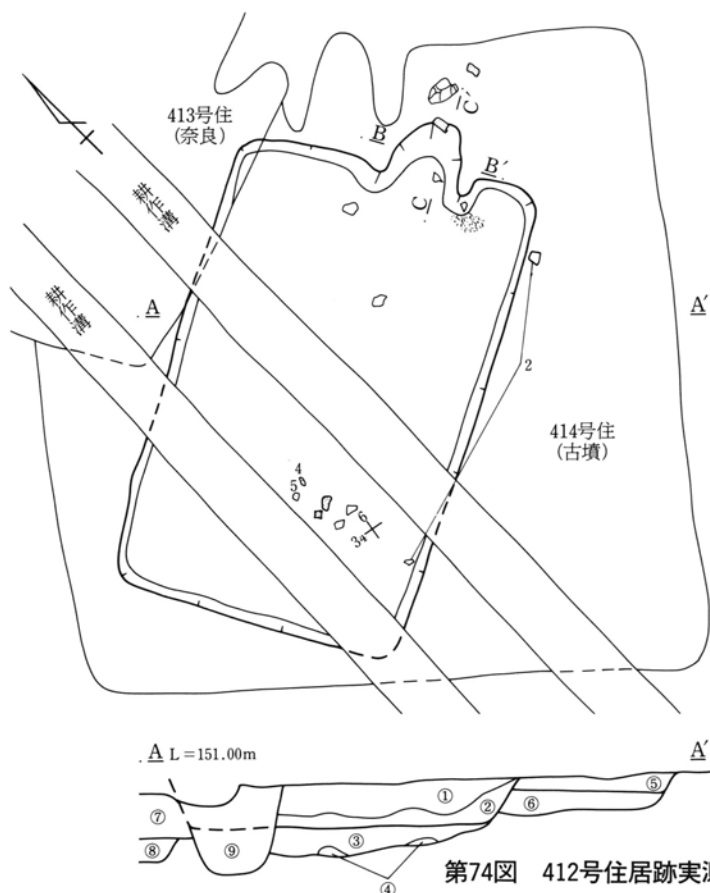
概要 本住居を含めて3軒の住居が重複しており、その3軒を縦断するように2本の耕作溝により床下部分まで掘られている。本住居が奈良時代の413号住居により北壁面の一部を掘り込まれ、また414号住居の中央部分を床下まで掘り込んで造られている。新旧関係は414→412→413号住居である。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。住居規模が小さいためか貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西3.76m、南北2.42mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で27cmである。

遺物 甃と紡錘車が出土している。

(竈)



第74図 412号住居跡実測図

位置 住居東壁面に造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部が壁面を掘り込んで造られている。

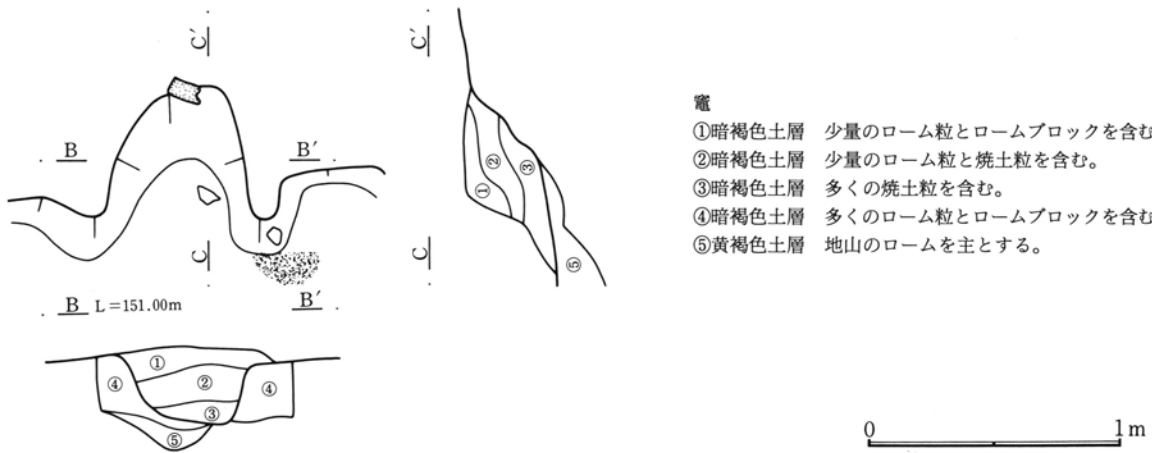
構造 袖は暗褐色土を用いて造られており、袖石等は出土していない。燃焼部床面付近から多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向68cm、燃焼部幅43cmである。

412号住居跡

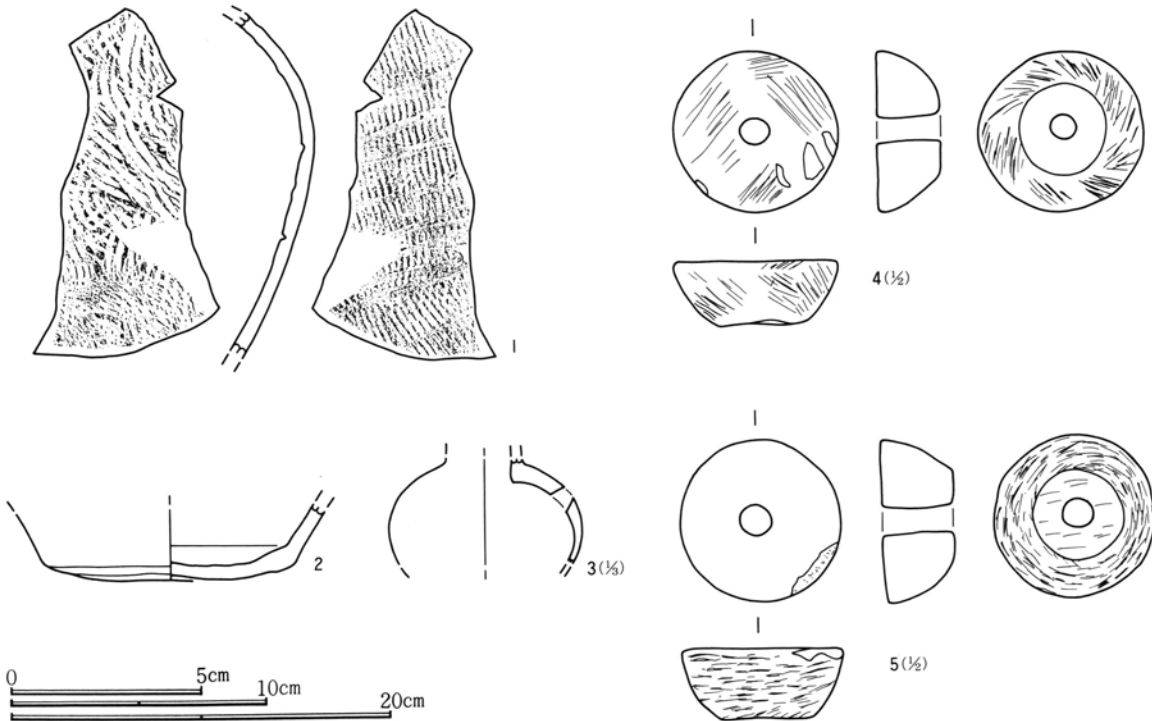
- ①暗灰褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ④暗黄褐色土層 多くのロームブロックを含む。
- ⑤414号住居跡覆土
- ⑥414号住居跡床下覆土
- ⑦413号住居跡覆土
- ⑧413号住居跡床下覆土
- ⑨耕作溝覆土

0 2m



- 竈
- ①暗褐色土層 少量のローム粒とロームブロックを含む。
 - ②暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
 - ③暗褐色土層 多くの焼土粒を含む。
 - ④暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
 - ⑤黄褐色土層 地山のロームを主とする。

第75図 412号住居跡竈実測図



第76図 412号住居跡出土遺物実測図

412号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
76-1	須恵器 横 瓮	覆土 小破片	口 — 高 — 底 —	①密、少量の長石粒を含む ②還元焰、硬質、焼締 ③表面灰色、断面にぶい橙色	胴部外面平行叩き目、その後ほぼ等間隔に垂直方向のナデ。 内面深い青海波文。
76-2	須恵器 甕	床面+3 底部1/2残存	口 — 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②還元焰、硬質 ③灰白色	底面ナデ。胴部外面平行叩き。 内面素文の当て目となっている。 全体がゆがんでおり、雑な作りである。
76-3	須恵器 甕 ?	覆土 1/2残存	口 — 高 — 底 —	①密、多くの小さな白色軽石粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	器表面密。 胴部に甕で見られるような小穴が1個認められた。 出土例が少なく器種は明らかでない。
76-4 115	石製品 紡錘車	床面直上 ほぼ完形	径 4.3/2.4 厚 1.7	孔径 0.7 重 45.0	蛇紋岩。表面全体が中砥削りにより削られており、全面に細い削り痕が残る。
76-5 115	石製品 紡錘車	床面直上 ほぼ完形	径 4.0/2.4 厚 1.9	孔径 0.7 重 44.7	凝灰岩。広面と狭面は磨かれてほとんど削痕なし。側面に細い多くの削痕が残る。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

414号住居跡 (第77~79図、図版22・113)

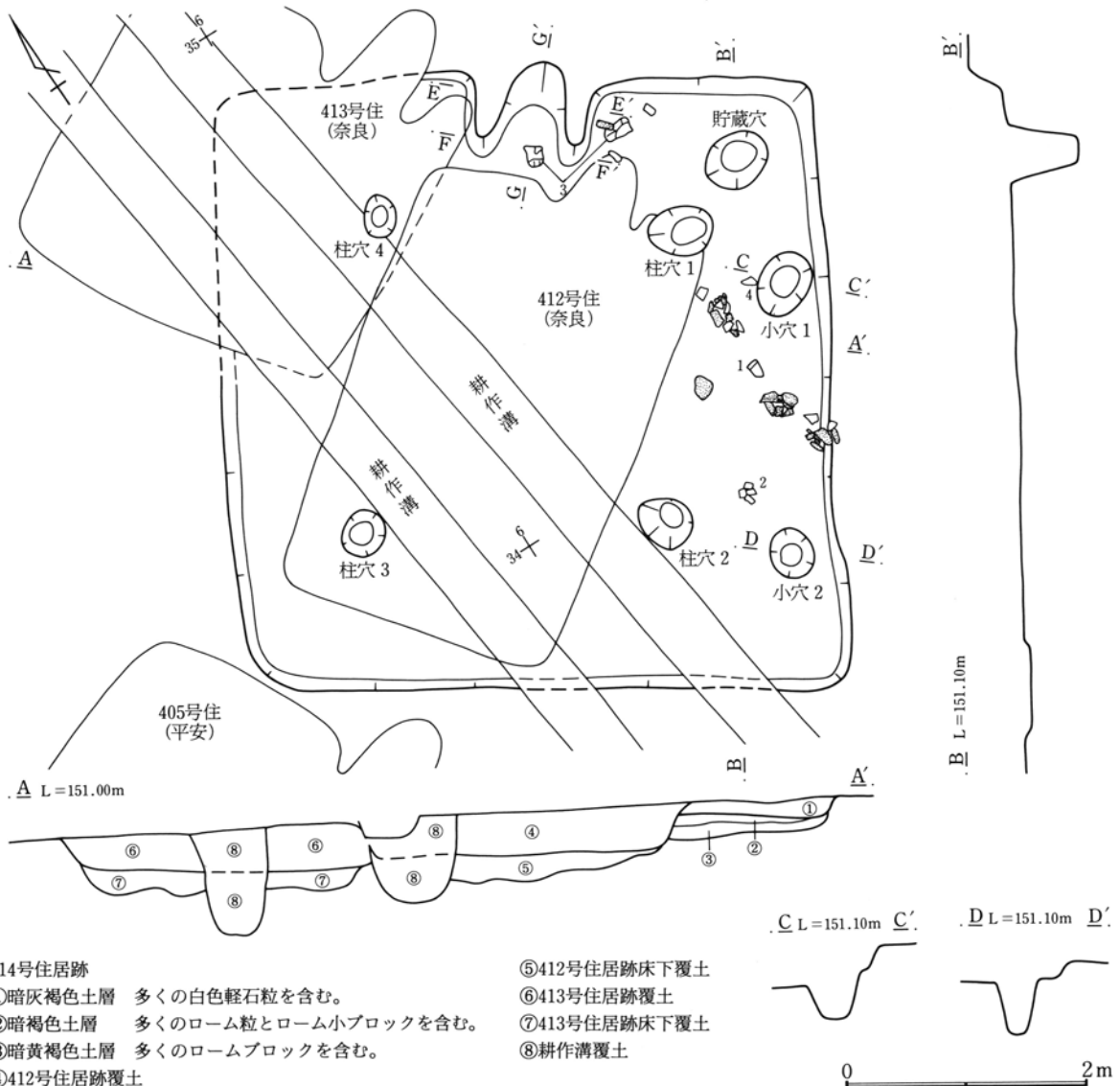
位置 本住居跡は第5次調査区にあり、35-6・7グリッドに位置する。

概要 本住居を含めて3軒の住居が重複しており、その3軒を縦断するように2本の耕作溝により床下部分まで掘られている。本住居の北西部分を奈良時代の413号住居により床下部分まで深く掘り込まれている。また住居中央部分を奈良時代の412号住居により同じく床下部分まで深く掘り込まれている。412号住居と413号住居は一部重複しており412号住居が新しいと考えられる。新旧関係は414→413→412号住居である。南西部分で奈良時代の405号住居と重複はしていないが近接している。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。貯蔵穴が竈の右側に、柱穴が4本掘られている。また南壁面により接して2個の小穴が掘られている。

規模 東西4.98m、南北5.00mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で38cmである。貯蔵穴は径56cm深さ52cmである。柱穴1は径48cm深さ64cm、柱穴2は径46cm深さ77cm、柱穴3は径36cm深さ83cm、柱穴4は径32cm深さ67cmである。

遺物 出土量は少なく、図示した遺物のほかは破片9片で全てである。



414号住居跡

- ①暗灰褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ③暗黄褐色土層 多くのロームブロックを含む。
- ④412号住居跡覆土

⑤412号住居跡床下覆土

- ⑥413号住居跡覆土
- ⑦413号住居跡床下覆土
- ⑧耕作溝覆土

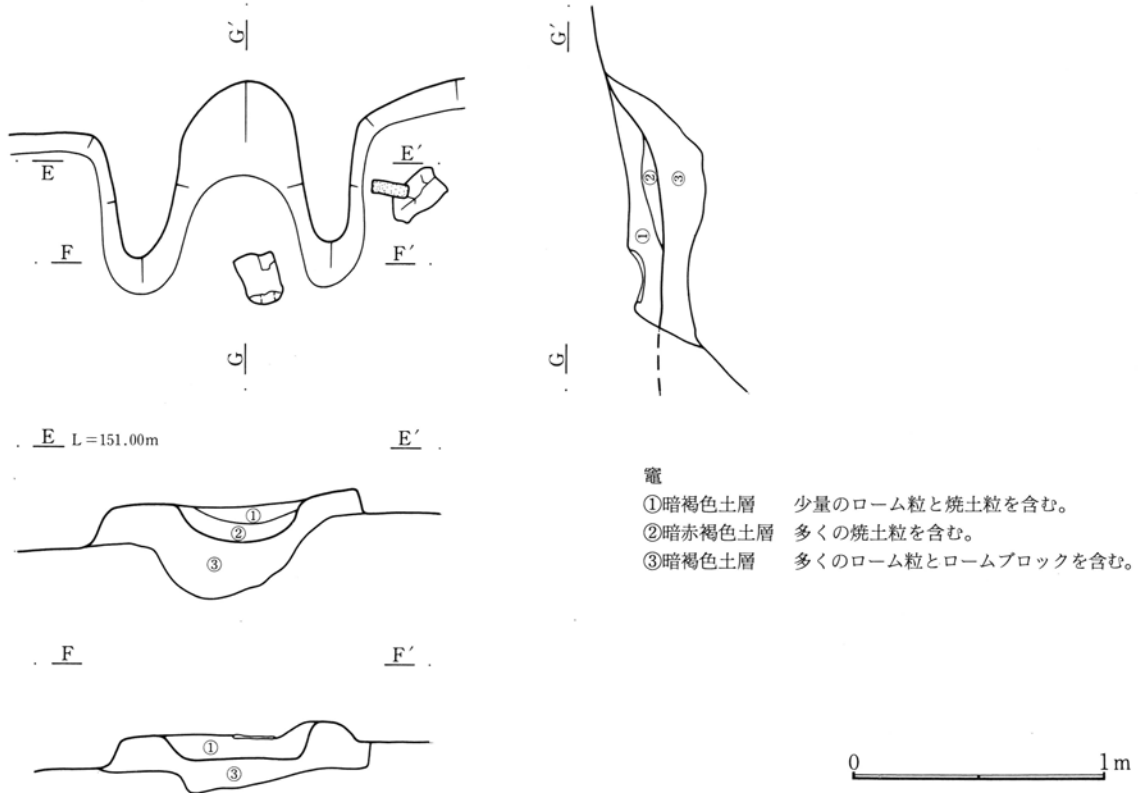
第77図 414号住居跡実測図

(竈)

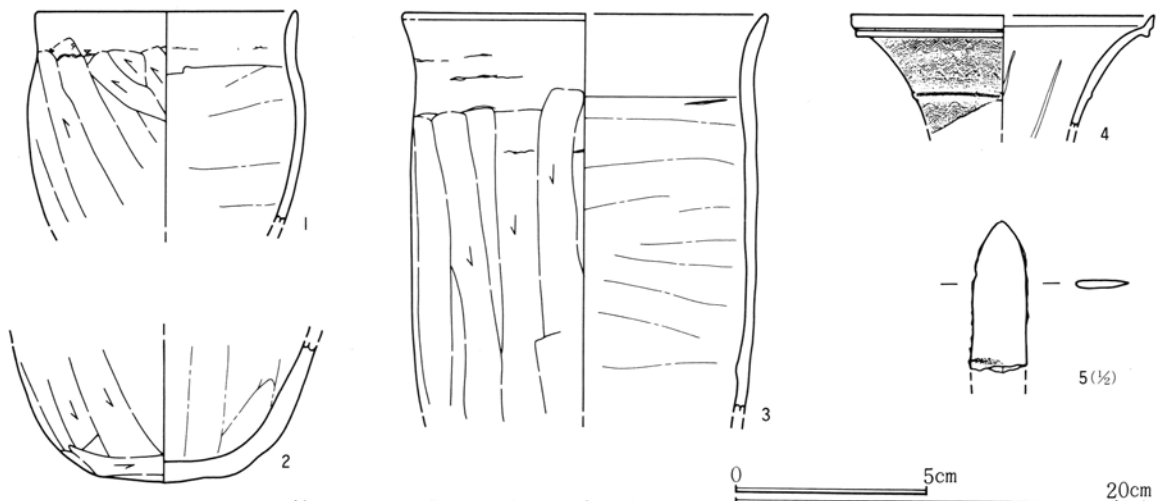
位置 住居北壁面に造られている。焚口部分と燃烧部の多くは床面上に位置し、燃烧部の一部が壁面を掘り込んで造られている。

構造 袖部は暗褐色土を用いて造られており、袖石等の出土はなかった。燃烧部床面付近から多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向83cm、燃烧部幅56cmである。



第78図 414号住居跡竈実測図



第79図 414号住居跡出土遺物実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

414号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
79-1	土師器 小型甕	覆土 口縁部 $\frac{1}{4}$ 胴部 $\frac{1}{5}$	口 15.8 高 — 底 —	①やや粗、2～3mmの砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	胴部外面ヘラ削り、砂粒の移動は少ない。 内面ナデにて器表面密。
79-2	土師器 甕	床面+3 底部のみ	口 — 高 — 底 —	①粗、2～3mmの片岩粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③褐色	底面ナデ。胴部外面弱いヘラ削り。 砂粒の移動は少ないが、多くの砂粒が目立つ。 全体に雑なつくりである。
79-3	土師器 甕	床面+5 $\frac{1}{5}$ 残存	口(19.0) 高 — 底 —	①粗、2～3mmの砂粒を多く、片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	胴部外面雑なヘラ削り、多くの砂粒が移動し器表面粗い。内面ナデにて器表面密。 胴部内面にも砂粒が目立つ。
79-4	須恵器 壺	床面-1 $\frac{1}{5}$ 残存	口(16.0) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②還元焰、硬質 ③灰色	頸部中央にわずかな凸帯を持ち、上下面に目の細い櫛描波状文を持つ。 器肉が薄い。
79-5 113	鉄製品 鉄 鏃	覆土	長 4.0 幅 1.5 厚 0.2 重 2.7		薄くて小さな破片のため明確でないが鉄鏃の鏃身部と思われる。

440号住居跡 (第80～84図、図版22・23・81・82・115・116・120・124)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、56・57-19・20グリッドに位置する。

概要 本住居を含めて3軒の住居が重複している。本住居は南西部分で古墳時代の441号住居を床下部分まで掘り込み、北側で奈良時代の439号住居により新北竈の上部分と住居の床下部分まで掘り込まれている。新旧関係は441→440→439号住居である。竈と貯蔵穴が2箇所確認されている。東竈は床面上に位置する部分は削り取られ、床面として使用されていたため旧竈と思われる。北竈は439号住居により削られて残りは非常に悪い。北竈に伴うと思われる北東コーナー部分の貯蔵穴は床面調査段階で確認されたが、東竈に伴うと思われる南東コーナー部分の貯蔵穴は床下調査段階で確認されたため旧貯蔵穴と思われる。これらのことから北竈が新しいものと思われ新北竈とし、東竈を旧東竈と呼称した。また貯蔵穴にも新旧を付けて呼称した。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。新旧竈の右側に貯蔵穴がそれぞれ掘られており、床面に柱穴が4本掘られている。南壁面中央部に接した床面部分に小穴が1本掘られており、それをU字状に囲むように床面より2～3cm程高い部分が確認された。出入口にも関連する遺構の可能性を指摘しておきたい。

規模 東西6.82m、南北6.22mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で35cmである。新貯蔵穴は径74cm深さ58cm、旧貯蔵穴は径72cm深さ75cmである。柱穴1は径72cm深さ73cm、柱穴2は径50cm深さ39cm、柱穴3は径60cm深さ96cm、柱穴4は径68cm深さ85cm、小穴は径60cm深さ38cmである。

遺物 土師器の甕や坏が多く、また紡錘車等が出土している。

(新北竈)

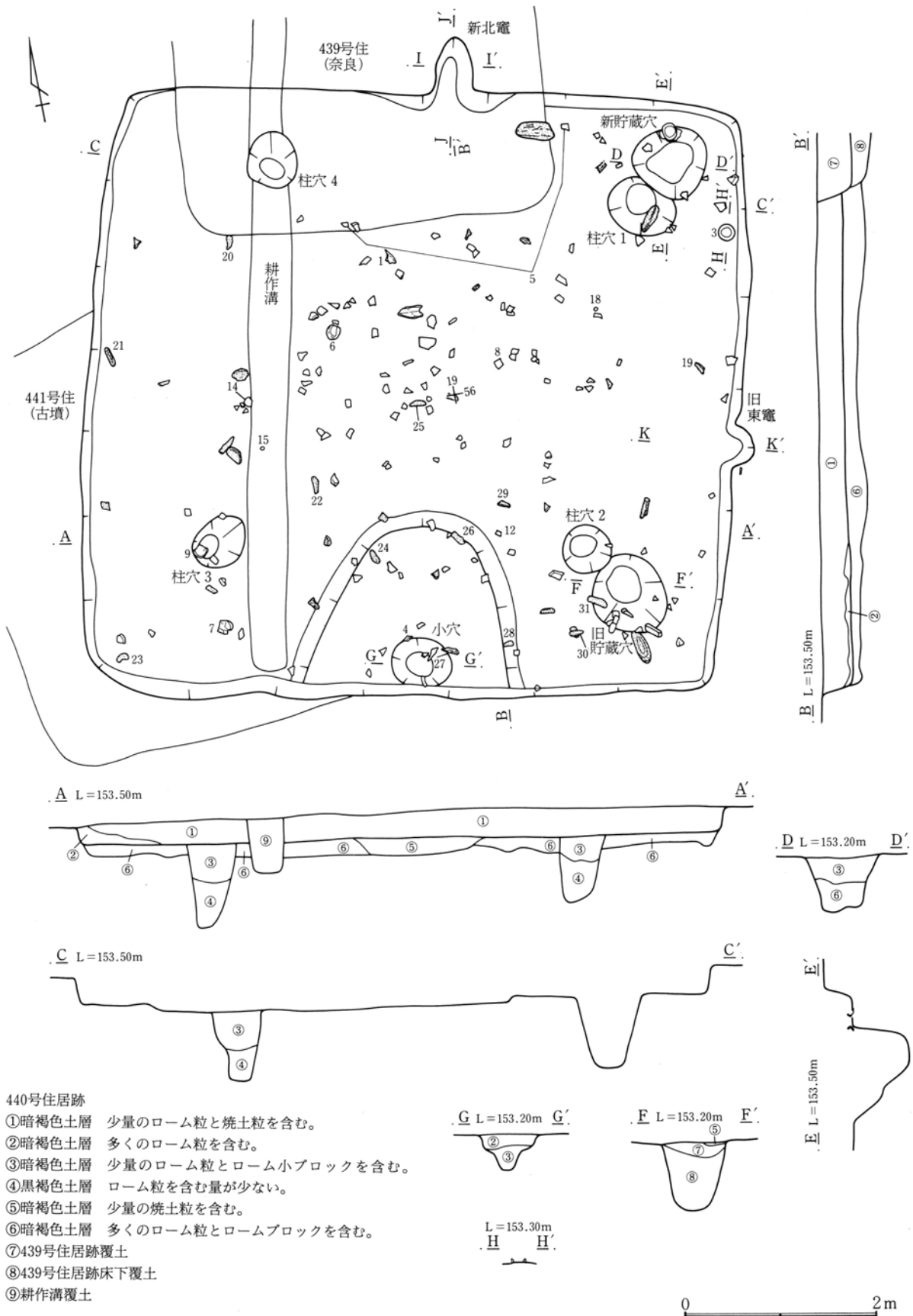
位置 北壁面を掘り込んで造られている。

概要 439号住居により竈上面の大部分が削り取られて、残りが極めて悪い。燃烧下部から少量の焼土粒が出土している。

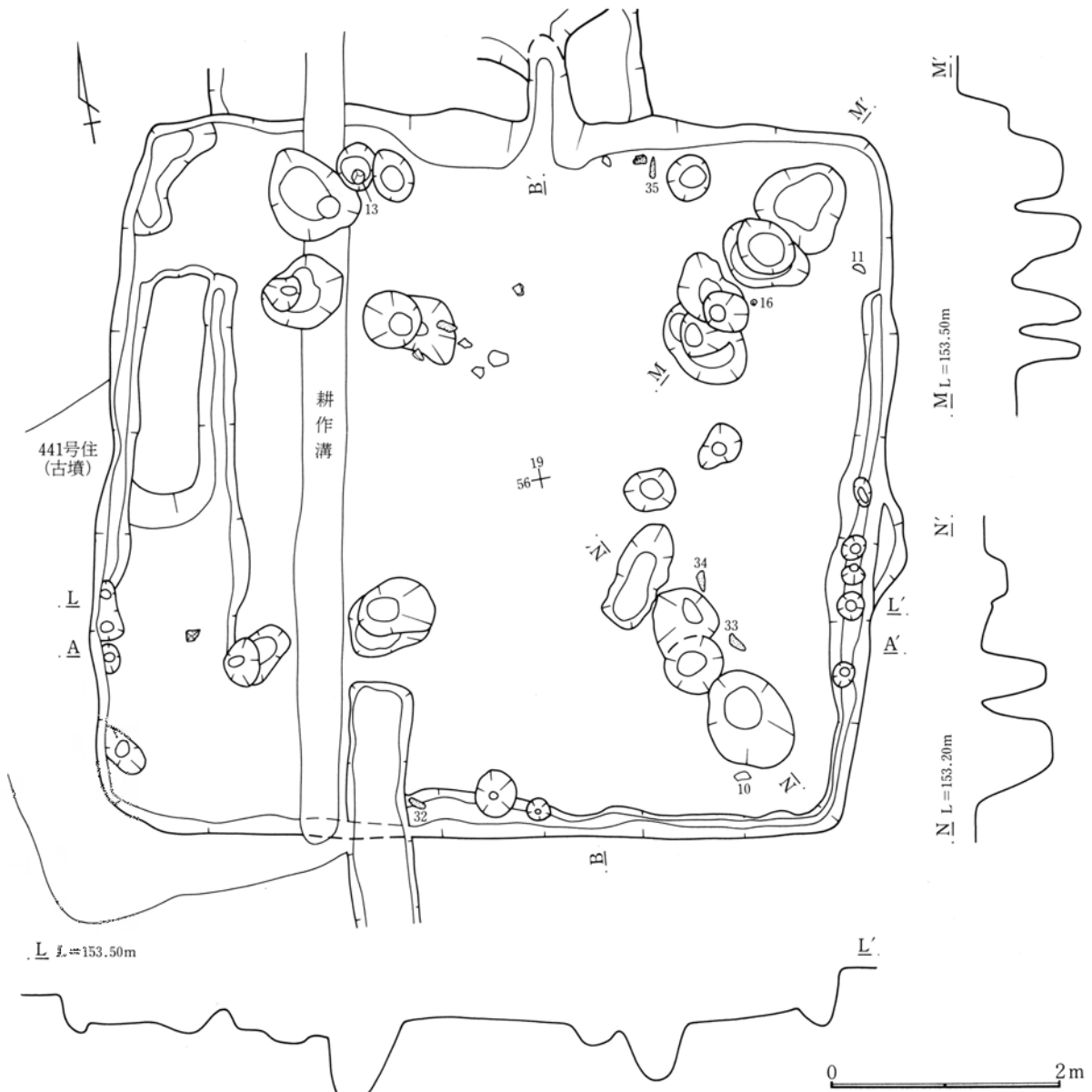
(旧東竈)

位置 東壁面を掘り込んで造られている。

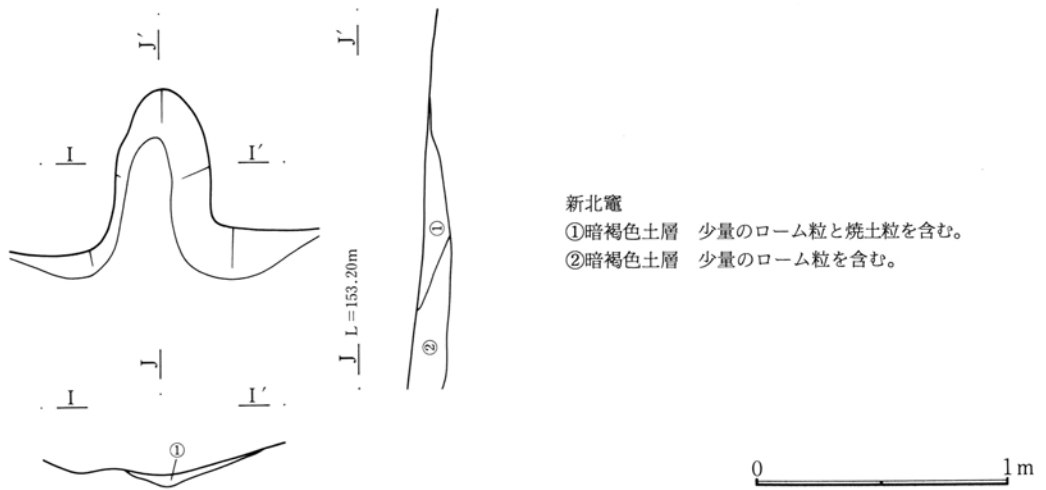
概要 床面上に位置する袖と燃烧部の多くは取り除かれ、堅く踏み固められて床面として使用されている。壁面を掘り込んで造られた煙道部には多くの焼土粒が残っていたが、床面上や床下に位置する燃烧下部からは焼土粒の出土は少ない。



第80図 440号住居跡実測図

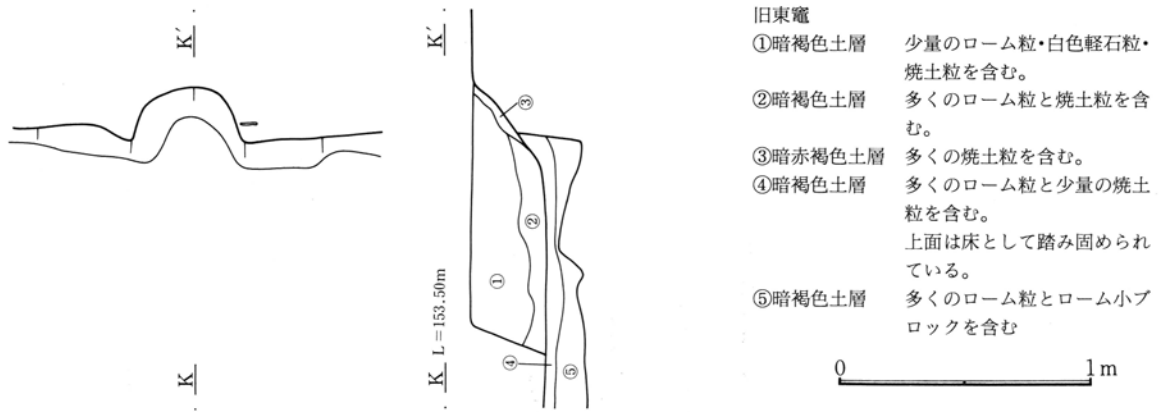


第81図 440号住居跡床下実測図

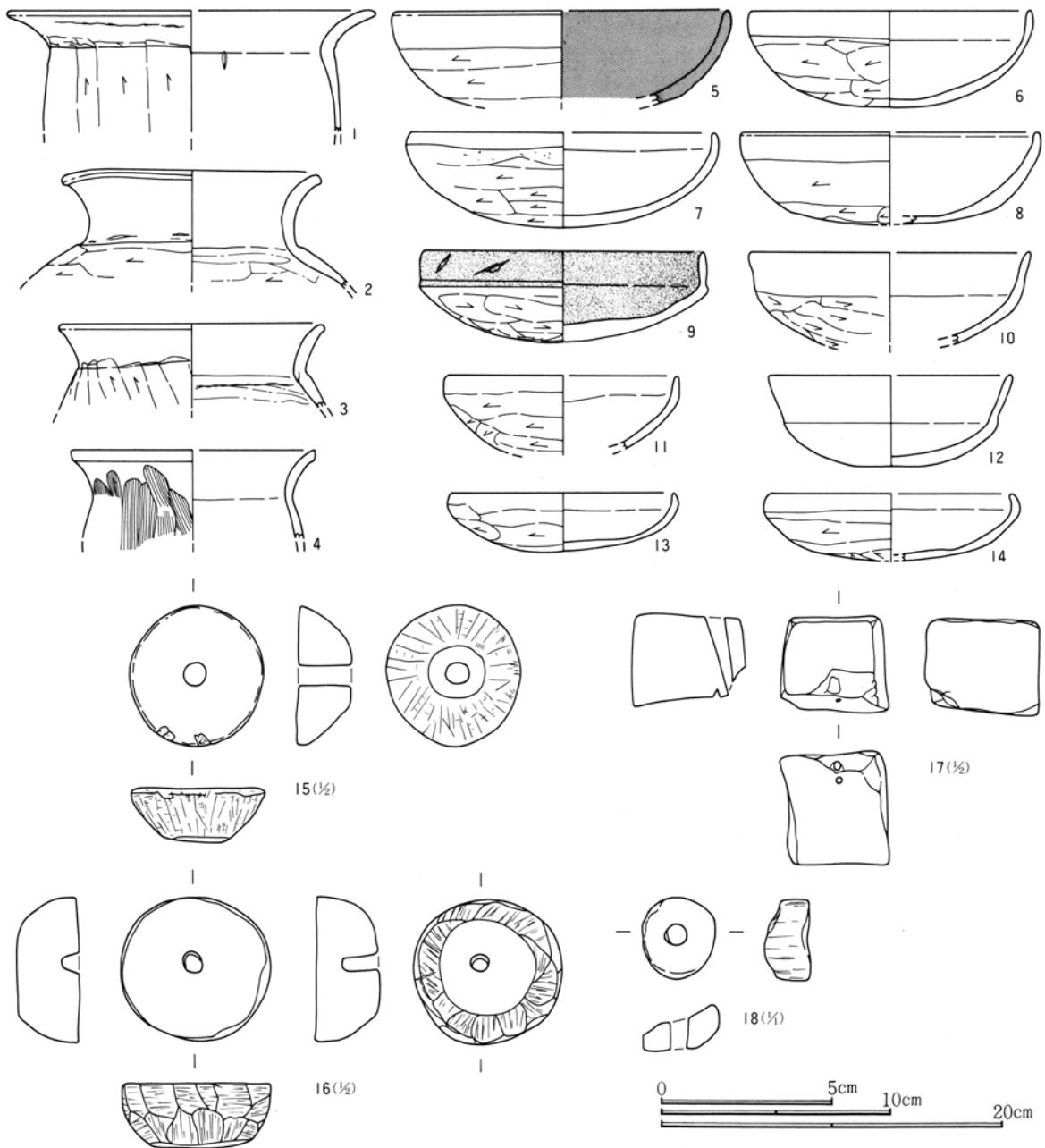


第82図 440号住居跡新北竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第83図 440号住居跡旧東竈実測図



第84図 440号住居跡出土遺物実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

440号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考		
84-1	土 師 器 甕	床面+18 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$	口(21.8) 高 — 底 —	①粗、2~4mmの砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へら削り。 多くの砂粒が移動し器表面粗い。 口縁部横ナデ、輪積痕が残る。		
84-2 81	土 師 器 甕	床面直上 口縁部完形	口 15.2 高 — 底 —	①密、1~2mmの赤色粒と片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へら削り。 砂粒の移動少なく器表面比較的密。 内面ナデにて器表面密。		
84-3	土 師 器 小型甕	床面直上 口縁部~ 肩部完形	口 15.8 高 — 底 —	①やや粗、1~3mmの砂粒を大量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面へら削り。 多くの砂粒が移動し器表面が粗れている。 頸部内側に接合痕が残る。		
84-4	土 師 器 小型甕	床面+5 口縁部 $\frac{1}{4}$	口(14.4) 高 — 底 —	①密、1~2mmの赤色粒をやや多目に含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面刷毛目。 口唇部は、やや平らに仕上げている。 刷毛目整形の甕の出土は類例が少ない。		
84-5	土 師 器 坏	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部 $\frac{1}{2}$	口(15.6) 高 — 底 —	①密、1~2mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部外面へら削り、器表面が粗れており削りの単位不明瞭。内面ナデ。 内面全体が吸炭により黒色、吸炭は断面まで及ぶ。		
84-6 81	土 師 器 坏	床面+10 $\frac{3}{4}$ 残存	口 12.4 高 4.2 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底部へら削り。 砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。		
84-7	土 師 器 坏	床面+6 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部 $\frac{3}{4}$	口(13.6) 高 4.2 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面へら削り。体部ナデ。 内面ナデにて器表面密。		
84-8	土 師 器 坏	床面+5 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部 $\frac{1}{2}$	口(13.2) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部へら削り。 内面ナデにて器表面密。 内面に暗文は描かれていない。		
84-9 82	土 師 器 坏	床面+22 $\frac{2}{3}$ 残存	口 12.5 高 4.1 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り、へらの単位は明瞭である。 口縁部外面~内側底面に黒漆。		
84-10	土 師 器 坏	床面-10 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.4) 高 — 底 —	①密、1mm前後の砂粒と雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り、削りの単位は明瞭である。 内面ナデにて器表面密。 内面に多くの雲母粒が光っている。		
84-11	土 師 器 坏	床面-10 $\frac{1}{3}$ 残存	口(10.5) 高 — 底 —	①密、少量の角閃石を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り、器表面密で削りの単位不明瞭。 内面ナデにて器表面密。 黒斑全く認められず。		
84-12	土 師 器 坏	床面+24 $\frac{1}{2}$ 残存	口(10.6) 高 — 底 —	①密、少量の片岩粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削りと思われるが、削りの単位不明。 器表面全体が粗れている。		
84-13 82	土 師 器 坏	床面-40 $\frac{1}{2}$ 残存	口 10.0 高 2.6 底 —	①密、粉状を呈する ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削りであるが、胎土が粉状のためへらの単位不明瞭。		
84-14 82	土 師 器 坏	床面+18 $\frac{1}{3}$ 残存	口(10.7) 高 3.0 底 —	①密、やや粉状を呈する ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削りであるが、胎土がやや粉状を呈するためへらの単位不明瞭。		
84-15 116	石製品 紡錘車	床面直上 ほぼ完形	径 3.9/1.8 孔径 0.65 滑石片岩 厚 1.6 重 33.6		広面と狭面は磨かれて光沢を持つ。側面は鉄製工具により細長く削られその後磨かれて光沢を持つ。		
84-16 116	石製品 紡錘車	床面+10 ほぼ完形	径 4.4/2.8 孔径 0.4 滑石片岩 厚 2.0 重 63.1		未製品。広面と狭面は自然面。側面下半は荒砥削り。上半はその後研磨。穿孔は途中で中止されている。		
84-17 120	石製品 飾石	覆土	長 3.3 幅 3.2/2.9 砥沢石 孔径0.5~0.2 重 50.0		砥石の破片を再加工。穿孔は一方向からである。完形品。狭い穿孔面の下に目印と思われる凹部あり。		
84-18 115	石製品 白玉	床面+3	径 1.1 孔径 0.3 厚 0.7 重 1.5		滑石片岩。横断面形はほぼ円形を呈し、側面は荒砥削りにより丸く整形。上下面は切り離した後調整。		
遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)				石材・備考
19	124	こも編み石	長 13.5	幅 5.9	厚 4.0	重 405	絹雲母石墨片岩
20	124	こも編み石	長 13.5	幅 4.9	厚 2.6	重 320	点紋緑泥片岩
21	124	こも編み石	長 16.5	幅 5.5	厚 4.0	重 550	絹雲母石墨片岩
22	124	こも編み石	長 15.6	幅 5.8	厚 2.3	重 330	緑簾緑泥片岩
23	124	こも編み石	長 12.9	幅 6.2	厚 3.1	重 335	絹雲母石墨片岩
24	124	こも編み石	長 13.4	幅 6.9	厚 2.6	重 370	絹雲母石墨片岩
25	124	こも編み石	長 15.7	幅 6.3	厚 3.4	重 460	緑簾緑泥片岩
26	124	こも編み石	長 14.7	幅 5.1	厚 2.9	重 360	点紋絹雲母石墨片岩

440号住居跡出土遺物観察表

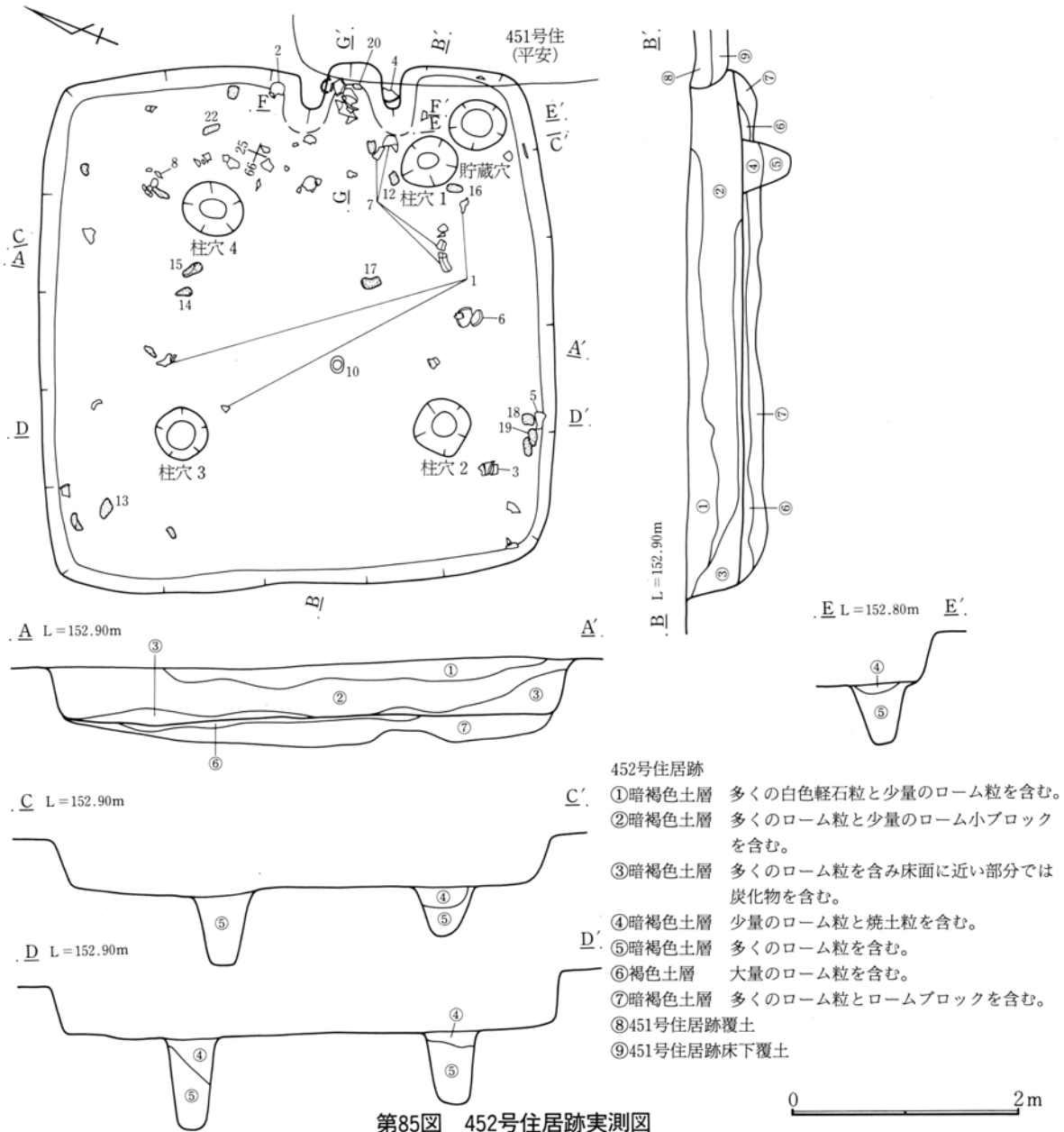
遺物番号	図版番号	器種	法	量(cm)(g)				石材・備考
27	124	こも編み石	長 15.0 幅 4.4 厚 4.6 重 475					点紋絹雲母石墨片岩
28	124	こも編み石	長 13.8 幅 5.3 厚 3.1 重 325					絹雲母石墨片岩
29	124	こも編み石	長 15.7 幅 6.3 厚 3.4 重 315					絹雲母石墨片岩
30	124	こも編み石	長 20.4 幅 6.1 厚 2.4 重 455					絹雲母石墨片岩
31	124	こも編み石	長 14.6 幅 4.9 厚 2.6 重 290					点紋緑泥片岩
32	124	こも編み石	長 14.9 幅 5.1 厚 4.5 重 515					絹雲母石墨片岩
33	124	こも編み石	長 17.2 幅 7.2 厚 2.9 重 495					緑簾緑泥片岩
34	124	こも編み石	長 15.0 幅 6.5 厚 4.0 重 645					緑簾緑泥片岩
35	124	こも編み石	長 18.5 幅 5.3 厚 3.6 重 605					石墨緑泥片岩

452号住居跡 (第85~88図、図版23・82・113・120・124)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、66・67-25グリッドに位置する。

概要 東側で平安時代の451号住居とわずかに重複しており、本住居は451号住居により壁面と覆土を掘り込まれている。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。竈の左側に貯蔵穴が、また柱



第3章 古墳時代の遺構と遺物

穴が4本掘られている。

規模 東西4.60m、南北4.52mである。壁高は残りの良い南西コーナー部分で53cmである。貯蔵穴は径50cm深さ50cmである。柱穴1は径50cm深さ43cm、柱穴2は径52cm深さ64cm、柱穴3は径44cm深さ83cm、柱穴4は径50cm深さ67cmである。

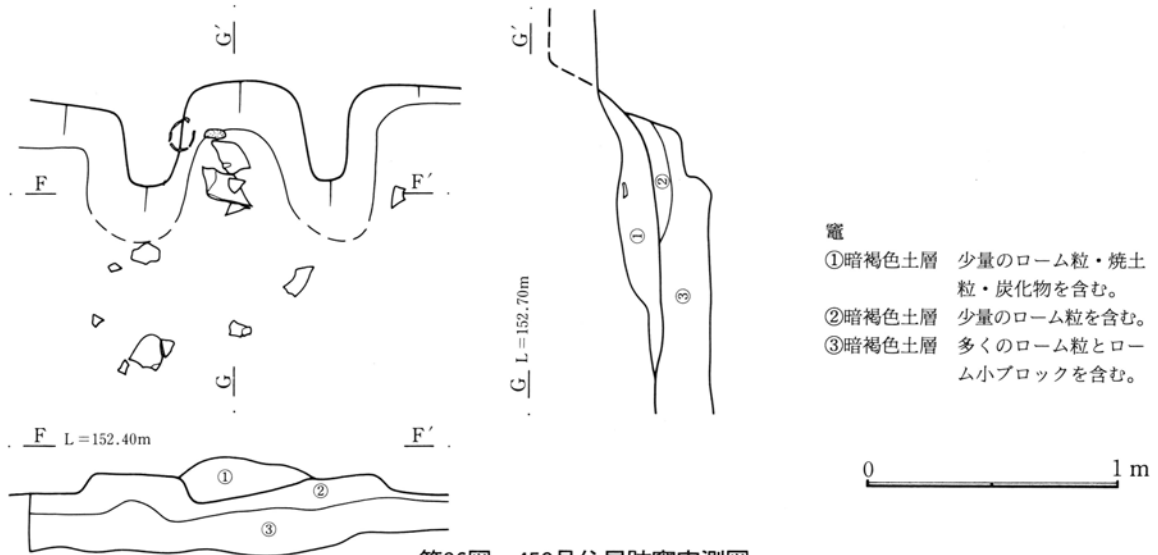
遺物 須恵器の鉢や高坏等が出土している。

(竈)

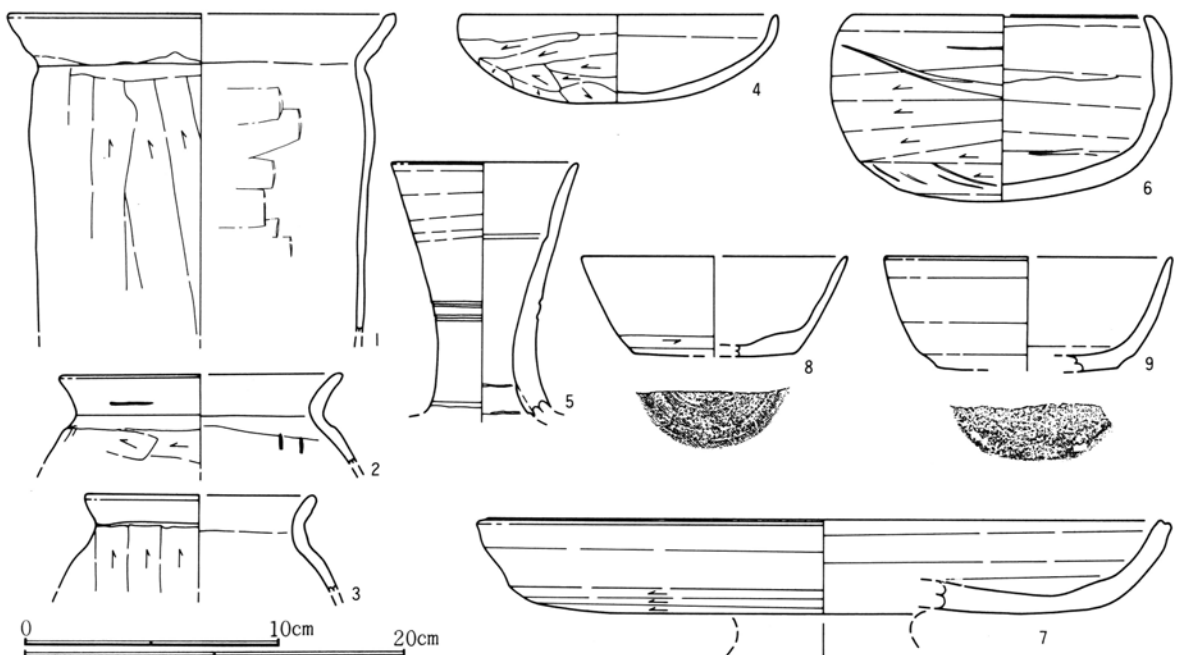
位置 東壁面を掘り込んで造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置し、燃烧部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造 煙道部は451号住居により削られている。また袖と燃烧部の多くは削られて残っていない。竈内より焼土粒の出土も少ない。

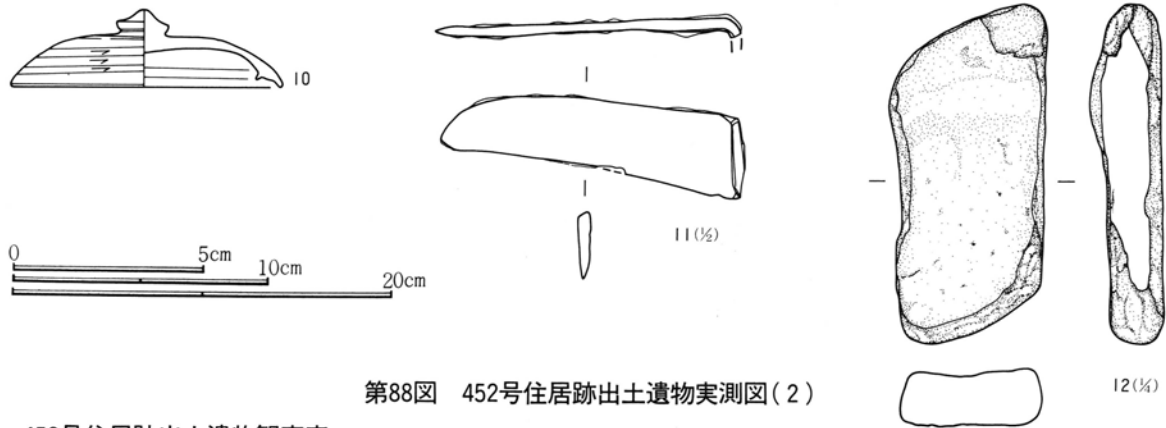
規模 煙道方向不明、燃烧部幅44cmである。



第86図 452号住居跡竈実測図



第87図 452号住居跡出土遺物実測図(1)



第88図 452号住居跡出土遺物実測図(2)

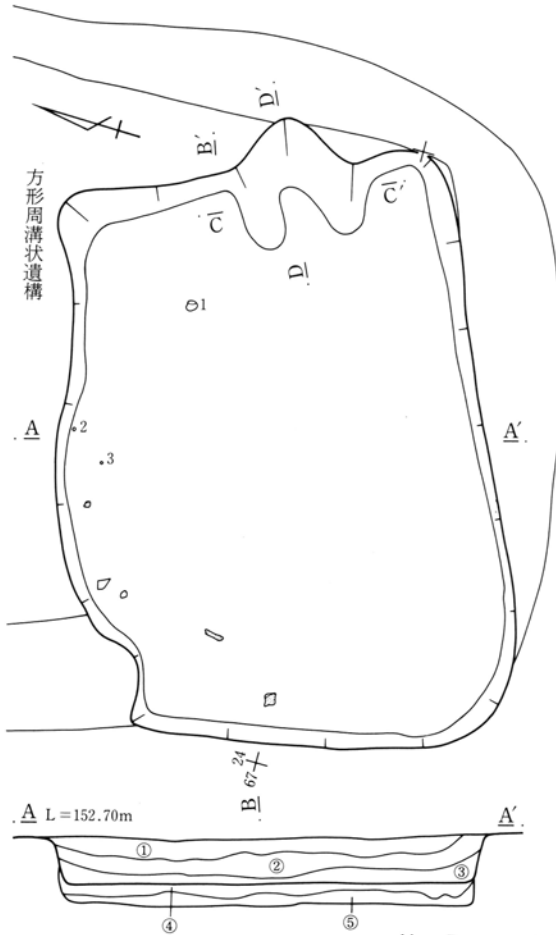
452号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考		
87-1	土師器 甕	床面+11 口縁~胴部 1/2残存	口(20.0) 高— 底—	①粗、2~3mmの砂粒と片岩粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③赤褐色	胴部外面へら削り、多くの砂粒が移動し器表面粗い。大量の砂粒が目立つ。内面ナデにて器表面密。		
87-2	土師器 小型甕	床面直上 口縁~残存	口(14.7) 高— 底—	①密、1mm前後の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③赤褐色	胴部横方向へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。内面にへらの圧痕あり。		
87-3	土師器 甕	床面+6 口縁~胴部 1/2残存	口(11.8) 高— 底—	①密、1mm以下の多くの赤色粒を含む。②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色、断面赤褐色	胴部へら削り、砂粒の移動は少ない。内面ナデにて器表面密。内外面とも吸炭により黒褐色を呈する。		
87-4 82	土師器 坏	床面+20 1/2残存	口12.4 高3.5 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り、小さな砂粒の移動は少量で器表面の粗れは少ない。		
87-5 82	須恵器 長頸壺	床面直上 頸部完形	口9.6 高— 底—	①密、1~2mmの長石粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	頸部に2本の沈線が一周している。頸部下端内側に内置あり。		
87-6 82	須恵器 鉢	床面+10 口縁部1/2 底部1/2	口15.0 高9.7 底—	①密、1mm以下の長石粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	底面手持へら削り。底部周辺~体部外面右回転へら削り。内面ナデ。3~5mmの片岩粒を少量含む。		
87-7 82	須恵器 高坏	床面直上 坏部1/2	口26.0 高— 底—	①密、3~5mmの長石粒と片岩粒を少量含む。②還元焰、硬質 ③灰色	底部中央手持へら削り、周辺部右回転へら削り。口唇部中央が凹状となっている。底部外面中央の整形痕から短脚付と思われる。		
87-8 82	須恵器 坏	床面+13 1/2残存	口(10.2) 高— 底—	①密、小さな白色粒を多く含む ②還元焰、硬質、焼締 ③灰色	底面左回転へら削り。体部下端左回転へら削り。底部周辺の器肉厚い。		
87-9	須恵器 坏	覆土 1/2残存	口(11.2) 高— 底—	①密、片岩粒を含む ②還元焰、硬質 ③内面灰色、外面暗灰色	底面手持へら削り。		
88-10 82	須恵器 蓋	床面+7 完形	口10.4 高— 底—	①密、1mm以下の長石粒を少量含む。②還元焰、硬質 ③灰色	天井部は口縁端部以外ほぼ全面へら削り、カエリは低く強く内傾している。少し歪んでいる。		
88-11 113	鉄製品 鎌	覆土 完形	長7.0 幅2.3 厚0.3 重13.6		小さな鎌であるが、完形品と思われる。		
88-12 120	石製品 砥石	床面+4	長18.0 幅8.2 厚3.0 重680		砂岩。1側面のみ砥石として使用される。		
遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)				石材・備考
13	124	こも編み石	長14.0	幅6.4	厚3.9	重485	絹雲母石墨片岩
14	124	こも編み石	長14.8	幅6.7	厚2.1	重320	絹雲母石墨片岩、火を受けて変色している。
15	124	こも編み石	長13.9	幅7.3	厚3.5	重490	緑泥片岩
16	124	こも編み石	長16.0	幅6.7	厚3.5	重470	緑簾緑泥片岩
17	124	こも編み石	長15.4	幅8.2	厚2.7	重430	点紋絹雲母石墨片岩、両側面一箇所凹状。
18	124	こも編み石	長14.2	幅6.3	厚4.7	重665	絹雲母石墨片岩
19	124	こも編み石	長18.1	幅6.1	厚4.4	重730	点紋緑泥片岩
20	124	こも編み石	長16.5	幅6.7	厚3.0	重470	絹雲母石墨片岩
21	124	こも編み石	長13.1	幅5.2	厚2.3	重210	絹雲母石墨片岩
22	124	こも編み石	長14.8	幅5.9	厚3.9	重520	絹雲母石墨片岩

463号住居跡 (第89~91図、図版24・82・115)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、67・68—25グリッドに位置する。

概要 方形周溝状遺構と重複しており、本住居が方形周溝状遺構を掘り込んでいる。重複関係については第94図を参照。



第89図 463号住居跡実測図

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西4.7m、南北3.09mである。壁高は残りの良い南西コーナー部分で39cmである。

遺物 破片は多いが、図示できる土器は須恵器の1点である。勾玉が2点出土している。

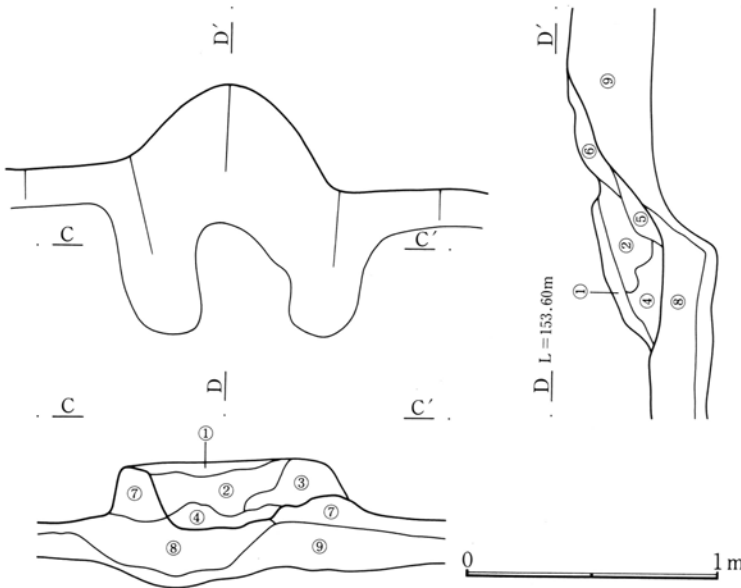
(竈)

位置 東壁面を掘り込んで造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置し、燃烧部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

463号住居跡

- ①黒褐色土層 少量のローム粒を含む。
- ②黒褐色土層 ローム粒とローム小ブロックを含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒と少量のローム小ブロックを含む。
- ④暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑤黄褐色土層 地山のロームを主とする。

0 2m



第90図 463号住居跡竈実測図

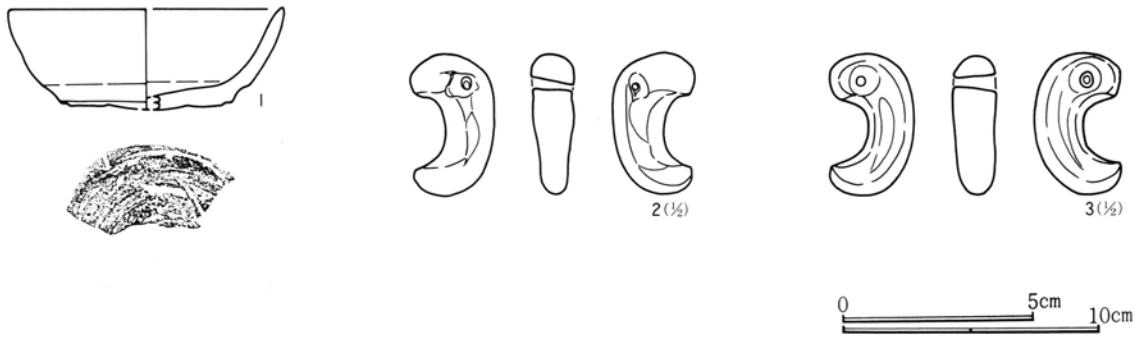
構造 残りが悪く特に右袖部分は残っていない。袖部分は少量のローム粒を含む黒褐色土で造られている。竈内の奥壁に近い覆土中より多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向96cm、燃烧部幅46cmである。

竈

- ①黒褐色土層 少量のローム粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量のローム粒・ローム小ブロック・焼土粒を含む。
- ③黒色土層 ローム粒殆ど含まず。(攪乱層か?)
- ④暗褐色土層 黒褐色土・ローム粒・焼土粒を含む。
- ⑤赤褐色土層 多くの焼土粒を含む。
- ⑥暗褐色土層 少量の焼土粒と白色軽石粒を含む。
- ⑦黒褐色土層 多くの焼土粒を含む。
- ⑧暗褐色土層 多くのローム粒・ロームブロックと少量の焼土粒を含む。
- ⑨黄褐色土層 地山のロームを主とする。

0 1m



第91図 463号住居跡出土遺物実測図

463号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
91-1	須恵器 高坏	床面+35 口~底部1/4	口(10.8) 高— 底—	①粗、2~4mmの片岩粒を多く含む。②還元焰、硬質③灰色	底面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。
91-2 115	石製品 勾玉	床面直上 完形	長 3.7 厚 1.1	孔径 0.1~0.3 重 10.0	石材(玉髓)。表面全体が磨かれて光沢を持つ。 頭部の穿孔は片側からである。
91-3 115	石製品 勾玉	床面+20 完形	長 3.8 厚 1.2	孔径 0.2~0.4 重 11.1	石材(玉髓)。穿孔は片側から行なわれている。 玉髓の中では材質は良好でない。部分的に亀裂。

468号住居跡 (第92~95図、図版24・82・124)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、66・67-27・28グリッドに位置する。

概要 本住居を含め10軒の住居が重複している。本住居は直接には6軒の重複である。本住居は古墳時代の511号住居のほぼ全面と469号住居の南東部分、466号住居南西壁面部分の覆土上面を掘り込んで造られている。また北東コーナー部分では奈良時代の480号住居により覆土を、また南西部分では平安時代の465号住居により床面部分まで掘り込まれている。6軒の新旧関係は511→469→466→468→480→465号住居である。貯蔵穴を囲むように高さ2~3cmのロームを中心とした帯状の僅かな高まりが、貯蔵穴の西側にL字状に造られている。重複関係については第94図を参照

構造 床面の多くは511号住居や469号住居の覆土を削り込んで造られており、通常は検出が困難である。しかし本住居では比較的良好な状態で確認できた。貯蔵穴が竈の右側に掘られていたが、柱穴は確認できなかったが、おそらく掘られていたものと思われる。

規模 東西5.70m、南北5.38mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で34cmである。貯蔵穴は径56cm深さ61cmである。

遺物 甕の破片が大量に、また貯蔵穴付近に土師器の甕・高坏・坏が多く出土している。須恵器の高坏が注目される。

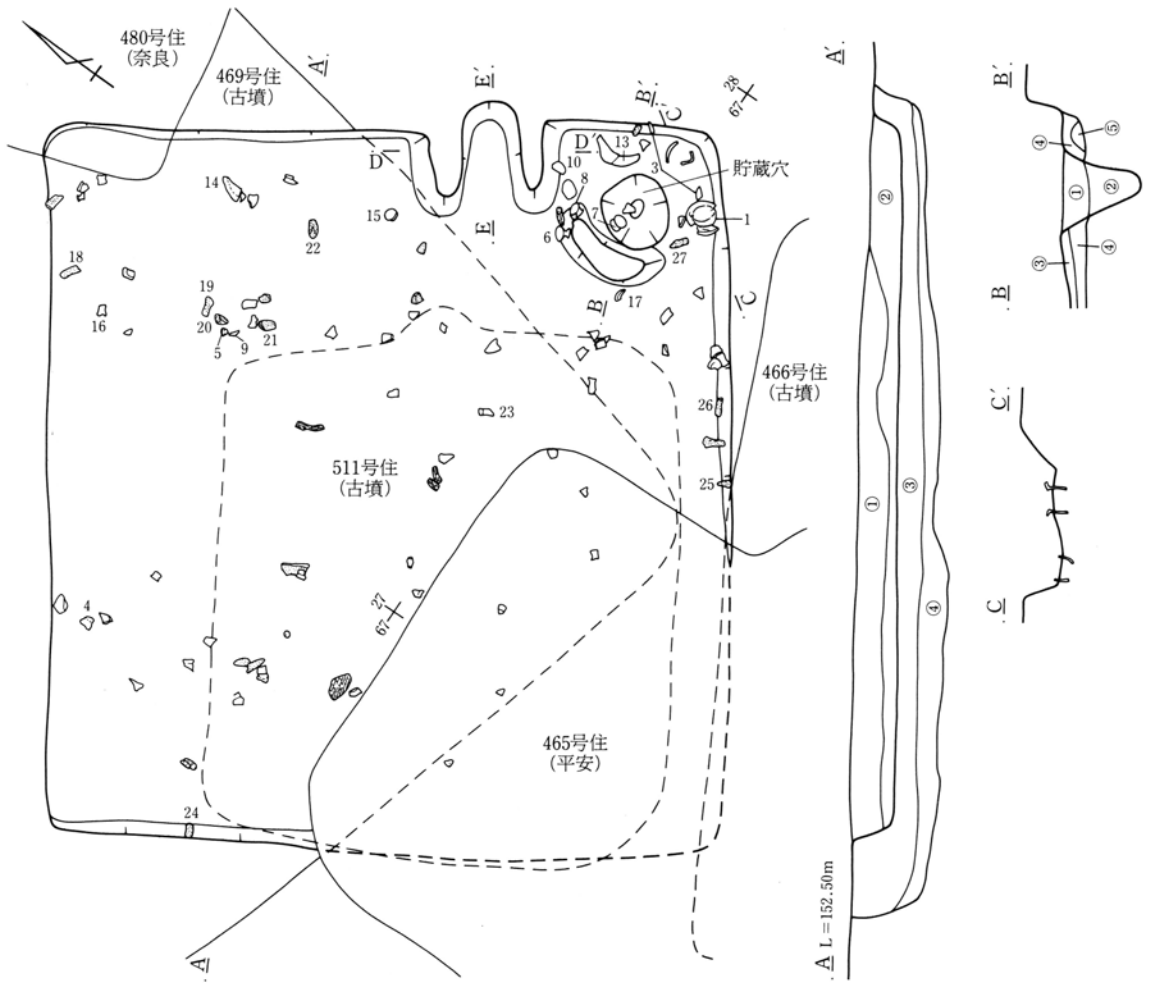
(竈)

位置 東壁面の南寄りに造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置し、燃烧部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造 残りは比較的良好である。袖部分は少量のローム粒を含む暗褐色土で造られている。竈内や煙道部周辺から多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向86cm、燃烧部幅43cmである。

第3章 古墳時代の遺構と遺物



貯蔵穴

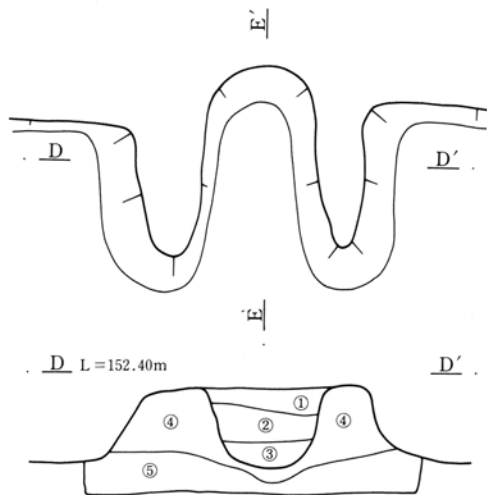
- ①暗褐色土層 ローム粒・粘質土・炭化物を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ③褐色土層 多くのローム粒を含む。固く踏み固められている。
- ④褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑤黄褐色土層 地山のロームを主とする。

468号住居跡

- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒と少量のローム粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量のローム粒と炭を含む。
- ③469号住居跡覆土
- ④469号住居跡床下覆土

0 2m

第92図 468号住居跡実測図



竈

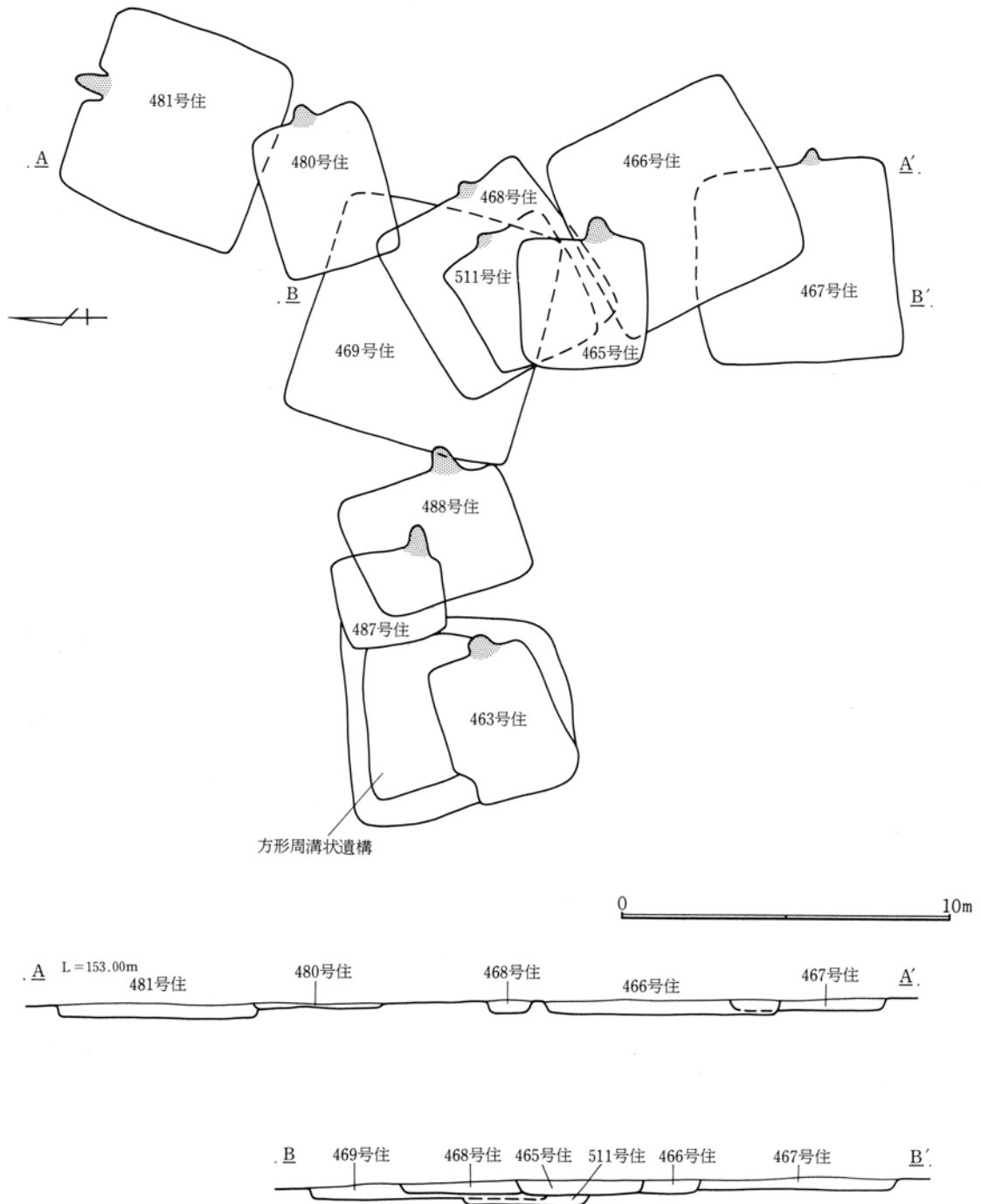
- ①暗褐色土層 少量の白色軽石粒とローム粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くの灰黄褐色粘土と焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くの焼土粒と少量の灰を含む。
- ④暗褐色土層 少量の焼土粒を含む。
- ⑤褐色土層 多くのローム粒とロームブロックと少量の焼土粒を含む。

0 1m

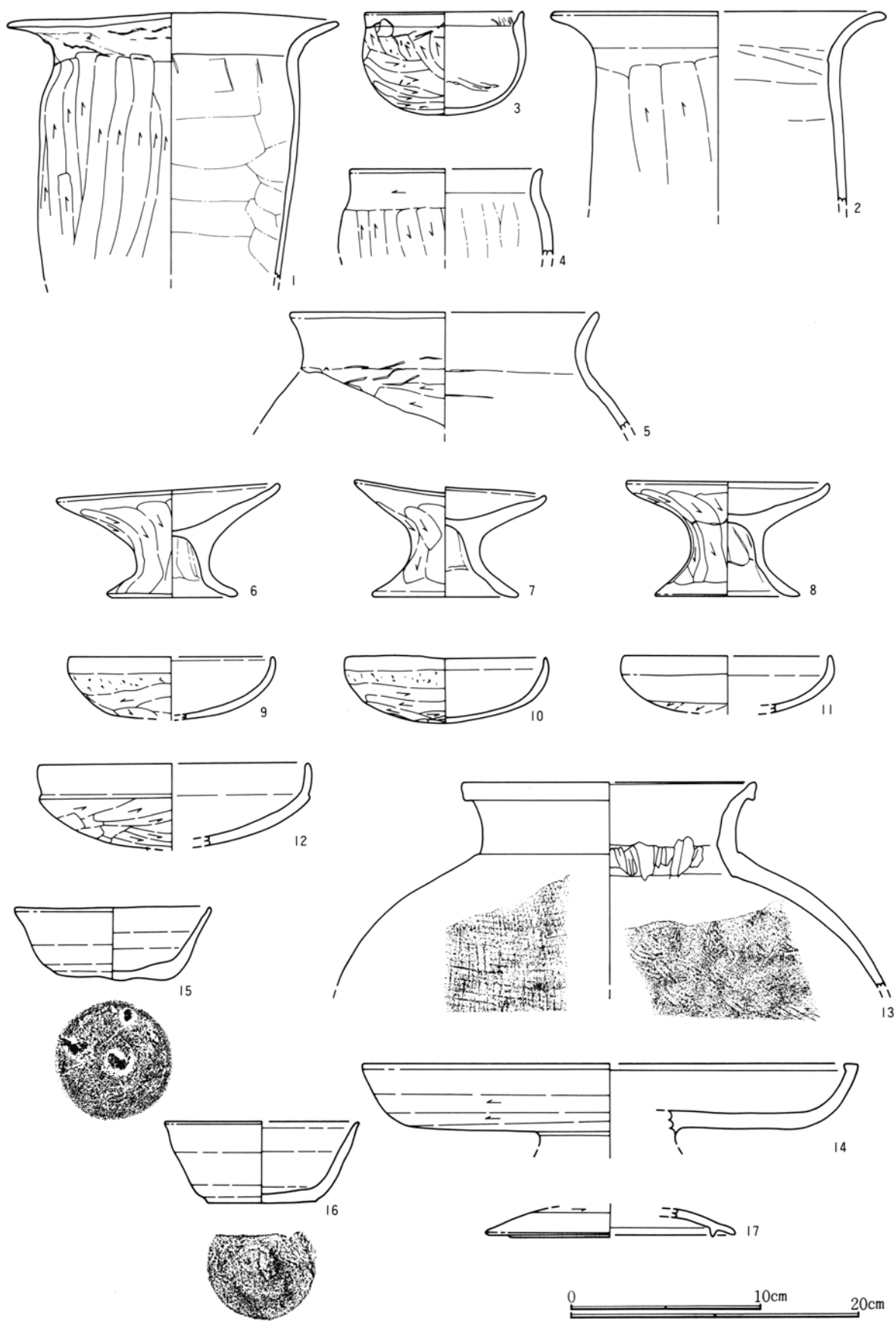
第93図 468号住居跡竈実測図

各住居跡の所属年代を整理すれば次のようになる。

- ◎古墳時代……463・468号住居跡（今回報告）466・467・469・481・511号住居跡（矢田遺跡IV報告済）
- ◎奈良時代……487・488号住居跡（今回報告）
- ◎平安時代……465号住居跡（矢田遺跡III報告済）480号住居跡（今回報告）



第94図 468号住居跡周辺遺構重複関係図



第95図 468号住居跡出土遺物実測図

468号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考		
95-1 82	土器 甕	床面+20 1/2残存	口 23.0 高 — 底 —	①やや粗、2~3mmの砂粒と片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部強いヘラ削り、削りの単位明瞭。内面ナデにて器表面密。全体に少し歪んでいる。		
95-2	土器 甕	床面+6 1/2残存	口(22.5) 高 — 底 —	①粗、2~4mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部ヘラ削り、多くの砂粒が移動し器表面が粗い。		
95-3 82	土器 小型甕	床面+7 1/2残存	口 10.7 高 7.2 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③断面橙色、表面暗赤褐色	胴部外面ヘラ削り、器表面の粗れは少なく削りの単位は明瞭である。多くの吸炭が認められる。		
95-4	土器 小型甕	床面+21 1/2残存	口(13.2) 高 — 底 —	①密、1mm以下の白色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③黒色	胴部ヘラ削り、その後口縁部横ナデ。胴部内面ナデ。内外断面とも吸炭により黒色を呈している。		
95-5	土器 壺	床面+5 破片	口(21.2) 高 — 底 —	①密、1~3mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	胴部外面ヘラ削り、砂粒の移動少なく器表面の粗れが少ない。		
95-6 82	土器 高坏	床面+1 完形	口 11.6 高 5.9 底 6.8	①密、1~2mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚と坏外面ヘラ削り、脚内面ナデ、坏内面ナデにて器表面密。全体に少し歪んでいる。		
95-7 82	土器 高坏	床面-2 完形	口 10.0 高 6.0 底 7.6	①密、1~2mmの砂粒を多く含む、片岩粒少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	脚と坏外面ヘラ削り、脚内面ナデ、坏内面ナデにて器表面密。全体に少し歪んでいる。		
95-8 82	土器 高坏	床面+4 完形	口 10.4 高 6.0 底 7.5	①やや粗、1mm前後の砂粒を多く、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	脚と坏外面ヘラ削り、脚外面下部ヘラ削り、上部ナデ、坏内面ナデにて器表面密。坏部が浅く、皿状を呈する高坏である。		
95-9 82	土器 坏	床面+5 1/2残存	口(10.6) 高・底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。		
95-10 82	土器 坏	床面+9 1/2残存	口 10.3 高 3.5 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色、底面黒色	底面ヘラ削り。体部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。底面の多くは吸炭により黒色を呈している。		
95-11	土器 坏	覆土 1/2残存	口(10.7) 高・底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、砂粒の移動は少ない。体部ナデ。内面ナデにて器表面密。		
95-12	土器 坏	覆土 1/2残存	口(14.0) 高・底—	①密、2~3mmの赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質。 ③橙色	底面ヘラナデ、ナデの幅が狭く砂粒の移動が少ない。内面ナデにて器表面密。		
95-13	須恵器 甕	床面直上 口縁~ 胴上部1/2	口(20.1) 高 — 底 —	①密、小さな白色粒を含む。 ②還元焰、硬質、焼締 ③外面灰色、内面褐色	胴部外面格子状叩き。内面青海波文。ていねいなつくりである。		
95-14	須恵器 高坏	床面+6 1/2残存 脚部欠損	口(25.4) 高 — 底 —	①密、1~3mmの白色粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰褐色	底面回転ヘラ削り。口縁端部、口唇部は平らで幅広くなっている。		
95-15 82	須恵器 坏	床面+4 口縁一部欠 他完形	口 10.0 高 3.7 底 6.0	①密、1mm前後の長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面ヘラ切り。中央部に凸状部残る。		
95-16 82	須恵器 坏	床面+14 1/2残存	口(10.0) 高 4.2 底 5.6	①密、1mm前後の長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面手持ヘラ削り、ヘラ切り後の再調整と思われる。		
95-17	須恵器 蓋	床面+4 口縁部1/2	口(12.8) 高 — 底 —	①やや粗、1~3mmの片岩粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	天井ヘラ削り。摘みは細長く、口縁端部より下方へ延びている。		
遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)				石材・備考
18	124	こも編み石	長 14.8	幅 5.8	厚 3.1	重 380	絹雲母石墨片岩
19	124	こも編み石	長 14.7	幅 6.2	厚 3.7	重 510	緑泥片岩
20	124	こも編み石	長 12.9	幅 5.8	厚 3.5	重 420	石墨緑泥片岩
21	124	こも編み石	長 12.2	幅 8.0	厚 2.4	重 320	雲母石墨片岩
22	124	こも編み石	長 14.4	幅 7.6	厚 2.6	重 470	点紋石墨緑泥片岩
23	124	こも編み石	長 13.5	幅 6.9	厚 5.7	重 685	絹雲母石墨片岩
24	124	こも編み石	長 14.4	幅 6.6	厚 3.0	重 425	石墨緑泥片岩
25	124	こも編み石	長 13.5	幅 6.6	厚 3.3	重 510	点紋緑泥片岩
26	124	こも編み石	長 15.0	幅 4.4	厚 3.9	重 420	点紋緑泥片岩
27	124	こも編み石	長 15.7	幅 5.4	厚 2.0	重 265	緑泥片岩

第3章 古墳時代の遺構と遺物

470号住居跡 (第96・97図、図版24・25・82)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、59—8グリッドに位置する。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西2.45m、南北2.90mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で30cmである。

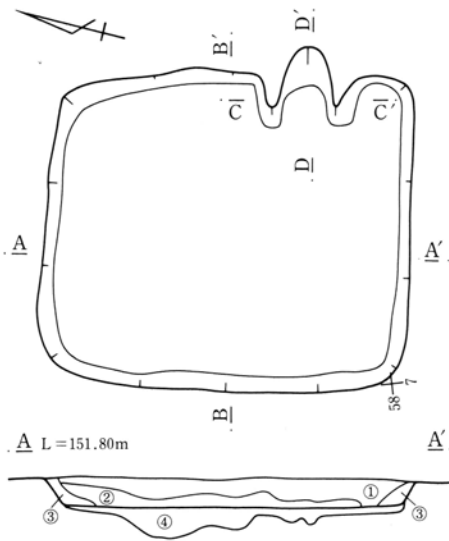
遺物 出土量は少なく、図示できたのは土師器の坏1点である。

(竈)

位置 東壁面の南寄りに造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置し、燃烧部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造 住居が小さいためか竈も小さい。袖部分は少量のローム粒とローム小ブロックを含む暗褐色土で造られている。竈内から焼土粒の出土は少ない。

規模 煙道方向63cm、燃烧部幅38cmである。

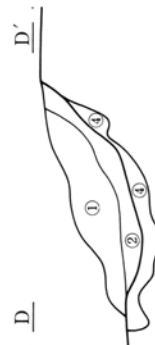
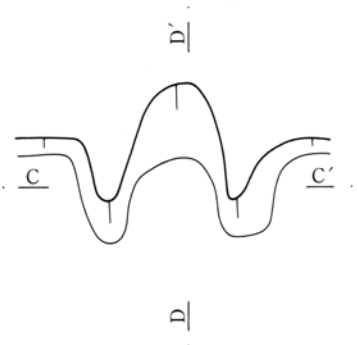


470号住居跡

- ①暗褐色土層 少量の白色軽石粒とローム粒を含む。
- ②褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ③暗黄褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ④暗黄褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

0 2m

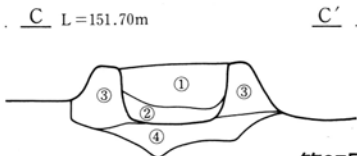
第96図 470号住居跡実測図



竈

- ①暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量のローム粒とやや多くの焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 やや多くのローム粒とローム小ブロックと少量の焼土粒を含む。
- ④黒褐色土層 少量のロームブロック・灰・焼土粒を含む。

0 1m



0 10cm

第97図 470号住居跡竈・出土遺物実測図

470号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
97-1 82	土師器 坏	覆土 口縁部 $\frac{3}{4}$ 底部 $\frac{1}{4}$	口 10.4 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焙、硬質 ③橙色	底面へラ削り、削りの単位不明瞭。 内面ナデにて器表面密。 黒斑全く認められず。

472号住居跡 (第98~100図、図版25・82・120)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、60-7グリッドに位置する。

概要 北側部分は調査区域外で、住居の約1/2の調査である。西側で奈良時代の473号住居と重複している。重複部分が狭い範囲であることや、その部分の一部に攪乱土坑が掘られていることにより、新旧関係は明確でなかったが、調査の結果473号住居により重複部分を床下部分まで掘り込まれている。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。調査範囲内において貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西南北とも不明である。壁高は残りの良い南東コーナー部分で22cmである。

遺物 土器の出土は少なく、破片20片と図示した坏3点である。

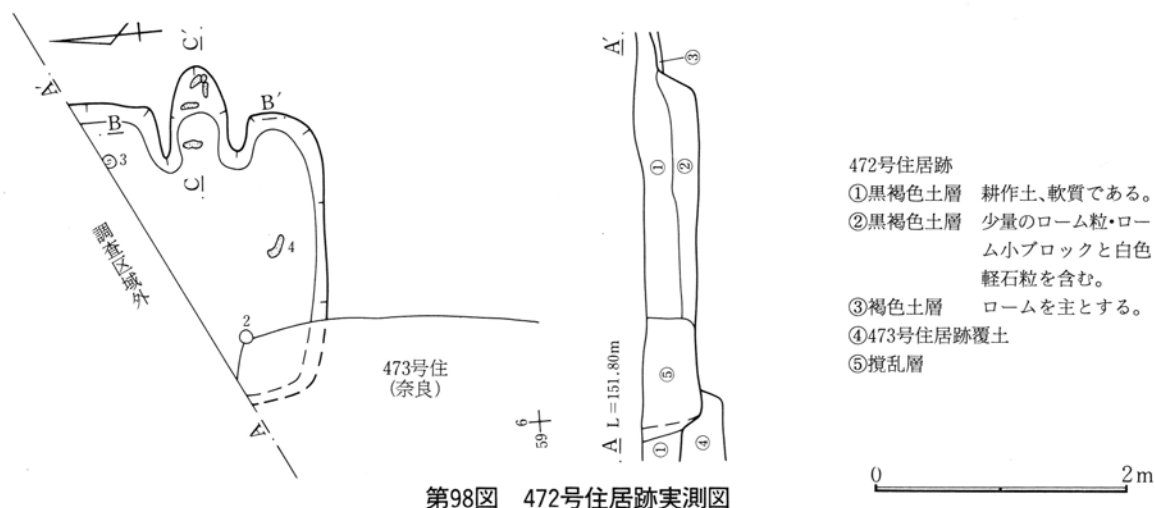
(竈)

位置 東壁面を掘り込んで造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

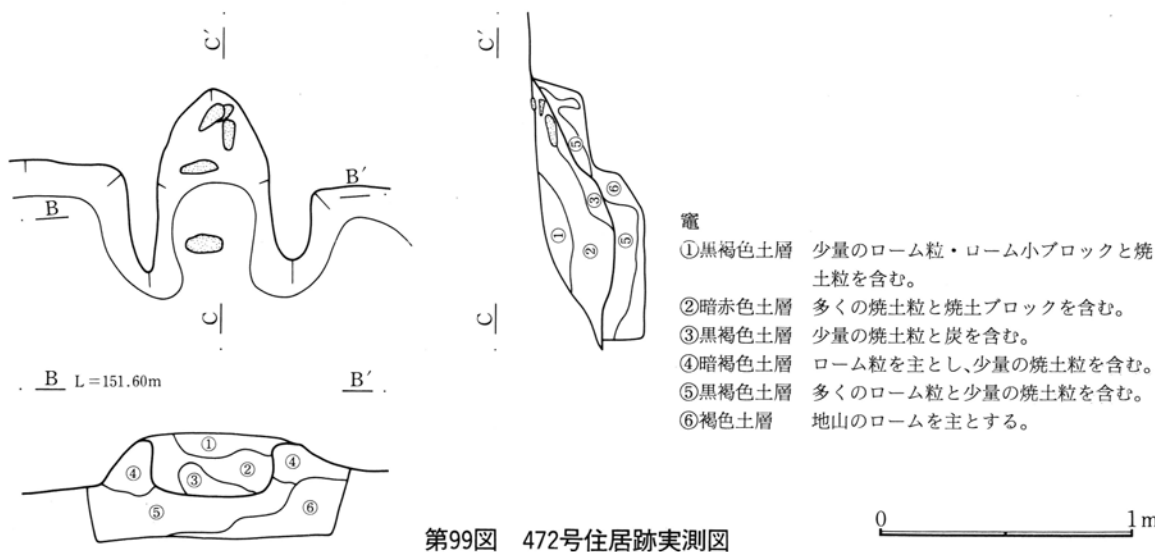
構造 比較的残りは良好である。竈内より5個のこも編石が出土しているが、袖石等は使用されていない。

袖部分は少量のローム粒を含む暗褐色土で造られている。竈内より多くの焼土粒が出土している。

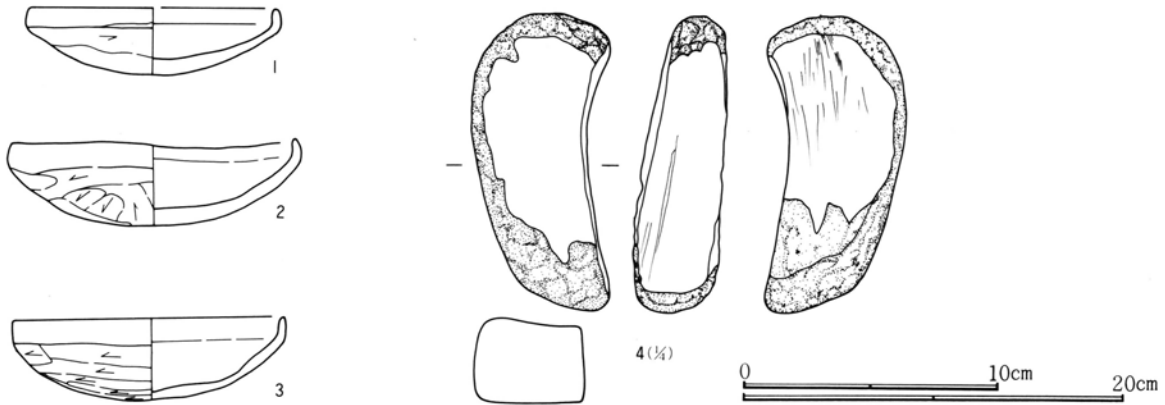
規模 煙道方向82cm、燃焼部幅48cmである。



第98図 472号住居跡実測図



第99図 472号住居跡実測図



第100図 472号住居跡出土遺物実測図

472号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
100-1	土師器 坏	覆土 1/2残存	口(10.0) 高 2.7 底 -	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位不明瞭。 内面ナデにて器表面密。 内側底面に黒漆に似た黒色塗料が付着。
100-2 82	土師器 坏	床面直上 完形	口 10.6 高 3.2 底 -	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位明瞭。 小さな砂粒が移動し、器表面やや粗れている。
100-3 82	土師器 坏	床面直上 完形	口 11.1 高 3.1 底 -	①やや粗、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が移動し、器表面やや粗い。 内側器表面密。
100-4 120	石製品 砥石	床面直上 完形	長 15.7 幅 6.0 厚 4.0 重 695		流紋岩。3側面を砥石として使用している。 砥石面に細長い工具痕が多く残る。

474号住居跡 (第101図、図版25・82)

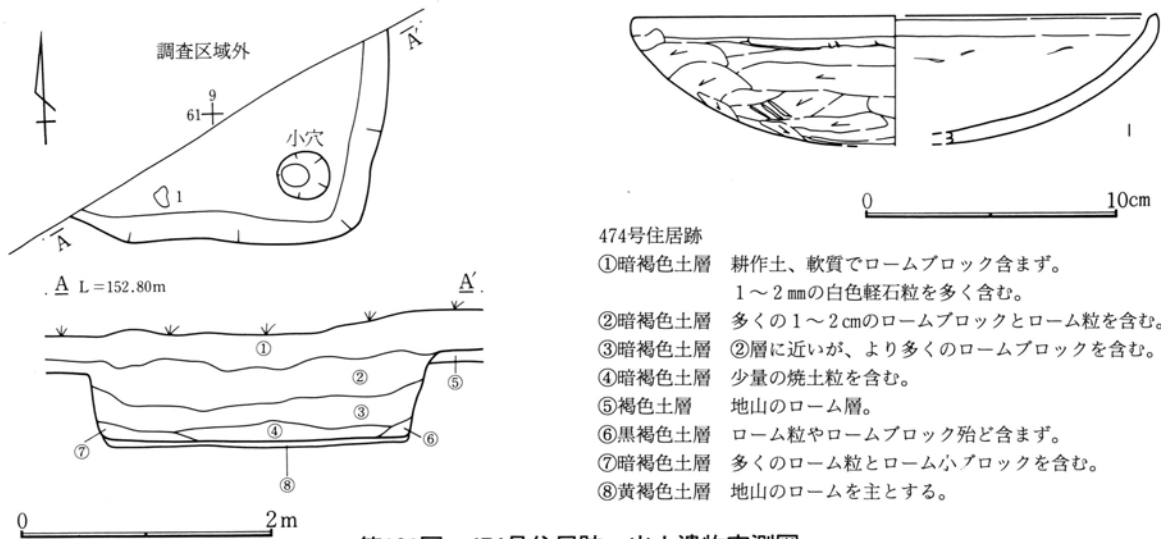
位置 本住居跡は第7次調査区にあり、61-9・10グリッドに位置する。

概要 北側部分は調査区域外であり、住居の一部しか調査できなかった。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。竈や貯蔵穴及び柱穴は全く不明である。南東コーナー部分に小穴が1本掘られている。

規模 東西南北とも不明である。壁高は残りの良い南東コーナー部分で58cmである。小穴は径40cm深さ37cmである。

遺物 出土量は少なく、図示できたのは土師器の坏1点である。



474号住居跡

- ①暗褐色土層 耕作土、軟質でロームブロック含まず。
1~2mmの白色軽石粒を多く含む。
- ②暗褐色土層 多くの1~2cmのロームブロックとローム粒を含む。
- ③暗褐色土層 ②層に近いが、より多くのロームブロックを含む。
- ④暗褐色土層 少量の焼土粒を含む。
- ⑤褐色土層 地山のローム層。
- ⑥黒褐色土層 ローム粒やロームブロック殆ど含まず。
- ⑦暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ⑧黄褐色土層 地山のロームを主とする。

第101図 474号住居跡・出土遺物実測図

474号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
101-1 82	土師器 坏	床面+24 2/3残存	口(21.0) 高— 底—	①密、1mm内外の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り、砂粒の移動少なく器表面比較的密。 内面ナデにて器表面密。

484号住居跡 (第102~105図、図版25・26・82・83・115)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、64・65-22・23グリッドに位置する。

概要 本住居の覆土上面を平安時代の483号住居により削られている。また南壁面に接して平安時代の482号住居が造られている。覆土上面は削られていたが、掘り込みが深いため住居の残りは良好である。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。床下土坑が1本掘られていたが、貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西3.36m、南北3.50mである。壁高は残りの良い南西コーナー部分で48cmである。床下土坑は径110cm深さ27cmである。

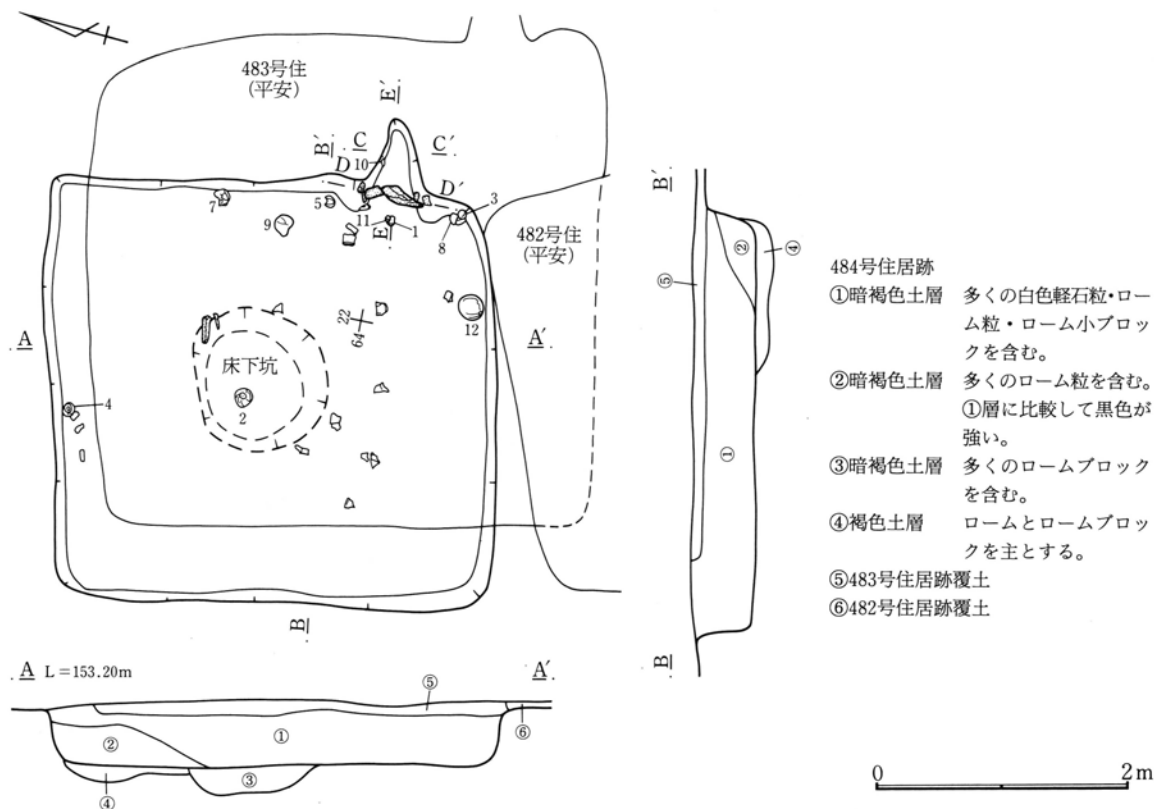
遺物 竈手前より土師器の坏が多く出土している。須恵器の高坏と勾玉が注目される。

(竈)

位置 東壁面南寄りを掘り込んで造られている。袖部分は床面上に位置するが、燃烧部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

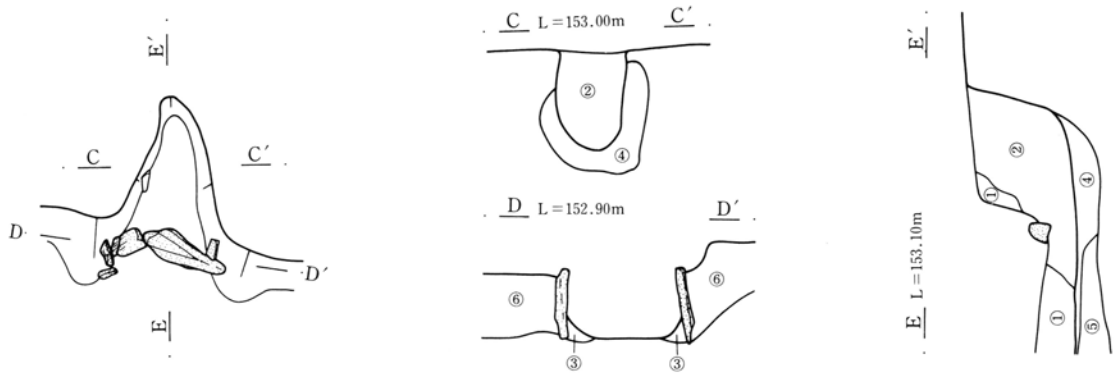
概要 両袖石がほぼ使用時に近い状態で残っている。また天井石が焚口部分に落ちた状態で残っている。煙道部の天井は残っていない。竈内より焼土粒の出土は少量である。

規模 煙道方向83cm、燃烧部幅44cmである。



第102図 484号住居跡実測図

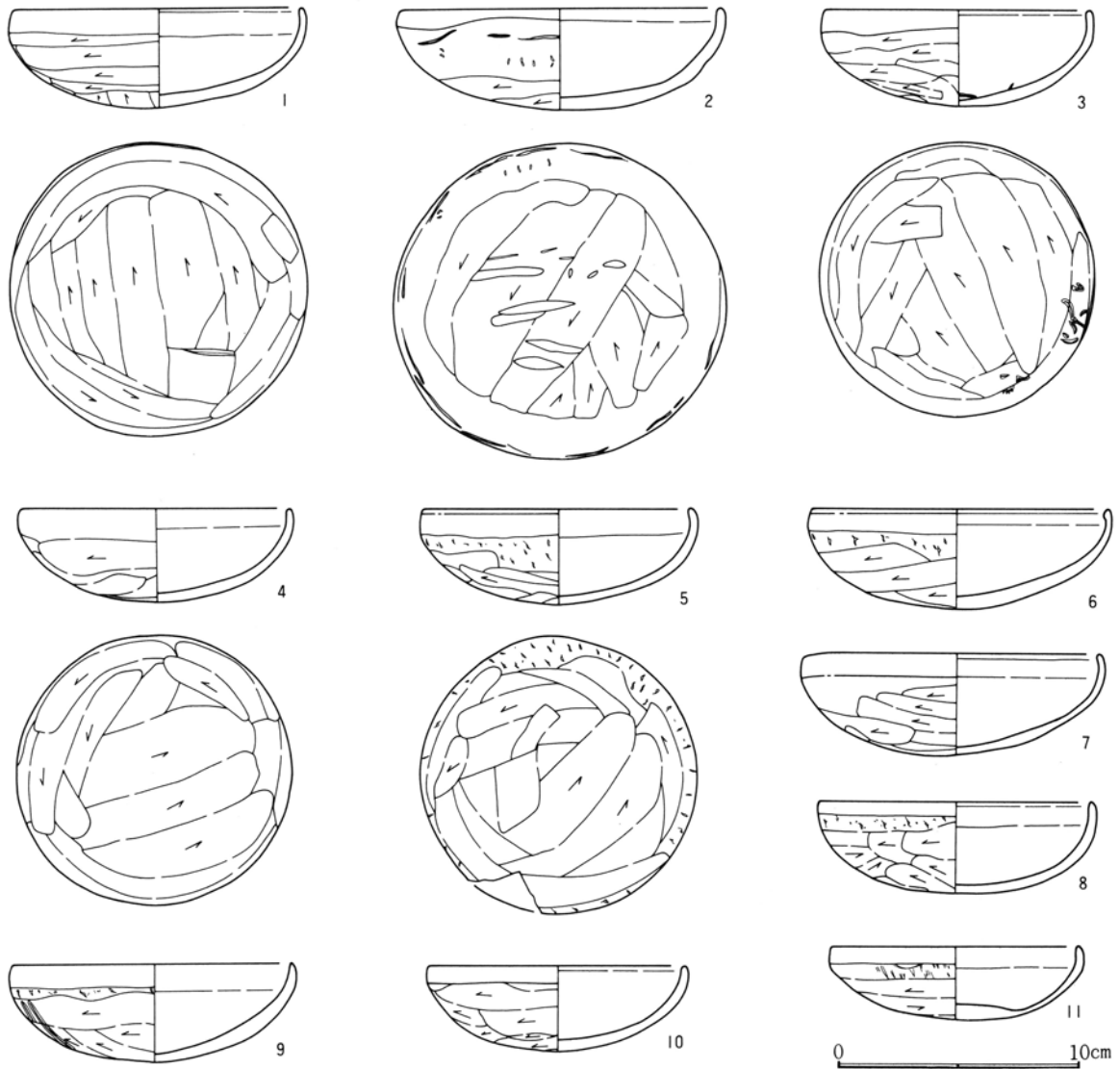
第3章 古墳時代の遺構と遺物



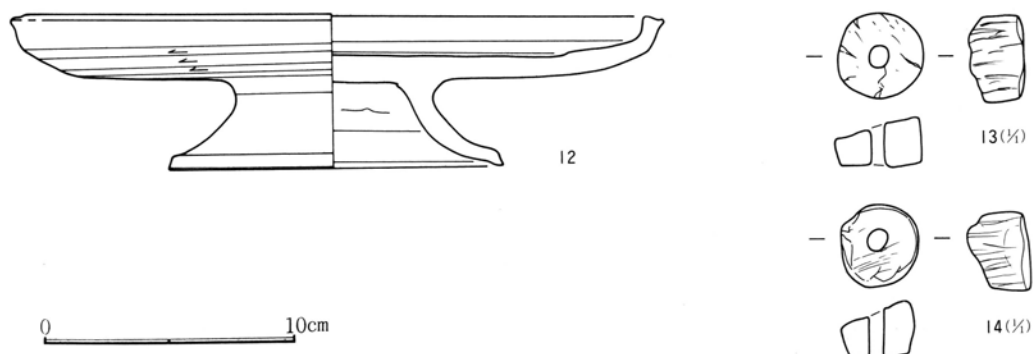
竈

- ①暗褐色土層 少量の白色軽石粒と焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム小ブロックと焼土粒と少量の炭化物を含む。
- ③褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ④暗褐色土層 多くのローム小ブロックと少量の焼土粒を含む。
- ⑤褐色土層 多くのロームブロックを含む。
- ⑥黄褐色土層 地山のロームを主とする。

第103図 484号住居跡竈実測図



第104図 484号住居跡出土遺物実測図(1)



第105図 484号住居跡出土遺物実測図(2)

484号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
104-1 82	土師器 坏	床面+2 完形	口 11.8 高 4.0 底 -	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、砂粒や粘土が移動し器表面やや粗い。固く焼成されている。
104-2 82	土師器 坏	床面+5 ほぼ完形	口 13.3 高 4.0 底 -	①密、1mm以下の砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。製作時の粘土の接合痕多く残る。内面ナデにて器表面密。内側底面中央に小さな砂粒が目立つ。
104-3 82	土師器 坏	床面+5 完形	口 11.0 高 3.9 底 -	①密、1~2mmの赤色粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、削りの単位は比較的明瞭である。内外器表面に黒漆と思われる黒色物が多く付着。
104-4 82	土師器 坏	床面直上 完形	口 11.2 高 3.8 底 -	①密、1~2mmの赤色粒を含む ②酸化焰、硬質 ③赤褐色	底面ヘラ削り、削りの単位は比較的明瞭。内外器表面に黒漆と思われる黒色物が多く付着。
104-5 82	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 10.9 高 3.9 底 -	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、削りの単位は比較的明瞭。体部ナデ。
104-6 82	土師器 坏	覆土 ほぼ完形	口 12.0 高 4.0 底 -	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。内面ナデにて器表面密。内側器表面に黒漆と思われる黒色物が多く付着。
104-7 83	土師器 坏	床面+6 ほぼ完形	口 12.2 高 4.2 底 -	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面ヘラ削り、削りの単位は比較的明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。内外器表面に黒漆と思われる黒色物が多く付着。
104-8 83	土師器 坏	床面直上 1/2残存	口 11.0 高 3.3 底 -	①密、1~2mmの赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底部ヘラ削り。体部ナデ。内面ナデにて器表面密。内外器表面に黒漆と思われる黒色物が多く付着。
104-9 83	土師器 坏	床面直上 1/2残存	口 11.4 高 4.0 底 -	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。内面ナデにて器表面密。内外器表面に黒漆と思われる黒色物が多く付着。
104-10 83	土師器 坏	床面直上 1/2残存	口 10.6 高 3.5 底 -	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。内外器表面に黒漆と思われる黒色物が多く付着。
104-11 83	土師器 坏	床面直上 口縁一部欠 他完形	口 10.2 高 3.0 底 -	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色、一部黒色	底面ヘラ削り。体部ナデ。内面ナデにて器表面密。底面の一部吸炭により黒色を呈する。
105-12 83	須恵器 高坏	床面直上 ほぼ完形	口 24.2 高 6.0 底 13.0	①密、3~5mmの長石粒と片岩粒を少量含む。②還元焰、硬質 ③灰色	坏底面右回転ヘラ削り。口唇部はほぼ平らでわずかに中央部が凹状となっている。ゆがみの少ない、ていねいなつくりである。
105-13 115	石製品 白玉	床面+5	径 1.1 孔径 0.2 厚 0.6 重 2.0		滑石片岩。横断面は円形。側面は荒砥削り。上下面は無調整か。
105-14 115	石製品 白玉	床面-25	径 1.0 孔径 0.2 厚 0.8 重 1.2		滑石片岩。横断面はほぼ円形。側面は荒砥削り。上下面はわずかに再調整。小さな白玉である。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

503号住居跡 (第106~109図、図版26・83・116)

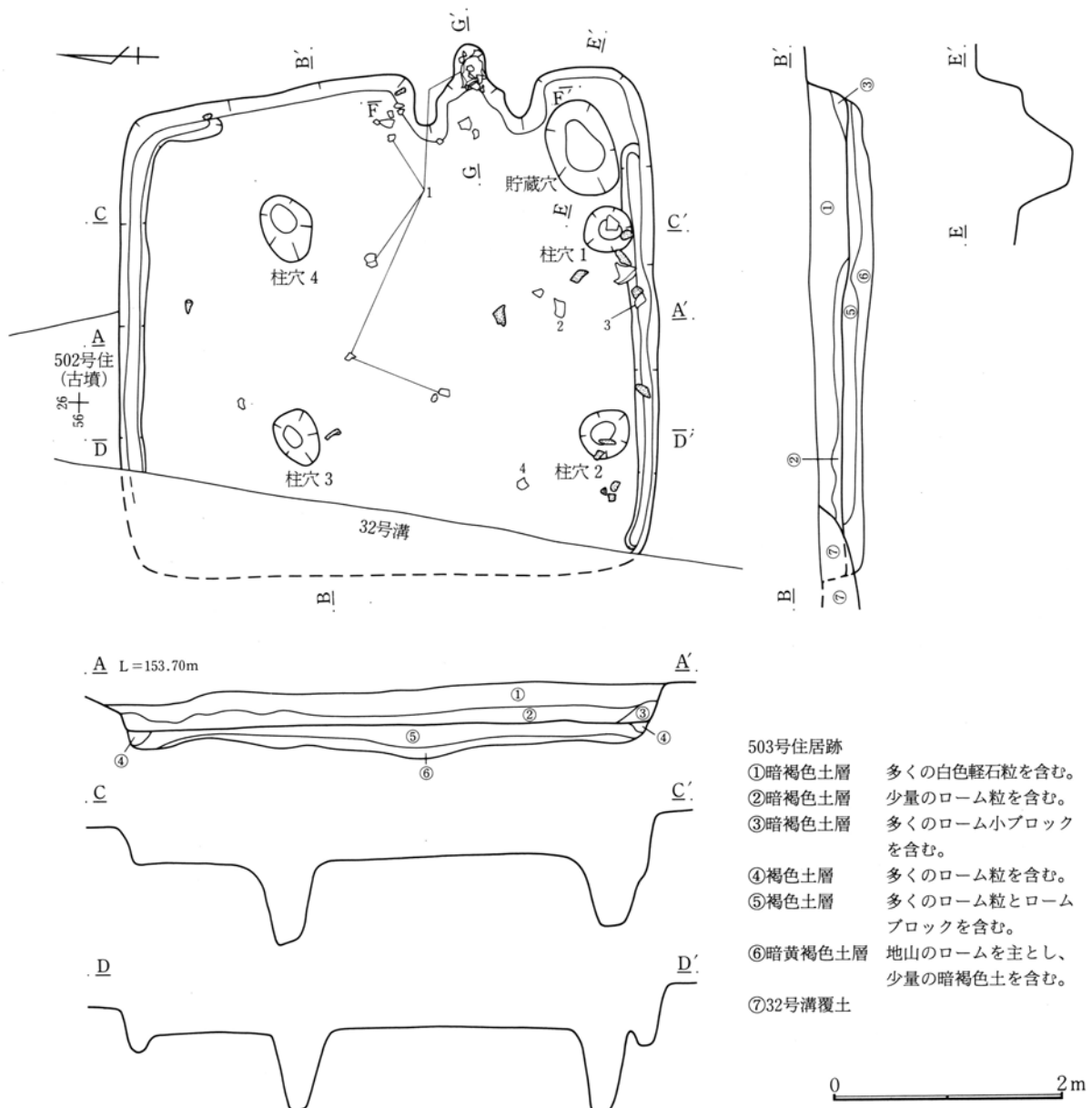
位置 本住居跡は第7次調査区にあり、56-26・27グリッドに位置する。

概要 北西部分で古墳時代の502号住居と重複しており、さらに重複部分を32号溝により床下部分まで深く掘り込まれている。そのため西側の住居範囲は確認できなかった。

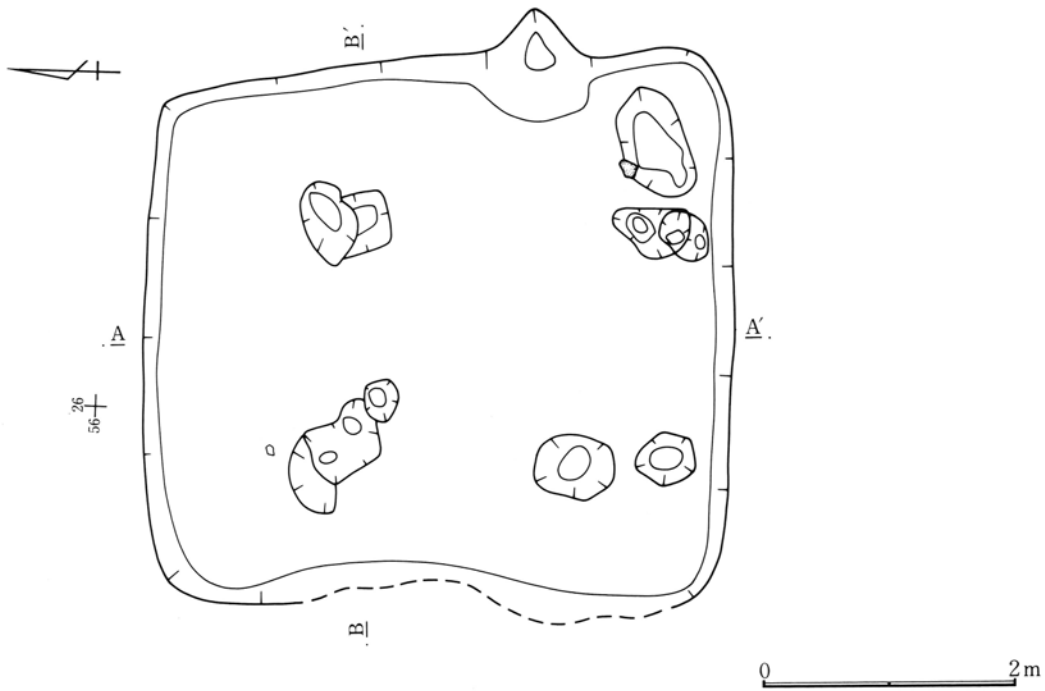
構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。柱穴は4本掘られているが、床下調査によりそれぞれの柱穴に接して別の柱穴が掘られていたため、柱穴の掘り直しが行われていたものと思われる。やや不定形であるが貯蔵穴が竈の右側に掘られている。

規模 東西4.40m、南北4.66mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で37cmである。貯蔵穴は長径88cm短径58cm深さ46cmである。柱穴1は径43cm深さ58cm、柱穴2は径42cm深さ76cm、柱穴3は径49cm深さ59cm、柱穴4は径55cm深さ79cmである。

遺物 甕の破片は多いが、図示できたのは竈煙道部より出土した1点である。



第106図 503号住居跡実測図



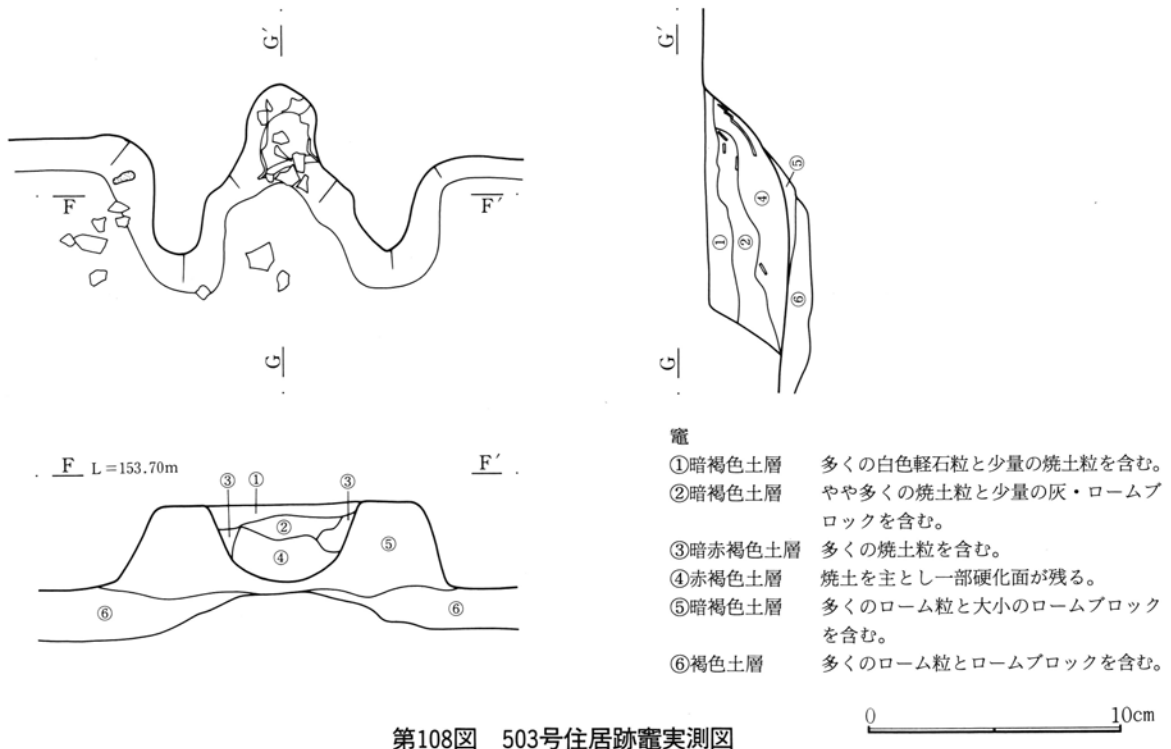
第107図 503号住居跡床下実測図

(竈)

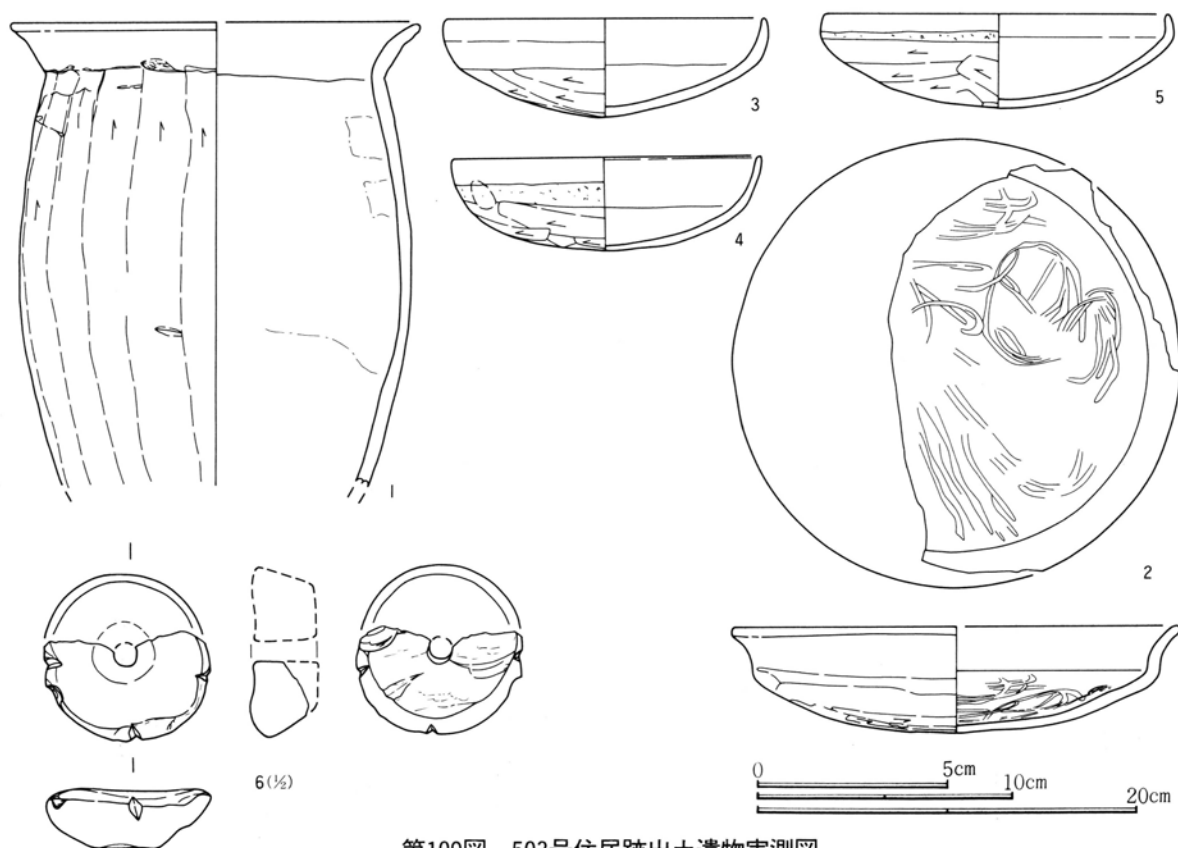
位置 東壁面の南寄り掘り込んで造られている。焚口部分と燃焼部の多くが床面上に造られており、燃焼部の一部と煙道部が壁面を掘り込んでいる。

構造 暗褐色土を主とした土で造られており、袖石等は出土していない。燃焼部を中心に竈内から多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向83cm、燃焼部幅53cmである。



第108図 503号住居跡竈実測図



第109図 503号住居跡出土遺物実測図

503号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
109-1 83	土師器 甕?	床面+9 口縁部 $\frac{2}{3}$ 胴部 $\frac{1}{2}$	口(21.8) 高— 底—	①密、1~2mmの砂粒と赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	胴部外面強いヘラ削り、削りの単位は明瞭である。内面ナデにて器表面密。
109-2	土師器 坏	床面+26 口縁部 $\frac{2}{3}$ 底部 $\frac{1}{2}$	口(17.8) 高 4.2 底—	①密、2~3mmの赤色粒と長石粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面ヘラ削り後全面ヘラ磨き。内側底面に円と直線の暗文状の磨き。507住の5とほぼ同じ。
109-3 83	土師器 坏	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口 12.6 高 3.8 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭でない。内面ナデにて器表面密。黒斑認められず。
109-4 83	土師器 坏	床面+17 $\frac{1}{2}$ 残存	口 12.2 高 3.6 底—	①密、少量の角閃石を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色、底面黒褐色	底面ヘラ削り、削りの単位明瞭である。体部ナデ。内面ナデにて器表面密。底部中央の器肉が薄い。
109-5 83	土師器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口 13.6 高 3.7 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭でない。内面ナデにて器表面密。
109-6 116	石製品 紡錘車	覆土	長径 (4.3) 短径 (3.8) 厚 1.5 重 22.5		滑石片岩。上面中央がやや低くなる。側面は良く磨かれている。4箇所に凹状の刻目あり、文様か。

537号住居跡 (第110~112図、図版26)

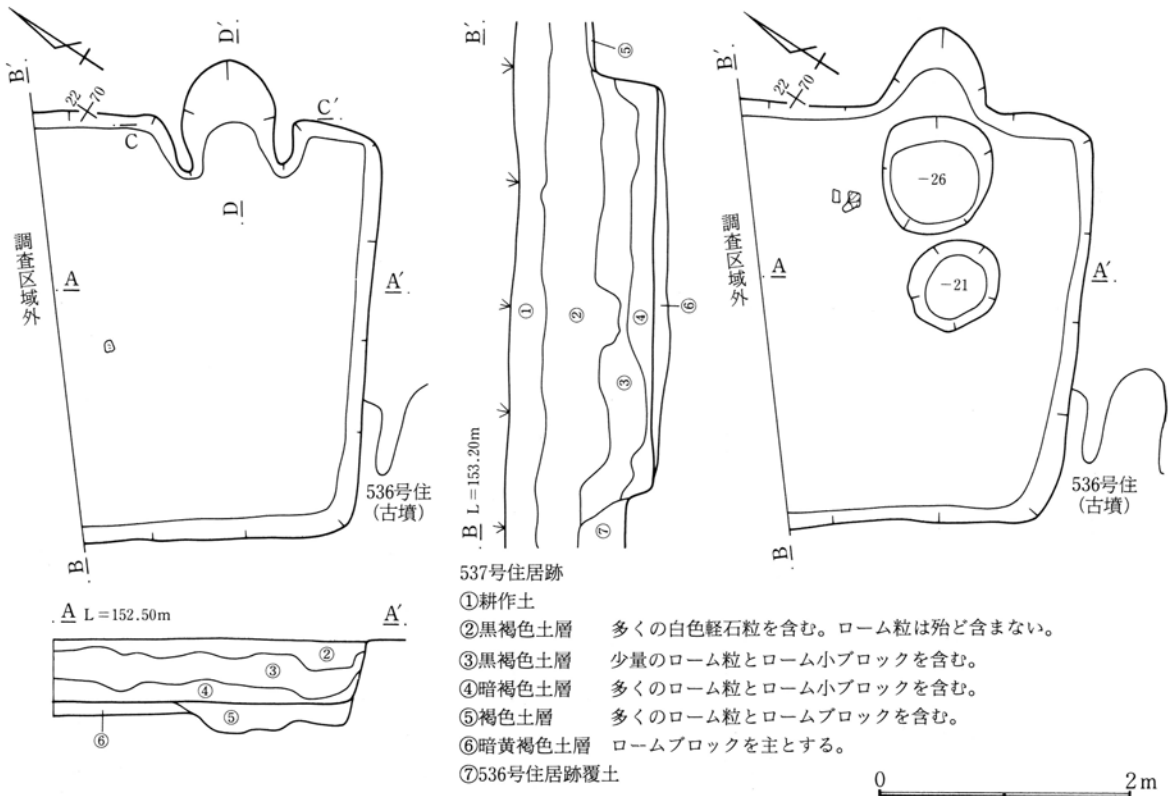
位置 本住居跡は第7次調査区にあり、70-22・23グリッドに位置する。

概要 西側で古墳時代の536号住居と重複しており、本住居は536号住居の北東部分を床下まで深く掘り込んで造られている。また西北部分は調査区域外である。床下土坑が竈手前部分に掘られている。

構造 床面は多くのロームブロックとローム粒を含む土で造られている。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西3.38m、南北方向は不明である。壁高は残りの良い南西コーナー部分で56cmである。

遺物 甕胴部は多く出土しているが、図示できたのは土師器の甕の口縁2点と坏1点である。



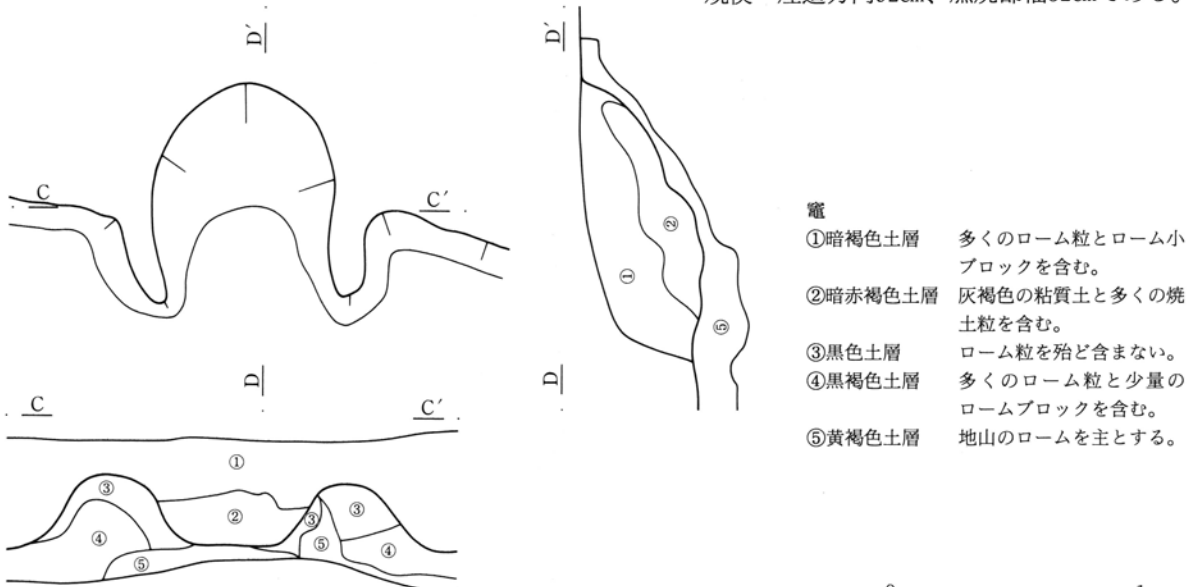
第110図 537号住居跡・床下実測図

(竈)

位置 東壁を掘り込んで造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

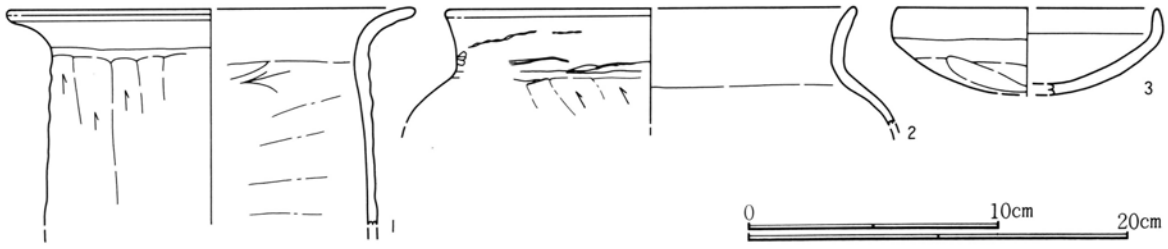
構造 ローム粒をほとんど含まない黒色土を主に用いて袖部分は造られている。燃焼部覆土中に灰褐色粘質土が多く含まれていたため、天井部付近にはこの灰褐色粘質土が多く使われていたようである。竈内より多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向92cm、燃焼部幅52cmである。



第111図 537号住居跡竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



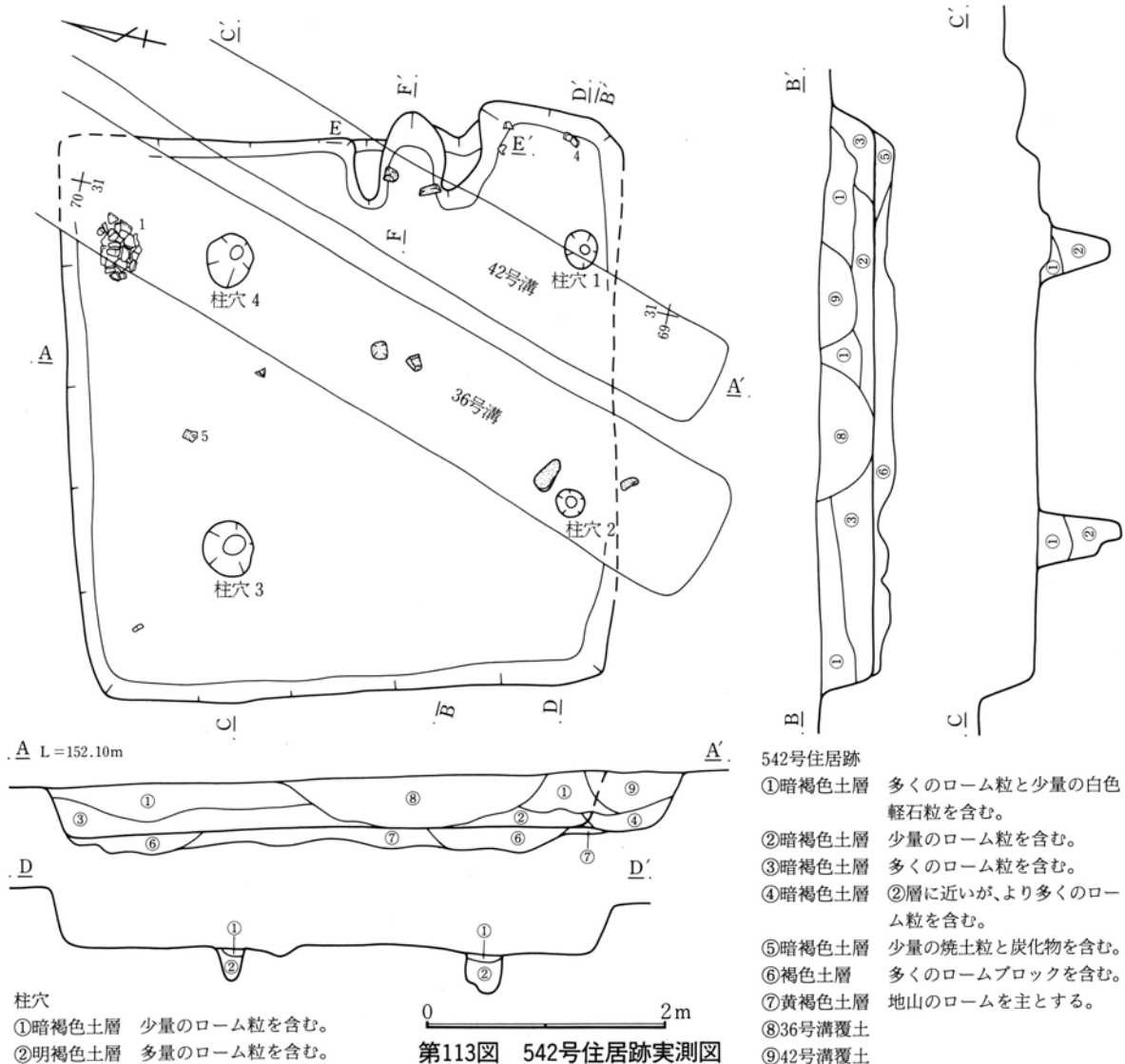
第112図 537号住居跡出土遺物実測図

537号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
112-1	土 師 器 甕	覆土 口縁部 $\frac{1}{4}$	口(21.4) 高・底—	①密、多くの赤色粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へら削り、多くの砂粒が移動し器表面粗い。 口縁部横ナデ。胴部内面ナデ。
112-2	土 師 器 甕	覆土 口縁部 $\frac{1}{2}$	口(21.8) 高・底—	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へら削り。口縁部横ナデ。口縁部中央に輪積痕。内面ナデにて器表面密。
112-3	土 師 器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(10.4) 高・底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面弱いへら削り、削りの単位不明瞭。 内面ナデにて器表面密。

542号住居跡 (第113・114図、図版26・27・83)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、70-31グリッドに位置する。



概要 東側を36号溝により床面まで、42号溝により床面に近い覆土部分を掘り込まれている。南壁面部分は攪乱を受けており、壁面部分の多くは残っていない。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られている。柱穴は4本掘られていたが、貯蔵穴は掘られていない。

規模 東西4.80m、南北4.50mである。壁高は残りの良い北西コーナー部分で46cmである。柱穴1は径36cm深さ40cm、柱穴2は径25cm深さ29cm、柱穴3は径46cm深さ70cm、柱穴4は径45cm深さ61cmである。

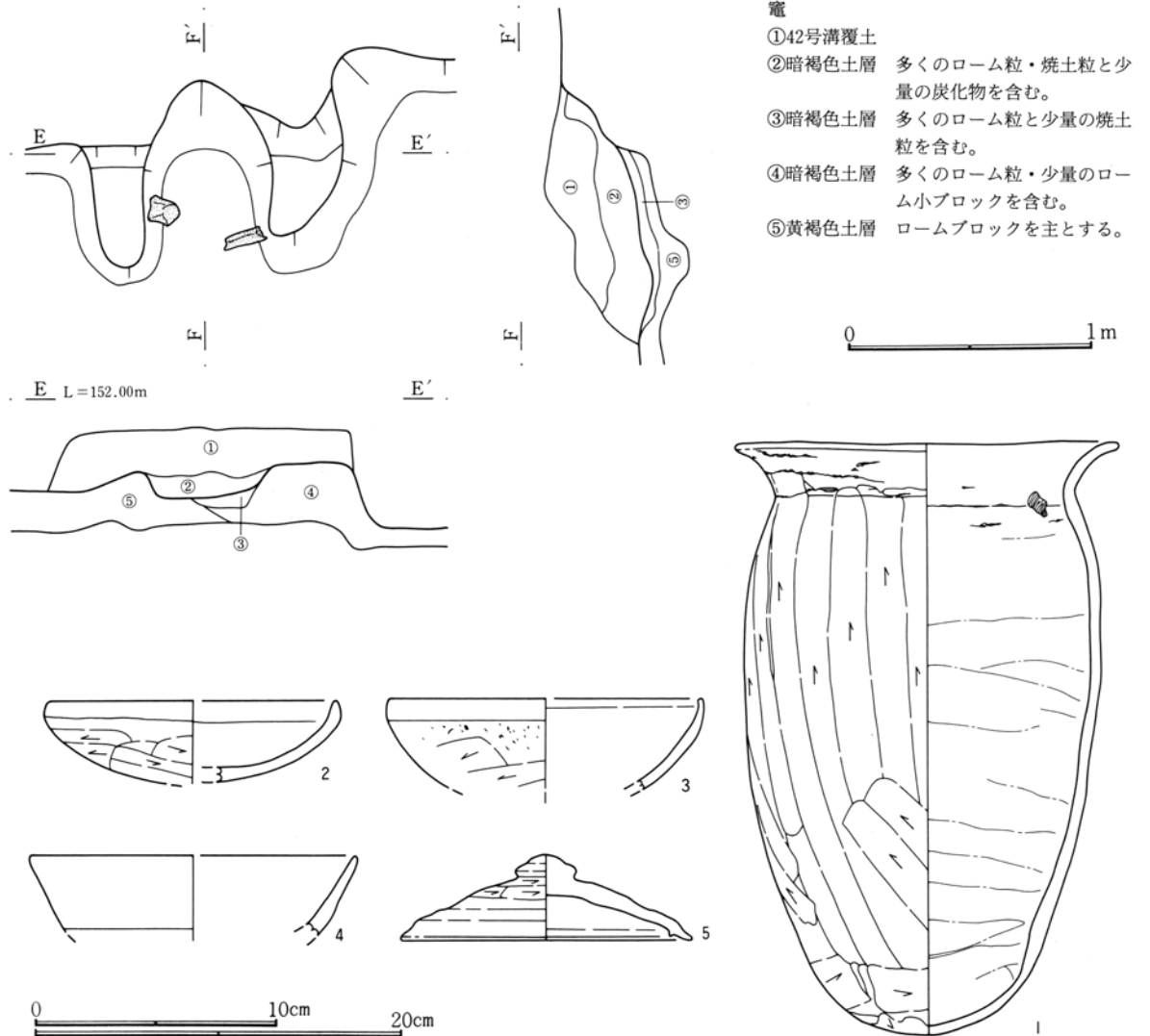
遺物 全体に出土量は少ない。

(竈)

位置 東壁を掘り込んで造られている。焚口部分と燃烧部の多くは床面上に位置し、煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造 焚口から燃烧部にかけての上面は42号溝により削られている。燃烧部覆土中より薄い石が2個割れた状態で出土したが、他に石は出土していない。袖は多くのローム粒を含む土で造られている。燃烧部覆土中から多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向84cm、燃烧部幅46cmである。



第114図 542号住居跡竈・出土遺物実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

542号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
114-1 83	土師器 甕	床面-6 口縁部1/2 他ほぼ完形	口 21.1 高 32.4 底 -	①やや粗、2~3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラナデ。砂粒の移動はほとんどなく器表面やや密。胴部内面ナデにて器表面密。
114-2	土師器 坏	覆土 1/2残存	口(12.0) 高 - 底 -	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。 内面に黒漆と思われる痕跡があるが不明である。
114-3	土師器 坏	覆土 小破片	口(13.0) 高 - 底 -	①密 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部ヘラ削り。 口唇部が少し内側に折り込まれている。
114-4	須恵器 坏	床面-16 口縁部1/2	口(13.6) 高 - 底 -	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②還元焰、硬質 ③灰色	口縁部横ナデ。 底面欠。
114-5	須恵器 蓋	床面+5 1/2残存、 摘のみ完形	口(12.0) 高 - 底 -	①やや粗 ②還元焰、硬質 ③灰色	天井部手持ヘラ削り。 天井部内側に輪積の痕跡が残る。 カエリは低いがていねいな整形である。

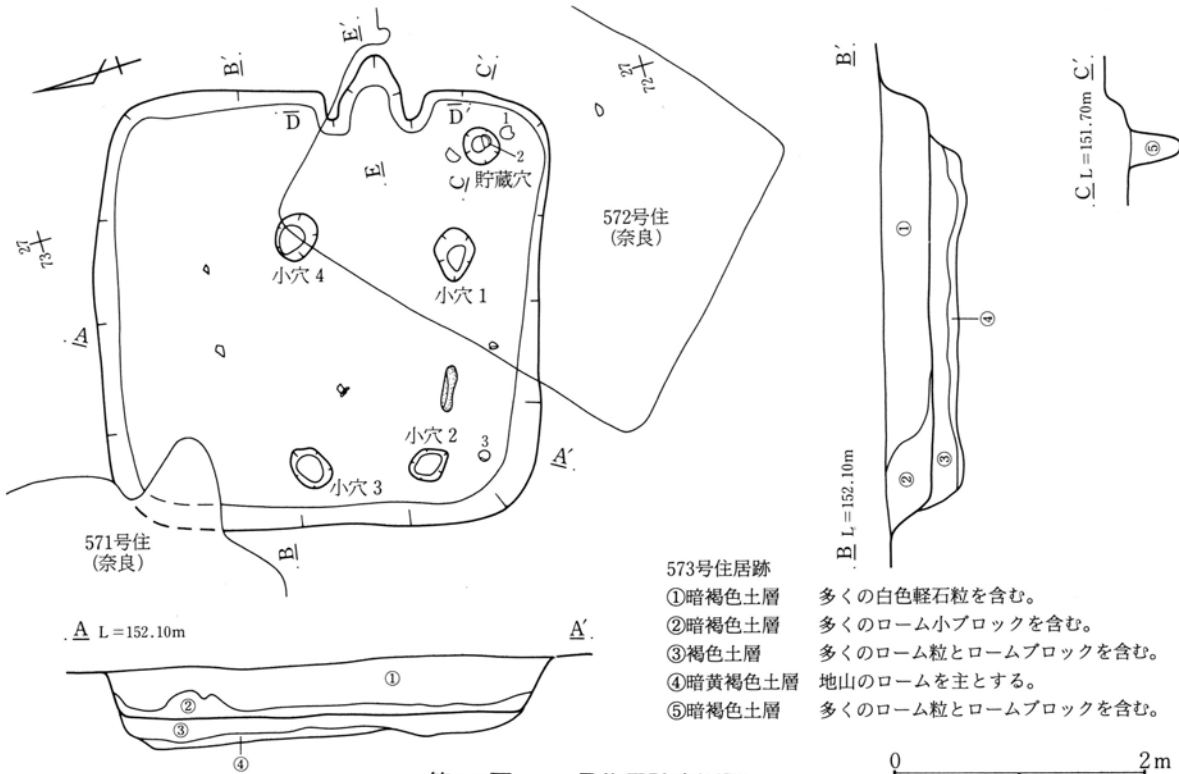
573号住居跡 (第115~118図、図版27・83・113)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、73-27・28グリッドに位置する。

概要 3軒の重複住居である。北西コーナー部分で奈良時代の571号住居の竈によって床下部分まで深く掘り込まれている。また南東部分の多くは奈良時代の572号住居により、覆土上面を掘り込まれている。このように本住居が最も古く、3軒の新旧関係は573→571→572号住居である。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られている。竈の右側に小さいが貯蔵穴が掘られている。小穴は4本掘られているが、柱穴は掘られていない。

規模 東西3.50m、南北3.55mである。壁高は残りの良い南西コーナー部分で43cmである。貯蔵穴は径29cm深さ39cm、小穴1は径34cm深さ12cm、小穴2は径35cm深さ10cm、小穴3は径37cm深さ23cm、小穴4は径32cm深さ21cmである。



第115図 573号住居跡実測図

床下 重複している3軒とも床下土坑が掘られており、まとめて図示した。床下土坑の中に書かれた数字は床面からの深さを表している。

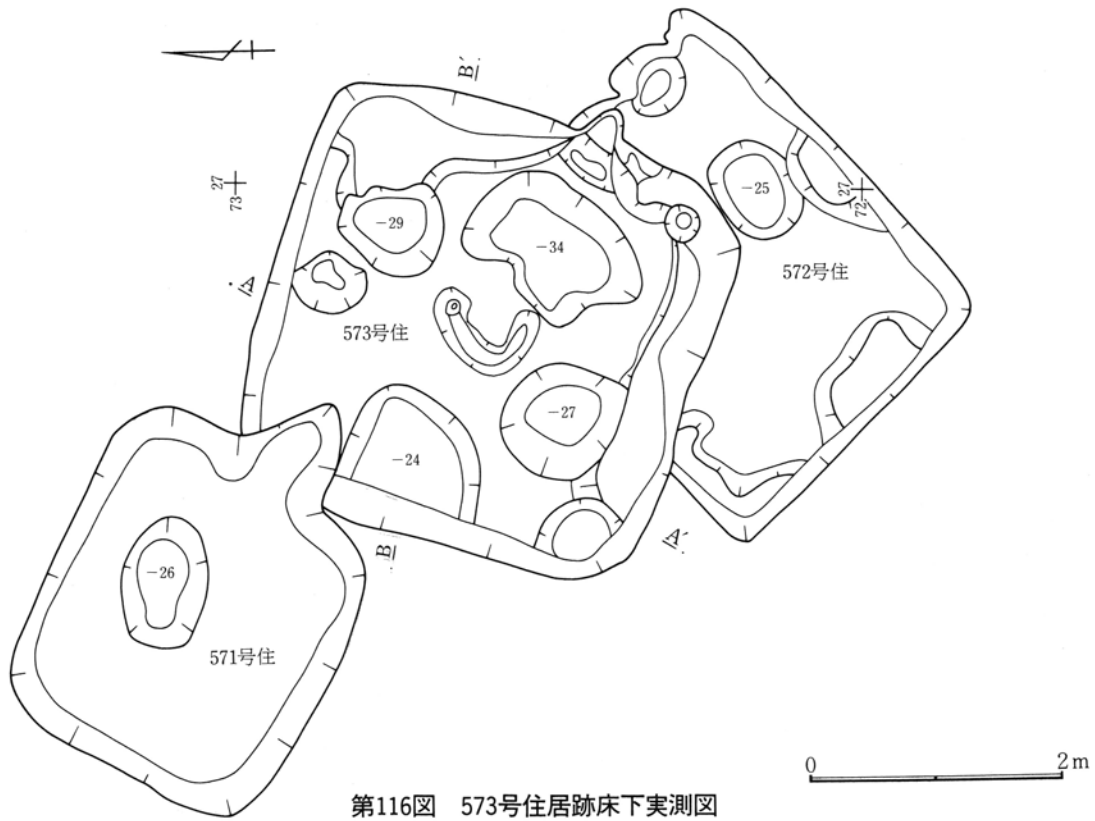
遺物 貯蔵穴付近より土師器の坏が出土している。

(竈)

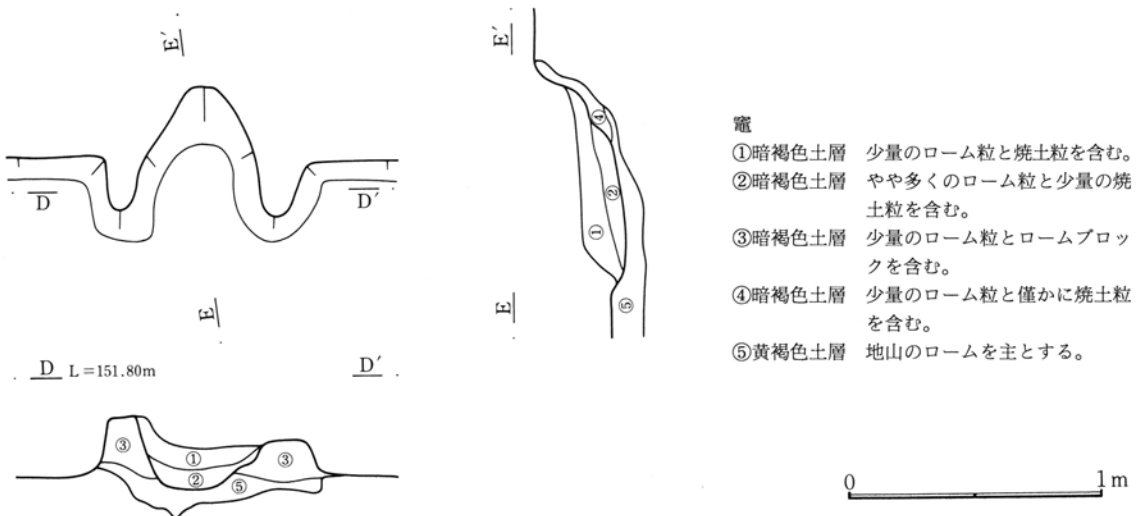
位置 東壁面の南寄りに造られている。焚口と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 上部は572号住居により削られており、全体に残りが悪かった。袖石等は全く出土していない。袖部分からローム粒の出土は少なく、竈内からの焼土粒の出土も少なかった。

規模 煙道方向61cm、燃烧部幅46cmである。

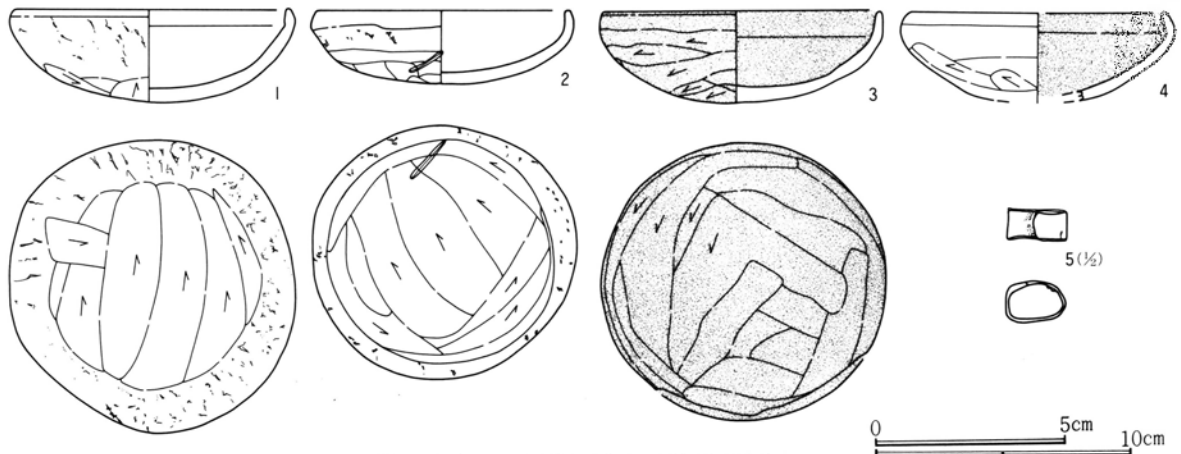


第116図 573号住居跡床下実測図



第117図 573号住居跡竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第118図 573号住居跡出土遺物実測図

573号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
118-1 83	土師器 坏	床面+7 完形	口 11.2 高 3.6 底 —	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。 黒斑全く認められず。
118-2 83	土師器 坏	床面-25 口縁部3/5 底部完形	口 10.8 高 3.6 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。 内外器表面に黒漆と思われる黒色物が付着。
118-3 83	土師器 坏	床面+8 ほぼ完形	口 10.0 高 2.8 底 —	①密、1~2mmの黒色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。中央部は特に強い削り。 内面ナデにて器表面密。 黒斑全く認められず。
118-4	土師器 坏	覆土 1/2残存	口(10.0) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③表面一部黒色、断面橙色	底面ヘラ削り、器表面の粗れは少ない。 内面に黒漆と思われる痕跡が多く残る。
118-5 113	銅製品 とめ金具	覆土	長 0.8 幅 1.6 厚 0.1 重 1.1		銅主材。合せ目あり。横断面形やや倒卵形。 刀子の鞘口か縁金具か。

636号住居跡 (第119~122図、図版27・28・83・84・124)

位置 本住居跡は第8次調査区にあり、62-30・31グリッドに位置する。

概要 南側約半分で同じ古墳時代の635号住居と重複しており、本住居が635号住居を床下部分まで掘り込んでいる。北西コーナー部分を水道管理設工事に伴い床下部分まで、また34号溝により覆土上面を掘り込まれている。竈を中心にして床面に多くの焼土粒が出土し、一部床面が焼土化している部分も確認された。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られている。竈の右側に深い小穴が3本掘られているが、どの小穴が貯蔵穴にあたるのか確認はできなかった。床面には柱穴が4本掘られているが、床下調査で柱穴に接して小穴が掘られているため、柱穴の掘り直しが行われていたものと思われる。

規模 東西5.58m、南北5.82mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で44cmである。柱穴1は径58cm深さ67cm、柱穴2は径56cm深さ61cm、柱穴3は径68cm深さ82cm、柱穴4は径58cm深さ83cmである。

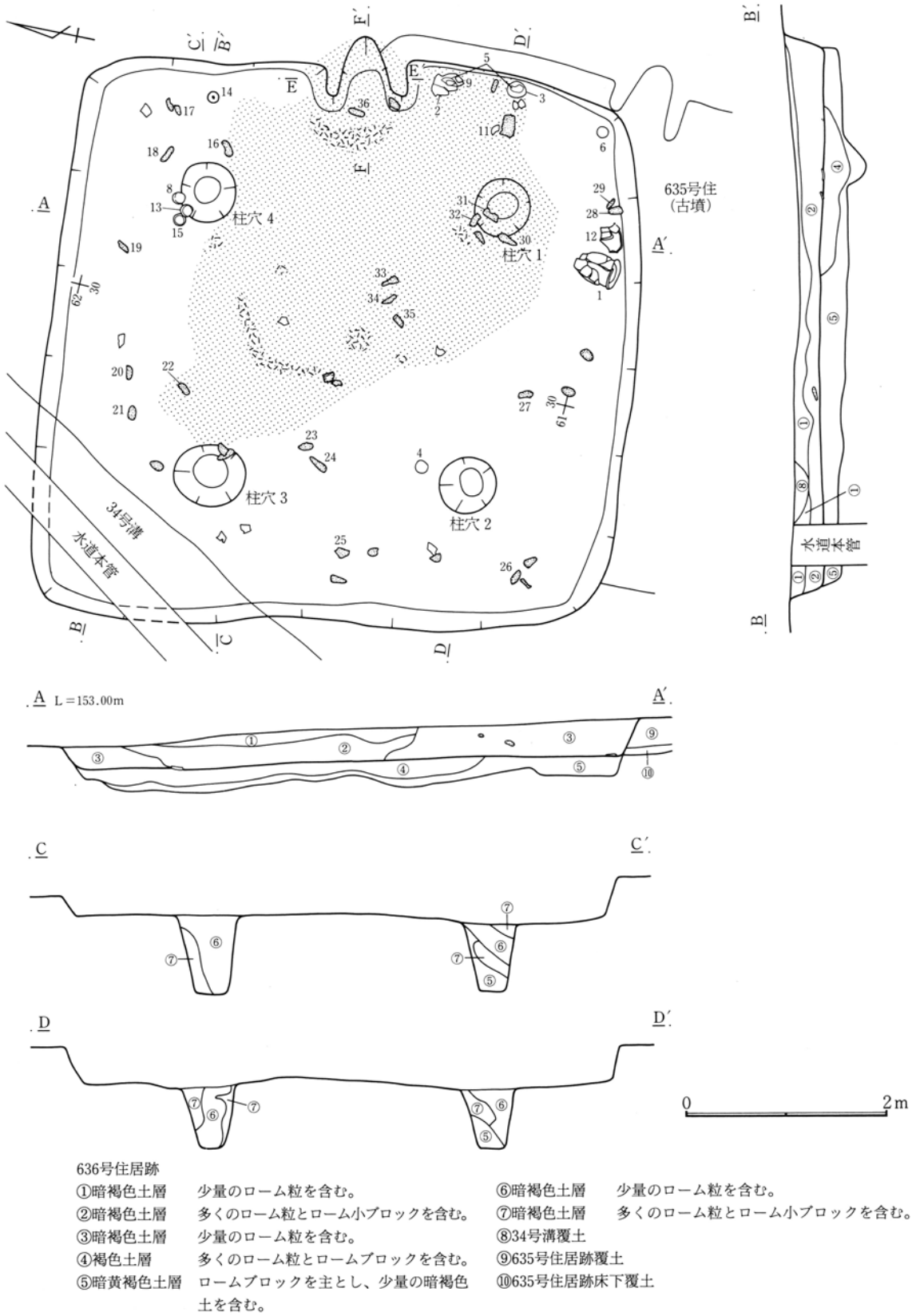
遺物 東・南壁面付近より多くの土師器の甕や坏が、また住居北東部分から須恵器の蓋が3点出土している。

(竈)

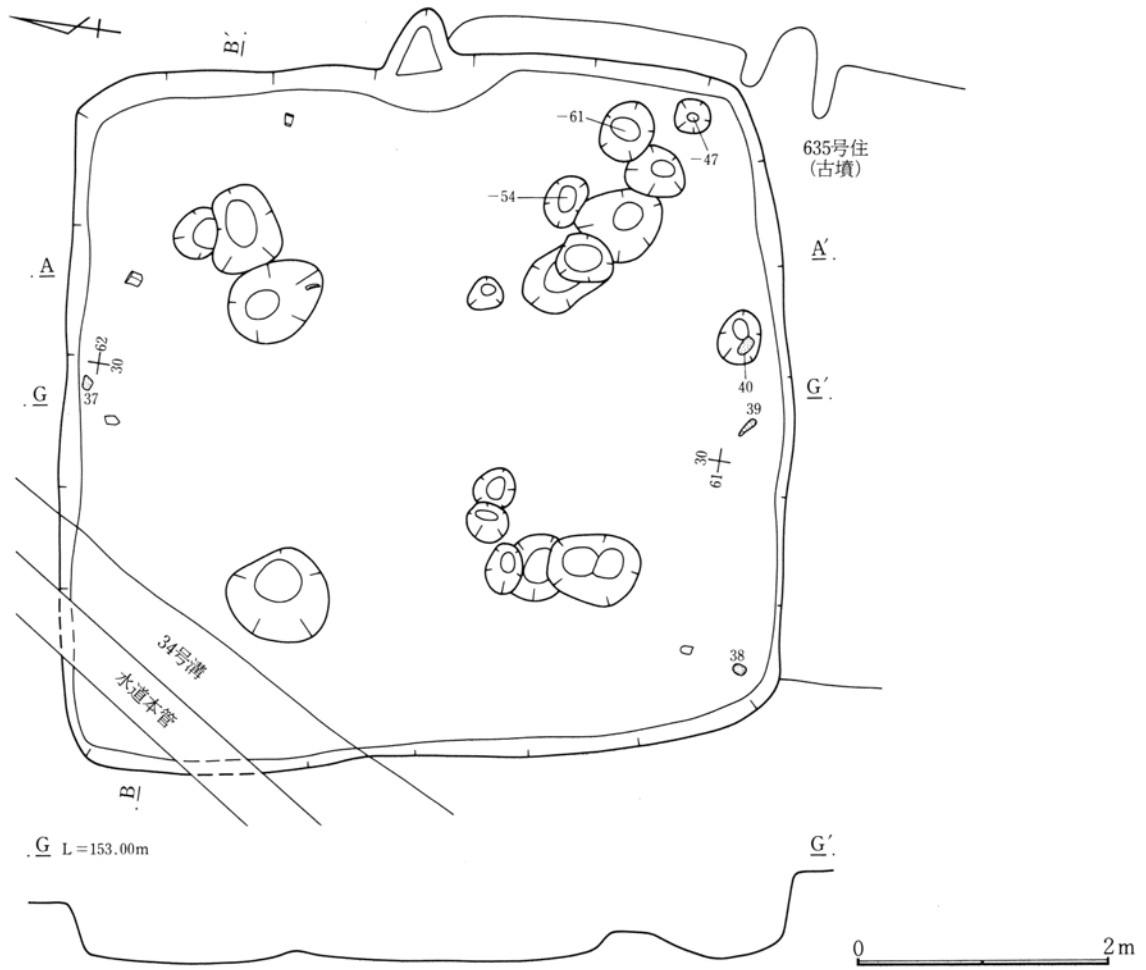
位置 東壁面を掘り込んで造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、煙道部が壁面を掘り込んで造られている。

構造 右袖石は出土しているが、左袖石は残っていない。袖は多くのローム粒を含む土で造られている。燃

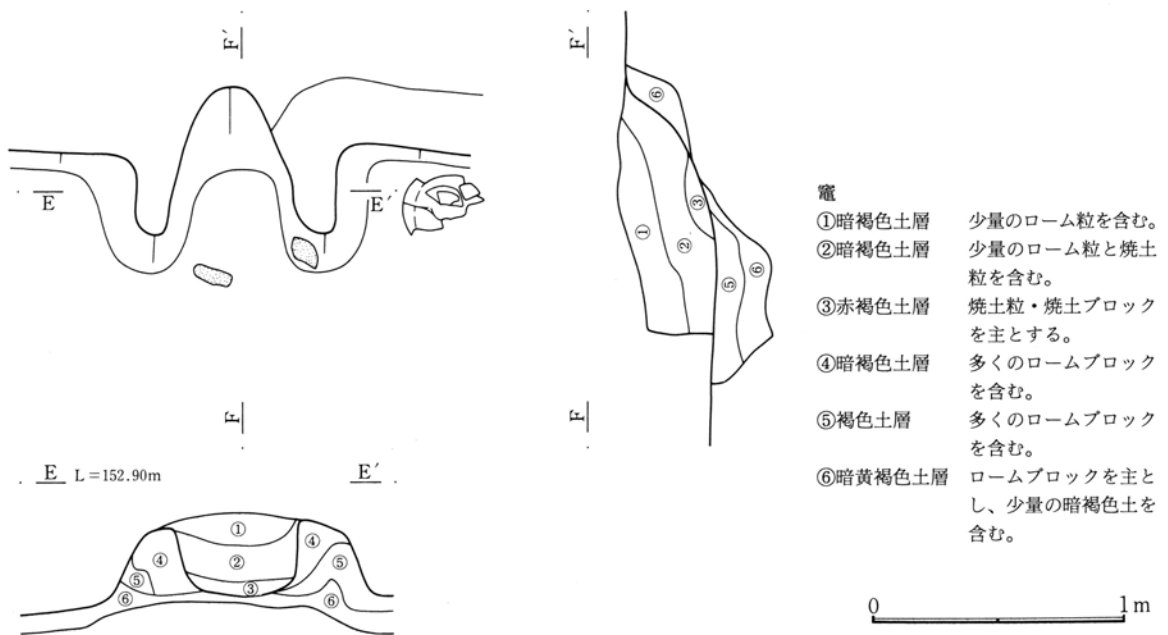
焼部床面付近から多くの焼土粒が出土している。
規模 煙道方向73cm、燃烧部幅46cmである。



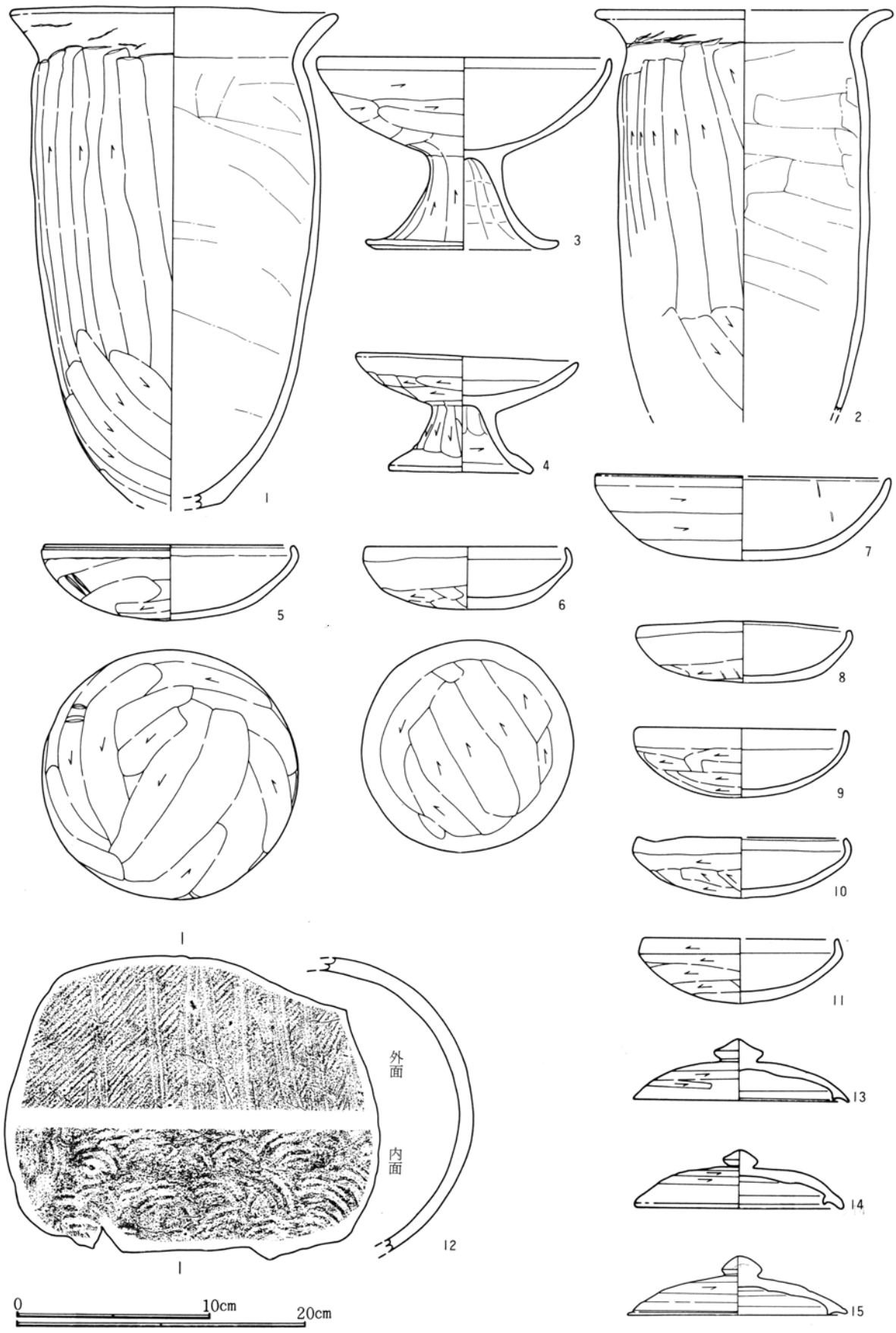
第119図 636号住居跡実測図



第120図 636号住居跡床下実測図



第121図 636号住居跡竈実測図



第122図 636号住居跡出土遺物実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

636号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考		
122-1 83	土師器 甕	床面直上 底部以外ほ ぼ完形	口 22.5 高 — 底 —	①やや粗、1~2mmの片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色、下部暗赤褐色	胴部外面へラ削り、多くの砂粒が移動し器表面やや粗い。口縁部との境に段はほとんどなし。 内面ナデにて器表面密。		
122-2 83	土師器 甕	床面+4 1/3残存	口(20.7) 高 — 底 —	①やや粗、片岩粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部へラ削り、削られていない口縁部との境に段を持つ。器表面の粗れは少ない。		
122-3 84	土師器 高坏	床面直上 坏部完形 脚部1/3	口 15.0 高 10.0 底 9.0	①密、1~2mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚部へ坏底面へラ削り。 脚内面ナデ。		
122-4 83	土師器 高坏	床面直上 完形	口 11.7 高 6.1 底 7.4	①密、1mm前後の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	坏底面へラ削り。脚外面へラ削り。 脚内面上半ナデ、下半へラ削り。 黒斑認められず。		
122-5 83	土師器 坏	床面+5 完形	口 12.8 高 3.9 底 —	①密、1~2mmの黒色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部へラ削り。 口縁部に一条の沈線が一周している。 黒斑なし。		
122-6 84	土師器 坏	床面+8 完形	口 10.4 高 3.2 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。体部ナデ。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面特に密。 底部外面に吸炭による黒色部分あり。		
122-7	土師器 坏	覆土 1/3残存	口(15.2) 高 4.4 底 —	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにより器表面密。		
122-8 84	土師器 坏	床面+4 完形	口 11.1 高 3.2 底 —	①密、角閃石安山岩を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。体部ナデ。 口縁部は短く内傾。全体に砂質である。 内面に一部黒斑あり。		
122-9 84	土師器 坏	床面+6 1/3残存	口 10.9 高 3.6 底 —	①密、1mm前後の黒色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。		
122-10 84	土師器 坏	覆土 1/3残存	口(10.9) 高 3.2 底 —	①密、角閃石をわずかに含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色、底面黒色	底面へラ削り。内傾する短い口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。 底部外面吸炭により黒色。		
122-11	土師器 坏	床面+8 1/3残存	口(10.2) 高 3.3 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り、へらの単位は明瞭でない。 内面ナデにて器表面密。		
122-12	須恵器 横瓮	床面+9 胴部破片	口 — 高 — 底 —	①密、気泡化した2mm前後の黒色粒を含む。②還元焰、硬質 ③灰色	内面青海波文。 外面平行叩き後、ほぼ等間隔に垂直方向の線上のナデ。		
122-13 84	須恵器 蓋	床面+4 完形	口 11.2 高 — 底 —	①密、1mm以下の石英粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	天井部右回転へラ削り、削りは口縁部近くまで及ぶ。		
122-14 84	須恵器 蓋	床面+6 完形	口 10.8 高 — 底 —	①密、1mm以下の石英粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	天井部右回転へラ削り、カエリは短く端部は鋭利である。		
122-15 84	須恵器 蓋	床面+3 完形	口 11.4 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな石英粒を大量に含む。②還元焰、硬質 ③黄灰色、一部オリーブ黒色	天井部右回転へラ削り。 端部に近い口縁部外側に沈線が一周している。 吸炭により全体が黒色を帯びている。		
遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)				石材・備考
16	124	こも編み石	長 15.1	幅 5.3	厚 2.4	重 260	絹雲母石墨片岩
17	124	こも編み石	長 13.2	幅 5.9	厚 3.1	重 410	点紋緑泥片岩
18	124	こも編み石	長 15.4	幅 6.9	厚 4.0	重 580	安山岩
19	124	こも編み石	長 16.3	幅 4.5	厚 3.1	重 360	緑簾緑泥片岩
20	124	こも編み石	長 15.8	幅 5.2	厚 2.2	重 290	点紋緑泥片岩
21	124	こも編み石	長 14.1	幅 4.9	厚 5.2	重 610	絹雲母石墨片岩
22	124	こも編み石	長 13.2	幅 7.5	厚 2.5	重 380	緑簾緑泥片岩
23	124	こも編み石	長 16.5	幅 6.6	厚 2.8	重 400	絹雲母石墨片岩 一部炎を受けている。
24	124	こも編み石	長 17.9	幅 5.1	厚 2.8	重 500	緑簾緑泥片岩
25	124	こも編み石	長 15.9	幅 7.3	厚 2.6	重 470	緑簾緑泥片岩
26	124	こも編み石	長 14.3	幅 5.2	厚 2.8	重 310	緑簾緑泥片岩
27	124	こも編み石	長 13.6	幅 5.6	厚 2.5	重 260	緑簾緑泥片岩
28	124	こも編み石	長 13.5	幅 6.5	厚 3.8	重 580	緑簾緑泥片岩

636号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	図版番号	器種	法	量(cm)(g)				石材・備考
29	124	こも編み石	長 15.1 幅 5.3 厚 3.0 重 300					緑簾緑泥片岩
30	124	こも編み石	長 18.0 幅 6.1 厚 3.4 重 460					絹雲母石墨片岩
31	124	こも編み石	長 16.1 幅 6.5 厚 2.9 重 340					絹雲母石墨片岩
32	124	こも編み石	長 15.5 幅 6.9 厚 2.3 重 350					点紋緑泥片岩
33	124	こも編み石	長 16.4 幅 6.5 厚 2.6 重 520					緑簾緑泥片岩
34	124	こも編み石	長 14.8 幅 5.2 厚 4.8 重 510					絹雲母石墨片岩
35	124	こも編み石	長 12.5 幅 4.7 厚 3.9 重 360					点紋絹雲母石墨片岩
36	124	こも編み石	長 15.2 幅 5.5 厚 3.1 重 440					緑簾緑泥片岩
37	124	こも編み石	長 12.4 幅 6.0 厚 1.6 重 300					絹雲母石墨片岩
38	124	こも編み石	長 13.6 幅 7.2 厚 3.0 重 480					石墨絹雲母片岩
39	124	こも編み石	長 16.6 幅 6.0 厚 4.2 重 490					絹雲母石墨片岩
40	124	こも編み石	長 14.2 幅 6.6 厚 3.6 重 560					絹雲母石墨片岩

714号住居跡 (第123~125図、図版28・84・116)

位置 本住居跡は第11次調査区にあり、42-88・89グリッドに位置する。

概要 西側で同じ古墳時代の715号住居と重複しており、本住居が715号住居を床下部分まで掘り込んでいる。床面の高さがほとんど同じことや、本住居の竈の位置が少し西側に片寄っていること等から重複関係にやや疑問も残るが、発掘調査時の所見に従った。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西3.78m、南北2.90mである。壁高は残りの良い南壁面部分で70cmである。

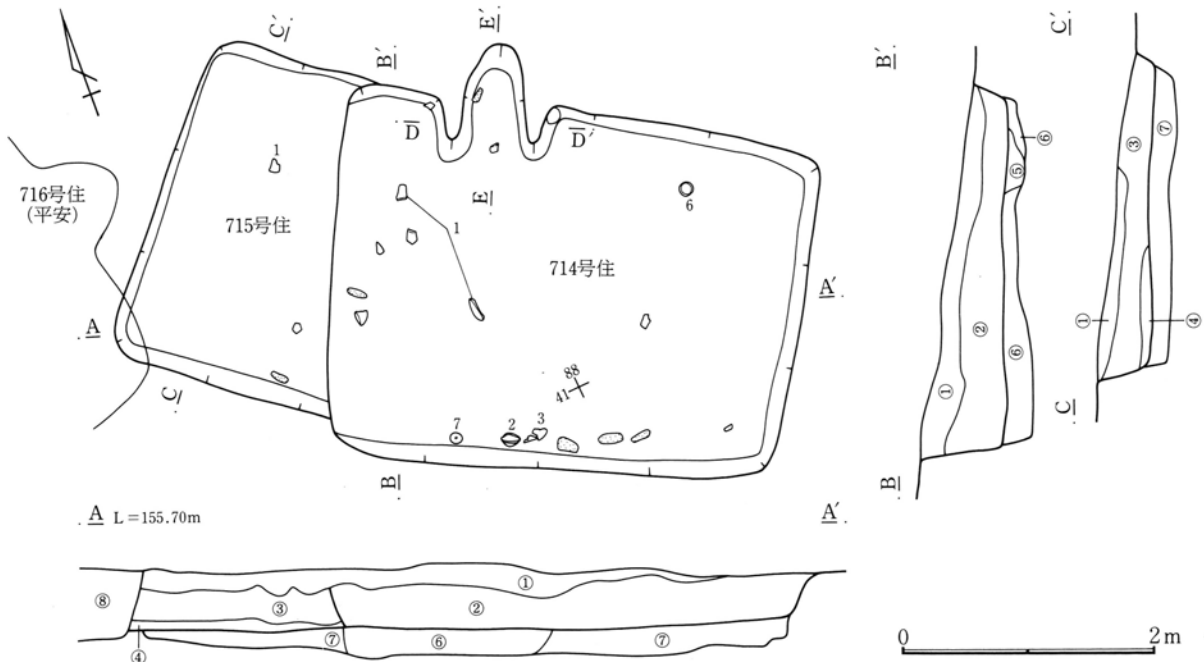
遺物 出土量は少ない。紡錘車が出土している。

(竈)

位置 北壁面を掘り込んで造られている。燃烧部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

構造 袖部分は暗灰白色粘土を多く用いて造られている。粘土を用いて造られた竈としては、燃烧部から焼土粒の出土は少ない。

規模 煙道方向91cm、燃烧部幅38cmである。



714・715号住居跡

- ①暗褐色土層 少量の白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量のローム粒を含む。(714号住居跡覆土)
- ③暗褐色土層 ②層に近いがローム粒を含む量がやや多い。(715号住居跡覆土)
- ④暗褐色土層 少量のローム小ブロックと黒褐色土を含む。

(715号住居跡覆土)

- ⑤暗褐色土層 少量の焼土粒・粘質土・炭化物を含む。
- ⑥暗褐色土層 少量のローム粒を含み軟質。暗い褐色土である。
- ⑦褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ⑧716号住居跡覆土

第123図 714・715号住居跡実測図

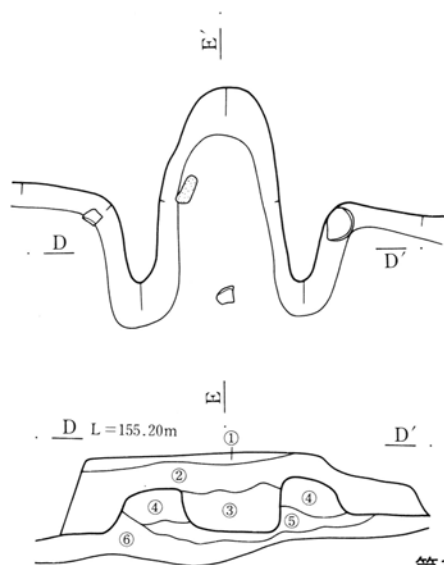
715号住居跡 (第123・126図、図版28)

位置 本住居跡は第11次調査区にあり、42-88グリッドに位置する。

概要 東側で同じ古墳時代の714号住居と重複しており、714号住居により住居の約半分以上が床下部分まで掘り込まれている。竈も714号住居によって掘り取られているためか不明である。柱穴は掘られていない。南西コーナー部分で平安時代の716号住居と重複しており、その部分は床下部分まで掘り込まれている。

規模 東西不明、南北2.64mである。壁高は残りの良い南壁面部分で52cmである。

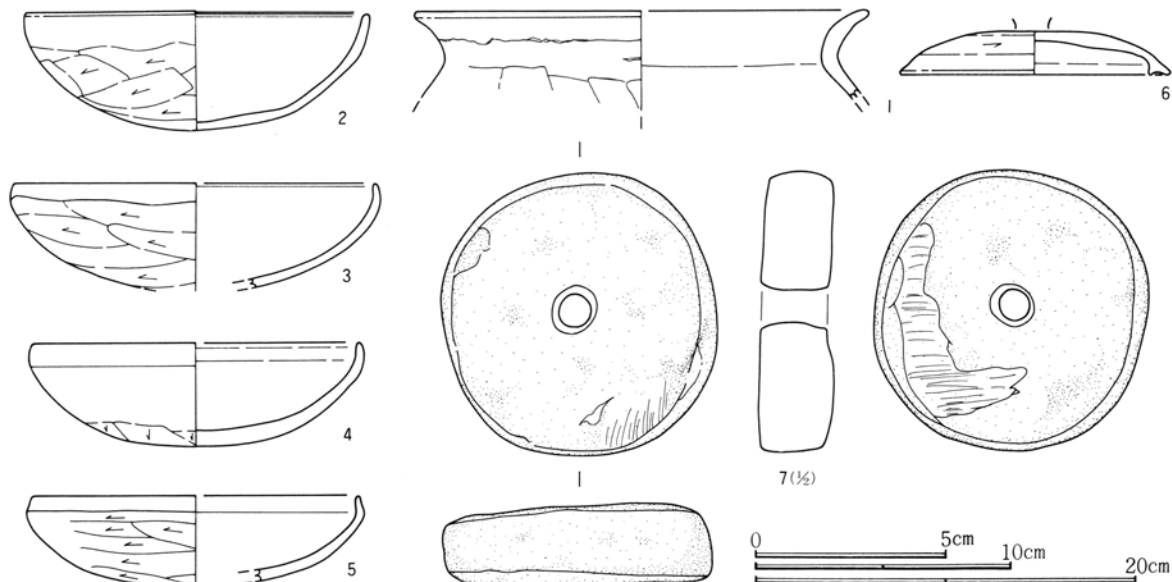
遺物 須恵器の甕の破片が多く出土しているが、図示できたのは土師器の坏1点である。



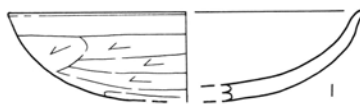
第124図 714号住居跡竈実測図

- 竈
- ①暗褐色土層 少量の白色軽石粒を含む。
 - ②暗褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
 - ③暗褐色土層 やや多くの焼土粒と暗灰白色粘土を含む。
 - ④暗褐色土層 多くの暗灰白色粘土をブロック状を含む。
 - ⑤暗褐色土層 少量の暗灰白色粘土と焼土粒を含む。
 - ⑥褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

0 1m



第125図 714号住居跡出土遺物実測図



第126図 715号住居跡出土遺物実測図

714号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
125-1	土師器 壺	床面+18 口縁 $\frac{1}{3}$	口(23.7) 高— 底—	①密、1mm内外の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
125-2 84	土師器 坏	床面+4 完形	口13.4 高4.6 底—	①密、1mm以下の小さな雲母粒を 大量に含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、削りの単位は比較的明瞭である。 内面ナデにて器表面密。
125-3 84	土師器 坏	床面+21 $\frac{1}{3}$ 残存	口14.0 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。 内面ナデにて器表面密。 内側器表面が斑点状にやや剥離。
125-4	土師器 坏	竈掘り方 $\frac{1}{3}$ 残存	口(12.8) 高4.0 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を多 く含む。②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面ヘラ削り、器表面密でヘラ削りの単位不明瞭。 内面ナデにて器表面密。
125-5	土師器 坏	覆土 $\frac{1}{3}$ 残存	口(12.8) 高— 底—	①密、少量の雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
125-6 84	須恵器 蓋	床面+4 摘以外完形	口10.5 高— 底—	①密、1~2mmの長石粒を多く含 む。②還元焰、硬質 ③灰色	天井部右回転ヘラ削り。 摘みは残っていない。 端部はカエリを細く仕上げている。
125-7 116	石製品 紡錘車	床面+13	径 7.5 孔径 0.8 厚 2.1 重 157.2		砂岩。広・狭面磨かれており整形痕不明。側面も良く 磨かれている。狭面の一部に自然面が残る。

715号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
126-1	土師器 坏	床面+12 口縁~底部 $\frac{1}{3}$ 残存	口(14.0) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を多 く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、砂粒の移動少なく削りの単位不明瞭。 内側器表面が粗れている。

721号住居跡(第127・128図、図版28)

位置 本住居跡は第11次調査区にあり、40-83グリッドに位置する。

概要 南東部分で古墳時代の722号住居と重複しており、本住居は722号住居により深く床下部分まで掘り込まれている。住居の残りが悪く、出土遺物もないため時代も不明である。残っている範囲では貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西2.79m、南北は不明である。壁高は残りの良い南東壁面コーナー部分で21cmである。

遺物 出土遺物は確認されない。

(竈)

位置 西壁面を掘り込んで造られている。残りが悪く不明な点が多いが、燃焼部の大部分は壁面を掘り込んで造られていたようである。

構造 掘り込みが浅く残りが悪いため不明な点が多い。柔らかいロームを掘り込んで造られていたようである。白色粘土や袖石等は出土していない。焼土粒の出土も少ない。

規模 煙道方向72cm、燃焼部幅42cmである。

722号住居跡(第127~129図、図版28・84)

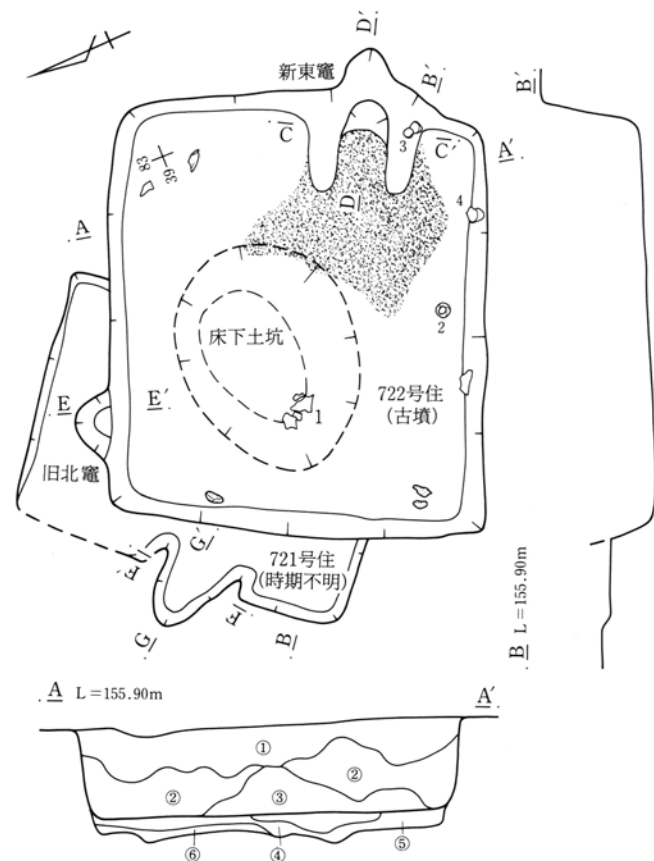
位置 本住居跡は第11次調査区にあり、39・40-83グリッドに位置する。

概要 北東部分で721号住居と重複しており、本住居が721号住居を深く床下部分まで掘り込んでいる。掘り込みが深く残りは良好である。竈は新東竈と旧北竈が造られている。旧北竈は壁面を掘り込んで造られている煙道部が僅かに残っただけである。その部分から少量の焼土粒が出土している。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。竈手前部分に多くの粘土がばらまかれたような状態で出土している。竈が使用されなくなった状態で壊され、粘土が散乱したと思われる。床下土坑が掘られている。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

規模 東西3.42m、南北3.0mである。壁高は残りの良い南東壁面コーナー部分で85cmである。床下土坑は径184×142cm深さ34cmである。

遺物 土師・須恵器の甕・坏が出土している。

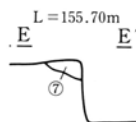


(新東竈)

位置 東壁面を掘り込んで造られている。袖部分や燃烧部の大部分は壁面を掘り込んで造られている。

構造 灰白色粘土を多く用いて造られており、燃烧部や袖部分から多くの灰白色粘土が出土している。しかし全体に崩れていたため残りは悪い。燃烧部床面に近い覆土から多くの焼土粒が出土している。

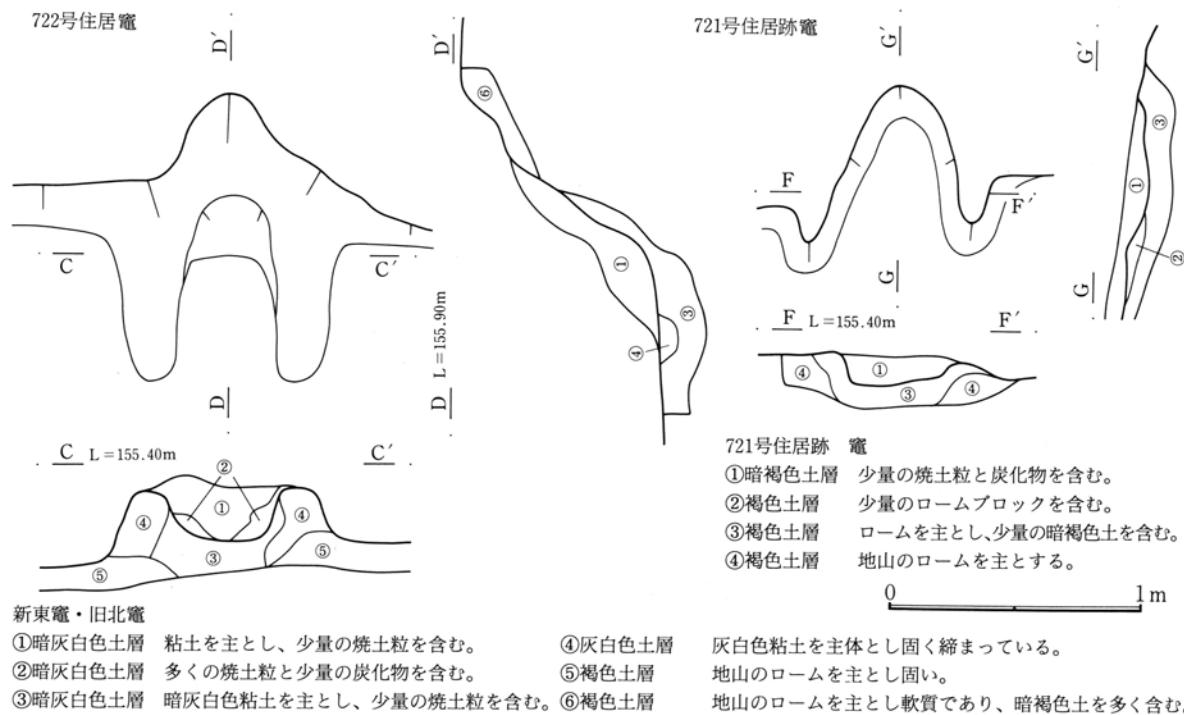
規模 煙道方向114cm、燃烧部幅42cmである。



721・722号住居跡

- ①暗褐色土層 少量の白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ③暗灰白色土層 暗灰白色粘土を多く含む。
- ④暗灰白色土層 暗灰白色粘土を主とする。
- ⑤褐色土層 ロームを主とし、少量の焼土粒を含む。
- ⑥黄褐色土層 地山のロームを主とする。
- ⑦暗黄褐色土層 ロームを主とし、多くの焼土粒を含む。

第127図 721・722号住居跡実測図



721号住居跡 竈

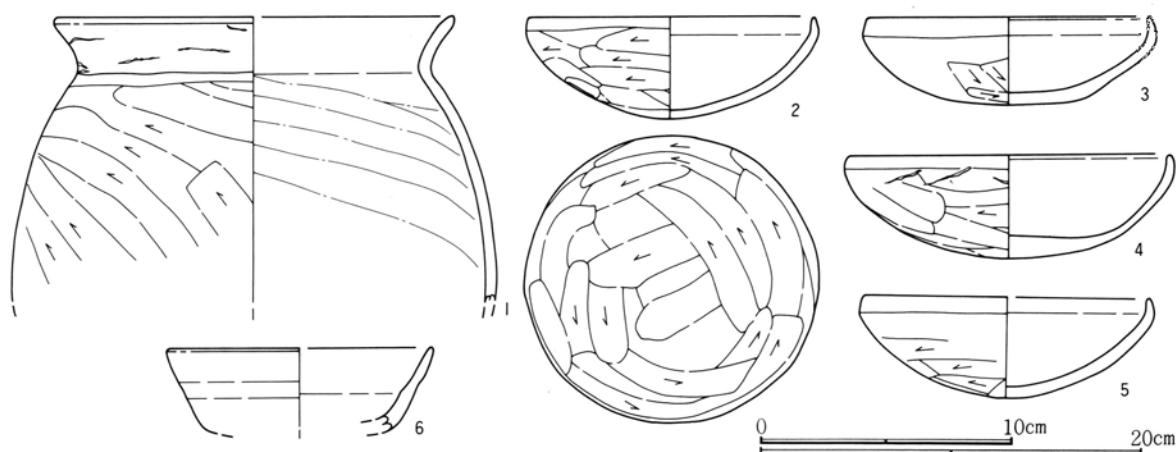
- ①暗褐色土層 少量の焼土粒と炭化物を含む。
- ②褐色土層 少量のロームブロックを含む。
- ③褐色土層 ロームを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ④褐色土層 地山のロームを主とする。



新東竈・旧北竈

- ①暗灰白色土層 粘土を主とし、少量の焼土粒を含む。
- ②暗灰白色土層 多くの焼土粒と少量の炭化物を含む。
- ③暗灰白色土層 暗灰白色粘土を主とし、少量の焼土粒を含む。
- ④灰白色土層 灰白色粘土を主体とし固く締まっている。
- ⑤褐色土層 地山のロームを主とし固い。
- ⑥褐色土層 地山のロームを主とし軟質であり、暗褐色土を多く含む。

第128図 721・722号住居跡竈実測図



第129図 722号住居跡出土遺物実測図

722号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
129-1 84	土師器 甕	床面直上 1/3残存	口(21.0) 高・底—	①密、1~2mmの片岩粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面へら削り、多くの砂粒が目立つ。口縁部に輪積痕が残る。
129-2 84	土師器 坏	床面-11 完形	口 11.2 高 4.0 底 —	①密、少量の角閃石を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内側器表面の多くが剥離している。黒斑認められず。
129-3 84	土師器 坏	竈 ほぼ完形	口 11.0 高 3.4 底 —	①密、わずかに角閃石を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面わずかにへらナデ。他はほとんどナデ。内面ナデ。内側器表面の多くが剥離している。全体にやや雑なつくりである。
129-4 84	土師器 坏	床面+26 3/4残存	口 12.5 高 — 底 —	①密、少量の角閃石を含む ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面へら削り、削りの単位は明瞭である。口縁部は短く内傾する。内面ナデにて器表面密。底部外面に斑点状の黒斑あり。
129-5	土師器 坏	覆土 口縁~底部 2/3	口(11.2) 高 4.0 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り、削りの単位は明瞭である。内面はていねいに整形されており少し光沢を持つ。内面に黒漆の痕跡が残る。
129-6	須恵器 坏	覆土 口縁部1/2	口(10.4) 高・底—	①やや粗、1~2mmの長石粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	口縁部内外面にわずかに凹凸状のロクロ目が残る。

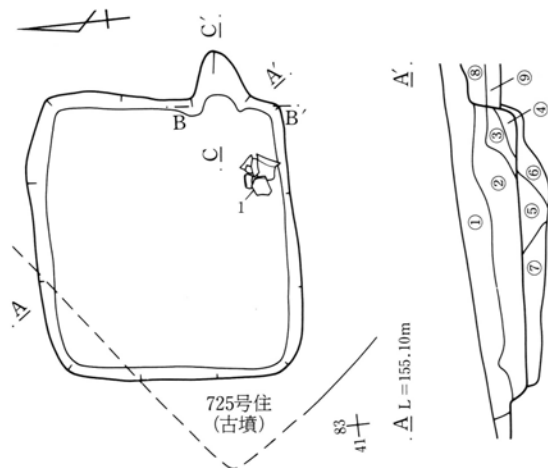
724号住居跡 (第130~132図、図版28・29・84)

位置 本住居跡は第11次調査区にあり、42-84グリッドに位置する。

概要 古墳時代の725号住居と重複しており、本住居は725号住居を床下部分まで掘り込んで造られている。

極めて小さな住居であり、貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西2.20m、南北2.06mである。壁高は残りの良い南東壁面コーナー部分で33cmである。



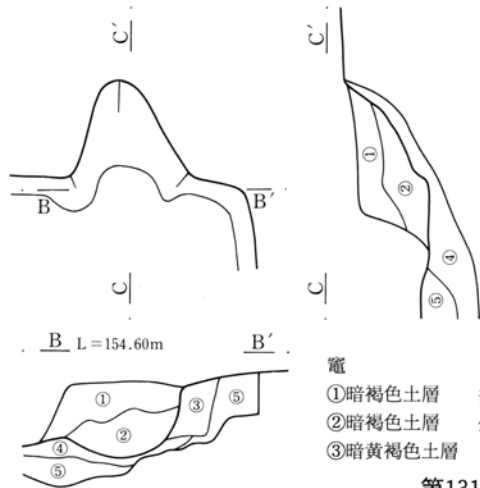
第130図 724号住居跡実測図

遺物 出土量は少なく、図示できたのは土師器の甕1点である。

724号住居跡

- ①暗褐色土層 少量の白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量のロームブロックを含む。
- ③暗褐色土層 少量の焼土粒を含む。
- ④暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
- ⑤黄褐色土層 ロームを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑥暗褐色土層 多くのロームブロックと少量の暗褐色土を含む。
- ⑦褐色土層 ローム粒とロームブロックを主とする。
- ⑧725号住居跡覆土
- ⑨725号住居跡床下覆土

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第131図 724号住居跡竈実測図

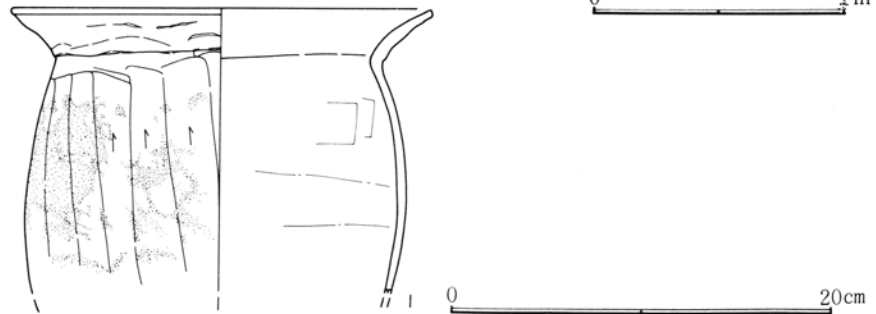
(竈)

位置 東壁面の南寄りに位置し、725号住居の覆土を掘り込んで造られている。住居が小さいためか燃焼部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

構造 竈は多くのローム粒を含む土で造られている。石や粘土等は使われていないようである。焼土粒の出土は少量である。

規模 煙道方向51cm、燃焼部幅約41cmである。

- 竈
- ①暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
 - ②暗褐色土層 少量の焼土粒と炭化物を含む。
 - ③暗黄褐色土層 ロームを主とする。
 - ④暗褐色土層 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。
 - ⑤黄褐色土層 ロームを主とし、少量の暗褐色土を含む。



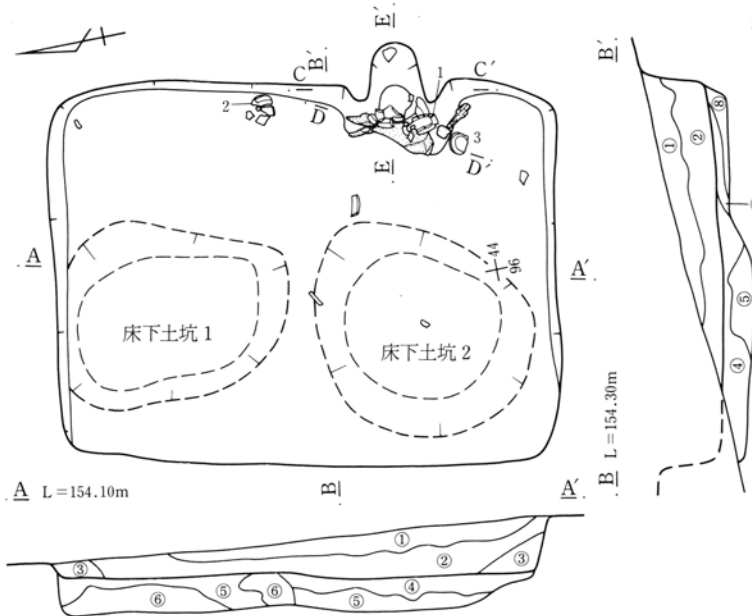
第132図 724号住居跡出土遺物実測図

724号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
132-1 84	土 師 器 甕	床面直上 口縁部完形 胴部 $\frac{2}{3}$	口 22.0 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へラ削り、口縁部との境に段を持つ。内面ナデにて器表面密。胴部外面に黒色物が付着している。

729号住居跡 (第133・134図、図版29・84)

位置 本住居跡は第11次調査区にあり、45-96・97グリッドに位置する。



第133図 729号住居跡実測図

概要 北西部分に向かって低くなる傾斜面に位置する。そのため低い西壁面部分の残りが悪い。貯蔵穴や柱

729号住居跡

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と少量の炭化物を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量のローム小ブロックを含む。
- ③褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ④褐色土層 ③層に近いが、より多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑤褐色土層 茶褐色の粘質土を多く炭化物を少量含む。
- ⑥黄褐色土層 ロームを主とする。
- ⑦褐色土層 少量の焼土粒と粘質土を含む。
- ⑧黄褐色土層 地山のロームを主とする。

穴は掘られていない。床下に床下土坑が2本掘られている。

規模 東西2.96m、南北3.94mである。壁高は残りの良い南壁面付近で59cmである。床下土坑1は床面からの深さ32cm、床下土坑2は床面からの深さ28cmである。

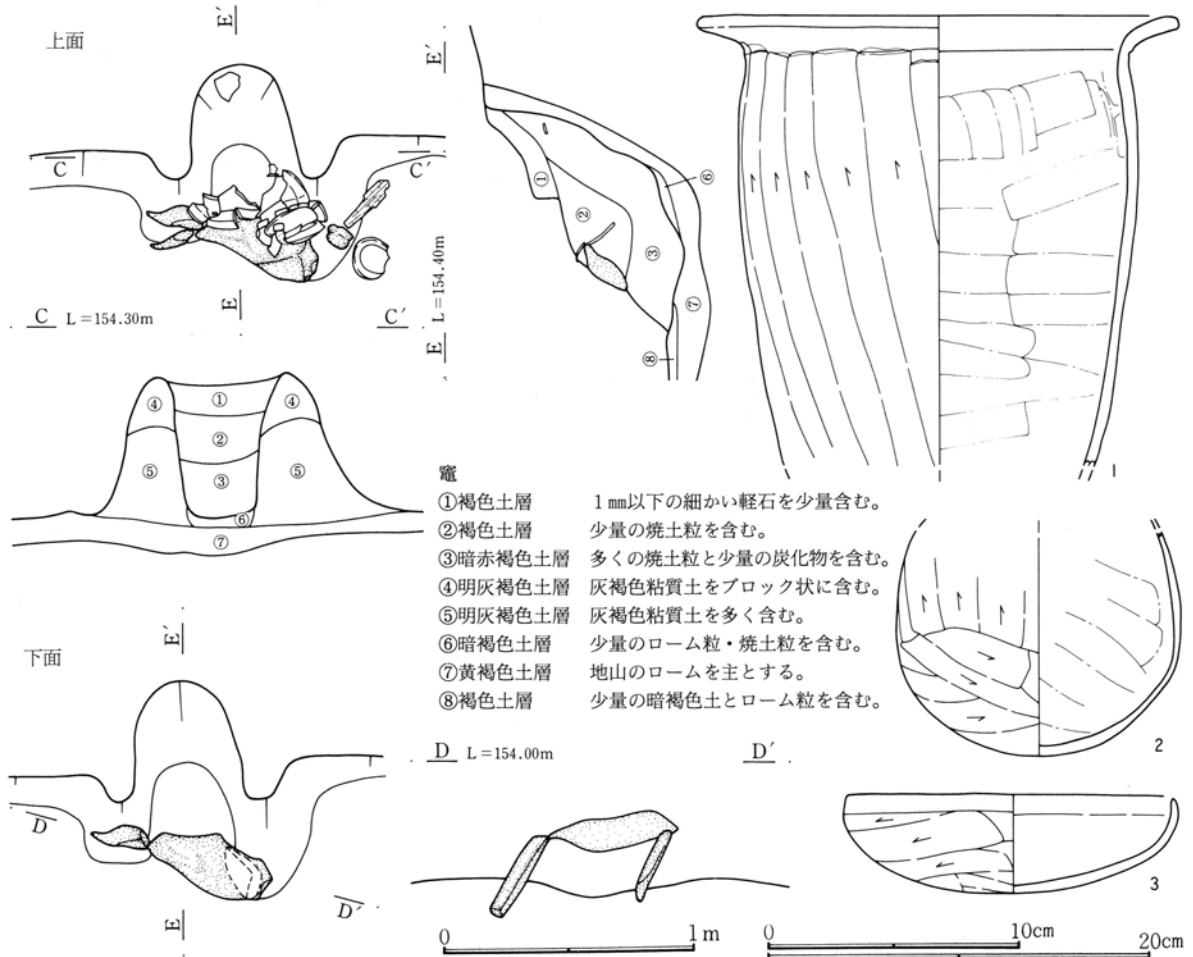
遺物 甕の胴部片が多く出土しているが、図示できたのは1点である。

(竈)

位置 東壁面の南寄りに造られている。住居は小さいが、燃焼部の多くは床面から壁面部分にかけて造られており、壁面を大きく掘り込んではいない。

構造 左右の袖石が全体に右側に傾いており、その上に天井石が乗っている。天井石には燃焼部で使われていたと思われる土師器の甕が倒れかかった状態で残っている。土で造られている袖部分は灰褐色粘質土を多く用いて造られている。燃焼部付近の覆土中から多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向88cm、燃焼部幅43cmである。



- 竈
- ①褐色土層 1mm以下の細かい軽石を少量含む。
 - ②褐色土層 少量の焼土粒を含む。
 - ③暗赤褐色土層 多くの焼土粒と少量の炭化物を含む。
 - ④明灰褐色土層 灰褐色粘質土をブロック状に含む。
 - ⑤明灰褐色土層 灰褐色粘質土を多く含む。
 - ⑥暗褐色土層 少量のローム粒・焼土粒を含む。
 - ⑦黄褐色土層 地山のロームを主とする。
 - ⑧褐色土層 少量の暗褐色土とローム粒を含む。

第134図 729号住居跡竈・出土遺物実測図

729号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
134-1 84	土師器 甕	床面+25 口完、胴 $\frac{1}{2}$	口 25.5 高・底—	①密、1~2mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面強いヘラ削り、削られていない口縁部との境に段を持つ。
134-2	土師器 小型甕	床面+2 胴部 $\frac{1}{2}$	口— 高・底—	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③赤褐色	底面は丸く、胴部と区別できない。 胴部外面ヘラ削り。内面ナデ。
134-3 84	土師器 坏	床面+6 $\frac{1}{2}$ 残存	口 12.8 高 3.8 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 内外器表面の多くが斑点状に剝離して粗れている。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

734号住居跡 (第135~137図、図版29・84・85)

位置 本住居跡は第11次調査区にあり、50-101グリッドに位置する。

概要 調査区の最も東側に位置する。小さい住居であり、さらに住居北側は調査区域外となっている。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。床下に小穴や床下土坑が掘られている。

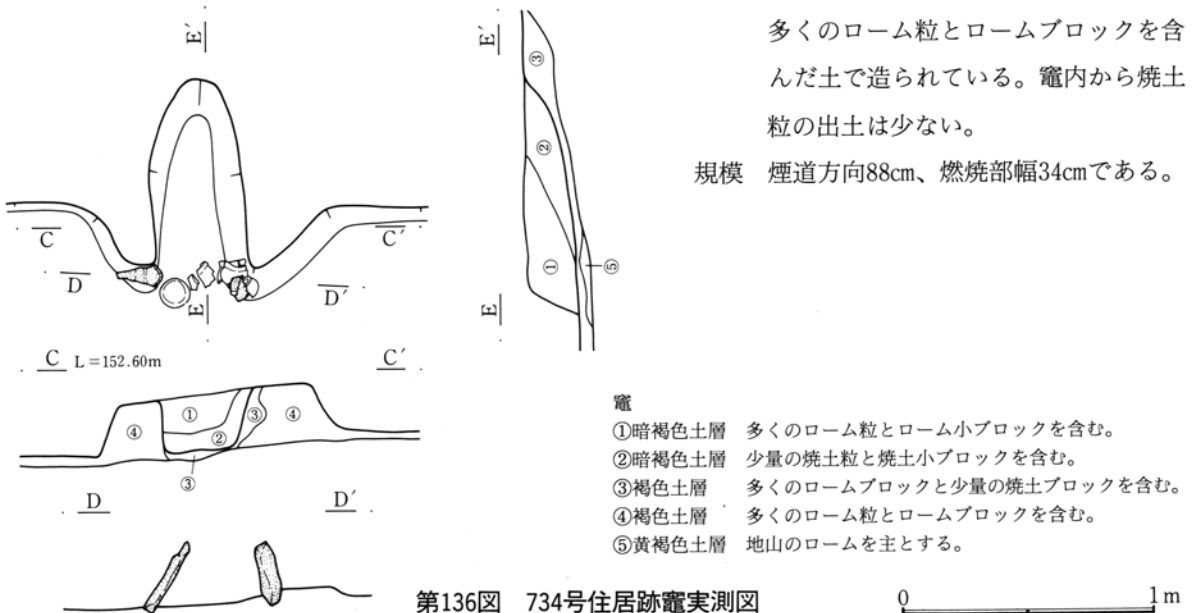
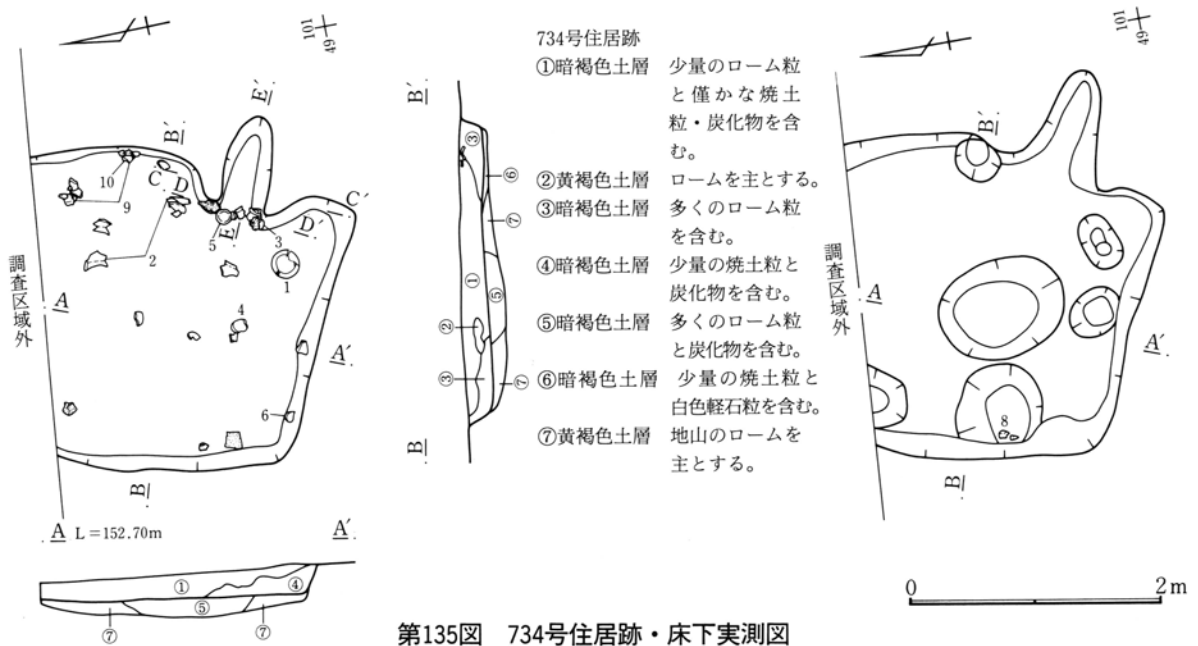
規模 東西2.25m、南北方向は不明である。壁高は残りの良い南東コーナー付近で29cmである。

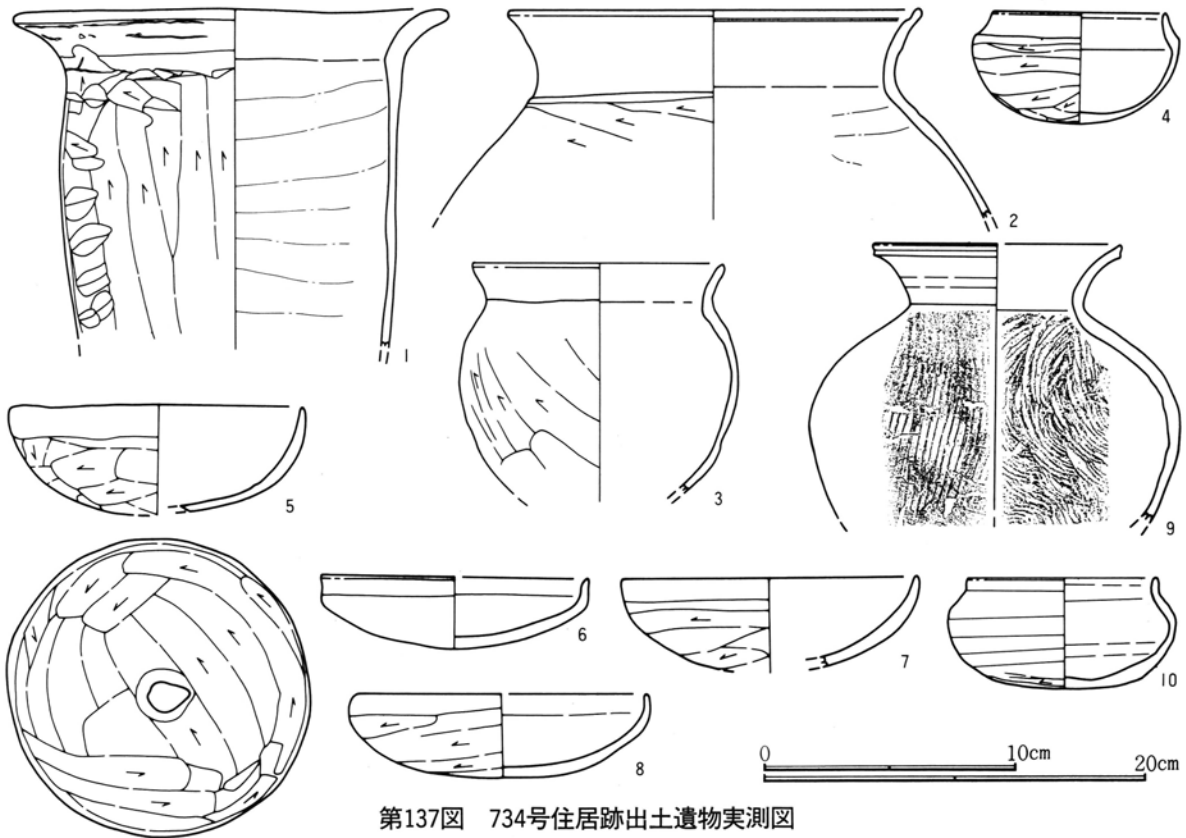
遺物 竈付近より甕や坏が出土している。

(竈)

位置 東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。住居が小さいためか袖部分以外は壁面を掘り込んで造られている。

構造 左右の袖石が一部傾きながらもほぼ据えられた状態で出土している。他に石は出土していない。袖は





第137図 734号住居跡出土遺物実測図

734号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
137-1 85	土師器 甕	床面-9 口縁部完形 胴一部欠	口 23.1 高 - 底 -	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	胴部ヘラ削り、砂粒の移動少なく器表面の粗れ少ない。内面ナデにて器表面密。胴部は削られて器内が薄い。
137-2 85	土師器 壺	床面+4 口縁部 $\frac{2}{3}$ 肩部 $\frac{1}{3}$	口 22.0 高 - 底 -	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。
137-3 84	土師器 小型甕	竈内 口縁ほぼ完 胴部 $\frac{1}{3}$	口 13.5 高 - 底 -	①粗、1~2mmの砂粒を大量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り、器表面が粗れており削りの単位不明瞭な所が多い。内外器表面の多くが斑点状に剝離している。
137-4 84	土師器 小型壺	覆土 ほぼ完形	口 9.0 高 5.8 底 -	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、胎土が密で砂粒の動きはほとんどなし。内面ナデにて器表面密。黒斑全く認められず。
137-5 84	土師器 坏	床面+11 ほぼ完形 底部中央欠	口 11.7 高 4.4 底 -	①密、1~3mmの赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、底部中央に焼成後内側から穿孔された小さな穴あり。内側器表面の多くが斑点状に剝離している。
137-6 84	土師器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(10.4) 高 2.8 底 -	①密、少量の角閃石を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りと思われるが、器表面が粗れており削りの単位不明瞭。
137-7 85	土師器 坏	覆土 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部 $\frac{1}{3}$	口 11.6 高 - 底 -	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、器表面が粗れており削りの単位不明瞭。
137-8 85	土師器 坏	床面-16 $\frac{1}{2}$ 残存	口(11.4) 高 3.3 底 -	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削りと思われるが多くの器表面が剝離しており削りの単位不明瞭。内外面とも器表面の多くが剝離している。
137-9 85	須恵器 壺	覆土 口縁部 $\frac{1}{6}$ 胴部 $\frac{1}{3}$	口(13.0) 高 - 底 -	①粗、1~2mmの長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質、焼締 ③灰色	胴部外面平行叩き。内面青海波文。口縁端部は鋭利につくられている。
137-10 85	須恵器 小型壺	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口 10.0 高 5.8 底 (8.2)	①密、1mm以下の長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面手持ヘラ削り。口縁部は短くほぼ垂直に立ち上がる。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

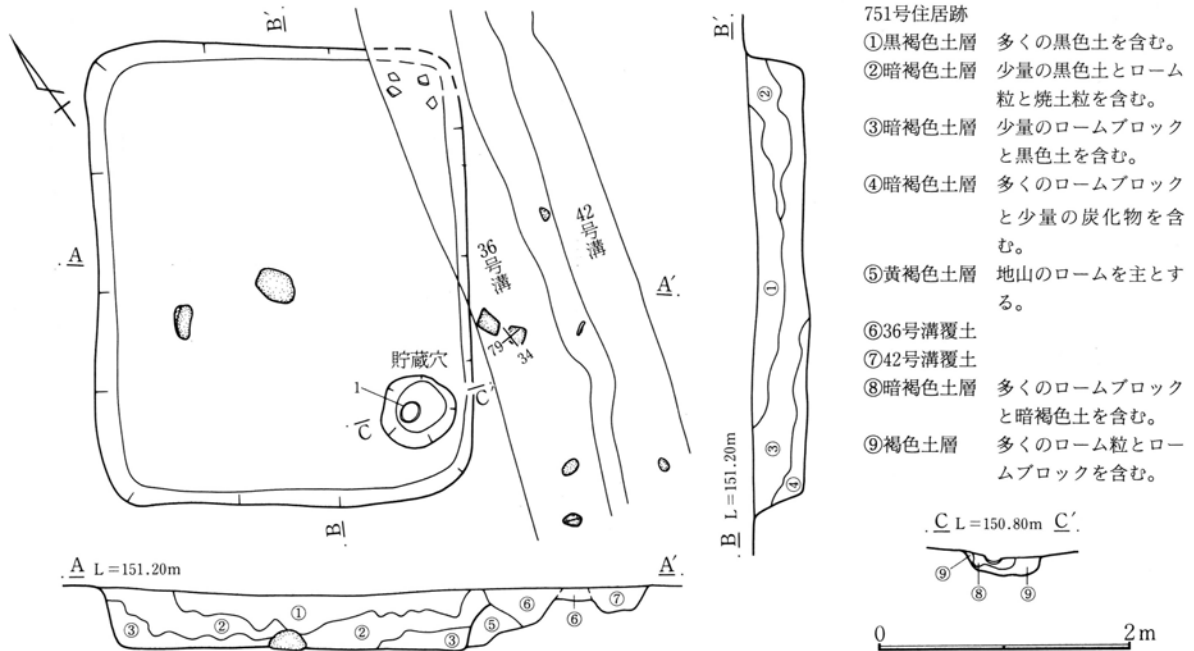
751号住居跡 (第138・139図、図版29・85・115)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、80—34グリッドに位置する。

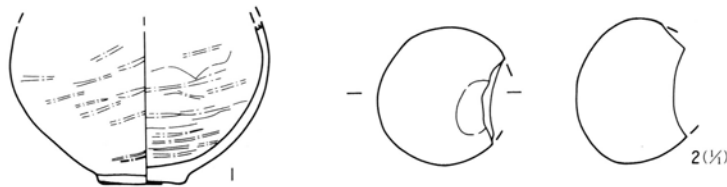
概要 小さい住居で北東部分に36号溝と42号溝があり、36号溝によって北東部分の覆土上面が掘り込まれている。発掘調査段階において12号住居状遺構として扱ったが、ヘラ磨きがある壺の胴部下半分と刷毛目整形を持つS字状口縁の甕の破片が9片出土していること、また貯蔵穴が南東コーナー部分に造られていること、また住居中央に炉で用いたと思われる石が出土し、周辺の覆土中より焼土粒が出土していること等より、古墳時代前期後半の住居であることが考えられ751号住居として扱った。柱穴は掘られていない。

規模 東西2.94m、南北3.60mである。壁高は残りの良い南西コーナー付近で48cmである。貯蔵穴は径58cm 深さ21cmである。

遺物 甕の胴部片が多く出土しているが、図示できたのは土師器の壺1点と土玉1点である。



第138図 751号住居跡実測図



第139図 751号住居跡出土遺物実測図

751号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
139-1 85	土師器 壺	覆土 胴下~底部 完形	口 — 高 — 底 4.5	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焙、硬質 ③にぶい褐色	底部ナデ。 胴部内外面ヘラ磨きにより器表面密、ヘラ磨きの部分 は光沢を持つ、ヘラ磨きの単位不明瞭。
139-2 115	土製品 土玉	覆土 3/4残存	径 1.9 重 5.5	①密 ②酸化焙、硬質 ③断面にぶい橙色、外面黒褐色	ナデにより器表面を密に仕上げている。 表面は吸炭により黒褐色を呈している。

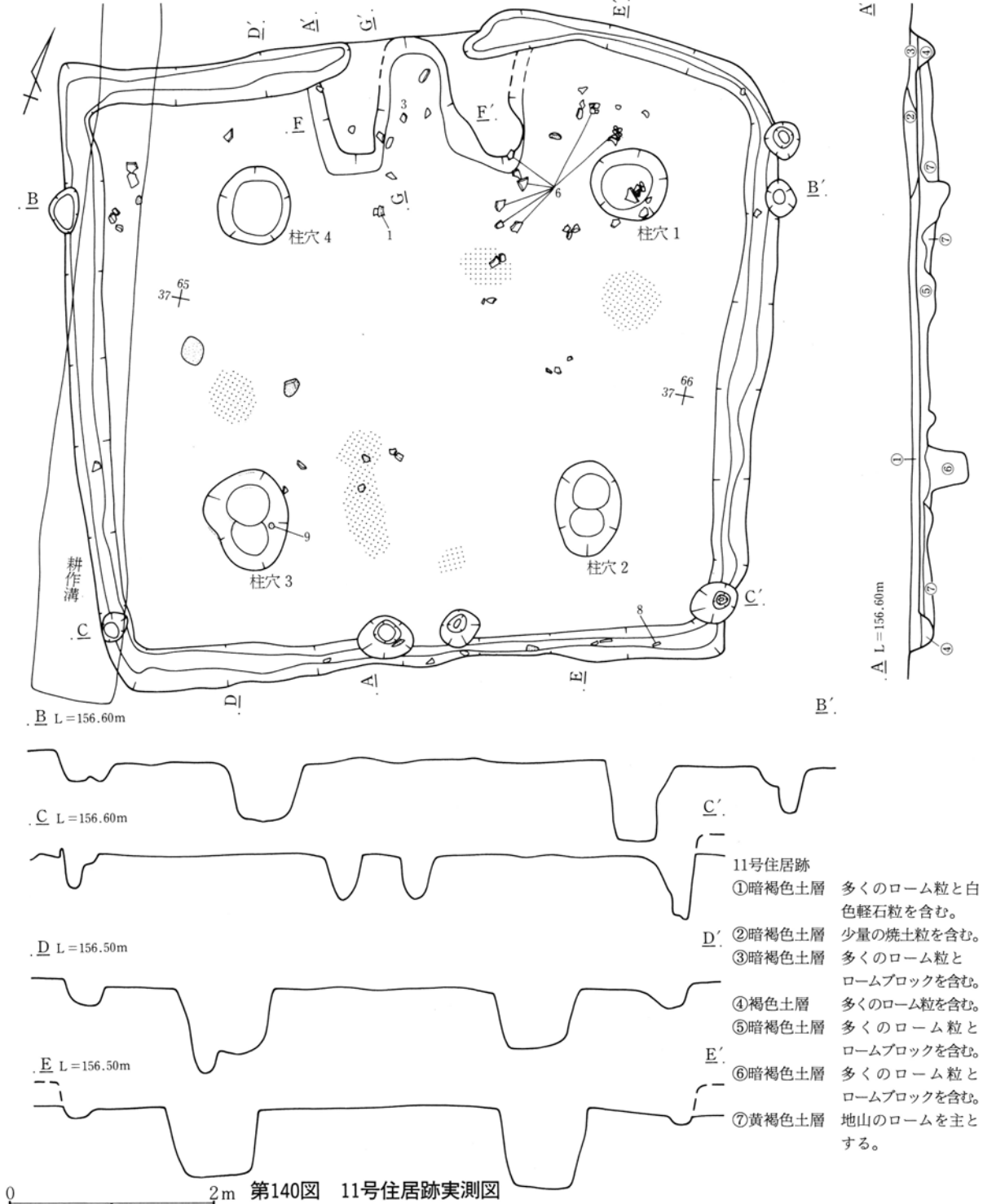
第4章 奈良時代の遺構と遺物

11号住居跡 (第140~143図、図版30・85・113・116)

位置 本住居跡は第2次調査区にあり、37・38-66グリッドに位置する。

概要 残りが悪く確認面から床面までが浅い。西側部分を浅い耕作溝により覆土の多くを掘り込まれている。

構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の黒色土が混入した土で造られている。柱穴が4本



第4章 奈良時代の遺構と遺物

掘られており、柱穴2と柱穴3の南に重複して柱穴と思われる小穴が掘られている。

規模 東西6.96m、南北6.09mである。壁高は残りの良い南西コーナー部分で22cmである。柱穴1は径70cm深さ74cm、柱穴2は径68cm深さ62cm、南に重複する小穴の深さは64cm、柱穴3は径79cm深さ56cm、南に重複する小穴の深さは76cm、柱穴4は径72cm深さ53cmである。貯蔵穴は掘られていない。

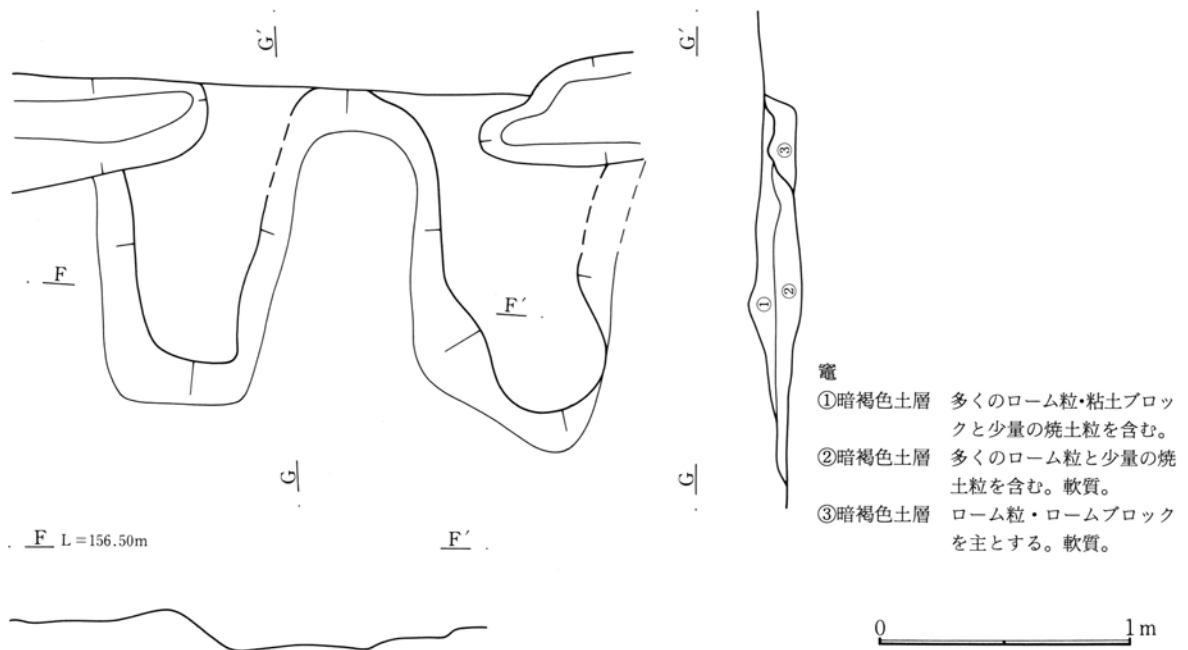
遺物 竈周辺より甕や坏が出土している。

(竈)

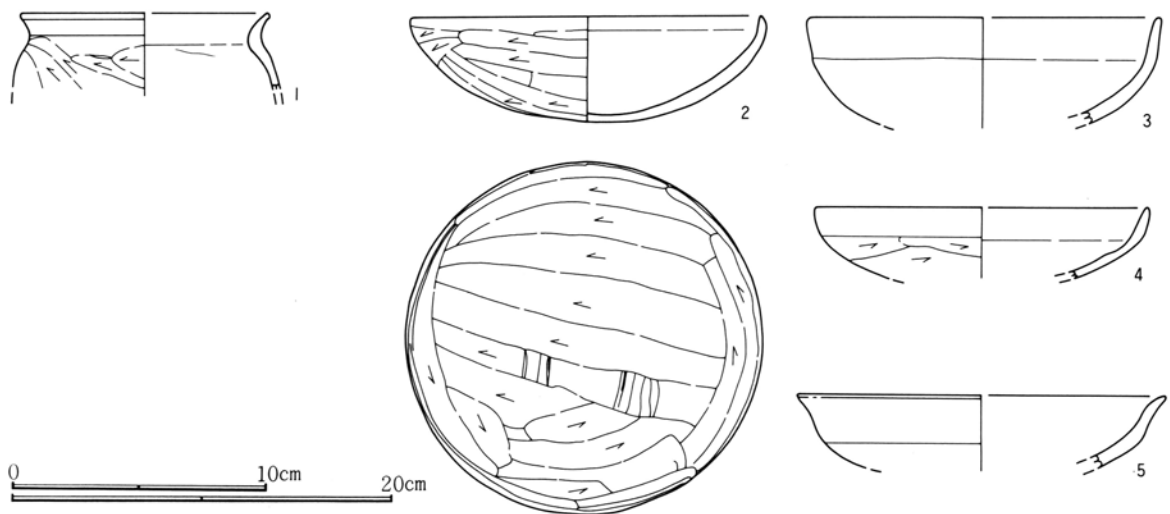
位置 住居北壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 非常に残りが悪い竈である。袖部分や燃焼部の多くは痕跡をたどって調査した。燃焼部付近の覆土からは少量の焼土粒が出土している。

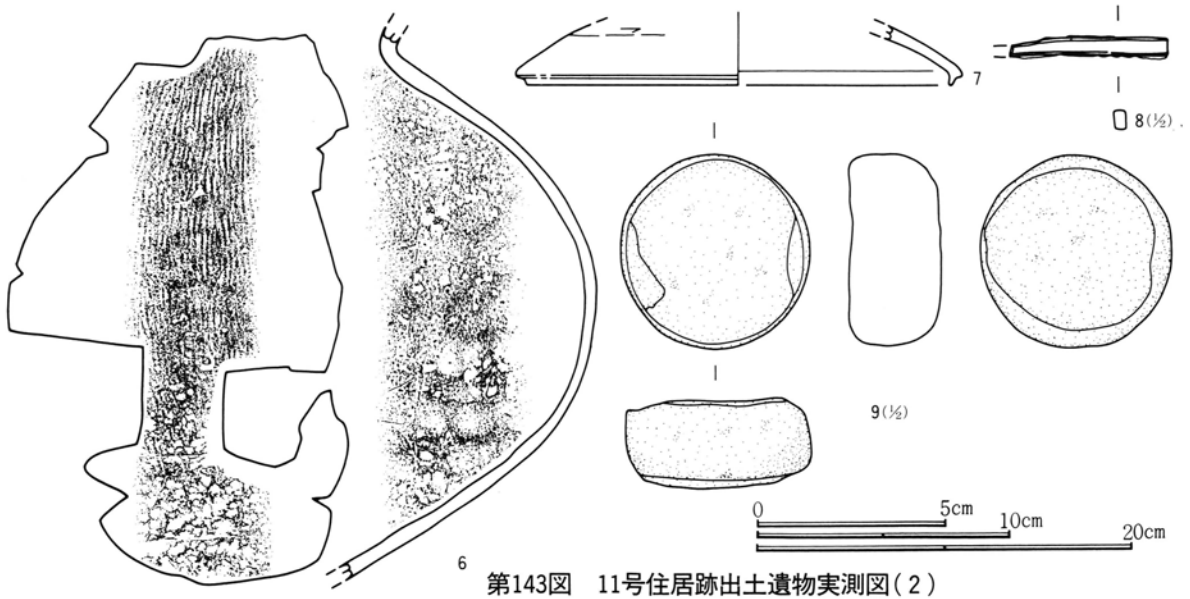
規模 残りが悪く明確でない。



第141図 11号住居跡竈実測図



第142図 11号住居跡出土遺物実測図(1)



第143図 11号住居跡出土遺物実測図(2)

11号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
142-1	土 師 器 小 型 甕	床面+3 口縁破片	口(13.2) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③褐色	胴部ヘラ削り。 口縁端部がわずかに玉縁状になっている。
142-2 85	土 師 器 坏	掘り方 ほぼ完形	口 13.6 高 4.1 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、砂粒の移動は少ない。 内面ナデにより器表面密。
142-3	土 師 器 坏	床面+3 口縁片	口(13.7) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③明褐色	底面はヘラ削りと思われるが、器表面が粗れているため不明。
142-4	土 師 器 坏	覆土 小破片	口(13.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、ヘラの単位は明瞭でない。
142-5	土 師 器 坏	覆土 口縁部 $\frac{1}{4}$ 底部 $\frac{1}{6}$	口(14.3) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りと思われるがヘラの単位不明。
143-6	須 恵 器 甕	床面直上 胴部破片	口 — 高 — 底 —	①密、1~2mmの長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰褐色	内面素文の当て目。 外面平行叩き目。 内外器表面が斑点状に剝離している。
143-7	須 恵 器 蓋	覆土 端部片	口(16.5) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を含む ②還元焰、硬質 ③灰色	天井部ヘラ削り。 下端部は細く下方へ折られている。
143-8 113	鉄 製 品 鉄 鏃 ?	床面+6 小破片	長 — 幅 0.7 厚 0.4 重 1.8		小破片であるが、鉄鏃の茎部分と思われる。
143-9 116	石 製 品 紡 錘 車	床面+2	径 5.1 孔径 — 厚 2.4 重 83.1		砂岩。紡錘車の未製品である。広面はやや雑であるが、他の面はていねいに削られている。

19号住居跡 (第144・145図、図版30・85・113・116)

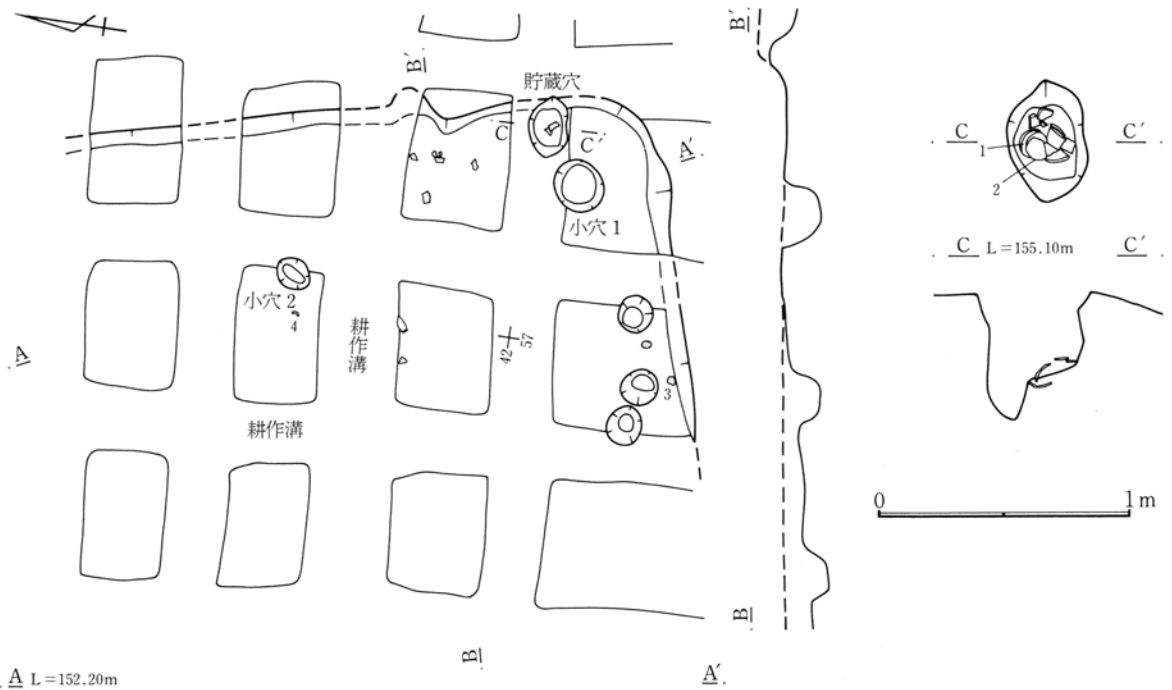
位置 本住居跡は第2次調査区にあり、42・43-57・58グリッドに位置する。

概要 住居の大部分は東西と南北方向に掘り込まれた多くの深い耕作溝により、削り取られてほとんど残っていない。竈の痕跡が東壁面に残っていることと、竈の右側に貯蔵穴と思われる小穴が掘られていることにより住居であることが確認できた。

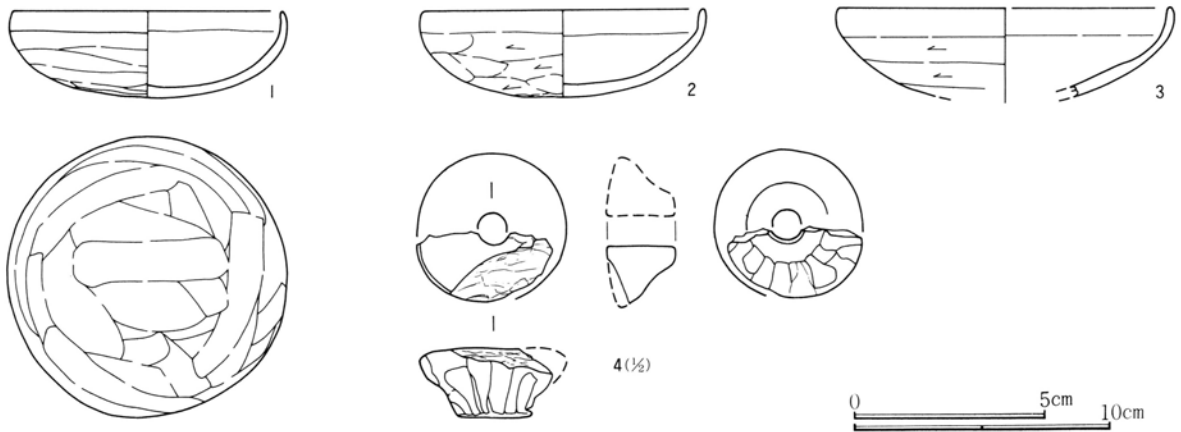
規模 住居規模は不明である。貯蔵穴は径38cm深さ49cm、小穴1は径39cm深さ43cm、小穴2は径26cm深さ53cmである。

遺物 貯蔵穴の中から土師器の坏が出土している。紡錘車の出土が注目される。

第4章 奈良時代の遺構と遺物



第144図 19号住居跡実測図



第145図 19号住居跡出土遺物実測図

19号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
145-1 85	土師器 坏	床面-30 完形	口 10.6 高 3.3 底 -	①密、やや粉状を呈する ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り、へらの単位不明瞭、へら削りの方向もほとんど不明。 黒斑全く認められず。
145-2 85	土師器 坏	床面-30 1/2残存	口 10.8 高 3.4 底 -	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。 内面ナデ、内側器表面が粗れている。 黒斑全く認められず。
145-3	土師器 坏	床面+3 1/2残存	口(13.0) 高 - 底 -	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③明褐色	底面へら削り、小さな砂粒が移動し底面やや粗い。
145-4 116	石製品 紡錘車	床面-13 1/2残存	長径(3.6) 短径(2.0) 重 11.6		滑石片岩。側面は刃物により削られている。 上下面はていねいに磨かれている。

24号住居跡（第146～148図、図版30・85・116）

位置 本住居跡は第2次調査区にあり、43—62グリッドに位置する。

概要 4軒の重複する住居の中の1軒である。4軒とも掘り込み面が浅いうえに多くの耕作溝により床下部分まで深く掘り込まれているため残りが悪い。そのため重複関係や住居範囲が明瞭でない箇所もある。本住居は同じ奈良時代の25号住居の南側部分を掘り込んで造られている。東には住居規模や時代の不明な32号住居がある。重複関係は明瞭につかめないが、本住居が32号住居を掘り込んでいると考えられる。また32号住居は古墳時代の26号住居により東側を掘り込まれている。新旧関係は32→25→24号住居、32→26号住居である。南東コーナーに貯蔵穴が掘られているため東壁面の耕作溝により削れた部分に竈が築かれていたものと思われる。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックの混入した土で造られている。柱穴が4本と貯蔵穴が南東コーナー部分に掘られている。

規模 東西4.52m、南北4.62mである。壁高は残りの良い南壁面部分で23cmである。柱穴1は径63cm深さ74cm、柱穴2は径54cm深さ39cm、柱穴3は径54cm深さ63cm、柱穴4は径48cm深さ70cmである。貯蔵穴は径60cm深さ43cmである。

遺物 土師器の破片が大量に出土しているが、図示できたのは3点である。

25号住居跡（第146～148図、図版30・85）

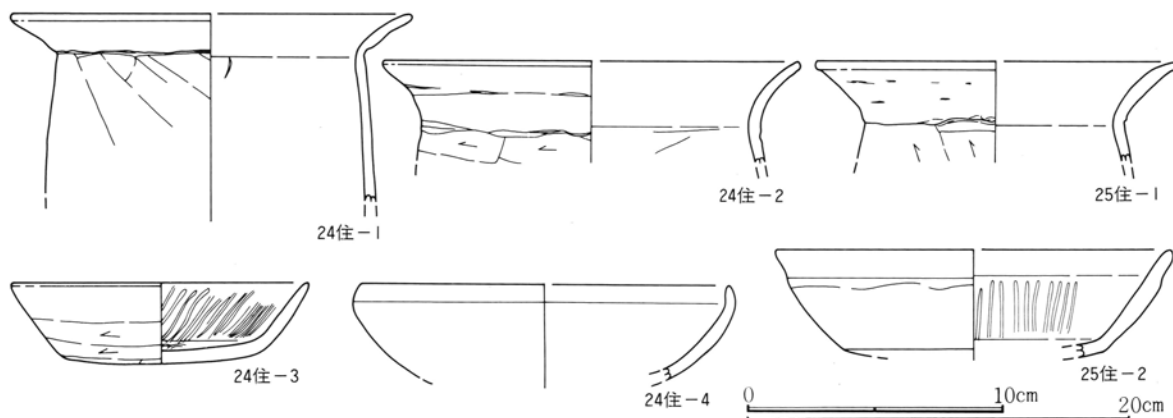
位置 本住居跡は第2次調査区にあり、43・44—62グリッドに位置する。

概要 4軒の重複する住居の中の1軒である。東西方向の多くの耕作溝により床下部分まで深く掘り込まれており、住居の残りは非常に悪い。本住居は同じ奈良時代の24号住居により南側を掘り込まれており、その部分の住居範囲は不明である。東には住居規模や時代の不明な32号住居があり、重複関係は明瞭につかめないが、本住居が32号住居を掘り込んでいると考えられる。新旧関係は32→25→24号住居である。竈と貯蔵穴は残っていない。北側の床面中央部に焼土粒が多く出土しているため、耕作溝によって削られている北壁面中央部に竈が造られていた可能性も考えられる。

構造 柱穴は掘られていない。24号住居と重複している南東部分に、本住居に伴うと思われる小穴が1本掘られている。

規模 東西3.99m、南北は不明である。壁高は残りの良い南西壁面部分で25cmである。小穴は径43cm深さ58cmである。

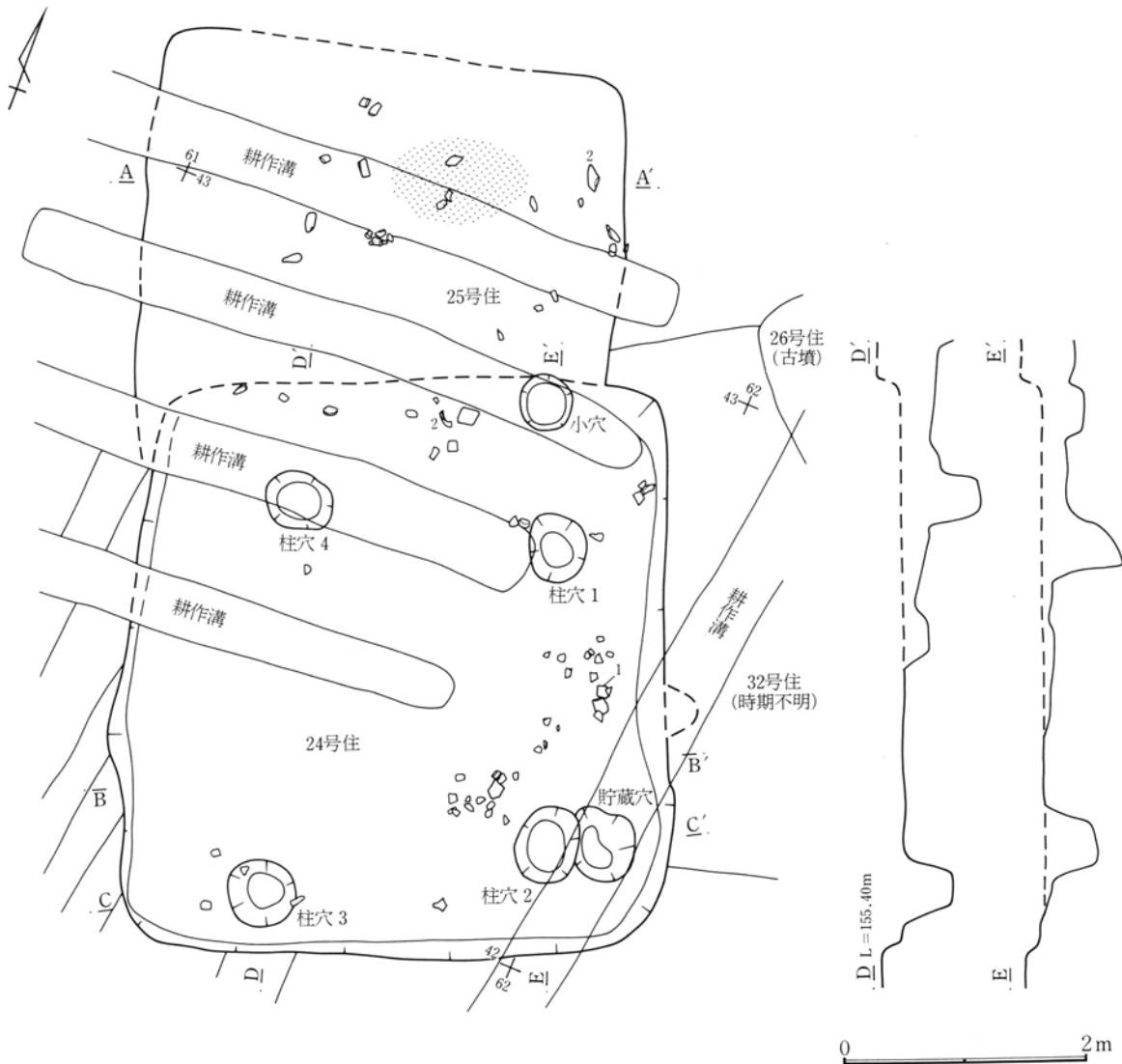
遺物 土師器の甕の胴部片が多く出土しているが、図示できたのは甕1点と坏1点のみである。



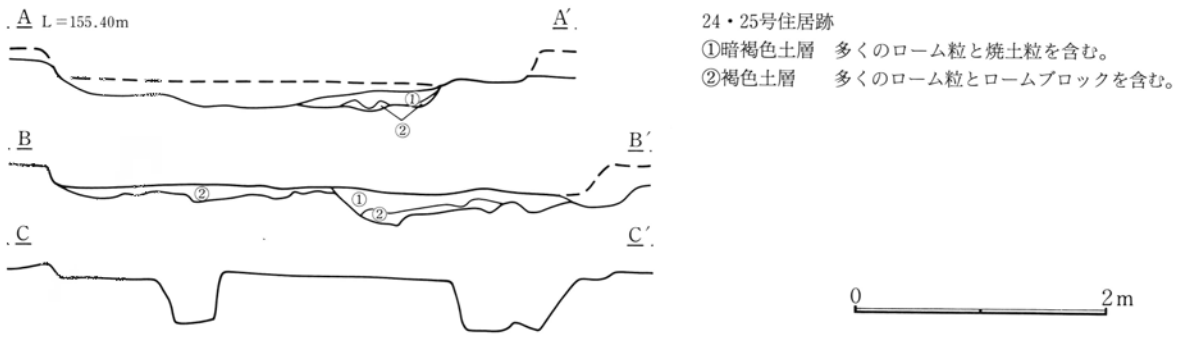
第146図 24・25号住居跡出土遺物実測図

24・25号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
146-1 (24住)	土 師 器 甕	床面+5 1/4残存	口(21.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面へら削り、へら削りの行なわれない口縁部との境に段差あり。
146-2 (24住)	土 師 器 甕	床面-4 1/4残存	口(22.0) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部へら削り。 口縁部に輪積痕が残る。
146-3 (24住) 85	土 師 器 坏	覆土 口縁一部欠 他完形	口 11.5 高 3.1 底 7.6	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。 体部外面へら削り。 内側口縁部に放射状暗文。底部に螺旋状暗文。
146-4 (24住)	土 師 器 坏	覆土 小破片	口(14.4) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削りと思われるが、器表面が粗れているためへら削りの単位不明。
146-1 (25住)	土 師 器 甕	床面+22 口縁小片	口(18.8) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面へら削り。口縁部に輪積痕が残る。 25号住の床下出土の破片と24号住床面出土の破片と接合。
146-2 (25住)	土 師 器 坏	床面-35 1/4残存	口(15.4) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず、粉状を呈する。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。 体部外面へら削り。 内面に多くの暗文。



第147図 24・25号住居跡実測図(1)



24・25号住居跡
 ①暗褐色土層 多くのローム粒と焼土粒を含む。
 ②褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

第148図 24・25号住居跡実測図(2)

29号住居跡 (第149～151図、図版31・85・125)

位置 本住居跡は第2次調査区にあり、41-60・61グリッドに位置する。

概要 北側の低くなる緩やかな傾斜面に位置し、北側の壁面と床面の残りは悪い。

構造 床面はローム粒を主とし少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は掘られていない。貯蔵穴としてはやや疑問ではあるが、それと思われる小穴が竈の右側に掘られている。

規模 東西3.90m、南北3.22mである。壁高は残りの良い南壁面部分で19cmである。貯蔵穴は39×24cm深さ31cmである。

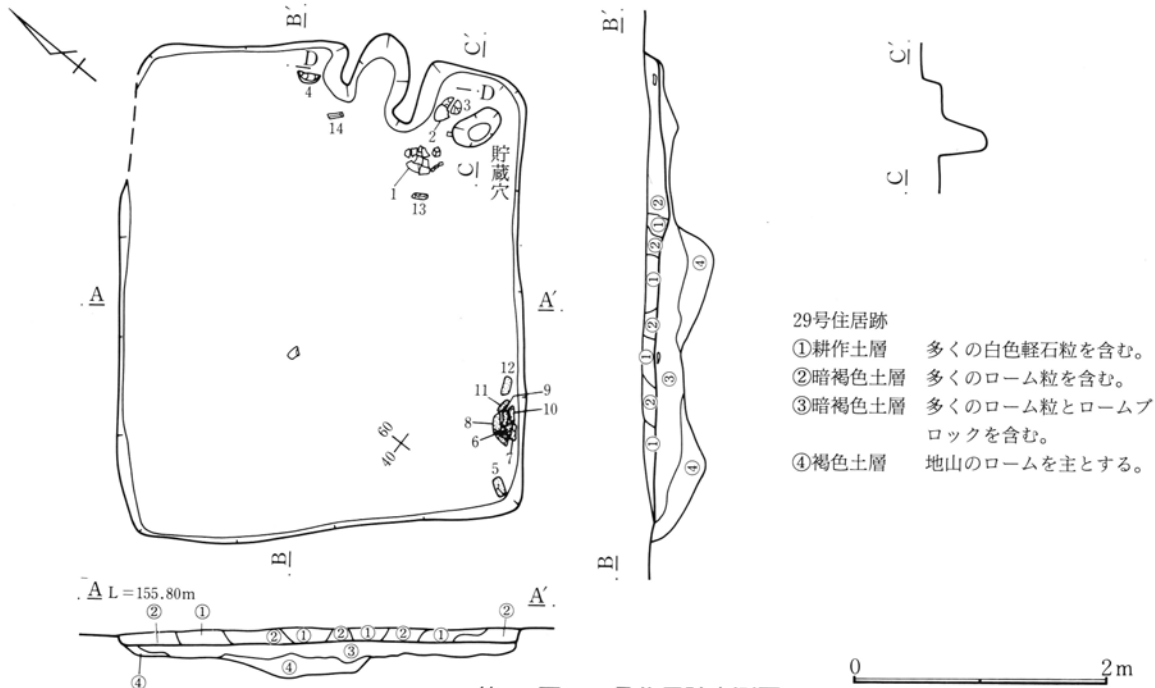
遺物 竈周辺より土師器の甕や坏が、また南壁面付近からこも編み石がまとまって出土している。

(竈)

位置 住居東壁面に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 残りが悪く袖部の下部が少し残っている。特に左袖部分は残りが悪い。左袖部分から少量の灰白色粘質土が出土しているため、一部で粘土も使用されていたようである。燃烧部付近から多くの焼土粒が出土している。

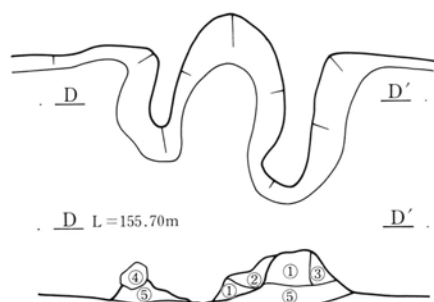
規模 煙道方向71cm、燃烧部幅43cmである。



29号住居跡
 ①耕作土層 多くの白色軽石粒を含む。
 ②暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
 ③暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
 ④褐色土層 地山のロームを主とする。

第149図 29号住居跡実測図

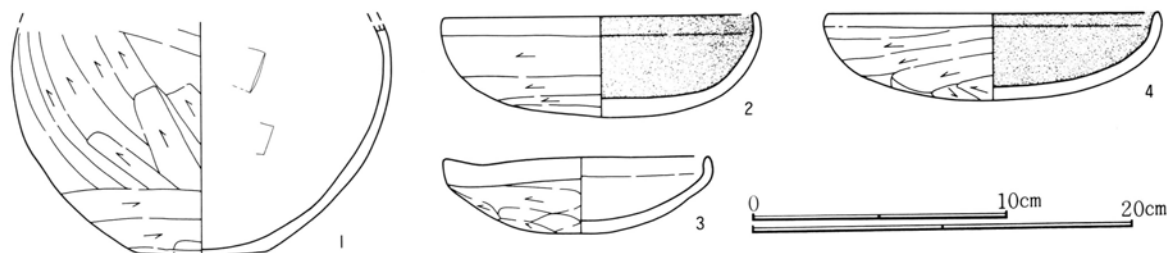
第4章 奈良時代の遺構と遺物



- 竈
- ①暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
 - ②暗赤褐色土層 多くの焼土粒を含む。
 - ③暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
 - ④灰白色粘質土層 多くの灰白色粘土を含む。
 - ⑤褐色土層 ロームとローム粒を主とし、少量の焼土粒を含む。

第150図 29号住居跡竈実測図

0 1 m



第151図 29号住居跡出土遺物実測図

29号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
151-1	土師器 甕	床面+5 底部完形	口 — 高 — 底 6.8	①密、1~2mmの長石粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③灰褐色、一部黒褐色	胴部外面ヘラ削り、砂粒は移動しているが器表面の粗れは少ない。 内面ナデにて器表面密。
151-2 85	土師器 坏	床面+3 ほぼ完形	口 12.4 高 4.0 底 —	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、砂粒の移動は少ない。 内面ナデにて器表面密。 内面に黒漆と思われる付着物が多い。
151-3 85	土師器 坏	床面+5 1/3残存	口 10.5 高 3.0 底 —	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラナデ、砂粒の移動は少ない。 口縁部ナデ、内面ナデ、雑な感じのつくりである。 全体にゆがみが認められる。
151-4 85	土師器 坏	床面+5 1/2残存	口 13.4 高 3.4 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、砂粒の移動ほとんどなく器表面比較的密。口縁部横ナデ。内側器表面密。 内面に黒漆と思われる付着物が多い。
遺物番号	図版番号	器種	法	量(cm)(g)	石 材 ・ 備 考
5	125	こも編み石	長 14.8 幅 7.4 厚 2.6 重 440	絹雲母石墨片岩	
6	125	こも編み石	長 10.5 幅 4.4 厚 3.5 重 240	流紋岩	
7	125	こも編み石	長 14.0 幅 4.7 厚 2.9 重 270	緑簾緑泥片岩	
8	125	こも編み石	長 16.6 幅 6.4 厚 4.0 重 670	絹雲母石墨片岩	
9	125	こも編み石	長 13.4 幅 6.1 厚 2.9 重 350	緑簾緑泥片岩	
10	125	こも編み石	長 13.8 幅 5.5 厚 2.4 重 300	緑簾緑泥片岩	
11	125	こも編み石	長 11.4 幅 5.4 厚 2.9 重 295	絹雲母石墨片岩	
12	125	こも編み石	長 12.9 幅 5.8 厚 2.9 重 370	閃緑岩	
13	125	こも編み石	長 14.2 幅 5.8 厚 4.6 重 505	流紋岩	
14	125	こも編み石	長 12.0 幅 5.0 厚 1.9 重 210	点紋緑泥片岩	

61号住居跡 (第152~156図、図版31・85・86・113・116・121・125)

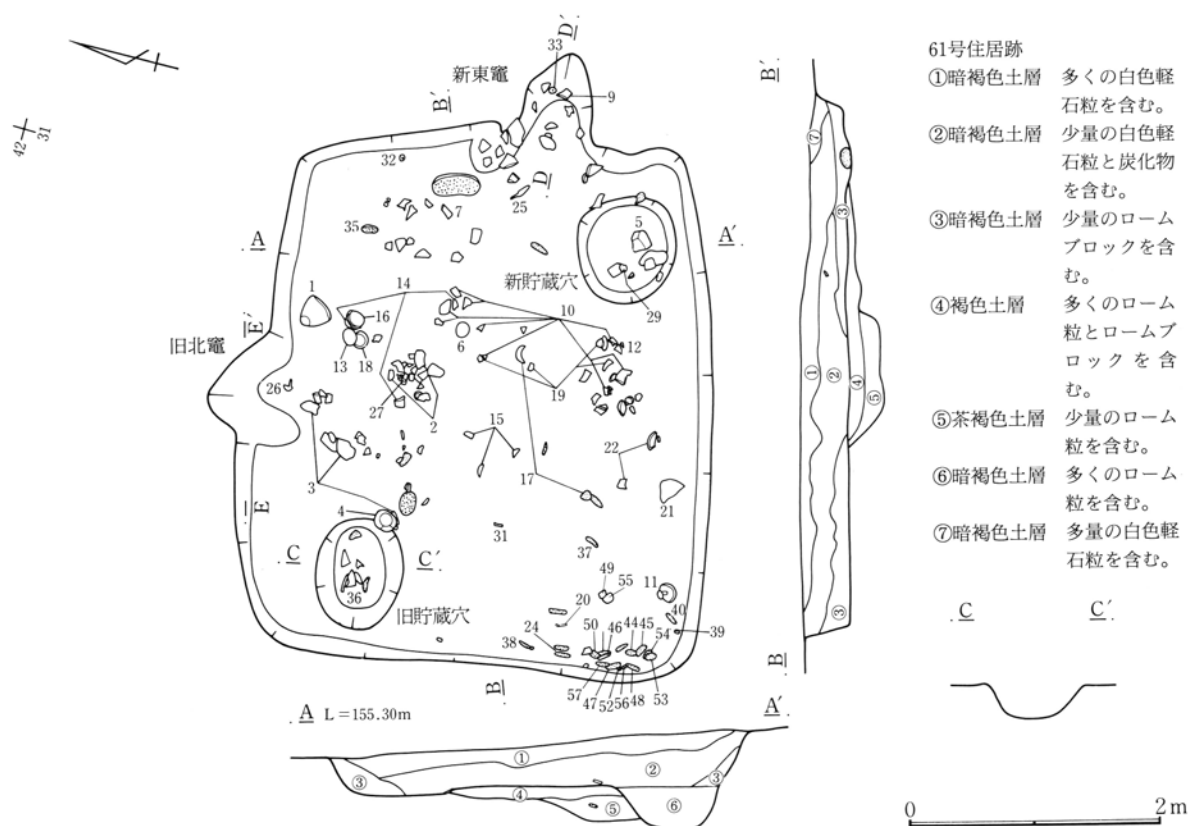
位置 本住居跡は第3次調査区にあり、42-31・32グリッドに位置する。

概要 比較的残りの良好な住居であり、竈は新東竈と旧北竈が確認されている。

構造 床面はローム粒を主とし少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は掘られていないが、新竈の右側と旧竈の左側に貯蔵穴が掘られている。

規模 東西4.22m、南北3.72mである。壁高は残りの良い南壁面部分で46cmである。新貯蔵穴は径78cm深さ31cmである。旧貯蔵穴は径85×70cm深さ26cmである。

遺物 出土量は全体に多く、多くの鉄製品と紡錘車2点が注目される。南西コーナーより大量のこも編み石が出土している。



第152図 61号住居跡実測図

(新東竈)

位置 住居東壁面南寄りに造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 両袖部分の残りが悪く、袖石等も残っていない。左袖付近に細長い石が落ちており、天井石の可能性もあるが不明である。燃烧部付近の竈内より多くの焼土粒が出土している。

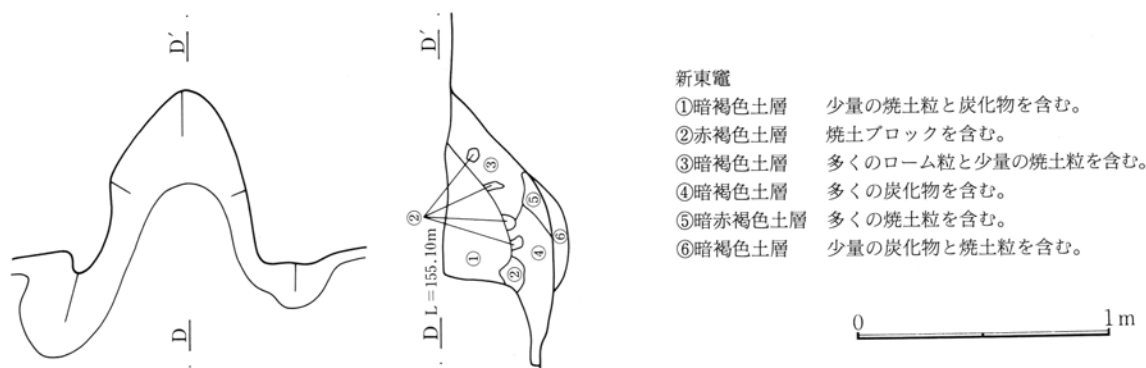
規模 煙道方向88cm、燃烧部幅59cmである。

(旧北竈)

位置 住居北壁面西寄りに造られている。

構造 左袖の下部分が僅かに残っているが、大部分の袖は残っていない。床面上に位置する大部分は取り除かれていたものと思われる。壁面を掘り込んで造られた煙道部と燃烧部の一部が残っており、その部分から少量の焼土粒が出土している。

規模 燃烧部の大部分が残っていないため不明である。

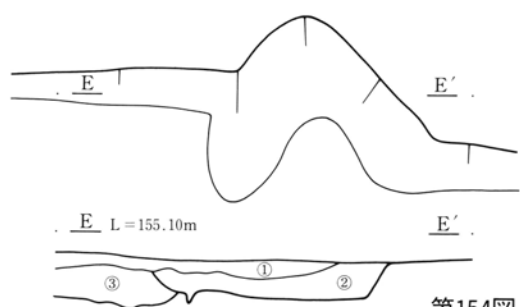


第153図 61号住居跡新東竈実測図

新東竈

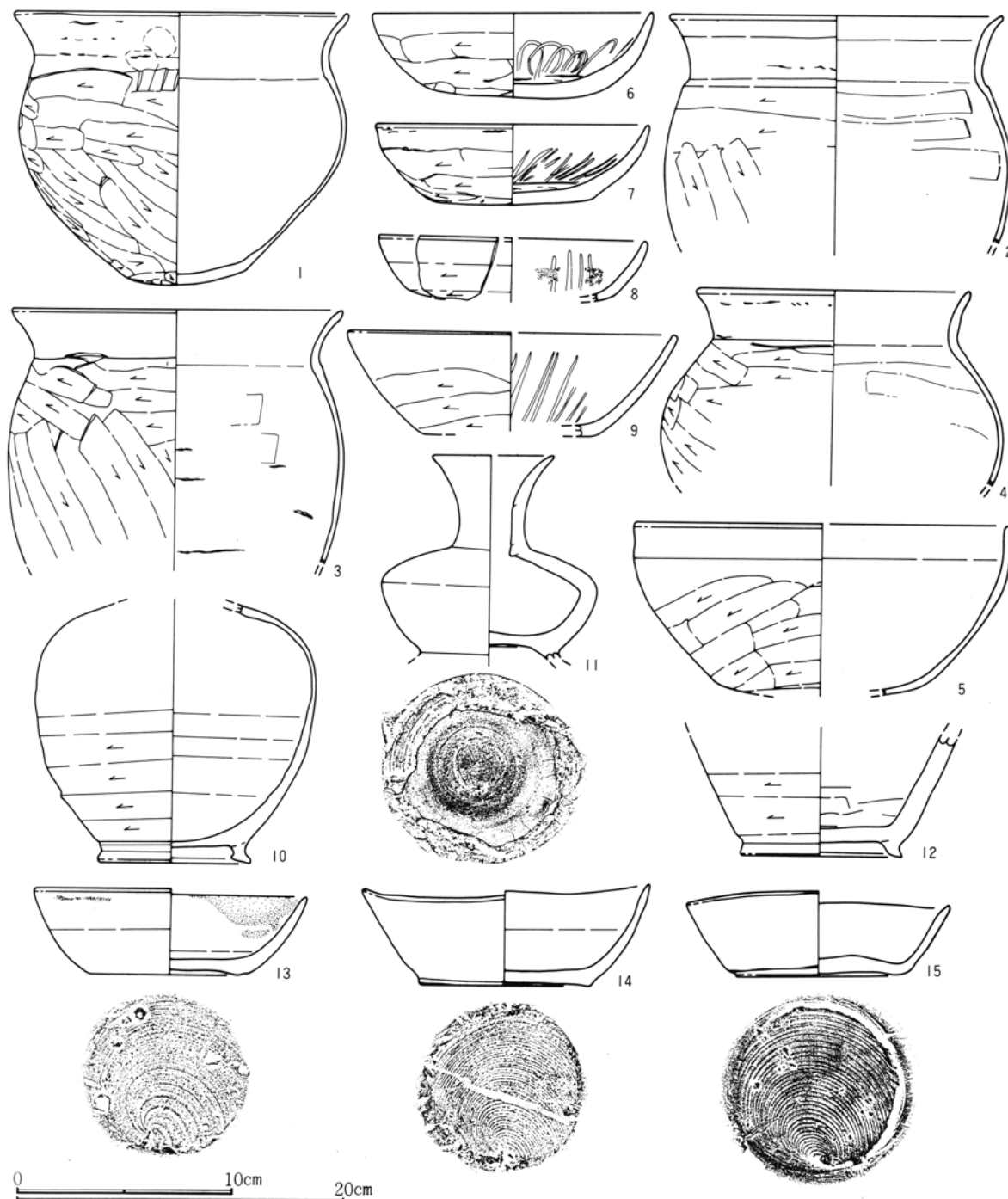
- ①暗褐色土層 少量の焼土粒と炭化物を含む。
- ②赤褐色土層 焼土ブロックを含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ④暗褐色土層 多くの炭化物を含む。
- ⑤暗赤褐色土層 多くの焼土粒を含む。
- ⑥暗褐色土層 少量の炭化物と焼土粒を含む。

第4章 奈良時代の遺構と遺物

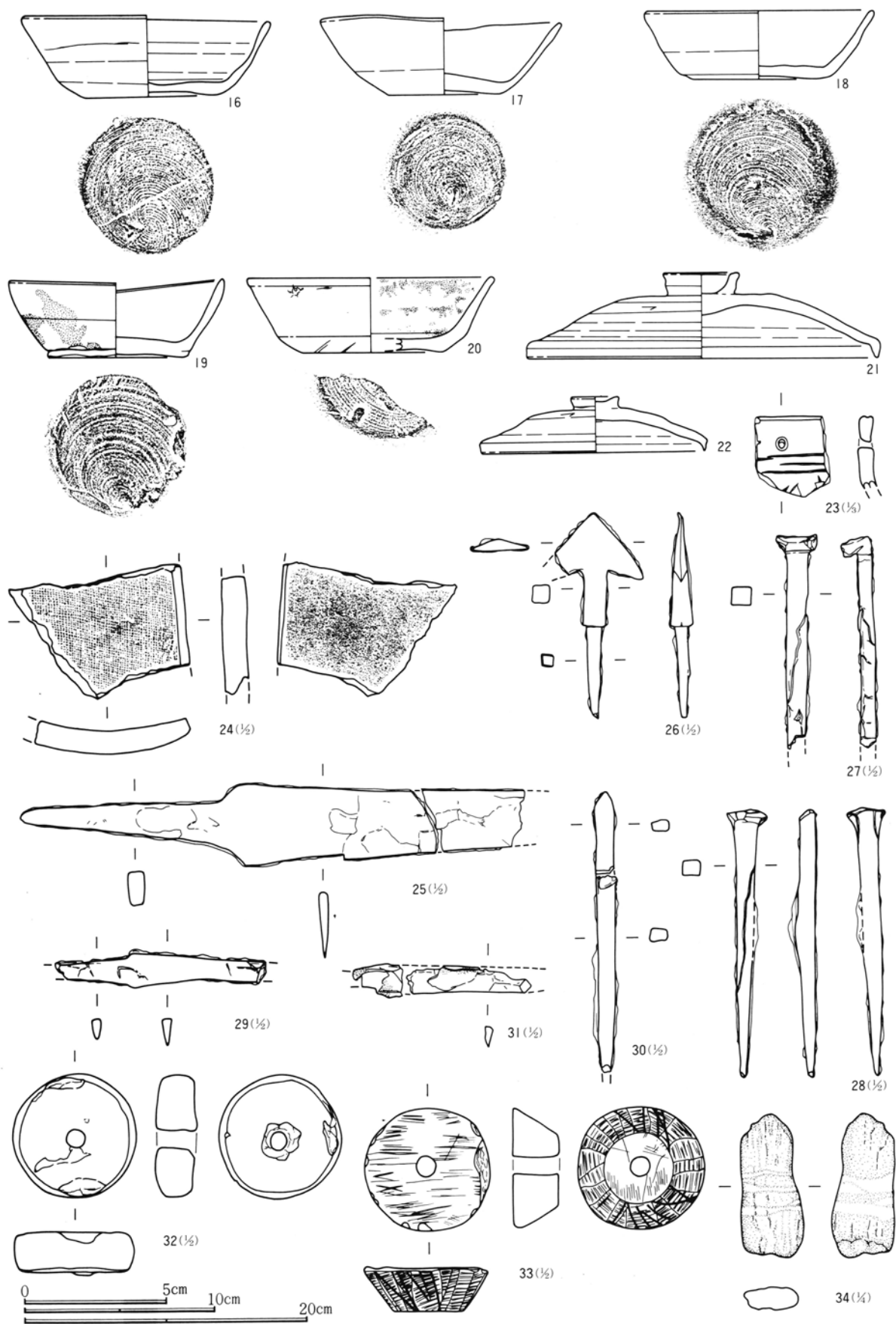


- 旧北竈
- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
 - ②暗赤褐色土層 少量の焼土ブロックとロームブロックを含む。
 - ③暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

第154図 61号住居跡旧北竈実測図



第155図 61号住居跡出土遺物実測図(1)



第156図 61号住居跡出土遺物実測図(2)

第4章 奈良時代の遺構と遺物

61号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
155-1 85	土師器 甕	床面+18 ほぼ完形	口 20.3 高 16.7 底 7.2	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
155-2 85	土師器 甕	床面-20 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{3}$ 残	口 20.2 高 - 底 -	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
155-3 85	土師器 甕	床面+21 口縁~ 胴上部 $\frac{1}{2}$	口 20.0 高 - 底 -	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
155-4 86	土師器 甕	床面+27 口縁~胴上部 $\frac{1}{2}$ 残	口 16.8 高 - 底 -	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へラ削り。 口縁部に輪積痕が少し残る。 胴部内面ナデにて器表面密。
155-5	土師器 鉢	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(22.6) 高・底-	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面~胴部外面へラ削り。器表面全体が粗い。 内面ナデにて器表面密。
155-6 85	土師器 坏	床面直上 完形	口 12.8 高 3.9 底 -	①密、小さな雲母粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。体部へラ削り。 口縁部内側に暗文、内側底面に暗文なし。 内側底面と口縁部との境にへらの圧痕がある。
155-7 86	土師器 坏	床面+25 ほぼ完形	口 12.6 高 3.7 底 7.2	①やや粗、2~3mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③黒褐色、一部橙色	底面と体部外面へラ削り。口縁部横ナデ。 内側底面周辺に一条の沈線。口縁部に暗文。 内側底面に明瞭な暗文なし。
155-8	土師器 坏	覆土 破片	口(12.4) 高・底-	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質③にぶい赤褐色	底面と体部へラ削り。内面に放射状暗文。 内面に剝離しやすい黒色物が付着。
155-9	土師器 坏	覆土 破片	口(15.0) 高・底-	①密、1mm前後の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質③にぶい赤褐色	底面へラ削り。体部へラ削り。口縁部横ナデ。 内面に多くの暗文あり。
155-10 86	須恵器 壺	床面+9 $\frac{1}{2}$ 残存	口 - 高 - 底 9.0	①密、1mm以下の長石粒を少量含む。 ②還元焰、硬質、焼締 ③表面灰色、断面灰赤色	底面右回転へラ削り。胴下半へラ削り。 上半ナデで器表面密。内面ナデ。 長頸壺と思われる。肩部に多くの自然釉。
155-11 86	須恵器 長頸壺	覆土 口縁小破片 胴部完形	口(7.2) 高 - 底 -	①密、1mm以下の小さな長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面回転ナデ。 体部~肩部~頸部外面ナデにて器表面密。 降灰により灰白色の自然釉が付着している。
155-12 86	須恵器 壺	床面+11 底部完形 胴部 $\frac{1}{6}$ 残存	口 - 高 - 底 9.6	①密、1mm以下の長石粒を大量に含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面回転ナデ。 高台下端部は平らで内傾している。 胴部内面ナデ。
155-13 86	須恵器 坏	床面直上 完形	口 12.6 高 3.9 底 7.5	①密、1~2mmの長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面右回転糸切り痕。 口縁部に多くの炭と思われる黒色物が付着している。 固く焼締めている。
155-14 86	須恵器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 13.3 高 4.5 底 8.0	①やや粗、1~3mmの長石粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰オリーブ色	底面糸切り痕。 周辺部に薬の圧痕が残る。 底部中央で割れている。
155-15 86	須恵器 坏	床面+13 完形	口 12.0 高 3.9 底 7.4	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②還元焰、硬質 ③灰色	底面右回転糸切り痕。 周辺部は糸切り痕が2段になっている。
156-16 86	須恵器 坏	床面直上 完形	口 12.8 高 4.2 底 6.6	①密、1mm前後の長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面糸切り痕。 口縁部外側に輪積と思われる痕跡あり。 底部中央が割れている。
156-17 86	須恵器 坏	床面+17 完形	口 12.4 高 4.0 底 5.8	①密、1mm以下の長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面右回転糸切り痕。 口縁部内外面に明瞭なロクロ痕なし。
156-18 86	須恵器 坏	床面直上 完形	口 11.8 高 3.6 底 6.4	①密、1mm前後の長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面糸切り痕。口縁部中央にわずかな稜線。 器内の厚さがほぼ一定している。 内側口縁部約 $\frac{1}{2}$ 吸炭により黒色を呈している。
156-19 86	須恵器 坏	床面+5 $\frac{1}{2}$ 残存	口 11.0 高 3.9 底 7.2	①密、1mm前後の長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面糸切り痕。体部下端にも糸切り痕が残るため、切り直しが行なわれたものと思われる。 口縁部外面に光沢を持つ黒色物が付着している。
156-20	須恵器 坏	床面+33 破片	口(13.0) 高 - 底(7.4)	①密、1mm以下の小さな長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面糸切り痕。 内面に剝離しやすい黒色物が付着している。
156-21 86	須恵器 蓋	床面+1 $\frac{1}{2}$ 残存	口 18.2 高 - 底 -	①密、1~3mmの赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	天井部へラ削り。 摘はリング状である。 口縁部は折り返しである。

61号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考		
156-22 86	須恵器 蓋	床面+11 ほぼ完形	口 11.8 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②還元焰、硬質 ③灰白色	天井部回転糸切り。摘はボタン状で小さい。 口縁端部は折り返して短い。 全体に雑な感じのつくりである。		
156-23	土師器 甕?	覆土 破片	口 — 高・底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③浅黄橙色	甕又は羽釜の口縁部破片と思われる。 1箇所表面から小さな穴が穿けられている。		
156-24	平瓦	床面+7 破片	①粗、1~2mmの砂粒を多く含む ②還元焰、硬質 ③表面黒褐色、断面褐色	凹面に布目。側面ナデ。 凸面横方向のナデ。			
156-25 113	鉄製品 刀子	床面+18 破片	長 (17.7) 幅 2.9 厚 0.3~0.5 重 25.3		錆化が著しい大型の刀子である。 茎・棟区・刀区と刀身の一部分が残っている。		
156-26 113	鉄製品 鉄鏃	床面+7 ほぼ完形	長 6.2 幅 3.1 厚 0.8 重 10.6		鉄鏃の鏃身部・頸部・茎部である。一部欠損している が完形に近い。錆化は進んでいる。		
156-27 113	鉄製品 釘	床面直上 ほぼ完形	長 (7.4) 幅 0.8~1.4 厚 0.6 重 15.2		鉄釘である。下半の一部が欠損している。 残存状態は比較的良好である。		
156-28 113	鉄製品 釘	掘り方 ほぼ完形	長 9.4 幅 0.7~1.4 厚 0.6 重 12.9		ほぼ完形に残存している釘である。 中央部分の錆がはげしいが、他は比較的残りが良好。		
156-29 113	鉄製品 刀子	貯蔵穴内 破片	長 (7.4) 幅 1.3 厚 0.3 重 7.3		刀子の茎部と刃部の破片である。棟区が明瞭に残って いる。使用により刃部が細くなっている。		
156-30 113	鉄製品 鉄鏃	掘り方 破片	長 (9.8) 幅 0.9 厚 0.4 重 8.7		鉄鏃の頸部と鏃身部と思われるが、残りが悪いため明 確でない。		
156-31 113	鉄製品 刀子?	床面+26 破片	長 (6.3) 幅 1.2 厚 0.2 重 4.5		残りが悪く明らかでないが、刀子と思われる。 刃棟と思われる部分が残っている。		
156-32 116	土製品 紡錘車	覆土 完形	径 4.3/4.3 孔径 0.6 厚 1.5 重 34.0		出土例の少ない土製紡錘車である。表面全体がていね いにつくられて、部分的に光沢を持つ。		
156-33 116	石製品 紡錘車	覆土 完形	径 4.4/2.4 孔径 0.7 厚 1.6 重 41.2		滑石片岩。広面中砥削り、狭面は中砥削り後磨かれて 光沢を持つ。側面中砥削り。		
156-34 121	石製品 こも編み石	覆土 完形	長 10.0 幅 4.3 厚 1.6 重 105		絹雲母石墨片岩。縄を結んだ状態で燻されて全体が黒 色を呈している。縄の部分のみ黒色ではない。		
遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)				石材・備考
35	125	こも編み石	長 12.3	幅 4.5	厚 2.3	重 210	点紋絹雲母石墨片岩
36	125	こも編み石	長 12.6	幅 4.3	厚 2.6	重 230	点紋緑泥片岩
37	125	こも編み石	長 13.4	幅 4.0	厚 1.9	重 175	絹雲母石墨片岩
38	125	こも編み石	長 12.0	幅 3.3	厚 3.3	重 180	絹雲母石墨緑泥片岩
39	125	こも編み石	長 13.3	幅 3.5	厚 2.2	重 180	緑簾緑泥片岩
40	125	こも編み石	長 11.8	幅 5.4	厚 2.0	重 180	絹雲母石墨片岩
41	125	こも編み石	長 10.9	幅 4.7	厚 2.2	重 170	絹雲母石墨片岩
42	125	こも編み石	長 12.2	幅 3.6	厚 2.5	重 155	点紋緑泥片岩
43	125	こも編み石	長 13.2	幅 5.0	厚 2.2	重 200	絹雲母石墨片岩
44	125	こも編み石	長 10.1	幅 3.5	厚 3.5	重 195	点紋絹雲母石墨片岩
45	125	こも編み石	長 10.9	幅 4.4	厚 2.3	重 170	点紋緑泥片岩
46	125	こも編み石	長 9.7	幅 4.1	厚 2.5	重 130	点紋緑泥片岩 黒斑が一部認められる。
47	125	こも編み石	長 10.4	幅 4.4	厚 2.7	重 200	緑簾緑泥片岩
48	125	こも編み石	長 11.5	幅 3.0	厚 2.2	重 115	絹雲母石墨片岩 一部炎を受けている。
49	125	こも編み石	長 9.4	幅 4.0	厚 1.9	重 125	絹雲母石墨片岩
50	125	こも編み石	長 10.5	幅 4.3	厚 1.7	重 130	絹雲母石墨片岩 黒斑が一部認められる。
51	125	こも編み石	長 12.7	幅 5.0	厚 2.2	重 165	絹雲母石墨片岩 黒斑が一部認められる。
52	125	こも編み石	長 9.8	幅 3.3	厚 1.8	重 95	絹雲母石墨片岩
53	125	こも編み石	長 10.0	幅 3.6	厚 2.6	重 120	絹雲母石墨片岩
54	125	こも編み石	長 11.6	幅 4.1	厚 1.6	重 130	絹雲母石墨片岩 黒斑が一部認められる。
55	125	こも編み石	長 11.9	幅 4.8	厚 1.6	重 140	絹雲母石墨片岩 黒斑が一部認められる。
56	125	こも編み石	長 9.8	幅 4.5	厚 2.1	重 150	絹雲母石墨片岩
57	125	こも編み石	長 10.8	幅 4.7	厚 2.3	重 175	絹雲母石墨片岩 黒斑が一部認められる。
58	125	こも編み石	長 10.4	幅 3.9	厚 2.1	重 120	絹雲母石墨片岩
59	125	こも編み石	長 10.0	幅 3.3	厚 2.1	重 120	絹雲母石墨片岩
60	125	こも編み石	長 13.4	幅 3.3	厚 3.0	重 205	絹雲母石墨片岩
61	125	こも編み石	長 9.9	幅 4.1	厚 2.3	重 150	緑簾緑泥片岩
62	125	こも編み石	長 12.0	幅 3.8	厚 2.4	重 165	絹雲母石墨片岩
63	125	こも編み石	長 12.0	幅 3.6	厚 2.2	重 155	点紋緑泥片岩
64	125	こも編み石	長 12.3	幅 5.2	厚 1.8	重 170	絹雲母石墨片岩
65	125	こも編み石	長 10.8	幅 3.2	厚 2.4	重 110	緑簾片岩

80号住居跡 (第157・158図、図版31・32・86・116)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、24-32・33グリッドに位置する。

概要 東壁面中央部の床面下の部分から、多くの焼土粒が出土している。そのためこの壁面部分の近くに竈の築かれていた可能性が考えられるが、確認はできない。

構造 床面はローム粒を主とし少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。東壁面中央部に小穴が掘られており、中から少量の焼土粒が出土している。

規模 東西4.68m、南北3.60mである。壁高は残りの良い南壁面部分で30cmである。小穴は径72cm深さ52cmである。

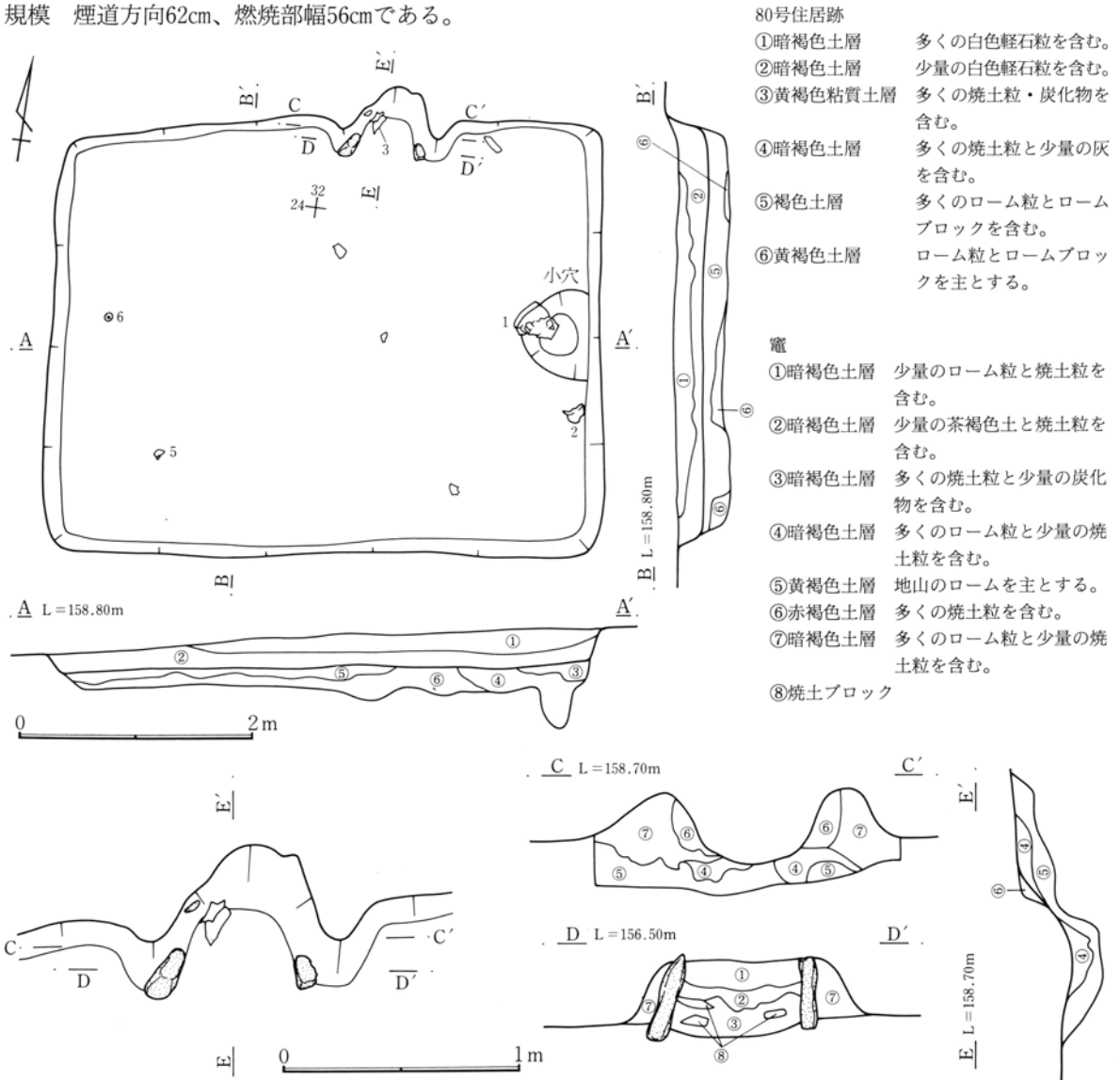
遺物 土師器の甕の破片が多く出土している。紡錘車の出土が注目される。

(竈)

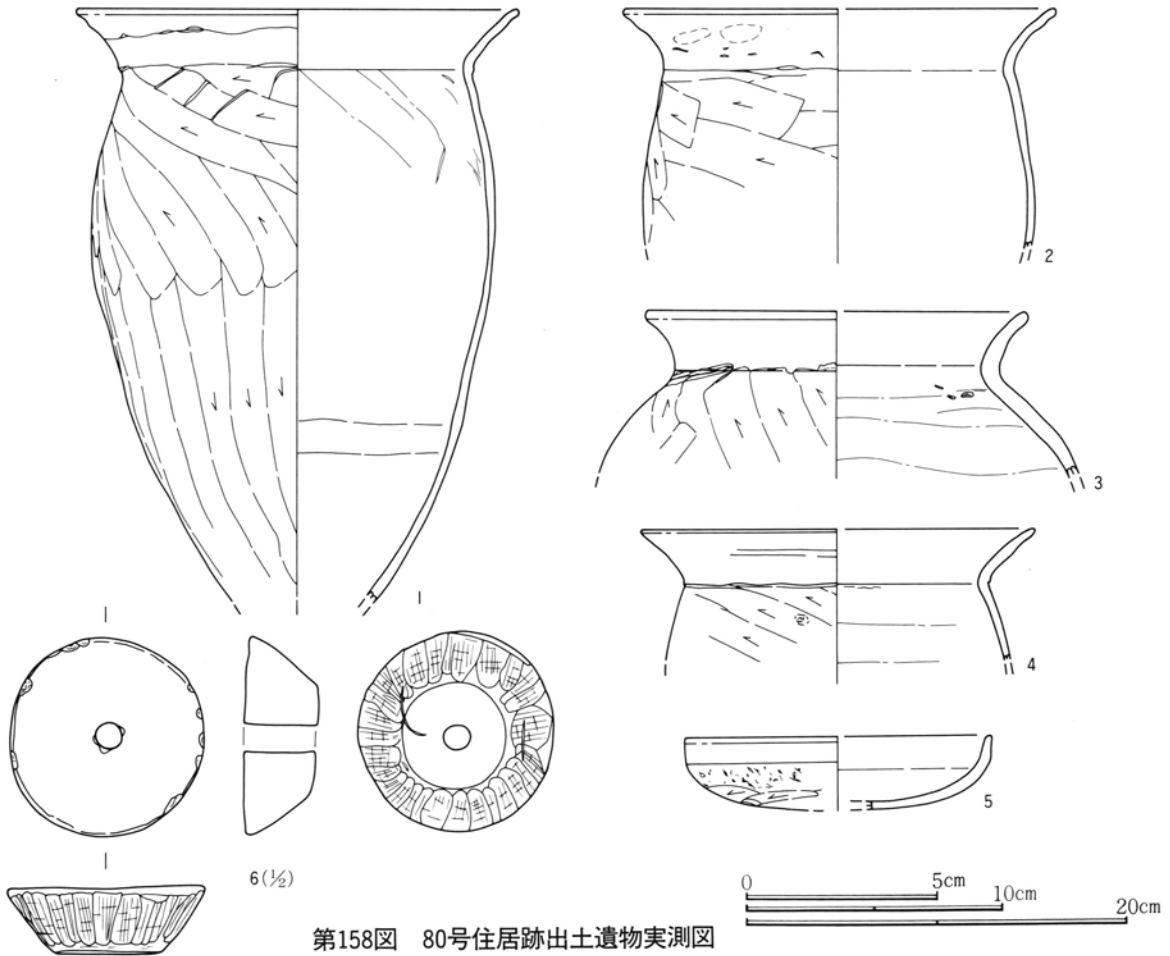
位置 住居北壁面に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 残りは比較的良好で、両袖石がほぼ据えられた状態で残っている。燃烧部床面に多くの焼土粒が、また袖の上部分が焼けて焼土化している。

規模 煙道方向62cm、燃烧部幅56cmである。



第157図 80号住居跡・竈実測図



第158図 80号住居跡出土遺物実測図

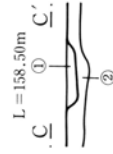
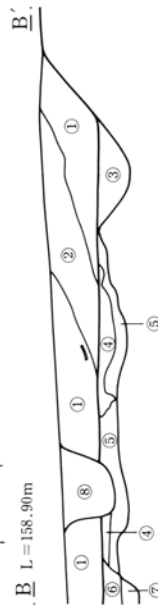
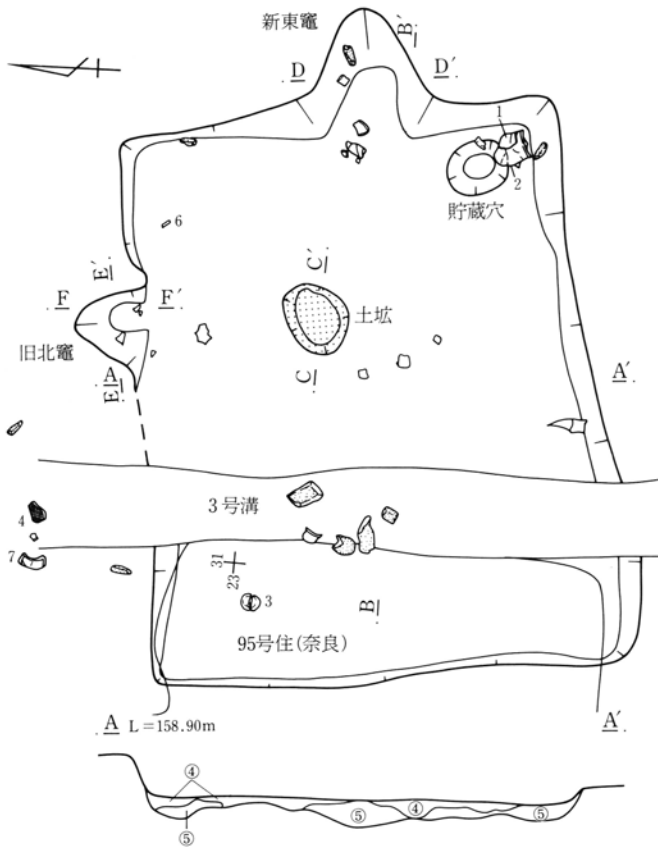
80号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
158-1 86	土師器 甕	床面+3 口~胴上完 下部 $\frac{3}{4}$ 残存	口 23.2 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り。口縁部中央に輪積痕。 胴内面下部に肉厚の違いを持つ接合痕。 胴中央部以下にわずかな吸炭。
158-2 86	土師器 甕	床面+3 $\frac{1}{2}$ 残存	口(22.2) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部に指頭圧痕。 内面ナデにて器表面密。
158-3 86	土師器 甕	竈内 口縁 $\frac{2}{3}$	口(20.0) 高 — 底 —	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り、砂粒の移動は少ない。 器肉が全体に厚い。
158-4	土師器 甕	覆土 小破片	口(20.6) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部ヘラ削りで器肉を薄く仕上げている。
158-5	土師器 坏	床面+2 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.0) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りで器表面がやや粗い。
158-6 116	石製品 紡錘車	床面+7 完形	径 2.8/5.2 厚 1.9	孔径 0.7 重 72.3	広面と狭面は磨かれて光沢を持つ。側面は鉄製の工具により細長く削られており、その後磨かれている。

81号住居跡 (第159~163図、図版32・87・113・121)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、23・24-32グリッドに位置する。

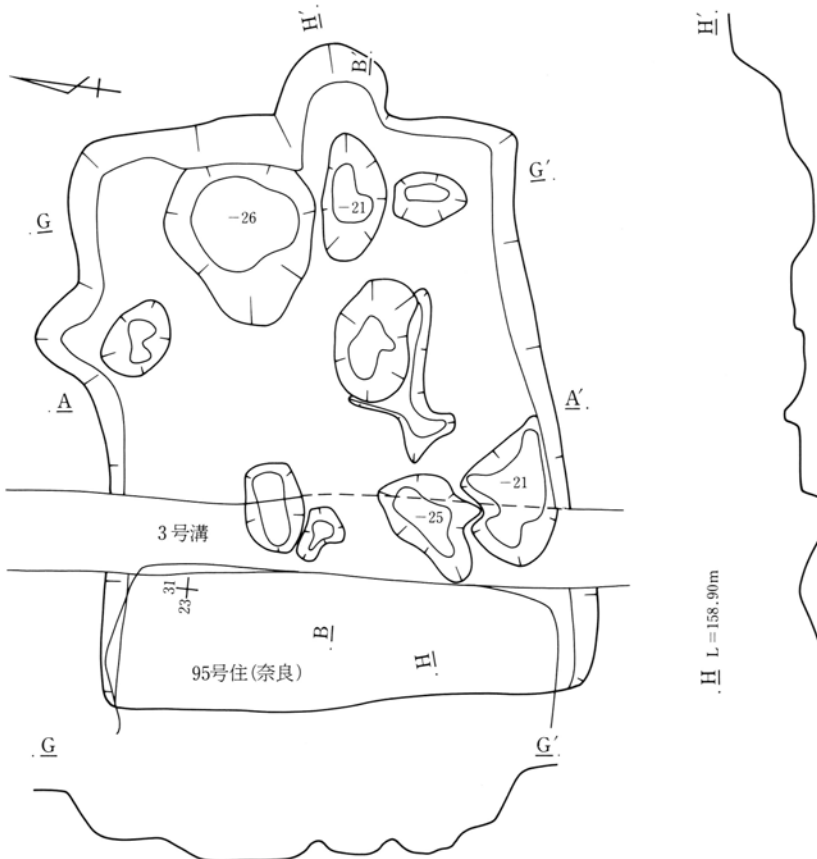
概要 西側で同じ奈良時代の95号住居と重複しており、本住居が95号住居の東側の覆土を掘り込んでいる。また2軒が重複している付近を、南北方向に掘られている3号溝により床下部分まで深く掘り込まれている。このように残りが悪く、西側部分の住居範囲は不自然であり一部誤認の可能性もある。床面



- 81号住居跡
- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
 - ②暗褐色土層 多くの白色軽石粒と少量のローム粒とロームブロックを含む。
 - ③暗褐色土層 ①層に近いが、より多くのロームブロックを含む。
 - ④暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
 - ⑤褐色土層 ローム粒とロームブロックを主とする。
 - ⑥95号住居跡覆土
 - ⑦95号住居跡床下覆土
 - ⑧3号溝覆土
- 土坑
- ①明褐色土層 多くの焼土粒を含む。炭化物を少量含む。
 - ②褐色土層 ロームブロックが主であるが、焼成のため硬化赤変している。

第159図 81号住居跡実測図

0 2m



第160図 81号住居跡床下実測図

0 2m

中央部に炉のように焼けて焼土化した部分が確認された。用途は不明である。

構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は掘られていない。新東竈に伴う貯蔵穴が竈の右側に掘られているが、旧北竈に伴うと思われる貯蔵穴は掘られていない。

規模 東西4.58m、南北3.52mである。壁高は残りの良い南壁面部分で37cmである。貯蔵穴は径50cm深さ25cmである。

遺物 貯蔵穴に接して甕が2点出土している。砥石と鉄鏝が注目される。

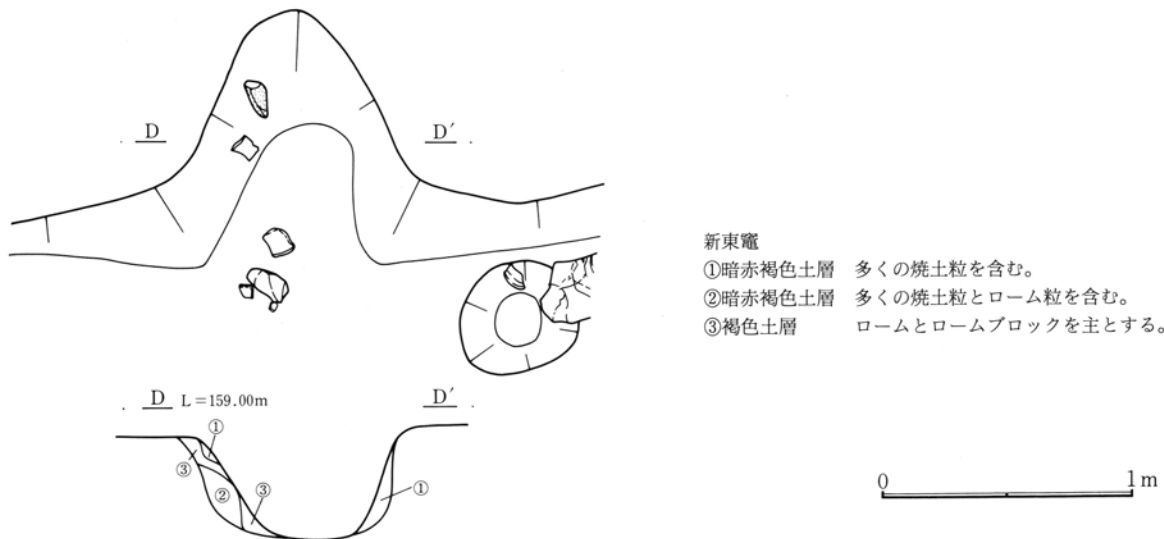
(新東竈)

位置 住居東壁面に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

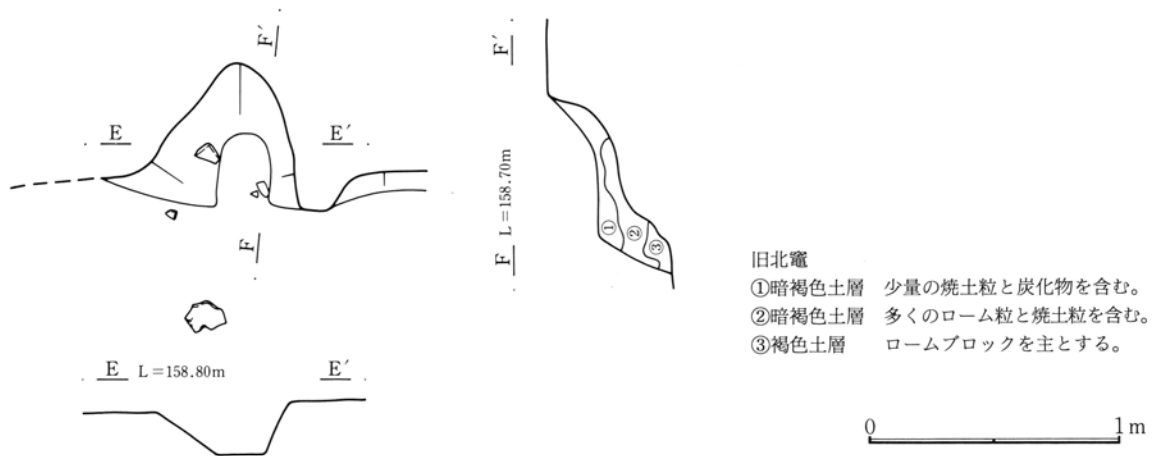
概要 残りが悪く袖の一部分しか残っていない。煙道部に近い壁面が焼けて焼土化している。規模は竈全体の残りが悪いため不明である。

(旧北竈)

概要 住居北壁面に造られている。床面上に位置する袖と燃烧部の多くは取り除かれたためか残っていない。掘り込まれた壁面部分から多くの焼土粒が出土している。

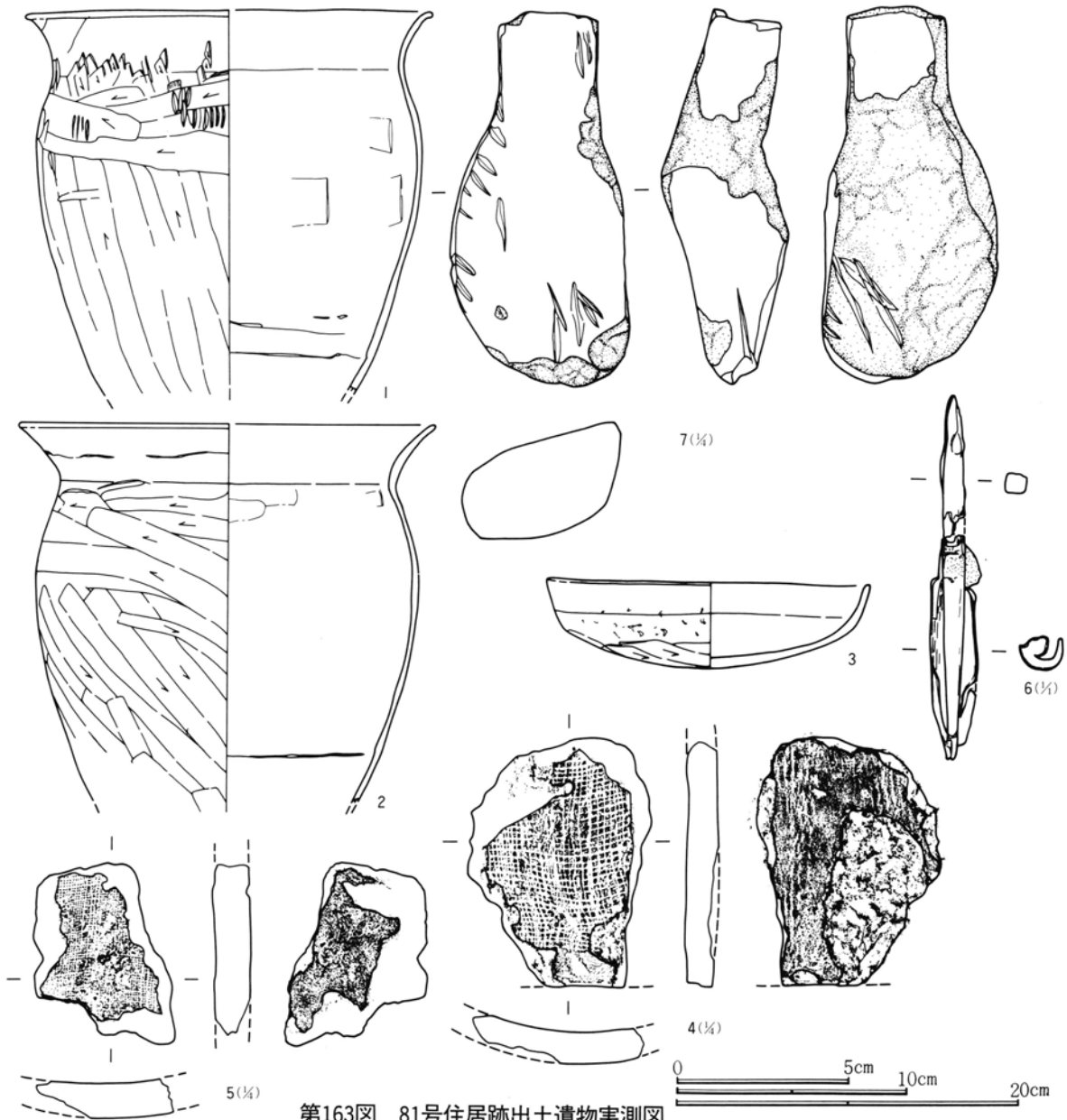


第161図 81号住居跡新東竈実測図



第162図 81号住居跡旧北竈実測図

第4章 奈良時代の遺構と遺物



第163図 81号住居跡出土遺物実測図

81号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
163-1 87	土 師 器 甕	床面直上 口~胴 $\frac{1}{2}$	口(23.6) 高・底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質。③橙色	胴部外面へら削り。頸部に単位の小さな数多くのへら削り。胴下部に肉厚の違う明瞭な接合痕。
163-2 87	土 師 器 甕	床面直上 口~胴 $\frac{1}{2}$	口(24.4) 高・底—	①密、雲母粒と角閃石を含む ②酸化焰、硬質。 ③にぶい橙色	胴部外面へら削り。口縁部に輪積痕。胴下部に肉厚の違う明瞭な接合痕。
163-3 87	土 師 器 坏	床面直上 完形	口 14.2 高 3.7 底 —	①密、1~2mmの黑色粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り、削りの単位は明瞭でない。 体部ナデ。 内面ナデにて器表面密。
163-4	平 瓦	床面直上 破片	①粗、1~3mmの砂粒と赤色粒を含む ②酸化焰、硬質。 ③ 橙色	凹面に布目。凸面縄叩き後縦方向すり消し。 1枚造りか。	
163-5	平 瓦	覆土 破片	①やや粗、1~2mmの砂粒を含む ②酸化焰、硬質。 ③ 橙色	凹面に布目。 凸面縦方向のナデ。	
163-6 113	鉄 製 品 鉄 鏃	床面+2	長 (10.2) 幅 1.3(木質部) 0.5(茎部) 厚 0.9 重 10.0	鉄鏃の茎部分と茎の打ち込まれた柄または矢柄部分と思われる。木質部分は竹類ではないと思われる。	
163-7 121	石 製 品 砥 石	床面+6 完形	長 22.0 幅 10.4 厚 7.5 重 1400.0	3側面を砥石として使用、V字状の打痕多く残る。砥石として使用後中央部打ち欠かれ凹状を呈する。	

82号住居跡 (第164~166図、図版32・33・87)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、22-31グリッドに位置する。

概要 南西コーナー部分の覆土中に床面から15~18cmほどの高い位置で、平安時代の羽釜が投げ込まれたような状態で出土している。南西コーナー部分の壁面は耕作溝により削られている。

構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。

規模 東西4.02m、南北3.52mである。壁高は残りの良い南壁面部分で35cmである。

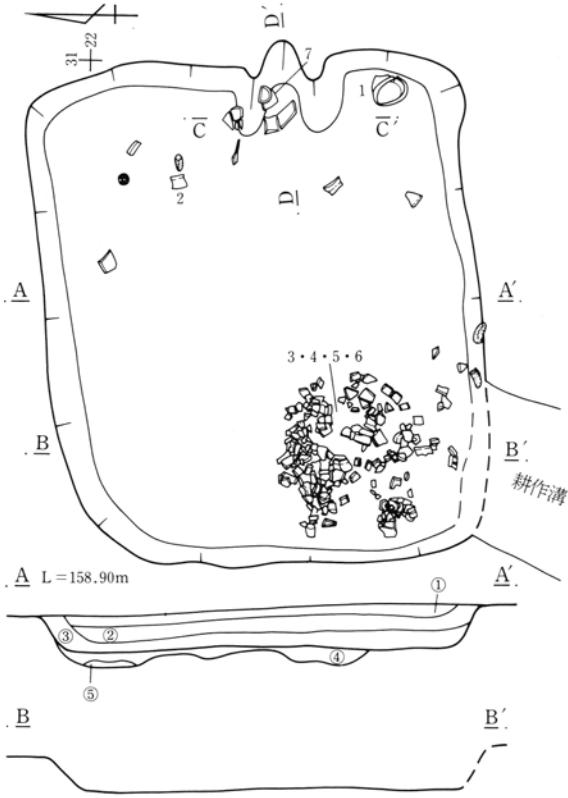
遺物 覆土中より多くの羽釜が投げ込まれたような状態で出土している。

(竈)

位置 住居東壁面に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

概要 両袖部分は残っていたが、焚口部分の袖は残りが悪い。袖石等は全く出土していない。燃烧部覆土中から多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向75cm、燃烧部幅46cmである。

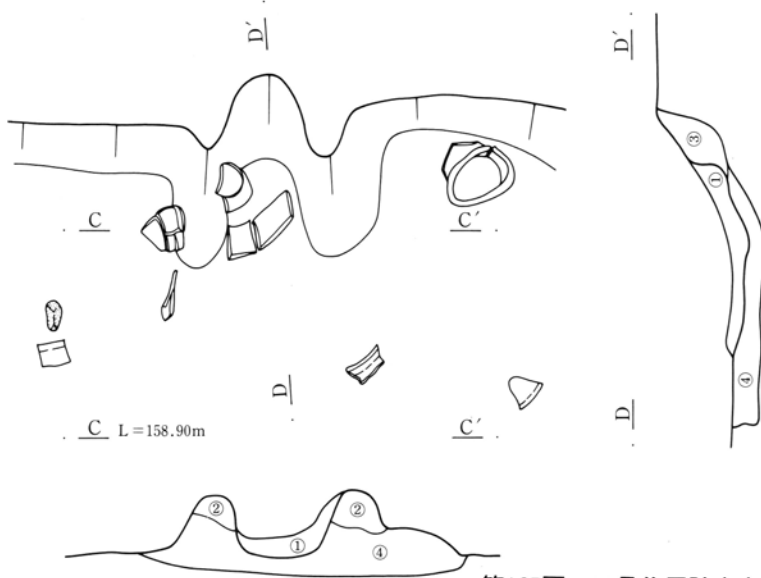


第164図 82号住居跡実測図

82号住居跡

- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量の白色軽石粒とローム粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム小ブロックと少量の焼土粒を含む。
- ④褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ⑤黄褐色土層 ローム粒とロームブロックを主とする。

0 2m



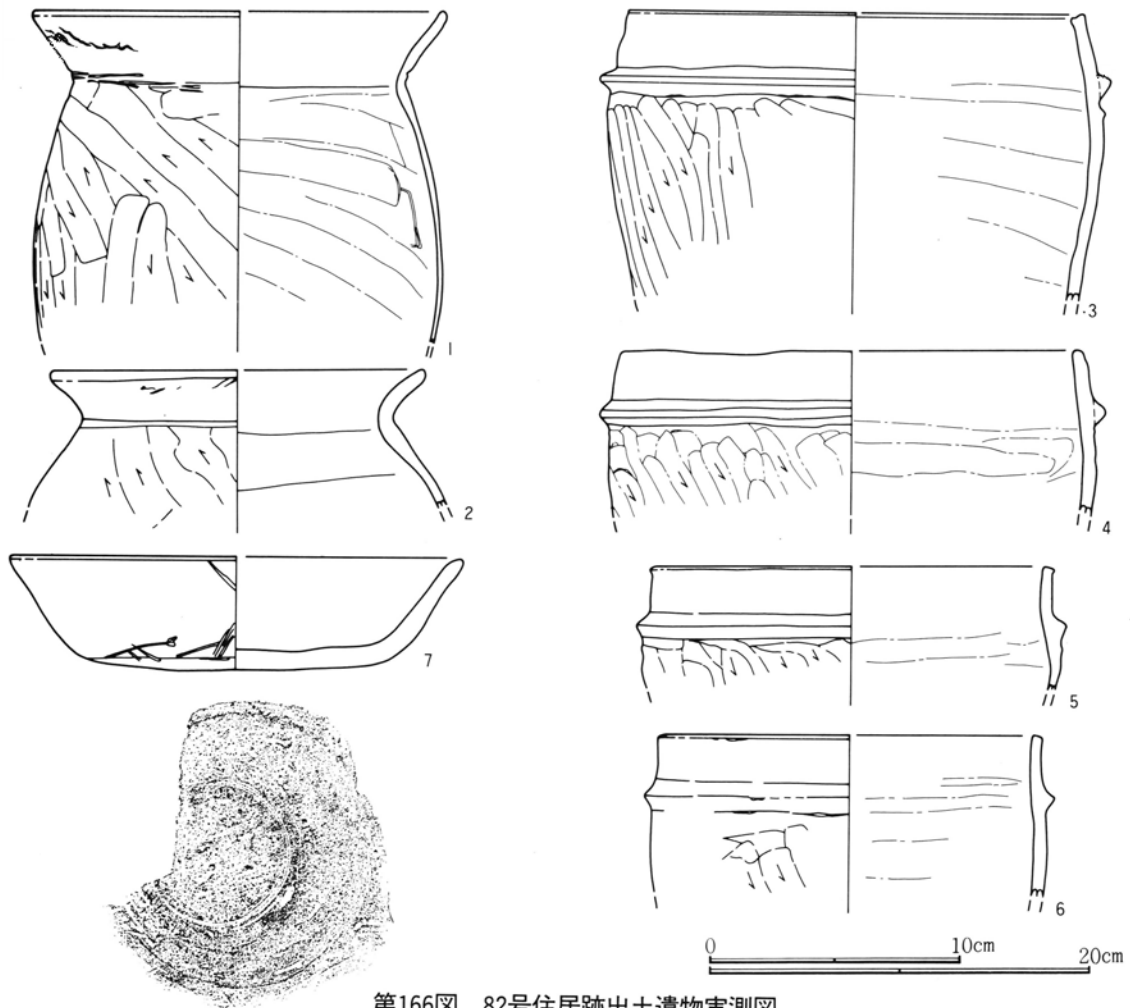
第165図 82号住居跡竈実測図

竈

- ①暗褐色土層 少量の焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ④暗褐色土層 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。

0 1m

第4章 奈良時代の遺構と遺物



第166図 82号住居跡出土遺物実測図

82号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
166-1 87	土師器 甕	床面+7 口 $\frac{1}{5}$ 、胴 $\frac{1}{3}$	口(22.0) 高・底—	①密、1mm以下の小砂粒多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部ヘラ削り。頸部に胴部ヘラ削り時に削られた凹線多くあり。内面ナデにて器表面密。
166-2	土師器 甕	床面+3 口縁破片	口(19.8) 高・底—	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り、ヘラ削りは深く単位は明瞭である。
166-3 87	土師器 羽釜	覆土 口縁~胴 $\frac{1}{3}$	口(24.5) 高・底—	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。鏝はやや雑に貼り付けてある。口唇部は中央がやや凹状。
166-4 87	土師器 羽釜	覆土 口縁~胴 $\frac{1}{4}$	口(24.5) 高・底—	①密、1mm内外の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③明褐色	胴部外面ヘラ削りでなくナデ。内面ナデにて器表面密。鏝はやや雑に貼り付けてある。
166-5	土師器 羽釜	覆土 $\frac{1}{3}$ 残存	口(21.4) 高・底—	①密、1~3mmの赤色粒少量含む ②酸化焰、硬質③内面橙外面黒褐	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。口唇部は平らでやや外傾している。全体に雑なつくりである。
166-6	土師器 羽釜	覆土 口縁部 $\frac{1}{4}$	口(20.4) 高・底—	①密、1~2mmの赤色粒少量含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り。鏝は断面三角形で雑に貼り付けてある。口唇部は平らでやや外傾している。
166-7 87	須恵器 坏	竈内 $\frac{1}{2}$ 残存	口(18.0) 高 4.2 底 11.0	①やや粗、1~2mmの片岩粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面右回転ヘラ削り。 内側の器表面密。

84号住居跡 (第167~169図、図版33・87)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、24-30グリッドに位置する。

概要 残りは比較的良好であると思われるが、調査の不備のためか良好な状態での検出はできなかった。住居の形がやや不定形の状態を呈しており、竈の残りも悪い。

構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は掘

られていない。竈右側にやや不定形な貯蔵穴が掘られている。

規模 東西3.52m、南北3.32mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で44cmである。貯蔵穴は111×82cm深さ24cmである。

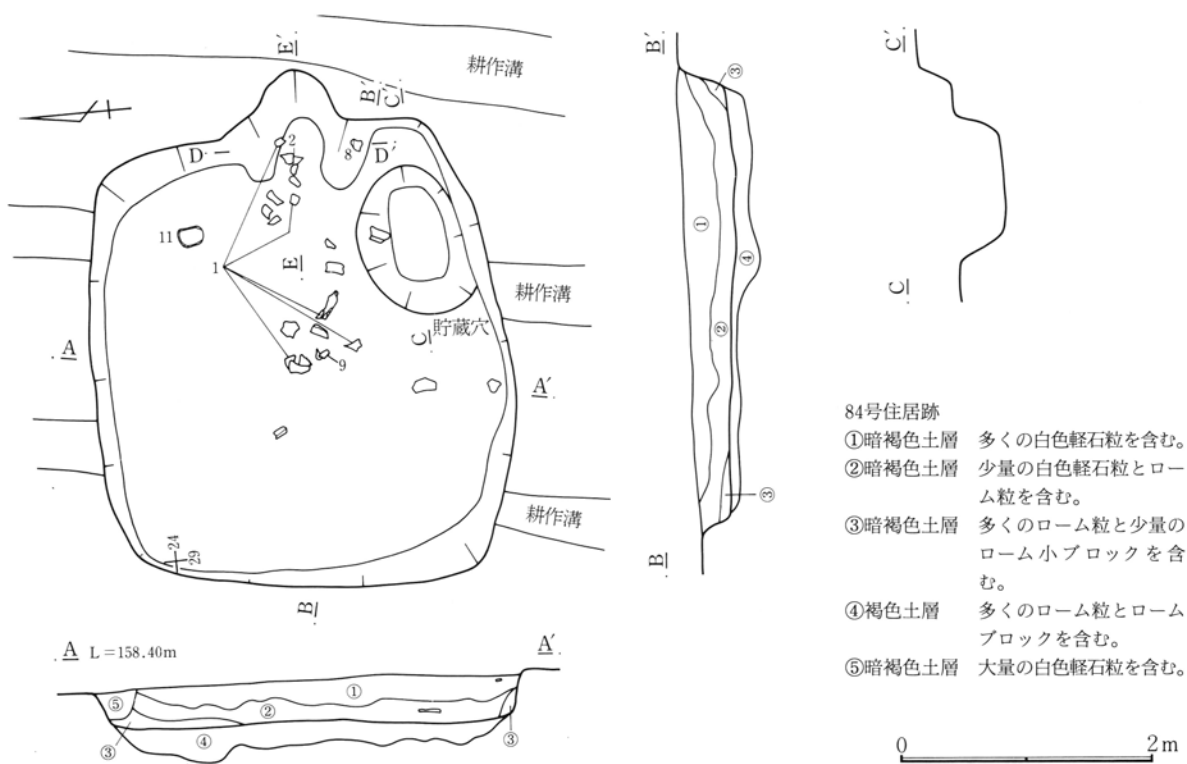
遺物 甕や坏が出土している。

(竈)

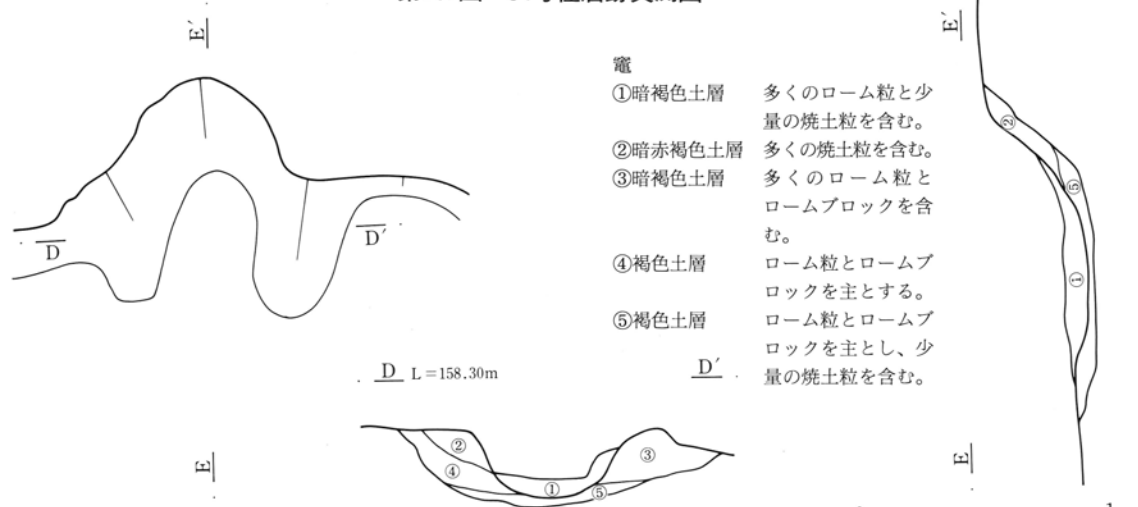
位置 住居東壁面に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

概要 両袖部分は比較的残りが良好である。燃烧部覆土中から少量の焼土粒が、袖上部と煙道部上面の一部が火を受けて多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向96cm、燃烧部幅58cmである。

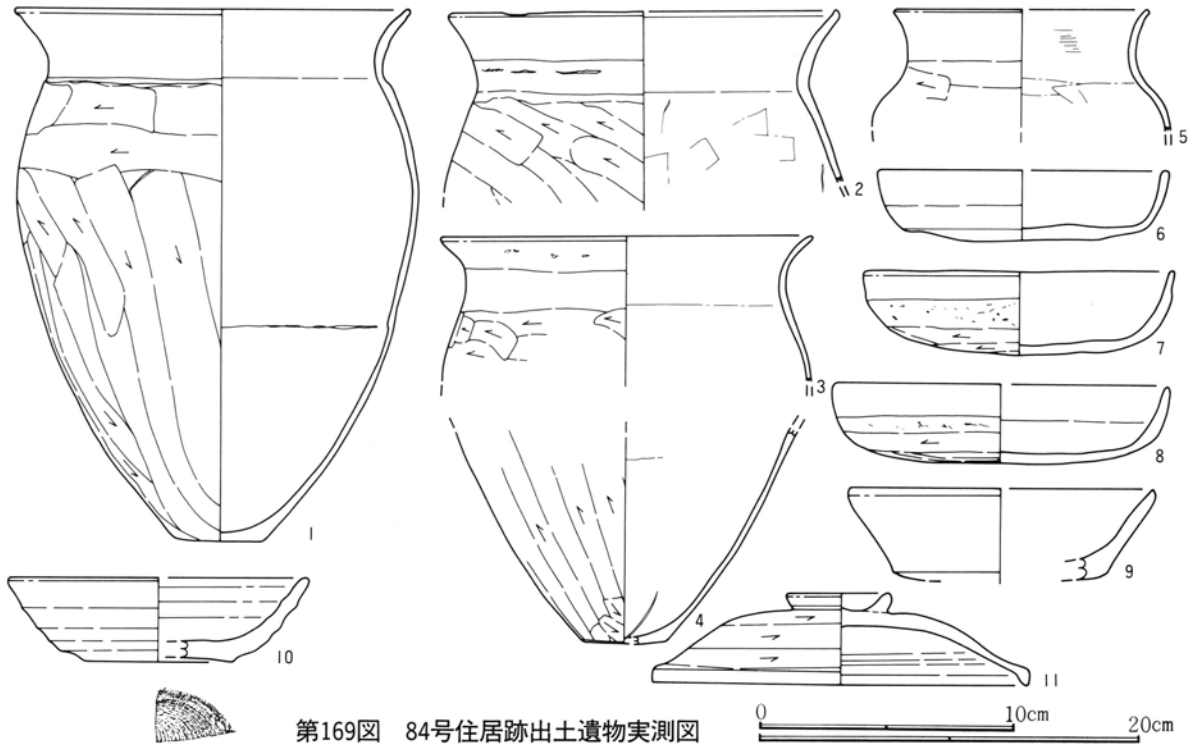


第167図 84号住居跡実測図



第168図 84号住居跡竈実測図

第4章 奈良時代の遺構と遺物



第169図 84号住居跡出土遺物実測図

84号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
169-1 87	土師器 甕	床面+9 口縁部完形 胴部 $\frac{3}{4}$	口 20.8 高 28.1 底 4.6	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面～胴部ヘラ削り。口縁部横ナデ。 胴部内側に肉厚の違いによる接合痕が明瞭に残る。 吸炭による黒褐色部分なし。未使用の甕か。
169-2	土師器 甕	床面+13 口縁～ 胴上 $\frac{1}{4}$	口(20.6) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部ヘラ削り。 頸部と口縁部に輪積痕が残る。 内面にヘラの整形痕あり。
169-3 87	土師器 甕	覆土 口縁 $\frac{2}{3}$	口 19.8 高 — 底 —	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
169-4	土師器 甕	掘り方 胴下半～ 底部 $\frac{1}{2}$	口 — 高 — 底 (4.4)	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面～胴外面ヘラ削り。 内面ナデ。
169-5	土師器 小型甕	ベルト内 $\frac{1}{4}$ 残存	口(13.6) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	外側器表面の多くが剥離していてヘラ削りの単位不明瞭。
169-6	土師器 坏	覆土 口縁～ 底部 $\frac{1}{2}$	口(12.3) 高 3.3 底 —	①密、少量の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りにより器表面がやや粗い。
169-7	土師器 坏	ベルト内 口縁～ 底部 $\frac{1}{4}$	口 11.4 高 2.8 底 9.3	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面ヘラ削り、ヘラの単位不明瞭。
169-8	土師器 坏	床面+10 $\frac{1}{4}$ 残存	口(13.4) 高 3.1 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面ヘラ削り、砂粒が少ないため粗れは少ない。
169-9	須恵器 坏	床面+13 $\frac{1}{4}$ 残存	口(12.2) 高 — 底 (8.5)	①密、2～3mmの片岩粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面ヘラ削り。 内面に降灰による自然釉。
169-10	須恵器 坏	覆土 小破片	口(12.0) 高 (3.3) 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②還元焰、硬質 ③灰色	底面糸切り。
196-11 87	須恵器 蓋	床面+9 口縁一部欠 他完形	口 15.0 高 — 底 —	①密、1mm以下の長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	口縁部以外の天井部全面右回転ヘラ削り。 摘みはリング状で短い。

88号住居跡 (第170~173図、図版33・87・88・116・125)

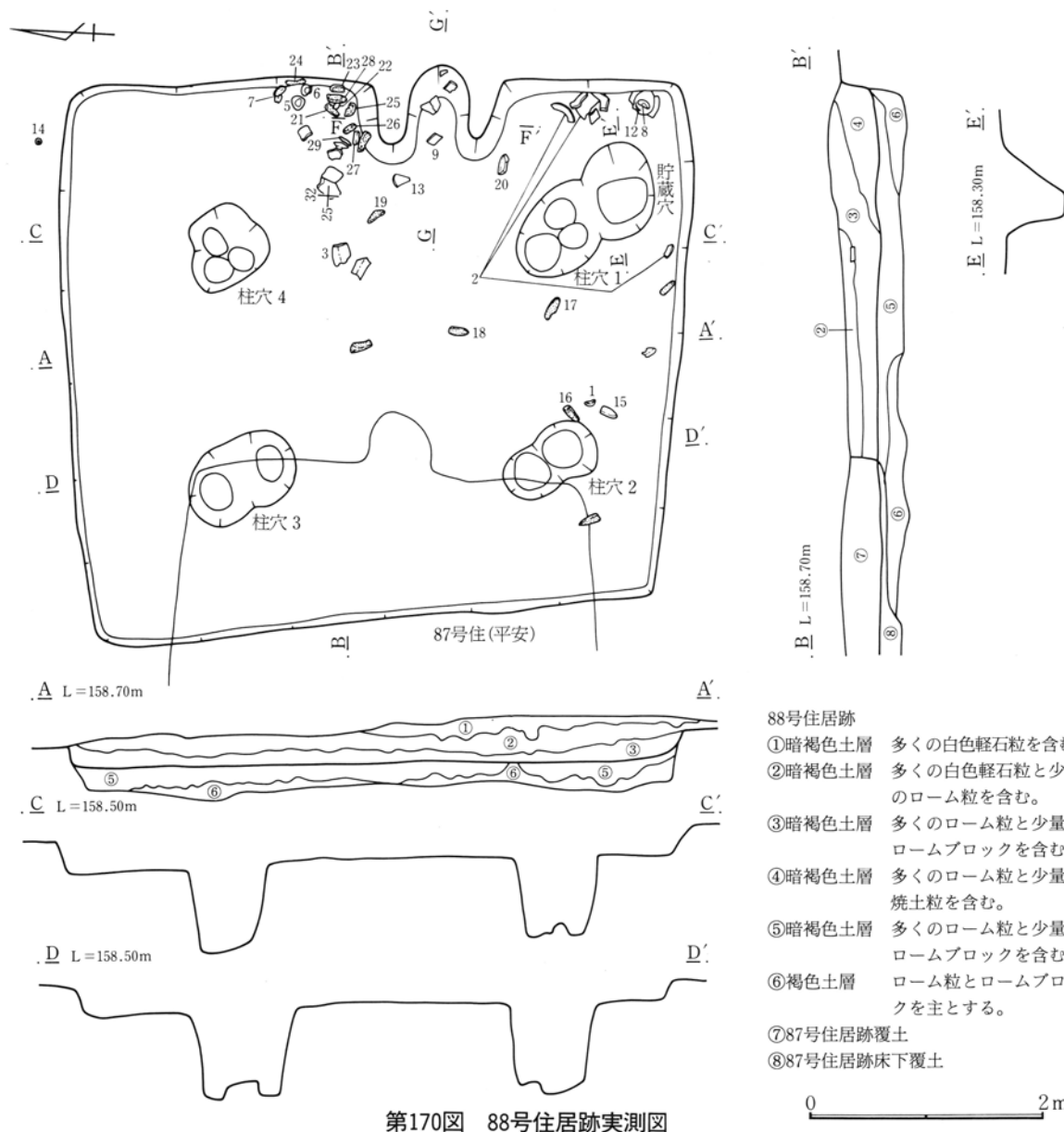
位置 本住居跡は第4次調査区にあり、25・26-32グリッドに位置する。

概要 西側で平安時代の87号住居と重複しており、87号住居により床下部分まで掘り込まれている。柱穴と貯蔵穴は掘り過ぎの所もあったらしく、良好な状態での検出はできなかった。

構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は4本掘られているが、1箇所複数の跡が残っていたため、掘り直しの行われた可能性が指摘できそうである。貯蔵穴が竈の右側に掘られている。確認面は柱穴の覆土と重複しており、良好な状態で平面形の確認はできない。

規模 東西4.79m、南北5.42mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で42cmである。貯蔵穴は径76cm深さ52cmである。柱穴1は径54cm深さ67cm、柱穴2は径42cm深さ68cm、柱穴3は径53cm深さ78cm、柱穴4は径43cm深さ77cmである。

遺物 竈左袖部に接してこも編み石がまとまって出土している。紡錘車が注目される。



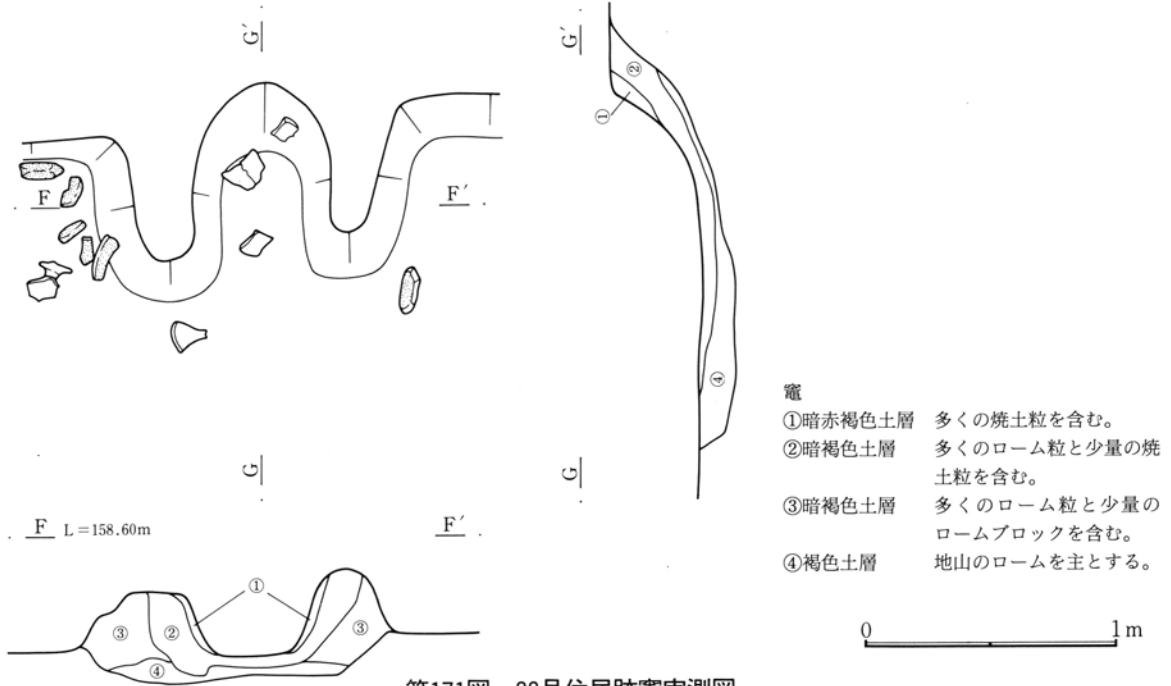
第4章 奈良時代の遺構と遺物

(竈)

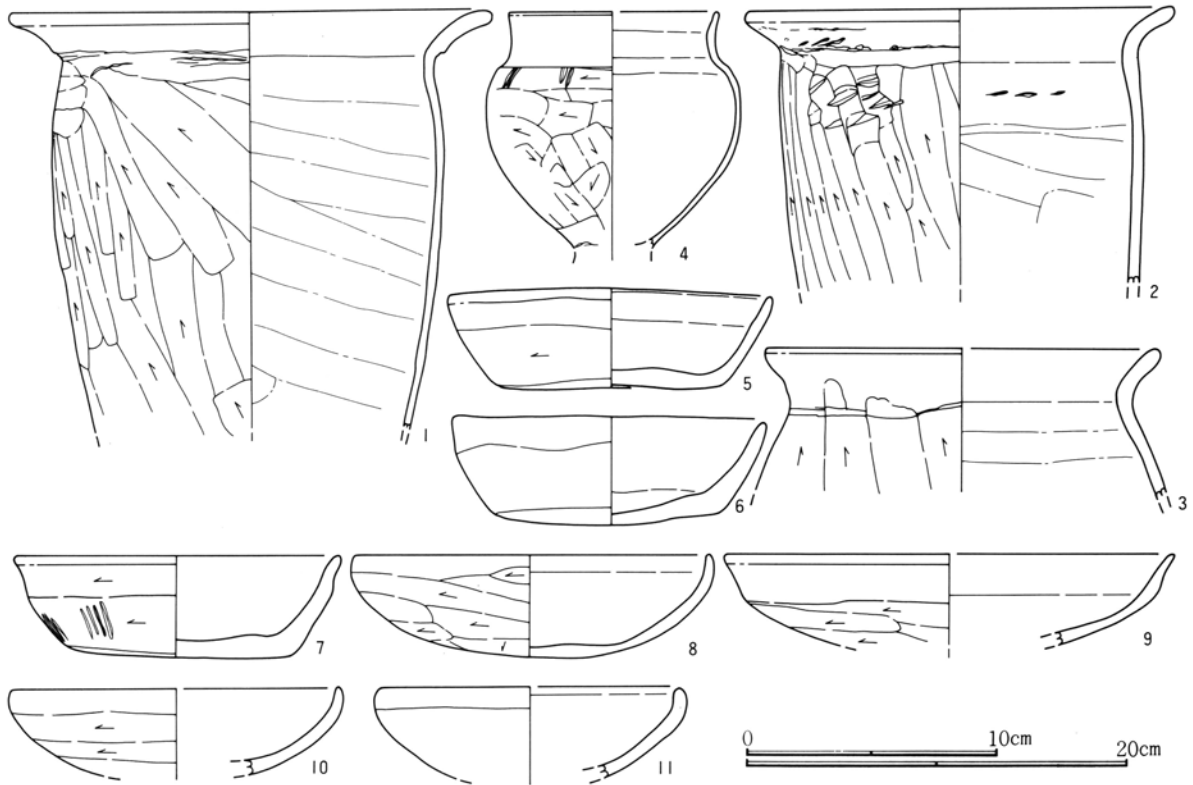
位置 住居東壁面に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

概要 両袖部分の残りは悪い。袖石等は全く出土していない。燃烧部覆土中から少量の焼土粒が、袖上部と煙道部上面の一部が火を受けて多くの焼土粒が出土している。

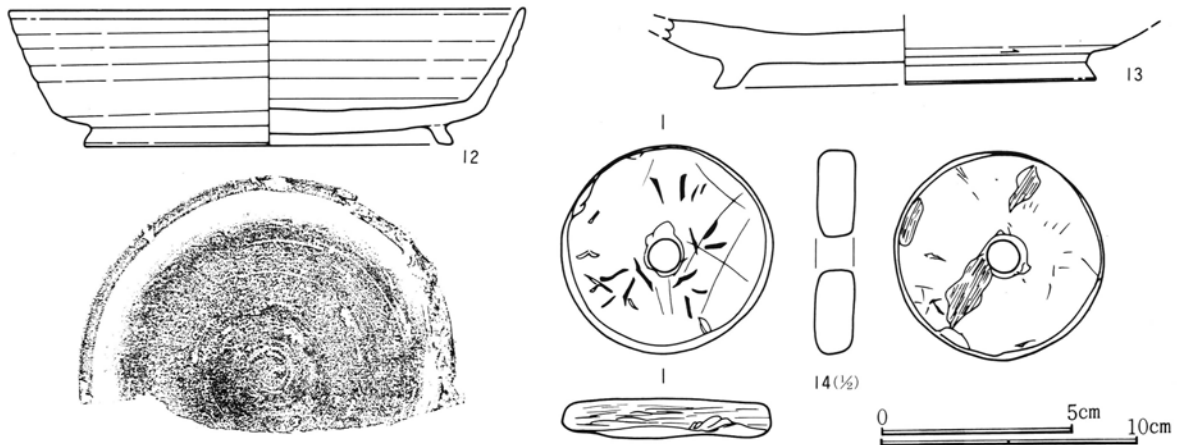
規模 煙道方向85cm、燃烧部幅51cmである。



第171図 88号住居跡竈実測図



第172図 88号住居跡出土遺物実測図(1)



第173図 88号住居跡出土遺物実測図(2)

88号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
172-1 87	土器 甕	床面+12 口縁部 $\frac{2}{3}$ 胴部ほぼ完	口 25.4 高 — 底 —	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へら削り、多くの砂粒が移動し器表面やや粗い。 口縁部との境に段を持つ。
172-2 87	土器 甕	床面+21 口縁~ 胴上部 $\frac{1}{2}$	口 22.8 高 — 底 —	①やや粗、2~3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面強いへら削り。 頸部にへら削り時に当たってできた工具痕を多く残す。 0.8mmの片岩粒を少量含む。
172-3	土器 甕	床面+21 口縁部 $\frac{1}{4}$	口(21.0) 高 — 底 —	①粗、2~3mmの片岩粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面へら削り、多くの砂粒が移動し器表面が粗い。
172-4 87	土器 台付甕	覆土 $\frac{1}{4}$ 残存 底と台部欠	口(11.2) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	胴部外面へら削り、削りの単位は明瞭である。 内面ナデにて器表面密。
172-5 88	土器 坏	床面+20 完形	口 12.7 高 3.8 底 9.0	①密、1~2mmの砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面幅広いへら削り。体部も幅広いへら削り。 口縁部横ナデ。 内面に暗文は認められない。少しゆがんでいる。
172-6 87	土器 坏	床面+19 完形	口 12.2 高 4.3 底 8.8	①やや粗、1~2mmの片岩粒をやや多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面幅広いへら削り。体部も幅広いへら削り。 口縁部横ナデ。 内面に暗文は認められない。
172-7 87	土器 坏	床面+18 ほぼ完形	口 12.9 高 4.1 底 8.8	①やや粗、1mm前後の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。 体部へら削り。
172-8 88	土器 坏	床面+21 $\frac{1}{2}$ 残存	口 14.0 高 4.0 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面へら削り、砂粒の移動少く器表面の粗れは少ない。 内側器表面密でやや光沢を持つ。
172-9 88	土器 坏	床面直上 $\frac{1}{4}$ 残存	口(17.7) 高 — 底 —	①密、1mm前後の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。 口縁部横ナデ。 器表面全体が粗れている。
172-10	土器 坏	竈内 $\frac{1}{4}$ 残存	口(13.0) 高 — 底 —	①密、少量の片岩粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へら削り。
172-11	土器 坏	覆土 $\frac{1}{4}$ 残存	口(12.0) 高 — 底 —	①密、粉状を呈している ②酸化焰、軟質 ③橙色	底面はへら削りと思われるが、胎土が密で粉状を呈しているためへら削りの単位不明。
173-12 88	須恵器 盤	床面+21 $\frac{1}{4}$ 残存	口 20.5 高 5.3 底 14.5	①密、1~2mmの長石粒を多く、5~6mmの長石粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面右回転へら削り。 高台下端は平らに削られ内傾している。
173-13	須恵器 盤	床面+21 底部 $\frac{1}{4}$	口 — 高 — 底(15.0)	①密、1mm前後の長石粒を少量含む。②還元焰、硬質 ③灰色	底部中央へら削り。 高台は端部をていねいに造り出している。 体部下半へら削り。
173-14 116	石製品 紡錘車	覆土 完形	径 5.5 孔径 0.9 厚 0.9 重 55.5		表面全体が磨かれて黒光り。側面に「六」が3箇所、「八」が1ヶ所線刻。裏面に発掘時のキズ3箇所所有。

第4章 奈良時代の遺構と遺物

遺物番号	図版番号	器種	法	量(cm)(g)				石材	備考
15	125	こも編み石	長 13.2 幅 6.9 厚 2.5 重 350					絹雲母石墨片岩	
16	125	こも編み石	長 14.0 幅 5.5 厚 3.2 重 420					点紋絹雲母石墨片岩	
17	125	こも編み石	長 16.3 幅 7.3 厚 2.8 重 445					絹雲母石墨片岩	
18	125	こも編み石	長 16.5 幅 5.7 厚 2.4 重 350					絹雲母石墨片岩	
19	125	こも編み石	長 15.8 幅 7.2 厚 2.8 重 490					石墨緑泥片岩	
20	125	こも編み石	長 15.8 幅 6.4 厚 3.9 重 530					緑簾緑泥片岩	
21	125	こも編み石	長 13.8 幅 6.1 厚 2.2 重 275					緑簾緑泥片岩	
22	125	こも編み石	長 16.4 幅 5.4 厚 2.2 重 275					絹雲母石墨片岩	
23	125	こも編み石	長 14.8 幅 5.6 厚 3.0 重 420					緑簾緑泥片岩	
24	125	こも編み石	長 15.2 幅 5.0 厚 3.6 重 395					絹雲母石墨片岩	
25	125	こも編み石	長 13.0 幅 7.0 厚 2.8 重 480					緑簾緑泥片岩	
26	125	こも編み石	長 14.3 幅 5.1 厚 3.3 重 420					石墨緑泥片岩	
27	125	こも編み石	長 15.0 幅 4.6 厚 4.1 重 385					絹雲母石墨片岩	
28	125	こも編み石	長 15.1 幅 5.3 厚 2.9 重 330					絹雲母石墨片岩	
29	125	こも編み石	長 15.3 幅 4.7 厚 3.3 重 355					絹雲母石墨片岩	
30	125	こも編み石	長 15.5 幅 6.7 厚 2.8 重 550					点紋緑泥片岩	

95号住居跡 (第174~176図、図版33・34・88・113・125)

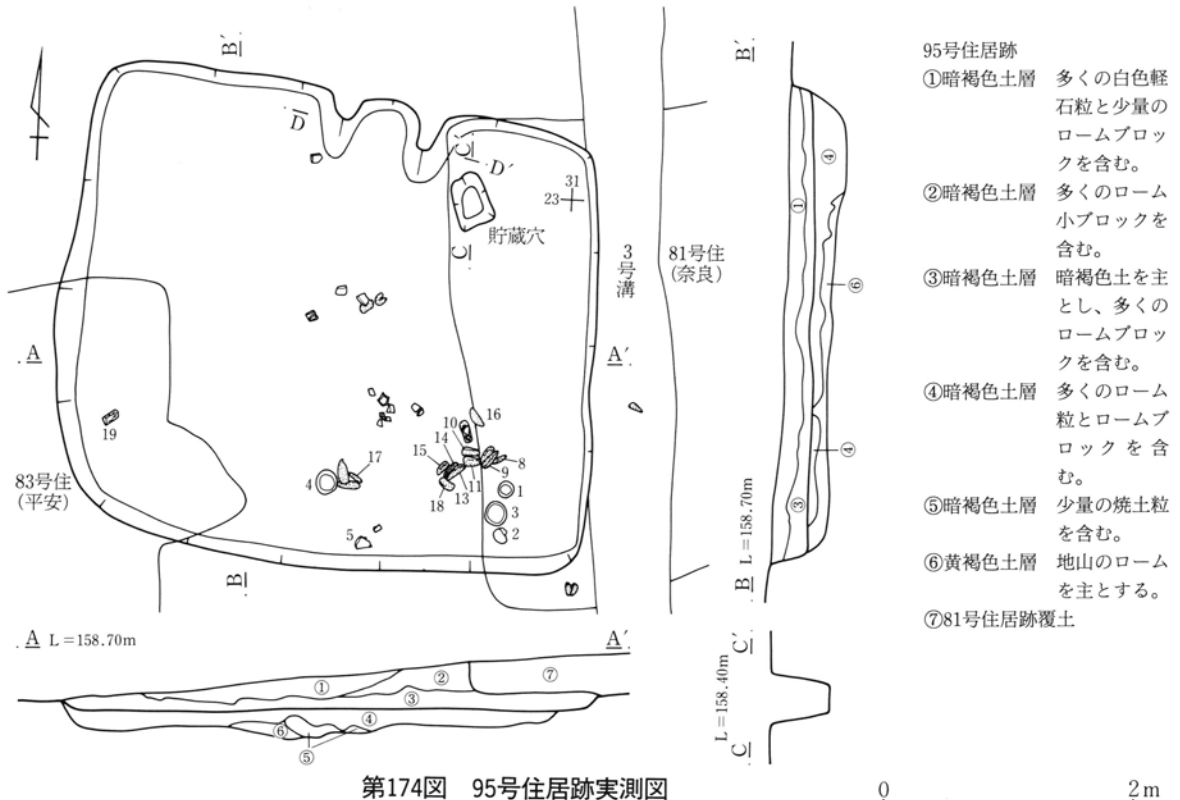
位置 本住居跡は第4次調査区にあり、23-31グリッドに位置する。

概要 南西部分で平安時代の83号住居と重複し、本住居の覆土上面を削られている。また東側を奈良時代の81号住居により覆土上面を削られている。さらに東壁面部分を3号溝により一部削られている。このように残りの悪い住居であり、竈の残りも良好ではない。

構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は掘られていない。竈右側にやや不定形な貯蔵穴が掘られている。

規模 東西4.06m、南北3.80mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で47cmである。貯蔵穴は径43×28cm深さ46cmである。

遺物 南東部分より土師器の坏や須恵器の蓋、こも編み石等が出土している。

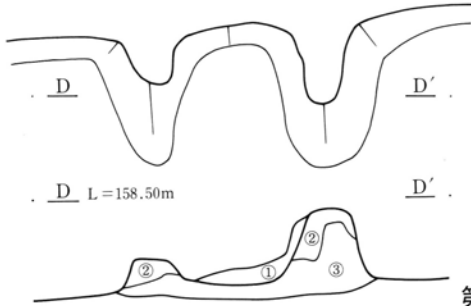


(竈)

位置 住居北壁面に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

概要 袖部分は残っているが住居同様に残りが悪く、左袖部の上部分は残っていない。また壁上面を掘り込んだ煙道部はほとんど残っていない。燃烧部に少量の焼土粒が出土している。

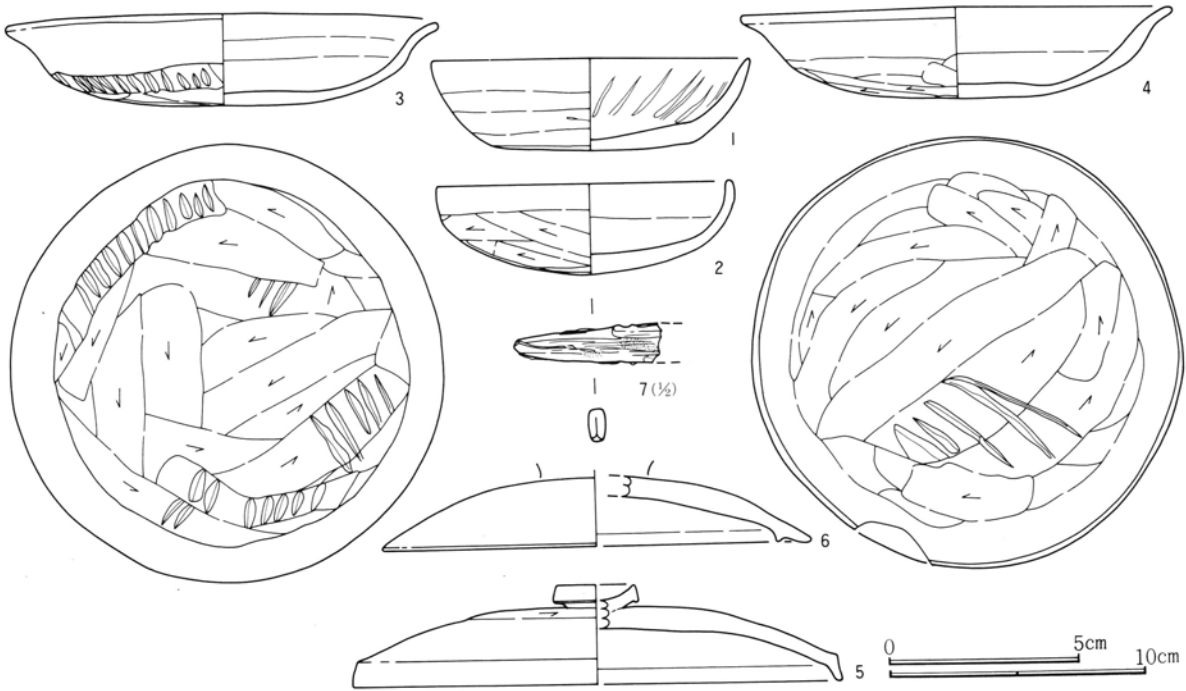
規模 煙道方向54cm、燃烧部幅52cmである。



- 竈
- ①暗褐色土層 少量の焼土粒と少量の炭化物を含む。
 - ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
 - ③暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。



第175図 95号住居跡竈実測図



第176図 95号住居跡出土遺物実測図

95号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
176-1 88	土 節 器 坏	床面+11 完形	口 12.4 高 3.6 底 -	①密、1~2mmの砂粒を多く含む ②酸化焰、軟質 ③橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 内面粗れているが多くの暗文が描かれている。 内側底面に暗文なし。
176-2 88	土 節 器 坏	床面+11 口縁一部欠 他完形	口 11.5 高 3.5 底 -	①密、1~2mmの砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラナデ、器表面やや粗い。 内面ナデにて器表面密。 器肉が全体的に厚い。
176-3 88	土 節 器 坏	床面+13 完形	口 17.0 高 3.6 底 -	①密、1~2mmの砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
176-4 88	土 節 器 坏	床面+2 ほぼ完形	口 16.9 高 3.5 底 -	①密、1~2mmの砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、砂粒の移動少なく器表面の粗れ少ない。 内面ナデにて器表面密。

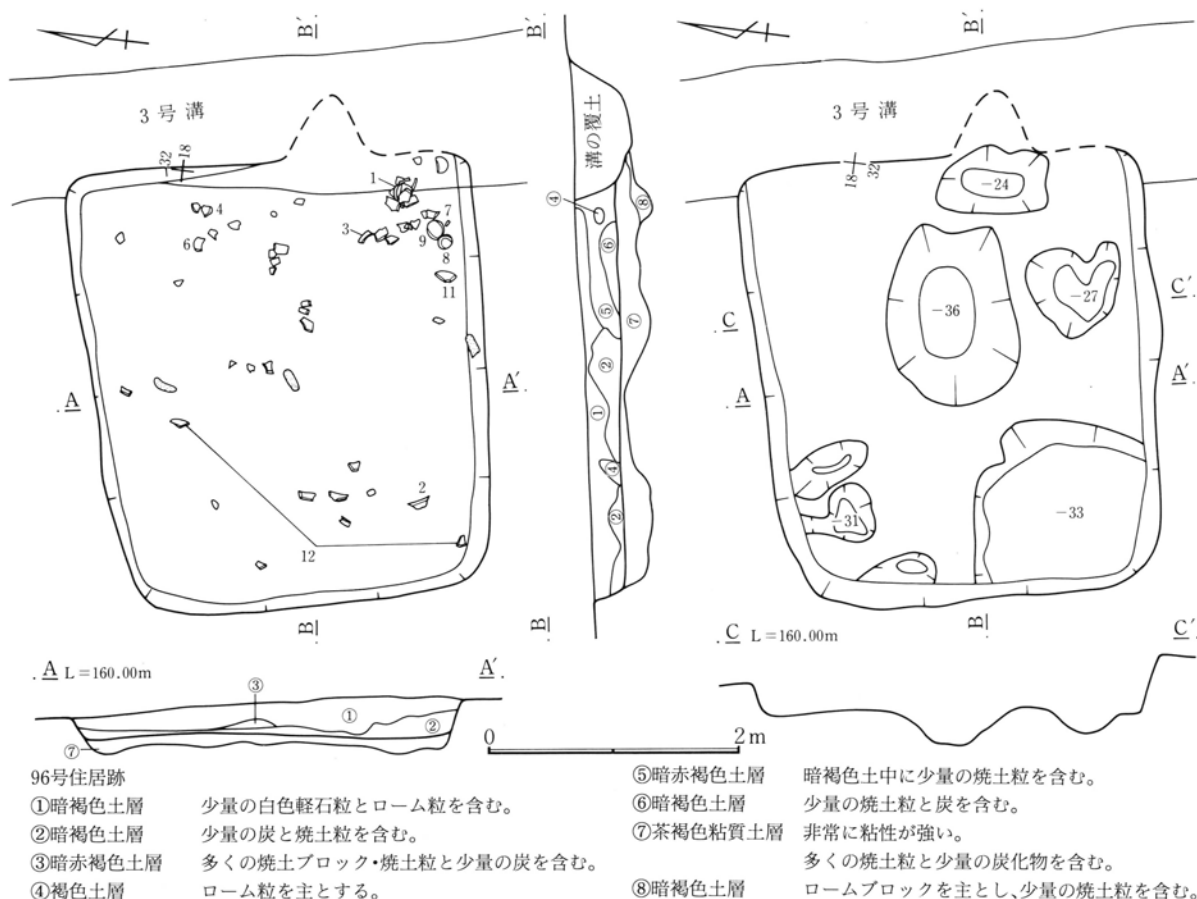
第4章 奈良時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考		
176-5	須恵器 蓋	床面+2 口縁部 $\frac{1}{4}$	口(19.2) 高(4.0) 底—	①やや粗、2~3mmの片岩粒を少量含む。②還元焰、硬質③灰色	天井部右回転ヘラ削り。 摘みは小さく端部の整形はいいねいである。		
176-6	須恵器 蓋	掘り方覆土 口縁部 $\frac{1}{4}$	口(16.8) 高— 底—	①密、2~3mmの少量の片岩粒を含む。②還元焰、硬質③灰色	天井部にヘラ削りなし。 カエリは先端部が鋭利になっている。 少しゆがんでいる。		
176-7 113	鉄製品 刀子	掘り方	長(3.8) 厚0.6	幅1.0 重4.3	刀子の茎部分と思われる。 表面に木質部がわずかに残っている。		
遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)				石材・備考
8	125	こも編み石	長14.0	幅4.5	厚4.0	重380	点紋緑泥片岩
9	125	こも編み石	長14.7	幅4.8	厚3.7	重390	絹雲母石墨片岩
10	125	こも編み石	長13.6	幅5.8	厚2.9	重360	緑簾緑泥片岩
11	125	こも編み石	長13.0	幅5.6	厚2.1	重250	緑簾緑泥片岩
12	125	こも編み石	長13.0	幅6.6	厚2.4	重300	点紋絹雲母石墨片岩
13	125	こも編み石	長15.2	幅6.4	厚2.5	重310	絹雲母石墨片岩
14	125	こも編み石	長12.5	幅4.7	厚3.2	重270	絹雲母石墨片岩
15	125	こも編み石	長11.8	幅4.8	厚3.0	重250	緑簾緑泥片岩
16	125	こも編み石	長16.5	幅5.5	厚2.4	重310	絹雲母石墨片岩 片側の側面が凹状呈する。
17	125	こも編み石	長13.5	幅4.1	厚3.2	重280	絹雲母緑泥片岩
18	125	こも編み石	長11.9	幅6.4	厚4.4	重480	緑簾緑泥片岩
19	125	こも編み石	長12.3	幅5.3	厚3.0	重275	絹雲母石墨片岩

96号住居跡 (第177・178図、図版34・88)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、18-32グリッドに位置する。

概要 東側の壁面から床面部分で3号溝と重複しており、その部分は床下まで深く掘り込まれている。竈は3号溝により削り取られた部分に造られていたらしく、東壁面に近い覆土中より多くの焼土粒が出土



第177図 96号住居跡・床下実測図

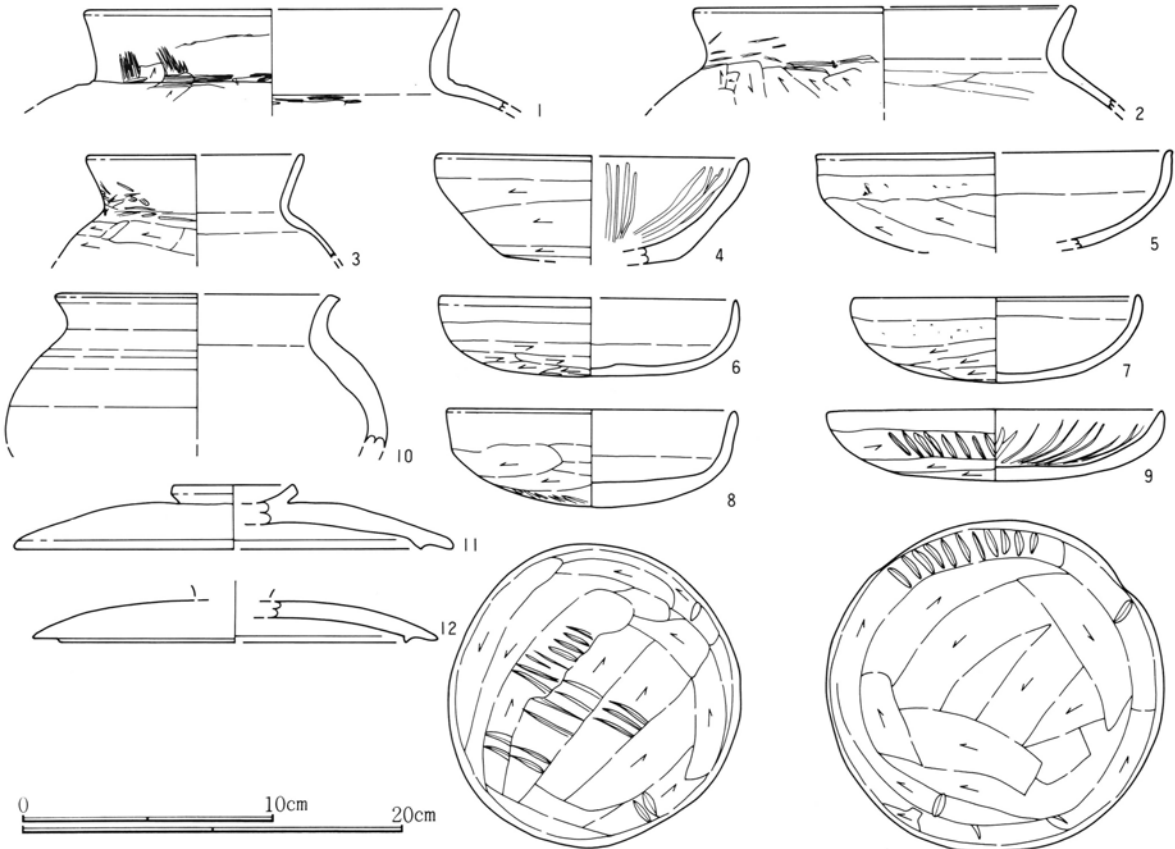
している。

構造 床面はローム粒と粘性の強い茶褐色土を主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。

規模 東西3.48m、南北3.18mである。壁高は残りの良い南壁面部分で40cmである。

床下 床下部分に多くの土坑が掘られている。床面からの深さを数字で記した。

遺物 土師器の甕や坏、須恵器の甕や蓋が出土している。



第178図 96号住居跡出土遺物実測図

96号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
178-1	土師器 壺	床面直上 口縁 $\frac{1}{3}$ 肩部 $\frac{1}{6}$	口(20.0) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 口縁部中段に輪積痕。
178-2	土師器 壺	床面+20 口縁部 $\frac{1}{3}$ 肩部 $\frac{1}{6}$	口(20.4) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	肩部ヘラ削り、砂粒の移動ほとんどなく器表面密。
178-3	土師器 小型甕	床面+6 $\frac{1}{2}$ 残存	口(11.5) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部にヘラの打痕が多く残る。
178-4	土師器 坏	床面+19 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.4) 高— 底—	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面と体部ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面に4~5本1組の暗文あり。
178-5	土師器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(14.0) 高— 底—	①密、黒色の雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
178-6 88	土師器 坏	床面+18 口縁部 $\frac{1}{3}$ 底部 $\frac{1}{3}$	口(12.0) 高3.1 底—	①密、1mm以下の砂粒と角閃石を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。

第4章 奈良時代の遺構と遺物

96号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
178-7 88	土師器 坏	床面+7 1/2残存	口 11.3 高 3.5 底 -	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色、一部黒色	底面弱いヘラ削り、削りの単位不明瞭。 内面ナデにて器表面密。 内面約1/2吸炭により黒色を呈している。
178-8 88	土師器 坏	床面+10 ほぼ完形	口 11.4 高 3.8 底 -	①密、1mm以下の砂粒を少量、雲母粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③赤褐色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭である。 内面ナデにて器表面密。 固い焼成である。
178-9 88	土師器 坏	床面+1 ほぼ完形	口 13.4 高 2.8 底 -	①密、1mm以下の小さな雲母粒を大量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面ヘラ削り、砂粒の移動少なく器表面密。 内面に放射状の暗文あり。
178-10	須恵器 壺	覆土 口縁1/3	口(14.0) 高 - 底 -	①密、1~2mmの長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	口唇部は平らでやや外傾している。
178-11	須恵器 蓋	床面+2 1/2残存	口(17.4) 高 - 底 -	①密、1~2mmの片岩粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	天井部ナデ、天井部内側不定方向ナデ。 摘みは高く整形がていねいである。
178-12	須恵器 蓋	床面+10 口縁1/2	口(16.0) 高 - 底 -	①粗 ②還元焰、硬質 ③表面灰色、断面灰赤色	カエリは口縁下端より下方へ出ている。 天井部にヘラ削りなし。 固く焼締めてあり。全体に少しゆがんでいる。

110号住居跡 (第179・180図、図版34・88)

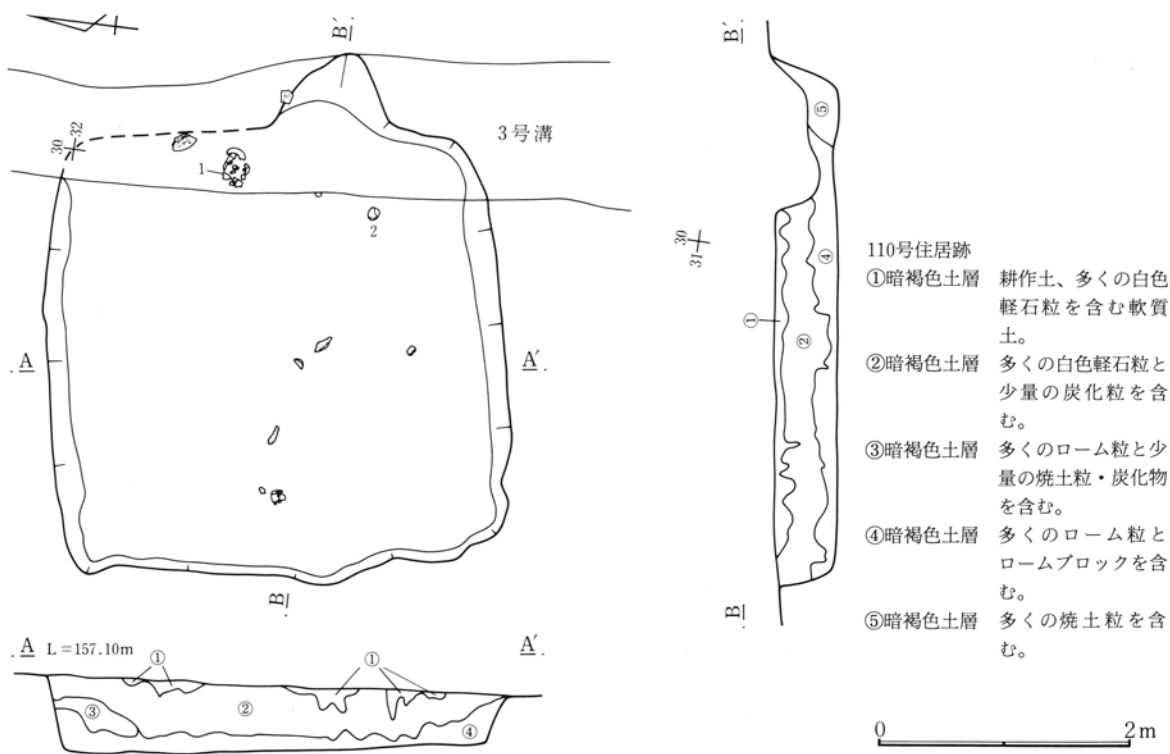
位置 本住居跡は第4次調査区にあり、32-30グリッドに位置する。

概要 東側の壁面から床面部分で3号溝と重複しており、北側は床下まで、南側はほぼ床面付近まで深く掘り込まれている。竈上面は3号溝により削り取られており、かろうじて下部が残っていたが、残りは悪い。その部分から焼土粒が多く出土している。

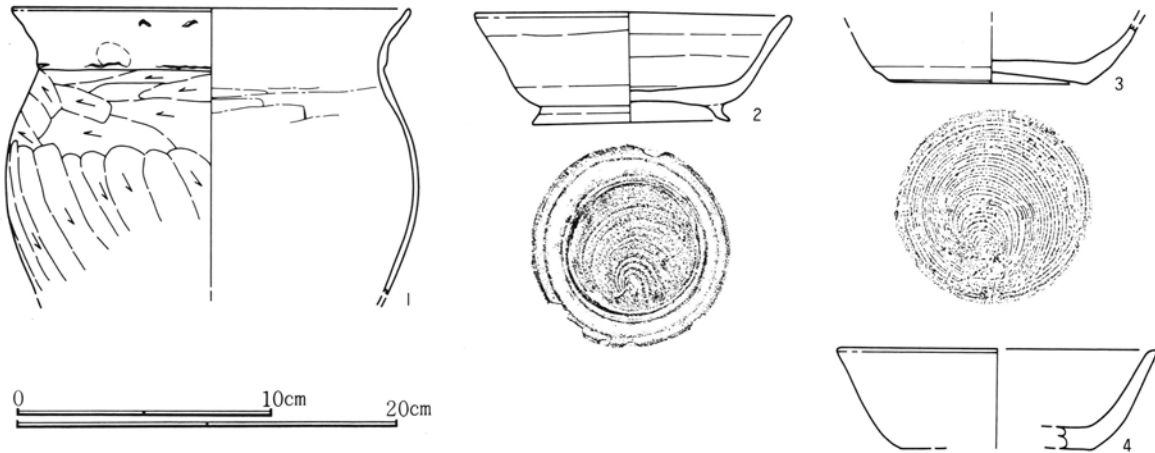
構造 床面はローム粒と粘性の強い茶褐色土を主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。

規模 東西3.50m、南北3.64mである。壁高は残りの良い南壁面部分で59cmである。

遺物 甕の破片は多く出土しているが、図示できたのは土師器の甕1点と須恵器の坏3点である。



第179図 110号住居跡実測図



第180図 110号住居跡出土遺物実測図

110号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
180-1 88	土師器 甕	床面+12 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$	口 21.2 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	胴部ヘラ削り。 口縁部に指頭圧痕が残る。 内面ナデにて器表面密。全体に少しゆがんでいる。
180-2 88	土師器 台付杯	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部完形	口 12.6 高 4.4 底 7.9	①密、1mm以下の長石粒を大量に 含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面右回転糸切り痕。 高台は細く端部をていねいに削り出している。
180-3	須恵器 杯	掘り方 底部完形	口 — 高 — 底 7.6	①粗、2~3mmの片岩粒を多く含 む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面左回転糸切り痕。 底部中央が薄く盛り上がっている。
180-4	須恵器 杯	床面+31 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.7) 高 — 底 (7.5)	①粗、2~4mmの片岩粒を少量含 む。 ②還元焰、硬質 ③暗オリーブ灰色	底面糸切り。

112号住居跡 (第181~183図、図版34・35・88・89・113・122)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、39-32・33グリッドに位置する。

概要 覆土全体から多くの炭化物が出土しているため、調査開始段階では焼失住居と考え調査を進めた。しかし床面にはまとまった炭化材は出土せず、覆土中にバラバラな状態で出土しているため、焼失住居ではないと思われる。少量であるが焼土粒も含まれている。

構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。

規模 東西3.99m、南北4.45mである。壁高は残りの良い南壁面部分で35cmである。

床下 床下中央部に、径120cm深さ27cmの床下土坑が掘られている。その他にも浅い掘り込みが掘られている。

遺物 甕・鉢・杯・鉄等が多く出土している。

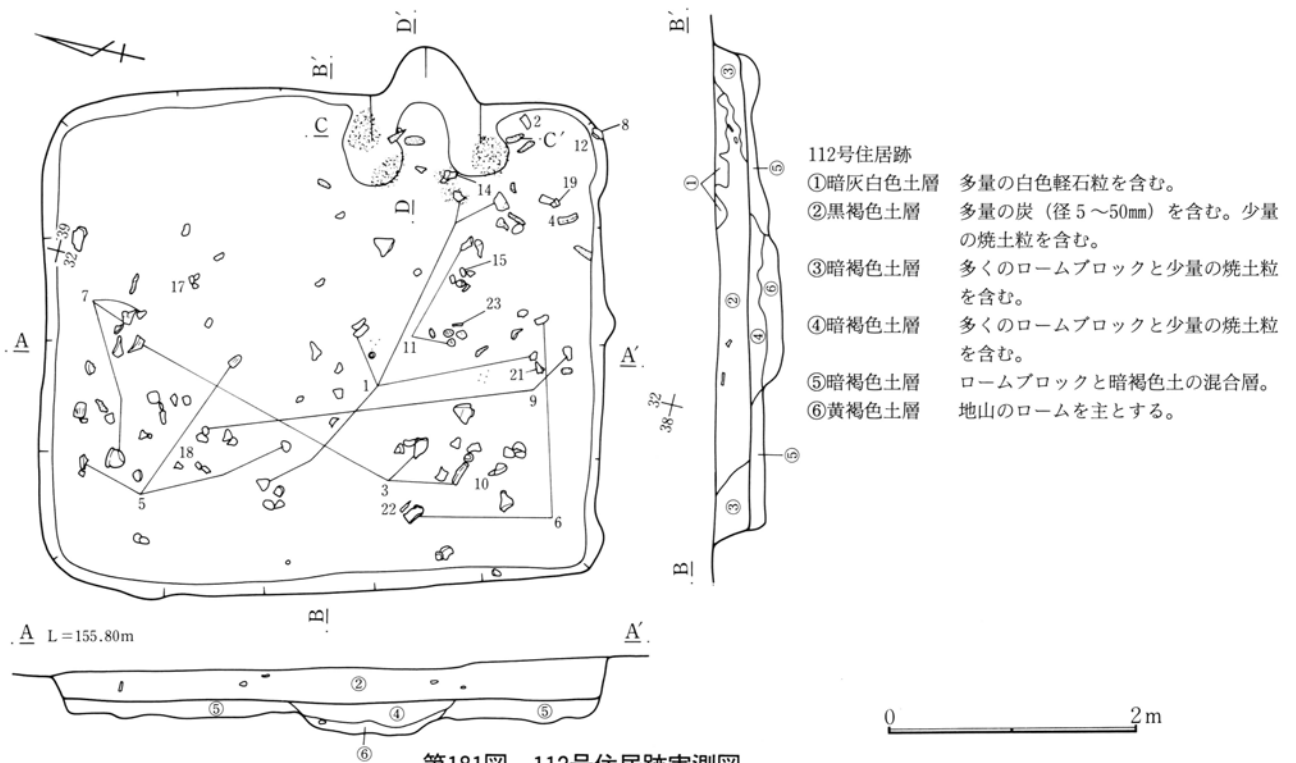
(竈)

位置 住居東壁面南寄りに造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

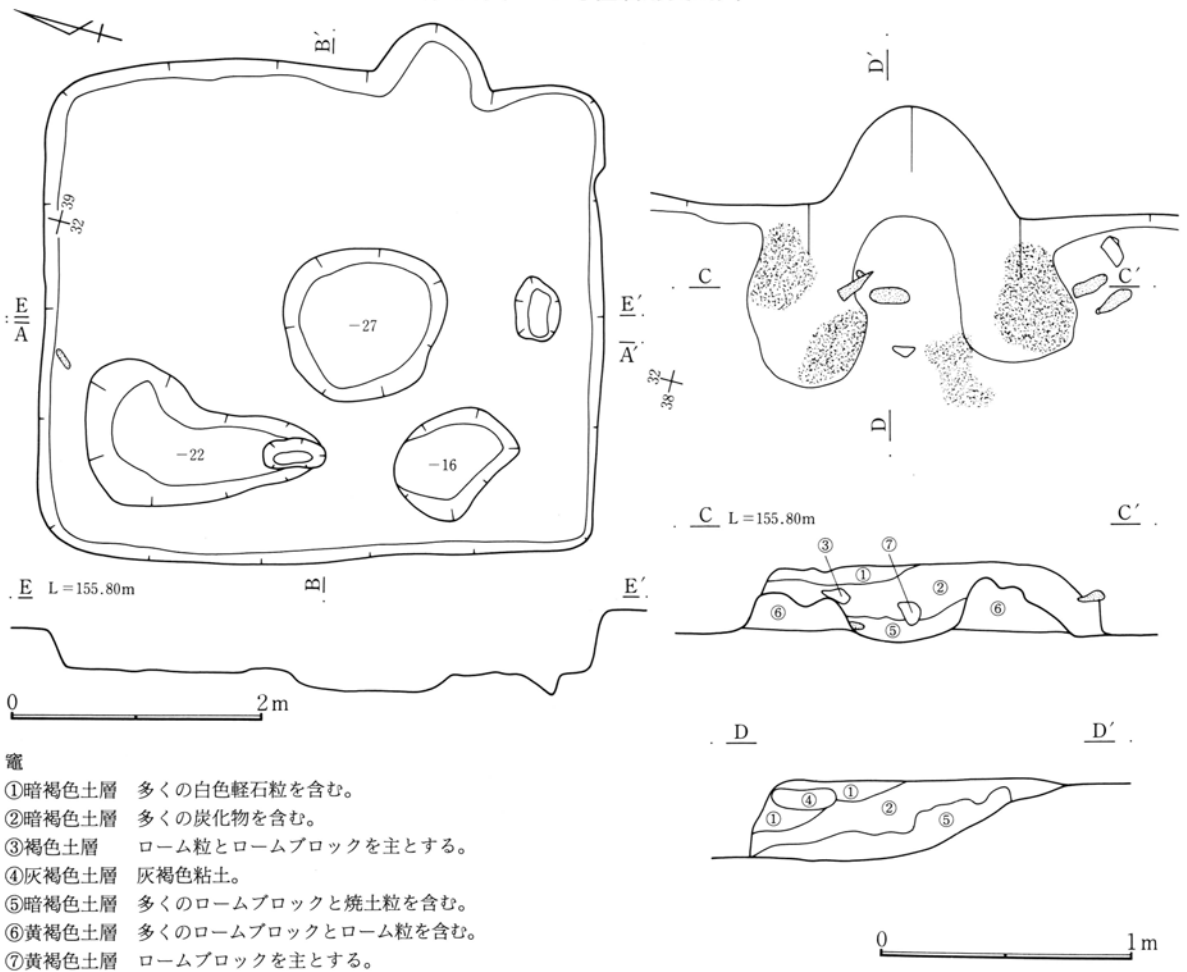
概要 袖部は部分的に残っていたが残りが悪く、袖に使われたと思われる灰褐色粘土の残存状況から一部は推定復元した。この粘土の散乱状態から調査担当は竈が意識的に壊されていると指摘している。燃烧部付近より多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向104cm、燃烧部幅48cmである。

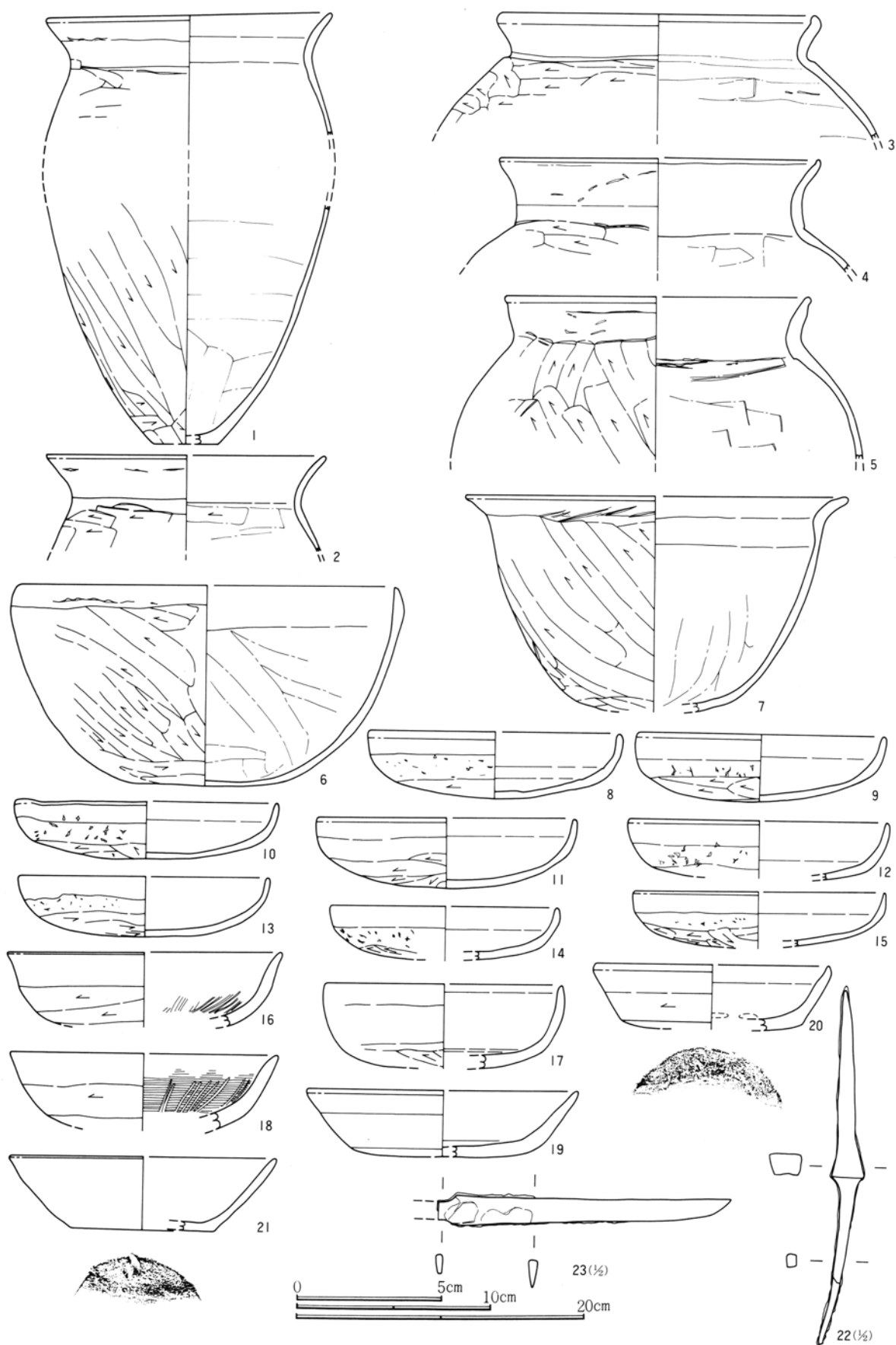
第4章 奈良時代の遺構と遺物



第181図 112号住居跡実測図



第182図 112号住居跡床下・竈実測図



第183図 112号住居跡出土遺物実測図

第4章 奈良時代の遺構と遺物

112号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
183-1 88	土 師 器 甕	床面+9 口縁部 $\frac{1}{3}$ 胴下半 $\frac{1}{2}$	口 20.0 高 — 底 (4.4)	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面と胴部外面へラ削り。口縁部に輪積の痕跡あり。胴部内面ナデにて器表面密。口縁部と胴下半部図上復元。
183-2	土 師 器 甕	床面+16 $\frac{1}{3}$ 残存	口(19.5) 高・底—	①密、1mm以下の小砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面へラ削り。内面ナデにて器表面密。全体に器肉が薄い。
183-3 88	土 師 器 甕	床面+4 口縁部 $\frac{1}{3}$ 胴上部 $\frac{1}{4}$	口 22.7 高 — 底 —	①密、2~3mmの赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③明褐色	胴部外面へラ削り、砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。口唇端部は肉厚でやや内傾する。
183-4	土 師 器 甕	床面+20 口縁部 $\frac{1}{4}$ 胴部 $\frac{1}{10}$	口(22.6) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へラ削り。内面ナデにて器表面密。口縁部は一度直立後外反する。
183-5	土 師 器 甕	床面+4 口縁 $\frac{1}{4}$	口(21.4) 高・底—	①密、1mm前後の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へラ削り、砂粒の移動は少ないが胎土がササラ状になっている。
183-6 88	土 師 器 鉢	床面+10 口縁部 $\frac{1}{3}$ 底部 $\frac{1}{2}$	口(25.6) 高 13.8 底 —	①やや粗、2~4mmの砂粒と片岩粒を含む。②酸化焰、硬質 ③外面にぶい赤褐色、内面赤色	底面と胴部外面へラ削り。器表面の粗れは少ないが、多くの砂粒が目立つ。内面ナデにて器表面密。
183-7 89	土 師 器 鉢?	床面+5 $\frac{1}{3}$ 残存	口(26.4) 高・底—	①密、2~3mmの多くの赤色粒を含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部へラ削り。口縁部にへらが当たって削られた痕跡が多く残る。内面ナデにて器表面密。
183-8 88	土 師 器 坏	床面+7 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.0) 高 3.5 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り、砂粒の移動ほとんどなく器表面の粗れは少ない。内側器表面密。
183-9 88	土 師 器 坏	床面+14 $\frac{3}{4}$ 残存	口 12.8 高 3.5 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り、砂粒の移動は少なく器表面の粗れは少ない。内側器表面密。
183-10 88	土 師 器 坏	床面+14 $\frac{1}{3}$ 残存	口(13.0) 高 2.9 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面へラ削り。口縁部と底部との間ナデで図のような小さな凹部を多く持つ。全体にゆがんでいる。
183-11 88	土 師 器 坏	床面+23 $\frac{1}{3}$ 残存	口(13.5) 高 3.6 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面へラ削り、多くの小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。部分的に黒斑が残る。
183-12 88	土 師 器 坏	床面+7 $\frac{1}{3}$ 残存	口(13.2) 高・底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り、削りの単位不明瞭。体部ナデ。内面ナデにて器表面密。
183-13 88	土 師 器 坏	覆土 $\frac{1}{3}$ 残存	口(13.0) 高 3.2 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③表面黒色、断面灰黄褐色	底面へラ削り。体部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。内面に光沢を持つ。
183-14	土 師 器 坏	床面+15 $\frac{1}{4}$ 残存	口(12.0) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②還元焰、硬質 ③内面黒色、外面灰色と褐灰色	全体に灰色~黒褐色を呈しており、須恵器を思わせる。内面黒色を呈し光沢を持つ。
183-15 89	土 師 器 坏	床面+18 $\frac{1}{3}$ 残存	口(13.4) 高・底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へラ削り。体部ナデ。内面ナデにて器表面密。
183-16 89	土 師 器 坏	覆土 $\frac{1}{3}$ 残存	口(14.2) 高・底—	①密、1mm前後の砂粒を少量含む ②還元焰、軟質 ③灰色	底面へラ削り。胎土が密で削りの単位不明瞭。内面に多くの暗文。還元で焼成させめずらしい例である。
183-17 89	土 師 器 坏	床面+3 $\frac{1}{6}$ 残存	口(12.2) 高・底—	①密、1mm前後の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面及び体部外面へラ削りであるが、胎土が密で削りの単位不明瞭。内面に暗文なし。
183-18	土 師 器 坏	床面+9 $\frac{1}{4}$ 残存	口(13.9) 高 — 底 —	①密、1~2mmの砂粒をわずかに含む。②還元焰、硬質 ③灰黒色	底面と体部外面へラ削り。内側体部~口縁部全面へラ磨き後暗文。土師器であるが、還元焰焼成で吸炭も認められる。
183-19	土 師 器 坏	床面直上 $\frac{1}{3}$ 残存	口(14.2) 高・底—	①密 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	器表面が粗れており整形方法不明。内側の暗文は確認できなかった。
183-20	須 恵 器 坏	覆土 $\frac{1}{4}$ 残存	口(12.2) 高 — 底 (9.5)	①密、砂粒ほとんど含まず ②還元焰、軟質 ③灰色	底面へラ削り。体部下へラ削り。内面ナデ。内側底面周辺部に指頭圧痕あり。色調以外は土師器の特徴を持つ。
183-21 89	須 恵 器 坏	床面+10 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部小破片	口(14.0) 高 — 底 (7.4)	①特に密、1mm以下の小さな石英粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	底面は小破片であるが、へら切りと思われる。
183-22 113	鉄 製 品 鉄 鎌	床面+11 ほぼ完形	長 12.5 幅 1.3 厚 0.8 重 12.7		鉄鎌の茎部・関部・頸部と思われる。頸部は太く鎌身部分に近づくにつれて急に細くなる。残りは良好。
183-23 113	鉄 製 品 刀 子	床面+10	長 10.3 幅 1.1 厚 0.3 重 9.4		刀子の茎の一部と棟区・刃区・刀身部分である。錆が少なく刀身の先の部分が今でも使えそうである。

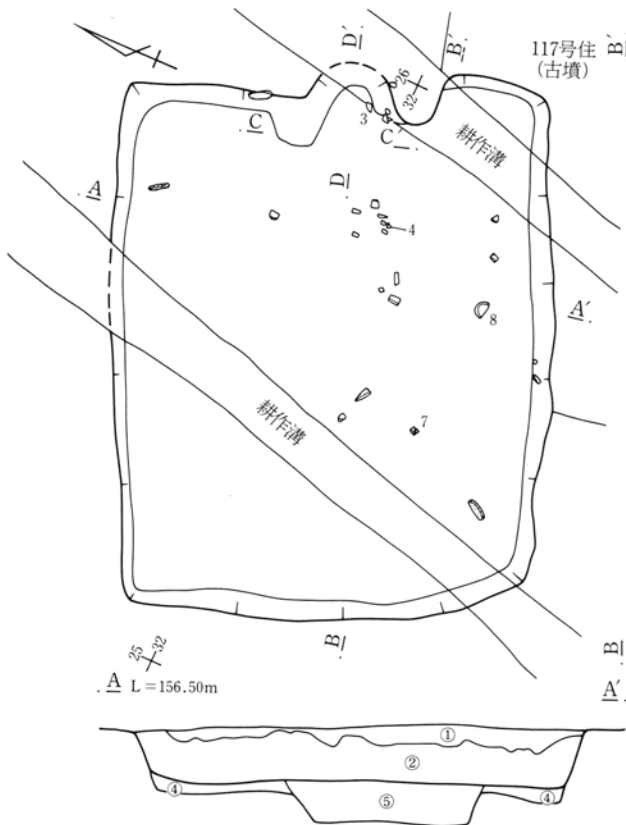
116号住居跡 (第184~186図、図版35・89)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、32・33-26グリッドに位置する。

概要 南東部分で古墳時代の117号住居と重複しており、本住居が117号住居を床下部分まで掘り込んでいる。北西部分の残りが悪く、壁面はわずかししか残っていない。南西コーナー付近を耕作溝により掘り込まれ竈の多くが壊されている。耕作溝は西側部分にも掘られており、一部床面まで掘り込んでいる。

構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。

規模 東西4.29m、南北3.51mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で51cmである。



第184図 116号住居跡実測図

床下 床面中央部の床下に径120cm深さ27cmの床下土坑が掘られていた。その他にも浅い掘り込みが掘られている。

遺物 破片は多い。土師器の甕・坏、須恵器の坏・蓋が出土している。

(竈)

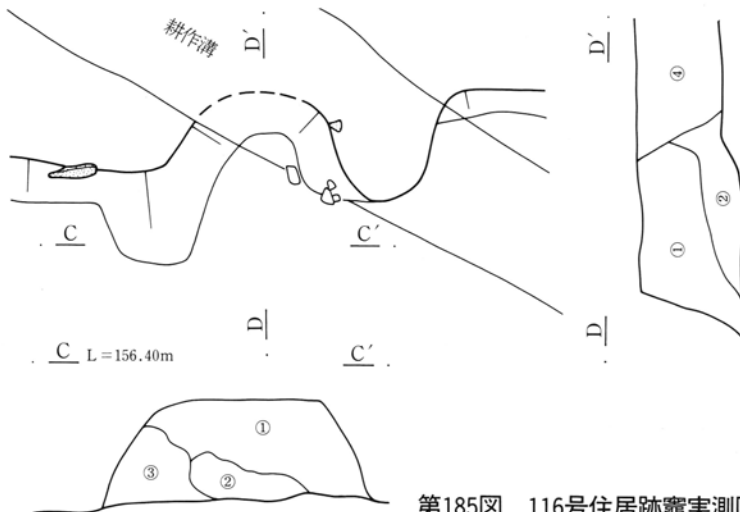
位置 住居東壁面に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

概要 耕作溝により右袖部分から燃烧部や煙道部までの多くの部分が削られ残りが悪い。左袖部分が僅かに残っているのが土層断面で確認できる。平面図ではそれを元に一部復元して作成している。燃烧部覆土中より多く

0 2m

116号住居跡

- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのロームブロックとやや多くの焼土粒を含む。
- ④褐色土層 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。
- ⑤暗褐色土層 多くのロームブロックと黒褐色土の混入土層。



第185図 116号住居跡竈実測図

の焼土粒と焼土ブロックが出土している。

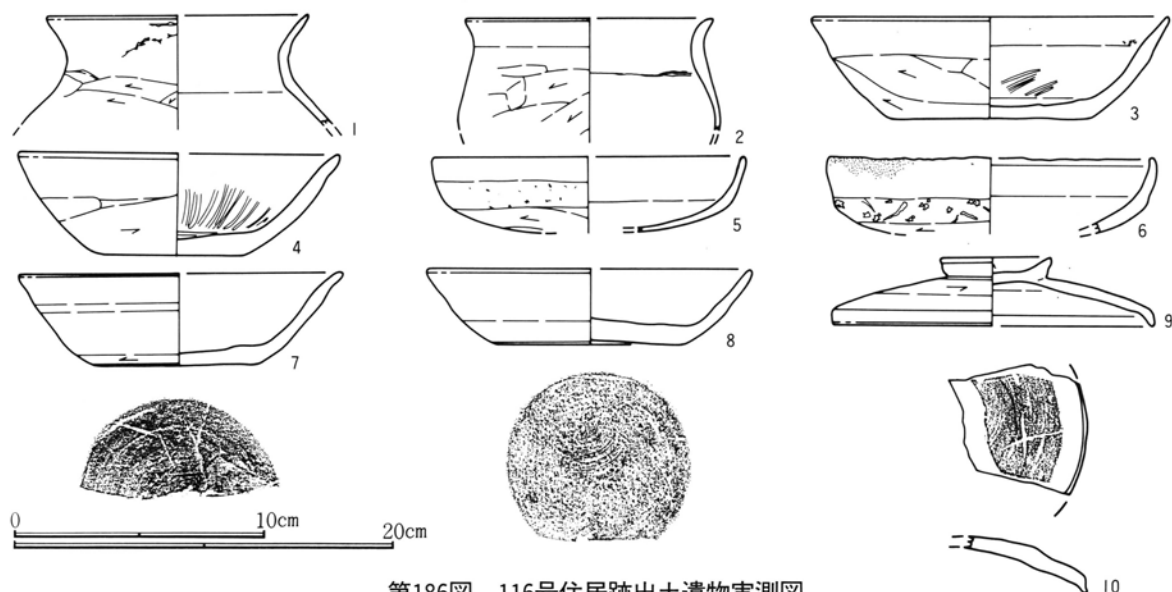
規模 煙道方向68cm、燃烧部幅は不明である。

竈

- ①暗褐色土層 少量のローム粒を含む。
- ②暗赤褐色土層 多くの焼土粒と焼土ブロックを含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ④耕作溝覆土層 多くの白色軽石粒を含む。

0 1m

第4章 奈良時代の遺構と遺物



第186図 116号住居跡出土遺物実測図

116号住居跡出土遺物観察表

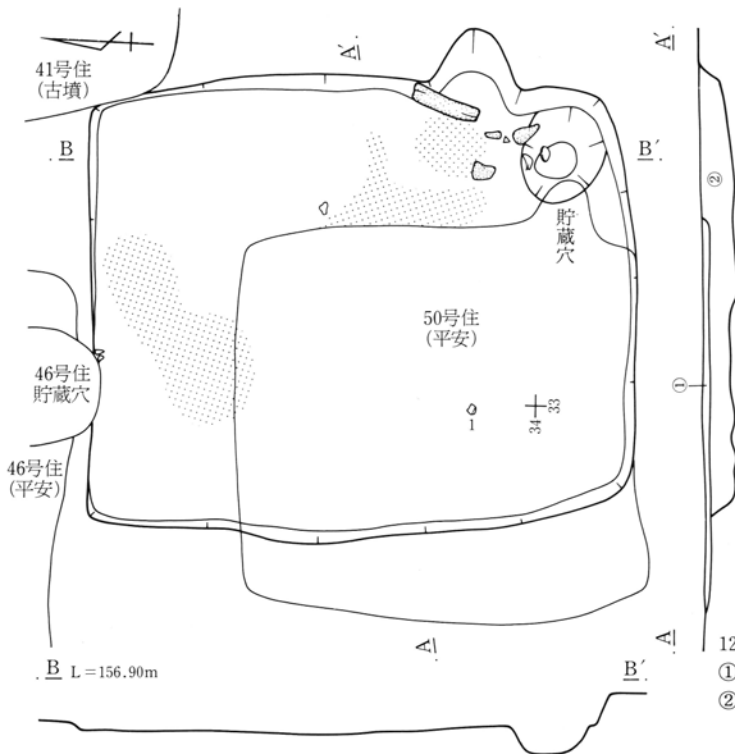
挿図番号 図版番号	土器種別 器	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
186-1	土 師 器 小型甕	覆土 口縁破片	口(14.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	肩部ヘラ削り。 口縁部横ナデ、口縁部に輪積痕が残る。 丸胴を呈する。
186-2	土 師 器 小型甕	掘り方 破片	口(13.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の特に小さな砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部ヘラ削り、砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。口縁部横ナデ。 外面に多くの黒斑が認められる。
186-3 89	土 師 器 坏	床面+6 1/2残存	口 14.0 高 4.0 底 7.8	①密、1~2mmの砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部外面ヘラ削り。内面に暗文が描かれていたが、器表面が粗れておりほとんど残っていない。底面の一部に吸炭あり。
186-4	土 師 器 坏	床面+20 1/4残存	口(13.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く、2~3mmの赤色粒少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色、底面黒色	底面と体部ヘラ削り。 内面に多くの暗文。 内側底面と体部との境に一本の沈線が一周している。
186-5	土 師 器 坏	覆土 小片	口(12.3) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。
186-6	土 師 器 坏	覆土 1/4残存	口(13.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面ヘラ削り。体部ナデ。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。器表面やや光沢を持つ。 口縁部外面に黒斑あり。
186-7	須 恵 器 坏	床面+3 1/3残存	口(12.8) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②還元焰、硬質 ③灰色	底面と体部下端回転ヘラ削り。
186-8 89	須 恵 器 坏	床面+11 口縁部1/2 他1/4	口(12.6) 高 3.0 底 7.2	①やや粗、2~3mmの長石粒を含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底部中央右回転糸切り痕。 周辺部回転ヘラ削り。 底部の器肉が厚い。
186-9 89	須 恵 器 蓋	掘り方覆土 1/2残存 摘み完形	口(12.6) 高 — 底 —	①密、1~2mmの砂粒を少量含む ②還元焰、硬質 ③灰色	天井部ヘラ削り。摘みはリング状で口縁端部は短く折られている。
186-10	須 恵 器 蓋	掘り方覆土 小破片	口 — 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②還元焰、硬質 ③灰色	天井部回転糸切り痕。 周辺部右回転ヘラ削り。 ×の線刻による窯印あり。

120号住居跡 (第187・188図、図版35・89)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、35-33・34グリッドに位置する。

概要 住居の南西側約2/3で平安時代の50号住居と重複しており、50号住居により覆土上面を削り取られている。50号住居は竈と住居の輪郭がはっきりしないことと、平安時代の遺物も少ないことから、存在に疑問の余地もある。本住居からは明らかな奈良時代の遺物が出土している。竈周辺や北側の床面付近か

第4章 奈良時代の遺構と遺物



ら多くの焼土粒が出土している。

構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は掘られていないが、竈右側に貯蔵穴が掘られている。

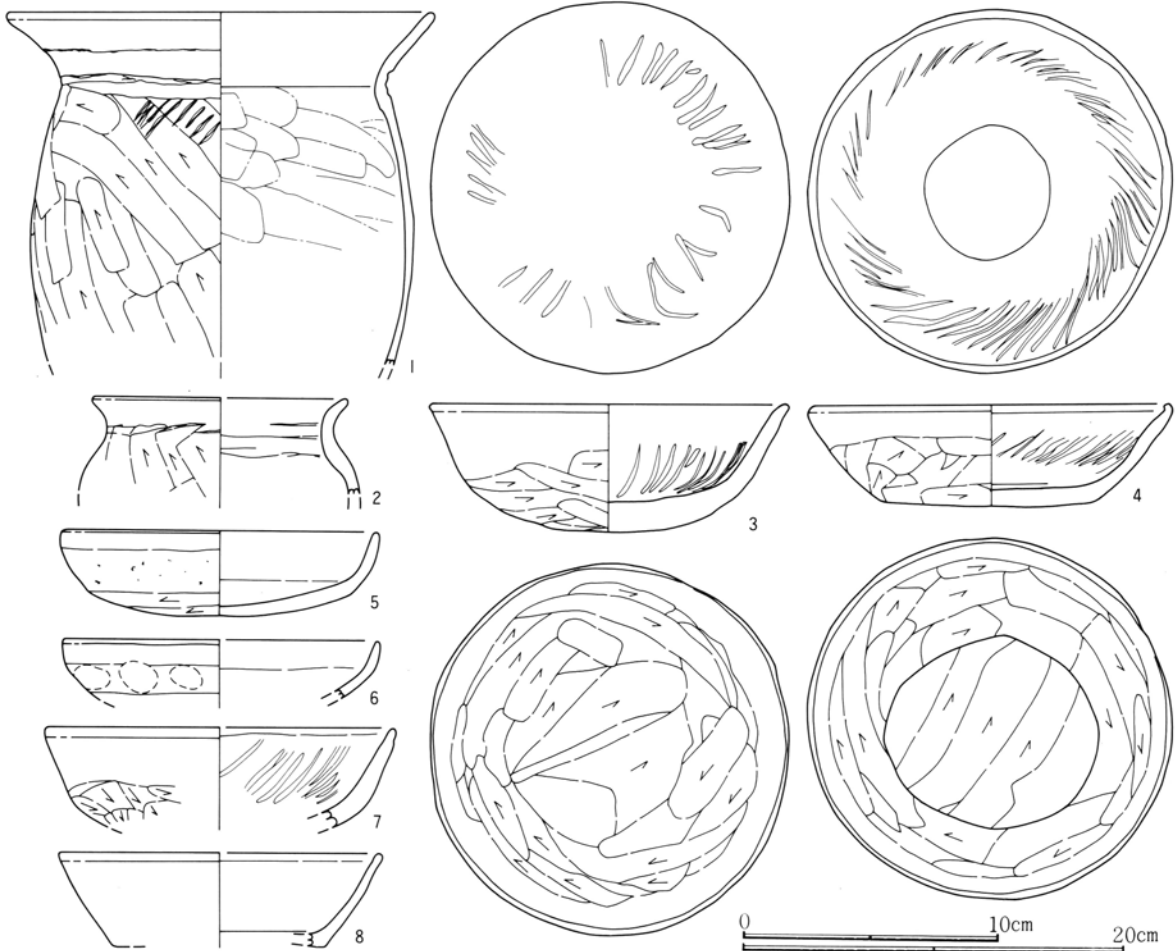
規模 東西3.55m、南北4.35mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で31cmである。貯蔵穴は径76cm 深さ31cmである。

遺物 破片は少ないが、甕や完形の坏が出土している。

- 120号住居跡
 ①50号住居跡覆土
 ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量のロームブロックを含む。

第187図 120号住居跡実測図

0 2m



第188図 120号住居跡出土遺物実測図

第4章 奈良時代の遺構と遺物

(竈)

位置 住居東壁面に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

概要 焚口部分に天井石が落ちた状態で出土している。焚口付近に他の石も出土しているが、袖石と思われる石はない。袖部はほとんど残っていない。焚口付近の床面から多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向58cm、燃烧部幅は不明である。

120号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
188-1 89	土 師 器 甕	床面+8 口縁~ 胴上半 $\frac{2}{3}$	口 22.2 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	胴部外面ヘラ削り。 頸部に胴部ヘラ削り時に削られた凹線あり。 内面ナデにて器表面密。
188-2	土 師 器 小型甕	覆土 口縁部 $\frac{1}{4}$	口(13.2) 高 — 底 —	①密、1mm前後の砂粒と小さな雲 母粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面灰黄褐色、外面赤褐色	胴部外面ヘラ削り、ヘラの工具痕が頸部に残る。 口縁部横ナデ。 3mm×7mmの大きな片岩粒を1個含む。
188-3 89	土 師 器 坏	覆土 完形	口 14.0 高 5.0 底 —	①密、1mm前後の砂粒と片岩粒を 大量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	底面と体部ヘラ削り。内側器表面は粗れているが、多 くの暗文が確認できる。 器表面の粗れている内面に多くの砂粒が目立つ。
188-4 89	土 師 器 坏	覆土 完形	口 14.6 高 4.0 底 —	①密、多量の1mm以下の小さな雲 母粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 口縁部は内傾している。内面に放射状暗文。 黒斑全くなし。
188-5 89	土 師 器 坏	覆土 ほぼ完形	口 12.4 高 3.4 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
188-6	土 師 器 坏	覆土 口縁部 $\frac{1}{2}$	口(12.4) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削りであるが、ヘラの単位不明瞭。 口縁部下に指頭圧痕あり。 少しゆがんでいる。
188-7	土 師 器 坏	覆土 口縁部破片	口(13.6) 高 — 底 —	①やや粗、2~3mmの片岩粒を少 量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	体部細かなヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面に多くの暗文が認められる。
188-8	須 恵 器 坏	覆土 口縁部小片	口(12.6) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②還元焰、硬質 ③灰色	底面ヘラ削り。 口縁部右回転クロクロ目。

131号住居跡 (第189・190図、図版35・36)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、25-27グリッドに位置する。

概要 住居の残りは比較的良好であるが、竈の残りは悪い。

構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴が4本と貯蔵穴が竈の右側に掘られている。竈の左側にも貯蔵穴にも似た掘り込みが認められる。貯蔵穴2と呼称して扱う。

規模 東西4.18m、南北4.58mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で34cmである。貯蔵穴1は径62cm深さ62cm、貯蔵穴2は径56cm深さ55cmである。柱穴1は径40cm深さ61cm、柱穴2は径48cm深さ72cm、柱穴3は径46cm深さ52cm、柱穴4は径46cm深さ53cmである。

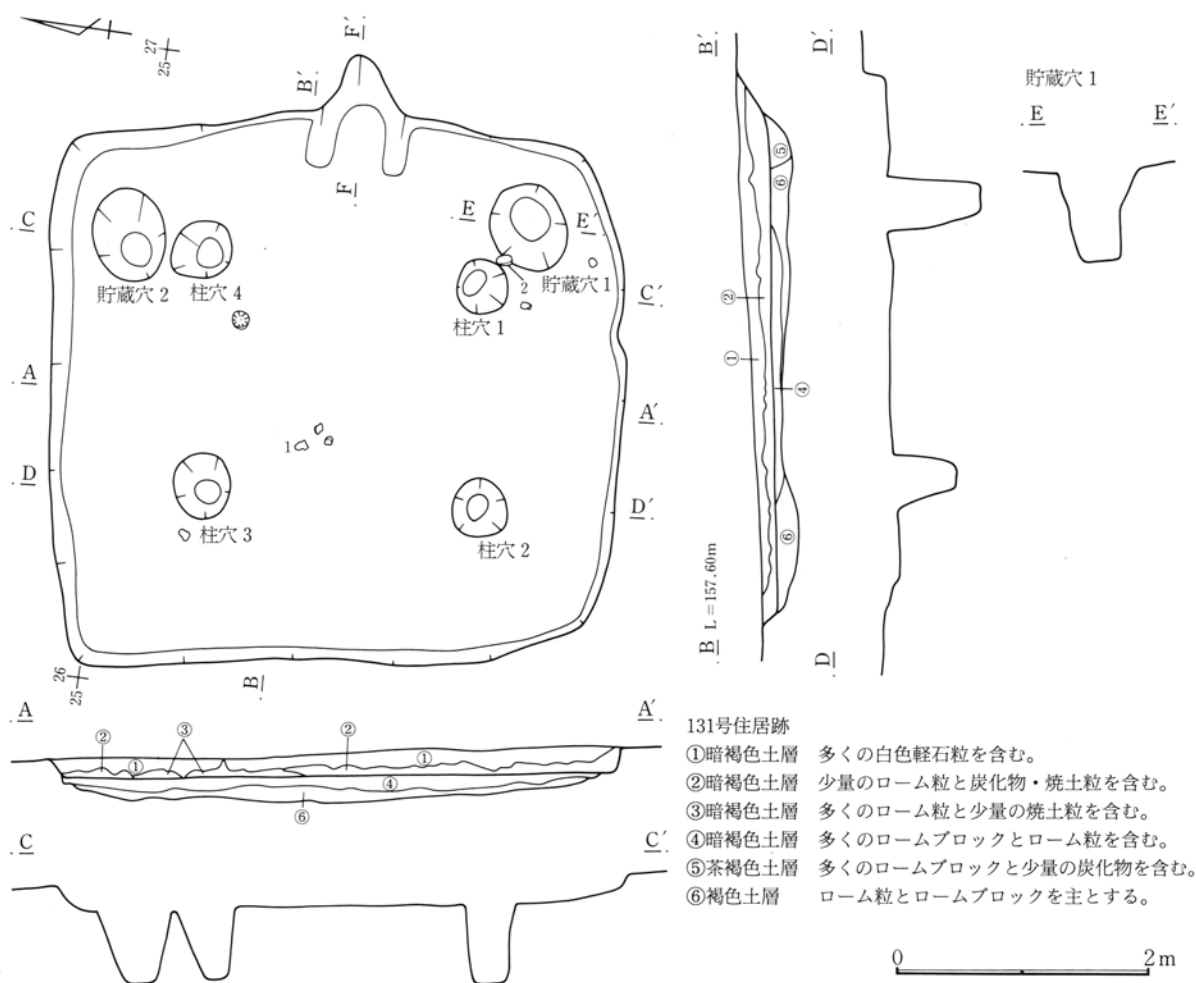
遺物 出土量が少なく、図示できたのは坏2点である。

(竈)

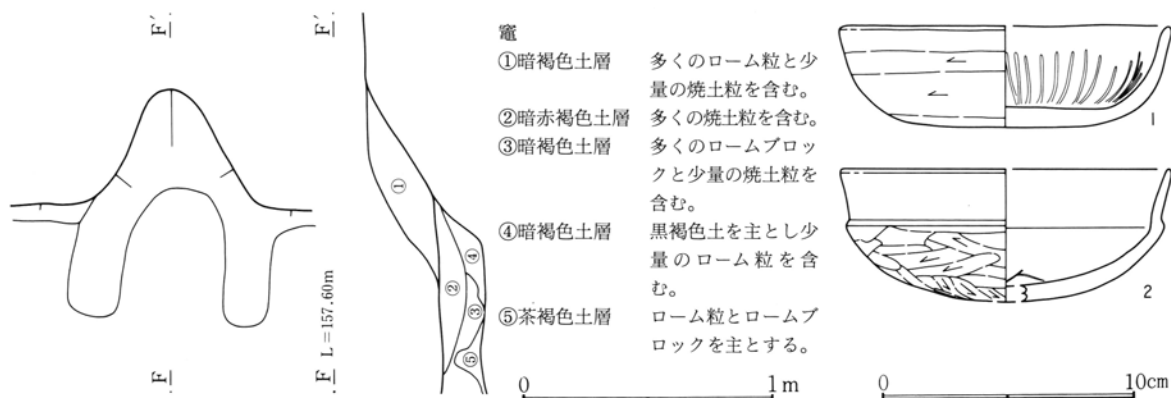
位置 住居東壁面に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

概要 両袖部はほとんど残っていないが、床面に近い下部分の痕跡から両袖部分の復元ができた。床面下に位置する燃烧下部から多くの焼土粒が出土している。竈周辺の残りは良好であるのに対し、竈本体の残りはこのように悪いため、竈の袖をはじめ下部分の多くは最終段階で取り壊されていたのではないだろうか。

規模 煙道方向93cm、燃烧部幅42cmである。



第189図 131号住居跡実測図



第190図 131号住居跡竈・出土遺物実測図

131号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
190-1	土師器 坏	床面+12 1/3残存	口(13.0) 高— 底—	①密、1mm前後の赤色粒と2~3mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部外面へラ削り。 口縁部内側に多くの暗文。
190-2	土師器 坏	床面+7 口縁部1/3 底部1/2	口(13.1) 高— 底—	①密、1mm前後の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へラナデ、砂粒の移動は少ない。 口縁部横ナデ。 内側底面中央部にへラの圧痕あり。

136号住居跡 (第191~193図、図版36・89・116)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、18・19—27・28グリッドに位置する。

概要 西側部分で平安時代の138号住居と重複しており、138号住居により床面近くまでの覆土が取り除かれている。細長く小さな住居である。

構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。

規模 東西3.46m、南北2.38mである。壁高は残りの良い東壁面部分で44cmである。

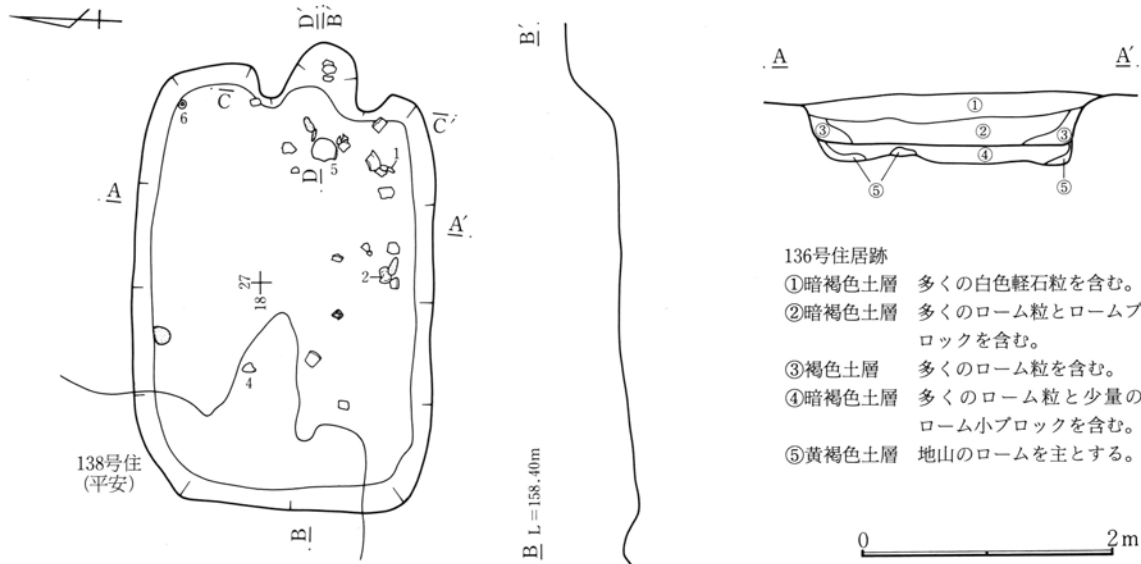
遺物 破片は多いが、図示できた遺物は少ない。紡錘車の出土が注目される。

(竈)

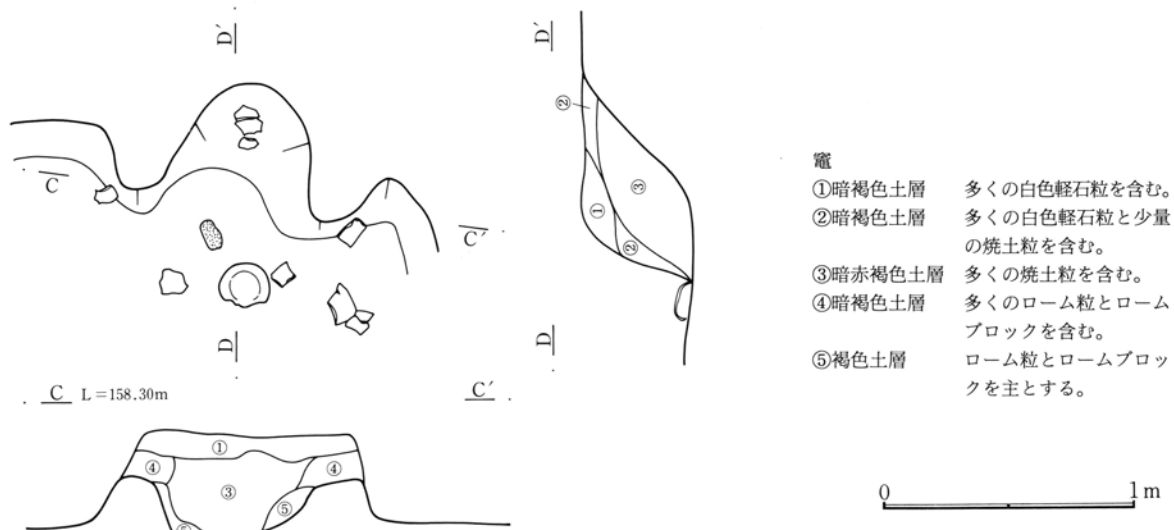
位置 住居東壁面に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

概要 小さな住居であるが、竈は大きな住居同様に造られている。壁面に近い両袖部の残りは良好であるが、焚口付近の袖はほとんど残っていない。燃烧部覆土中から多くの焼土粒が出土している。

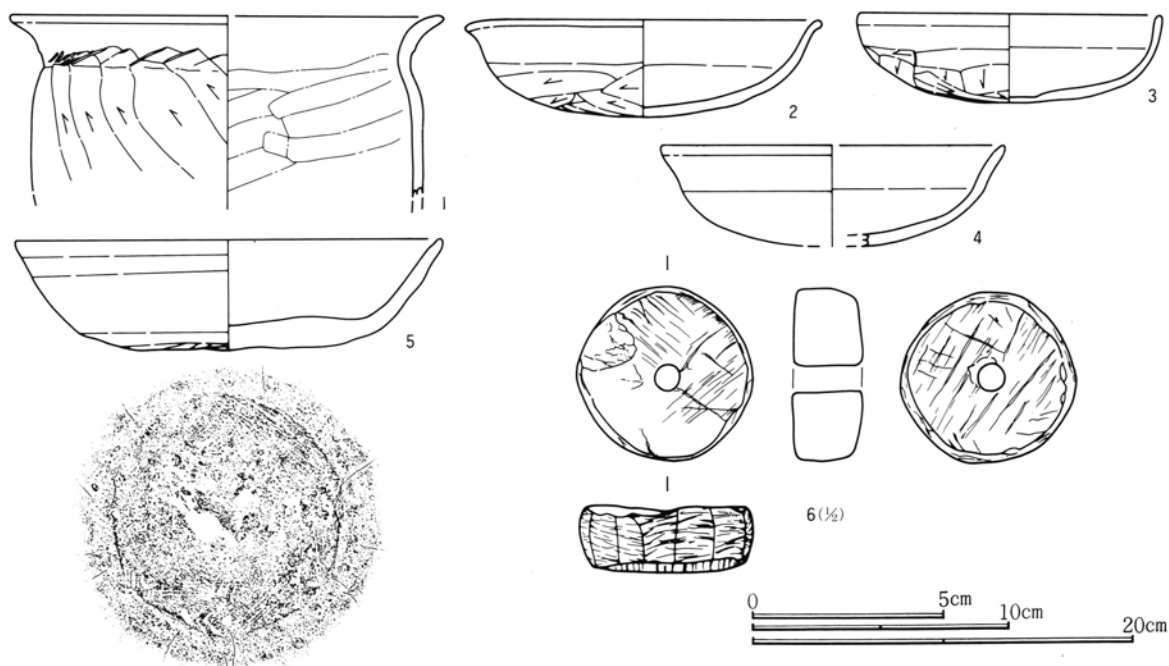
規模 煙道方向60cm、燃烧部幅56cmである。



第191図 136号住居跡実測図



第192図 136号住居跡竈実測図



第193図 136号住居跡出土遺物実測図

136号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
193-1	土師器 甕	床面+2 1/2残存	口(23.0) 高— 底—	①密、2~3mmの砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面強いヘラ削り、削りの単位は明瞭である。 内面ナデにより器表面密。
193-2 89	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口14.3 高3.8 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面ヘラ削り、砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。 口唇部が丸く仕上げられている。
193-3 89	土師器 坏	覆土 1/2残存	口11.9 高3.5 底—	①密、少量の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、砂粒が移動し器表面やや粗い。
193-4	土師器 坏	床面直上 1/2残存	口(13.6) 高— 底—	①粗、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	器表面全体が斑点状に剝離しており整形方法不明。
193-5 89	須恵器 坏	床面+2 口縁一部欠 口完形	口16.3 高4.3 底9.3	①やや粗、1~3mmの長石粒を大量に含む。 ②還元焰、硬質、焼締 ③黄灰色	底面ヘラ切り、中央部に凸状部。 周辺部ヘラ削り。 底部の器肉が厚い。
193-6 116	石製品 紡錘車	覆土	径4.6 孔径0.7 厚1.8 重65.1		滑石片岩。全面荒砥削りにより仕上げられている。やや雑な感じのつくりである。

159号住居跡 (第195~196図、図版36・89)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、30・31-24グリッドに位置する。

概要 北西壁面部分で古墳時代の161号住居と重複しており、本住居が161号住居の壁面と床面を掘り込んでいる。重複部分はわずかである。

構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は掘られていないが、貯蔵穴が竈右側に掘られている。

規模 東西2.74m、南北3.96mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で23cmである。貯蔵穴は径74cm深さ21cmである。

遺物 図示できたのは土師器の甕1点と須恵器の坏2点だけである。

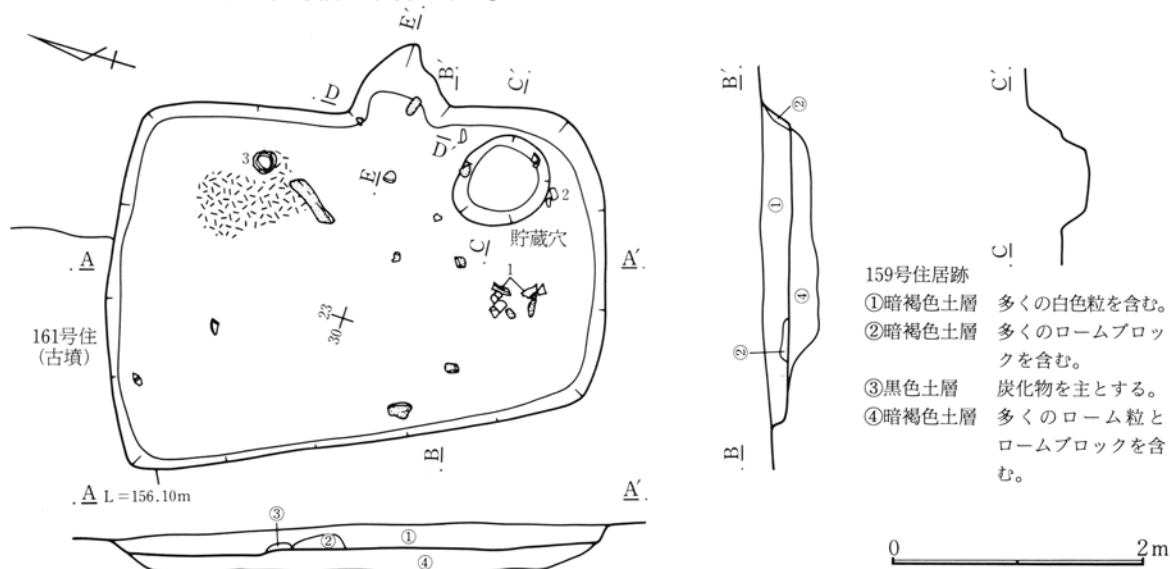
(竈)

位置 住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

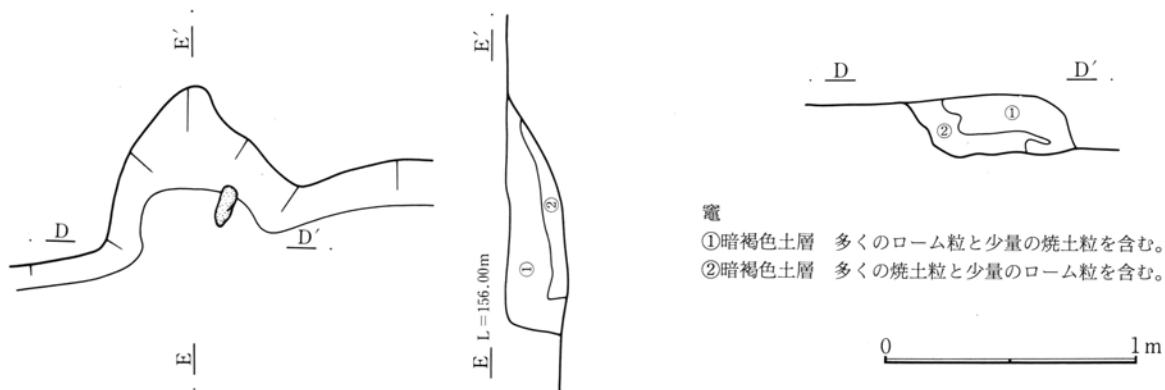
第4章 奈良時代の遺構と遺物

概要 136号住居同様に小さな住居であるが、竈は大きな住居同様に造られている。竈の位置は136号住居と異なり広い壁面部分に造られている。両袖部分はほとんど残っていない。壁面への掘り込みも少なく、全体に残りの悪い竈である。燃烧部覆土中からの焼土粒の出土も少ない。

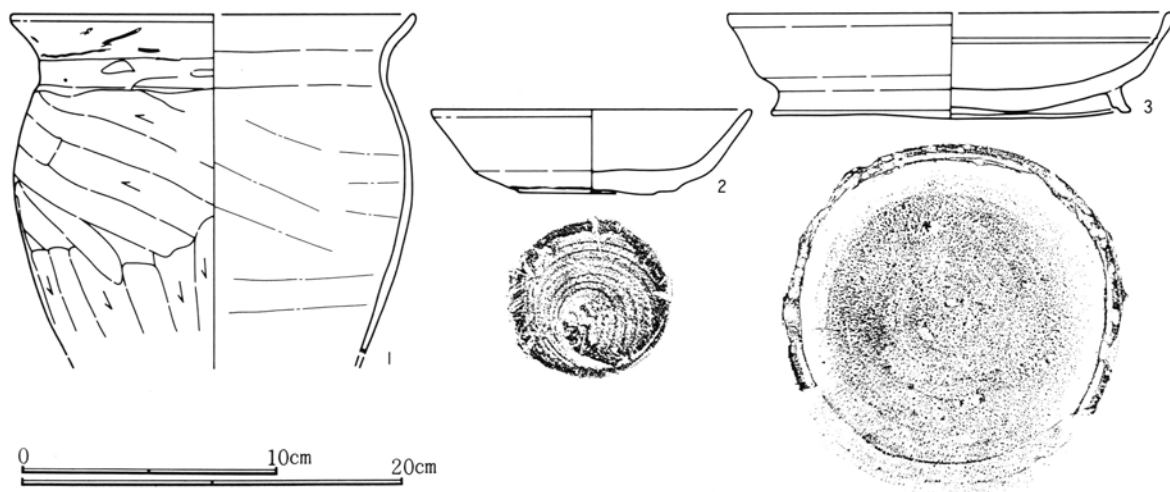
規模 煙道方向64cm、燃烧部幅は不明である。



第194図 159号住居跡実測図



第195図 159号住居跡竈実測図



第196図 159号住居跡出土遺物実測図

159号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
196-1 89	土師器 甕	床面+6 1/3残存	口(20.8) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③赤褐色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
196-2 89	須恵器 坏	床面+2 ほぼ完形	口12.4 高3.3 底6.1	①密、1~2mmの黒色粒を含む ②還元焰、硬質 ③灰黄色	底面右回転糸切り痕。 外側底面径は内側底面径より小さい。
196-3 89	須恵器 盤	床面+12 口縁部1/2 高台1/2他完	口(17.5) 高4.1 底14.0	①密、1~2mmの長石粒を多く含む。②酸化焰、硬質、焼締 ③褐灰色	底面右回転ヘラ削り。高台は下端部内側が一段高くなっている。内側全面自然釉。 内側口縁部と底面との境に2条の沈線あり。

169号住居跡 (第197~199図、図版36・37・89)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、33・34-22グリッドに位置する。

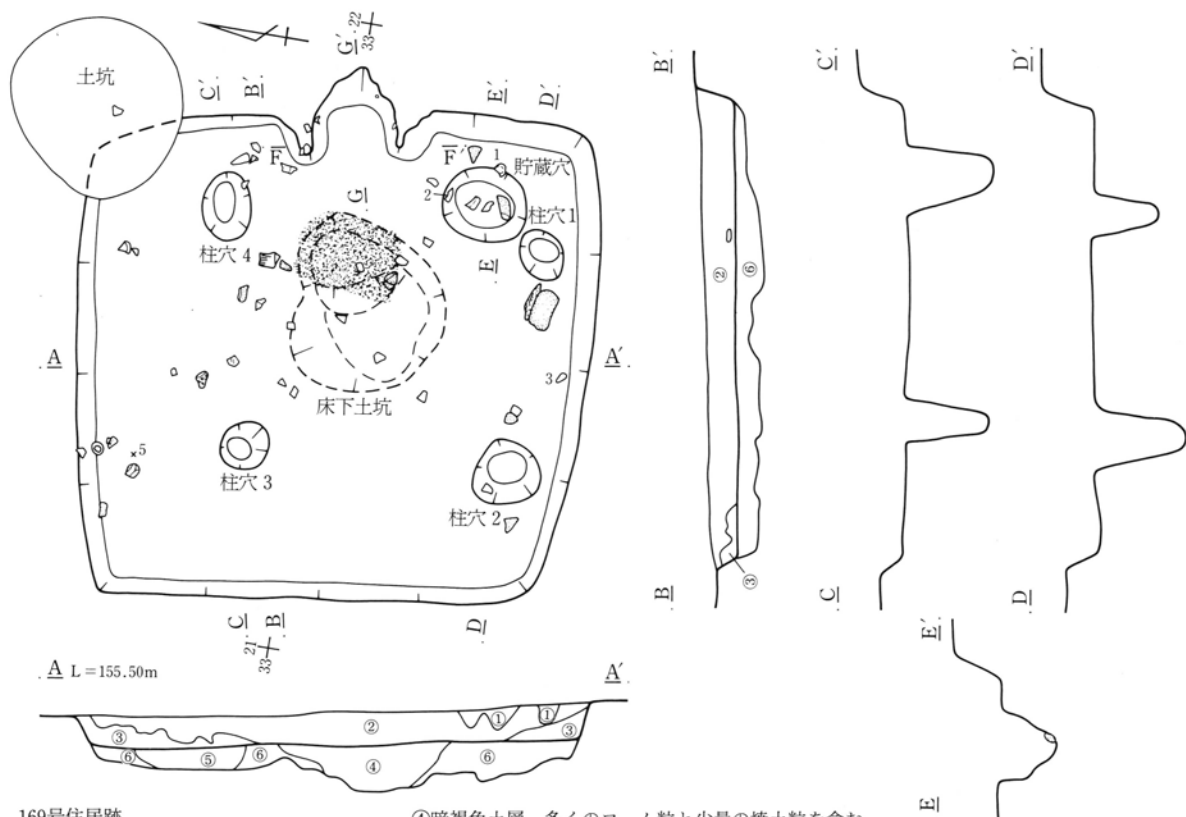
概要 北東コーナー部分を土坑により床面付近まで掘り込まれている。

構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴が4本、竈の右側に貯蔵穴が掘られている。柱穴の位置がやや不定形である。

規模 東西3.88m、南北4.12mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で42cmである。貯蔵穴は径68cm深さ88cmである。柱穴1は径44cm深さ52cm、柱穴2は径54cm深さ72cm、柱穴3は径42cm深さ68cm、柱穴4は径52cm深さ72cmである。

床下 床下の中央部に径118×125cm深さ37cmの床下土坑が掘られている。その床下土坑の北側からややまとまった灰白色粘土が出土している。

遺物 破片は大量に出土しているが、図示できたのは土師器の坏4点と鉄鏝1点である。



169号住居跡

①暗褐色土層 耕作土。

②暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。

③暗褐色土層 多くのロームブロックを含む。

④暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。

⑤暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。

⑥暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

第197図 169号住居跡実測図

0 2m

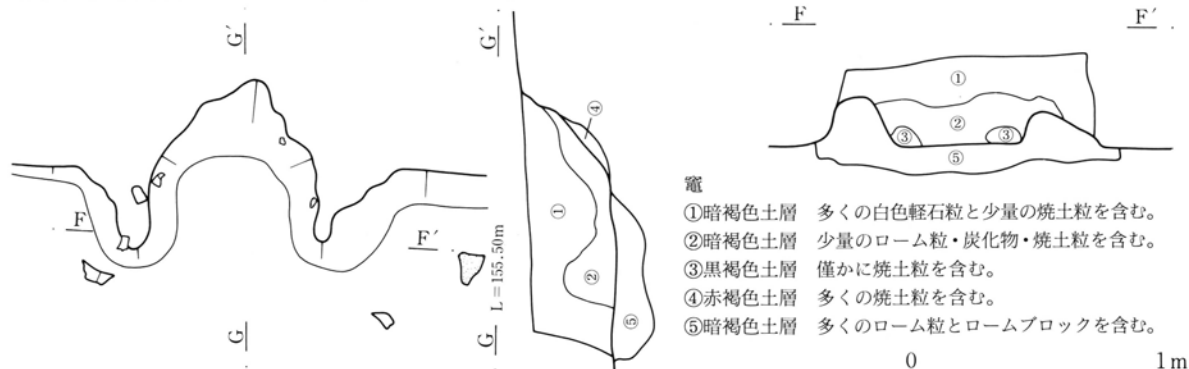
第4章 奈良時代の遺構と遺物

(竈)

位置 住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要 両袖部分は残っているが、上部は削られており良好な状態ではない。煙道部は壁面を少し掘り込んで造られている。奥壁に近い部分が焼けて焼土化している。燃焼部からの焼土粒の出土は少ない。

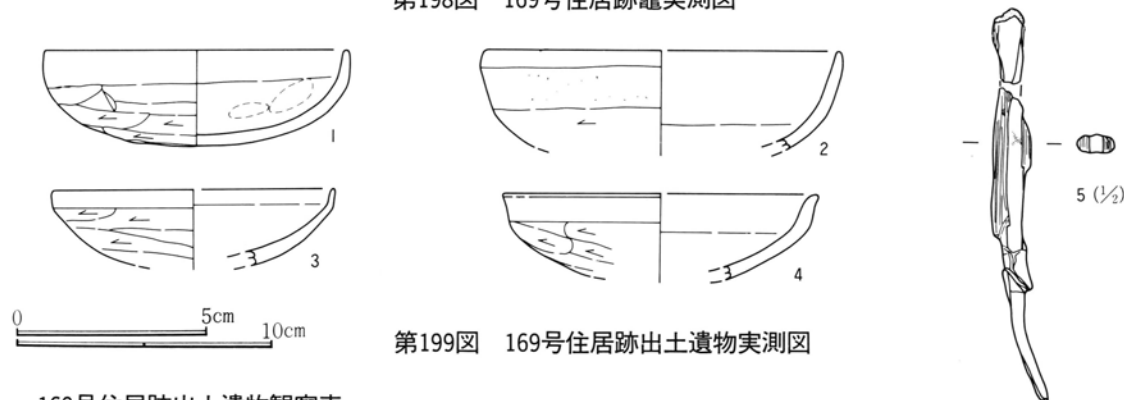
規模 煙道方向76cm、燃焼部幅約52cmである。



竈

- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒と少量の焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量のローム粒・炭化物・焼土粒を含む。
- ③黒褐色土層 僅かに焼土粒を含む。
- ④赤褐色土層 多くの焼土粒を含む。
- ⑤暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

第198図 169号住居跡竈実測図



第199図 169号住居跡出土遺物実測図

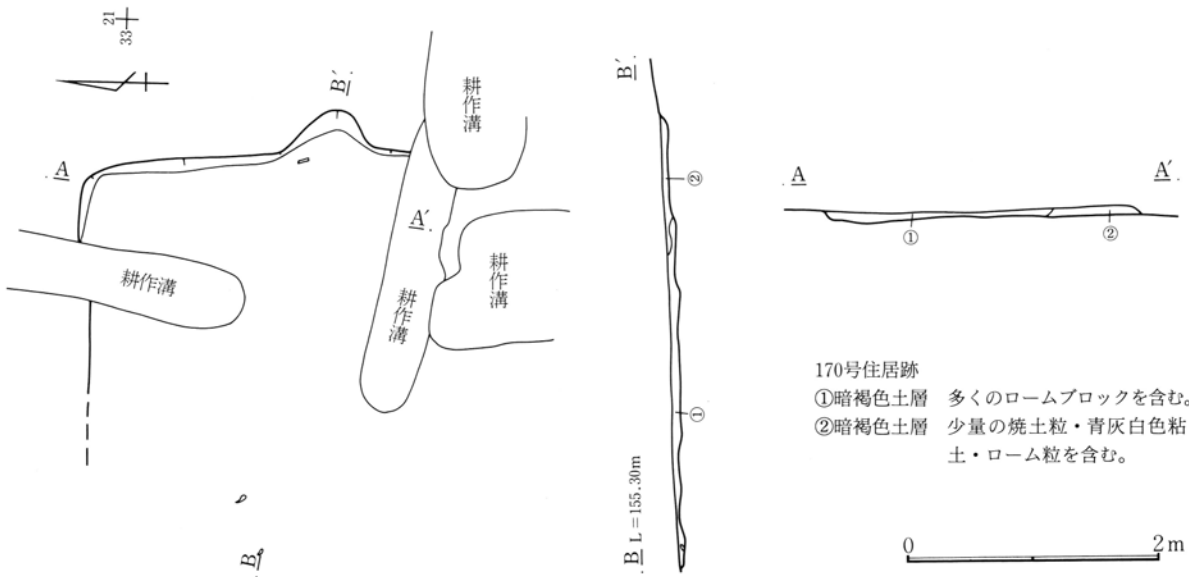
169号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
199-1 89	土 師 器 杯	床面-21 1/2残存	口 12.0 高 3.8 底 -	①密、少量の角閃石を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位比較的明瞭。 内面ナデにて器表面密。 指頭圧痕あり。
199-2	土 師 器 杯	床面-53 小破片	口(13.8) 高 - 底 -	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位不明瞭。
199-3	土 師 器 杯	床面+16 1/2残存	口(11.0) 高 - 底 -	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、ヘラの単位は明瞭でない。 全体にゆがんでいる。
199-4	土 師 器 杯	覆土 小破片	口(12.4) 高 - 底 -	①密 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削りにより器表面が粗い。 黒斑が多く認められる。
199-5 113	鉄 製 品 鉄 鏝	掘り方	長 10.4 幅 1.0 厚 0.5 重 8.0		鉄鏝の茎部分と思われる。 木質部が多く残っている。

170号住居跡 (第200図、図版37)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、33-21グリッドに位置する。

概要 大部分が削られて残っておらず、確認できたのは僅かに残った北東コーナー部分の床下と竈の下部分だけである。その部分も耕作溝等により多くの部分が掘り込まれている。柱穴や貯蔵穴も確認できなかった。竈の造られていた部分から少量の焼土粒が出土している。図示できる遺物はないが、破片より8世紀前半の遺構と判断した。 遺物 破片2片しか出土していない。



第200図 170号住居跡実測図

172号住居跡 (第201~204図、図版37・89・90)

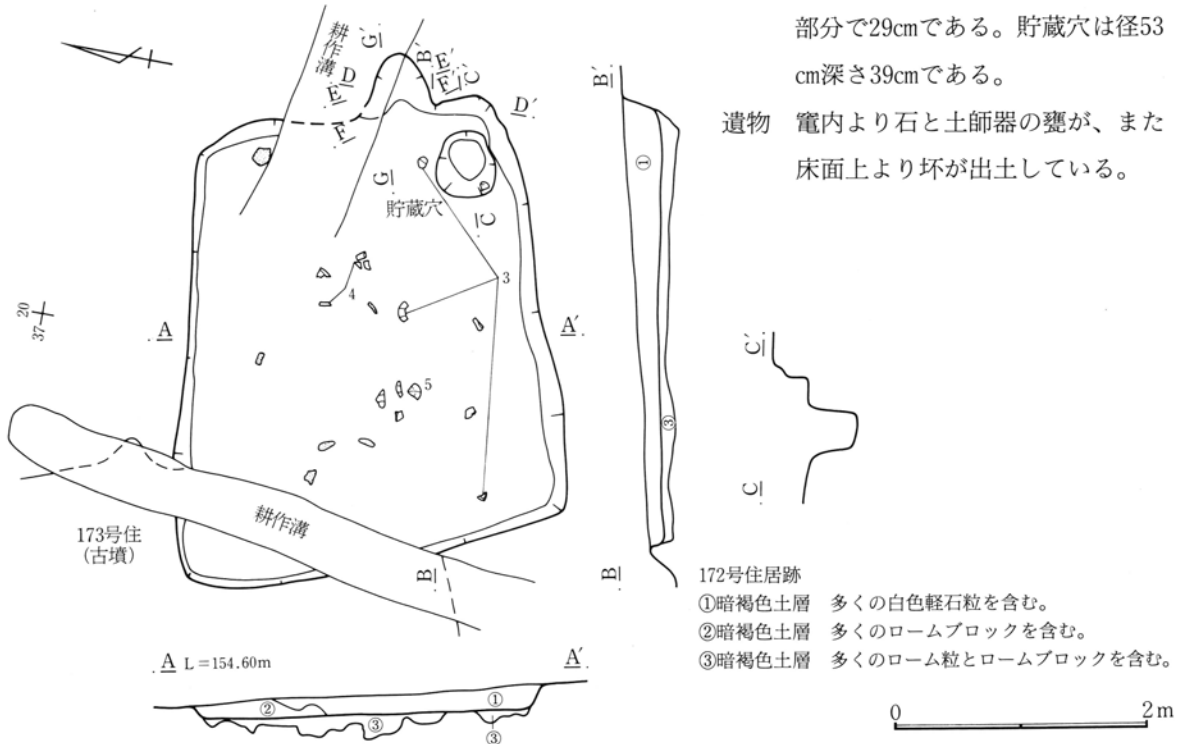
位置 本住居跡は第4次調査区にあり、37-20・21グリッドに位置する。

概要 西壁面部分が広く、東壁面部分が狭いやや不定形をした住居である。東西方向の耕作溝により覆土の多くと竈の左袖部分が、また南北方向の耕作溝により北西部分が床下部分まで深く掘り込まれている。このように残りの悪い住居であるが、竈の残りは良好である。

構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は掘られていない。貯蔵穴は竈の右側に掘られている。

規模 東西3.65m、南北は西壁面部分で3.08m、東壁面部分で2.42mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で29cmである。貯蔵穴は径53cm深さ39cmである。

遺物 竈内より石と土師器の甕が、また床面上より坏が出土している。



第201図 172号住居跡実測図

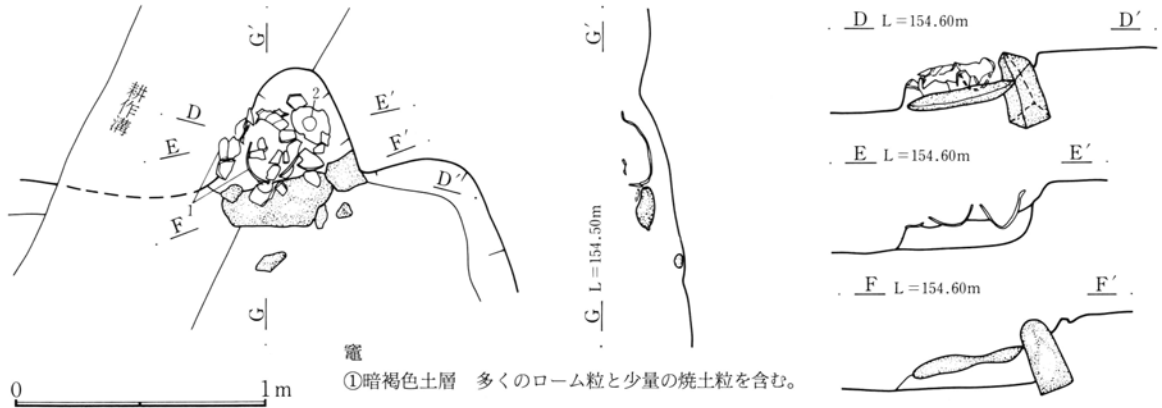
第4章 奈良時代の遺構と遺物

(竈)

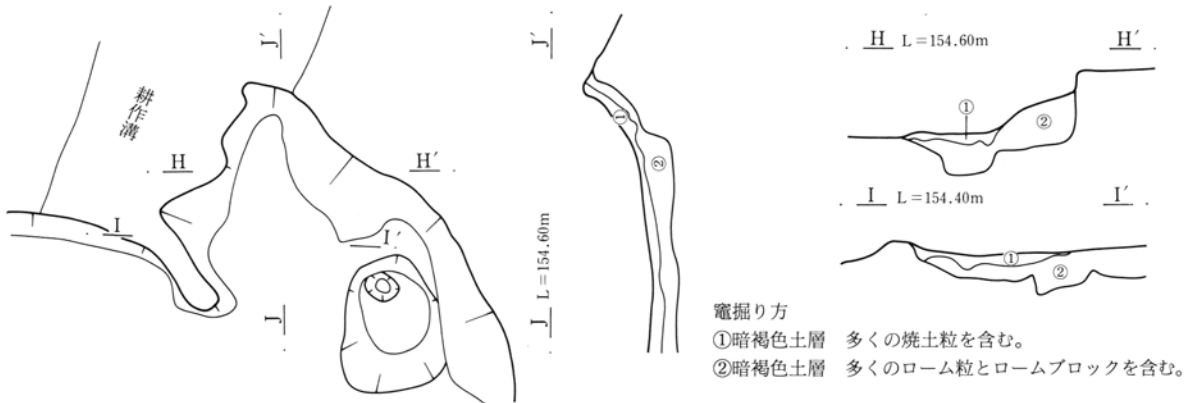
位置 住居東壁面に造られている。燃烧部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

概要 住居が小さいためか、竈の多くは壁面を掘り込んで造られている。天井石が焚口部分に落ちた状態で、また右袖石がほぼ据えられた状態で出土している。燃烧部に2個の甕が割れて倒れていたが、ほぼ使用時の状態を復元できそうな状態で残っていた。このように残りの良い竈である。

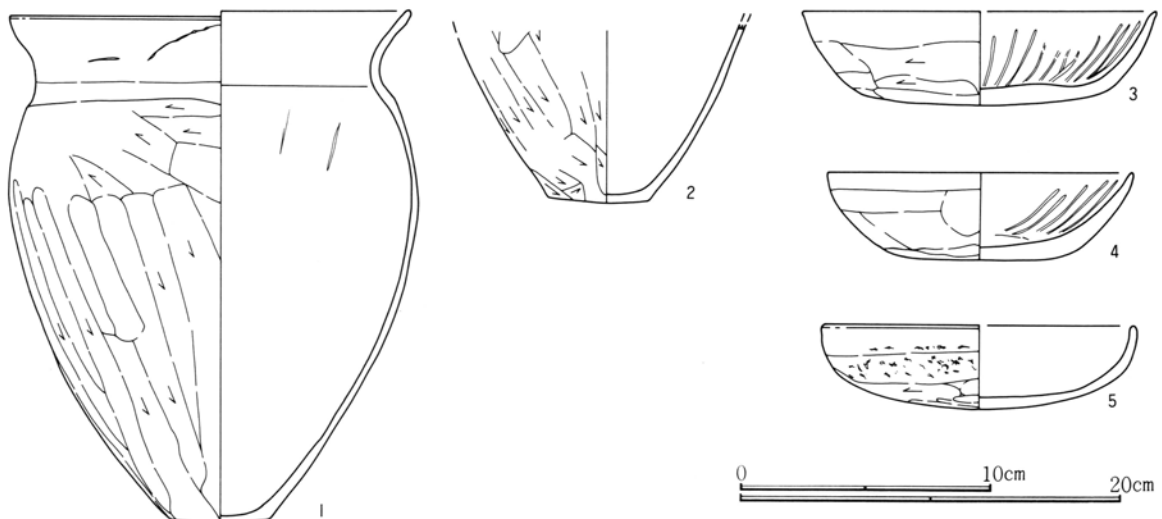
規模 煙道方向52cm、燃烧部幅約46cmである。



第202図 172号住居跡竈実測図



第203図 172号住居跡竈掘り方実測図



第204図 172号住居跡出土遺物実測図

172号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
204-1 89	土師器 甕	床面+6 口縁~胴下 半 $\frac{1}{2}$ 、他完	口 21.1 高 26.5 底 5.2	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③口縁部赤褐色、胴下半黒褐色	胴部外面へら削りで器肉を薄く仕上げている。内面ナデにて器表面密。口縁部以下は火を受けて吸炭により黒褐色。
204-2 89	土師器 甕	床面+11 胴 $\frac{1}{3}$ 、底完	口・高一 底 5.3	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と胴部外面へら削り。小さな砂粒が多く移動している。
204-3 89	土師器 坏	床面+5 口縁部 $\frac{1}{3}$ 底部完形	口(13.8) 高 3.6 底 —	①密、2~3mmの砂粒と赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部へら削り。口縁部内側に多くの暗文。
204-4 89	土師器 坏	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口 12.0 高 3.5 底 —	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部外面へら削りと思われるが器表面が粗れており不明瞭。内面に多くの暗文あり。
204-5 90	土師器 坏	床面+7 $\frac{1}{3}$ 残存	口(12.4) 高 3.2 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面へら削り。体部外面ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。内面に斑点状の黒漆に似た付着物あり。

174号住居跡 (第205~208図、図版37・38・90・117)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、36-18グリッドに位置する。

概要 覆土の多くが削り取られ、南側壁面部分を土坑により、また西側部分を耕作溝により掘り込まれている。東側部分では古墳時代の175号住居と重複しており、本住居が175号住居を掘り込んでいる。竈の残りも悪く、全体的に残りの悪い住居である。

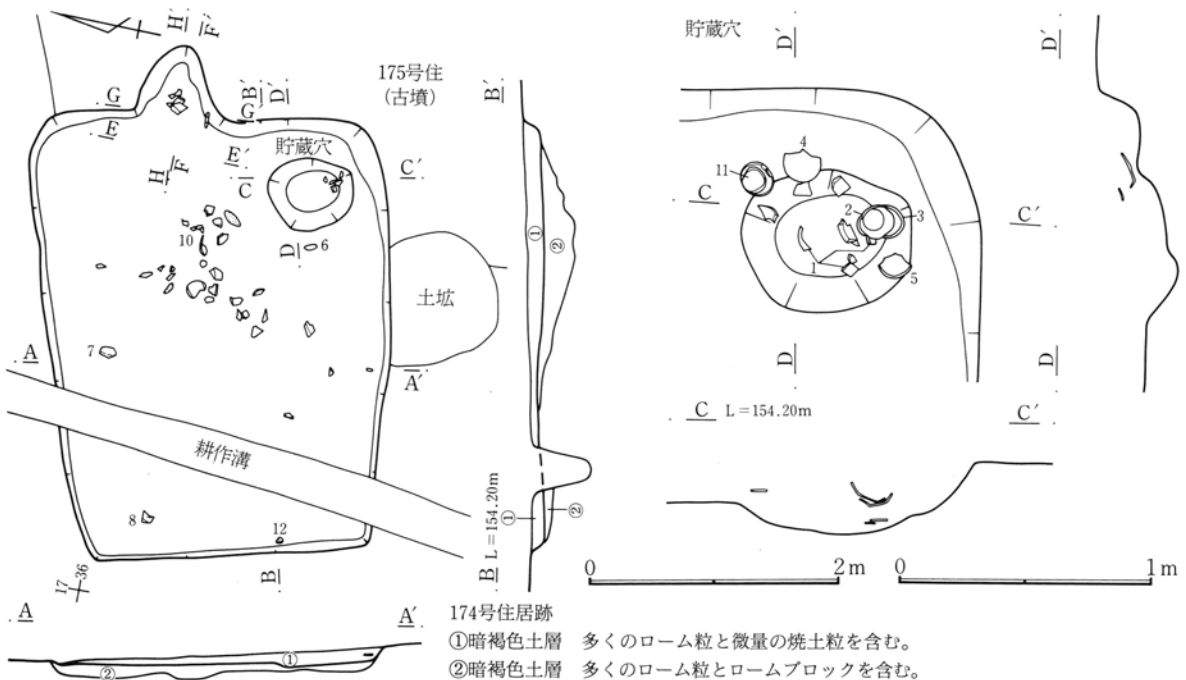
構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は掘られていない。貯蔵穴は竈の右側に掘られているが、浅くて疑問も残る。

規模 東西3.5m、南北2.78mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で16cmである。貯蔵穴は径68cm深さ16cmである。

遺物 貯蔵穴より甕や坏が、また西壁に接して紡錘車が出土している。

(竈)

位置 住居東壁面に造られている。燃焼部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

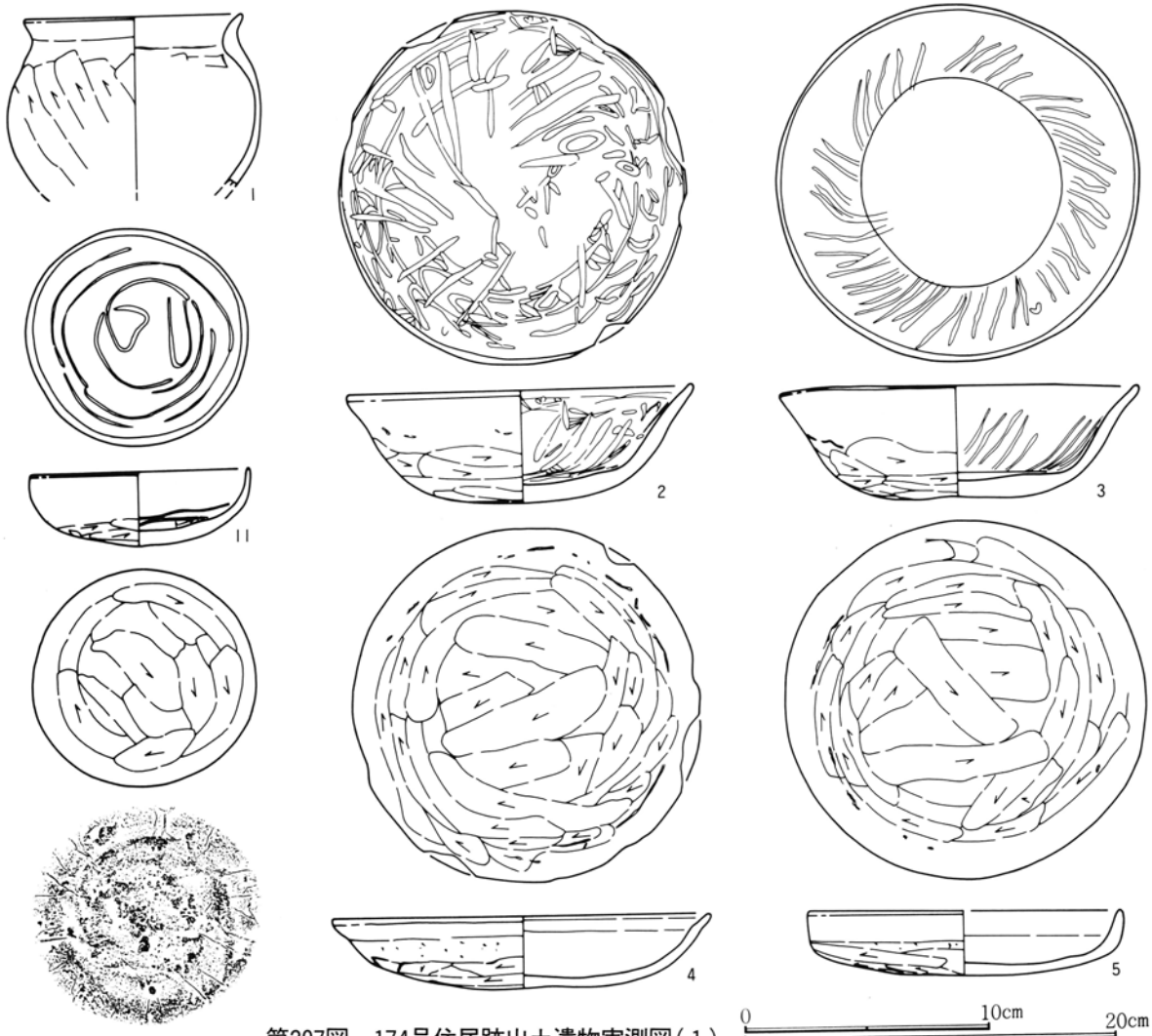
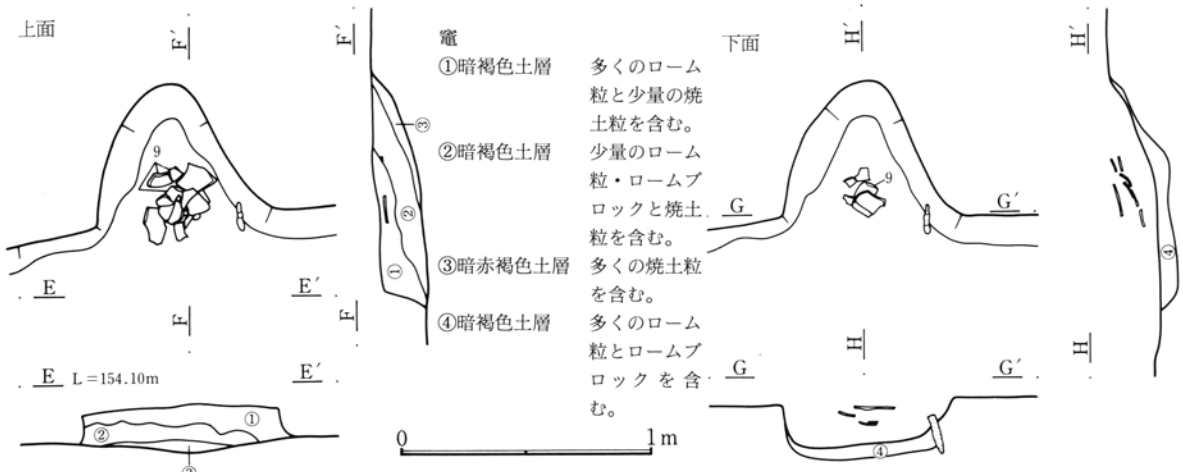


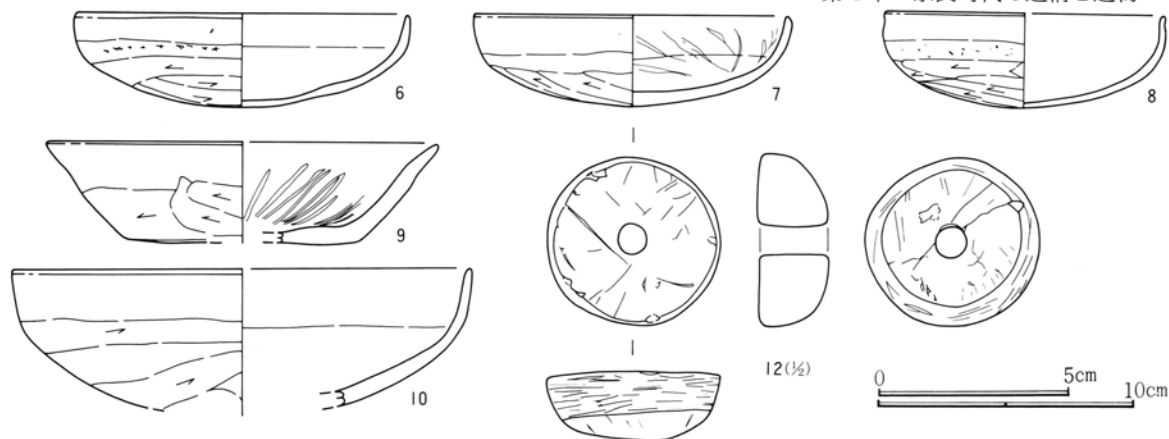
第205図 174号住居跡・貯蔵穴実測図

第4章 奈良時代の遺構と遺物

概要 住居が小さいためか、竈の多くは壁面を掘り込んで造られている。天井石は残っていないが、右の袖石と思われる小さな石が直立した状態で残っている。燃焼部から多くの甕の破片が、また燃焼部下部より多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向58cm、燃焼部幅約56cmである。





第208図 174号住居跡出土遺物実測図(2)

174号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
207-1 90	土 師 器 甕	床面+1 口縁 $\frac{2}{3}$ 胴部 $\frac{1}{3}$	口 11.7 高 — 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	外面ヘラ削りと思われるが、器表面が粗れており不明。 内面ナデにて器表面密。
207-2 90	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 14.0 高 4.5 底 —	①密、1~3mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部外面ヘラナデ。器表面は比較的密である。 内面に幅広い工具で暗文状の文様、文様は表面を浅く掘り込むように描かれている。
207-3 90	土 師 器 坏	床面-1 完形	口 14.6 高 4.5 底 —	①密、1mm以下の砂粒少量含む 赤色粒含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面と体部外面ヘラナデ。 内面磨かれた後に暗文。 内側器表面は光沢を持つ。
207-4 90	土 師 器 皿型坏	床面+3 $\frac{1}{2}$ 残存	口 15.2 高 2.9 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 体部ナデ。 口縁部は短く大きく外傾する。
207-5 90	土 師 器 坏	床面-1 口縁部 $\frac{2}{3}$ 底部 $\frac{1}{2}$	口(12.6) 高 2.6 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭。 体部ナデ。 内面ナデにて器表面密。
208-6 90	土 師 器 坏	床面-10 ほぼ完形	口 13.0 高 3.7 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。
208-7 90	土 師 器 坏	床面-8 $\frac{1}{2}$ 残存	口 12.4 高 3.6 底 —	①密、1mm以下の砂粒を大量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。 内面放射状の文様が描かれている。 暗文とは異なる。
208-8	土 師 器 坏	床面-6 $\frac{1}{2}$ 残存	口(11.0) 高 3.7 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りでササラ状を呈する。 口縁部と底部との間はナデ。
208-9 90	土 師 器 坏	床面+7 口縁部 $\frac{1}{2}$ 弱 底部 $\frac{1}{3}$	口(15.6) 高(4.0) 底(9.2)	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 内面に放射状暗文。
208-10 90	土 師 器 坏	床面-5 口縁部 $\frac{1}{3}$ 底部 $\frac{1}{2}$	口(18.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、砂粒の移動は少ない。 内面ナデにて器表面密。
207-11 90	須 恵 器 坏	床面-3 完形	口 9.0 高 3.0 底 —	①密、1mm以下の黒色粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面ヘラナデ。 口縁部横ナデ。 内側内面に沈線による円形の文様が描かれている。
208-12 117	石 製 品 紡 錘 車	床面-8	径 4.5/3.6 孔径 0.8 厚 1.8 重 59.1		滑石片岩。広面と狭面は磨かれて光沢を持つ。 側面は中砥削りで細い削痕を多く持つ。

176号住居跡 (第209・210図、図版38・90・117)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、38-18・19グリッドに位置する。

概要 北東の壁面部分と竈の部分で古墳時代の245号住居と重複しており、本住居が245号住居の覆土を掘り込んで住居と竈が造られている。また北西の壁面部分で奈良時代の241号住居とわずかに重複している。切り合い部分が少なく新旧関係は明らかでないが、本住居が241号住居より新しいと思われる。南

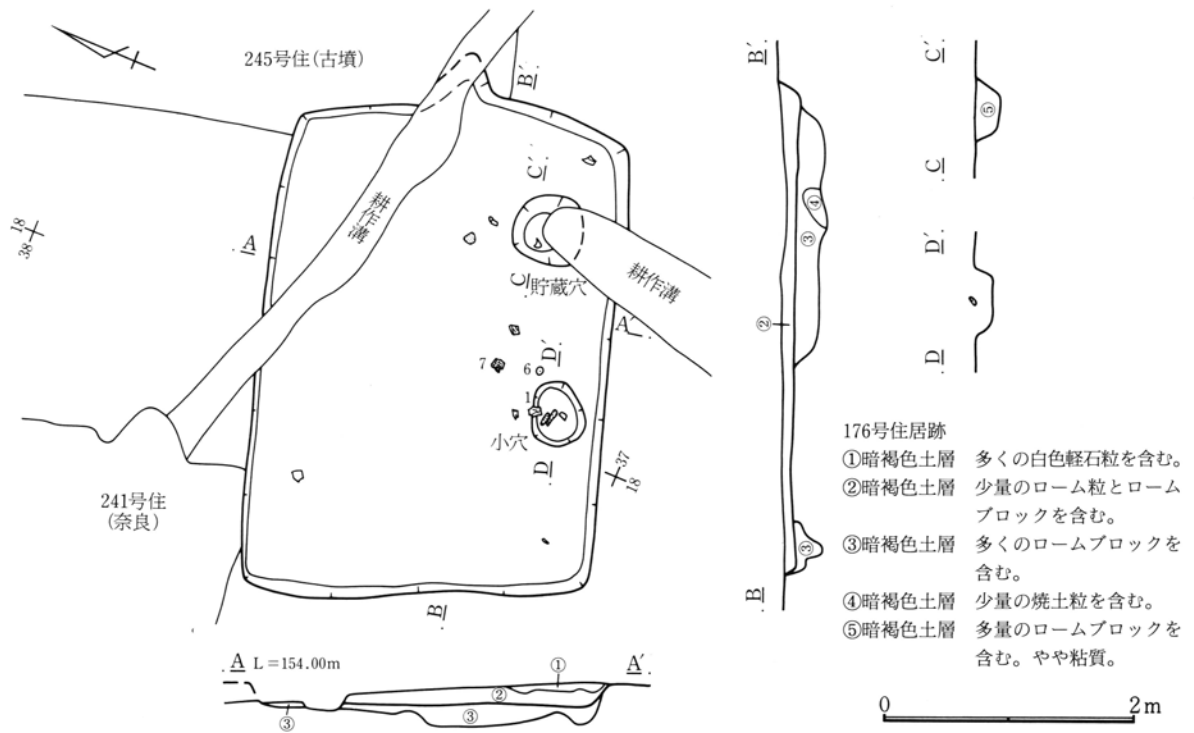
第4章 奈良時代の遺構と遺物

壁面近くに浅い小穴が1本掘られている。竈部分から北西部分にかけてと南東部分を耕作溝により床下部分まで掘り込まれている。竈が東壁面に造られていたが、耕作溝により大部分が削り取られており残りはわずかである。

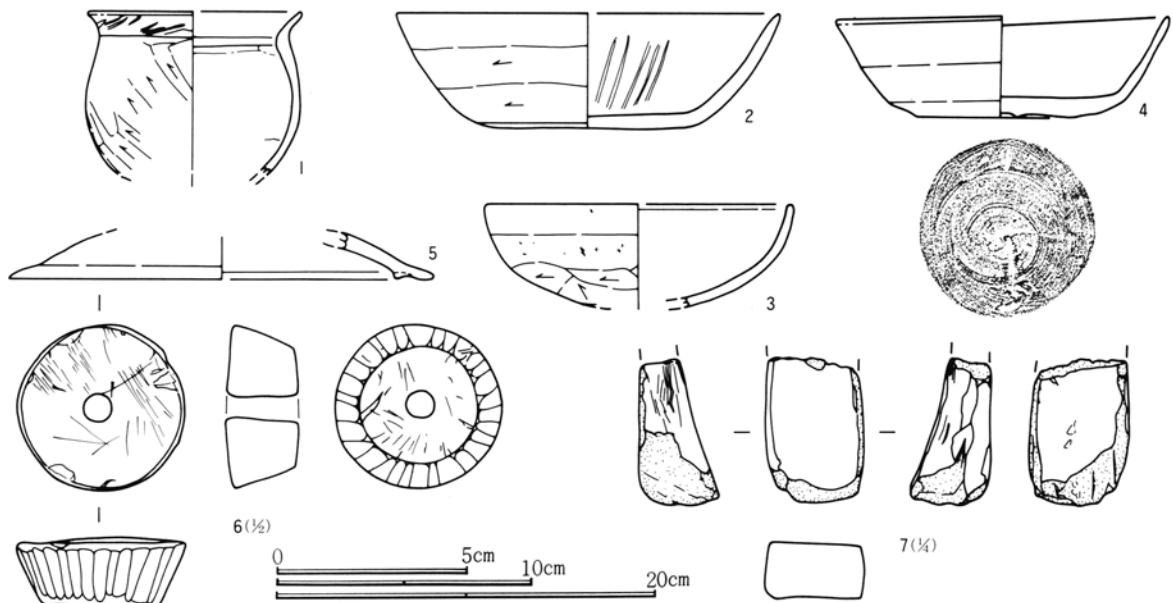
構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は掘られていない。貯蔵穴は竈の右側に掘られているが、浅くて疑問も残る。

規模 東西3.92m、南北2.78mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で18cmである。貯蔵穴は径52cm深さ17cmである。小穴は径51cm深さ15cmである。

遺物 紡錘車と砥石の出土が目される。



第209図 176号住居跡実測図



第210図 176号住居跡出土遺物実測図

176号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
210-1 90	土 師 器 小 型 甕	床面+10 1/3残存	口(11.0) 高 — 底 —	①密、1mm前後の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面へら削り、口縁部にへらの工具痕が多く残る。 内面ナデにて器表面密。 頻繁に使用されていた痕跡を残す。
210-2 90	土 師 器 坏	覆土 口縁部1/3 底部1/2	口(15.0) 高 4.5 底 —	①密、多くの小さな赤色粒を含む ②酸化焰、軟質 ③橙色	底面へら削り。体部へら削り。いずれもへらの単位不明瞭。 胎土がやや粉状を呈する。
210-3	土 師 器 坏	覆土 1/3残存	口(11.0) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面へら削り。体部ナデ。口縁部横ナデ。 内面ナデにより器表面密。 内面やや光沢を持つ。
210-4 90	須 恵 器 坏	覆土 口縁一部欠 他完形	口 13.1 高 4.0 底 7.0	①密、1~2mmの石英粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	底面右回転へら削り。 糸切り痕やへら切り時にできる中央部の凸状部なし。
210-5	須 恵 器 蓋	覆土 破片	口(16.6) 高 — 底 —	①やや粗、2~3mmの片岩粒を含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	摘みの作りはやや雑である。 器表面全体に片岩粒が目立つ。
210-6 117	石 製 品 紡 錘 車	床面+1	径 4.4/3.1 孔径 0.8 厚 1.9 重 56.0		滑石片岩。広面と狭面に中砥削りの痕跡。側面は鉄製 工具により細長く削られ後に全面磨かれ光沢を持つ。
210-7	石 製 品 砥 石	床面直上	長 (7.7) 幅 5.3 厚 3.0 重 203.0		流紋岩。3側面を砥石として使用している。右側面に 鉄製ノミと思われる工具による削痕あり。

179号住居跡 (第211~215図、図版38・39・90・91・92・113・117・121・125・126)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、18・19-28・29グリッドに位置する。

概要 覆土上面の多くを平安時代の135号住居により、また竈煙道部東側を平安時代の134号住居により一部削り取られている。しかし遺構確認面から床面までの深さが60cm前後と深く、竈の残りも非常に良好な住居である。

構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は4本掘られているが、貯蔵穴は掘られていない。柱穴1と柱穴2の外側の南壁面部分に小穴1と小穴2が掘られている。類例が少なく明らかでないが、出入り口に関係するものと思われる。

規模 東西4.57m、南北4.61mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で65cmである。柱穴1は径51cm深さ35cm、柱穴2は径67cm深さ32cm、柱穴3は径69cm深さ63cm、柱穴4は径62cm深さ67cmである。小穴1は径40cm深さ38cm、小穴2は径21cm深さ37cmである。

遺物 竈内より多くの土器や石が、また南壁面付近よりこも編み石が数多く出土している。破片の出土も大量である。

(竈)

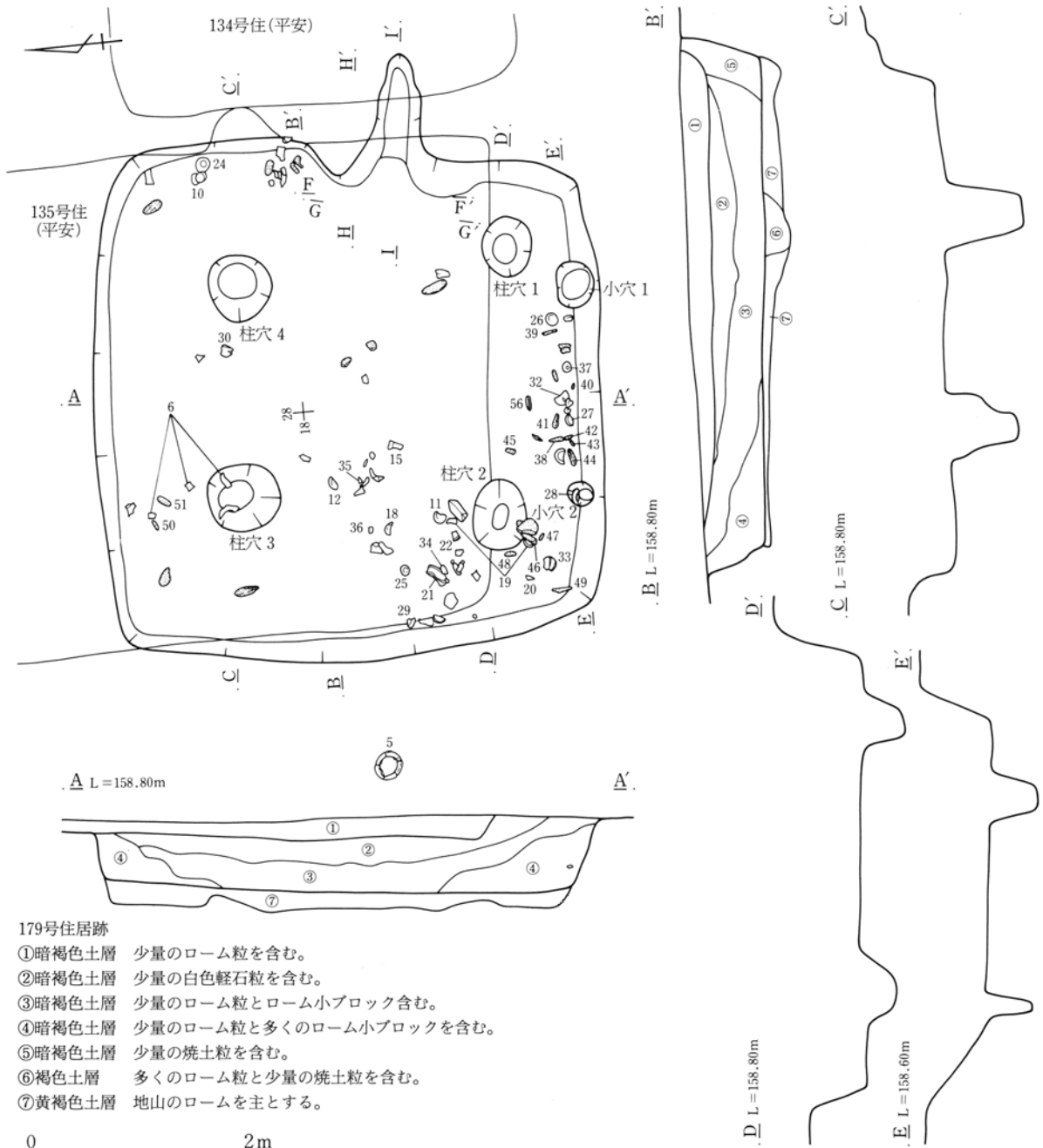
位置 住居東壁面に造られている。燃焼部の一部は壁面を掘り込んでいるが、多くの部分は床面上に造られている。煙道部は壁面を深く掘り込んで造られている。

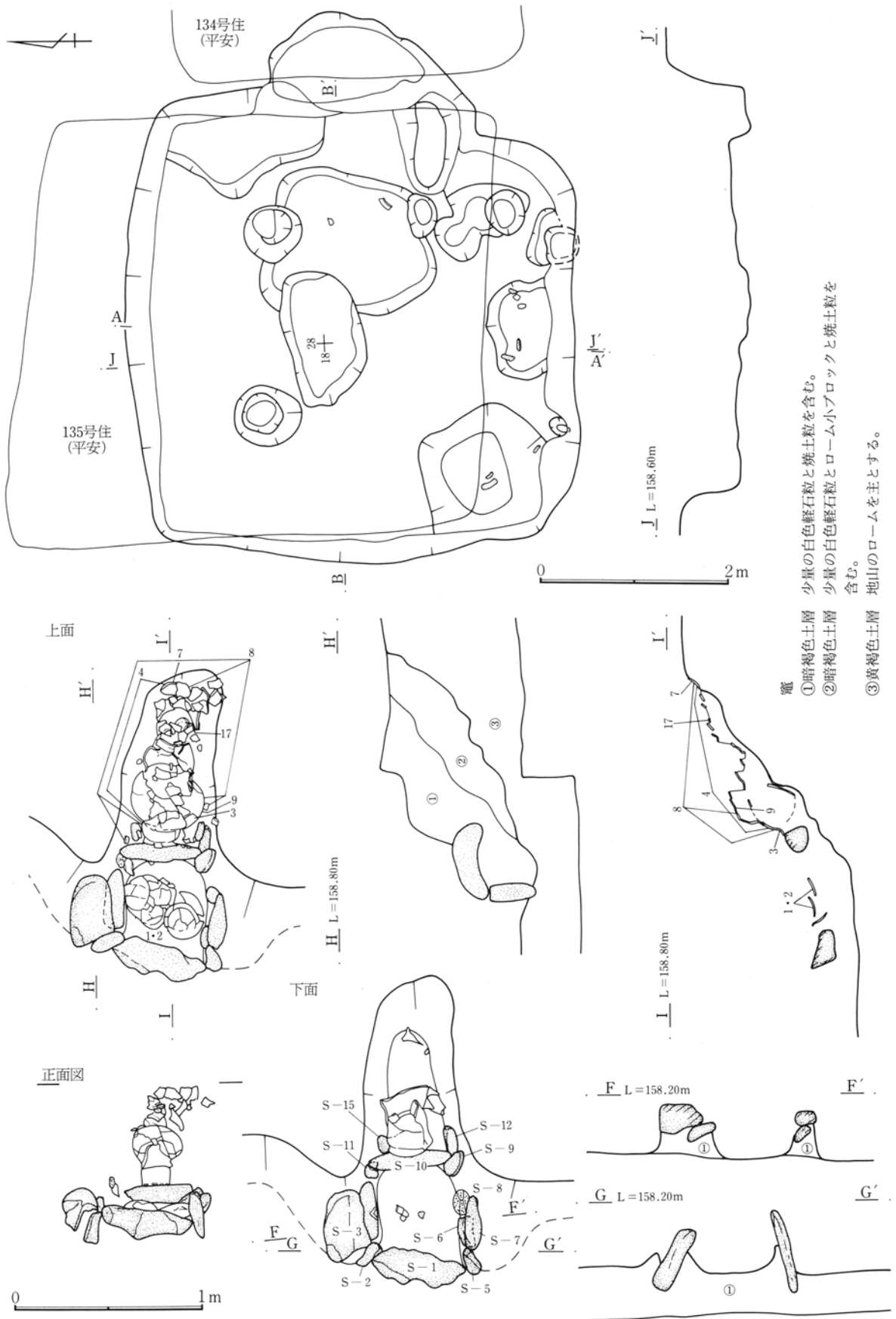
概要 燃焼部や煙道部の構築材や据えられた土器の大部分が良好に残っている。天井石(S-1)は焚口部分に落石していた。袖石は右側に5個(S-5~9)左側に4個(S-2・3・4・11)残っており、落石していた天井石は使用時には、右袖部分でS-5・7の間、左袖部分でS-2・4の間に据えられていたものと思われる。燃焼部と煙道部の境に天井石(S-10)が架けられた状態で残っている。この天井石は右側でS-9・12、左側でS-11・15の間に設置され、前後の石で移動しないように工夫されている。以上の石の他にS-10の下にS-13・14が落ちており、竈内より計15個の石が出土している。石の大きさと使用状況は次のとおりである。S-5は細長く長さ44cmで床面下に約17cmほど埋められている。S-8は長さ×幅が38×44×6cm、S-12は長さ×幅が37×12×4cmで25cmほど埋められて

第4章 奈良時代の遺構と遺物

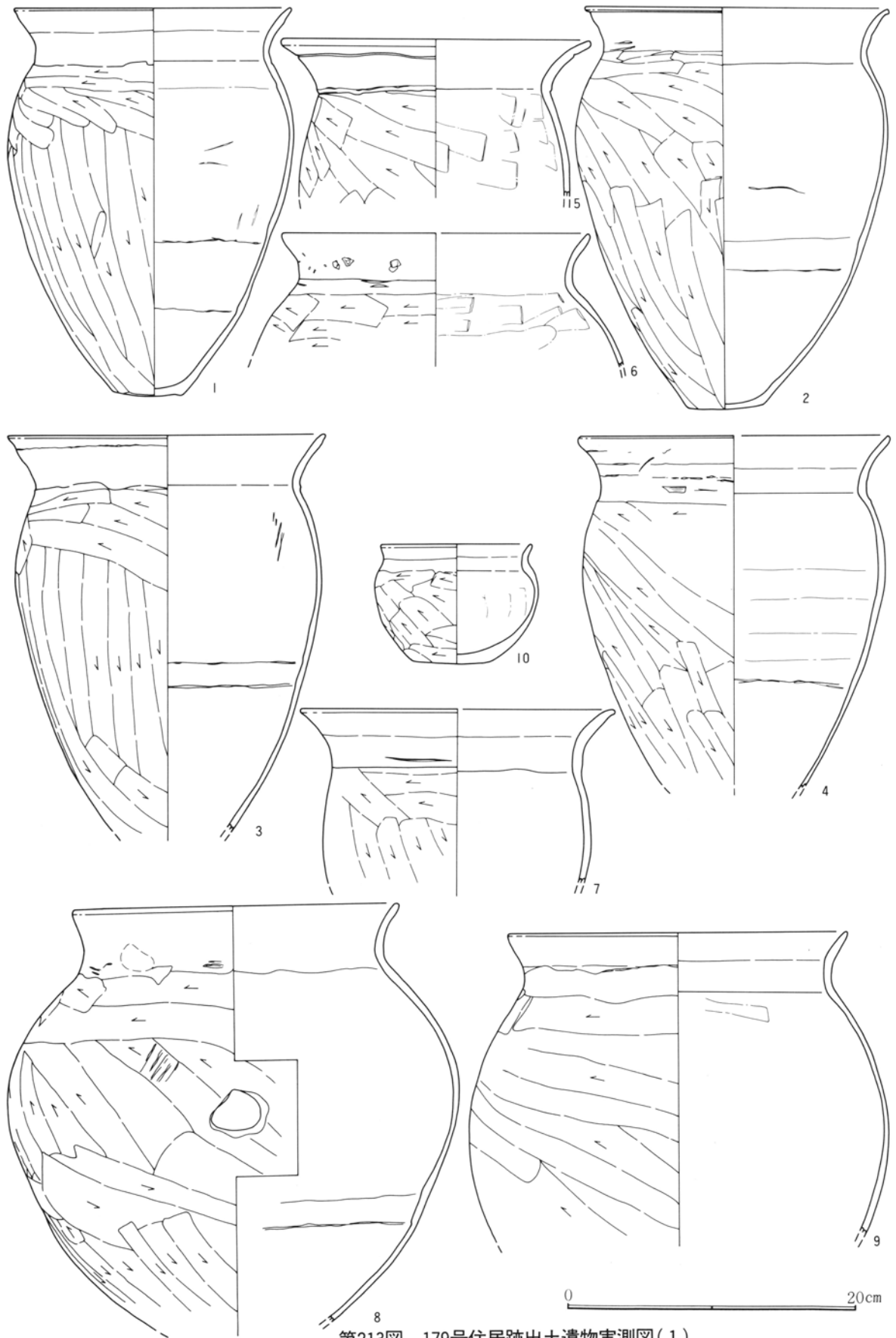
いる。S-11は長さ×幅が35×11×7.5cmで約26cmほど埋められている。S-15は長さ×幅が36×10×4cmで27cmと大部分が埋もれている。このように石で囲まれた燃焼部の中に2個の完形の土師器の甕がやや焚口部分に倒れかけたような状態で出土している。煙道部には燃焼部との境に架けられていた天井石の上に、底部の欠けた甕が口縁部を下にして設置してある。その上に底部の欠けた壺がかぶさるような状態で設置してある。さらにその上に甕そして壺と続けて4個が組み込まれて煙道としている。この残りの良好な竈は、地山のロームを掘り抜いて造ったものではなく、竈を築く予定の壁面のロームを掘り抜いた後に粘性の強い暗褐色土を大量に運び込み、それを地山として掘り込んで石や土器を用いて造られている。

規模 煙道方向153cm、燃焼部幅約43cmである。

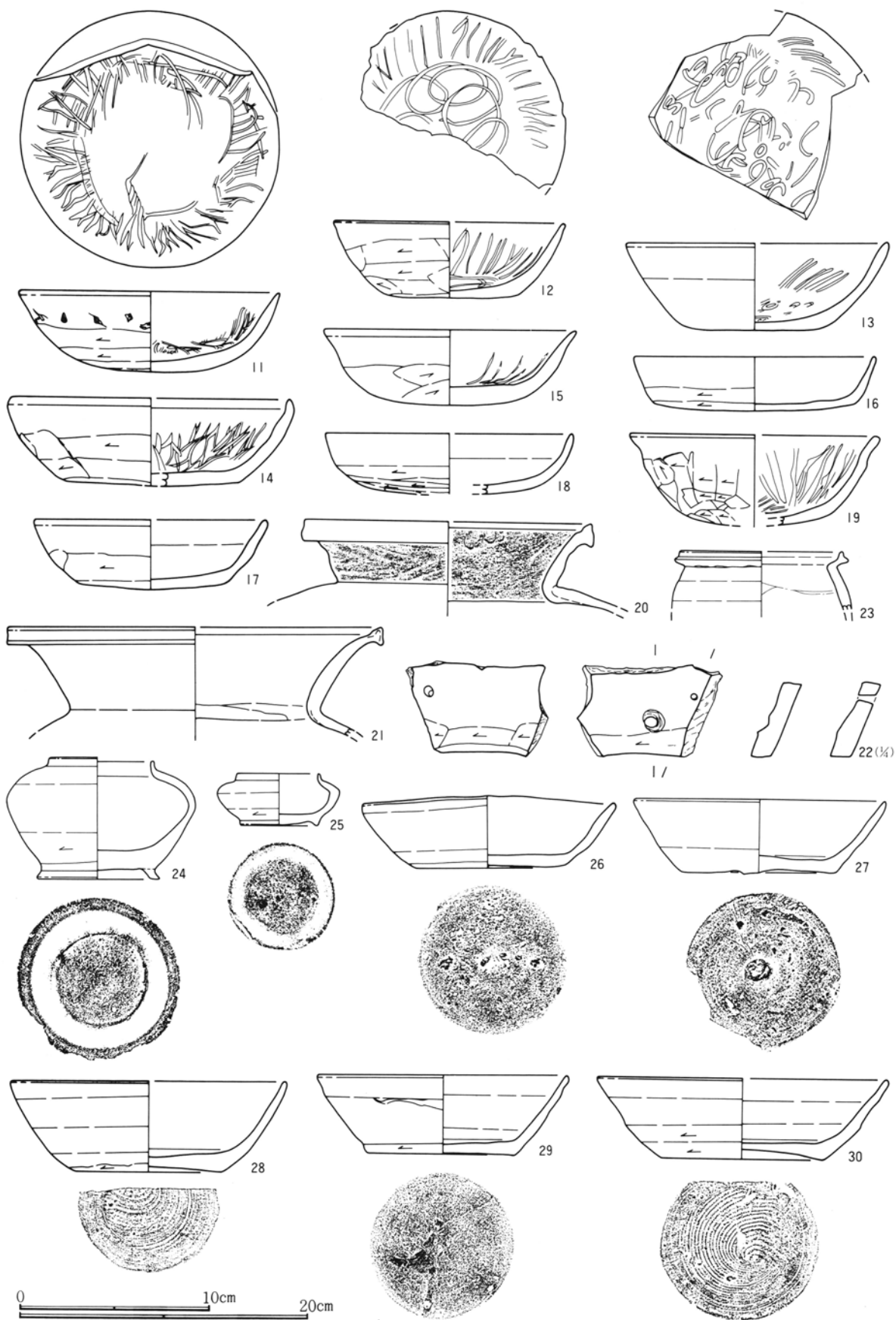




第212図 179号住居跡床下・竈実測図

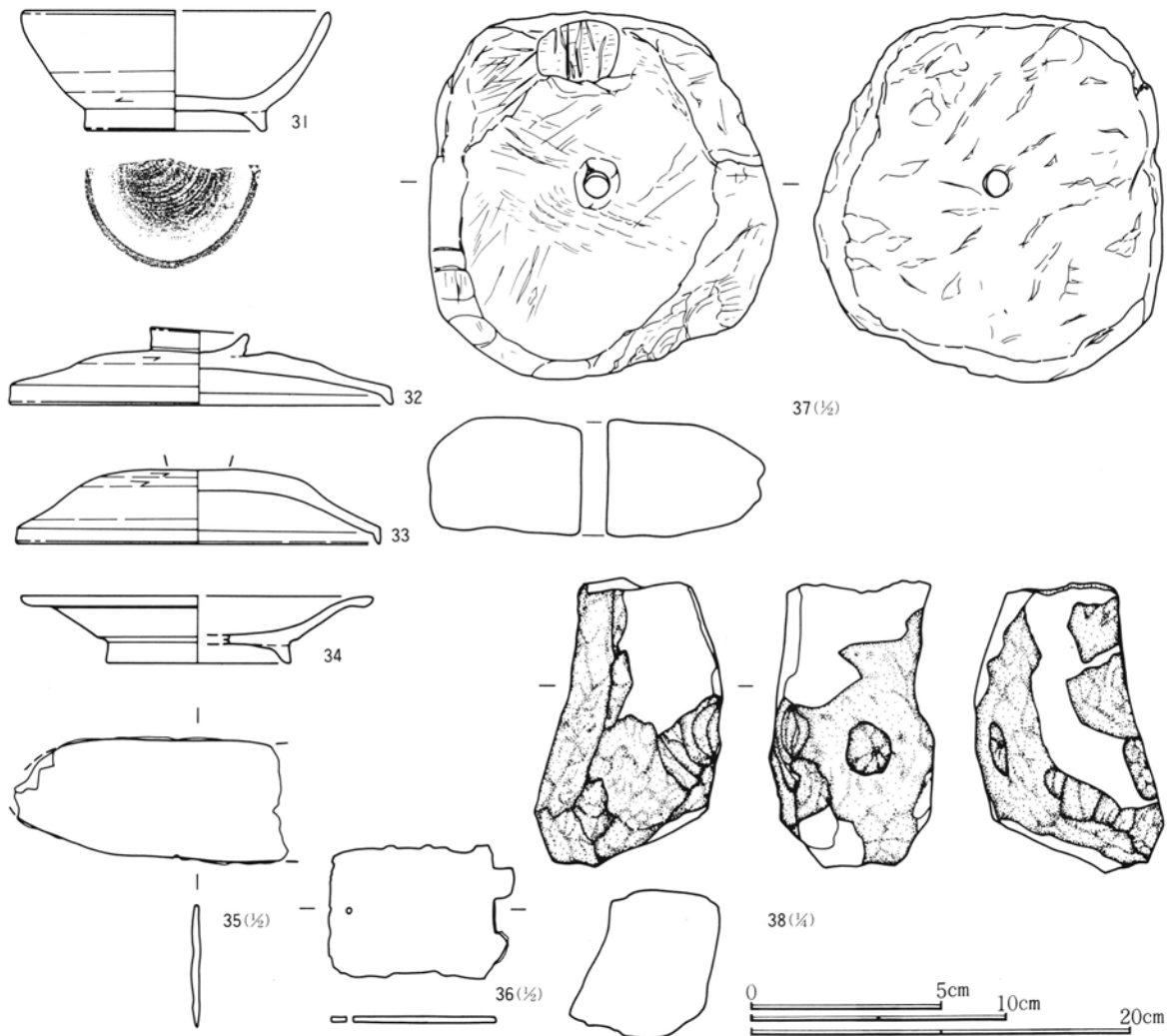


第213図 179号住居跡出土遺物実測図(1)



第214図 179号住居跡出土遺物実測図(2)

第4章 奈良時代の遺構と遺物



第215図 179号住居跡出土遺物実測図(3)

179号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
213-1 90	土師器 甕	竈内 ほぼ完形	口 19.4 高 27.0 底 4.9	①密 ②酸化焰、硬質 ③口縁部赤褐色、胴下半黒褐色	胴部外面へラ削り。内面中央部と下部に肉厚の違いからわずかに段を持つ接合痕あり。 肩部より下に多くの吸炭と粘土の付着あり。
213-2 90	土師器 甕	竈内 ほぼ完形	口 21.1 高 28.2 底 5.2	①密 ②酸化焰、硬質 ③口縁～内面に ぶい赤褐色、胴外面暗赤灰色	底面と胴部外面へラ削り。 胴部内面の中央付近に明瞭な接合痕。
213-3 91	土師器 甕	竈内 口縁～胴下 部 $\frac{2}{3}$	口 22.0 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多 く含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面へラ削り。口縁部横ナデ。 器肉全体が薄い。胴部内側中央部付近に接合痕。 黒斑ほとんど認められず。
213-4 91	土師器 甕	竈内 口縁部 $\frac{1}{3}$ 胴部 $\frac{2}{3}$	口(22.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多 く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
213-5 90	土師器 甕	床面+33 口縁部 $\frac{1}{4}$ 胴部 $\frac{2}{3}$	口 21.7 高 — 底 —	①密、1～2mmの赤色粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色、一部黒褐色	胴部外面へラ削り。 口縁部との境に大きな段を持つ。 口縁部中央に一本の沈線あり。
213-6	土師器 甕	床面+5 $\frac{1}{3}$ 残存	口(21.6) 高 — 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へラ削り。 内面ナデにて器表面密。 器肉が全体に薄い。
213-7	土師器 甕	竈内 口縁部 $\frac{1}{5}$	口(21.8) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を含 む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面へラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。

179号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
213-8 91	土器 甕	床面+27 底部欠損	口 22.7 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部ヘラ削り。 口縁部横ナデ。内面ナデ。 胴下部に接合痕あり。
213-9 91	土器 甕	床面+9 口縁部完形 胴上部 $\frac{1}{3}$	口 23.6 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。口縁部に輪積痕が残る。内面ナデにて器表面密。 口縁部が「コ」の字状になっている。
213-10 91	土器 小型甕	床面+21 完形	口 10.5 高 8.3 底 5.0	①やや粗、1mm前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色、一部暗赤灰色	底面と胴部外面ヘラ削り。内面上半・外面乱雑に吸炭による暗赤灰色を呈している。 多く火に架けられて使用されている。
214-11 90	土器 坏	床面+9 $\frac{1}{2}$ 残存	口 13.4 高 4.1 底 —	①やや粗、2~3mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面~体部外面ヘラ削り。 内面に乱雑な暗文。
214-12 90	土器 坏	床面+9 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.0) 高 3.9 底 —	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 内面に放射状及び螺旋状の暗文。
214-13	土器 坏	覆土 口縁部 $\frac{1}{4}$ 底部 $\frac{1}{5}$	口(13.5) 高 — 底 —	①密、1~2mmの砂粒を少量含む ②酸化焰、軟質 ③橙色	底面と体部ヘラ削り。 内側口縁部と体部に放射状暗文。 底面は螺旋状暗文と思われるが不明瞭。
214-14 91	土器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(14.4) 高 — 底(8.8)	①密、2~3mmの赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面にやや格子状の暗文が繁雑に描かれている。
214-15 91	土器 坏	床面+5 $\frac{3}{4}$ 残存	口 13.0 高 3.9 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面と胴下半がヘラ削りにより器表面が粗れている。 内面に暗文あり。
214-16 91	土器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口 12.5 高 2.9 底 10.4	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面は丸味を持つが、ほぼ平らである。 ていねいなヘラ削りが行なわれている。
214-17 91	土器 坏	竈内 $\frac{1}{2}$ 残存	口(11.8) 高 3.6 底 7.6	①やや粗、2~3mmの赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部ヘラ削り。 内面に暗文は確認されない。
214-18	土器 坏	床面+2 $\frac{1}{3}$ 残存	口(12.8) 高 — 底 —	①密、少量の角閃石を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 内面ナデにて器表面密。 黒斑認められず。
214-19	土器 坏	床面+15 口縁部 $\frac{1}{6}$ 体部 $\frac{1}{4}$	口(12.6) 高 — 底 —	①密、1mm以上の砂粒含まず ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄褐色	底面と体部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面に幅広の雑な暗文。 外面の削りは雑で、出土例の少ない坏である。
214-20	須恵器 甕	床面+4 口縁のみ	口(20.0) 高 — 底 —	①やや粗、1~2mmの片岩粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	胴部内面青海波紋。 外面に平行叩目が残る。
214-21	須恵器 甕	床面+4 口縁のみ	口(26.0) 高 — 底 —	①密、少量の片岩粒を含む ②還元焰、硬質 ③灰色	口唇部は厚く仕上げられている。 口縁部内外面に自然釉が付着している。
214-22	須恵器 甕	床面+20 底部小片	口 — 高 — 底 —	①密、砂粒はほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③外面灰色、内面にぶい橙色	胴部下端の内外面ヘラ削り。 内面に凹状部と、穿孔された小穴が1箇所あり。
214-23	須恵器 小型壺?	覆土 口縁破片	口(11.3) 高 — 底 —	①密、小さな雲母粒を含む ②還元焰、硬質 ③灰色	胴部内外面横ナデ。
214-24 91	須恵器 短頸壺	床面+28 完形	口 7.2 高 8.4 底 8.4	①密、2×6mmの長石粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面回転ナデ。 高台はていねいに貼り付けてある。 体部下半ヘラ削り。口縁部短く、口唇部水平。
214-25 91	須恵器 短頸壺	床面-1 完形	口 5.8 高 3.6 底 5.2	①密、1mm前後の長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰黄色	底面回転ナデ。高台はつまみ出して付けられている。 体部下半ヘラ削り。 口縁部は短く、口唇部は一部水平。
214-26 91	須恵器 坏	床面+10 完形	口 12.9 高 3.8 底 7.6	①密、2~4mmの長石粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面ヘラ切り後ナデ。 内面降灰による灰白色の自然釉が大量に付着。 全体にゆがんでいる。
214-27 91	須恵器 坏	床面+16 $\frac{3}{5}$ 残存	口 13.1 高 3.8 底 8.0	①密、1~2mmの長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面ヘラ切り。 中央部に凸状の突起あり。 口縁部に凸状の明瞭なロクロ痕なし。

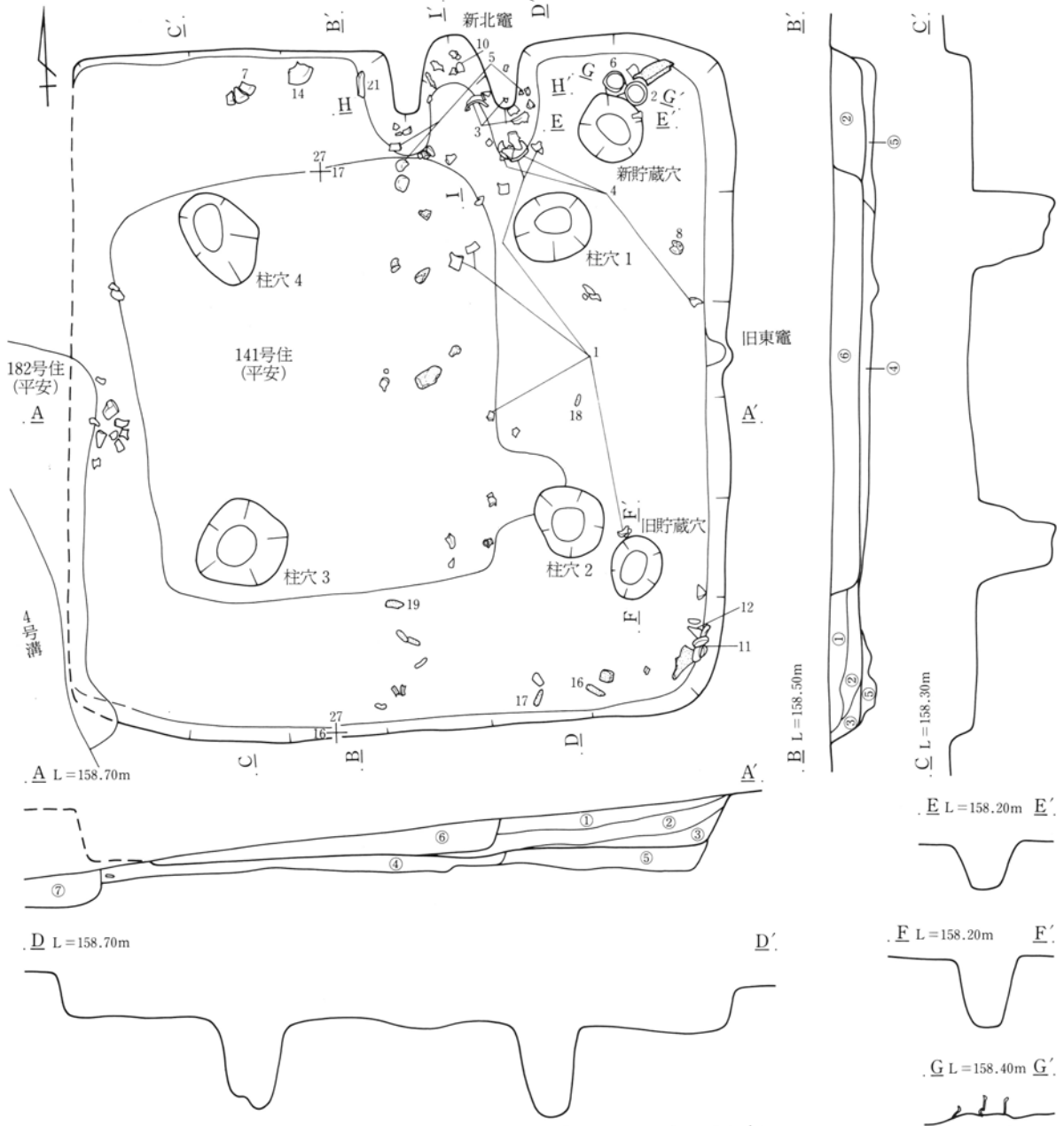
第4章 奈良時代の遺構と遺物
179号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考		
214-28 91	須恵器 坏	床面+12 1/2残存	口(14.0) 高 4.7 底 7.2	①密、1mm前後の石英粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰白色	底面右回転糸切り後周辺部右回転ヘラ削り。 体部下端ヘラ削り。ロクロ痕少ない。 少量の片岩粒を含む。		
214-29 91	須恵器 坏	床面+5 3/4残存	口 12.8 高 4.1 底 7.4	①密、1mm以下の小さな白色粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	底面糸切り後右回転ヘラ削り。 体部下端ヘラ削り。 体部外側重焼時に他の坏の口縁部破片付着。		
214-30 91	須恵器 坏	床面+6 1/2残存	口(14.8) 高 4.2 底 8.2	①密、1mm以下の石英粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰白色	底面右回転糸切り後周辺部右回転ヘラ削り。 体部下半2段の右回転ヘラ削り。 底部中央の器肉が薄い。		
215-31 92	須恵器 壺	床面+10 1/3残存	口(11.8) 高 4.7 底 6.8	①密、1mm以下の石英粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰白色	底面中央右回転糸切り痕。 高台部はていねいに貼り付いて整形されている。		
215-32 92	須恵器 蓋	床面+9 ほぼ完形	口 14.8 高 — 底 —	①密、2~3mmの長石粒と片岩粒を少量含む。②還元焰、硬質 ③灰白色	天井部ヘラ削り、摘みはリング状でやや長い。 口縁部は鶴首状。 やや雑な感じの蓋である。		
215-33 92	須恵器 蓋	床面+4 ほぼ完形	口 14.2 高 — 底 —	①密、1mm以下の石英粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰白色	天井部ヘラ削り、摘みははずれており貼り付けた痕跡がわずかに残る。口縁部は鶴首状。 器表面が粗れている。		
215-34	須恵器 高台付皿	床面+24 1/3残存	口(13.6) 高 2.6 底 (7.2)	①密、少量の白色粒を含む ②還元焰、硬質 ③灰色	高台部内側糸切り痕。 口縁部は大きく外反し、玉縁状をなしている。		
215-35 113	鉄製品 鎌	床面+31	長 (7.0) 幅 3.2 厚 0.2 重 14.9		鎌の先端部と思われる。 錆化が進行し残りが悪い。		
215-36 113	鉄製品 飾金具	床面-3	長 4.9 幅 3.5 厚 1.5 重 10.4		名称及び用途不明。1箇所穿孔されている。 右側面に2個の小さな凸帯あり。		
215-37 117	石製品	床面-52	長 9.7 幅 9.1 孔径 0.7 重 479.0	紡錘車 未製品か?	滑石片岩。偏平な片岩の中央に紡錘車とほぼ同じ径の穴が穿孔。縁辺や側面にノミの削跡や荒砥削り痕。		
215-38 121	石製品 砥石	床面+30	長 15.0 幅 9.0 厚 7.5 重 1270.0		3側面を砥石として使用されていた。 破損後転用されたためか砥石面の多くが欠けている。		
遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)				石材・備考
39	125	こも編み石	長 12.3	幅 3.7	厚 2.5	重 210	緑簾緑泥片岩
40	125	こも編み石	長 13.2	幅 5.5	厚 1.5	重 175	点紋石墨絹雲母片岩
41	125	こも編み石	長 11.6	幅 4.7	厚 3.6	重 285	点紋緑泥片岩
42	125	こも編み石	長 13.7	幅 3.8	厚 1.6	重 160	石墨緑泥片岩
43	125	こも編み石	長 14.6	幅 4.4	厚 2.9	重 315	緑簾緑泥片岩
44	125	こも編み石	長 17.6	幅 5.9	厚 3.0	重 550	緑簾緑泥片岩
45	125	こも編み石	長 14.1	幅 5.6	厚 3.0	重 375	緑簾緑泥片岩
46	125	こも編み石	長 16.5	幅 5.2	厚 2.3	重 265	緑簾緑泥片岩
47	125	こも編み石	長 15.6	幅 4.3	厚 2.5	重 250	緑簾緑泥片岩
48	125	こも編み石	長 11.1	幅 4.2	厚 2.5	重 190	緑簾緑泥片岩
49	125	こも編み石	長 19.1	幅 5.2	厚 3.0	重 415	緑簾緑泥片岩
50	125	こも編み石	長 10.0	幅 4.5	厚 3.0	重 235	緑簾緑泥片岩
51	125	こも編み石	長 11.6	幅 5.0	厚 1.4	重 135	絹雲母石墨片岩
52	126	こも編み石	長 14.5	幅 7.0	厚 3.0	重 410	点紋絹雲母石墨片岩、両側面一箇所凹状
53	126	こも編み石	長 13.2	幅 3.7	厚 2.2	重 190	緑泥片岩
54	126	こも編み石	長 16.2	幅 7.2	厚 2.2	重 360	絹雲母石墨片岩
55	126	こも編み石	長 10.5	幅 5.0	厚 2.3	重 205	緑簾緑泥片岩
56	126	こも編み石	長 14.1	幅 4.4	厚 3.7	重 340	点紋絹雲母緑泥片岩
57	126	こも編み石	長 11.5	幅 4.0	厚 1.2	重 95	絹雲母石墨片岩
58	126	こも編み石	長 13.9	幅 3.8	厚 2.5	重 235	緑簾緑泥片岩
59	126	こも編み石	長 10.6	幅 4.6	厚 1.3	重 100	絹雲母石墨片岩
60	126	こも編み石	長 14.2	幅 4.3	厚 4.0	重 370	緑簾緑泥片岩
61	126	こも編み石	長 11.3	幅 5.0	厚 1.7	重 130	緑簾緑泥片岩
62	126	こも編み石	長 17.6	幅 5.3	厚 2.2	重 325	絹雲母石墨片岩
63	126	こも編み石	長 16.1	幅 5.4	厚 1.8	重 225	点紋絹雲母石墨片岩

180号住居跡 (第216~220図、図版40・92・126)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、17-27・28グリッドに位置する。

概要 西側の低くなるなだらかな傾斜面に位置し、東側部分の残りは良好であるが低い西側部分の壁面は残っていない。住居中央部を平安時代の141号住居により、床面部分まで掘り込まれている。また南西部分で平安時代の182号住居と重複しており、その部分の壁面と床面が削り取られている。南西コーナー部分には風倒木跡があり、壁面の検出が困難であった。新貯蔵穴の北に壺とともに甕の口縁部が置かれており、そのとなりに竈の天井石と思われる石が置かれてある。竈は旧東竈と新北竈があるが、旧東竈は大部分が取り壊されており、煙道部として削られた壁面に、僅かな焼土粒とともに痕跡を残



180号住居跡

- ①暗褐色土層 少量のローム粒と白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量のローム粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒を含む。

- ④褐色土層 多くのロームブロックを含む。
- ⑤褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑥141号住居跡覆土
- ⑦182号住居跡覆土

第216図 180号住居跡実測図

0 2m

第4章 奈良時代の遺構と遺物

す程度しか残っていない。

構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は4本掘られており、貯蔵穴は新旧の竈の右側に掘られている。

規模 東西5.94m、南北6.19mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で54cmである。柱穴1は径62cm深さ83cm、柱穴2は径60cm深さ76cm、柱穴3は径72cm深さ88cm、柱穴4は径58cm深さ90cmである。新貯蔵穴は径60cm深さ50cm、旧貯蔵穴は径48cm深さ59cmである。

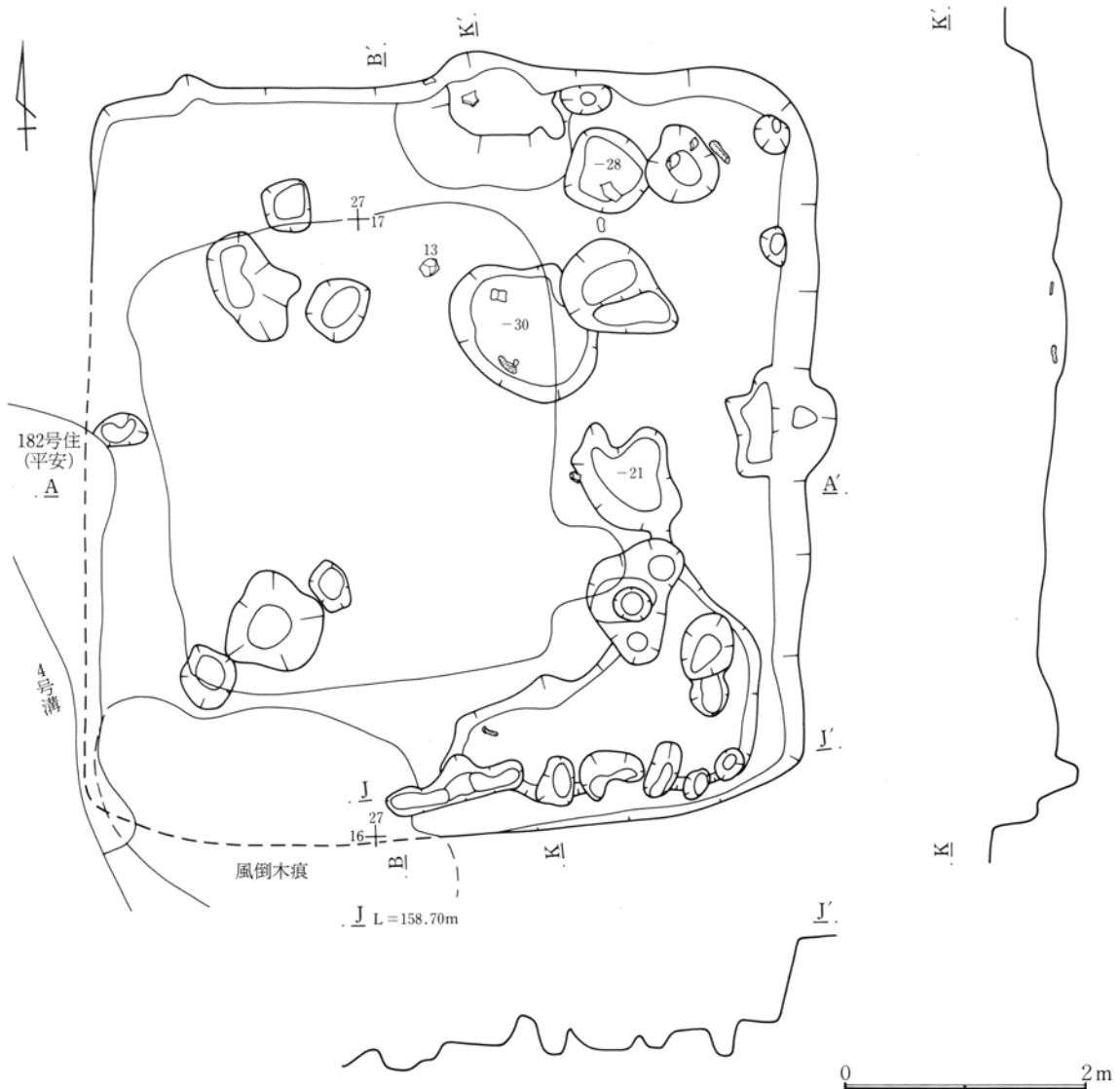
遺物 竈内と新貯蔵穴周辺より多くの甕や坏が出土している。

(新北竈)

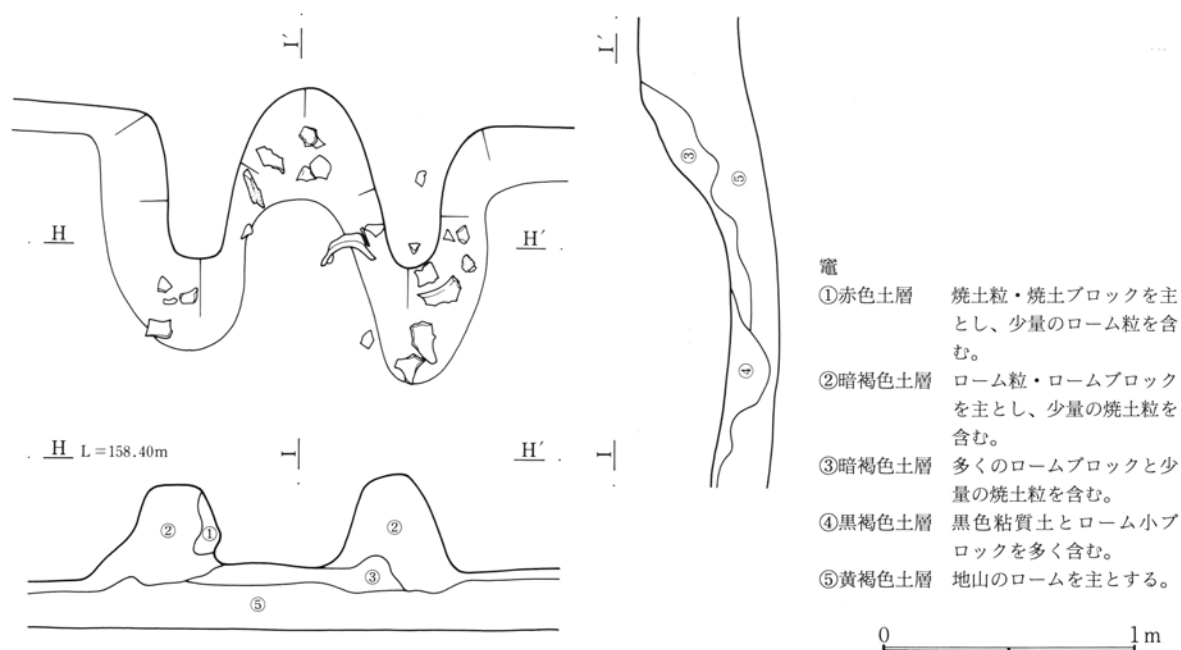
位置 住居北壁面に造られている。燃烧部の一部は壁面を掘り込んでいるが、多くの部分は床面上に造られている。

概要 両袖部分が残っているが、袖石はなく天井石は貯蔵穴の近くに置かれていた。遺物の出土も少なく全体的に残りは良好でない。

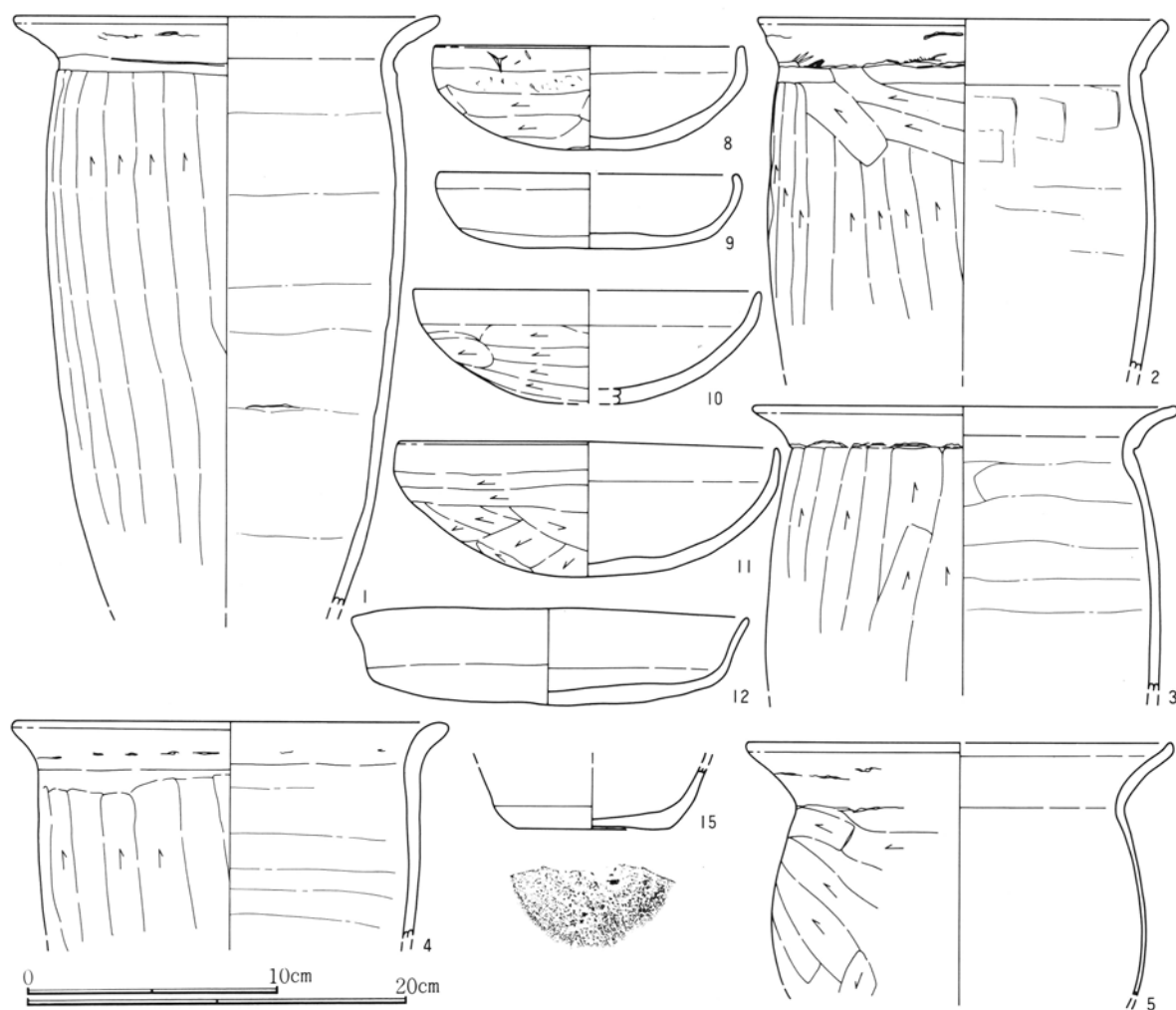
規模 煙道方向103cm、燃烧部幅約54cmである。



第217図 180号住居跡床下実測図

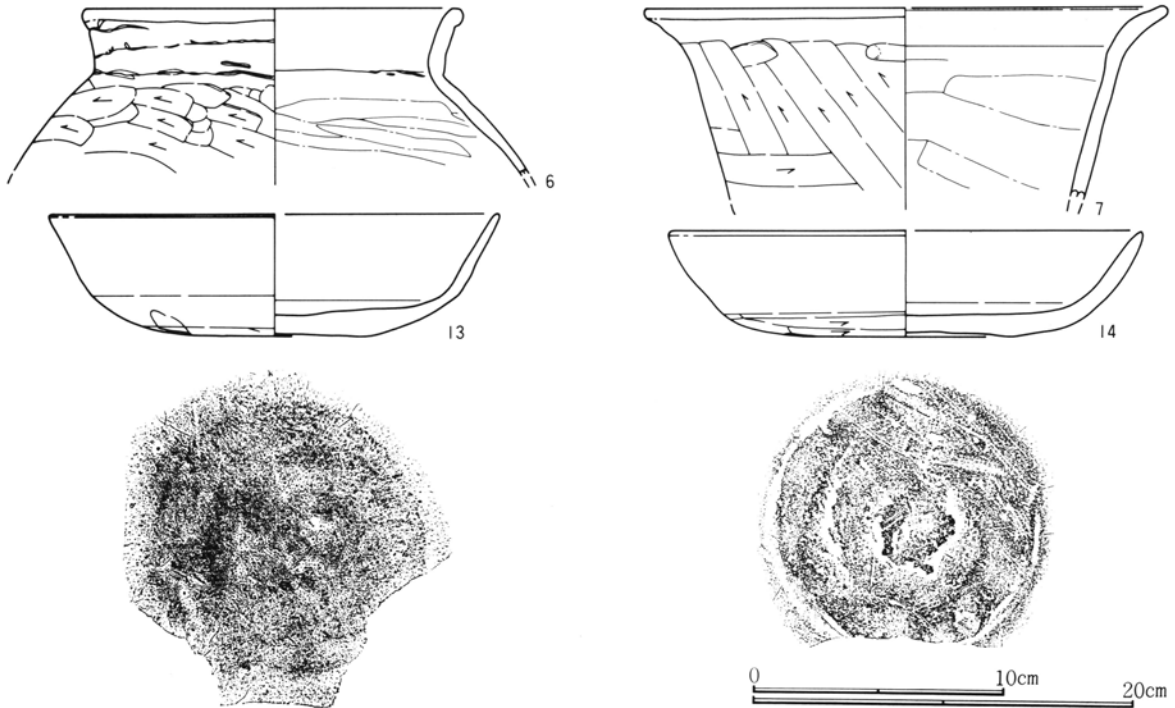


第218図 180号住居跡竈実測図



第219図 180号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 奈良時代の遺構と遺物



第220図 180号住居跡出土遺物実測図(2)

180号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
219-1 92	土 師 器 甕	床面+3 口縁~ 胴下半 $\frac{1}{2}$	口 22.4 高 — 底 —	①密、1mm前後の砂粒と赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラナデ、砂粒の移動は少ない。 口縁部横ナデ、輪積痕が残る。 内面ナデ。
219-2 92	土 師 器 甕	床面+7 口縁部完形 胴上部 $\frac{1}{2}$	口 21.8 高 — 底 —	①やや粗、2~3mmの砂粒と片岩粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面強いヘラ削り、削りの単位は明瞭である。胴部と口縁部との境に段を持つ。
219-3 92	土 師 器 甕	床面+32 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{4}$	口 22.5 高 — 底 —	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③明橙色	胴部外面強いヘラ削り、口縁部との境に段を持つ。 内面ナデにて器表面密。
219-4 92	土 師 器 甕	床面+15 $\frac{1}{2}$ 残存	口 22.4 高 — 底 —	①密、2~4mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色、一部黒褐色	胴部外面ヘラナデ、砂粒の移動少なく器表面の粗れ少ない。 口縁部の器肉が厚い。
219-5 92	土 師 器 甕	床面+4 口~胴部 $\frac{1}{2}$	口(22.6) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 口縁部に輪積痕が残る。
220-6 92	土 師 器 壺	床面+7 口縁部完形 肩部 $\frac{1}{2}$	口 20.2 高 — 底 —	①密、1mm前後の砂粒を多く、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り。口縁部に接合痕。 内面ナデにて器表面密。 固くしっかりした作りである。
220-7	土 師 器 甕	床面+16 口~胴上 $\frac{1}{4}$	口(27.6) 高 — 底 —	①やや粗、2~3mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。 内面ヘラナデ。 全体に少しゆがんでいる。
219-8 92	土 師 器 坏	床面+4 $\frac{1}{2}$ 残存	口 12.2 高 4.0 底 —	①密、1mm以下の小さな雲母粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、ヘラの単位は明瞭でない。 内面ナデにて器表面密。
219-9	土 師 器 坏	覆土 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部 $\frac{1}{4}$	口(12.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③明褐色	底面ヘラ削り、ヘラ削りの単位は不明瞭である。
219-10	土 師 器 坏	床面+22 口~底部 $\frac{1}{4}$	口(13.8) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面ヘラ削り、砂粒の移動はほとんどないが削りにより器表面がササラ状を呈する。
219-11 92	土 師 器 坏	床面+2 口縁一部欠 他完形	口 15.2 高 5.4 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く、角閃石を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面数多いいねいなヘラ削り、削りの単位は明瞭でない。内面ナデにて器表面密。 黒斑全く認められず。

180号住居跡出土遺物観察表

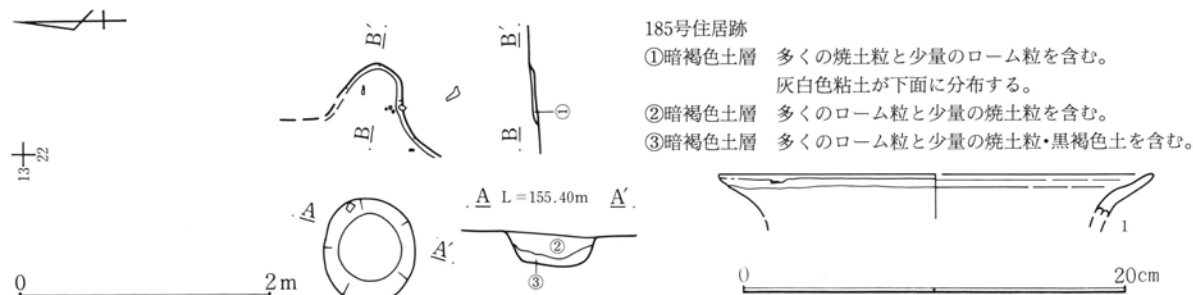
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
219-12 92	土師器 坏	床面+2 ほぼ完形	口 15.8 高 3.8 底 -	①密、1mm以下の砂粒を多く、角閃石を少量含む。②酸化焰、硬質 ③におい橙色	底面ヘラ削りと思われるが器表面が粗れており整形方法不明。 内面ナデにて器表面密。
220-13 92	須恵器 坏	床面-19 1/2残存	口(17.6) 高 4.8 底 9.6	①密 ②還元焰、硬質、焼締 ③褐灰色	底面ナデ整形であるがヘラの痕跡が残る。 内側底面乱雑なナデ。
220-14 92	須恵器 坏	床面+22 口縁部1/3 底部1/3	口(18.8) 高 4.2 底 11.6	①やや粗、1~3mmの砂粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	底面ヘラ切り後手持ヘラ削り。 内側底面使用により磨耗している。 3~5mmの長石粒や片岩粒もわずかに含む。
219-15	須恵器 坏	掘り方 口縁~底1/2	口 - 高 - 底 (6.0)	①やや粗、1~3mmの片岩粒を少量含む。②還元焰、硬質 ③灰色	底面ヘラ切り後わずかにナデ整形。 底部中央の器肉が薄くなっている。
遺物番号	図版番号	器種	法	量(cm)(g)	石 材 ・ 備 考
16	126	こも編み石	長 19.2 幅 5.7 厚 4.7 重 680		絹雲母石墨片岩
17	126	こも編み石	長 13.3 幅 4.5 厚 3.1 重 225		緑簾緑泥片岩 両側面に打ち欠いた凹状
18	126	こも編み石	長 14.0 幅 5.3 厚 2.5 重 265		石墨緑泥片岩
19	126	こも編み石	長 13.4 幅 5.6 厚 3.0 重 320		絹雲母石墨片岩
20	126	こも編み石	長 16.2 幅 5.6 厚 2.9 重 390		点紋絹雲母石墨片岩
21	126	こも編み石	長 11.2 幅 4.0 厚 3.3 重 210		絹雲母石墨片岩
22	126	こも編み石	長 14.4 幅 5.6 厚 5.7 重 210		絹雲母石墨片岩
23	126	こも編み石	長 10.4 幅 5.7 厚 3.6 重 275		点紋絹雲母石墨片岩

185号住居跡 (第221図、図版40)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、13-22グリッドに位置する。

概要 西側の低くなるなどらかな傾斜面に位置し、住居の大部分は削られて竈の痕跡と竈手前の土坑しか残っていない。残っていた竈の下部分から多くの焼土粒が出土している。

遺物 破片を含め、総数5片である。



第221図 185号住居跡・出土遺物実測図

185号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
221-1	土師器 甕	床面+2 口縁破片	口(22.8) 高 - 底 -	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	口縁部横ナデ。 内外両面に一条の沈線あり。

187号住居跡 (第222~225図、図版40・41・93・113・117・126)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、17-32グリッドに位置する。

概要 北西部分を平安時代の186号住居に、また南西部分を平安時代の188号住居により壁面と覆土を掘り込まれている。また北西コーナー部分を土坑により床下部分まで深く掘り込まれている。小さい住居であるが、覆土上面から床面にかけて多くの遺物が出土している。

構造 床面は多くのローム粒と暗褐色土の混入した土で造られている。柱穴は掘られていないが、貯蔵穴が竈の右側に掘られている。

規模 東西3.64m、南北3.44mである。壁高は残りの良い北東壁面部分で55cmである。貯蔵穴は径72cm深さ

第4章 奈良時代の遺構と遺物

23cmである。

床下 多くの床下土坑が掘られており、覆土中より多くの遺物も出土している。

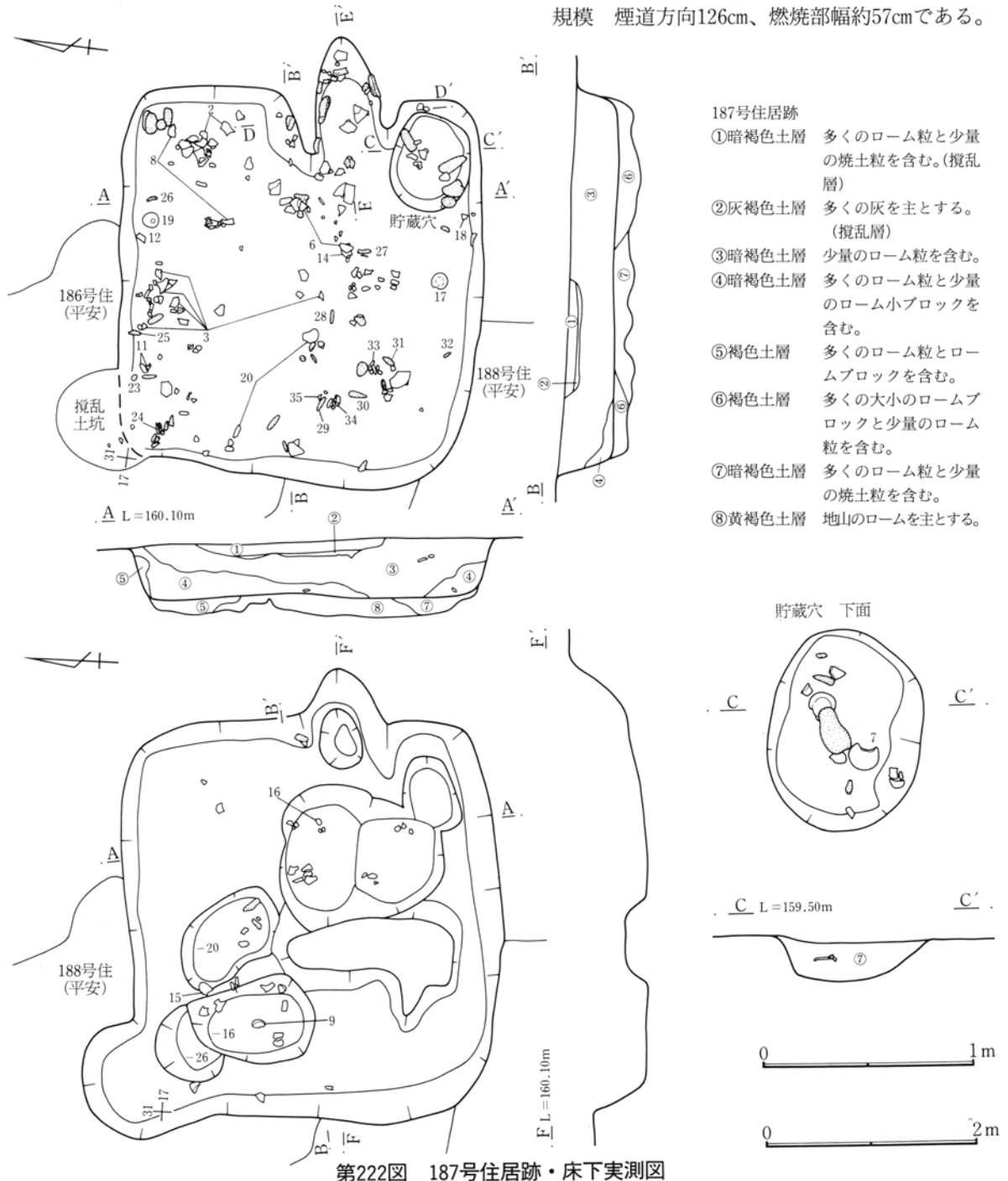
遺物 破片を含め多くの甕や坏、鉄、紡錘車が出土している。墨書土器が出土しているが、判読不明である。

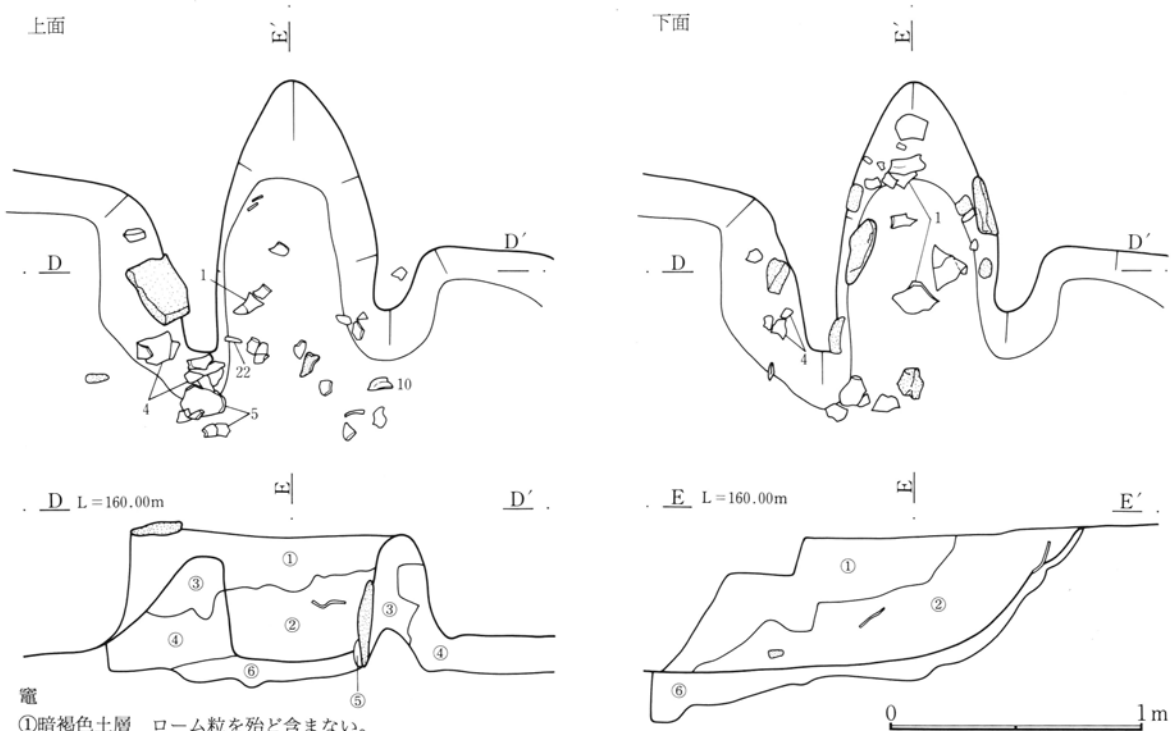
(竈)

位置 住居東壁面に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

概要 両袖部分の多くは比較的良く残っている。煙道部は壁面を多く掘り込んで造られている。竈内より9個の石が出土し、燃烧部の3個の細長い石は埋められておりほぼ使用時の状態を保っていた。他の竈内の石も竈材として使用されていたものと思われる。竈内から焼土粒の出土は少ない。

規模 煙道方向126cm、燃烧部幅約57cmである。

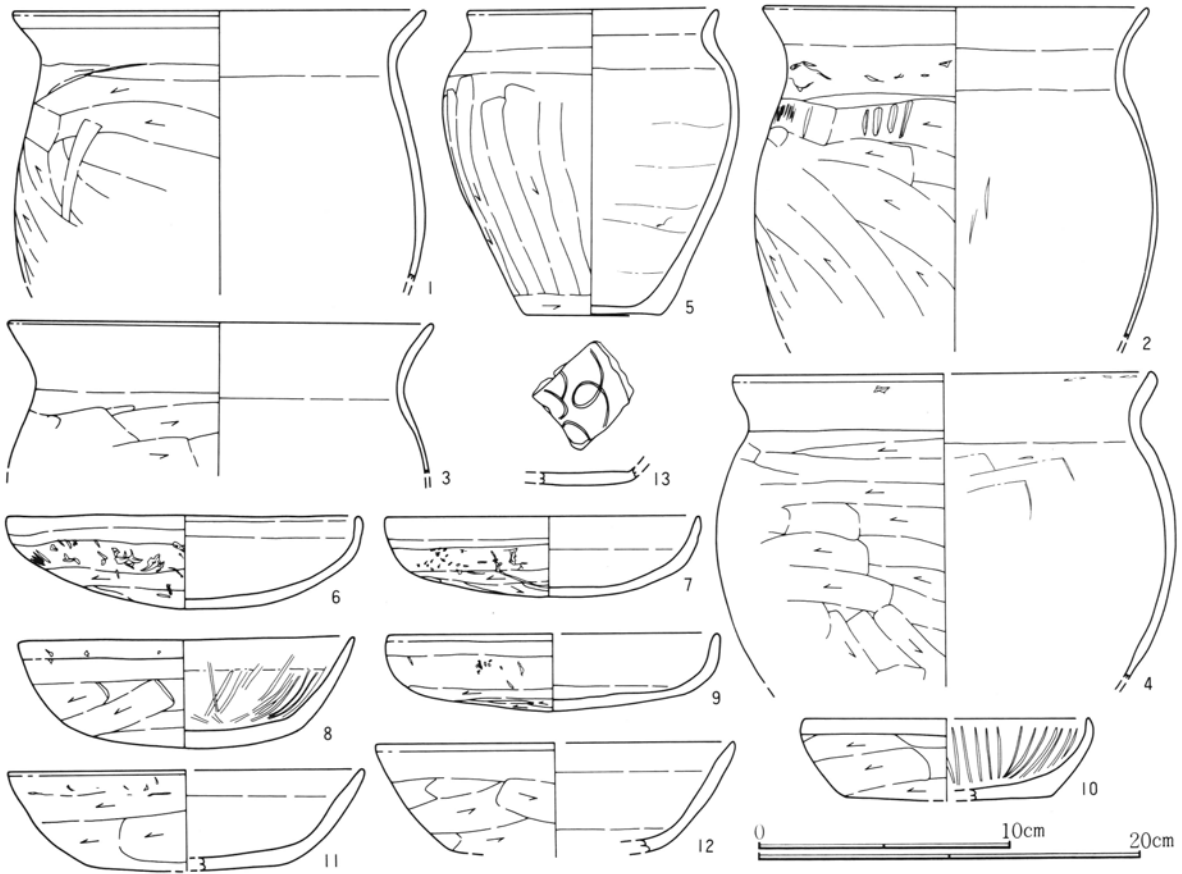




竈

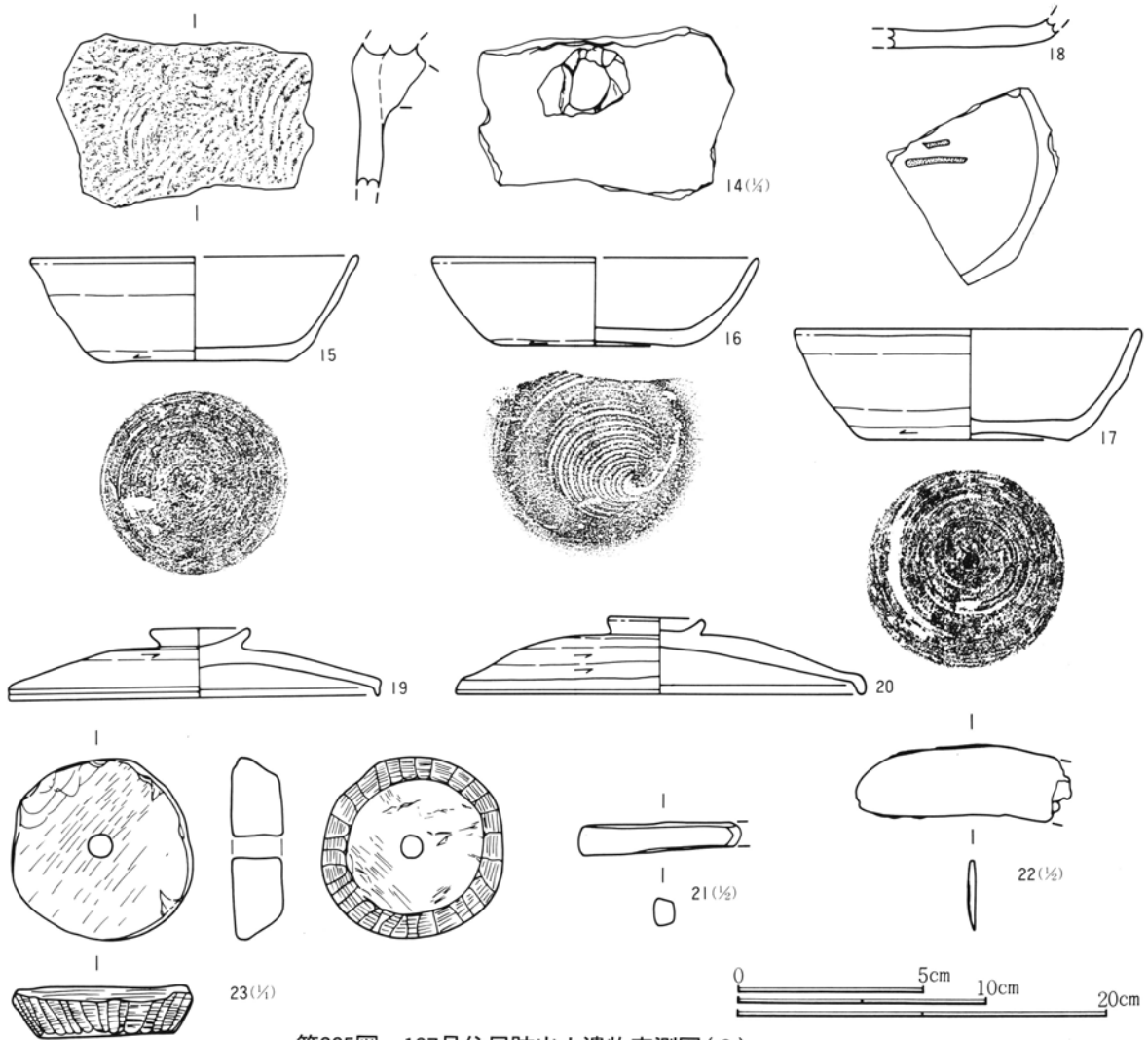
- ①暗褐色土層 ローム粒を殆ど含まない。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
- ④暗褐色土層 多くのローム粒と少量のローム小ブロックを含む。
- ⑤暗褐色土層 ロームブロックやローム粒は殆ど含まない。
- ⑥黄褐色土層 地山のロームを主とする。

第223図 187号住居跡竈実測図



第224図 187号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 奈良時代の遺構と遺物



第225図 187号住居跡出土遺物実測図(2)

187号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
224-1 93	土器 甕	床面-1 口縁部 $\frac{3}{4}$ 胴部 $\frac{1}{2}$	口 21.4 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③赤褐色	胴部外面ヘラ削り、小さな砂粒が多く移動している。 内面ナデにて器表面密。
224-2 93	土器 甕	床面+4 口縁部 $\frac{3}{4}$ 胴部 $\frac{1}{2}$	口 20.0 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。 内面ナデで器表面密であるが少し剥離している。
224-3 93	土器 甕	床面直上 口縁部 $\frac{3}{4}$ 胴上部 $\frac{1}{4}$	口 22.0 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り、左→右方向の削りである。
224-4 93	土器 甕	床面+41 口縁部 $\frac{1}{4}$ 胴部 $\frac{3}{4}$	口(21.6) 高 — 底 —	①密、1~3mmの赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り、削り幅は狭く数が多い。 内面ナデにて器表面密。 やや異質な甕である。
224-5 93	土器 小型甕	床面+44 ほぼ完形	口 12.8 高 16.0 底 7.0	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③灰褐色	底面ヘラナデでほぼ水平。 胴部ヘラナデで器表面密。 ほぼ左右対称で均整のとれたつくりである。
224-6 93	土器 坏	床面+10 完形	口 13.6 高 3.7 底 —	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 体部ナデ。 器表面密でやや光沢を持つ。
224-7 93	土器 坏	床面-6 口縁一部欠 他完形	口 12.2 高 3.2 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、ヘラ削りの単位は明瞭である。 内側器表面密でやや光沢を持つ。

187号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考		
224-8 93	土師器 坏	床面+18 1/2残存	口 13.2 高 4.2 底 -	①密、1~2mmの砂粒をわずかに含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部ヘラ削り。 器表面全体が密で胎土がやや粉状を呈する。		
224-9 93	土師器 坏	床面-17 1/2残存	口(12.9) 高 3.1 底 -	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。		
224-10	土師器 坏	床面+46 1/2残存	口(11.2) 高 - 底 -	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面は幅の広いヘラ削り、内面に多くの暗文。 口縁上端が内屈している。 口縁部内外面の器表面密でやや光沢を持つ。		
224-11	土師器 坏	床面+2 1/2残存	口(14.0) 高 - 底 -	①密、2~3mmの赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部下半ヘラ削り。 口縁部中央に輪積痕残る。 内面に暗文は描かれていない。		
224-12	土師器 坏	床面-2 1/2残存	口(14.0) 高 - 底 -	①密、1~2mmの砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面と体部下半ヘラ削り、砂粒が移動し器表面やや粗い。 内面に暗文は描かれていない。		
224-13	土師器 坏	覆土 小破片	口 - 高 - 底 -	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部内面に螺旋状の暗文あり、暗文は先の細い工具で掘り込まれている。		
225-14	須恵器 甕	床面+36 小破片	口 - 高 - 底 -	①密、1~2mmの長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	甕の把手部分と胴部の破片である。 口縁部は外反すると思われる。		
225-15 93	須恵器 坏	掘り方 1/2残存	口(13.1) 高 4.2 底 7.4	①密、1~3mmの片岩粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面右回転ヘラ削り。 体部下端右回転ヘラ削り。ロクロ目はほとんどなし。 全体的につくりがていねいである。		
225-16 93	須恵器 坏	床面-3 1/2残存	口(13.0) 高 3.6 底 7.6	①密、1mm以下の小さな白色粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面中央右回転糸切り痕。 底面周辺部右回転ヘラ削り。 体部下端右回転ヘラ削り。		
225-17 93	須恵器 坏	床面+5 ほぼ完形	口 13.8 高 4.5 底 8.2	①密、1~3mmの片岩粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	底面右回転ヘラ削り。 体部下端右回転ヘラ削り。		
225-18 93	須恵器 坏	床面+4 底部1/2	口 - 高 - 底 -	①密、1mm前後の石英粒と長石粒を含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	底面右回転ヘラ削りによる再調整。 底部外面中央に墨書あり。		
225-19 93	須恵器 蓋	床面+6 完形	口 14.9 高 - 底 -	①やや粗、1~2mmの白色粒を含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	天井部右回転ヘラ削り。 口縁端部は短く細い。		
225-20 93	須恵器 蓋	床面+3 口縁一部欠 ほぼ完形	口 16.2 高 - 底 -	①密、少量の片岩粒を含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	天井部右回転ヘラ削り。摘みは小さい。 全体につくりのていねいな蓋である。 内外面に吸炭による重ね焼の痕跡を持つ。		
225-21	鉄製品 釘?	覆土	長 (4.4) 幅 0.8 厚 0.5 重 5.4		釘の可能性が考えられるが名称及び用途不明。		
225-22 113	鉄製品 鎌	竈内	長 (5.8) 幅 1.9 厚 0.3 重 9.2		錆化が著しい。		
225-23 117	石製品 紡錘車	床面-13	径 4.8/3.6 孔径 0.6 厚 1.3 重 57.2		滑石片岩。広面は中砥削り。狭面はほぼ自然面。 側面は鉄製工具により細く削られている。		
遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)				石材・備考
24	126	こも編み石	長 13.0	幅 5.6	厚 2.1	重 180	絹雲母石墨片岩、片側の側面が凹状を呈す。
25	126	こも編み石	長 11.8	幅 4.3	厚 2.2	重 180	石墨緑泥片岩
26	126	こも編み石	長 11.5	幅 4.1	厚 2.4	重 165	緑簾緑泥片岩
27	126	こも編み石	長 10.4	幅 4.1	厚 2.2	重 120	絹雲母石墨片岩
28	126	こも編み石	長 13.8	幅 4.2	厚 2.8	重 230	絹雲母石墨片岩
29	126	こも編み石	長 13.0	幅 3.9	厚 2.5	重 160	絹雲母石墨片岩
30	126	こも編み石	長 16.7	幅 5.1	厚 2.6	重 290	点紋石墨緑泥片岩
31	126	こも編み石	長 12.6	幅 4.7	厚 2.0	重 170	緑簾緑泥片岩
32	126	こも編み石	長 10.4	幅 4.7	厚 3.1	重 250	緑簾緑泥片岩
33	126	こも編み石	長 10.3	幅 4.2	厚 2.8	重 170	絹雲母石墨片岩
34	126	こも編み石	長 10.8	幅 4.5	厚 3.6	重 220	絹雲母石墨片岩 両側面凹状を呈す。
35	126	こも編み石	長 13.1	幅 4.8	厚 1.4	重 135	絹雲母石墨片岩

222号住居跡 (第226~228図、図版41・93・113)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、10-25グリッドに位置する。

概要 南側の低くなる急斜面に位置し、北側の残りは良好であるが南側の床面から壁面部分は削られて残っていない。そのため南側の住居範囲は確認できなかった。北側部分で1号掘立柱建物跡と重複しており、本住居の覆土を掘り込んでいる。

構造 床面は多くの暗灰褐色粘質土を主とした土で造られている。柱穴や貯蔵穴は床下調査によっても確認できなかったため掘られていないと思われる。

規模 東西3.01m、南北は不明である。壁高は残りの良い北東コーナー部分で71cmである。

遺物 破片の出土量が多いが、図示できたのは土師器の甕と坏の3点と刀子1点である。

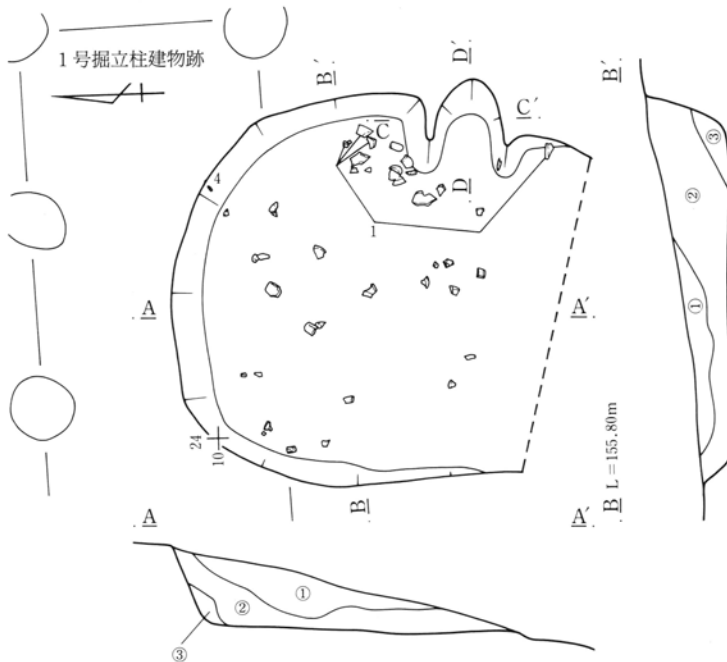
(竈)

位置 住居東壁面に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

概要 住居の造られた位置は低地に近く地山全体がやや粘土質である。その粘性の強い土を利用して袖が

造られている。左袖部分は良好に残っているが、右袖部分は少し削られて残りが悪い。袖石や天井石等は出土していない。覆土全体が粘土質のためか竈内より多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向86cm、燃烧部幅48cmである。

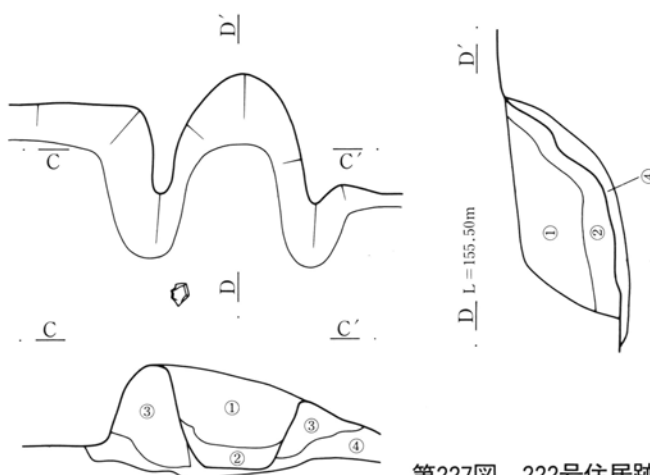


第226図 222号住居跡実測図

222号住居跡

- ①暗褐色土層 少量の白色軽石粒を含むが、ローム粒は殆ど含まない。
- ②暗褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
- ③褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

0 2m

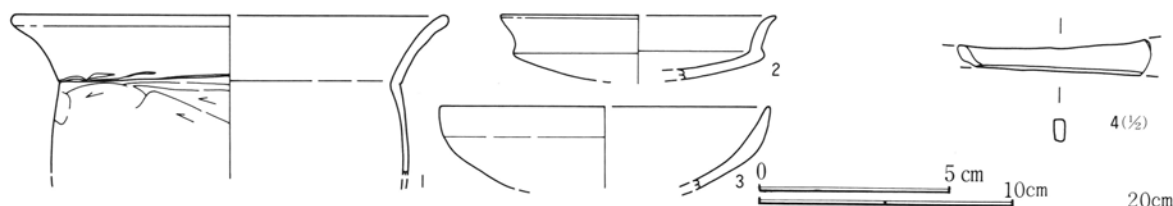


第227図 222号住居跡竈実測図

竈

- ①暗灰褐色土層 多くの暗灰褐色粘質土と少量の焼土粒を含む。
- ②暗灰褐色土層 多くの焼土粒と少量の炭化物を含む。
- ③暗灰褐色土層 暗灰褐色粘質土を主とし少量の焼土粒を含む。
- ④暗灰褐色土層 暗灰褐色粘質土ブロックを主とする。

0 1m



第228図 222号住居跡出土遺物実測図

222号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
228-1 93	土師器 甕	床面+4 1/2残存	口(23.0) 高・底-	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へら削り、削られていない口縁部との境にわずかに段差を持つ。
228-2	土師器 坏	覆土 破片	口(11.0) 高・底-	①密、粉状を呈する。 ②酸化焰、 硬質 ③橙色	胎土が粉状を呈しており、底面のへら削りの単位不明。
228-3	土師器 坏	覆土 小破片	口(13.0) 高・底-	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削りと思われるが器表面が粗れておりへらの単位不明。
228-4 113	鉄製品 刀子	床面+35	長 (5.1) 厚 0.4	幅 0.9 重 3.3	刀子の茎部分と思われる。 断面はほぼ長方形である。

224号住居跡 (第229・230図、図版41)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、15-18グリッドに位置する。

概要 西側の低くなるなだらかな斜面に位置し、竈の造られている東側の壁面と床面は残っているが、西側の大部分は削られて残っていない。住居北側を平安時代の225号住居により床下部分まで掘り込まれている。また竈の煙道先端部を耕作溝により掘り込まれている。

構造 床面は多くの暗褐色土を主とした土で造られている。柱穴や貯蔵穴は住居規模が大きいため掘られていた可能性が高いが、確認できなかった。

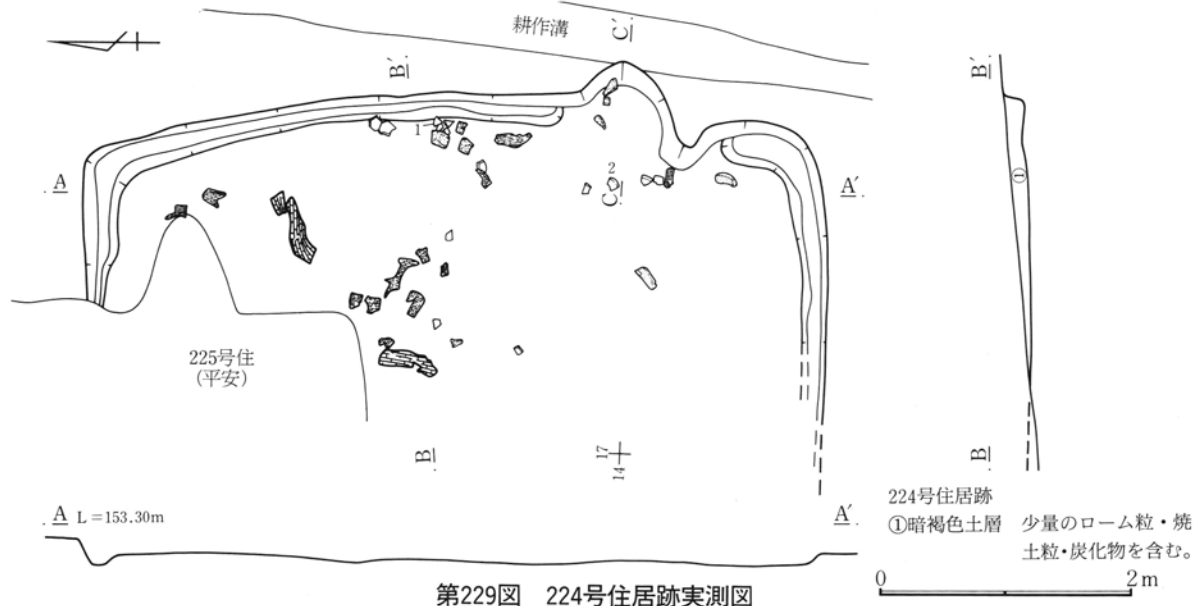
規模 東西不明、南北5.91mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で21cmである。

遺物 全体に出土量は少なく、総数で60片である。炭火物が多く出土している。

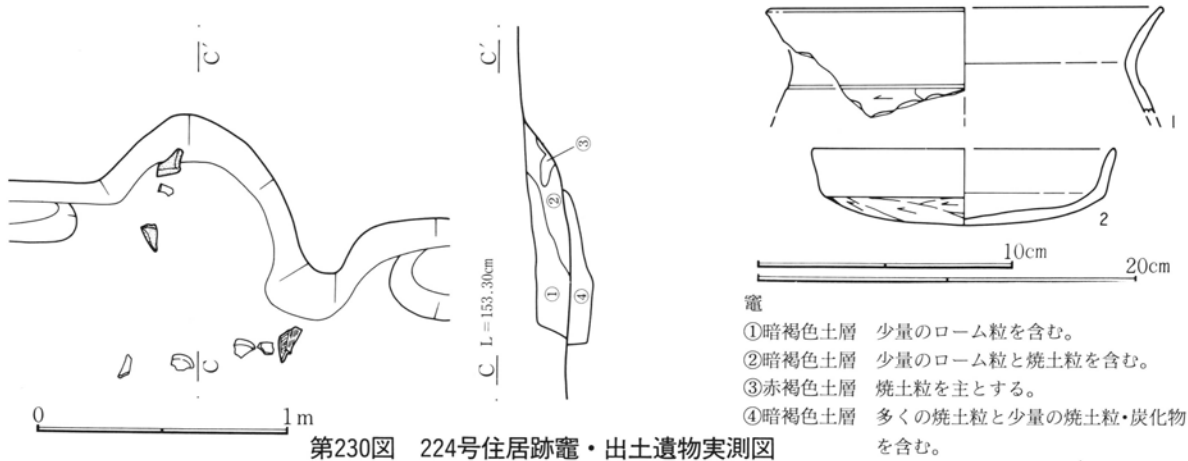
(竈)

位置 住居東壁面南寄りに造られている。残りが悪く不明な点が多いが、袖と燃焼部の多くは床面上に位置していたものと思われる。

概要 残りが悪く袖部分の多くは残っていない。袖石等も全く出土していない。規模も不明である。



第229図 224号住居跡実測図



第230図 224号住居跡竈・出土遺物実測図

224号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
230-1	土師器 甕	床面+3 口縁小片	口(20.8) 高・底—	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	胴部ヘラ削り、その他頸部に刷毛整形、そのため頸部との境に弱い段あり。
230-2	土師器 坏	床面+5 1/2残存	口(11.8) 高— 底—	①密、少量の片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③黒褐色	底面ヘラ削り。 全体に少しゆがんでいる。 吸炭により多くの部分で黒褐色を呈している。

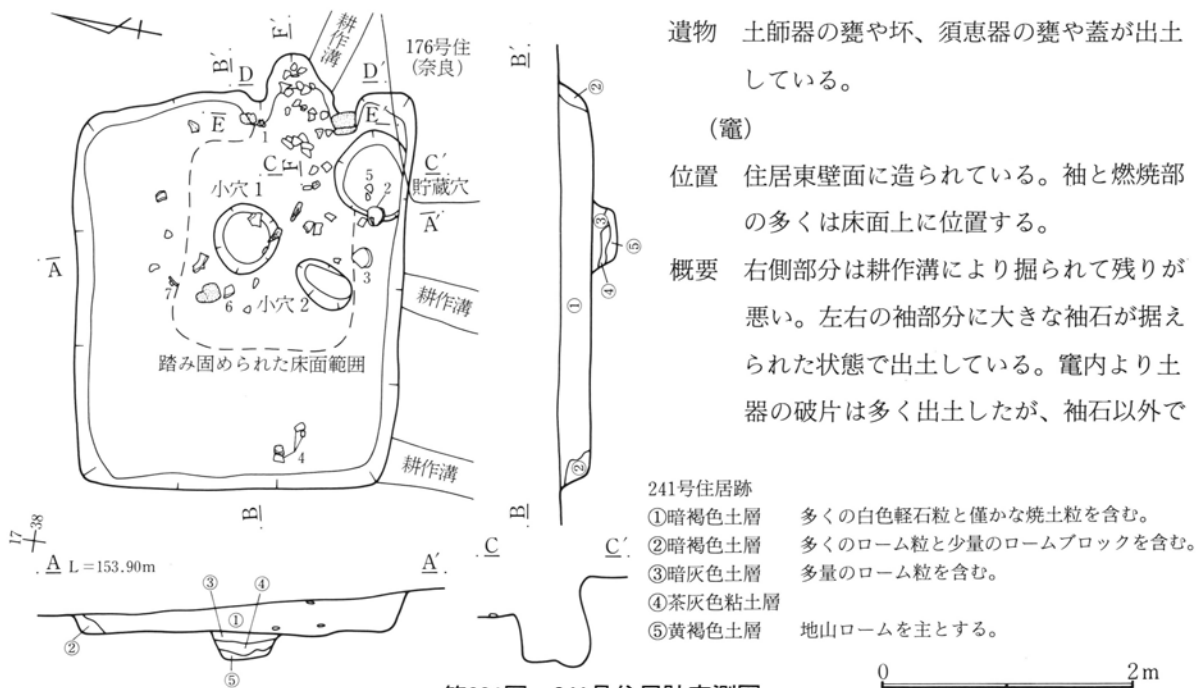
241号住居跡 (第231~233図、図版41・93・94)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、38-18グリッドに位置する。

概要 南東コーナー部分で本住居より新しい奈良時代の176号住居とわずかに重複しており、重複部分の覆土が削られている。また耕作溝により竈の右側部分と南側の壁面と覆土が削り取られている。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。住居規模が小さいためか柱穴は掘られていない。貯蔵穴が竈の右側に掘られている。

規模 東西3.08m、南北2.54mである。壁高は残りの良い南壁面部分で34cmである。貯蔵穴は径70cm深さ38cmである。



第231図 241号住居跡実測図

遺物 土師器の甕や坏、須恵器の甕や蓋が出土している。

(竈)

位置 住居東壁面に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

概要 右側部分は耕作溝により掘られて残りが悪い。左右の袖部分に大きな袖石が据えられた状態で出土している。竈内より土器の破片は多く出土したが、袖石以外で

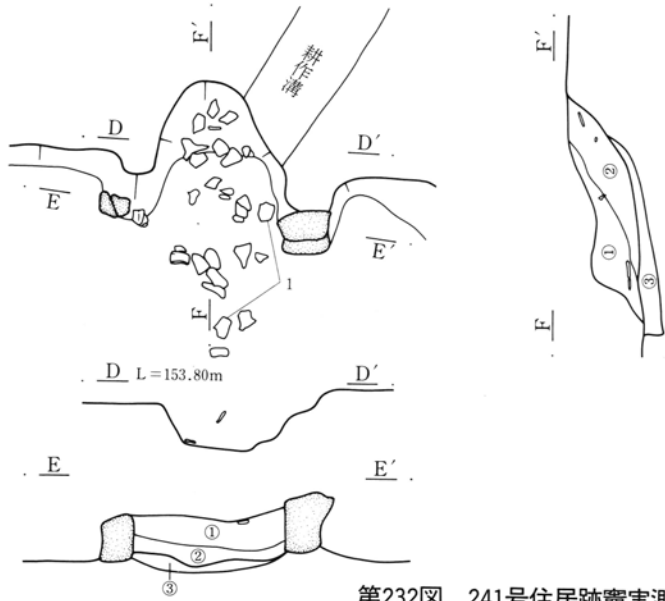
241号住居跡

- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒と僅かな焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量のロームブロックを含む。
- ③暗灰色土層 多量のローム粒を含む。
- ④茶灰色粘土層
- ⑤黄褐色土層 地山ロームを主とする。

第4章 奈良時代の遺構と遺物

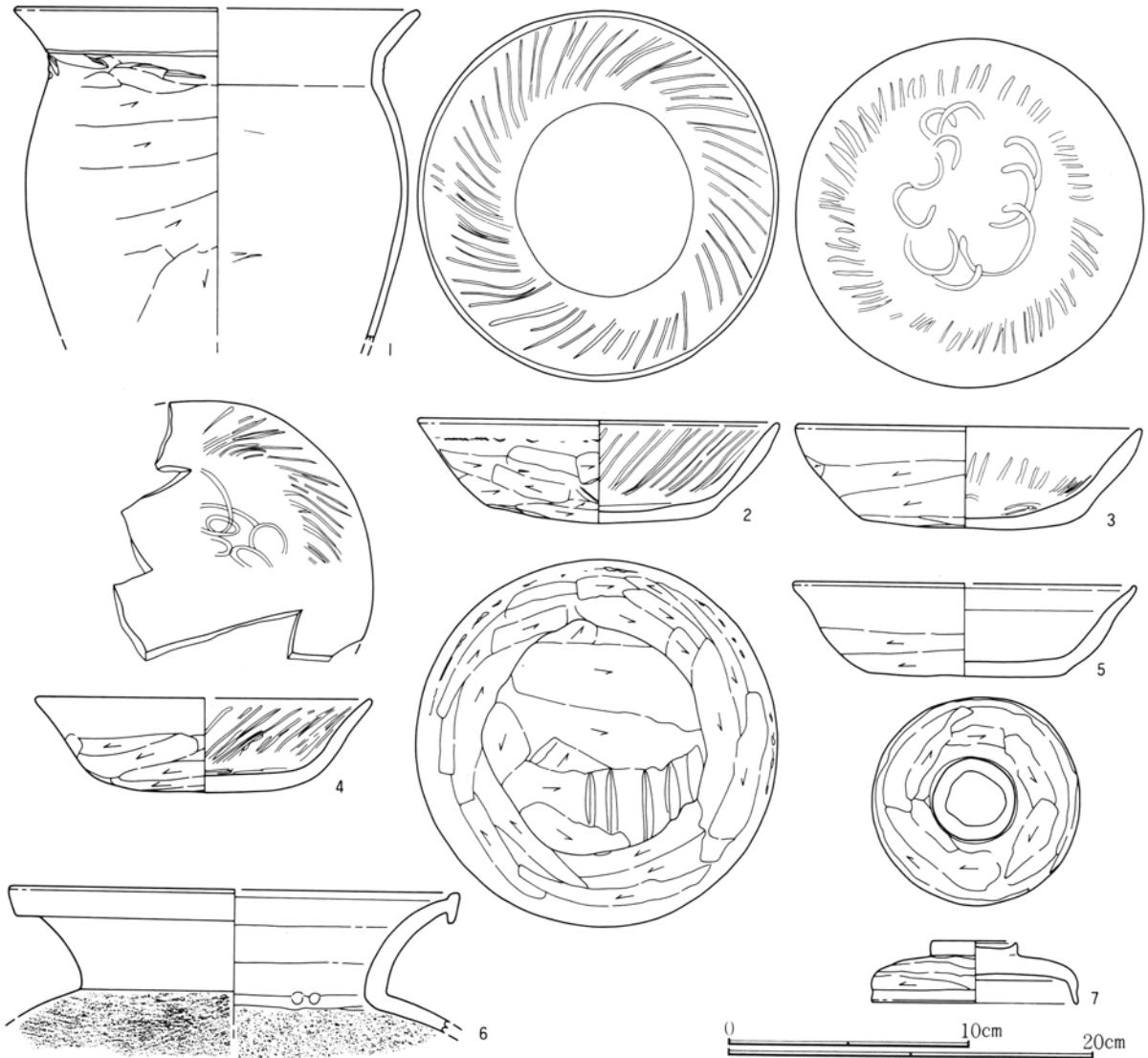
は大きな石の出土は認められない。
 燃焼部付近より多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向62cm、燃焼部幅55cmである。



- 竈
- ①暗褐色土層 少量のローム粒を含む。
 - ②暗褐色土層 多くの焼土粒を含む。
 - ③暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。

第232図 241号住居跡竈実測図



第233図 241号住居跡出土遺物実測図

241号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
233-1 93	土師器 甕	竈内 1/6残存	口(21.8) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面へラ削り。 口縁部との境に段を持つ。 内面ナデにて器表面密。
233-2 93	土師器 坏	床面+20 完形	口14.8 高4.2 底9.3	①密、1~2mmの砂粒をわずかに含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部へラ削り。 口縁部内側に暗文。 内側底面に暗文なし。
233-3 93	土師器 坏	床面+1 完形	口14.2 高4.2 底—	①密、1~2mmの赤色粒をわずかに含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。体部へラ削り。 口縁部内側に暗文。 内側底面に暗文の痕跡が残る。
233-4 93	土師器 坏	床面直上 口縁部1/3 底部1/2	口(13.8) 高3.9 底—	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部外面へラ削り。 内面に放射状と螺旋状の暗文。
233-5 93	土師器 坏	床面直上 1/2残存	口(14.0) 高3.8 底8.0	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面及び体部へラ削り。 内側の器表面が粗れており暗文は全く確認できない。
233-6	須恵器 甕	床面+4 口縁1/3 肩部1/2	口(25.0) 高— 底—	①密、2~3mmの片岩粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	肩部外面平行叩目。 内面に青海波文が一部残る。
233-7 94	須恵器 蓋	床面+5 完形	口8.4 高— 底—	①密、1mm以下の長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	天井部手持へラ削り。 摘みは端部を細く引き出している。

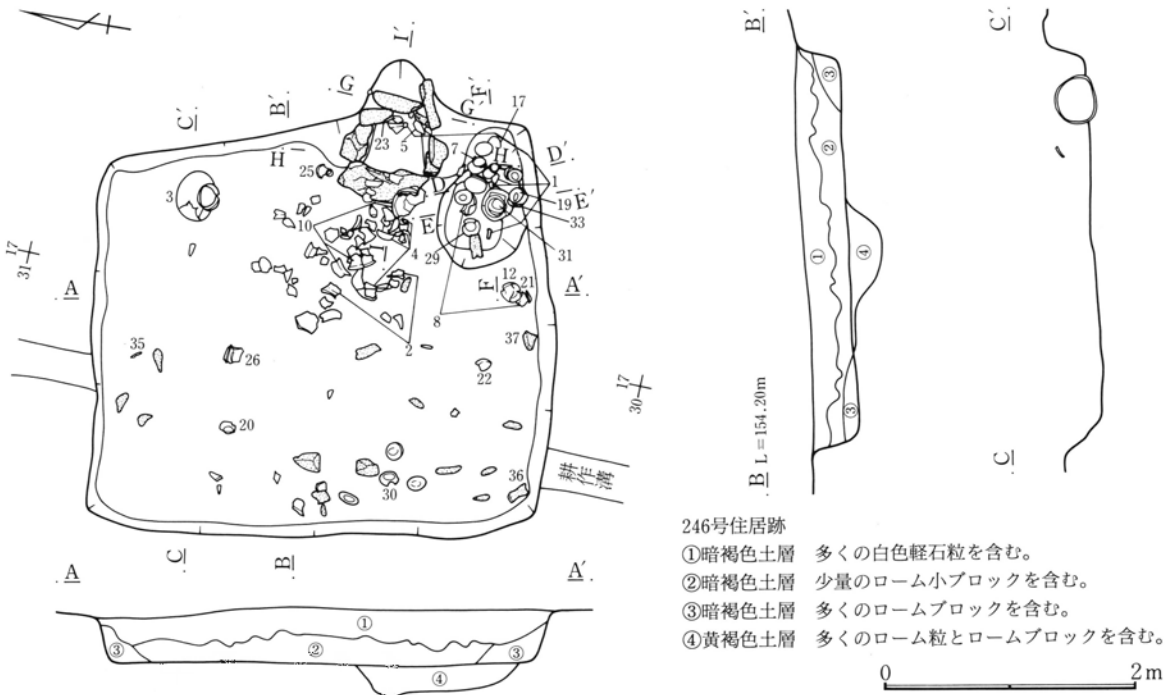
246号住居跡 (第234~239図、図版42・94・95・113・121)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、31-17・18グリッドに位置する。

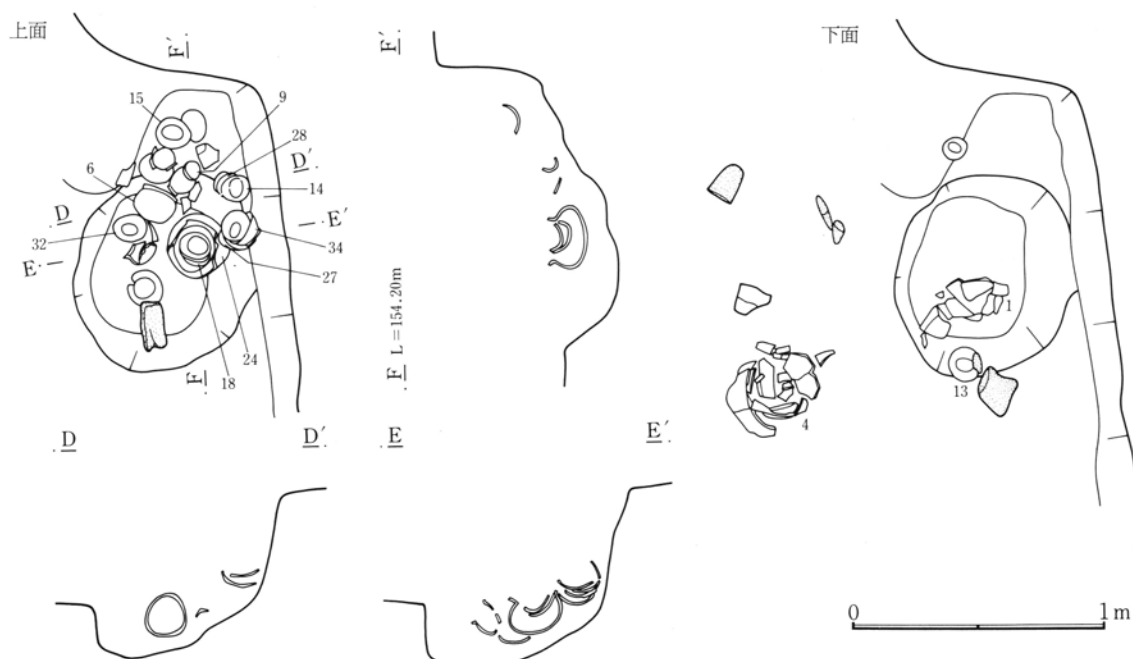
概要 小さな住居であるが、残りが良好で大量の土器が出土している。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。住居規模が小さいためか柱穴は掘られていない。貯蔵穴が竈の右側に掘られている。

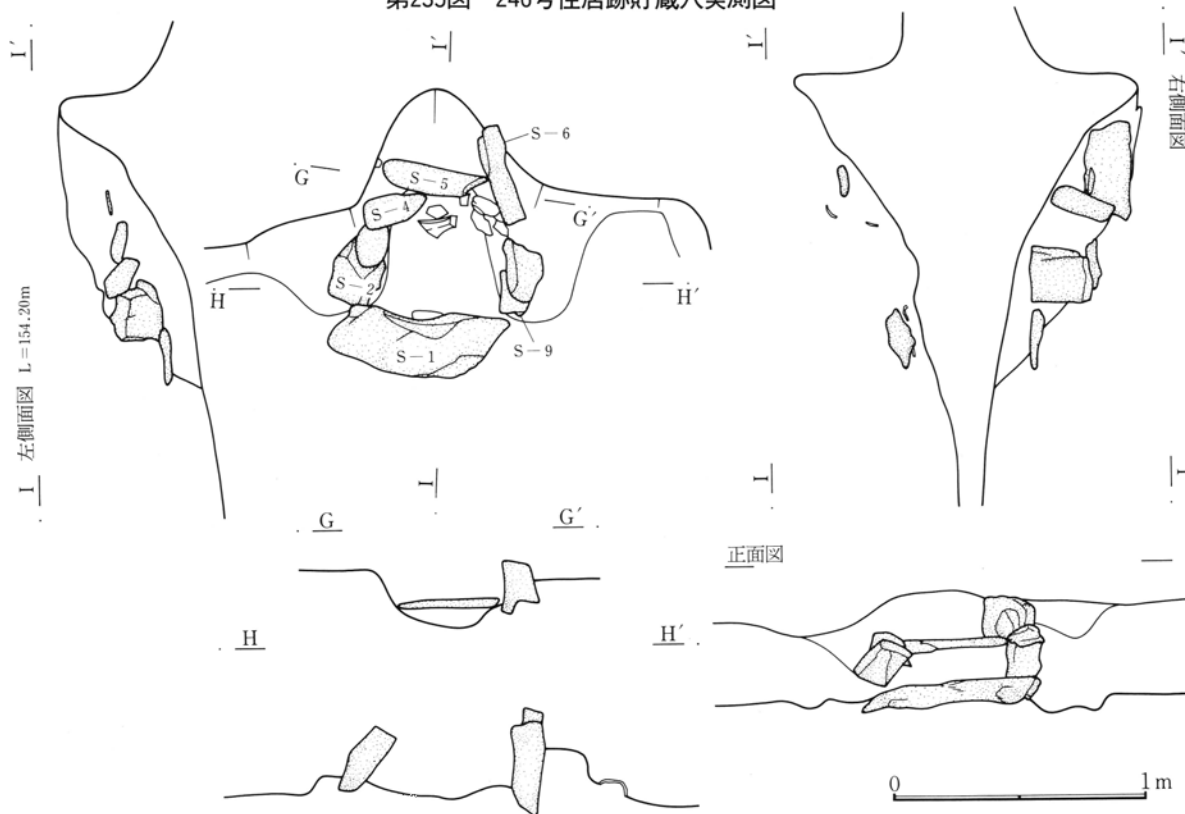
規模 東西3.40m、南北3.59mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で44cmである。貯蔵穴は径76cm 深さ19cmである。



第234図 246号住居跡実測図



第235図 246号住居跡貯蔵穴実測図



第236図 246号住居跡竈実測図

遺物 竈内から石が、その手前部分や貯蔵穴内から甕と坏が多く出土している。鉄鏃や砥石も注目される。

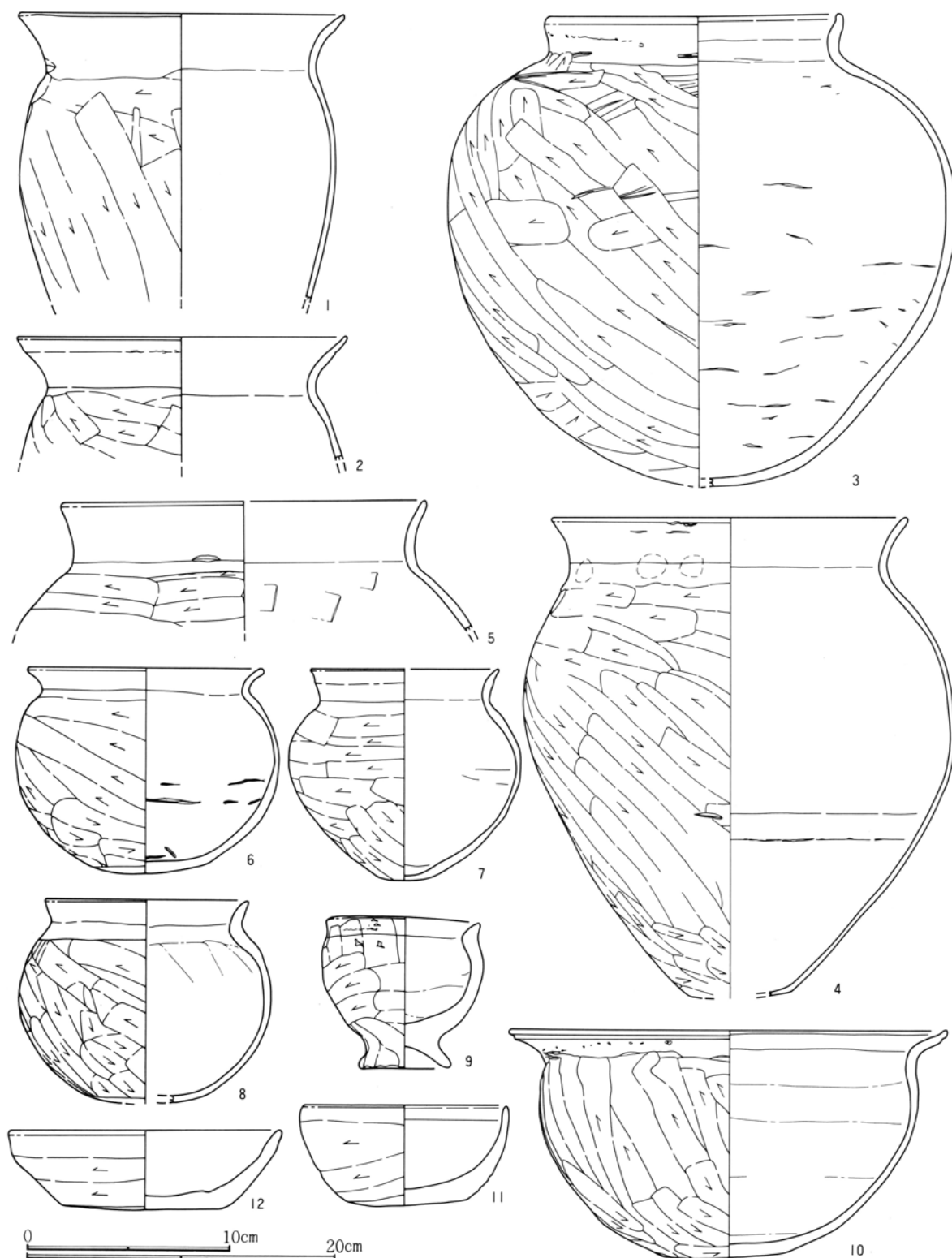
(竈)

位置 住居東壁面に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

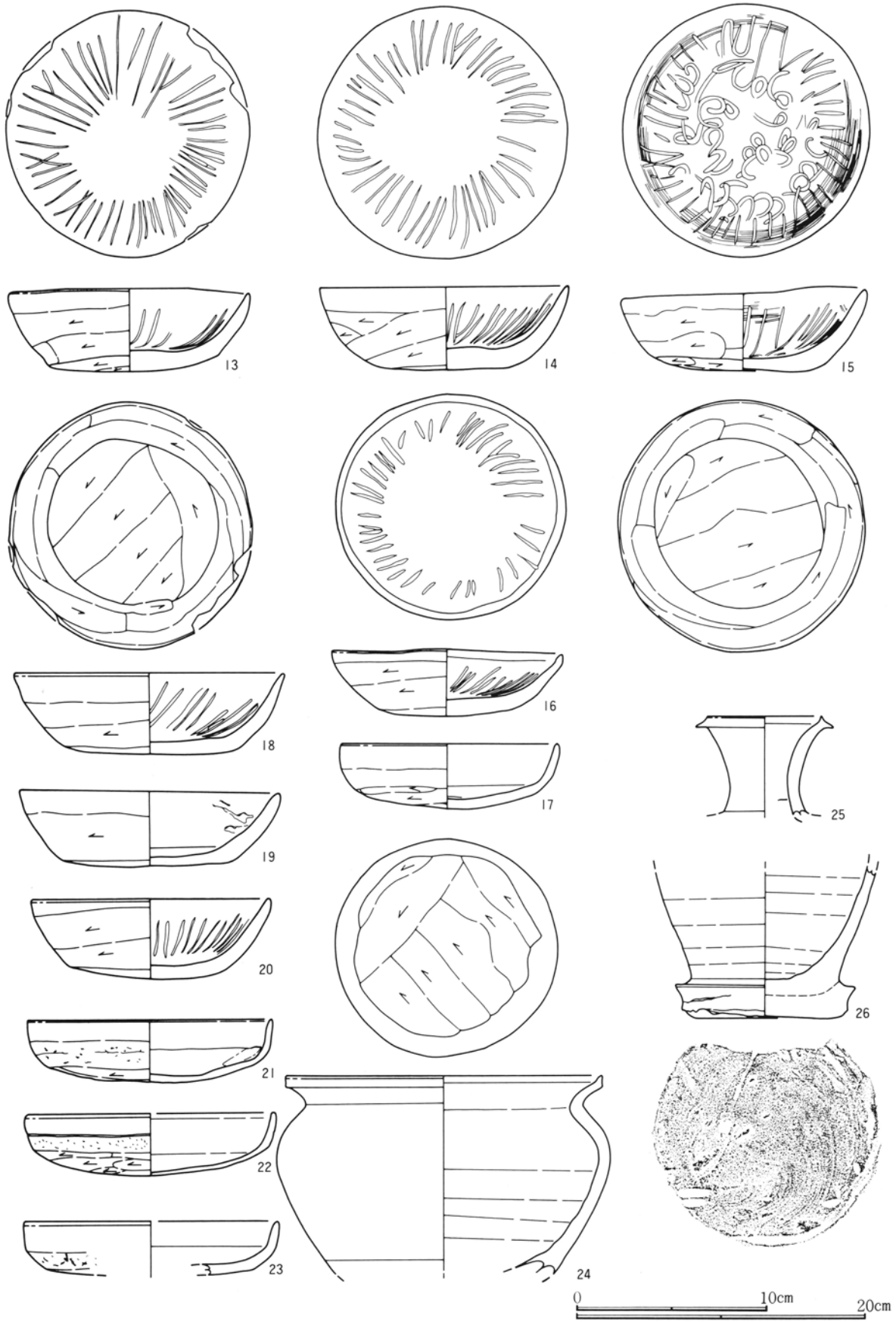
概要 左右の袖石としてS-2とS-9が使われ、その上にS-1が天井石として載せられていたものと思われる。さらに左側面に2個、右側面に3個の石が使われている。煙道部付近のS-6とS-4の上

第4章 奈良時代の遺構と遺物

にS-5が載せられて煙道部の天井石として使用されていたものと思われる。天井石はいずれもはずされ、支脚も残っていないが、残りの良好な竈である。燃烧部で使用された甕類は残っていない。
規模 煙道方向93cm、燃烧部幅54cmである。

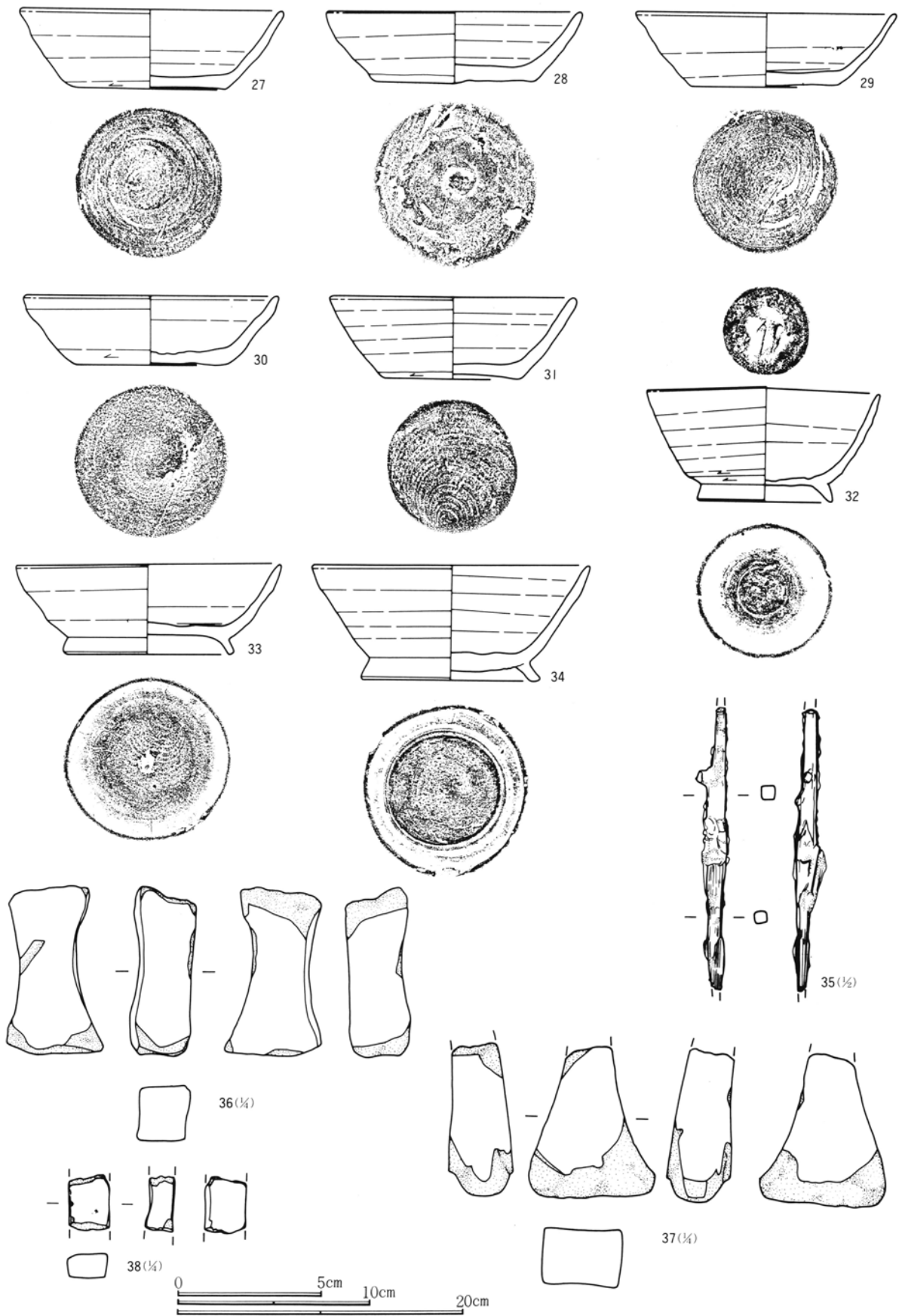


第237図 246号住居跡出土遺物実測図(1)



第238図 246号住居跡出土遺物実測図(2)

第4章 奈良時代の遺構と遺物



第239図 246号住居跡出土遺物実測図(3)

246号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
237-1	土師器 甕	床面+3 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{3}{4}$	口 21.0 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 口唇部は一部肉厚になっている。
237-2	土師器 甕	床面+12 口縁 $\frac{1}{2}$	口 21.2 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を大量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部に輪積痕あり。
237-3 94	土師器 甕	床面+3 底一部欠他 完形	口 19.2 高 — 底 —	①やや粗、2~3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部ヘラ削り、砂粒の移動少なく器表面は比較的密である。 口縁部と内側胴部に輪積痕が残る。
237-4 94	土師器 甕	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口 23.2 高 — 底 (6.5)	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③胴下半 $\frac{1}{2}$ 黒褐色、上部橙色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。多くの指頭圧痕が残る。 胴部中央下部分に接合による肉厚部分あり。
237-5	土師器 甕	竈内 口縁部 $\frac{1}{4}$	口(23.4) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部ヘラ削り。 小さな砂粒が多く移動している。
237-6	土師器 小型甕	覆土 ほぼ完形	口 15.2 高 13.3 底 —	①密 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色、一部黒色	底面と胴部ヘラ削り、削りの単位明瞭。 内面に多くの輪積痕が残る。
237-7	土師器 小型甕	床面+5 口縁部 $\frac{1}{2}$ 他完形	口(12.2) 高 13.6 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③内側底面以外黒褐色	底面ナデ。胴部ヘラ削り。 内面ナデにて器表面密。 内側底面付近以外吸炭により黒褐色を呈する。
237-8	土師器 小型甕	床面+6 口縁完形 胴 $\frac{1}{2}$ 、底 $\frac{1}{4}$	口 13.0 高 — 底 —	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面と胴部外面ヘラ削り、削りの単位は明瞭である。 内面ナデにて器表面密。
237-9	土師器 台付小型 甕	床面+3 完形	口 9.8 高 9.8 底 5.9	①やや粗、1~2mmの砂粒を大量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	外面ヘラナデを主とし一部ヘラ削り。 内面ナデにて器表面密。 台部は雑なつくり。
237-10 94	土師器 鉢	床面+9 ほぼ完形	口 27.8 高 14.8 底 8.4	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と胴部外面ヘラ削り。 口縁部は大きく外反している。
237-11 94	土師器 坏	覆土 ほぼ完形	口 9.8 高 4.9 底 —	①やや粗、2~3mmの砂粒を多く片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部ヘラ削り、器表面が粗れており削りの単位不明瞭。 内面ナデにて器表面密。
237-12 94	土師器 坏	床面+4 口縁一部欠 他完形	口 13.1 高 3.9 底 7.7	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 内側の器表面がやや粗れており暗文は不明。 暗文はおそらく描かれていなかったものと思われる。
238-13 94	土師器 坏	床面-8 口縁一部欠 損、他完形	口 12.6 高 4.3 底 8.9	①密、2~3mmの砂粒を多く片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部ヘラ削り、器表面が粗れており削りの単位不明瞭。内面ナデにて器表面密。 内面に多くの暗文が描かれている。
238-14 94	土師器 坏	床面+16 完形	口 12.9 高 4.3 底 7.7	①密、1~3mmの砂粒を多く片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 内面に多くの暗文。 全体に器肉が厚い。
238-15 94	土師器 坏	床面+23 ほぼ完形	口 12.7 高 3.9 底 8.8	①密、2~3mmの砂粒と赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 口縁部内面横方向ヘラ磨き後放射状の暗文。
238-16 94	土師器 坏	床面-4 完形	口 12.0 高 3.5 底 —	①密、2~3mmの砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 口縁部は短く直立気味に立ち上がる。 内面に多くの暗文あり。
238-17 94	土師器 坏	床面+2 完形	口 11.3 高 3.3 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。内面に多くの指頭圧痕あり。 黒斑全く認められず。
238-18 94	土師器 坏	床面+1 完形	口 14.0 高 4.2 底 —	①密、1~3mmの赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 内側は粗れており暗文は確認できない。 暗文は描かれていなかったものと思われる。
238-19 94	土師器 坏	床面+13 完形	口 13.4 高 3.9 底 8.5	①密、1~3mmの赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 内側は粗れており暗文は確認できない。 暗文は描かれていなかったものと思われる。
238-20 94	土師器 坏	床面+16 $\frac{1}{2}$ 残存	口 12.4 高 12.0 底 4.1	①密、1~3mmの砂粒を多く片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 内面に多くの暗文が描かれている。

第4章 奈良時代の遺構と遺物

246号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
238-21 94	土師器 坏	床面+3 ほぼ完形	口 12.6 高 3.2 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。 固い焼成である。
238-22 94	土師器 坏	床面+18 $\frac{2}{3}$ 残存	口(12.8) 高 3.2 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。 黒斑全く認められず。
238-23	土師器 坏	覆土 $\frac{1}{3}$ 残存	口(13.2) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削りと思われるが、ヘラの単位不明。
238-24	須恵器 鉢	床面+5 口縁部 $\frac{2}{3}$ 胴部完形	口 22.0 高 — 底 —	①密、1~2mmの長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質、焼締 ③灰色	底部がそっくりはずれている。 胴部内面にわずかな凸状のロクロ痕が残る。 内外面に多くの自然釉が付着。
238-25	須恵器 瓶	床面+22 口縁部のみ	口 7.8 高 — 底 —	①密 ②還元焰、硬質 ③外面灰色、内面灰色に釉薬	外反する口縁の端部を鋭利に仕上げている。 口縁部内面と頸部の一部に自然釉。
238-26	須恵器 鉢	床面+14 胴部 $\frac{1}{2}$ 底部完形	口 — 高 — 底 11.5	①密、1mm以下の長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質、焼締 ③灰色	底部は別な粘土板を貼り付けて厚く仕上げている。 底面糸切り痕と思われるが不明。
239-27 94	須恵器 坏	床面+6 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部完形	口 13.8 高 4.2 底 7.9	①密、2~3mmの長石粒を多く片岩粒を少量含む。②酸化焰、軟質 ③にぶい黄橙色	底面右回転ヘラ削り。 体部下半ヘラ削り。ロクロ痕は少ない。 糸切り痕は不明。
239-28 94	須恵器 坏	床面+14 完形	口 13.1 高 3.8 底 8.2	①密、2~3mmの長石粒と片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③灰色	底面ヘラ削り。 中央部に凸状部あり。 器表面に5~6mmの片岩粒をわずかに含む。
239-29 94	須恵器 坏	床面-10 口縁一部欠 他完形	口 13.5 高 3.9 底 7.5	①粗、2~5mmの砂粒と片岩粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③灰色	底面右回転ヘラ削り。 体部にロクロ痕少ない。 内外の器表面に大きな砂粒が目立つ。
239-30 95	須恵器 坏	床面+23 口縁部 $\frac{1}{2}$ 他完形	口 13.2 高 3.7 底 7.9	①密、1~2mmの砂粒を少量含む ②還元焰、硬質 ③灰白色	底面中央部に糸切りの痕跡。 周辺部及び体部下端右回転ヘラ削り。
239-31 95	須恵器 坏	床面+2 完形	口 12.8 高 4.3 底 6.8	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面右回転糸切り痕。体部下端ヘラ削り。 口縁部にロクロ痕。 完全に酸化焰焼成であり焼きが固い。
239-32 95	須恵器 高台付埴	床面-5 完形	口 12.0 高 6.0 底 7.0	①密、1~2mmの石英粒と長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	底面の高台部内側回転ナデ。 高台部外側の体部下端回転ヘラ削り。
239-33 95	須恵器 高台付埴	床面+8 ほぼ完形	口 13.8 高 4.7 底 8.9	①密、2mm以上の砂粒含まず ②還元焰、硬質 ③灰色	底面中央部右回転糸切り痕。 高台はていねいに貼り付け整形されている。
239-34 95	須恵器 高台付埴	床面+12 完形	口 14.4 高 6.1 底 9.2	①やや粗、3~5mmの片岩粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	底面回転ナデ。 高台は貼り付け部分で一部亀裂が入っている。
239-35 113	鉄製品 鉄 鏃	床面+20	長 10.0 幅 0.9 厚 0.5 重 10.5		鉄鏃の茎部分と思われる。 下約半分的位置に木質部が残っている。
239-36 121	石製品 砥 石	床面+16	長 (11.8) 幅 (6.7) 厚 3.9 重 390.0		短い完形品と思われる。 4側面を砥石として利用している。
239-37 121	石製品 砥 石	床面+7	長 (10.7) 幅 (5.3) 厚 3.7 重 440.0		4側面を砥石として使用、使用段階で中央が細くなり 欠損したと思われる。欠損後の再加工の痕跡なし。
239-38 121	石製品 砥 石	覆土	長 (3.9) 幅 (2.8) 厚 1.6 重 32.8		砥石の小破片である。 4側面を砥石として使用している。

247号住居跡 (第240~242図、図版42・95・117・126)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、31-16・17グリッドに位置する。

概要 南側壁面部分が奈良時代の323号住居と重複しており、本住居が323号住居の北東部分を掘り込んでいる。また西側壁面は耕作溝により削られており残っていない。竈北側に本住居より古い長方形の土坑が掘られており、その土坑を本住居が掘り込んでいる。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。柱穴は掘られておらず、貯蔵

穴が竈の右側に掘られている。

規模 東西4.00m、南北4.00mである。壁面は残りの良い北東コーナー部分で31cmである。貯蔵穴は径82cm
深さ28cmである。

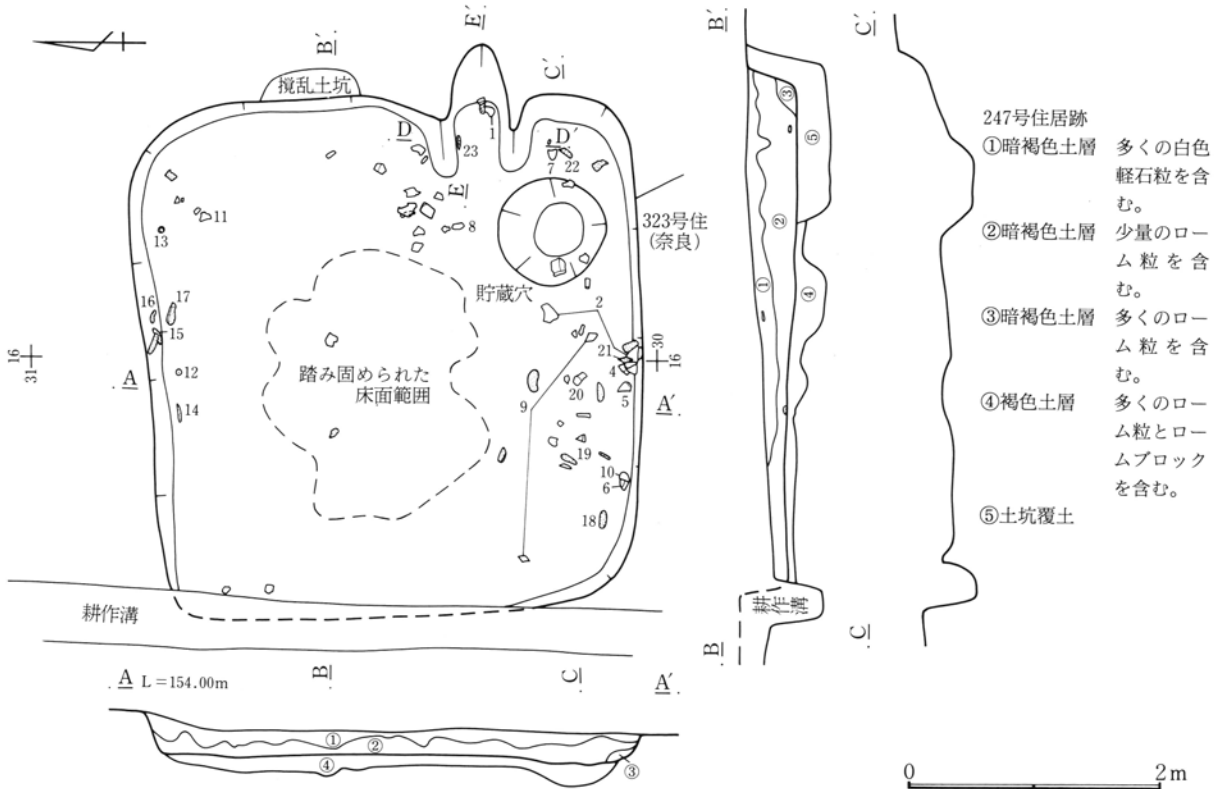
遺物 土師器の甕や坏が出土している。紡錘車2点が注目される。

(竈)

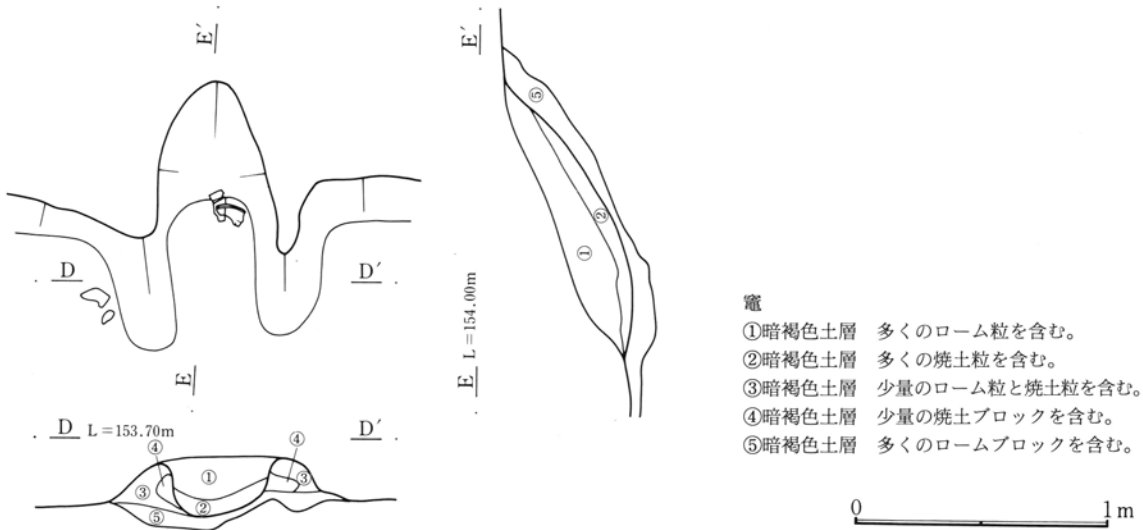
位置 住居東壁面に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

概要 袖部分の残りは比較的良好であるが、袖石や天井石等は全く出土していない。

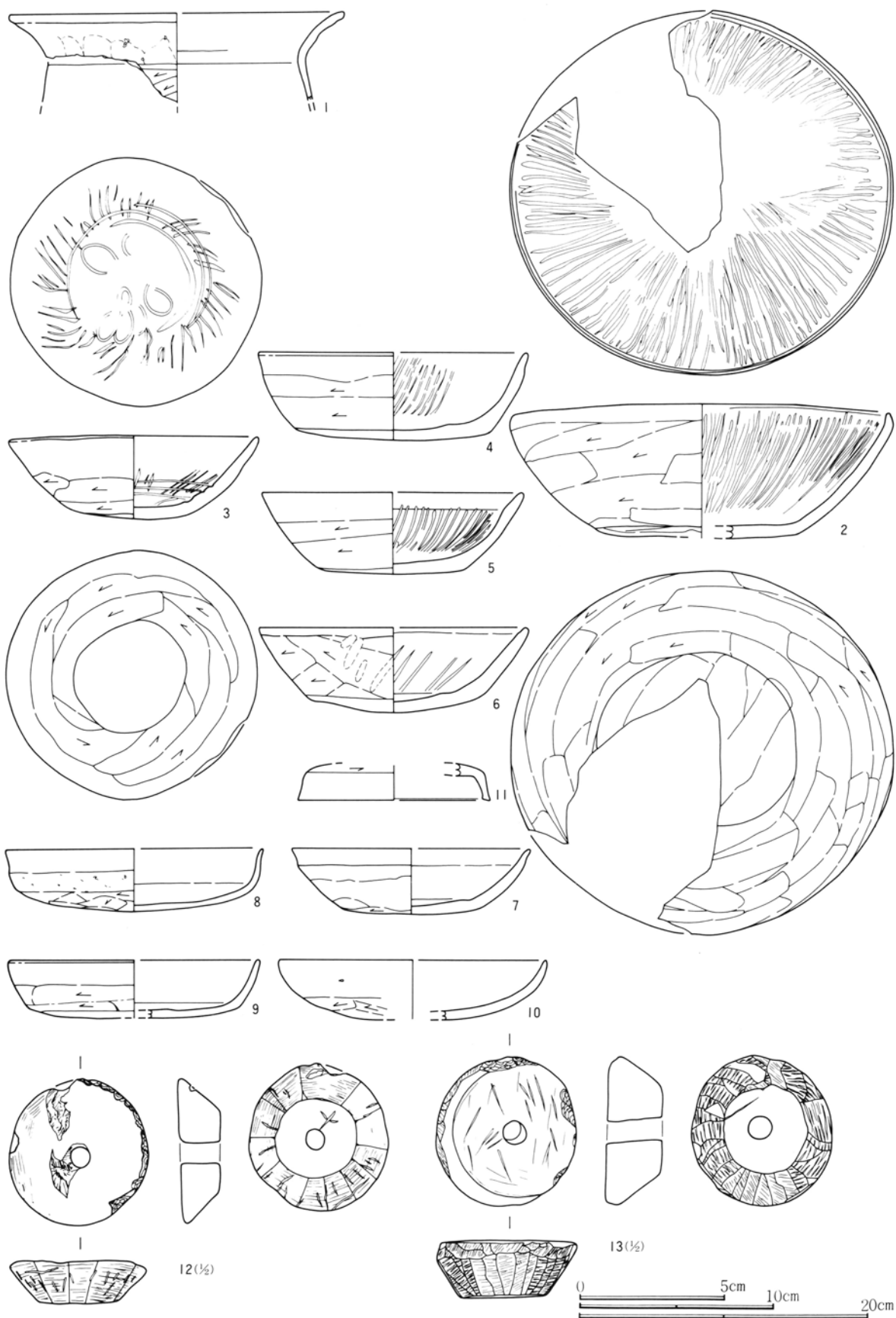
規模 煙道方向114cm、燃烧部幅38cmである。



第240図 247号住居跡実測図



第241図 247号住居跡竈実測図



第242図 247号住居跡出土遺物実測図

247号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考		
242-1	土師器 甕	床面直上 口縁 $\frac{1}{2}$	口(23.4) 高・底—	①密、小さな雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。口縁部に指頭圧痕あり。 内側器表面密。		
242-2 95	土師器 坏	床面+6 $\frac{1}{3}$ 残存	口19.7 高— 底(10.2)	①密、1mmの赤色粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面に密な暗文。		
242-3 95	土師器 坏	覆土 完形	口13.0 高4.3 底—	①やや粗、3~5mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部ヘラ削り。内側底面と体部との境に区画線。 内面に放射状暗文。底面に螺旋状暗文の痕跡。 黒斑全くなし。		
242-4	土師器 坏	床面+17 口縁 $\frac{1}{2}$ 底部 $\frac{1}{2}$	口(14.0) 高4.5 底10.2	①やや粗、2~3mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、軟質 ③橙色、底部外面黒色	底面ヘラ削り。 口縁下半ヘラ削り。 内側に多くの暗文あり。		
242-5	土師器 坏	床面+21 口縁部 $\frac{1}{3}$ 底部 $\frac{1}{4}$	口(13.7) 高4.1 底—	①密、2~3mmの砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 口縁部内側に多くの暗文あり。		
242-6	土師器 坏	床面+25 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.8) 高4.4 底—	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部ヘラ削り、ヘラの単位は不明瞭。 内面に多くの暗文あり。		
242-7	土師器 坏	床面+13 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.4) 高3.4 底7.4	①密、粉状を呈する ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部下半ヘラ削りであるが、胎土が粉状で削りの単位不明瞭。 内側底面周辺部が凹状になっている。		
242-8 95	土師器 坏	床面+2 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.4) 高3.2 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、胎土が密で削りの単位不明瞭。 内面ナデにて器表面密。		
242-9 95	土師器 坏	床面+9 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.0) 高・底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位不明。口縁部下半ナデ。内側器表面密。全体に器肉が薄く底部は平底に近い。		
242-10	土師器 坏	床面+26 $\frac{1}{2}$ 残存	口(14.0) 高・底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	内外の器表面が粗れておりヘラ削りの単位不明瞭。		
242-11	須恵器 蓋?	覆土 小片	口(10.0) 高・底—	①密 ②還元焰、硬質 ③灰色	口唇部は平らでやや内傾する。 天井部右回転ヘラ削り。		
242-12 117	石製品 紡錘車	床面+2	径 5.0/2.9 孔径 0.7 厚 1.4 重 44.0		滑石片岩。広面と狭面磨かれて光沢持つ。側面は中砥削りで削時の単位の稜線とその中に細い削痕残る。		
242-13 117	石製品 紡錘車	床面+17	径 5.2/3.1 孔径 0.8 厚 1.9 重 74.8		滑石片岩。広面に区画線。広面狭面磨かれ光沢持つ。側面は中砥削り。一部鉄製工具による細長い削り有。		
遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)				石 材 ・ 備 考
14	126	こも編み石	長 14.4	幅 4.6	厚 2.9	重 300	緑簾緑泥片岩
15	126	こも編み石	長 14.0	幅 6.2	厚 3.5	重 520	緑簾緑泥片岩
16	126	こも編み石	長 12.1	幅 4.7	厚 2.8	重 235	緑簾緑泥片岩
17	126	こも編み石	長 17.2	幅 5.7	厚 3.2	重 420	絹雲母石墨片岩
18	126	こも編み石	長 11.6	幅 4.7	厚 1.9	重 180	絹雲母石墨片岩
19	126	こも編み石	長 15.0	幅 5.6	厚 3.5	重 370	絹雲母石墨緑泥片岩
20	126	こも編み石	長 14.7	幅 5.9	厚 2.8	重 370	絹雲母石墨片岩
21	126	こも編み石	長 12.1	幅 4.3	厚 2.3	重 185	緑簾緑泥片岩
22	126	こも編み石	長 14.5	幅 4.8	厚 2.5	重 265	緑簾緑泥片岩
23	126	こも編み石	長 12.0	幅 5.4	厚 2.0	重 190	絹雲母石墨片岩
24	126	こも編み石	長 12.3	幅 4.5	厚 1.7	重 150	緑簾緑泥片岩

248号住居跡 (第243~246図、図版43・95・113・117・126)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、30-16グリッドに位置する。

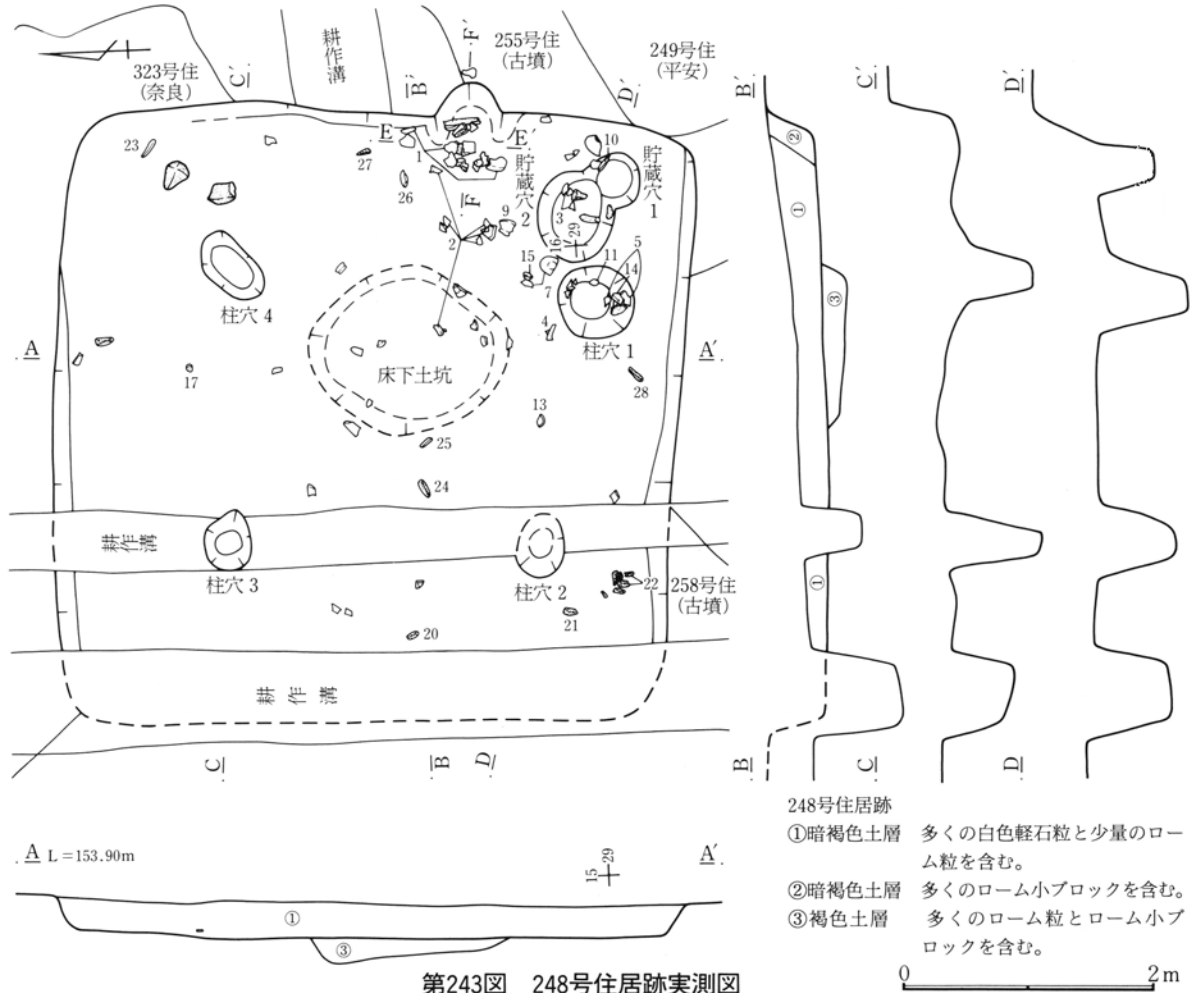
概要 本住居を含めて4軒が重複している。西側で古墳時代258号住居の床面を、南東コーナー部分で古墳時代の255号住居を、北東コーナー部分で奈良時代の323号住居の壁面から床面までを掘り込んで本住居が造られている。4軒の中で本住居が最も新しい時期に属する。さらに西側壁面部分とその内側は2本の耕作溝により床下まで深く掘り込まれている。このように複雑に重複しており、残りの悪い住居である。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。柱穴が4本、貯蔵穴が竈の右側に2個掘られている。2個の貯蔵穴の新旧関係は確認できない。

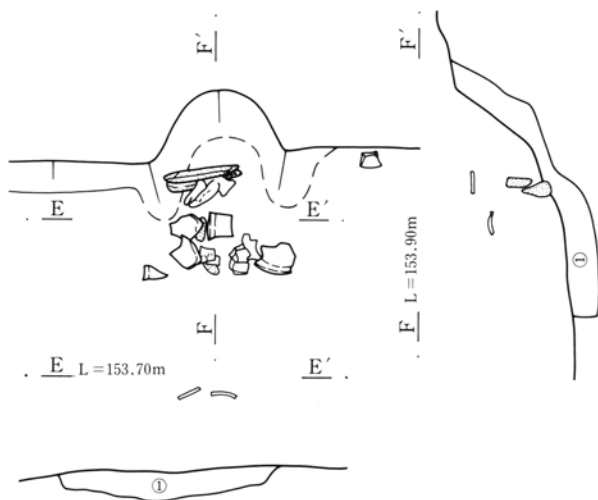
第4章 奈良時代の遺構と遺物

規模 東西不明、南北5.00mである。壁面は残りの良い南壁面部分で29cmである。貯蔵穴1は径40cm深さ44cmで、貯蔵穴2は径60cm深さ45cmである。柱穴1は径62cm深さ68cm、柱穴2は径48cm深さ62cm、柱穴3は径48cm深さ71cm、柱穴4は径62cm深さ64cmである。

遺物 竈と2個の貯蔵穴の内部及び周辺部から甕や坏が多く出土している。紡錘車2点も注目される。



第243図 248号住居跡実測図



(竈)

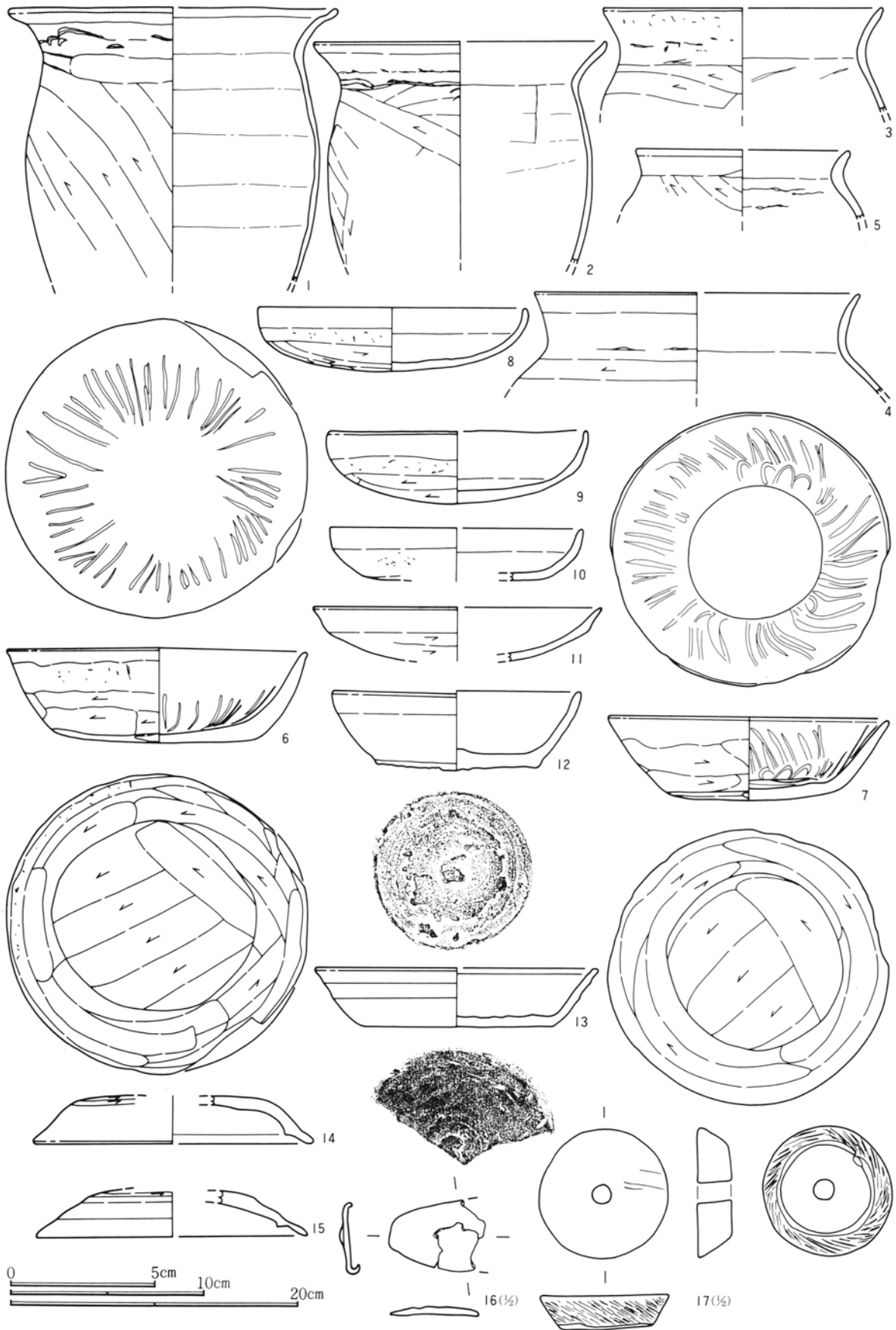
位置 住居東壁面に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

概要 竈は255号住居の覆土を多く掘り込んで造られている。そのため明瞭でなく、確認に多くの困難が伴った。袖石や天井石も出土しておらず、残された遺物や焼土粒から竈を想定した。規模は不明である。

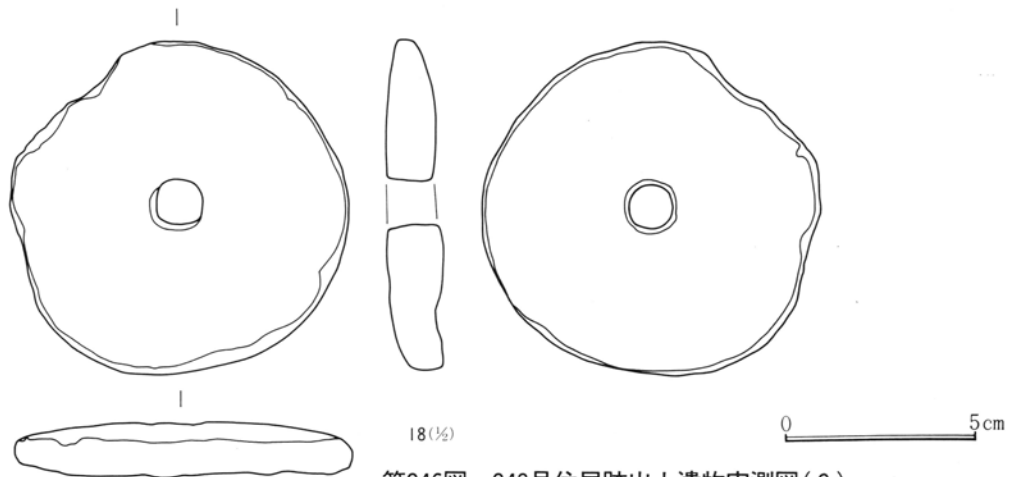
竈

①暗褐色土層 少量の焼土粒と多くのロームブロックを含む。

第244図 248号住居跡竈実測図



第245図 248号住居跡出土遺物実測図(1)



第246図 248号住居跡出土遺物実測図(2)

248号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
245-1 95	土 師 器 甕	床面+20 口縁~ 胴上部1/2残	口(22.6) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へら削り。 口縁部にへらが当たって削られた痕跡あり。
245-2 95	土 師 器 甕	床面+4 1/2残存	口(20.2) 高 — 底 —	①密、2~3mmの砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部へら削り。口縁部横ナデ。 輪積痕が残る。 内面ナデにて器表面密。
245-3	土 師 器 甕	覆土 口縁小片	口(19.4) 高 — 底 —	①密、雲母粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部へら削り。
245-4	土 師 器 甕	床面+16 口縁部1/2 胴部1/2	口(22.8) 高 — 底 —	①密、小さな砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部へら削り。 小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。
245-5	土 師 器 小型甕	床面+27 口縁部小片	口(14.3) 高 — 底 —	①やや粗 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部へら削り、砂粒の移動は少ない。 内面に輪積痕が残る。
245-6 95	土 師 器 坏	覆土 口縁一部欠 他完形	口 15.6 高 5.0 底 10.0	①密、1~2mmの砂粒と片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部下半へら削り。体部上半ナデ。 口縁部横ナデ。 内面に多くの暗文。
245-7 95	土 師 器 坏	床面+10 完形	口 14.5 高 4.4 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部外面へら削り。 内面に多くの暗文。
245-8 95	土 師 器 坏	床面-4 1/2残存	口 14.0 高 3.3 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。 体部ナデ。 内面ナデにて器表面密。
245-9 95	土 師 器 坏	床面+14 口縁部1/2 底部1/2	口(13.6) 高 3.8 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面へら削り。胎土密で砂粒の移動ほとんどなく器表面密。内面ナデにて器表面密。 固く焼かれている。内面やや光沢を持つ。
245-10	土 師 器 坏	床面+9 1/2残存	口(13.2) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へら削りと思われるがへらの単位不明。
245-11	土 師 器 坏	床面-38 小破片	口(15.0) 高 — 底 —	①密、黒色の雲母粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。 口縁~内面底部ナデ。 器表面全体が粗れている。
245-12 95	須 恵 器 坏	覆土 完形	口 13.1 高 4.2 底 8.4	①密、2~4mmの片岩粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	底面へら削り。 中央に凸状の突起、内側底面中央にも凸状の突起。
245-13	須 恵 器 坏	床面+16 1/2残存	口(14.8) 高 3.1 底(9.6)	①密、砂粒ほとんど含まず ②還元焰、硬質 ③内面にぶい黄橙色、外面黒褐色	底面へら削り後回転へら調整。 底面中央に凸状の痕跡が残る。
245-14	須 恵 器 蓋	床面+27 破片	口(14.6) 高 — 底 —	①密、小さな白色粒を含む ②還元焰、硬質 ③灰色	天井部へら削り。 カエリは低く短い。